秋田県文化財調査報告書第101集

平　鹿　遺　跡

発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1983・3

秋田県教育委員会

巻頭図版　秋田県平鹿郡増田町平鹿遺跡付近地形図（国土地理院五万分の一「横手」使用）

平鹿遺跡

発掘調査報告書

—— 秋田県増田町に於ける遺跡の調査 ——

秋田県教育委員会

序

平鹿遺跡は、平鹿郡増田町にあり、この地域のカドミウムによる土壌汚染対策事業に伴って、昭和57年度に 7,650m²の発掘調査を実施しました。

その結果、縄文時代晩期の墓跡や、弥生土器、平安時代の住居跡、中世陶器などが発見されました。殊に縄文時代晩期後半期の土壙墓・土器棺墓、それに伴う祭祀遺構や多くの出土遺物は、縄文時代の墓制とその背景にある社会構造を解明する上で極めて貴重な資料であると考えられます。

ここに本書を刊行するにあたり、秋田県農政部農地開発課、平鹿農林事務所土地改良課、増田町教育委員会、同産業建設課の御協力に対し厚く感謝の意を表するとともに、本書が学術上は勿論のこと、埋蔵文化財に対する御理解の一助として役立つことを願ってやみません。

昭和58年３月

秋田県教育委員会
教育長　畠山芳郎

平鹿遺跡発掘調査報告書

目　　次

第１章　は　じ　め　に……　1

　第１節　発掘調査に至るまで……　1

　第２節　調査の組織と構成……　1

第２章　遺跡の立地と環境……　4

　第１節　自然的環境……　4

　第２節　歴史的環境……　13

第３章　調査の方法と経過……　16

　第１節　グリッドの設定……　16

　第２節　調査経過……　16

第４章　発見された遺構と遺物……　18

　第１節　遺跡の土層……　18

　第２節　検出遺構と遺物……　24

第５章　ま　　と　　め……　220

　第１節　検出された遺構・遺物の検討……　220

　第２節　結　　語……　239

別編　Ⅰ　秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵および平鹿の
　　各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析……　243

図　版　目　次

第１図版　遺跡　垂直方向から見た平鹿遺跡
第２図版　遺跡　１．南東方向から見た平鹿遺跡
２．西方真人山頂より見た平鹿遺跡
第３図版　遺跡　１．ＳＫ030～037・073・075土壙
２．ＳＫ030～037・073・075土壙
第４図版　遺跡　１．ＳＲ001土器棺
２．ＳＲ019土器棺
第５図版　遺跡　１．ＳＮ025石囲炉
２．ＳＱ001配石
第６図版　遺跡　１．ＳＮ024石囲炉
ＳＱ006配石
２．ＳＱ014配石
第７図版　遺跡　１．ＳＸ006大洞Ａ式土器一括出土状態
２．第Ⅳ層の遺物出土状態
第８図版　遺跡　１．石製小玉出土状態
２．装身具類
第９図版　遺跡　１．土壙群
２．配石を伴う土壙群
第10図版　遺跡　１．ＳＫ013・019土壙
２．ＳＫ024土壙
３．ＳＫ026土壙
第11図版　遺跡　１．ＳＫ027・028土壙
２．ＳＫ027土壙
３．ＳＫ029土壙
第12図版　遺跡　１．ＳＫ030土壙
２．ＳＫ038～041土壙
３．ＳＫ050土壙
第13図版　遺跡　１．ＳＫ051土壙
２．ＳＫ053土壙
３．ＳＫ057土壙
第14図版　遺跡　１．ＳＫ058・059土壙
２．ＳＫ062土壙
３．ＳＫ063土壙
第15図版　遺跡　１．ＳＫ071土壙
２．ＳＫ076土壙
３．ＳＫ076土壙
第16図版　遺跡　１．ＳＫ079土壙
２．ＳＫ080土壙
３．ＳＫ081土壙
第17図版　遺跡　１．ＳＫ084・085土壙
２．ＳＫ084・085土壙
３．ＳＫ086 土壙
第18図版　遺跡　１．ＳＫ087土壙
２．ＳＫ087土壙
３．ＳＫ083・088～090土壙
第19図版　遺跡　１．ＳＫ092土壙
２．ＳＫ097・100・101土壙
３．ＳＫ098土壙
第20図版　遺跡　１．ＳＫ102・115土壙
２．ＳＫ105土壙
３．ＳＫ110土壙
第21図版　遺跡　１．ＳＫ112土壙
２．ＳＫ116土壙
３．ＳＫ116土壙
第22図版　遺跡　１．ＳＫ117土壙
２．ＳＫ122土壙
３．ＳＫ126土壙

第23図版　遺跡　1．ＳＫ127～129土壙
2．ＳＫ130土壙
3．ＳＫ131・134・135土壙
第24図版　遺跡　1．ＳＫ132土壙
2．ＳＫ133土壙
3．ＳＫ136土壙
第25図版　遺跡　1．ＳＫ137土壙
2．ＳＫ138～141土壙
3．ＳＫ142土壙
第26図版　遺跡　1．ＳＫ143土壙
2．ＳＫ146土壙
3．ＳＫ147土壙
第27図版　遺跡　1．ＳＫ148土壙
2．ＳＫ150～152土壙
3．ＳＲ001土器棺と土層
第28図版　遺跡　1．ＳＲ004土器棺
2．ＳＲ005土器棺
3．ＳＲ009土器棺
第29図版　遺跡　1．ＳＲ009土器棺
2．ＳＲ010土器棺
3．ＳＲ012土器棺
第30図版　遺跡　1．ＳＲ015土器棺
2．ＳＲ016土器棺
3．ＳＲ016土器棺
第31図版　遺跡　1．ＳＲ017土器棺
2．ＳＲ017土器棺
3．ＳＲ018土器棺
第32図版　遺跡　1．ＳＲ020土器棺
2．ＳＲ021土器棺
3　ＳＲ022土器棺
第33図版　遺跡　1．ＳＲ028土器棺
2．ＳＲ030土器棺
3．ＳＲ031土器棺
第34図版　遺跡　1．ＳＲ034土器棺
2．ＳＮ005石囲炉
3．ＳＮ007石囲炉
第35図版　遺跡　1．ＳＮ007石囲炉
2．ＳＮ012石囲炉
3．ＳＮ014・016石囲炉
第36図版　遺跡　1．ＳＮ014・016石囲炉
ＳＱ002配石
2．ＳＮ014石囲炉
ＳＱ002配石
3．ＳＮ017石囲炉
第37図版　遺跡　1．ＳＮ018・019石囲炉
2．ＳＮ018・019石囲炉
3．ＳＮ020石囲炉
第38図版　遺跡　1．ＳＮ021石囲炉
2．ＳＮ022石囲炉
3．ＳＮ023石囲炉
第39図版　遺跡　1．ＳＮ024石囲炉
2．ＳＮ025石囲炉
3．ＳＮ025石囲炉
第40図版　遺跡　1．ＳＮ026石囲炉
2．ＳＮ027石囲炉
3．ＳＮ028石囲炉
第41図版　遺跡　1．ＳＮ029石囲炉
2．ＳＮ030石囲炉
3．ＳＮ031・032石囲炉
第42図版　遺跡　1．ＳＮ033石囲炉
ＳＱ003配石
2．ＳＮ033石囲炉
3．ＳＮ034石囲炉
第43図版　遺跡　1．ＳＮ037石囲炉
2．ＳＮ037石囲炉
3．ＲＮ039石囲炉
第44図版　遺跡　1．ＳＮ040石囲炉
2．ＳＮ042石囲炉

3．ＳＮ044石囲炉
第45図版　遺跡　1．ＳＮ047石囲炉
2．ＳＮ048石囲炉
3．ＳＱ002配石
第46図版　遺跡　1．ＳＱ002配石
2．ＳＱ002配石
3．ＳＱ006配石
第47図版　遺跡　1．ＳＱ006配石
ＳＮ024石囲炉
2．ＳＱ007配石
3．ＳＱ007配石
第48図版　遺跡　1．ＳＱ007配石
2．ＳＱ007配石
3．ＳＱ007配石
第49図版　遺跡　1．ＳＱ007配石
2．ＳＱ009配石
3．ＳＱ015配石
第50図版　遺跡　1．ＳＱ015配石
2．ＳＱ016配石
3．ＭＤ59Ⅳ層上面の配石
第51図版　遺跡　1．ＭＢ59地山面の配石
2．ＳＸ001大洞C_2式土器
一括出土状態
3．ＳＸ002大洞C_2式土器
一括出土状態
第52図版　遺跡　1．ＳＸ005大洞C_2式土器
一括出土状態
2．ＳＸ005大洞C_2式土器
一括出土状態
3．ＳＸ006大洞Ａ式土器
一括出土状態
第53図版　遺跡　1．ＳＸ006大洞Ａ式土器
一括出土状態
2．ＳＸ008包含層
3．ＳＸ009捨て場
遺物出土状態
第54図版　遺跡　1．ＳＸ009 捨て場
遺物出土状態
2．ＳＸ009捨て場
遺物出土状態
3．ＳＸ009捨て場
遺物出土状態
第55図版　遺跡　1．第Ⅳ層上面の状態
2．第Ⅳ層上面の状態
3．土器出土状態
第56図版　遺跡　1．土器出土状態
2．土器出土状態
3．土器出土状態
第57図版　遺跡　1．土器出土状態
2．土器出土状態
3．土器出土状態
第58図版　遺跡　1．土器出土状態
2．土器出土状態
3．土器出土状態
第59図版　遺跡　1．土器出土状態
2．土器出土状態
3．石器出土状態
第60図版　遺跡　1．石器出土状態
2．石器出土状態
3．石器出土状態
第61図版　遺跡　1．石器出土状態
2．石器出土状態
3．石器出土状態
第62図版　遺跡　1．石器出土状態
2．石器出土状態
3．ＳＩ001竪穴住居跡
第63図版　遺跡　1．ＳＩ002竪穴住居跡
2．ＳＩ002竪穴住居跡

3．ＳＩ003竪穴住居跡
第64図版　遺跡　1．ＳＩ003竪穴住居跡
2．ＳＩ003竪穴住居跡
3．ＳＩ003竪穴住居跡
第65図版　遺跡　1．ＳＩ003竪穴住居跡
1．ＳＫ(Ｉ)001竪穴状遺構
2．ＳＫ(Ｉ)002竪穴状遺構
3．ＳＫ(Ｉ)003竪穴状遺構
第66図版　遺跡　1．ＳＩ003竪穴住居跡
2．ＳＫ(Ｉ)001～003竪穴状遺構
2．ＳＮ001焼土遺構
3．ＳＮ002焼土遺構
第67図版　遺跡　1．調査風景
2．調査風景
3．調査風景
第68～94図版　遺物

図　目　次

巻頭図版　秋田県平鹿郡増田町平鹿遺跡付近地形図
第１図　遺跡の位置……4
第２図　土地利用現状図……5
第３図　地形区分図……6
第４図　地形分類図……7
第５図　表層地質図……8
第６図　地質柱状断面図……9
第７図　傾斜区分図……9
第８図　谷・水系密度図……10
第９図　大曲・横手・湯沢３市のクライモグラフ……12
第10図　グリッド設定図……16
第11図　土層断面図　(1)……19・20
第12図　土層断面図　(2)……21・22
第13図　遺構と土層の関係模式図……23
第14図　ＳＫ001～003・005・010～012土壙実測図……25
第15図　ＳＫ004土壙・ＳＤ003溝・ＳＮ001～004焼土遺構実測図……26
第16図　ＳＫ011出土遺物……27
第17図　ＳＫ013・019・020土壙実測図……27
第18図　ＳＫ013・020出土遺物……28
第19図　ＳＫ024土壙実測図……29
第20図　ＳＫ026～028土壙・ＳＮ048石囲炉実測図……30
第21図　ＳＫ027・028出土遺物……31
第22図　ＳＫ029～032・074土壙実測図……32
第23図　ＳＫ033・034・036・037土壙実測図……33
第24図　ＳＫ035・015土壙実測図……34
第25図　ＳＫ035出土遺物……34
第26図　ＳＫ038～040土壙実測図……35・36
第27図　ＳＫ040出土遺物……37
第28図　ＳＫ041～ＳＫ046土壙実測図……38
第29図　ＳＫ041出土遺物……39
第30図　ＳＫ047・048・050・051・053・055土壙実測図……40
第31図　ＳＫ051出土遺物……41
第32図　ＳＫ057～059・061～063・065・067・068土壙実測図……43
第33図　ＳＫ069～073・076・078土壙実測図……44
第34図　ＳＫ071・073・076出土遺物……45

第35図　ＳＫ079～081・083～085・088土壙実測図……47
第36図　ＳＫ083・085・088出土遺物……48
第37図　ＳＫ086・087・090～092土壙実測図…50
第38図　ＳＫ087出土遺物……51
第39図　ＳＫ091出土遺物……52
第40図　ＳＫ093～099土壙実測図……53
第41図　ＳＫ110出土遺物……55
第42図　ＳＫ100～102・104・105・115土壙実測図……56
第43図　ＳＫ106～112土壙実測図……57
第44図　ＳＫ113・114・116～119土壙実測図…59
第45図　ＳＫ116出土遺物……60
第46図　ＳＫ117・119出土遺物……61
第47図　ＳＫ120～125土壙実測図……62
第48図　ＳＫ122・125出土遺物……63
第49図　ＳＫ126～131土壙実測図……64
第50図　ＳＫ130・131出土遺物……65
第51図　ＳＫ132～138土壙実測図……66
第52図　ＳＫ133出土遺物……67
第53図　ＳＫ139・141出土遺物……67
第54図　ＳＫ139～145土壙・ＳＸ005土器一括廃棄遺構実測図……68
第55図　ＳＫ146～148土壙実測図……70
第56図　ＳＫ149出土遺物……70
第57図　ＳＫ150～152土壙実測図……71
第58図　ＳＫ150～152出土遺物……72
第59図　ＳＲ007棺身内埋納土器……73
第60図　ＳＲ001・002・004～006土器棺実測図 78
第61図　ＳＲ007～010土器棺実測図……79
第62図　ＳＲ012・015～017土器棺実測図……80
第63図　ＳＲ018～022土器棺実測図……81
第64図　ＳＲ023～026土器棺実測図……82
第65図　ＳＲ027～030土器棺実測図……83
第66図　ＳＲ031～034土器棺実測図……84
第67図　ＳＲ001・004～007土器棺……85
第68図　ＳＲ009・010・015・018土器棺……86
第69図　ＳＲ019・021・022・024・028・029土器棺……87
第70図　ＳＲ030～032・034土器棺……88
第71図　ＳＮ005出土遺物……89
第72図　ＳＮ005・007・008・012・018石囲炉・焼土遺構実測図……90
第73図　ＳＮ014・016・017石囲炉実測図……91
第74図　ＳＮ014・016出土遺物……92
第75図　ＳＮ018～022石囲炉実測図……93
第76図　ＳＮ023石囲炉実測図……94
第77図　ＳＮ024石囲炉・ＳＱ006配石遺構実測図……94
第78図　ＳＮ024出土遺物……95
第79図　ＳＮ025石囲炉実測図……95
第80図　ＳＮ025出土遺物……96
第81図　ＳＮ030出土遺物……97
第82図　ＳＮ026～030石囲炉実測図……98
第83図　ＳＮ031・033・034・036石囲炉・焼土遺構実測図……99
第84図　ＳＮ034埋設土器……100
第85図　ＳＮ037～039石囲炉・焼土遺構実測図101
第86図　ＳＮ040～044・046石囲炉・焼土遺構実測図……102
第87図　ＳＮ047石囲炉実測図……103
第88図　ＳＱ001配石遺構実測図……104
第89図　ＳＱ002・003配石遺構実測図……105
第90図　ＳＱ007配石遺構実測図……107
第91図　ＳＱ008～010・016配石遺構実測図 ….108
第92図　ＳＱ014配石遺構実測図……109
第93図　ＳＱ014出土遺物……110
第94図　ＳＱ015配石遺構実測図……111・112

第 95 図　ＳＱ015出土遺物　(1) ……113
第 96 図　ＳＱ015出土遺物　(2) ……114
第 97 図　ＳＸ001実測図 ……115
第 98 図　ＳＸ001出土遺物　(1) ……116
第 99 図　ＳＸ001出土遺物　(2) ……117
第 100 図　ＳＸ002・006土器一括廃棄遺構実測図 ……118
第 101 図　ＳＸ005出土遺物　(1) ……119
第 102 図　ＳＸ005出土遺物　(2) ……120
第 103 図　ＳＸ005出土遺物　(3) ……121
第 104 図　ＳＸ006出土遺物　(1) ……122
第 105 図　ＳＸ006出土遺物　(2) ……123
第 106 図　ＳＸ009出土遺物　(1) ……124
〃　〃　〃
第 114 図　ＳＸ009出土遺物　(9) ……132
第 115 図　遺構外出土遺物（縄文１）……136
〃　〃　〃
第 172 図　遺構外出土遺物（縄文58）……196
第 173 図　ＳＫ077土壙実測図……197
第 174 図　ＳＫ077出土遺物　(1)……198
第 175 図　ＳＫ077出土遺物　(2)……199
第 176 図　遺構外出土遺物（弥生１）……200
第 177 図　遺構外出土遺物（弥生２）……201
第 178 図　ＳＩ001竪穴住居跡実測図……203
第 179 図　ＳＩ001出土遺物……203
第 180 図　ＳＩ002竪穴住居跡実測図……205
第 181 図　ＳＩ002出土遺物 ……206
第 182 図　ＳＩ003竪穴住居跡実測図 ……207
第 183 図　ＳＩ003竪穴住居跡カマド実測図 …208
第 184 図　ＳＩ003出土遺物　(1)……209
第 185 図　ＳＩ003出土遺物　(2)……210
第 186 図　ＳＫ(Ｉ)001竪穴状遺構実測図……211
第 187 図　ＳＫ(Ｉ)001出土遺物　(1)……212
第 188 図　ＳＫ(Ｉ)001出土遺物　(2)……213
第 189 図　ＳＫ(Ｉ)竪穴状遺構・ＳＫ149土壙実測図 ……214
第 190 図　ＳＫ(Ｉ)003実測図 ……215
第 191 図　ＳＫ(Ｉ)003出土遺物……215
第 192 図　ＳＮ009・032・035焼土遺構実測図 ·216
第 193 図　ＳＮ032出土遺物 ……217
第 194 図　遺構外出土遺物（平安）……218
第 195 図　遺構外出土遺物（中世）……219
第 196 図　時代別遺物の分布状態　(1)……222
第 197 図　時代別遺物の分布状態　(2)……223
第 198 図　土壙（楕円形）における長軸と短軸との相関グラフ……227
第 199 図　土壙（円形）における長軸と短軸との相関グラフ ……227
第 200 図　土壙長軸方位 ……228
第 201 図　土器棺における口径と器高との相関グラフ ……230
第 202 図　５遺跡における石囲炉の規模 ……232
第 203 図　石棒・石刀・独鈷石の分布状態 ……236
第 204 図　石鋸状石冠・装飾品の分布状態 ……237
第 205 図　土偶・土版・岩版の分布状態 ……238
付図１　遺構配置図
付図２　遺構配置図

表　目　次

第１表　ＳＸ001出土土器計測値……118
第２表　ＳＸ005出土土器計測値……121
第３表　ＳＸ006出土土器計測値……121
第４表　ＳＸ009出土土器計測値……133
第５表　ＳＸ009出土装飾品類グリッド別出土数一覧表……133
第６表　遺構外出土土器計測値……160
第７表　ＳＩ003出土土器計測値……210
第８表　ＳＫ(Ⅰ)001出土土器計測値……213
第９表　遺構外出土土器計測値……219
第10表　遺構外出土土器計測値……219
第11表　土壙の型式分類……224
第12表　配石の型式分類……225
第13表　土壙と配石の関連……226
第14表　土器棺の型式分類とその頻度率……230
第15表　石囲炉・焼土遺構の型式分類とその頻度率……232

例　　言

1．本書は秋田県教育委員会が、昭和57年４月13日から同年８月30日に渡って実施した、秋田県平鹿郡増田町平鹿遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の主たる執筆、編集は小玉　準が行ったが、本文中各遺構ごとの説明は調査補佐員の池田洋一、佐藤雅子から提出された原稿を小玉が検討し、加筆、補訂した。

3．遺物の実測・採拓・トレースは調査補佐員、整理作業員があたった。

4．遺構は調査時の発見順に一連番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものがあり欠番がある。各遺構ごとの総数は第５章に記してある。

5．土層図中のレベル数値は標高である。

6．土色の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

7．勾玉・小玉などの石製装飾品類の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事、嵯峨二郎氏にお願いした。

8．サメ歯垂飾品の魚種鑑定は秋田県立男鹿水族館長、竹内　健氏にお願いした。

9．骨片の鑑定は国立科学博物館人類研究部長、山口　敏氏にお願いし、同館地学研究部古生物第三研究室、小野慶一氏に依った。

10．別編Ｉの平安時代遺構中火山灰の鉱物化学的分析は、東北大学農学部、庄子貞雄教授、山田一郎助手にお願いした。

11．遺構に使用した略記号は下記のとおりである。

ＳＩ……竪穴住居跡　ＳＫ(Ｉ)……竪穴状遺構　ＳＫ……土壙　ＳＲ……土器棺

ＳＮ……石囲炉・焼土遺構　ＳＱ……配石　ＳＤ……溝　ＳＸ……その他の遺構

平鹿遺跡発掘調査報告書

本　　文

第1章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

秋田県は古くから全国有数の鉱山県である。現在稼行鉱山、休廃止鉱山は240余りの多くを数えるが、そのため鉱山廃水中に含まれるカドミウムによる農用地、産米の汚染もまた少なくない。

昭和46年には鹿角郡小坂町、仙北郡西仙北町で、また48年には米代川沿岸で高濃度の汚染米が検出され、県内各地にカドミウムによる汚染が浸透していることをうかがわせたのである。

平鹿郡内の増田町、十文字町、平鹿町も例外ではなく、玄米中のカドミウム濃度が１ppm以上の汚染米、0.4ppm以上の準汚染米が検出され問題化したのは49年のことである。

この地方には東成瀬村田子内鉱山、稲川町大倉鉱山や県南部最大の銅鉱山である吉乃鉱山が分布して、県南地方鉱山地帯の中心となっており、この際の原因者は吉乃鉱山と目される一方、その北北西1.5kmの倉狩沢上流に位置し、同山の支山である増田鉱床上部の黒鉱である可能性も少なくないとされている。

県農政部ではこうした事態に対し、県内水田のカドミウム汚染面積1,315haのうち63%の898haを土壌汚染対策地域に指定し、公害防除特別土地改良事業を実施、排土、客土、反転工法などにより、これら汚染された農用地の復元にあたるとともに水源転換のための用水施設の設置、水路舗装による土壌の酸化抑制などを行い、そのうち491haではすでに工事を完了させている。その結果、57年度産米のカドミウム汚染ロット調査（汚染地での無作為抜きとり調査）における濃度0.4ppm以上のカドミウムの検出は49年度以降の最少値を記録している。

増田町増田字平鹿に所在する平鹿遺跡は周知の遺跡であり、この付近一帯の公害防除特別土地改良事業により遺跡の破壊が予想されたため、県農政部と文化課が協議の上発掘調査を実施することとしたのである。なお、53年度に調査された梨の木塚遺跡も同じ原因に基づくものであった。

第２節　調査の組織と構成

遺跡名称：平鹿（ひらか）遺跡（秋田県遺跡地図登録番号730　全国遺跡地図秋田県32―46）

遺跡所在地：秋田県平鹿郡増田町増田字平鹿58番地他

遺　跡　状　況：水田・畑・樹園地等20,000㎡

土 地 所 有 者：高橋文太郎他

遺　跡　時　代：縄文時代晩期・弥生時代・平安時代・中世

調　査　原　因：公害防除特別土地改良事業

調　査　期　間：昭和57年４月13日～８月30日

調査対象面積：8,000㎡

調　査　面　積：7,650㎡

調 査 主 体 者：秋田県教育委員会

調 査 担 当 者：小玉　準　秋田県埋蔵文化財センター文化財主事

調 査 補 佐 員：池田　洋一・高橋　　修・小林　　弘・村田　嘉一・佐藤　雅子

調 査 参 加 者：阿部　雄亮・石川　栄治・石川　　隆・石沢　政雄・石田　忠雄
奥山菊之助・奥山　政美・小国　源治・加藤　　功・亀沢　　覚
川村竹治郎・国安久太郎・佐々木吉之助・佐々木儀三郎・佐々木成夫
佐々木浩美・笹山　洋希・佐藤　晴治・佐藤　富松・佐藤　　誠
佐藤　政一・佐藤弥一郎・柴田　　大・高垣　丑松・高橋　市治
高橋　　正・高橋朋二郎・高橋　弥一・槻田　宗男・内藤伊一郎
内藤　永治・内藤喜一郎・内藤貞二郎・福田　和夫・本田　嘉之
松浦　剛清・山田　　一・山谷　良助・赤津　美弥・浅野　貞子
阿部　勝子・阿部サダ子・石井貴美子・石川テル子・石川　宏子
石川　マサ・石川美紀子・石田由美子・和泉　登美・遠藤　俊子
遠藤ハルエ・大山　ユキ・織田八重子・小原モリ子・片倉　幸子
川村　ヨシ・小暮起世子・後藤　昭子・佐々木きみ子・佐々木きや子
佐々木静子・佐々木千代子・佐々木ツヤ・佐々木テイ子・佐々木宮子
佐々木よう子・笹原　弘子・佐藤　カヨ・佐藤　サツ・佐藤ハツ子
佐藤　資子・佐藤　礼子・讃岐真輝子・菅原ケイ子・高橋　アイ
高橋　愛子・高橋恵美子・高橋　和子・高橋クニ子・高橋　静子
高橋登美子・高橋チエ子・高橋　儀子・高橋　政子・高橋　礼子
高橋ユリ子・田中　琴子・寺立　敬子・千田タカ子・千葉　玲子
内藤キワ子・長坂　妙子・福田　ノブ・松川さち子・見田　慶子
矢野　幸子・山本　陽子

整 理 作 業 員：越後谷晴美・大西　英子・大野　甲子・岡本ヒロ子・岡本　龍子
加藤　正子・草彅　弘子・熊谷　恵子・熊谷　　安・小松　郁子

小松みどり・小松　睦子・後藤のり子・後藤フミ子・佐々木京子
佐藤せい子・進藤　玲子・菅原　恵子・高階　恵子・高橋チエ子
高柳　良子・武田美智子・竹村　純子・長澤　廣子・福田　廉子
藤井偉智子・藤倉　寿枝・藤嶋　竜子・風登　絹子・松本　幸子
松本　良子・茂木　淳子・茂木マイ子

調査協力機関：秋田県平鹿農林事務所　土地改良課
増田町役場
増田町教育委員会
秋田県雄物川筋土地改良区

第２章　遺跡の立地と環境

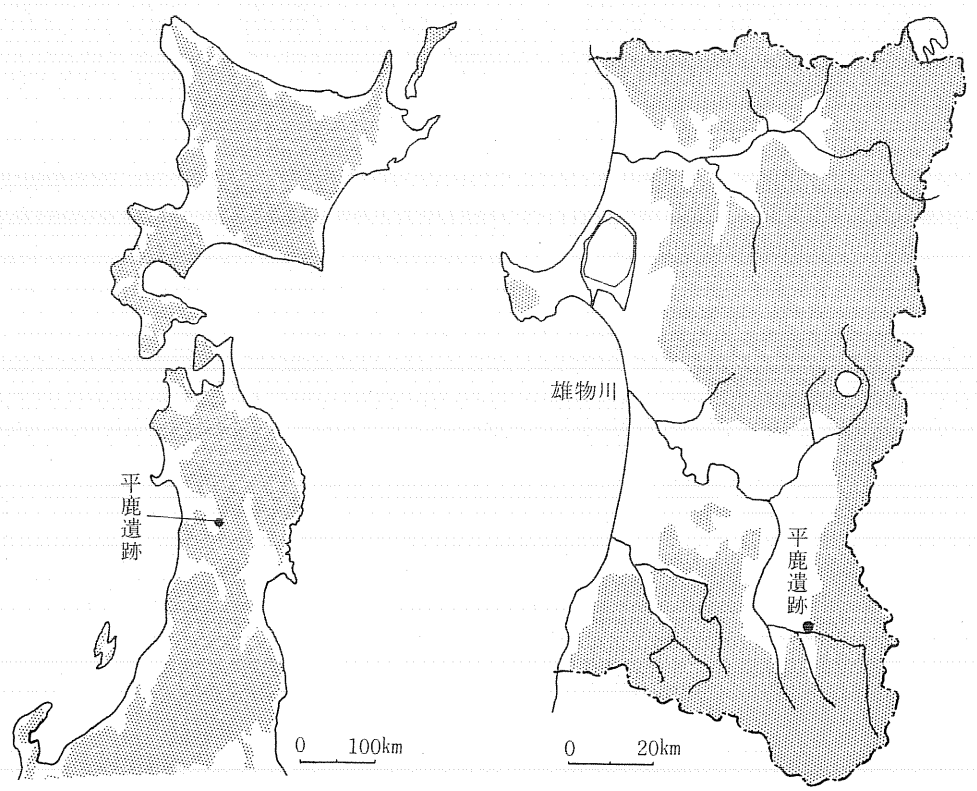
第１節　自然的環境

１．地理的位置

増田町は秋田県南部の内陸部に位置する。北を平鹿町・十文字町・山内村、東を東成瀬村、南を稲川町・皆瀬村、西を湯沢市と接し、面積73.8㎢、人口１万人余の町である。

平鹿遺跡は増田町増田字平鹿地内に所在する。おおよそ北緯39°12′、東経140°34′の位置にあり国鉄奥羽本線十文字駅から直線距離にして南東3.5㎞の地点にある。

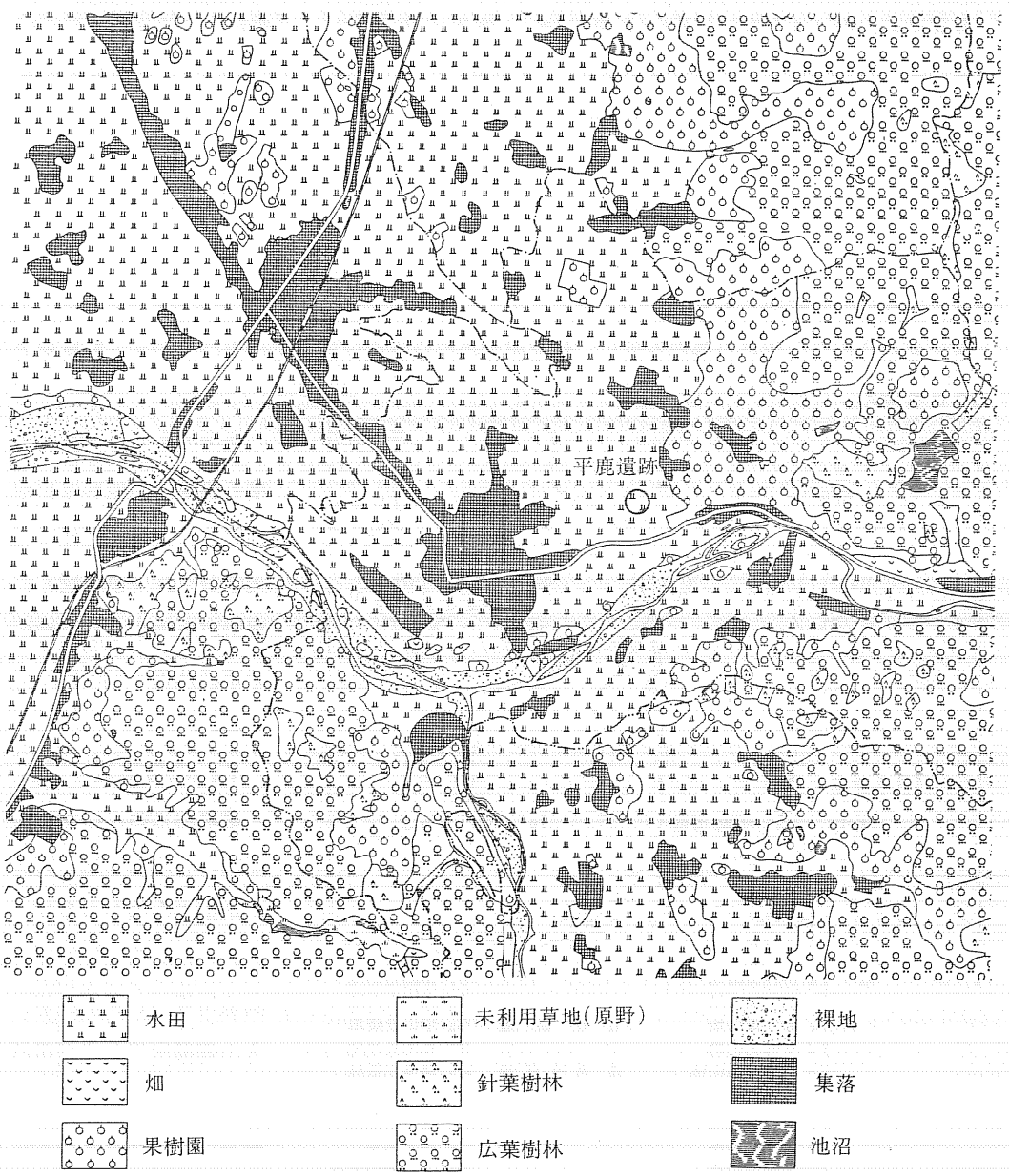
雄物川水系の一支流である成瀬川は、栗駒山(1,628ｍ)の雄勝郡東成瀬村地内に源を発し、椿川断層谷を北流してから流路を西に変え、真人山(390.7ｍ)南麓をかすめて平野部に入り、増田



第１図　遺跡の位置

町戸波付近で皆瀬川に合流し、さらに西進して羽後町大久保付近で雄物川の大動脈と合体する。遺跡のある一帯はこの成瀬川が山間地から平野部に抜け出た所に形成された扇状地にあり、横手盆地の東南部に属する。現河岸は東南へ400ｍと近い。遺跡地は標高112ｍ前後の平坦地であるが、横手盆地は北へ進むほど標高が低下し、北5.5㎞の平鹿町醍醐では81ｍ、北14.3㎞の横手市塚堀では43ｍとなる。

増田町の基幹産業は農業であるが、稲作の他に果樹栽培も盛んである。遺跡東方の真人山麓



第２図　土地利用現状図

や北方の金峰山麓一帯は明治34年以来、りんご、梨が植えられ、遺跡地も一部が樹園地内に入り込んでいる。真人山東方には県南地方最大の銅鉱山であった吉乃鉱山があり、そこから採取したと思われる方鉛鉱製の石器が出土している。

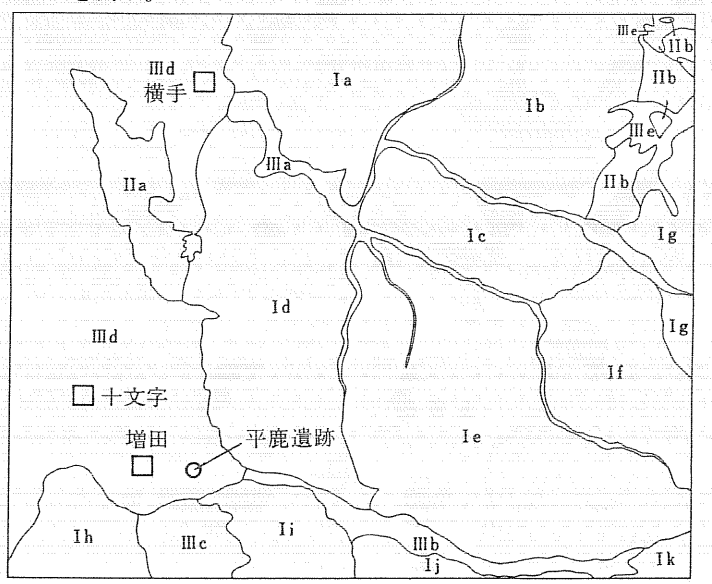
２．地形概況

遺跡周辺の地形は大地形区分として地殻変動による隆起部の奥羽脊梁山地と沈降部の横手盆地とに二大別される。

奥羽脊梁山地には県境に三界山(1,381.1ｍ)、蟻巣山(1,157ｍ)、三森山(1,102.2ｍ)などの高峰の他、向山(780ｍ)、大鈴森(865ｍ)、小鈴森(757ｍ)、割倉山(770ｍ)などの比較的高度の大きい早壮年期山地が位置し、東高西低の地勢を呈しており、このため水系も西ないし北西に流れる成瀬川、皆瀬川、横手川、黒沢川などの河成段丘を伴う河谷の水を集めて雄物川となり、西の盆地床面には大小の複合扇状地を累積している。

大日向山、大鈴森は起伏量400～800ｍの大起伏山地、中山丘陵地は脊梁山地より西へ分派された山地性の丘陵地である。

横手盆地は南北に狭長な菱形を呈し、盆地面での海抜高度は雄物川の出口で20ｍ、最奥部で120ｍを測る。



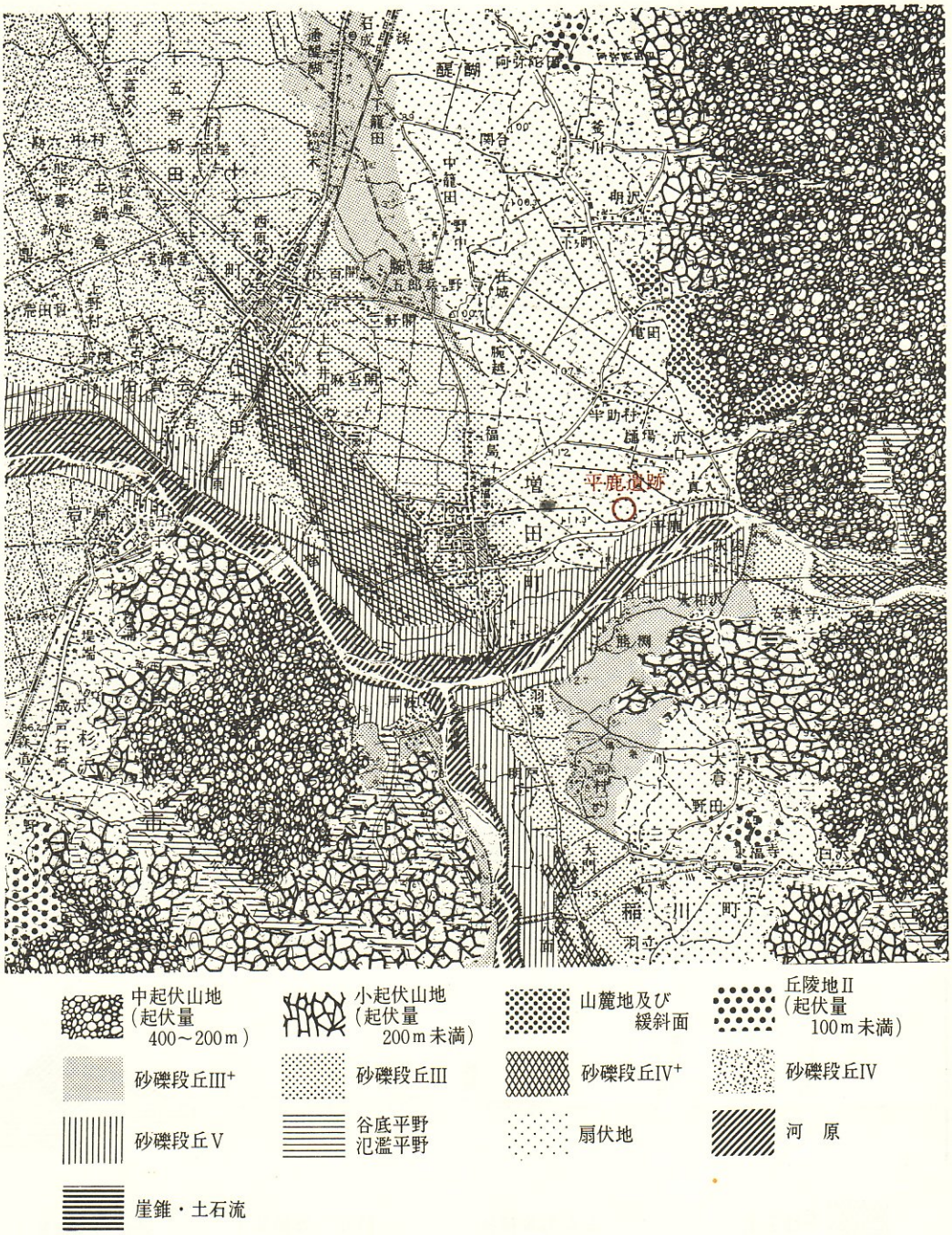
Ⅰ　山　　地	Ⅰa 御岳山山地		Ⅰj 薬師岳山地
	Ⅰb 割倉山山地		Ⅰk 三界山山地
	Ⅰc 大穴嶺山地	Ⅱ　丘　陵　地	Ⅱa 中山丘陵地
	Ⅰd 金峰山山地		Ⅱb 花山丘陵地
	Ⅰe 大日向山山地	Ⅲ　台地・低地	Ⅲa 横手川低地
	Ⅰf 大鈴森山地		Ⅲb 成瀬川低地
	Ⅰg 三ッ森山地		Ⅲc 皆瀬川低地
	Ⅰh 天ヶ台山地		Ⅲd 横手低地
	Ⅰi 東福寺山地		Ⅲe 鬼ヶ瀬川低地

第３図　地形区分図

遺跡のある５万分の１横手図幅内の地形は山地、丘陵地、台地・低地に三大区分され（第３図）、増田町を中心とした地形分類図は第４図の如くである。

３．表層地質

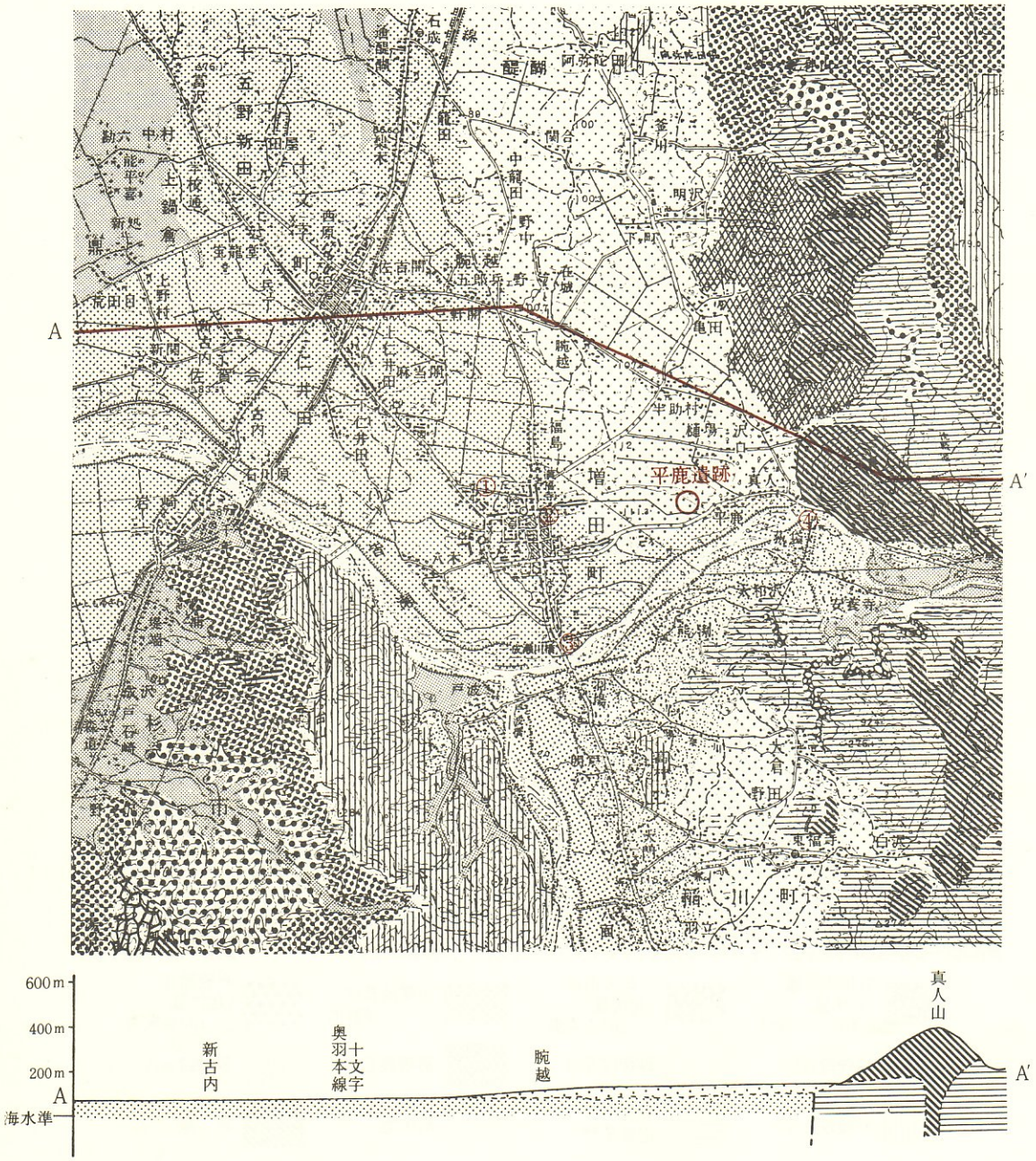
遺跡地東側には成瀬川北側に金峰山山地、南側に東福寺山地があるが、これらは新第三紀中新世、真昼川層の石英安山岩、火山礫凝灰岩および凝灰角礫岩、山内層の珪質一硬質泥岩、相野々層の泥岩などから形成されてい



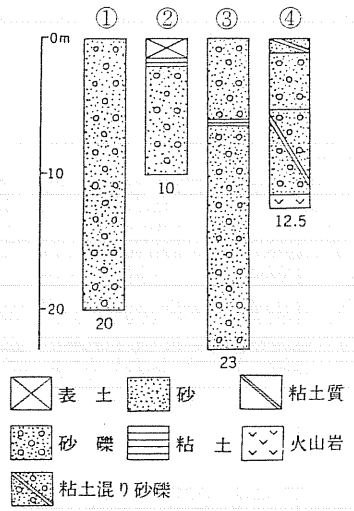
第４図　地形分類図

る。

遺跡は第四紀沖積世の沖積層である砂がち堆積物１の上に形成されている。砂がち堆積物１は真人～腕越～釜の川及び稲川町大倉～東福寺にかけて分布する扇状地堆積物で礫を主体とするが砂、泥を介在する。砂がち堆積物２は皆瀬川、成瀬川流域、旧河道などに発達し、さらに


A
A′
平鹿遺跡
600m
400m
200m
A
海水準
新古内
奥羽本線
十文字
腕越
真人山
A′
各種岩屑
泥がち堆積物
砂がち堆積物1
砂がち堆積物2
礫・砂および泥
泥岩
(石灰質団塊を伴う)
珪質一硬質泥岩
石英安山岩質
凝灰岩
泥岩
(石灰質団塊を伴う)
火山礫凝灰岩および凝灰角礫岩
安山岩質
凝灰角礫岩
石英安山岩
凝灰岩
玄武岩質岩石
石英安山岩

第5図　表層地質図



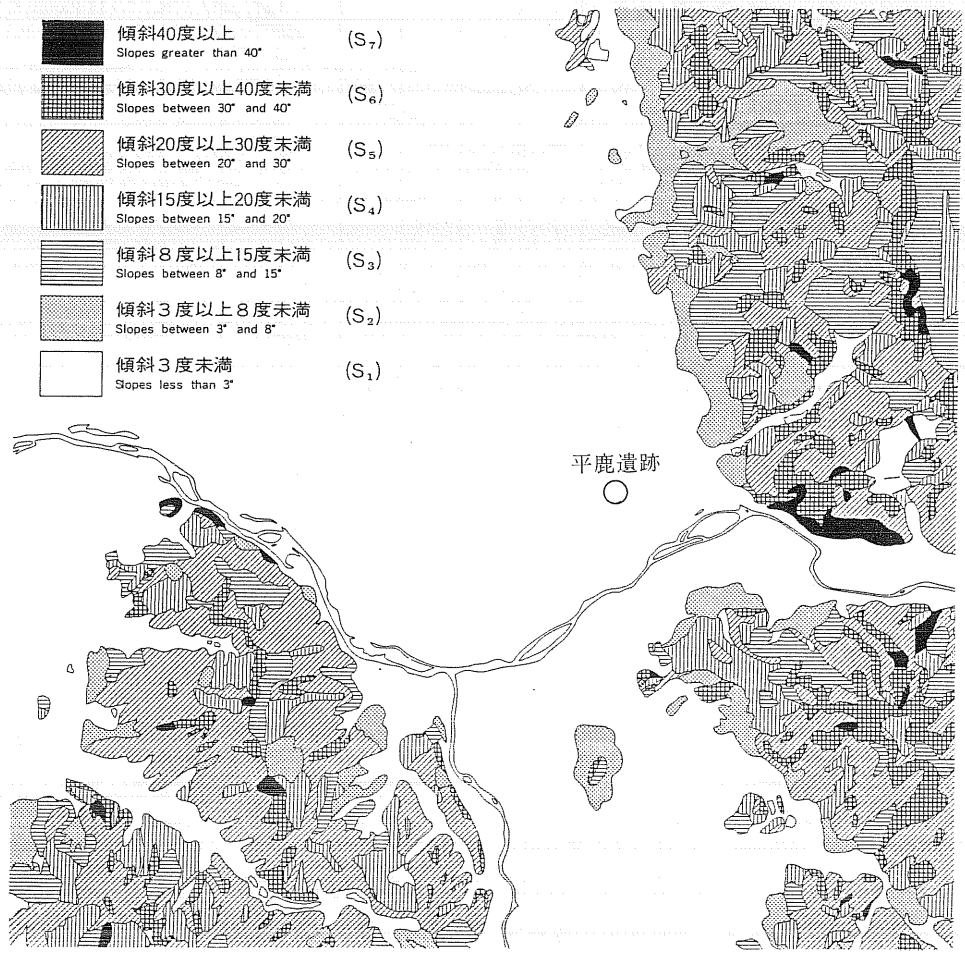
第６図　地質柱状断面図

山間部の小河川にも見られ、玉石を主体とした堆積物で泥の介在物はほとんど見られない。

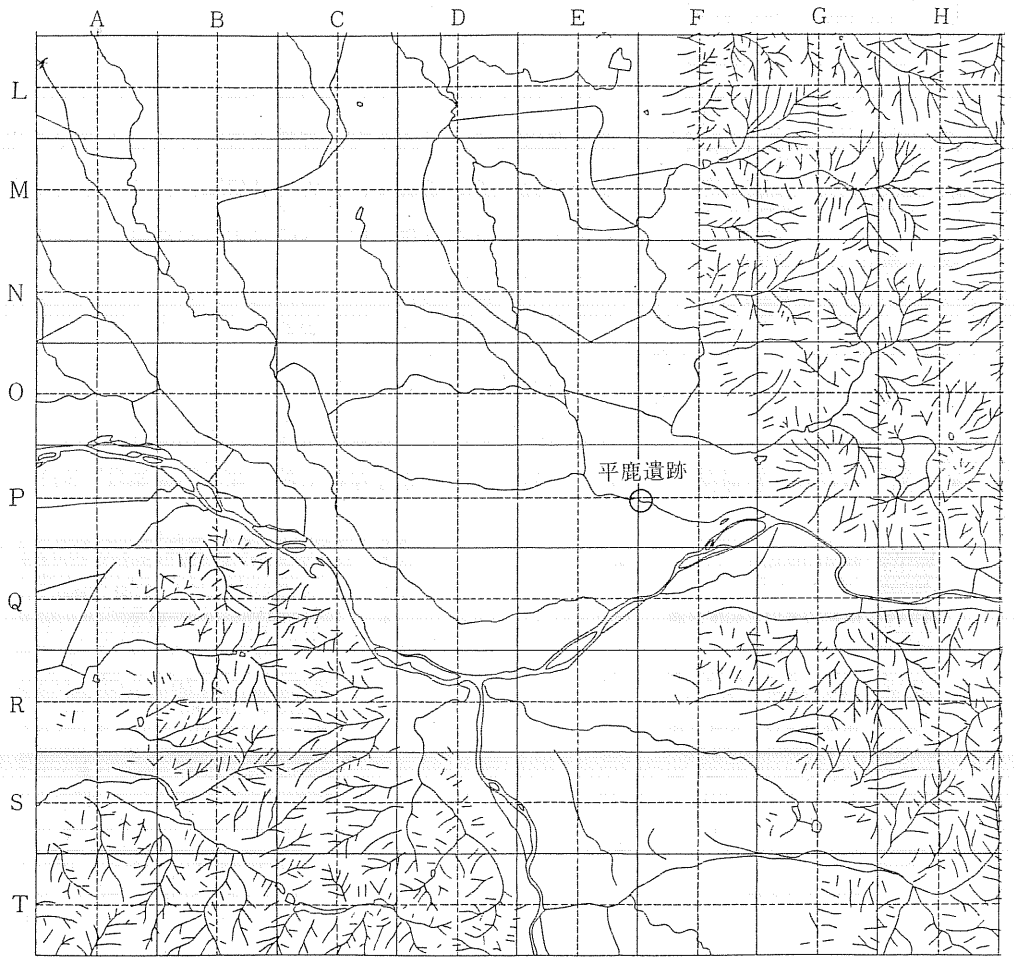
沖積低地においては、真人扇状地、成瀬川、皆瀬川を有する増田町及び十文字町は背後山地からの降水及び河川からの伏流水等が豊富で、砂がち堆積物１・２の良好な発達と相まって県内有数の地下水に恵まれた地域となっている。

４　傾斜区分

本山地の西縁に位置する御岳山山地―金峰山山地―天ケ台山地では中間勾配の（S_5）が卓越し、（S_3）の緩斜面が規則的に分布、また前者の標高 300 m 付近に（S_3）、（S_2）ないし（S_1）の平坦地も存在する。真人山南側は（S_7）の急



第７図　傾斜区分図



	A	B	C	D	E	F	G	H
L	12	0	14	13	12	35	47	44
M	15	4	4	9	11	32	30	32
N	15	10	2	16	6	30	30	39
O	15	10	14	6	15	21	29	44
P	19	26	14	4	7	11	33	41
Q	13	39	29	7	12	20	20	28
R	16	41	34	20	10	20	46	46
S	27	44	34	35	10	6	31	54
T	31	46	39	34	24	8	20	45

第８図　谷・水系密度図

斜面が発達しているが、遺跡のある低地面は（S_1）の緩傾斜面である。

５．谷・水系密度

地形分類と水系との関係は山地・丘陵地・台地・低地とそれぞれ異なり、山地の大傾斜地ではよく水系が発達しているが、一部洪積台地としての成瀬川緩扇状地面では上流で遠心的放散状、下流では求心的収斂状となっている。第８図は地形図郭の縦横を20等分したもので、数値はこのメッシュの¼方眼の各辺を切る谷の数を４単位区画毎に集計したものの総和であり、平面形現状で主要流路と地

形を開析するものを示す。

6．土　　壌

遺跡地の土壌は灰色低地土の十文字統に属し、増田町・十文字町に連続して広く分布している。堆積様式は水積で、埋設腐植層を有し、農地として汎用性が高く、現在転換樹園地として利用されているものもある。

7．哺乳類分布

本県は八幡平、森吉山、鳥海山など緑濃い山地に恵まれており、多くの哺乳動物が生息している。以下に県内に生息する海獣を除く哺乳動物を示す。

霊長目	ホンドザル		
	ホンドタヌキ	ホンドキツネ	ホンドテン
	ホンドイタチ	ホンドオコジョ	ニホンアナグマ
	ニホンツキノワグマ		
偶蹄目	ニホンカモシカ		
兎目	トウホクノウサギ		
齧歯目	ニホンリス	ホンシュウモモンガ	ニッコウムササビ
	ヤマネ	トウホクヤチネズミ	ホンドハタネズミ
	ホンドアカネズミ	ホンドヒメネズミ	ホンドハツカネズミ
	ホンドクマネズミ	ニホンドブネズミ	
食虫目	ホンシュウトガリネズミ	ホンシュウジネズミ	ニホンカワネズミ
	ホンシュウヒミズ	アズマモグラ	
翼手目	モモジロコウモリ	ニホンヤマコウモリ	アブラコウモリ
	ニホンウサギコウモリ	ニホンユビナガコウモリ	ニホンキクガシラコウモリ
	ニホンコキクガシラコウモリ		

8．植　　生

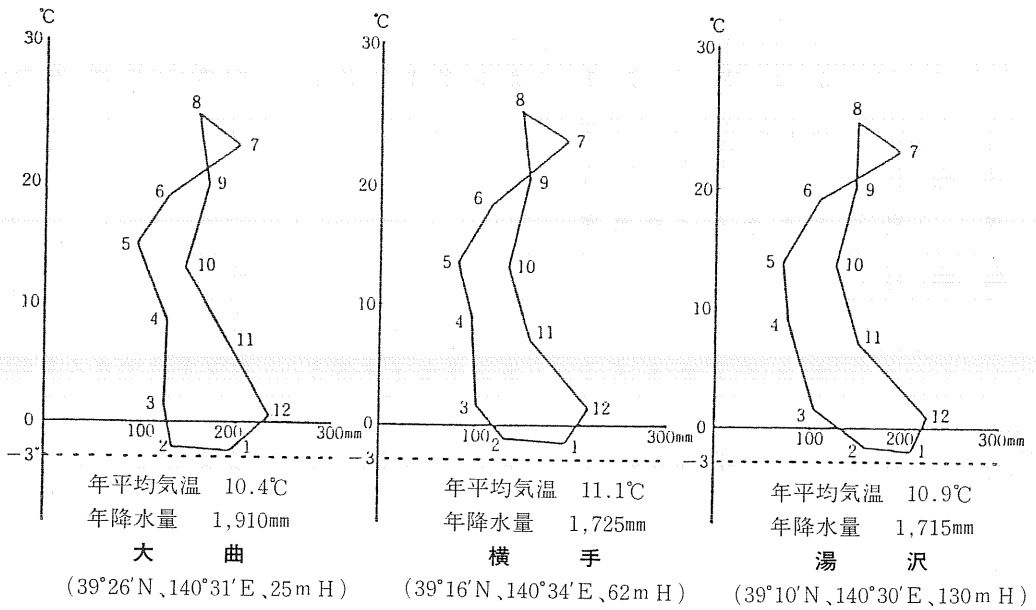
植生図を見ると、河川流域の平坦面あるいは横手盆地の平野部は水田・畑などの耕作地として利用されているのがわかる。しかし遺跡東方の山地に入ると落葉広葉樹で占められ、殊に成瀬川以北ではコナラ・クリ林であるのに対し、以南ではミズナラ林も多くなり禾木草原も所々に発達している。標高600～700mではこれにブナが加わり、県境に近づくにつれてブナ単純相となる。当時の植生は花粉分析や潜在自然植生の復元によらねばならないが、今回の調査で遺構内からクリ・トチ・クルミが出土していることを考え合わせると、遺跡周辺にはやはり落葉広葉樹林の繁茂が見られたのではなかろうか。

９．気　　象

秋田県の気候は温帯から冷温帯への漸移帯にあたり、このことは植物の分布、農作物の種類にも影響を及ぼしている。桑・茶の栽培の北限界が秋田県にあり、甘藷の経済的栽培の限界、二毛作可能限界も大体山形県までである。

平鹿遺跡のある横手盆地の北部・中部・南部に位置する大曲・横手・湯沢３市のクライモグラフから、３市の気候はケッペンの気候分類によるとＣｆａ（湿潤温暖気候）に属する。

この地方は県内でも豪雪地帯に属するが、雪積量は盆地北部で比較的少なく、南部程多くなる。増田町における1941年～1964年までの平均積雪量は 137 cmを測る。



第９図　大曲・横手・湯沢３市のクライモグラフ

参考文献

(1)　秋田県『土地分類基本調査　横手』　昭和51年
(2)　秋田県『第２回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書（哺乳類）』　昭和54年
(3)　文化庁『植生図・主要動植物地図―５・秋田県』　昭和48年
(4)　秋田県『秋田県史』　第１巻　古代・中世編　昭和37年
(5)　秋田県地域開発研究会『横手盆地の雪害に関する研究』　昭和49年

本節中、２地形概況、３表層地質、４傾斜区分、５谷・水系密度、６土壌、及び第２図～第８図は文献(1)に基づき作成した。７哺乳類分布、８植生はそれぞれ文献(2)、(3)、９気象は文献(4)、(5)に基づく。第９図は文献(5)中、斎藤実則・小野一巳「1974年横手盆地の雪害に関する自然地理学的研究」によるものである。

第２節　歴史的環境

『秋田県遺跡地図』[註１]を見ると、山間部では成瀬川に沿う河岸段丘上、平野部では山地との境界部に遺跡が集中し、それ以外の山間部、平野部には少ないことがわかる。

増田町には旧石器時代の遺跡は発見されておらず、近い所では成瀬川上流13.5kmの東成瀬村矢櫃、横手市の横手高校裏山、羽後町新成、五把出山から、ナイフ形石器・彫刻器などが出土している[註２]。

縄文時代の遺跡としては９カ所登録されているが早期の遺跡、遺物は未確認である。前期になると成瀬川上流２kmの梨ノ木塚遺跡で大木２～５式土器が発掘調査により出土しているほか[註３]さらに上流の東成瀬村菅生田捨・滝の沢捨に大木３～６式期、あるいは狙半内川上流の標高500ｍの丘陵線上に、増田町、東成瀬村にまたがって大木１、２式期の遺跡が形成されている[註４]。

中期に至ると平鹿遺跡北方2.5kmの地点に大木７ｂ式を出土する鍋ケ沢遺跡が、また天ケ台山から続く丘陵上の一角に戸波捨遺跡があり、この遺跡からは前期大木４式の他、大木８ａ、８ｂ式土器、鮭石が出土している。さらに南の欠上り遺跡[註５]、宝龍台遺跡[註６]はほぼ同時期の大木６～８ｂ式期にかけての遺跡で、それぞれ発掘調査が行われて久しい。前記梨ノ木塚遺跡でも大木９式期の石組複式炉を有する竪穴住居跡が２棟検出され、確実な複式炉文化圏の浸透をうかがわせている。

後期になると増田町八木の扇状地上に広範囲な遺跡が見られ、中葉頃の遺物が出土している[註７]ほか、平鹿町明沢、東成瀬村下田大捨、不動滝、稲川町内田[註８]などに遺跡がある。

晩期の遺跡としては、梨ノ木塚遺跡で昭和53年度に県教育委員会による発掘調査が行われ、主として縄文晩期前葉の土壙墓、埋甕が検出されている[註９]。この他、平鹿遺跡とは1.5kmの至近距離に真当遺跡があるほか、湯野沢上捨[註10]にも大洞Ａ式期の遺跡が見られる。成瀬川上流地域では東成瀬村平良小森、稲川町でも森、中野、女男沼などに遺跡が存在する。

湯沢市松岡の鐙田遺跡[註11]は平鹿遺跡の南西12kmに所在し、昭和48年度に調査がなされている。この遺跡は標高92ｍの沖積地にあり、大洞Ａ、A'式土器に伴って土偶・土版・岩版・独鈷石・石棒などの呪術性を帯びた多数の遺物、木製櫛のほか、トチ・クリ・クルミ・ドングリなどの堅果類の出土も多い。

弥生時代の遺跡は増田町内ではこれまで不明確であったが、今回の調査で中期初頭以降の土器少量であるが検出された。平鹿町では鳥越森[註12]、牛首、郷林[註13]、平沢[註14]などから、稲川町でも荒神森[註15]、湯沢市では捨ノ上[註16]、木津根崎[註17]にそれぞれこの時代の遺跡があり、増田町で今後も発見される可能性はあろう。

奈良・平安時代の遺跡として調査されたものには平鹿町中藤根[註18]、下藤根[註19]遺跡があり、奈良時

代後半の竪穴住居跡が３棟、平安時代前半の竪穴住居跡が５棟検出されている。稲川町宮の前遺跡[註20]は平鹿遺跡の南４kmの地点に存在し昭和51年と53年に発掘調査がなされている。平安時代末頃の掘立柱建物跡を中心とした土壙群が検出されている。

天平宝字３年（759年）建郡の平鹿郡は、天平５年（733年）建郡の雄勝郡を母体とし、その北東部に建郡されたものである。郡衙は今に遺名を伝える平鹿郷に置かれ、助河駅が郡衙に近い八木あたりに置かれたと推定されている[註21]が、考古学的実証はなされていない。口碑・伝説によると天平宝字２年（758年）に平鹿堰が開削されたといい、正保・慶安年間に至って本格的開発が進んでいる。

中世城館は増田町にも多く、鬼城山館・城長根館・真人城・新成山城・片倉山城・戸波城・増田城・八木城・飯館の９館が数えられる。真人城は清原真人武則の居館とされ、倉刈沢を挟んで北側に「二階館」、「小階館」、「役人館」などの地名が残っている。増田城は土肥館とも呼ばれ、大正13年増田小学校新築工事の際発見された貞治２年碑は県重要文化財に指定されている[註22]。

註１　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』　1976年

註２　奈良修介・豊島　昂『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書３　1967年

註３ａ畠山憲司『館下遺跡・梨ノ木塚遺跡・宮の前遺跡(第２次)発掘調査概報』秋田県教育委員会　1979年

ｂ畠山憲司『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会　1979年

註４ａ山下孫継「外畑遺跡発掘調査報告書」『北方考古』　第10号　1975年

ｂ山下孫継「荒砥沢遺跡発掘調査報告書」『北方考古』　第12号　1977年

註５　滝口宏・西村正衛「秋田県雄勝郡欠上遺跡発掘報告」『古代』　第18号　1956年

註６　武藤鉄城『宝龍台石器時代遺跡発掘調査報告書』　1955年

註７　昭和57年11月、遺跡範囲確認調査を実施

註８　山下孫継「秋田県稲川町内田遺跡発掘調査報告書」『北方考古』　第11号　1976年

註９　註３ａ・ｂに同じ

註10　増田町教育委員会『増田町郷土史』　1972年

註11　山下孫継・鍋倉勝夫『鐙田遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会　1974年

註12　秋田県立博物館『秋田県立博物館収蔵資料目録　考古』　1982年

註13　秋田県『秋田県史　考古篇』　昭和35年

註14　伊東信雄「東北北部の弥生式土器」『文化』　第24巻１号　1959年

註15　註12に同じ

註16　山下孫継「捨ノ上遺跡発掘調査」『北方考古』　第２号　1967年

註17　山下孫継「狐崎遺跡発掘調査報告」『北方考古』　第５号　1970年

註18　秋田考古学協会『中藤根遺跡』　昭和49年

註19　庄内昭夫『下藤根遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1976年

註20ａ庄内昭夫『宮の前遺跡発掘調査報告』　稲川町教育委員会　1977年

ｂ註３ａに同じ

ｃ庄内昭夫『宮の前遺跡発掘調査報告』　秋田県教育委員会　1979年

註21　新野直吉『古代東北の開拓』　昭和44年

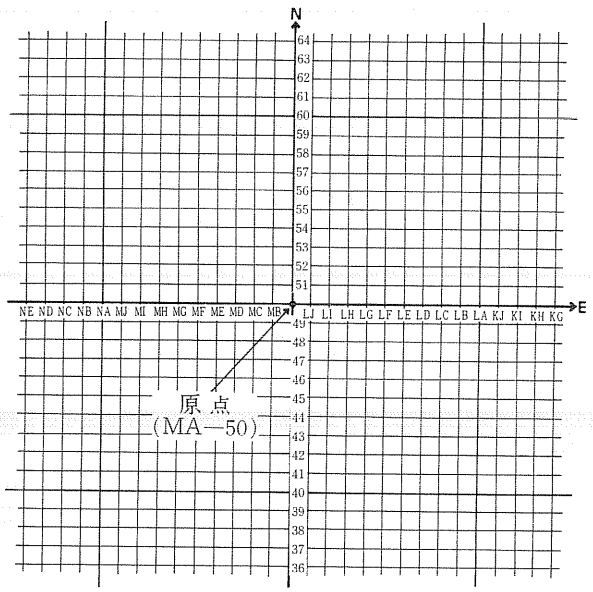
註22ａ盛田　稔・本堂寿一・富樫泰時『日本城郭大系』　第２巻　青森・岩手・秋田　1980年

ｂ池田憲和『秋田県の中世城館』　秋田県教育委員会　1981年

第３章　調査の方法と経過

第１節　グリッドの設定

グリッドの設定は調査対象面積が広範囲であるため業者委託とし、以下の方法で行った。



第10図　グリッド設定図

調査区のほぼ中央部に原点ＭＡ—50を取り、これから磁北に合わせた南北基線（Ｙ軸）とこれに直交する東西基線（Ｘ軸）を求め、南北方向には４ｍごとに北ほど順に増加する２桁の算用数字、東西方向には４ｍごとに東から西に向かってアルファベット２文字の組み合わせを付した。アルファベット２文字の一桁目はＡ～Ｊ（40ｍ）の繰り返しで、二桁目は40ｍごとに変わりグリッドの呼称は東南隅の座標で表わすこととし、座標名はアルファベット・算用数字の組み合わせで呼ぶこととした。

第２節　調査経過

４月13日、機材搬入と共に調査区域西端の水路・道路造成箇所から調査を開始する。これに先立つ12日より、東邦技術株式会社委託によるグリッド杭打ち作業を開始する。道路造成箇所からは焼土遺構、配石のある土壙、完形の注口土器などが出土する。グリッド杭打ち作業は22日で終了し、この日真人山頂より遺跡遠景写真を撮影する。

道路造成区域外の東側も掘り始めるが、表土厚く、26日よりベルトコンベアーを使用して西→東へ掘り進む。ＬＣラインで土層断面観察のため、ＭＣラインに沿って南北に幅２ｍのトレンチを掘り始める。北端のＬＣ71グリッド内には黄褐色土の下に南に向かって深く傾斜する遺物包含層の存在することが確認された。５月８日には水路・道路造成部分の調査を終了し、埋

め戻しを行う。

11日、調査区域西端を流れる水路に沿って、遺構の有無確認のためグリッド単位でつぼ掘りを進める。南へ行くほど遺物が少なくなり、38ラインより南では遺構、遺物は皆無に近く、46ライン以南の水路に沿った区域と38ライン以南の全域、及び調査区域内中央部の59ライン以北は土捨て場として確保できることが知られた。

この頃、表土剝ぎ作業の効率化を図るため、作業員を約70名に増員する。20日からＬＣライン東側の表土剝ぎに入り、表土剝ぎは予定通り５月中にほぼ終了することができた。

６月１日からＭＢ47～49付近を掘り下げると第Ⅲ・Ⅳ層から完形土器・土偶など多数の遺物が出土し、この東方にもこうした出土状況を示す区域の拡がりが予想された。８日、ＭＣ60内に黒色土の落ち込みがあり、その外縁に黄灰色の火山灰の分布が見られた。これは18日になって平安時代のＳＩ001竪穴住居跡とその覆土上部に堆積した火山灰であることが確認され、この時期の遺構と火山灰との関係にも注意が喚起された。14日入梅。ＭＢ52Ⅳ層上面に石囲炉検出。17日よりＬＣライン東側の精査に入る。ここでも縄文晩期の石囲炉、配石を検出しつつ、47ラインまで北→南へ精査する。少量の弥生土器、土師器も出土する。

７月１日、ＳＩ001のすぐ北側にＳＩ002竪穴住居跡を検出。２日、包含層の掘り下げはいよいよ中央部へ移り、56ラインから南へ調査を進行する。予想通り遺物の出土は極めて多く、連日多量の遺物がプレハブ内に運搬される。ほとんど降雨なく堰から水中ポンプで揚水しながら調査する。北西端に検出されていた土壙墓の実測が終了する。８日、ＬＤ48内において初めて小玉が出土する。９日、ＬＣ44内の地山面に、大洞C_1～C_2式期の完形土器が一括廃棄された状態で検出された。中央部一帯は捨て場的状態で膨大な遺物の出土量であるが、その中に大洞Ａ式土器の一括出土も検出される。14日、ＳＩ003竪穴住居跡が北東部に発見される。22日から県立増田・湯沢・湯沢北高校生が参加し、南端の地山面の落ち込みを調査する。多量の土器・石器の中に土製・石製の小玉類が多数検出され、傍らでフルイ作業も並行する。

８月１日、梅雨明け。４日、南端落ち込みの遺物を取り上げ、南から北方へ地山面までの掘り下げを開始する。土壙・配石遺構などの他、遺物量も多く、28日になって調査を終了し、30日に荷物を運搬して引き上げる。なお、調査期間中、三回にわたり２トントラックを使用して遺物を埋蔵文化財センターに運搬、また、最終日には南端の落ち込みの堆積土をフルイにかけるため、４トントラックで１台分の堆積土を運搬した。

第4章　発見された遺構と遺物

第1節　遺跡の土層

調査にあたって、東西方向では40・47・56ラインで、南北方向ではＬＣラインでそれぞれ土層断面図を作成した。

第Ⅰ層：暗灰黄色土(2.5Ｙ½)。表土、水田耕作土で、層厚10～22cmに堆積する。

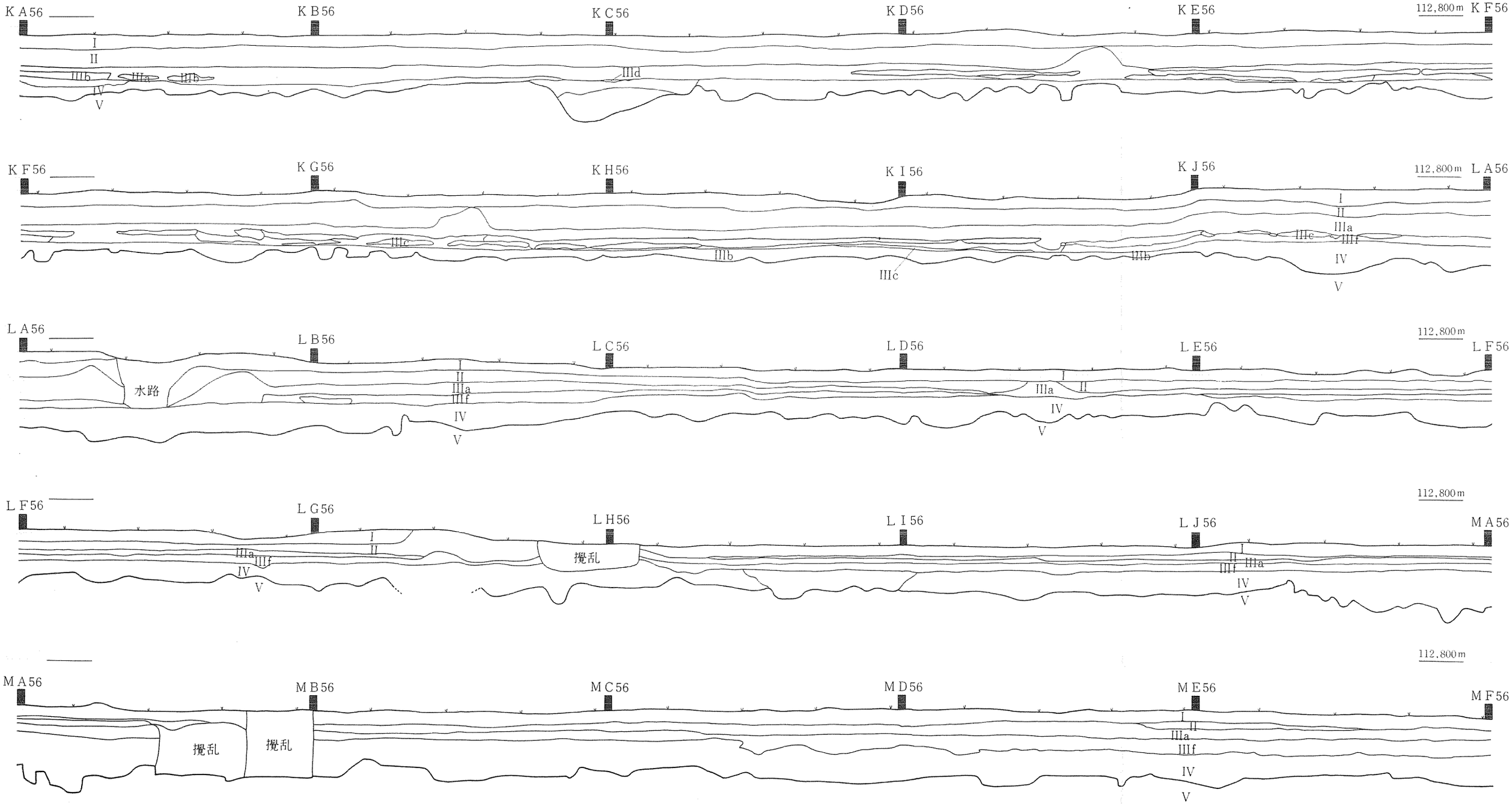
第Ⅱ層：にぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4)。耕地整理前の旧水田上の堆積土で、旧水田の畦畔をも覆っている。56ラインでは東側が厚く、30cm前後の厚さであるが、西ほど薄くなりＭＡ以西ではほとんど消滅している。ＬＣラインでは41グリッド以南で20cm前後の層厚であるが、中央部から58グリッドまでは５～10cmと薄い。しかしその北ではしだいに厚くなり40cmほどとなる。

第Ⅲ層：現場の調査時点において遺物包含層をⅢ層下部・Ⅳ層として遺物を取り上げたが、Ⅳ層はそのままとし、Ⅲ層を細分して、Ⅲ層下部とした包含層はⅢｆ層とした。

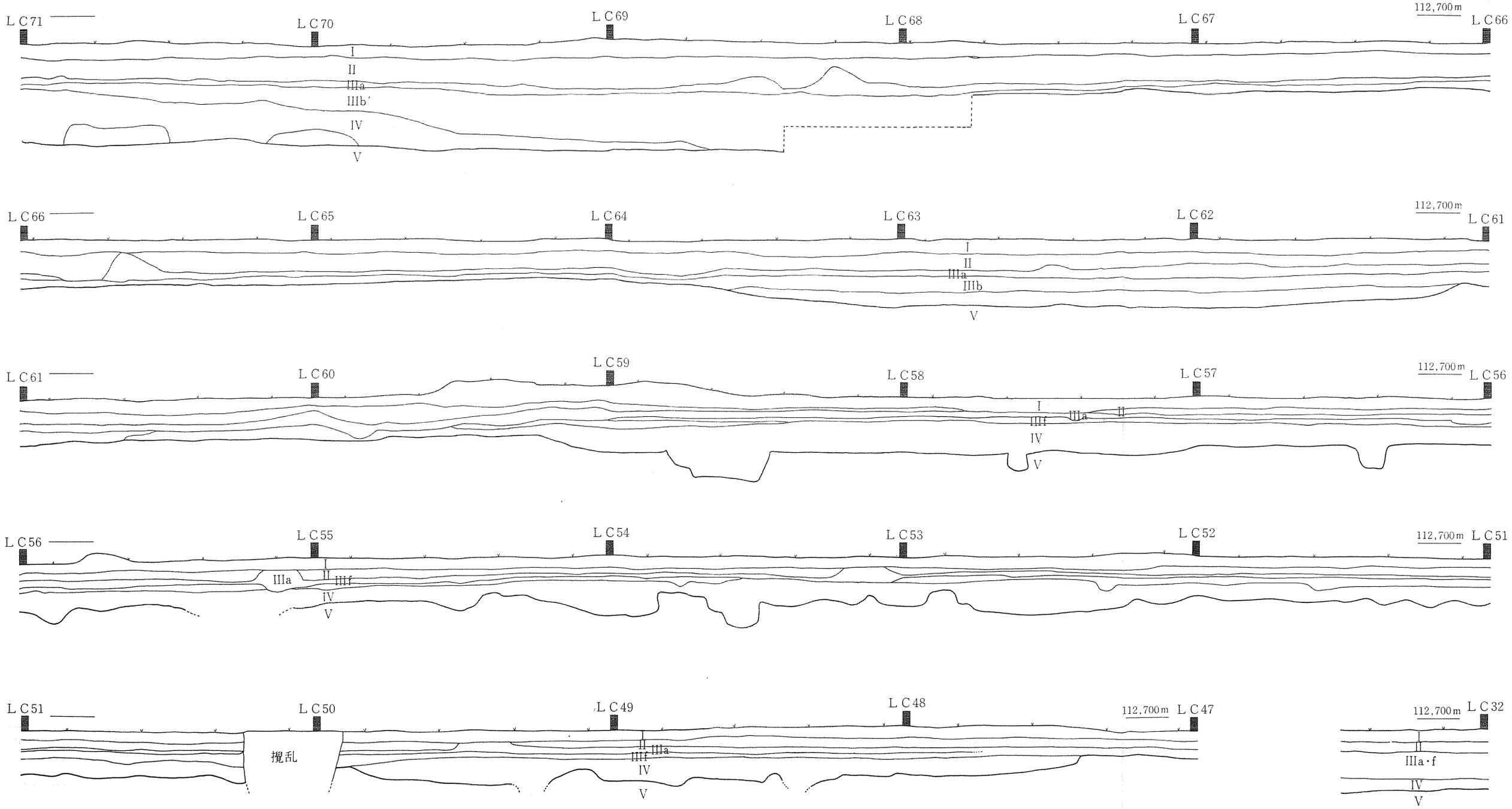
ａ：黒褐色土（10ＹＲ3/2)。耕地整理前の旧水田耕作土で、所々に畦畔の断面が盛り上がりとなり、遺跡内全体に分布している。遺物包含層の深さが比較的深い56ライン北側では後述するⅢｂ層、平安時代の土層であるⅢｃ・Ⅲｄ・Ⅲｅ層が存在し、これらの土層の上に堆積しているが、包含層の比較的浅い範囲ではⅢｂ～Ⅲｅ層はなく、Ⅲｆ層の上に本土層がのる。このことはⅢｆ層の浅い範囲においてはⅢｆ層を耕作してⅢａ層が形成されていることを示している。

ｂ・ｂ′層：明黄褐色土（10ＹＲ5/6)。分布が発掘区域内北東部に限られ、他の区域では存在しない。ｂ層は56ラインではＫＡグリッド内に５～10cmの層厚で堆積が見られ、ＫＤグリッド付近からＫＩグリッド付近までは途切れがちながら同様の厚さで堆積しているが、これより西には存在しない。粘性のあるシルトである。ｂ′層はＬＣライン北端の上から４層めの層で、ｂ層に類似する。しかし、ｂ層に比し砂質であること、炭化物を含むこと、ｂ層は明らかに平安時代以降の堆積であるが、ｂ′層は大洞C_1～C_2式期の第Ⅳ層に直接のっており、堆積年代に違いのあることは明白である。また両ｂ・ｂ′層はともに遺物包含層や黒褐色腐色土層に挟在する無遺物層であること、ｂ′層はＬＣライン最北端の71グリッドでは８cmの厚さながら、南に向かって急激に厚さを増し、68グリッドでは80cmにも達し、最下部に青灰色の砂礫層が見られることなどの事実から、両層は河川の氾濫による堆積土と考えられる。

ｃ：黒色土(7.5ＹＲ2/1)。この土層も分布及び堆積年代が限定される。40・47ライン、ＬＣライ


KA56
KB56
KC56
KD56
KE56
112,800m
KF56
I
II
IIIb
IIIa
IIIb
IIId
IV
V
KF56
KG56
KH56
KI56
KJ56
112,800m
LA56
IIIc
IIIb
IIIc
IIIa
IIIf
LA56
LB56
LC56
LD56
LE56
112,800m
LF56
水路
IIIa
IIIf
LF56
LG56
LH56
LI56
LJ56
MA56
撹乱
MA56
MB56
MC56
MD56
ME56
MF56
撹乱
撹乱
0
2m

第11図　土層断面図 (1)

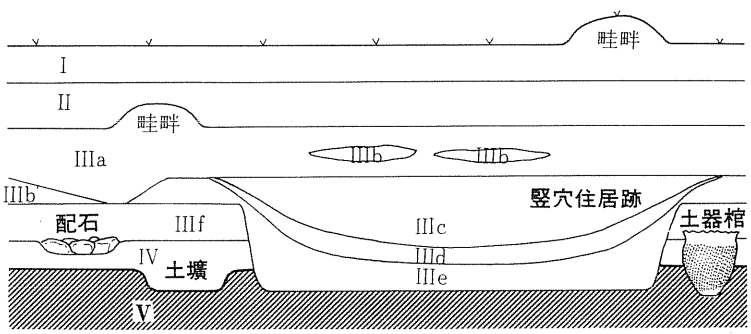

LC71
LC70
LC69
LC68
LC67
LC66
112,700m
I
II
IIIa
IIIb′
IV
V
LC66
LC65
LC64
LC63
LC62
LC61
112,700m
I
II
IIIa
IIIb
V
LC61
LC60
LC59
LC58
LC57
LC56
112,700m
I
IIIa
II
IIIf
IV
V
LC56
LC55
LC54
LC53
LC52
LC51
112,700m
I
II
IIIa
IIIf
IV
V
LC51
LC50
LC49
LC48
LC47
112,700m
攪乱
II
IIIa
IIIf
IV
V
LC32
112,700m
I
II
IIIa・f
IV
V
0
2 m

第12図　土層断面図（２）

ンには見られず、56ラインで東端のＫＡグリッドからＬＢグリッドの間に途切れながら５～13cmの厚さに堆積し、その直下には火山灰が見られる。平安時代のＳＩ001竪穴住居跡・ＳＫ(Ｉ)002竪穴遺構においては遺構内に堆積した火山灰層の直上に本土層があり、遺構埋没途中の凹みの中への堆積であることが知られる。

ｄ：浅黄色(2.5Ｙ7/4)の火山灰層である。主として56ライン以北の発掘区域内に点々と分布する。平安時代のＳＩ001竪穴住居跡・ＳＫ(Ｉ)001・002竪穴遺構では、遺構がある程度埋没した後に本火山灰がレンズ状に堆積しており、平安時代における降下火山灰であることが明らかである。火山灰については付篇に庄司貞雄氏の分析を掲載した。

ｅ：黒褐色土（10ＹＲ2/3)。平安時代竪穴住居跡・竪穴遺構内では堆積土下層にあり、火山灰の下に堆積している。しかし遺構外や56ライン土層断面では検出できなかった。



第13図　遺構と土層の関係模式図

ｆ：黒褐色土(2.5Ｙ3/1)。大洞Ａ式期の遺物包含層である。この土層の存在は遺物を多く出土する範囲にほぼ限られる。すなわち、ＬＣラインにおいては北は59グリッド付近から、南は47グリッド内までで、この間は５～10cmの層厚を保って存在しているが、それ以南ではⅢａ層との区分はほとんどできなくなる。40ライン以南ではⅢａ層と合体してしだいに厚くなり、32グリッドでは33cmの厚さを測る。56ライン東側では明確でなく、３～５cmの層厚で堆積しているが、ＫＩグリッド付近からしだいに厚みを増し、ＬＦグリッドで10～13cm、ＭＥグリッドで20cm前後の厚さとなる。

Ⅲａ層のあり方も含めて考察すると、遺物包含層として遺物の多い範囲には厚く堆積しているが、地表からの深度の浅い所では後世の耕作の度合が大きく、したがって層厚は薄く存在していると言えよう。

第Ⅳ層：黒褐色砂質土(7.5ＹＲ3/2)。大洞C_1・C_2式期の遺物包含層で、ほぼ全域に存在する。56ラインでは東端で20cmの層厚であるが西ほど厚みを増し、40～60cmに堆積する。ＬＣラインでは、遺物包含層としては47グリッド以南には存在せず、また、北方では60グリッド内で消滅しているが、69・70グリッドでは北からの流入による堆積が見られる。

第Ⅴ層：褐色砂質土（10ＹＲ4/4）及び礫で地山を構成する。礫層にはその表面に細かな凹凸があり、この上に砂質土が堆積して平坦面を形成している。発掘区域内北東部、北西部では砂

質土の中に細かな礫層が露出しているが、中央部から南部では粘性のある砂質土となり、礫層の露出もほとんどない。

第２節　検出遺構と遺物

１．縄文時代

(1)　遺構と遺構内出土遺物

①　土　　壙

ＳＫ001（第14図）

ＭＧ65グリッド西部に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。92cm×84cmと円形に近く、深さは10cmほどである。底面はほぼ平坦で径70cmを測る。壁は緩やかに丸みを帯びて立ち上がっている。南東隅にピットがあり、径10cm前後の石が２個入っている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ002（第14図）

ＭＧ65グリッド内でＳＫ001のすぐ南にある。第Ⅳ層上面で確認された。123cm×105cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ72°Ｗである。上面に径20cm前後の石が４個配石されている。深さが13～18cmのピットが５個あるが、そのうち３個は配石の直下にある。底面は86cm×76cmでほぼ平坦であり、深さは６cmと非常に浅い。壁はなめらかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ003（第14図）

ＭＨ60グリッド北部にあり、第Ⅳ層上面で確認された。135cm×57cmの楕円形を呈しており、確認面からの深さは９cmにすぎない。底面は西に傾斜し、壁はわずかに立ち上がる程度である。長軸方位はＮ76°Ｅである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ004（第15図）

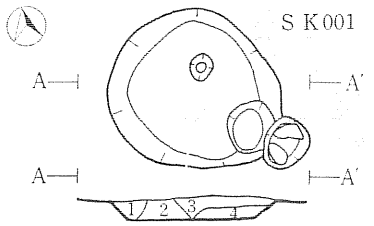
ＭＧ60グリッドにあり、ＳＮ001と接している。第Ⅳ層上面に確認された。110cm×48cmの楕円形を呈しており、深さは13cm、底面は南西ほど低くなっている。壁は北東側はなだらかに、立ち上がるが南西側はＳＮ001に切られている。長軸方位はＮ50°Ｅ。遺物は出土しなかった。

ＳＫ005（第14図）

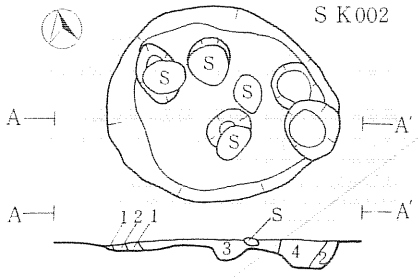
ＭＩ60・61グリッドにまたがり、西側は調査範囲外に入っている。第Ⅳ層上面で確認された。深さは26cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に傾斜して立ち上がる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ010（第14図）

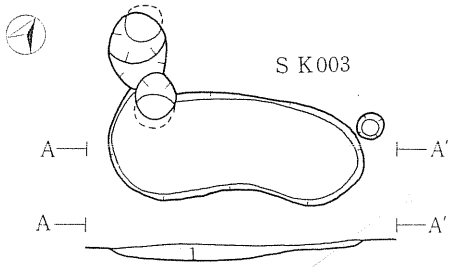
ＭＨ61グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認された。81cm×47cmの長方形を呈し、深さは６cmを測る。底面は平坦で、壁はわずかに傾斜して立ち上がる。長軸方位はＮ86°Ｅ。遺物は出土しなかった。



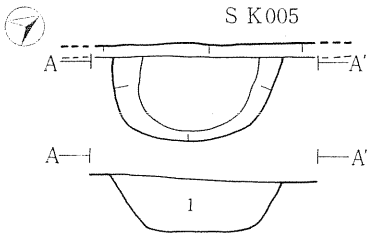
1　黒褐色（10Y R3/2）粘土質
2　黒褐色（5 Y R3/2）
3　黒　色（10Y R2/1）
4　黒褐色（10Y R3/3）



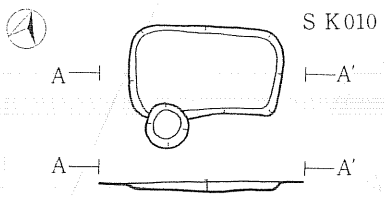
1　黒褐色（10Y R3/2）粘土質
2　黒褐色（10Y R3/3）
3　黒　色（10Y R2/1）暗赤褐色土少量混入
4　黒　色（10Y R1.7/1）



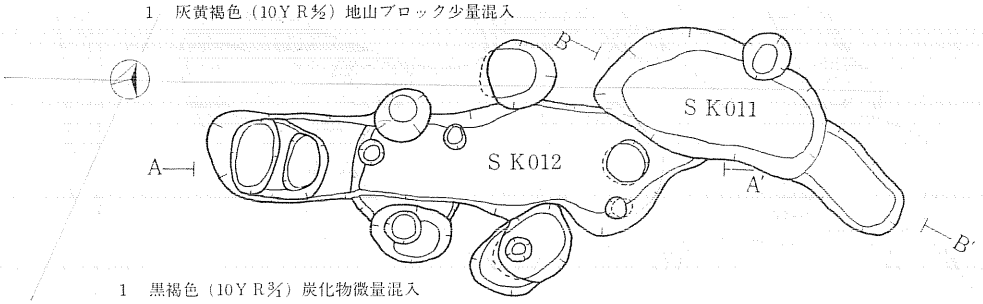
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物多量混入



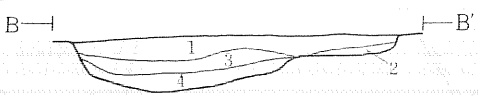
1　黒褐色（10Y R2/1）粘土質、灰黄褐色土少量混入

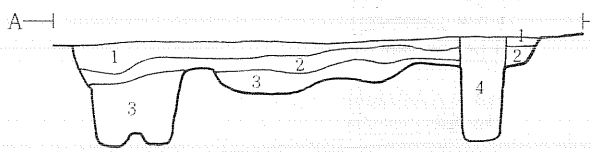


1　灰黄褐色（10Y R5/2）地山ブロック少量混入



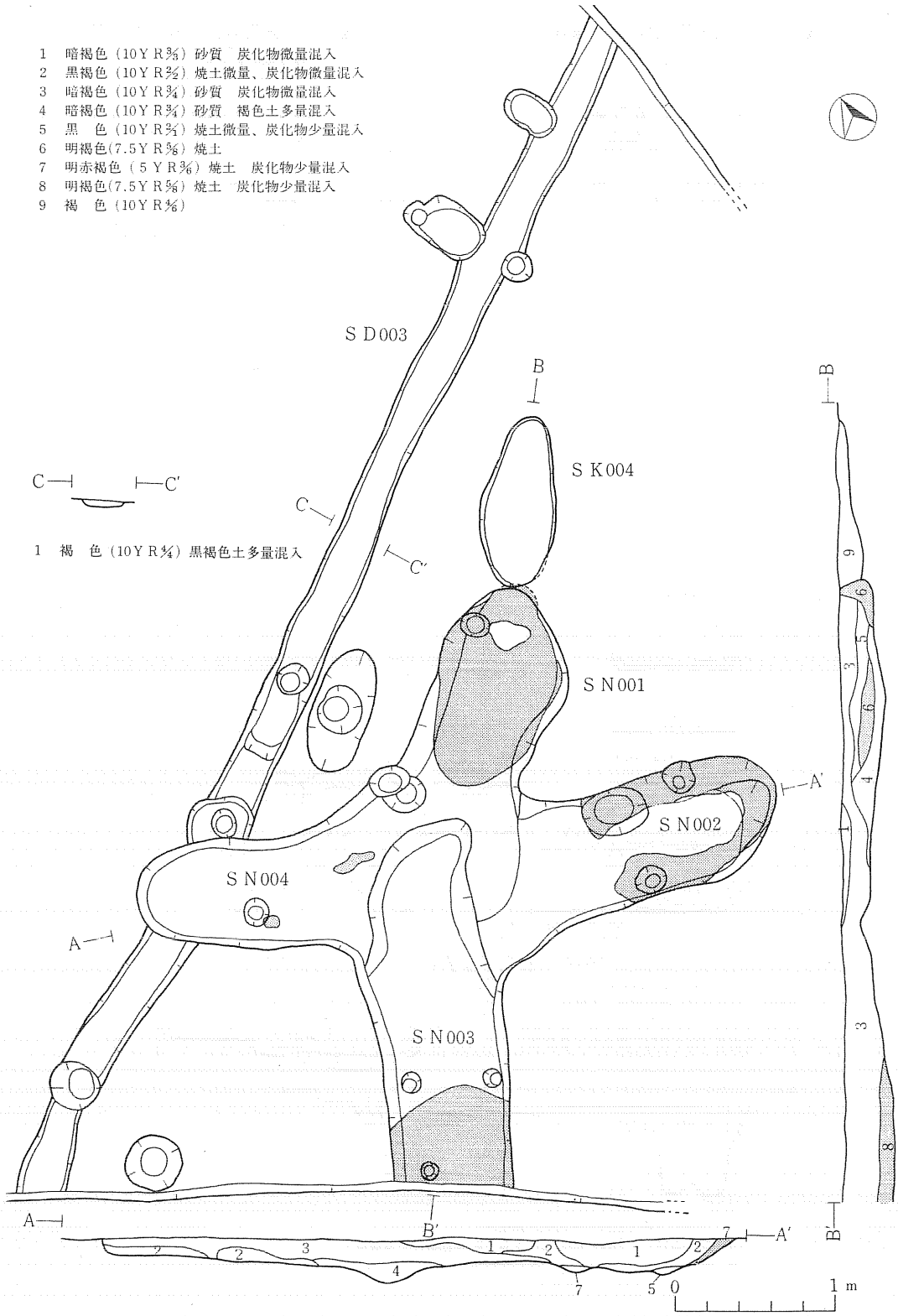
1　黒褐色（10Y R3/1）炭化物微量混入
2　黒褐色（10Y R3/1）地山ブロック微量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/3）粘土質、炭化物混入
4　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物少量混入



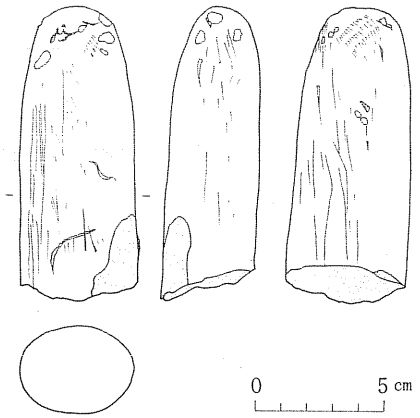


1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量混入
2　褐　色（7.5Y R4/4）黒褐色土多量、褐灰色粘質土多量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/3）炭化物微量混入
4　黒色（10Y R2/1）砂微量混入

第14図　S K001～003・005・010～012 土壙実測図



第15図 ＳＫ004土壙・ＳＤ003溝・ＳＮ001～004焼土遺構実測図



第16図　ＳＫ011出土遺物

ＳＫ011（第14図）

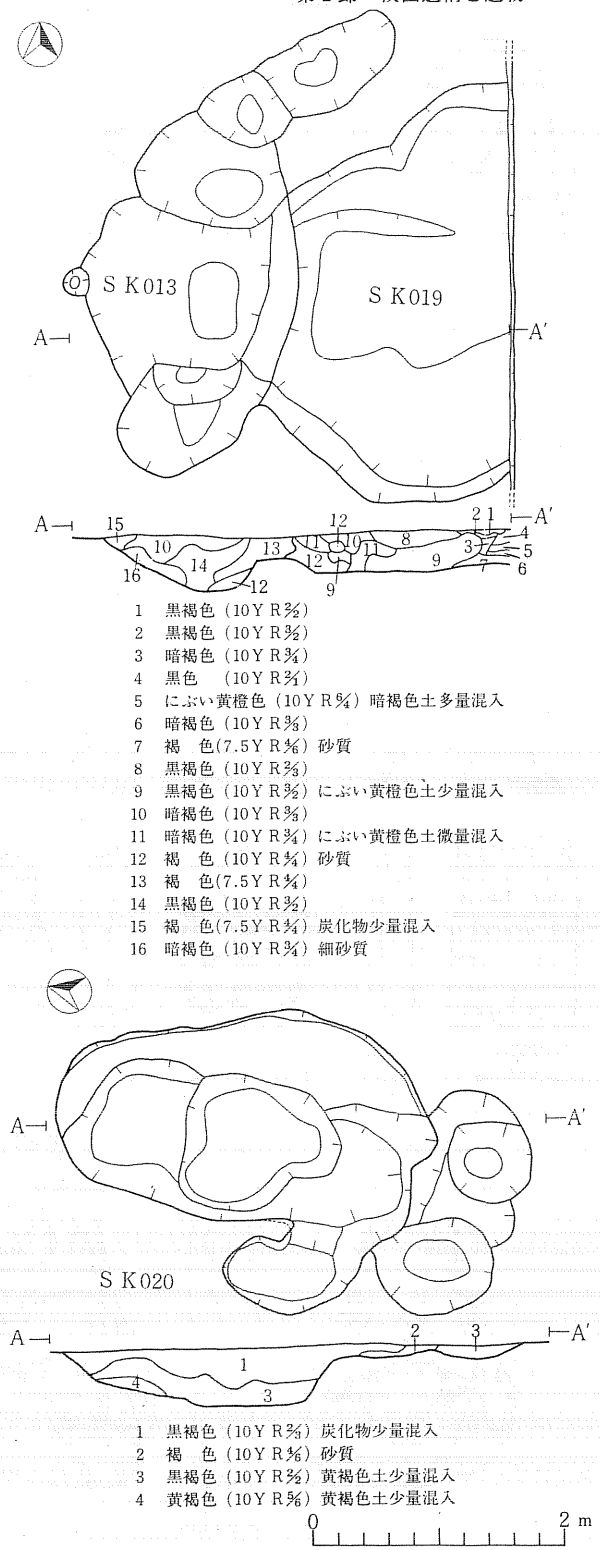
ＭＨ62グリッド杭付近に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。125cm×63cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは31cmであった。底面にはやや凹凸があり、中央部がやや深い。壁はややなだらかに立ち上がる。長軸方向はＮ89°Ｅ。ＳＫ012と重複しているが、本遺構の方が新しい。土器片少量と磨製石斧が１点出土している。

ＳＫ012（第14図）

ＳＫ011のすぐ西隣にあり、第Ⅳ層上面で確認された。東西に重複があるが、120cm×60cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。東端のピットは本遺構よりも確実に新しい。西端のピットも本遺構とは時期が異なるものかも知れない。底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。土器片が少量出土している。

ＳＫ013（第17図・第10図版）

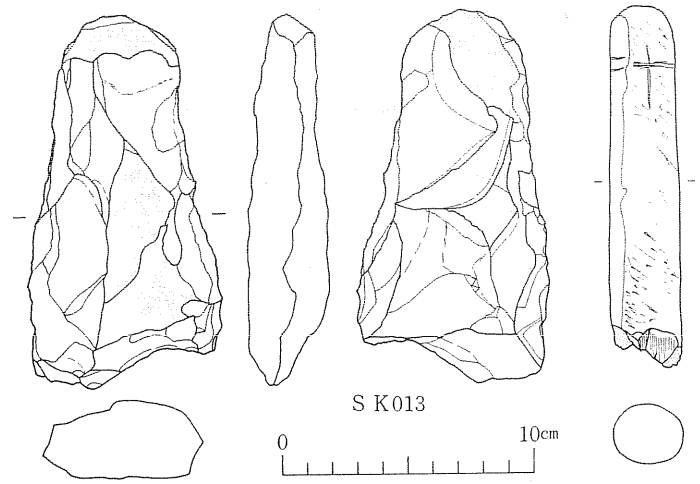
ＭＧ69グリッドにその大部分があり、第Ⅳ層で確認された。332cm×172cmとかなり大きいが、中央部の大きく深い部分とその南北の部分とに大別される。中央部は径170

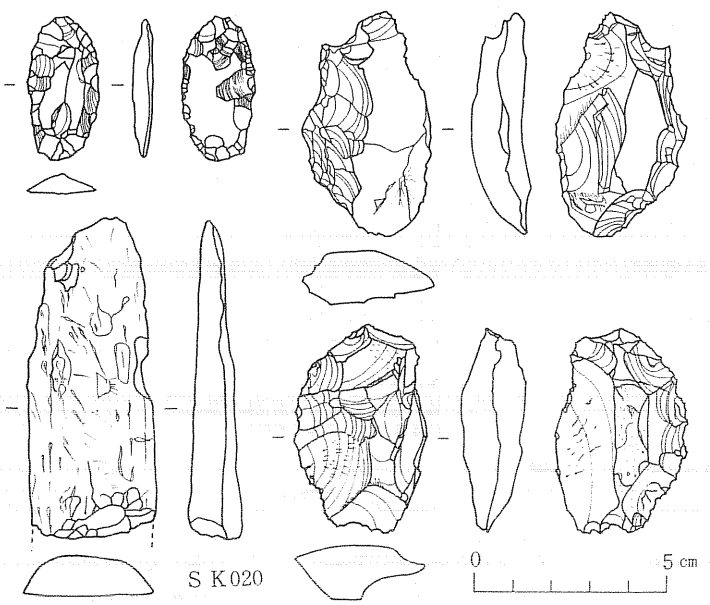


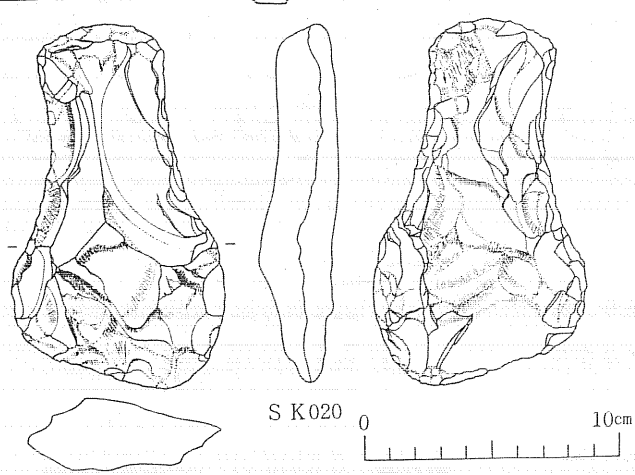
1　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）
2　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）
3　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
4　黒色　（10Ｙ Ｒ2/1）
5　にぶい黄橙色（10Ｙ Ｒ6/4）暗褐色土多量混入
6　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）
7　褐　色(7.5Ｙ Ｒ4/6）砂質
8　黒褐色（10Ｙ Ｒ2/2）
9　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）にぶい黄橙色土少量混入
10　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
11　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）にぶい黄橙色土微量混入
12　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）砂質
13　褐　色(7.5Ｙ Ｒ4/4）
14　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）
15　褐　色(7.5Ｙ Ｒ4/4）炭化物少量混入
16　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）細砂質

1　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/1）炭化物少量混入
2　褐　色（10Ｙ Ｒ4/6）砂質
3　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）黄褐色土少量混入
4　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）黄褐色土少量混入

第17図　ＳＫ013・019・020土壙実測図







第18図　S K013・020出土遺物

cm、深さ46cmであるが、北側及び南側の凹みは径100cm、深さ36～40cmである。底面には細かな凹凸があり、壁は丸みを帯びている。多量の大洞C_2式土器片と、打製石斧、石棒各１が出土した。

S K 019（第17図・第10図版）

ＭＧ69グリッド中央部にあり、東側の一部が調査範囲外に入り込んでいる。第Ⅳ層で確認された。調査部分のみで336cm×180cmと大きいが、全体では径350cmほどの楕円形となるようである。内部は緩やかな立ち上がりを示すが、外縁近くで急な立ち上がりとなる。大洞C_1式土器片が少量出土した。

S K 020（第17図）

ＭＩ67グリッドの東部に位置し、第Ⅳ層で確認した。301cm×164cmの楕円形である。確認面からの深さは48cmで底面の状況は凹凸が激しく、壁は西側では垂直に立ち上がっているが、他はなだらかである。大洞C_1～C_2式土器片と石器が５点出土している。

S K 024（第19図・第10図版）

ＬＨ42・ＬＩ42両グリッドにまたがり、地山面で確認された。222cm×158cmの西側が少しくびれる楕円形で、深さは36cmを測る。底面から壁が丸みを帯びて立ち上がり、東側には小ピットを有する。

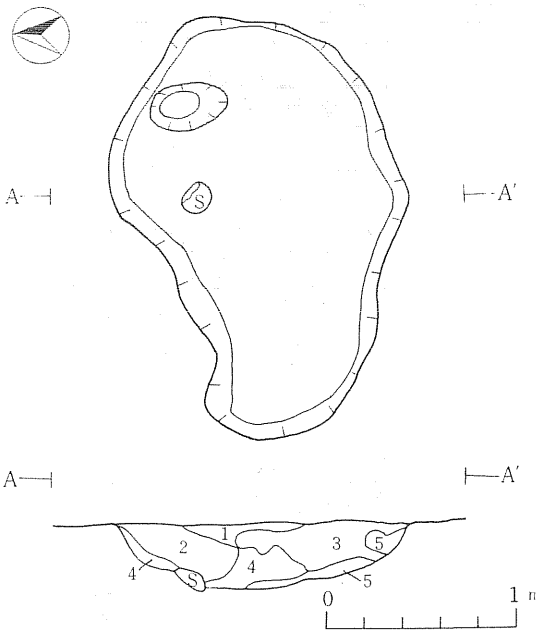
長軸方位はＮ78°Ｅ。遺物は出土しなかった。

ＳＫ026（第20図・第10図版）

ＭＣ66グリッドに大部分があり、地山面で確認された。遺構上面には小石が５個あり、径50cmほどの円形で、最深部までの深さは12cmを測る。遺物は出土しなかった。西側に隣接してＳＮ048が構築されている。

ＳＫ027（第20図・第11図版）

ＭＣ67グリッドの東部に位置し、地山面でプラン確認された。120cm×72cmの楕円形で西側が少し狭くなっている。深さは最深部で34cmと比較的深く、長軸方位はＮ71°Ｅである。表面に小石が10個ほど不規則に置かれている。底面は略平坦で大小の礫が数個見られるが、これは地山の礫である。この他に北東部隅に40cm×20cmの石があるが、これは人為的に置かれたものと思われる。壁は急角度で立ち上がり、一部は数cm内側に入り込んでいる。ＳＫ028と重複するが本遺構の方が古い。少量の土器片の他、底部から石鏃１点が出土した（第21図）。



第19図　ＳＫ024土壙実測図

ＳＫ028（第20図・第11図版）

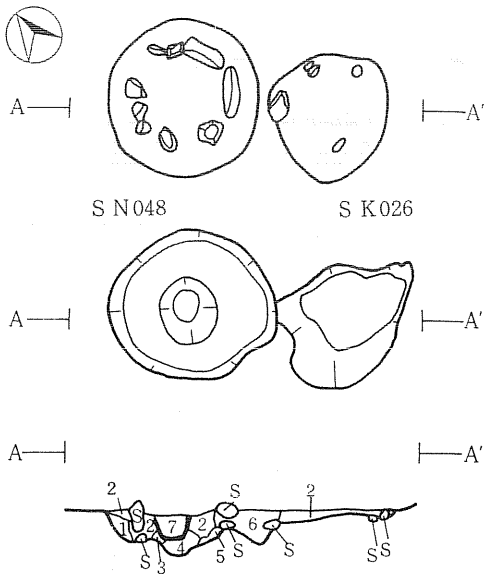
ＳＫ027の南に重複し地山面で確認された。上面に大小数十個の配石があり、その中に打製石斧を含んでいる。97cm×58cmの楕円形で、深さは最深部で13cmと比較的浅い。底面は中心部で幾分深いが、南ほどなだらかに浅くなる。長軸方位はＮ42°Ｗである。

ＳＫ029（第22図・第11図版）

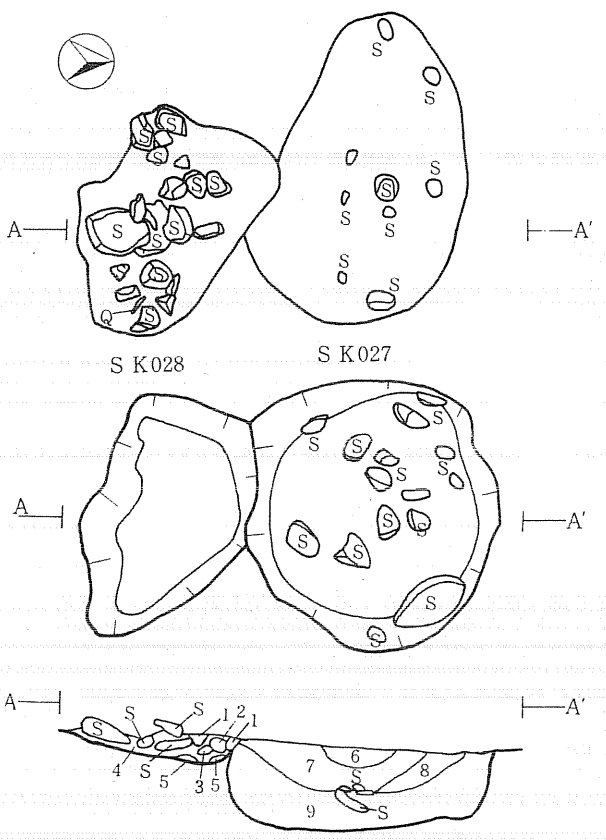
ＭＢ67グリッド南部に位置し、Ⅲ層下部で配石を検出し、地山面で土壙プランを確認した。遺構確認面は60cm×48cmの楕円形で長軸方位はＮ20°Ｅ。上面には７個の配石がみられる。深さは最深部で８cmとかなり浅い。底面には凹凸があり、中央部が５cmほど高くなっている。壁は極めてなだらかである。少量の土器片が出土した。

ＳＫ030（第22図・第３・12図版）

ＭＢ67グリッドの北東部に位置する。上面に30数個の配石があり、おおよその遺構範囲は把握できたが、土壙内埋土と地山との区別がし難く、土壙の確認は困難であった。82cm×54cmの楕円形を呈し、深さ18cm、長軸方位はＮ68°Ｗである。埋土中や底部付近にも石があり、壁は丸



1　暗褐色（10Y R3/3）礫少量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）
3　黒褐色（10Y R3/2）礫少量混入
4　黒褐色（10Y R2/3）砂質　焼土少量混入
5　暗褐色(7.5Y R3/4）砂質　焼土多量混入
6　極暗褐色(7.5Y R2/3）
7　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量混入



1　黒褐色（10Y R2/3）
2　暗褐色（10Y R3/4）褐色土少量混入
3　暗褐色(7.5Y R3/4）
4　黒褐色（10Y R3/2）粘土少量混入
5　褐　色（10Y R4/6）砂質
6　黒褐色（10Y R2/3）炭化物少量混入
7　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
8　暗褐色（10Y R3/3）礫少量混入
9　暗褐色（10Y R3/4）礫少量混入

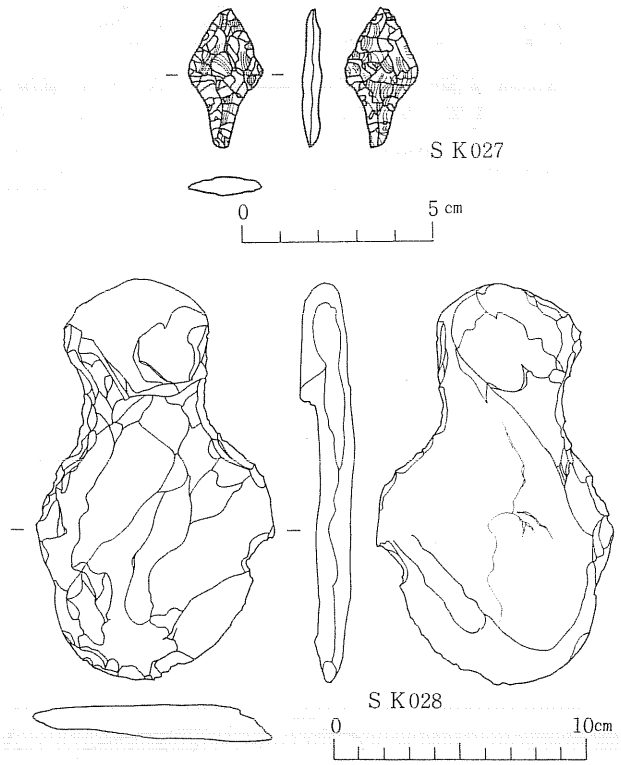
0　1 m

第20図　S K026～028土壙・S N048石囲炉実測図

みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ031（第22図・第３図版）

ＭＢ67グリッドの北部にあり、地山面で確認された。上面の東南端に径15cmほどの石を置いている。この石の東側付近は旧水田畦畔のしみにより、確認がやや困難であった。95cm×40cmの楕円形で、最深部で13cmの深さである。底面にも石があるが、人為的なものではなく地山の礫であろう。底面は北西ほど深さを増しており、壁の状態は東側においては垂直に立ち上がっているが、西側では緩やかな立ち上がりを示す。長軸方位はＮ50°Ｗ。少量の土器片の他、石鏃の一部が出土した。



第21図　ＳＫ027・028出土遺物

ＳＫ032（第22図・第３図版）

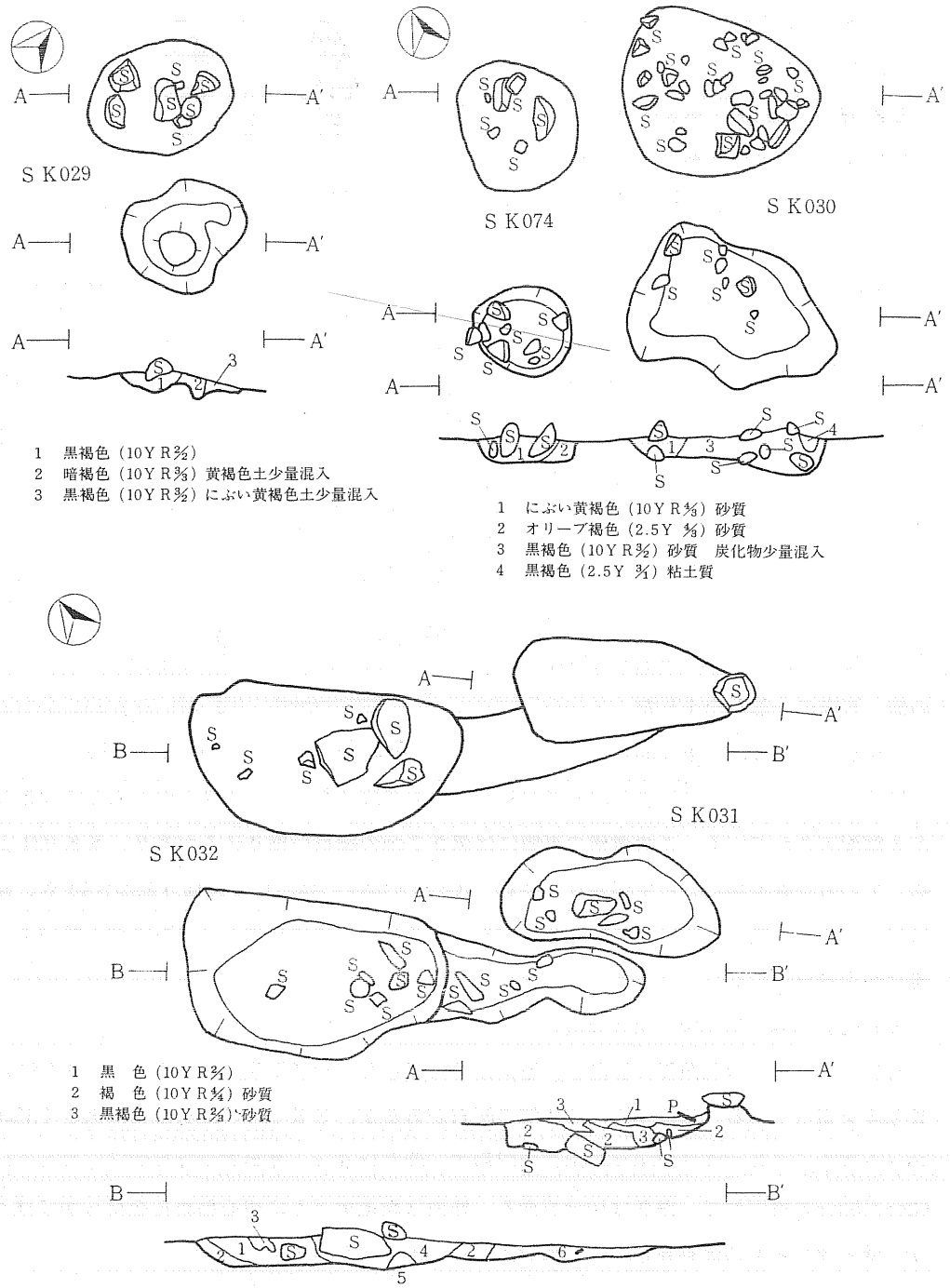
ＭＢ67・68両グリッドにまたがっており、地山面で確認された。遺構上面南東部に大きな石が３個配石されている。この遺構の東側には深さ７cmの細長い掘り込みがあり、ＳＫ031と連結しているが両遺構によって切られている。106cm×62cmの楕円形で長軸方位はＮ48°Ｗ、深さは14cmを測る。底面は略平坦で数個の石が置かれており、壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ033・034（第23図・第３図版）

ＭＢ67グリッドの北西部に位置し、地山面で確認した。両者重複しているが、ＳＫ033がＳＫ034を切っている。遺構上面には数個の配石があるが、ＳＫ034の配石は特に大きく45cm×40cmを測る。ＳＫ033は96cm×46cmの楕円形で、深さは６cm、長軸方位はＮ80°Ｅ、ＳＫ034は63cm×53cmの略円形で、深さは10cmを測る。底面は両遺構ともに中心部からなだらかに浅くなり、壁と呼べるものは存在しない。遺物はともに出土しなかった。

ＳＫ035（第24図・第３図版）

ＭＢ65グリッド南部にあり、地山面で確認された。ＳＫ075と重複しており、本遺構の方が新しい。遺構上面の中心に１個の大きめの石と、南半部に20個ほどの大さな石を配している。中心に置かれた石は10cmほど埋土中に埋まっている。102cm×67cmの楕円形を呈し、深さは最深



1　黒褐色（10Y R3/2）
2　暗褐色（10Y R3/3）黄褐色土少量混入
3　黒褐色（10Y R3/2）にぶい黄褐色土少量混入

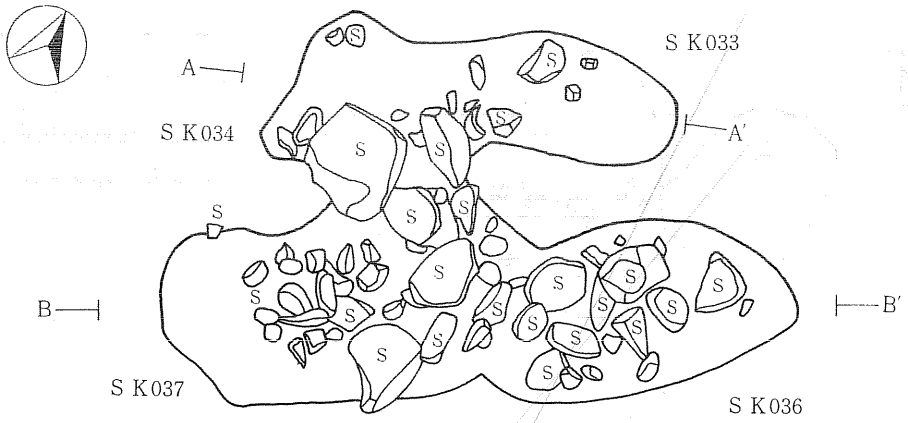
1　にぶい黄褐色（10Y R4/3）砂質
2　オリーブ褐色（2.5Y 4/3）砂質
3　黒褐色（10Y R3/2）砂質　炭化物少量混入
4　黒褐色（2.5Y 3/1）粘土質

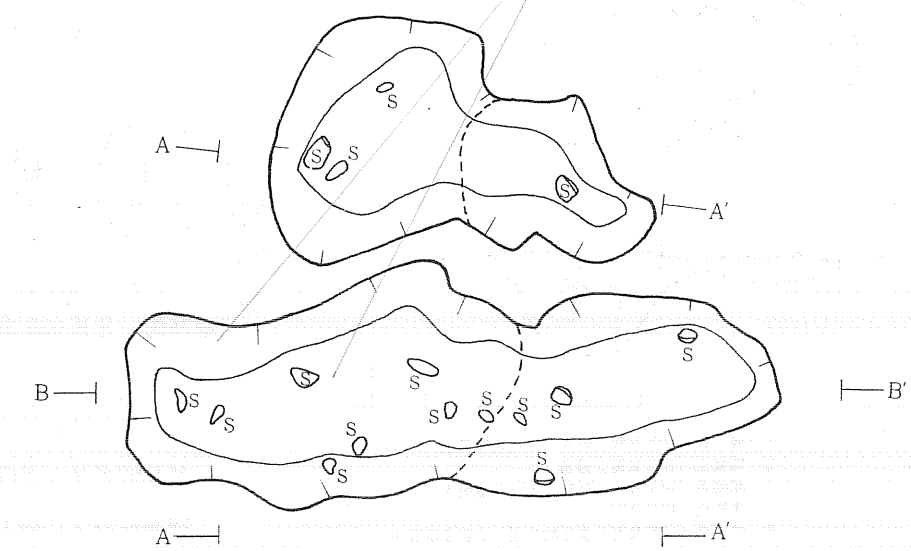
1　黒　色（10Y R3/1）
2　褐　色（10Y R4/4）砂質
3　黒褐色（10Y R3/1）砂質

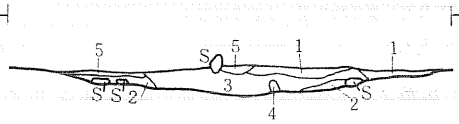
1　黒　色(7.5Y R3/1) 黄褐色土少量混入
2　暗褐色（10Y R3/3）砂質
3　黒褐色(7.5Y R3/2）砂質
4　黒褐色（5 Y R3/1）砂質
5　黒　色（10Y R3/1）砂質
6　褐　色（10Y R4/4）砂質

0　1 m

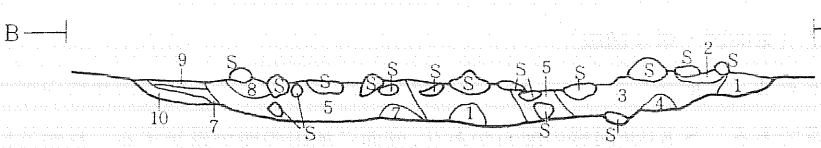
第22図　S K029～032・074土壙実測図



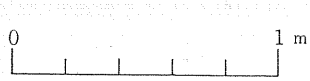




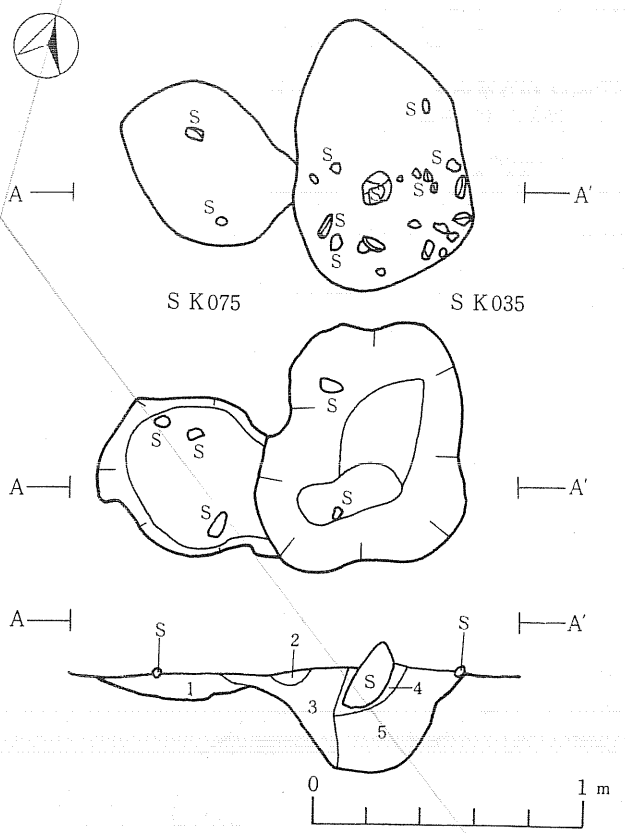
1 黒褐色（10Y R3/2）砂質　炭化物少量、礫多量混入
2 褐　色（10Y R4/6）砂質　炭化物少量混入
3 黒褐色（10Y R3/3）砂質　黄褐色土多量混入
4 黒褐色（10Y R3/1）粘土質
5 黒　色（10Y R3/1）



1 黒褐色（10Y R3/2）砂質
2 黒褐色（10Y R3/2）粘土質
3 黒　色(7.5Y R3/1）黄褐色土少量混入
4 黒褐色（10Y R3/3）砂質
5 黒褐色（10Y R3/2）
6 暗褐色（10Y R3/3）黄褐色土少量混入
7 褐　色（10Y R4/4）砂質
8 黒　色（5Y R1.7/1）
9 黒褐色(7.5Y R3/1）
10 褐　色（10Y R4/6）細砂質　炭化物少量混入



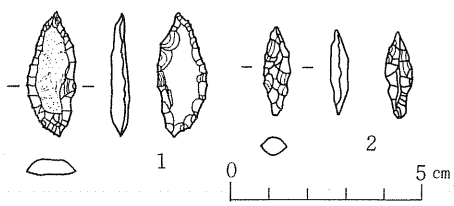
第23図　S K033・034・036・037土壙実測図



1　褐　色（10YR⅘）砂質　炭化物微量混入
2　暗褐色（10YR⅗）砂質
3　暗褐色（10YR⅗）砂質　小石多量混入
4　黒褐色（10YR⅗）
5　暗褐色（10YR⅗）炭化物少量、小石多量混入

第24図　SK035・075土壙実測図

部で38cmを測る。底面は西から東へ急角度で傾斜する面と、比較的平坦な面と二つあり、後者は前者より14～15cm高い位置にある。壁は底面から30cmほどの所まで丸く急な角度で立ち上がり、残りは緩やかとなる。長軸方位はN21°W。少量の土器片と石鏃が2個出土した。（第25図）



第25図　SK035出土遺物

SK036

（第23図、第3図版）

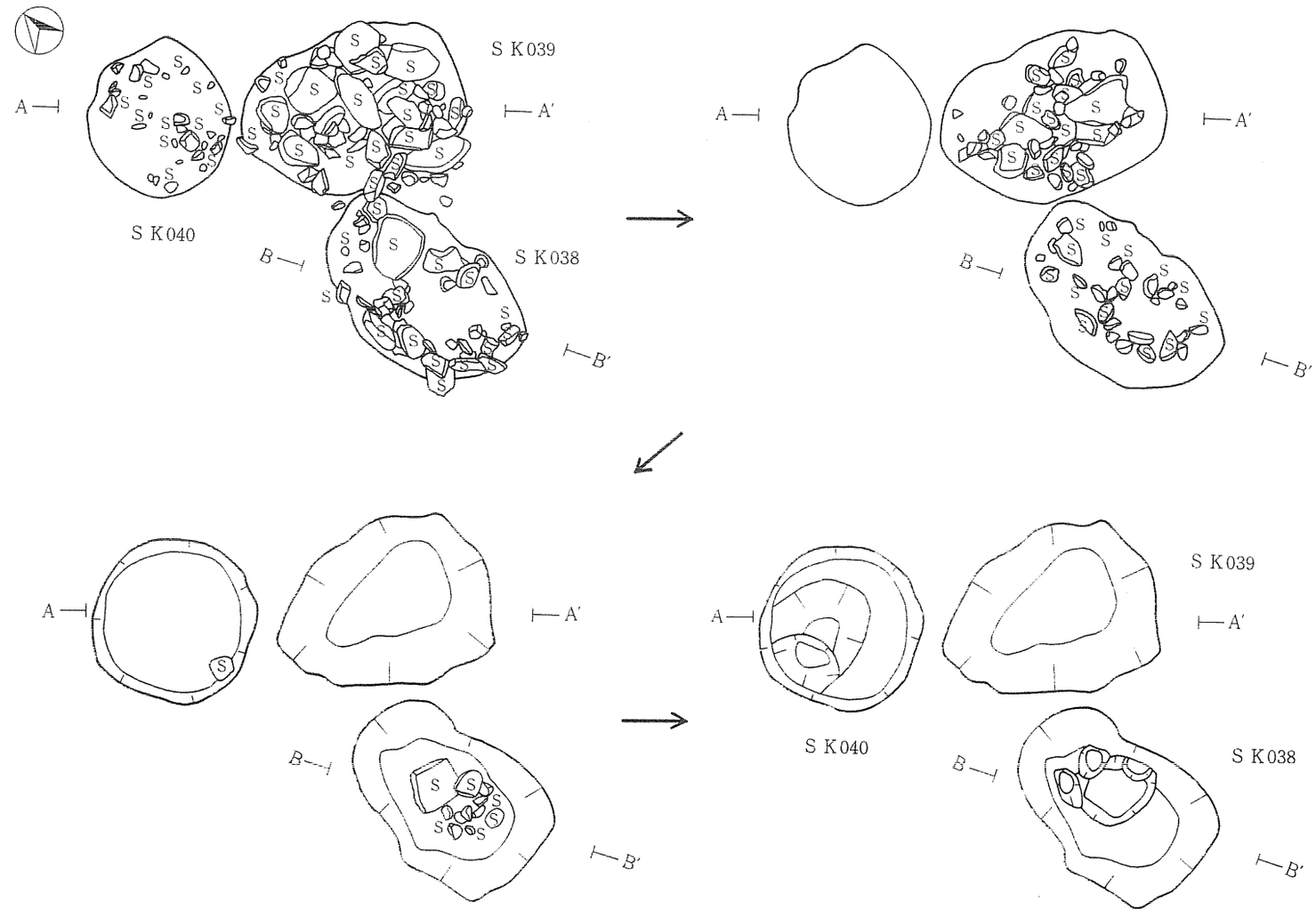
MB67グリッドの中央部～西側にあり、約120cm×64cmの楕円形で長軸方位はN70°Eである。遺構上面に多数の石が配されており、最深部までで15cmの深さである。底面にも小礫が数個あるが、これは地山の石である。壁は緩やかに立ち上がっている。SK037に切られている。少量の土器片が出土した。

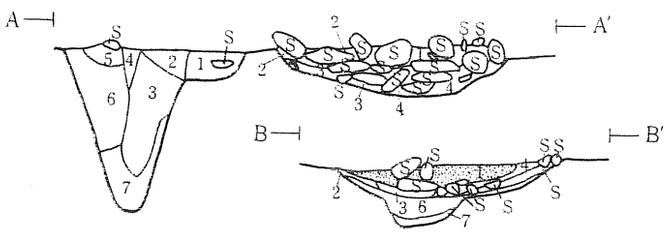
SK037（第23図・第3図版）

SK036を切って構築している。地山面で確認された。155cm×84cmの長楕円形で最深部で17cmの深さである。SK036同様の配石があり、底面に地山の礫が露出する。長軸方位はN70°Eで、壁は緩やかに立ち上がる。少量の土器片が出土した。

SK038（第26図・第12図版）

MB66グリッド南部にあり、上面配石の一部を第Ⅲ層下部で、平面プランは地山面で確認した。土壙北側に径40cmほどの大きな石を置き、その南に40個ほどの石を略円形に配している。これらの石を取り除きさらに掘り下げると、その下にも30個ほどの石で同様に配石が検出され





S K040

1 褐　色（10Y R 3/4）礫少量混入
2 黒　色（10Y R 2/1）
3 褐　色（10Y R 4/6）礫少量混入
4 にぶい黄褐色（10Y R 5/4）
5 暗褐色（10Y R 3/4）黒褐色粘質土少量混入
6 にぶい黄褐色（10Y R 4/3）
7 褐　色（7.5Y R 3/4）礫多量混入

S K039

1 黒褐色（10Y R 3/1）粘土質
2 黒褐色（10Y R 3/2）粘土質
3 黒褐色（10Y R 3/2）
4 黒褐色（10Y R 3/3）

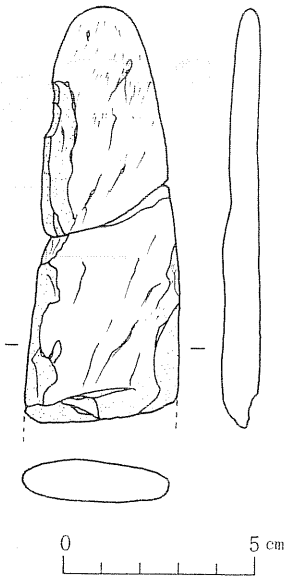
S K038

1 黄灰色（2.5Y 4/1）粘土　黒色土少量混入
2 暗褐色（10Y R 3/4）粘土質
3 黒褐色（10Y R 3/2）
4 黒　色（10Y R 2/1）粘土質
5 黒褐色（10Y R 2/2）褐色土少量混入
6 褐　色（10Y R 4/4）
7 黒褐色（10Y R 2/3）粘土質

0　1 m

第26図　S K038～040土壙実測図

た。さらにこの下の底部付近にも10数個の配石が認められた。土壙は 140 cm×92cmの楕円形で最深部で37cmを測り、長軸方位はＮ８°Ｗである。底面にピットがあり、この中から大洞C₁式土器片が少量出土し、最下部から赤色顔料を検出した。壁は丸みを帯びて非常になめらかに立ち上がる。なお土壙内埋土の第Ｉ層は粘土である。



第27図　ＳＫ040 出土遺物

ＳＫ039（第26図・第12図版）

ＳＫ038 の北東に隣接し、石の一部を第Ⅲ層下部で、土壙プランを地山面で確認した。遺構上面には大小の石が数十個、ほとんど土壙プランの全面に配石されている。土壙は138cm×104cm、西側がやや細くなる楕円形を呈し、深さは23cmを測る。長軸方形はＮ60°Ｗ、配石の状態はＳＫ038 と酷似し、表面の配石を取り除くと大きめの石１個と小さな石数十個が配石されていた。底面は最深部を中心に四方に緩やかに浅くなっている。

ＳＫ040（第26図・第12図版）

ＳＫ039 の北西に隣接し、地山面で確認された。上面には小石が全体に20数個配されている。土壙は径 102 cmの円形で、深さは最深部で 102 cmと深いが東側では15cmほどである。壁は底から一直線に急角度で立ち上がる。遺物は少量ではあるが上部から底部に至る広範囲にわたって土器片が出土した。また、底部付近より折損した石刀（第27図）と植物遺体（クリの実の皮）が出土した。

ＳＫ041（第28図・第12図版）

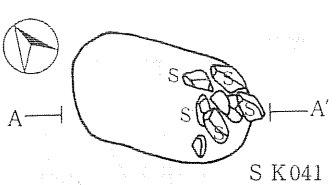
ＭＢ66グリッドの北東部にあり、地山面で確認した。遺構上面の東端に10個ほどの配石が見られる。土壙は80cm×50cm、深さ14cmを測る。底部は最深部付近が凹みになっているが、他は４～５cmと非常に浅い。壁は西側では小さな弧を描くようになっているが、東側は極めて緩やかに傾斜しており、ほぼ無いに等しい。長軸方位はＮ58°Ｗである。土器片が少量と石鏃１点、石棒かと思われるものが出土した（第29図）。

ＳＫ042（第28図）

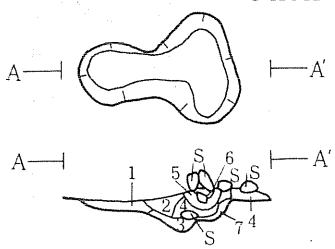
ＭＢ65グリッドの南端にあり、上面に40数個の石があるために第Ⅲ層下部で検出された。76 cm×60cm、深さ17cmを測る。上面の石の一部は土壙埋土中にも深さ10cmほど入り込んでいる。底部はほぼ平坦で壁はなだらかである。長軸方位はＮ72°Ｅ。遺物は出土しなかった。

ＳＫ043（第28図）

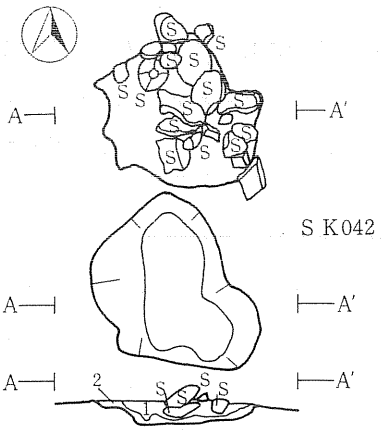
ＭＢ67・ＭＣ68グリッド内、地山面で確認された。埋土の色調が地山のそれと酷似しており



S K041

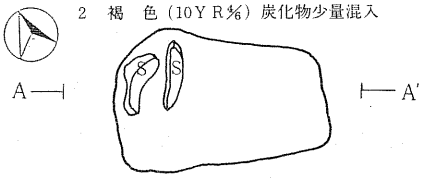


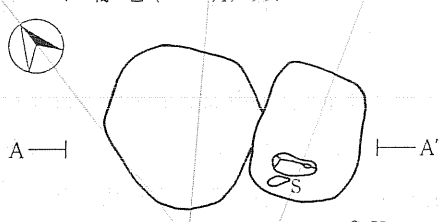
1　黒褐色（10Y R3/2）細砂質
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量　黄褐色土少量混入
3　褐　色（10Y R4/6）砂質
4　黒褐色（10Y R3/3）
5　にぶい黄褐色（10Y R5/4）黒褐色土少量混入
6　暗褐色（10Y R3/3）
7　褐　色（10Y R4/4）砂質



S K042

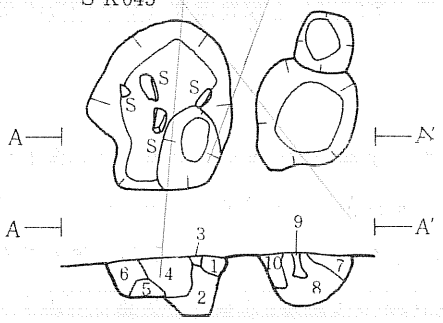
1　暗褐色（10Y R3/3）
2　褐　色（10Y R4/6）炭化物少量混入



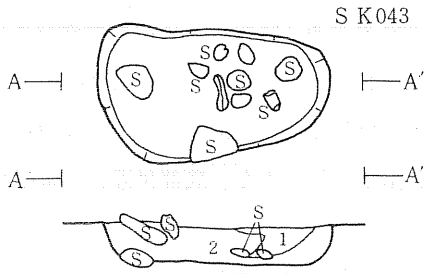


S K045

S K044

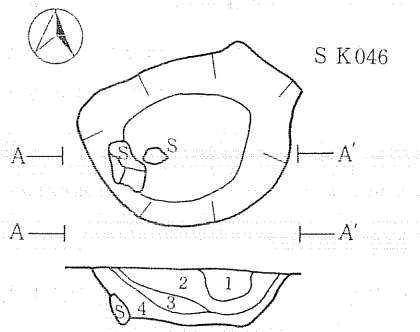


1　にぶい黄褐色（10Y R5/4）
2　黄褐色（10Y R5/6）
3　褐　色（10Y R4/4）礫少量混入
4　暗褐色（10Y R3/4）礫少量混入
5　褐　色（10Y R4/4）
6　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量、礫少量混入
7　暗褐色（10Y R3/4）砂質
8　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量混入
9　褐　色（10Y R4/6）粘土少量混入
10　暗褐色（10Y R3/4）



S K043

1　暗褐色（10Y R3/3）砂質　炭化物少量混入
2　褐　色（10Y R4/6）砂質　炭化物少量混入



S K046

1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量混入
2　暗褐色（10Y R3/3）炭化物少量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量混入
4　暗褐色（10Y R3/4）細砂質

0　1 m

第28図　S K041～S K046土壙実測図

土壙プランのわかりにくい遺構であった。102㎝×56㎝の楕円形で、深さは18㎝を測る。長軸方位はＮ79°Ｗで、土壙上面の西端に細長い石が「こ」の字状に置かれていた。底面は平坦で10個余りの石があるがこれらは地山の礫である。壁はやや急角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ044（第28図）

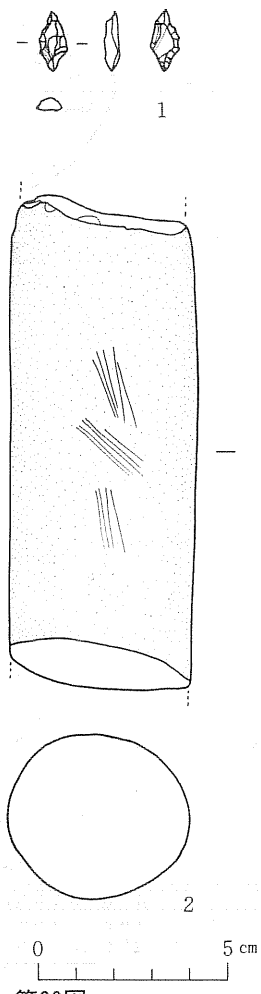
ＭＣ66グリッドの中央部に位置し、地山面でプランを確認した。上面の南西端に石２個を配している。60㎝×49㎝の楕円形を呈し、深さは23㎝を測る。底面は円形で壁は丸く、椀状を呈している。底部から赤色顔料が少量検出された。土器片少量が出土している。

ＳＫ045（第28図）

ＳＫ044の西隣にあり、地山面で確認した。73㎝×65㎝の略円形で深さは最深部で18㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが、南側に径20㎝、深さ５～６㎝の凹みがある。壁はやや急角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ046（第28図）

ＭＣ67・68グリッドにまたがっており、地山面で確認されたが、ＳＫ043同様範囲のわかりにくい遺構であった。96㎝×84㎝の楕円形で深さ28㎝とやや深く、底面形も53㎝×46㎝の楕円形である。底面は平坦で西端に石が置かれている。壁はやや傾斜しながらもまっすぐに立ち上がっている。長軸方位はＮ65°Ｅで遺物は出土しなかった。



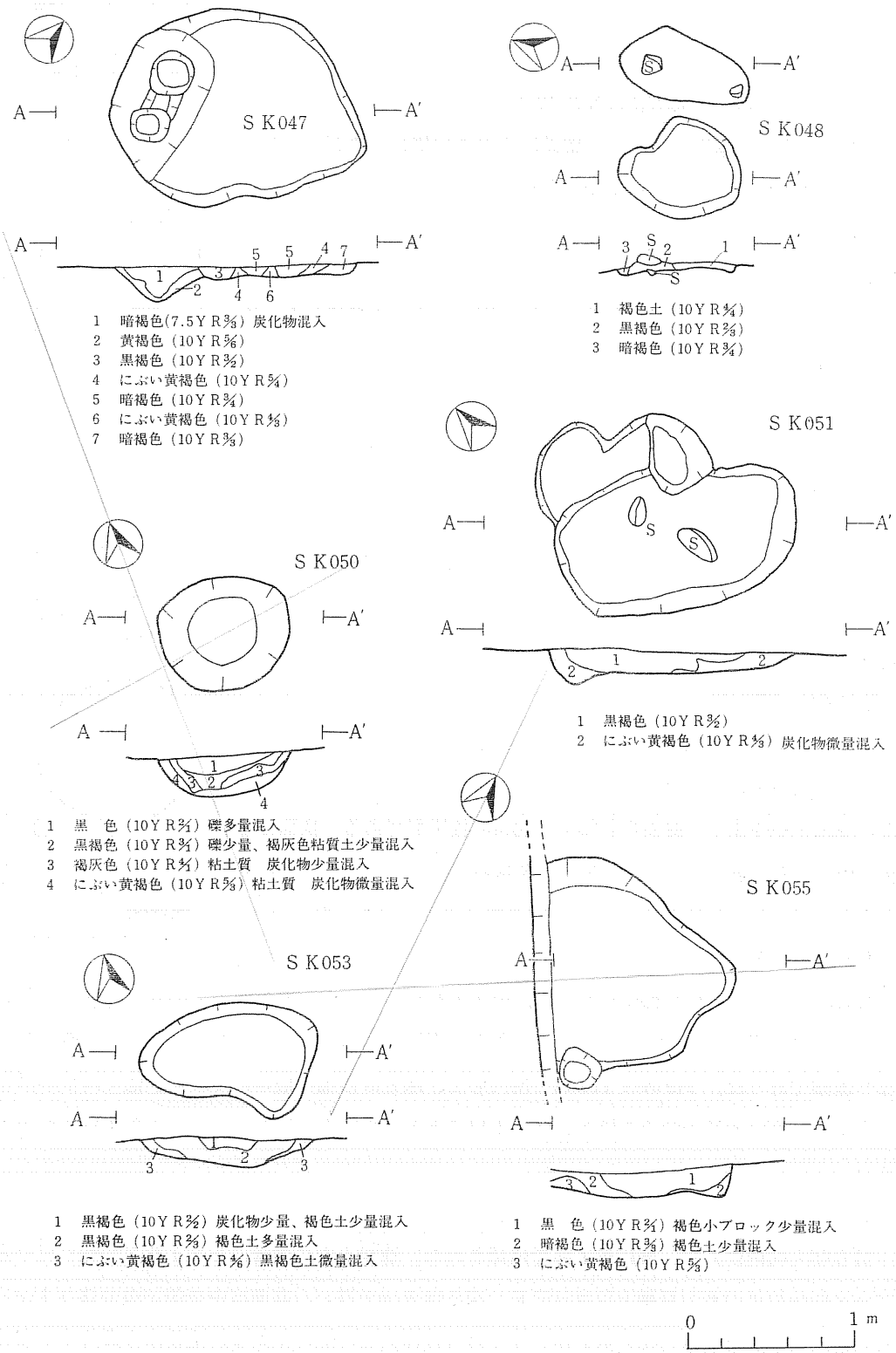
第29図
ＳＫ041出土遺物

ＳＫ047（第30図）

ＭＢ65グリッドの中央部に位置する。旧水田畦畔のしみが土壙東側の大部分を覆っていたことと、土壙上面の配石が３個と少なく、さらに東側には石がなかったために、プラン確認がかなり困難であった。149㎝×113㎝の楕円形で、深さは西端の最深部で33㎝、他では13㎝ほどである。底面は西端の凹みを除き、ほぼ平坦である。長軸方位はＮ62°Ｅ、若干の土器片が出土した。

ＳＫ048（第30図）

ＭＢ65・66内にあり、第Ⅲ層下部で確認された。遺構上面の両端に石を１個ずつ配している。75㎝×62㎝の楕円形で長軸方位はＮ5°Ｅ、深さは８㎝と浅い。底面は中央部が幾分盛り上がった状態である。壁はほとんど無いが、やや外方に傾斜して立ち上がる。遺物は土器片が少量出土しただけである。

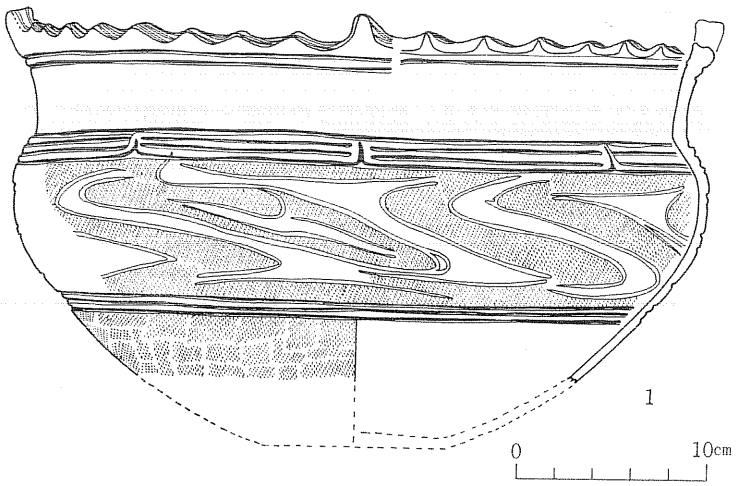


第30図 S K047・048・050・051・053・055土壙実測図

ＳＫ 050

（第30図・第12図版）

ＭＡ47グリッドの中央部にあり、地山面で確認された。配石はなく、78cm×70cmの略円形で深さは北西部が最も深く26cmを測る。底面形も径42cmの円形を示し、壁はなだらかに立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

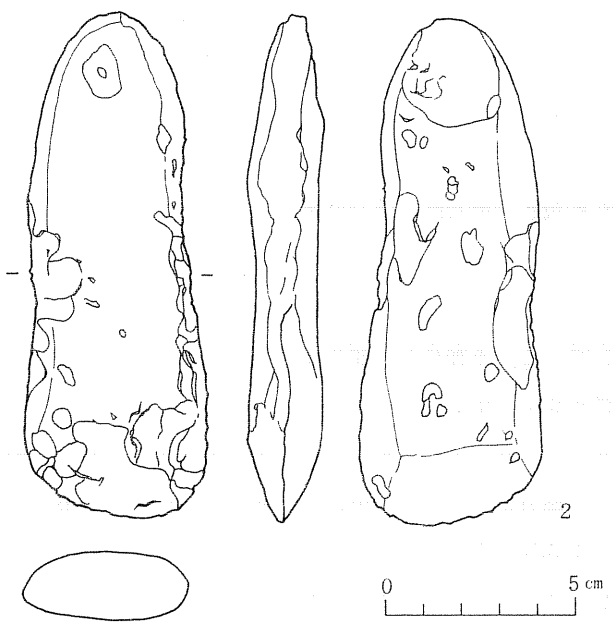


ＳＫ 051

（第30図・第13・68図版）

ＭＡ47グリッド北部にあり、地山面でプラン確認された。152 cm×85cmの楕円形で、長軸方位はN45°Wである。この土壙の北～北東部にかけて、深さ25cmほどのピットと、深さ８cmほどの掘り込みが見られるが、本遺構とは無関係であろう。

最深部までの深さは20cmであるが、底面にはかなりの起伏があり、30cm×13cm、18cm×９cmの２個の石が中央部に置かれている。壁の状態は一様ではなく、箇所により形状、傾きが異なる。遺構内より土器と磨製石斧が１点出土している。土器は大形の浅鉢で約½のみであるが、推定口径38cm、底径10cm、器高23cm、大洞C_2式であると考えられる。



第31図　ＳＫ 051 出土遺物

ＳＫ 053（第30図・第13図版）

ＭＡ48グリッド南部にあり、地山面で確認された。111 cm×60cmの楕円形で、深さは16cmを測る。底面は西から東に若干傾斜し、壁はなだらかに立ち上がっている。長軸方位はN80°Wである。土器片が少量出土した。

ＳＫ055（第30図）

ＭＣ47・48グリッドにあり、地山面で確認された。西側は調査範囲外に入り込んでおり、全体の大きさは不明である。最深部は中央部～北東部にかけてであるが、他の部分では７cmと浅い。底面は起伏に富み、壁の北西部は緩やかであるが他はやや急である。土器片が少量出土した。

ＳＫ057（第32図・第13図版）

ＭＡ48・49、ＭＢ48・49の４グリッドにまたがり、地山面で確認された。103cm×86cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ85°Ｗである。底面は平坦で14cmの深さであるが、西側がピット状になっており32cmの深さである。壁はこの部分で急角度となっているが、他の部分では幾分緩やかとなる。大洞C_1式かC_2式と思われる土器片が出土した。

ＳＫ058（第32図・第14図版）

ＭＢ49・50、ＭＣ49・50の４グリッドにまたがり、ＳＫ059を切って構築されている。138cm×126cmとほぼ円形で、深さは10cmである。底面は多少の起伏はあるが平坦に近く、北側に大小各１個の石がある。壁は全体的に緩やかに立ち上がっている。大洞C_1式の土器片が少量出土した。

ＳＫ059（第32図・第14図版）

ＳＫ058の東側にあり、地山面で検出された。西端がわずかにＳＫ058に切られている。径110cmほどの円形で、深さは17cmと浅い。底面はやや丸みがあり、壁は緩やかな立ち上がりを示している。土器片が少量出土した。

ＳＫ061（第32図）

ＭＡ50グリッド南西部にあり、地山面で確認された。84cm×58cmの楕円形で深さは15cmを測る。長軸方位はＮ48°Ｗ。壁は北東側ではやや急であるが、他は緩やかに立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

ＳＫ062（第32図・第14図版）

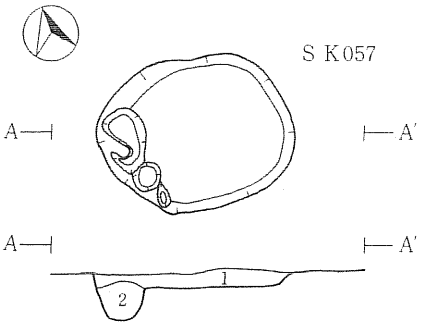
ＬＪ49グリッドの中央付近に位置し、地山面で確認された。86cm×75cmの略円形で、最深部での深さは27cmを測るが、南側は17cmと浅くなる。底面は起伏があり、壁は南側がやや急角度となっている他は緩やかな立ち上がりを示している。少量の土器片が出土した。

ＳＫ063（第32図・第14図版）

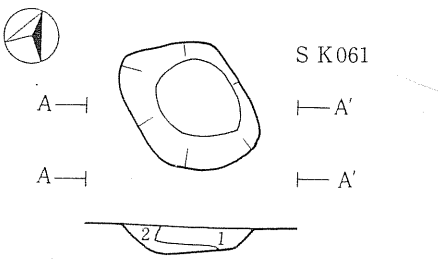
ＳＸ001底面精査時に確認された。97cm×78cmの円形に近い楕円形で、深さは35cm、長軸方位はＮ86°Ｅである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直である。土器片が少量出土した。

ＳＫ065（第32図）

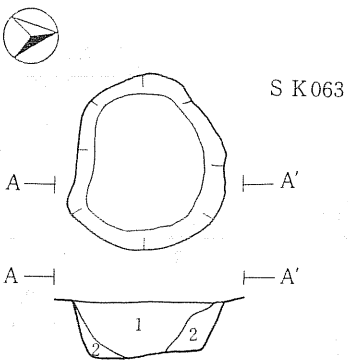
ＭＣ50グリッド中央部にあり、地山面で確認された。74cm×68cmの略円形で、深さは11cmを



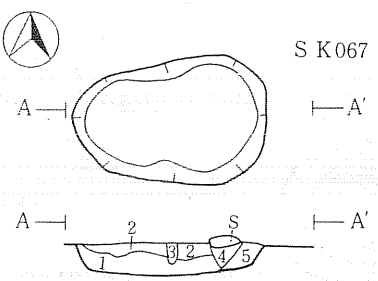
1　黒　色（10Y R3/1）炭化物少量、褐色土少量混入
2　黒　色(7.5Y R3/1）褐色土少量混入



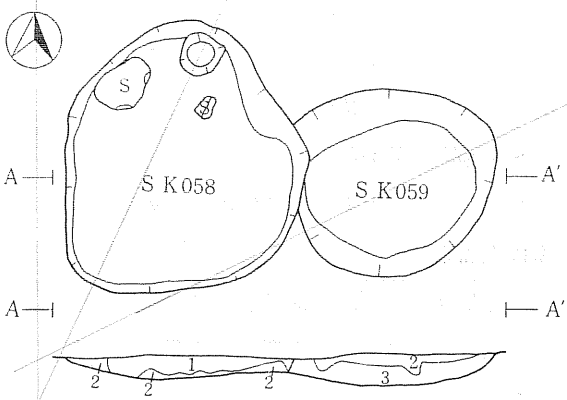
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量、礫少量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R4/3）炭化物少量、礫少量混入



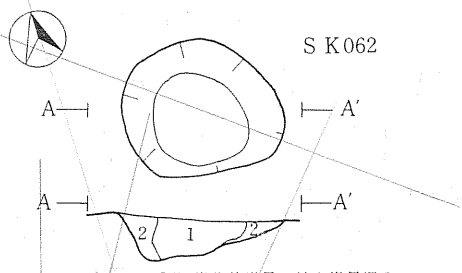
1　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量混入
2　褐　色（10Y R4/6）砂少量混入



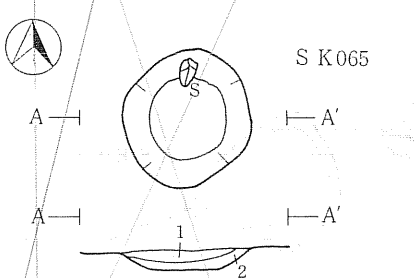
1　褐　色(7.5Y R4/4）
2　褐　色（10Y R4/4）
3　暗褐色（10Y R3/3）
4　褐　色（10Y R4/4）炭化物少量混入
5　暗褐色（10Y R3/3）



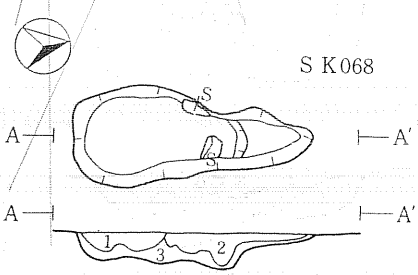
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R5/3）炭化物微量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物微量混入



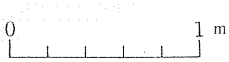
1　オリーブ黒色（5Y 3/1）炭化物微量、粘土微量混入
2　にぶい黄褐色（5Y R5/3）炭化物微量、粘土微量混入



1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物少量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量混入



1　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量混入
2　暗褐色（10Y R3/3）
3　褐　色（10Y R4/6）炭化物少量混入



第32図　S K057～059・061～063・065・067・068土壙実測図

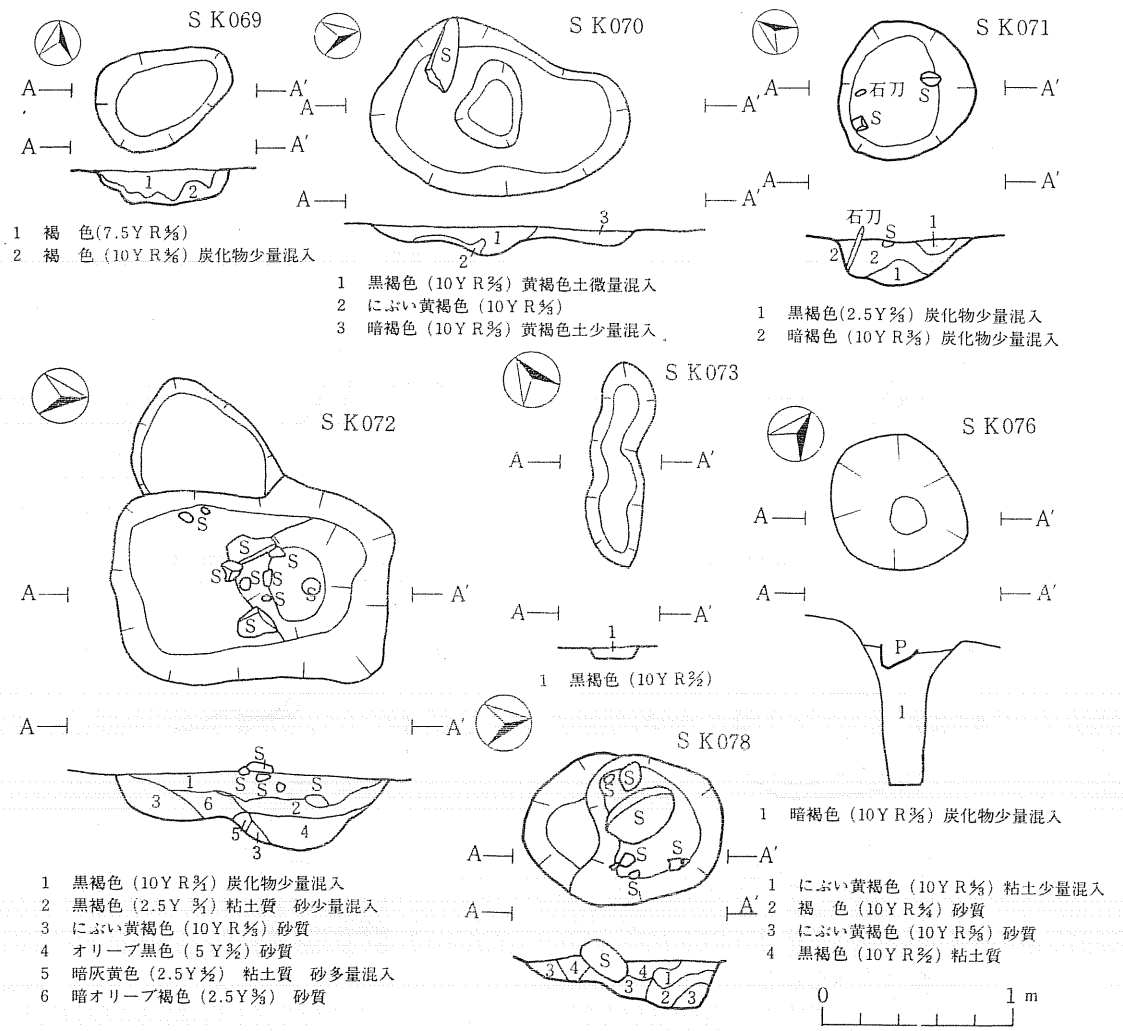
測るが南側では７cmと浅くなる。底面は平坦で北側に石が１個置かれている。壁は緩やかな立ち上がりを示し、遺物として土器片が少量出土した。

ＳＫ067（第32図）

ＭＣ64グリッド南東部に位置し、第Ⅲ層下部で配石が確認され地山面で土壙が検出された。遺構上面東側に大きめの石２個、西側に小さめの石１個を配している。土壙は91cm×48cmの楕円形で最深部で15cmの深さを測り、長軸方位はＮ62°Ｅである。底面は平坦で壁は幾分急な立ち上がりを示している。土器片が少量出土した。

ＳＫ068（第32図）

ＭＢ63・64グリッドにまたがり、地山面で検出された。旧水田畦畔のしみによって一部が変色しており土壙プランは必ずしも明確ではないが、131 cm×54cmで北側が細くなる楕円形で、



第33図　ＳＫ069～073・076・078土壙実測図

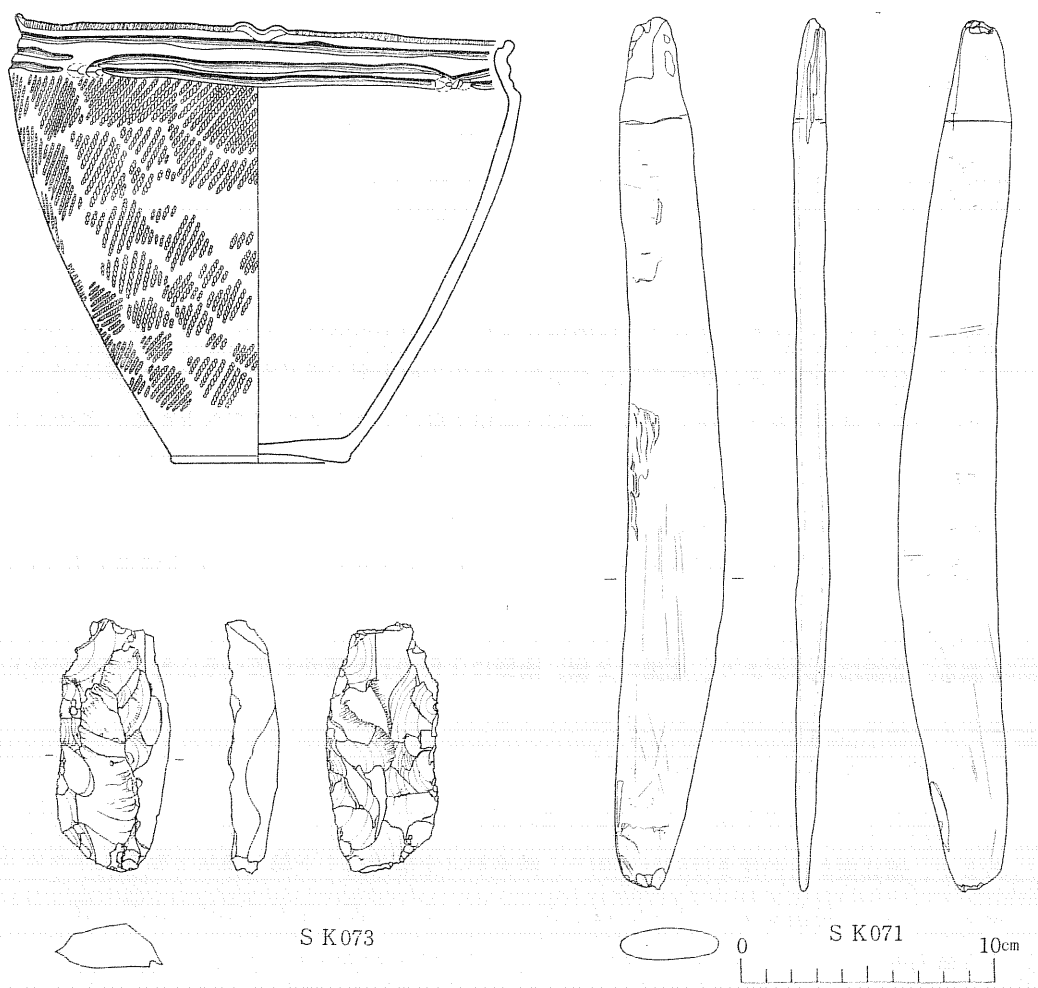
長軸方位はＮ20°Ｗ、深さは17cmを測る。底面には凹凸があり、壁は北側が浅いためなだらかであるが、南側ではやや急に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ069（第33図）

ＭＢ64グリッドにあり、旧水田畦畔のしみによって確認が困難であった。75cm×50cmの楕円形で、深さは最深部で20cmを測る。長軸方位はＮ70°Ｅである。底面は平坦で、壁は西側の立ち上がりが緩やかとなっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ070（第33図）

ＭＡ51グリッド北部の第Ⅳ層下部で確認された。149cm×96cmの楕円形で、深さは中央部の凹みで確認面から20cm、他は８cm、長軸方位はＮ５°Ｅである。底面は平坦で南西側に40cm×14cmの石が置かれている。壁は非常に緩やかな立ち上がりである。少量の土器片が出土した。



第34図　ＳＫ071・ＳＫ073・ＳＫ076出土遺物

ＳＫ071（第33図・第15図版）

ＫＨ60グリッドにある。第Ⅳ層掘り下げ中に石刀（第34図）の頭部を発見したが、直立しており全く動かなかったので、土壙に直立させて埋設したものと考えて周辺を精査した。Ⅳ層から地山を掘りくぼめた土壙の底部に石刀の先端部を密着させて埋設したものであるが、埋設時に石刀の頭部が地表に出ていたか否かは明らかでない。土壙は74cm×70cmの略円形で、深さ23cm、底面はやや凹んでおり、壁は東南部がなだらかに立ち上がっている。

ＳＫ072（第33図）

ＭＣ68グリッドにその大部分があり地山面で確認されたが、西側が旧水田畦畔のしみによって変色しており確認には困難が伴った。遺構上面の中央部に石が2個置かれている。土壙は146cm×101cmの方形に近い楕円形を呈しており、長軸方位はＮ10°Ｅを測る。底面は南側では平坦で深さは10cmであるが、北側は40cmの深さで椀状に丸くなっている。壁は緩やかで、遺物は土器片が少量出土しただけである。

ＳＫ073（第33図・第3図版）

ＭＢ67グリッド南西部の地山面で確認された。他の土壙とは異なりかなり細長く、109cm×26cmのベルト状をなし、最深部でも10cmと浅い。長軸方位はＮ30°Ｅである。底面は平坦で壁は急角度に立ち上がっている。石器が1点出土した（第34図）。

ＳＫ074（第35図）

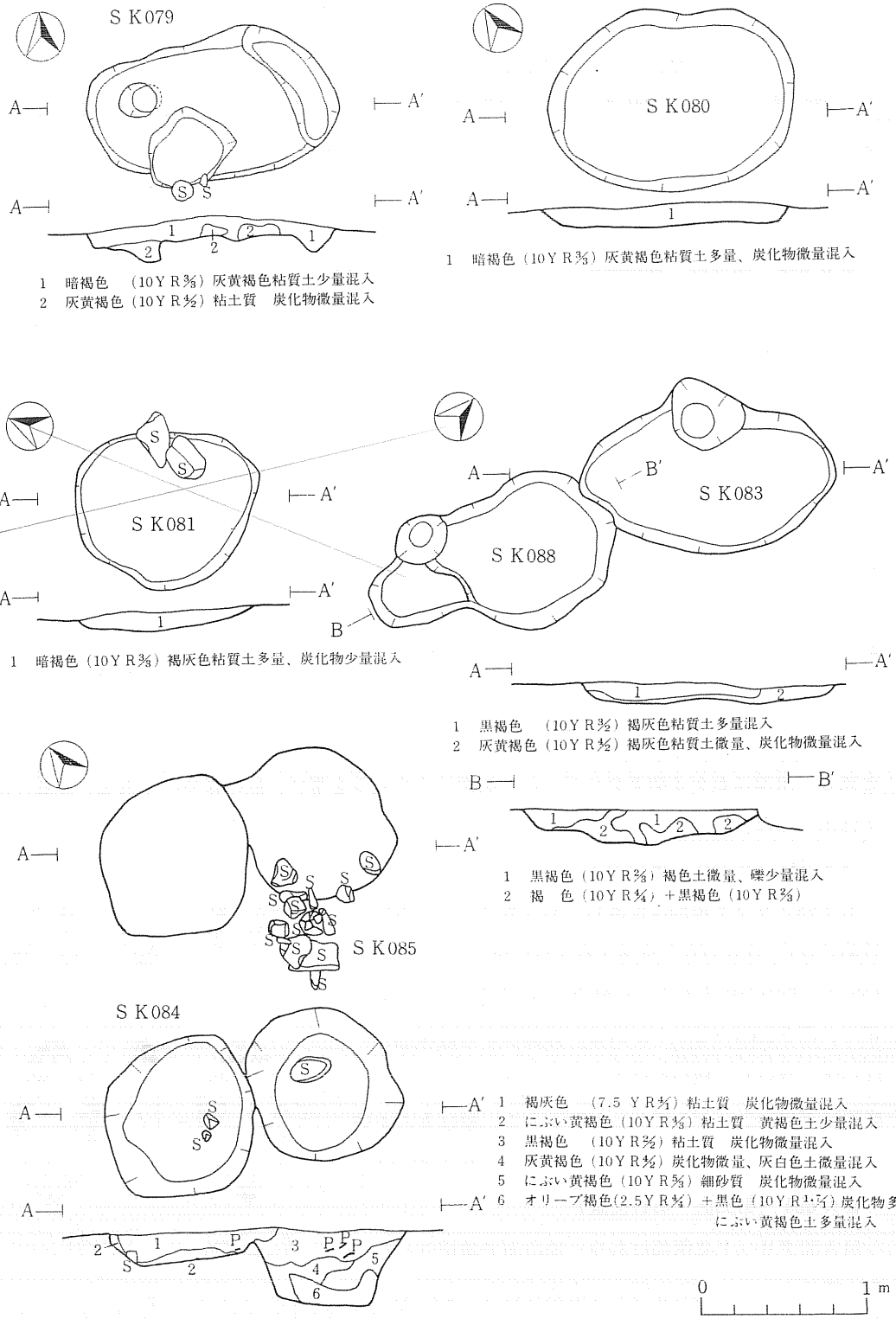
ＭＢ67グリッドの北側、ＳＫ030に隣接している。旧水田畦畔のしみのため土色が大部分変化していたが、遺構上面に数個の配石が出ていたので地山面で確認ができた。土壙は39cm×36cmの略円形を呈し、深さ12cmを測る。底部は平坦で壁はやや急角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ075（第24図・第3図版）

ＭＢ67グリッド北部の地山面で検出された。ＳＫ035と重複しているが、本遺構の方が古い。上面には南北に各1個の小さな石が見られる。61cm×57cmの略円形を呈しており、深さは13cmを測る。底面は丸みがあり、北側に2個、南側に1個の石が置かれている。壁は緩やかな立ち上がりを見せ、次第に消失する。土器片が少量出土した。

ＳＫ076（第33図・第15・68図版）

ＭＣ60グリッドのすぐ東側に位置し、地山上面で確認された。上面は77cm×70cmの略円形であるが、確認面からの深さは89cmを測り、断面形は上部が広く下部が筒状となる逆フラスコ形を呈している。壁面全体には地山の礫が露出している。上部に完形の深鉢形土器が置かれていた（第34図）。



第35図 S K079～081・083～085・088土壙実測図

ＳＫ078（第33図）

ＭＢ68グリッドの東側にあり、地山面で確認された。102㎝×79㎝の楕円形で、深さは29㎝と比較的深い。底面は南側では浅いが北側ではこれより15㎝深く、２段となっている。上面から埋土中にかけて、39㎝×26㎝の大きな石が置かれ、この周囲にも小さな石数個が見られる。壁の南側は緩やかであるが、北側は急角度で立ち上がっている。長軸方位はＮ11°Ｅ、遺物は出土しなかった。

ＳＫ079（第35図・第16図版）

ＭＢ52グリッドに位置し、第Ⅳ層中で確認された。154㎝×91㎝の楕円形で長軸方位はＮ８°Ｗで、底面西側には径20㎝で底面よりも15㎝深いピットがあり、また南側には53㎝×45㎝の大きさで底面より23㎝ほど深いピットが見られる。東側は幅10数㎝にわたり、５～７㎝ほど落ち込んでいる。

ＳＫ080（第35図・第16図版）

ＭＢ53グリッドにその大部分があり、第Ⅳ層中で確認された。149㎝×109㎝の比較的大きな楕円形を呈し、深さは12㎝を測る。長軸方位はＮ70°Ｗである。底面は北東部と南西部で少し浅めであるが全体的にほぼ平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ081（第35図・第16図版）

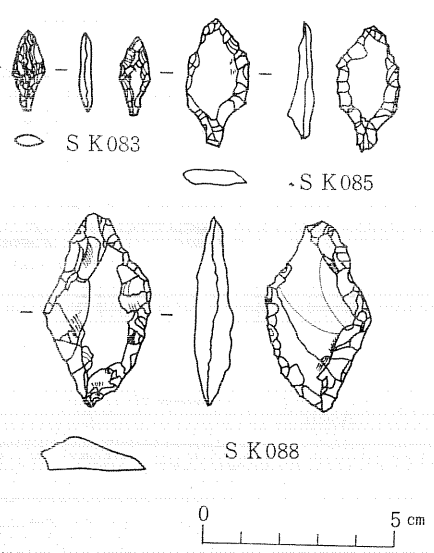
ＭＡ53グリッド北部にあり、第Ⅳ層中で検出された。108㎝×97㎝の略円形で、深さは12㎝を測る。東端に石が２個置かれている。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかである。土器片が少量出土した。

ＳＫ083（第35図・第18図版）

ＬＪ54グリッド南部に位置し、第Ⅳ層下部～地山面で確認された。ＳＫ088と重複するが本遺構の方が新しい。158㎝×99㎝の楕円形で、長軸方位はＮ32°Ｅ、西側に径40㎝、深さ24㎝のピットがある。確認面から最深部までは13㎝と浅いが、他の部分では４～11㎝とさらに浅い。底面は平坦に近いがわずかに起伏がある。壁は丸みを帯びている。土器片少量と石鏃１点が出土した（第36図）。

ＳＫ084（第35図・第17図版）

ＭＡ52グリッド北西部にあり、地山面で確認された。東に隣接するＳＫ085を切って構築されている。109㎝×95㎝の略円形で、確認面から最深部までの深さは20㎝



第36図　ＳＫ083・085・088出土遺物

を測るが、浅い所では８cmほどである。底面は南側ほど傾斜して低くなり、壁は緩やかである。大洞C_1式の土器片が少量出土している。

ＳＫ085（第35図・第17図版）

ＭＡ52グリッド内の地山面で確認された。ＳＫ084と重複しているが、本遺構の方が古い。96cm×85cmの略円形を呈し、最深部で43cmとやや深い。底面の北側に25cm×14cmの石を１個配している。壁は急角度で立ち上がる。大洞C_1式の土器片と石鏃１個が出土した（第36図）。

ＳＫ086（第37図・第17図版）

ＬＪ54・55グリッドにあり、地山面で確認した。口縁部は87cm×72cmで断面中間部が少しくびれるフラスコ状を呈し、底部径は87cm×81cmとなっている。深さは54cmを測り、底面は平坦で、底面から10～15cm上に小は28cm×18cm、大は38cm×35cmまでの石が６個見られる。その他径10cm前後の石も２個入っている。大洞C_1式の土器片が少量出土している。

ＳＫ087（第37図・第18図版）

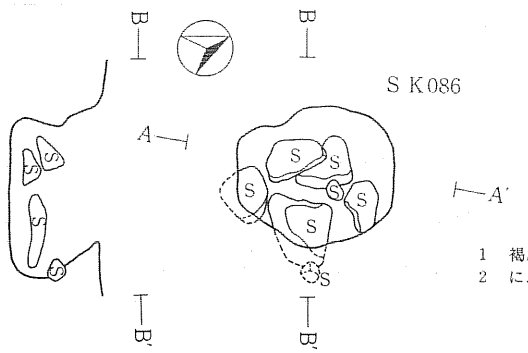
ＭＡ53・54、ＭＢ53・54の４グリッドにまたがり、地山面でプラン確認がなされた。215cm×202cmの円形に近い形をしている。底面は東側へ傾斜しており、確認面からの深さは東側で55cmある。他の浅い所でも30cm前後はあり全体的に深い。壁は急角度で立ち上がっている。多量の大洞C_1式土器片の他、石錐・凹石などの石器が出土した。この他埋土中部よりサメの歯で作製した装飾品が１点出土した。この装飾品について県立男鹿水族館竹内　健館長より鑑定いただいたところ〝ほほじろざめ〟Carcharodon carcharias (LINNÉ) の歯に最も近く、新世代第三紀の化石である可能性が高いとのことであった。先端部を欠損しているが推定52mmあり、中央部とその両側に３個の穿孔がある。青灰色で光沢があり、欠損部は石化していることがうかがわれる（第38図・第18図版）。

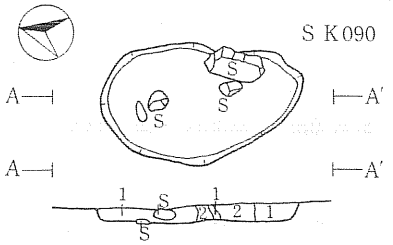
ＳＫ088（第35図）

ＬＪ53グリッド北西部に位置し、第Ⅳ層下部で検出された。ＳＫ083に切られている。155cm×91cmの不整楕円形を呈しており、長軸方位はＮ12°Ｅ、最深部で27cmの深さである。南西部に径30cm、深さ40cmほどのピットがあり、底面は起伏を有する。壁はなだらかである。大洞C_1式土器の破片が少量と石鏃１点が出土した（第36図）。

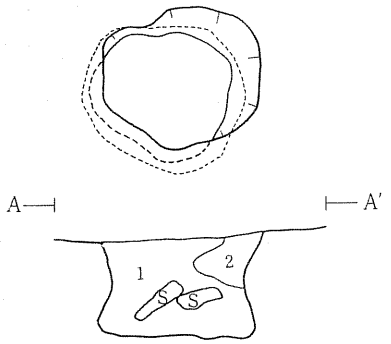
ＳＫ090（第37図・第18図版）

ＬＪ53・54両グリッドにまたがり、第Ⅳ層下部で確認された。108cm×74cmの楕円形を呈し、最深部でも12cm、他の部分では５～11cmの深さで非常に浅い。長軸方位はＮ18°Ｅで、遺構内には石が４個置かれている。底面はわずかに起伏があり、北側が少し低くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。土器片が少量出土した。

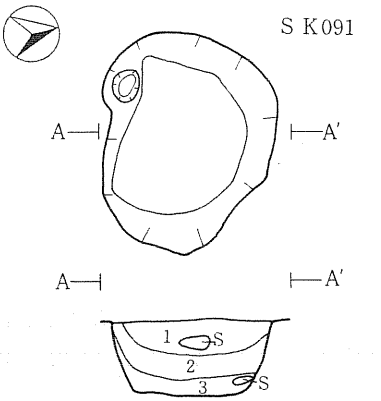




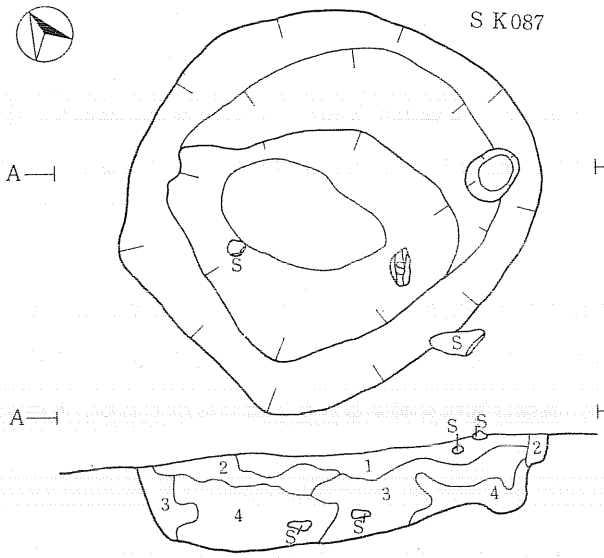
1　褐灰色（10YR4/1）＋黒褐色（10YR3/2）粘土質　炭化物微量混入
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）炭化物微量混入



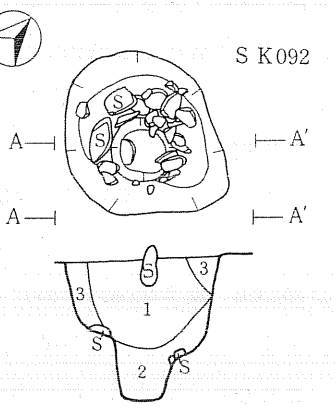
1　暗褐色（10YR3/3）炭化物微量、褐灰色粘質土少量混入
2　暗褐色（10YR3/4）炭化物微量、褐灰色粘質土少量混入



1　黒褐色（10YR2/3）炭化物少量混入
2　黒褐色（10YR2/3）炭化物少量、褐色土多量混入
3　褐　色（10YR4/6）炭化物微量、黒褐色土多量混入

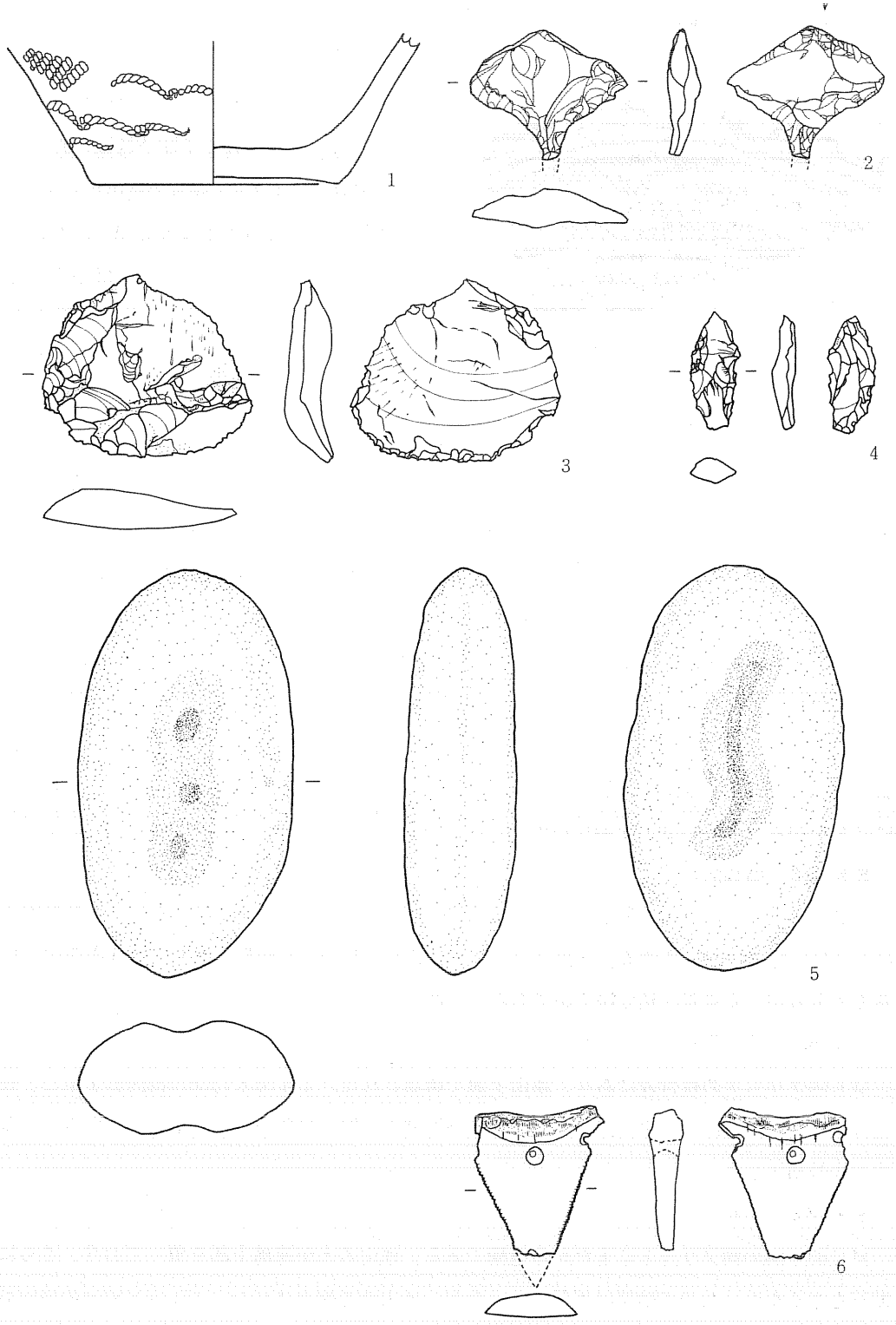


1　にぶい黄褐色（10YR4/3）炭化物少量、褐灰色粘質土少量混入
2　褐色（10YR4/6）＋にぶい黄褐色（10YR4/3）炭化物少量混入
3　暗褐色（10YR3/3）炭化物多量、にぶい黄褐色土少量混入
4　黒褐色（10YR2/2）炭化物多量、にぶい黄褐色土微量混入

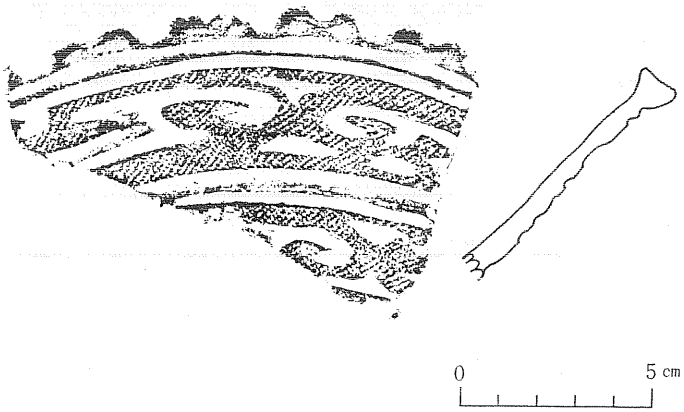


1　黒褐色（10YR2/2）炭化物多量混入
2　黒褐色（10YR3/1）炭化物少量、礫少量混入
3　黒褐色（10YR2/2）炭化物微量、褐色土多量混入

第37図　SK086・087・090～092土壙実測図



第38図　ＳＫ087出土遺物



第39図　ＳＫ091出土遺物

ＳＫ091（第37図）

ＭＢ61グリッド杭付近にあり、地山上面で確認された。117cm×86cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ66°Ｗ、深さ49cmを測る。底面はほぼ平坦で壁は下方で丸みを有しながらも急角度で立ち上がっている。大洞C_1式の土器片が出土している（第39図）。

ＳＫ092（第37図・第19図版）

ＭＤ59グリッド杭付近に位置し、地山上面で確認された。100cm×84cmの円形に近い楕円形を呈し長軸方位はＮ85°Ｗ、深さは最深部で77cmを測る。確認面に21cm×６cmの石１個が土壙中央部に立てた形で埋設されていた。土壙内底部付近に多量の石があり、底面にピット状の落ち込みがあり、段を形成してほぼ垂直に立ち上がっている。土器片が少量出土している。

ＳＫ093（第40図）

ＭＦ60グリッドの東部に位置し、地山上面で確認された。146cm×119cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ83°Ｗ、確認面からの深さは29cmを測る。底面は丸底で、壁は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。大洞C_1式の土器片が出土した。

ＳＫ094（第40図）

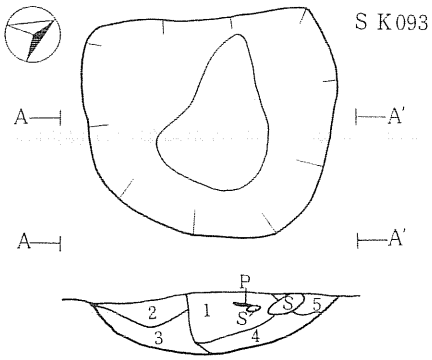
ＭＣ58グリッドの東部にあり、地山面で確認された。81cm×65cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ45°Ｅ、深さは19cmを測る。底面はほぼ平坦で25cm×15cmの石が見られる。壁は南西側で急角度であるが、北東側は幾分緩やかである。土器片が少量出土している。

ＳＫ095（第40図）

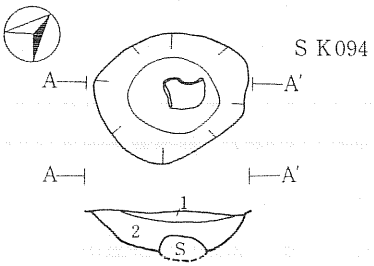
ＭＦ59グリッドの杭付近にあり、地山上面で確認された。104cm×72cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ24°Ｅ、深さは中央部で最も深く28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ096（第40図）

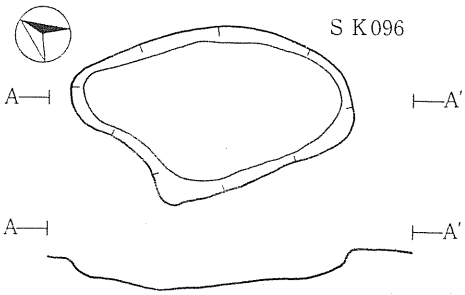
ＭＣ63・64の両グリッドにまたがる遺構である。地山の土が遺構上部を覆っており、さらに配石も全くなかったので確認は困難であったが、地山面で検出された。151cm×87cmの楕円形で長軸方位はＮ70°Ｗ、最深部で25cmの深さを測る。底面は平坦で石はなく、壁は低いが立ち上がりの角度はやや急である。土器片が少量出土した。

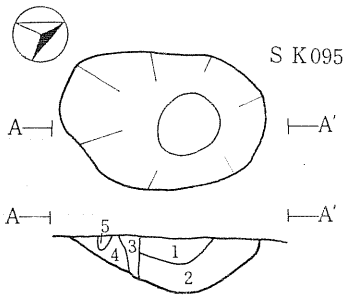


1　黒褐色（10Y R3/1）炭化物多量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）炭化物多量、褐色土多量混入
3　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量、褐色土多量混入
4　黒褐色（10Y R3/1）炭化物微量、褐色土多量混入
5　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量、褐色土多量混入

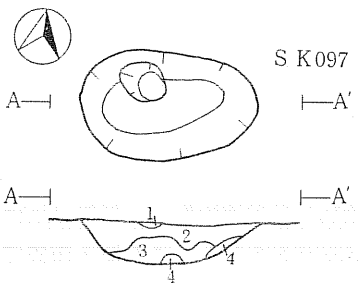


1　暗褐色（10Y R3/4）
2　黒褐色（10Y R3/2）

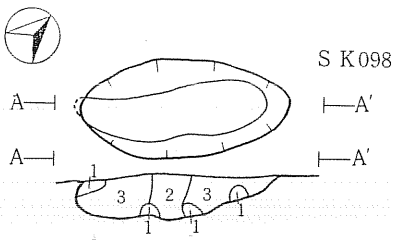




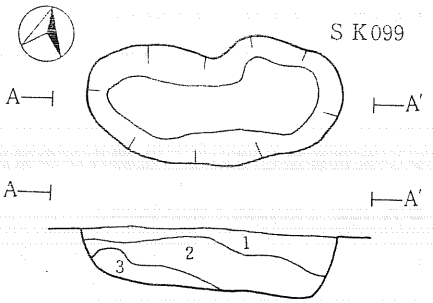
1　黒褐色（10Y R3/2）褐色土少量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）褐色土多量混入
3　褐　色（10Y R4/6）
4　暗褐色（10Y R3/3）
5　黒褐色（10Y R3/2）褐色土多量混入



1　褐　色（10Y R4/4）砂質　黒褐色土少量混入
2　黒褐色（10Y R3/1）暗褐色粒子多量混入
3　褐灰色（10Y R4/1）暗褐色粒子多量混入
4　褐　色（7.5Y R3/4）礫多量、小石多量混入



1　褐　色（10Y R3/4）砂質　黒褐色土微量混入
2　黒　色（10Y R3/1）暗褐色粒子少量、小石多量混入
3　暗褐色（10Y R3/3）砂質　小石多量混入



1　黒褐色（10Y R3/1）小石多量混入
2　灰黄褐色（10Y R3/2）小石少量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R3/3）砂多量混入

0　1 m

第40図　S K093～099土壙実測図

ＳＫ 097（第40図・第19図版）

ＬＣ・ＬＤ56の両グリッドにまたがり、地山面で確認された。97cm×58cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ88°Ｅ、最深部の深さは23cmを測る。底面はほぼ平坦で、その北西部には径20cm、土壙底からの深さが15cmほどのピットがある。壁は西側で急であるが、他は丸みをもって立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ 098（第40図・第19図版）

ＬＣ56グリッド中央部に位置し、地山面で確認された。113cm×53cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ45°Ｅを測る。深さは中央部～南西部では20cmを測るが、北東部ではしだいに浅くなる。底面は凹凸があり、壁は南西部で数cmであるが内側に入り込んでいる他は緩やかな立ち上がりである。土器片が少量出土した。

ＳＫ 099（第40図）

ＬＢ・ＬＣ56グリッドに大部分があり、地山面で確認された。135cm×67cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ75°Ｅを測る。底面は西から東へ傾斜しており、深さは西側で20cm、中央部で30cm、東側では35～37cmと深くなっているが、北東部では15cmである。壁はしっかりとしており、やや急角度で立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ 100（第42図・第19図版）

ＬＤ56グリッド東側に位置し、地山面で確認がなされた。211cm×89cmの大きさで、中間部がくびれる不整楕円形で、長軸方位はＮ20°Ｅを測る。中央部に掘り込みがあり、この部分の深さは36cmであるが、その北側と南側では10cm前後と浅くなっている。また、東側には径20cm、土壙確認面からの深さが40cmほどのピットが１個ある。全体的に底面は起伏に富み、壁は急角度で立ち上がっている。大洞C_1式の土器片が少量出土した。

ＳＫ 101（第42図・第19図版）

ＬＤ56グリッド中央部に位置し、地山面で確認された。84cm×67cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ2°Ｅ、最深部で26cmの深さである。底面は中央部が最も深く、周辺部がしだいに浅くなるレンズ状を呈している。土器片が少量出土した。

ＳＫ 102（第42図・第20図版）

ＬＤ56・57、ＬＥ56・57の４グリッドにまたがり、地山面で確認された。138cm×115cmの略円形を呈し、深さは最深部でも14cmと浅い。底面は全体にほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がっている。ＳＫ115を切って構築されている。土器片が少量出土した。

ＳＫ 104（第42図）

ＬＨ57南東隅に位置し、地山面で確認された。163cm×53cmで中間部が少し細くくびれる長楕円形で長軸方位はＮ85°Ｅを測る。中央部に35cm×16cm、確認面からの深さが41cmの小ピット

があるが、この東側では底面までの深さが29cm、西側では37cmを測る。壁は丸みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ 105（第42図・第20図版）

ＬＤ57グリッド東部にあり、地山面で確認された。110 cm×58cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ5°Ｅ、深さ31cmを測る。底面は平坦に近く、壁は北側が急傾斜であるが、南側はやや緩やかに立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

ＳＫ 106（第43図）

ＬＤ57・58両グリッドにまたがり、地山面で確認された。114 cm×63cmの楕円形で、長軸方位はＮ40°Ｎを測る。底面の北西部と南東部がそれぞれ46cm、36cmの深さでくぼんでいる。壁は急角度の立ち上がりを見せている。少量の土器片が出土した。

ＳＫ 107（第43図）

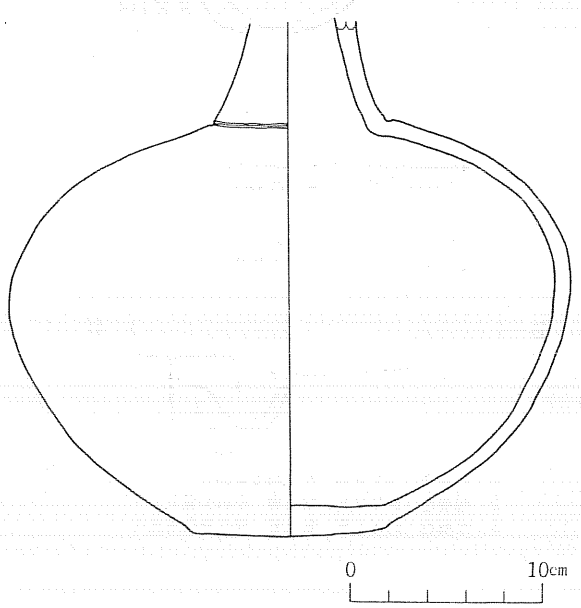
ＬＤ58グリッドに位置し、地山面で確認された。北側は未調査の59ラインに入り込んでおり全容は不明であるが、おおよそ120 cm×63cmの楕円形を呈するようである。長軸方位はＮ40°Ｅで、深さは40cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかである。

ＳＫ 109（第43図）

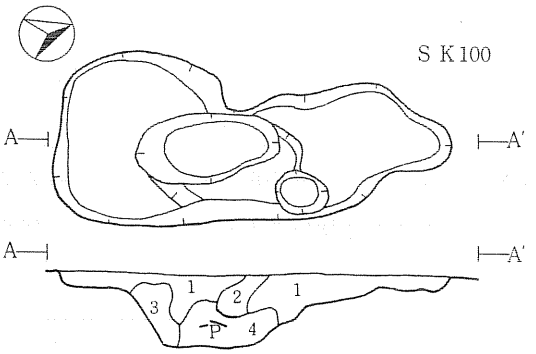
ＬＣ58グリッド南側に位置し、地山面で確認された。75cm×46cmの小さな楕円形を呈し、最深部でも17cmとやや浅い。底面は北西部から南西部にかけて幾分傾斜し、壁は急角度で立ち上がっている。長軸方位はＮ53°Ｗ、遺物はない。

ＳＫ 110（第43図・第20・68図版）

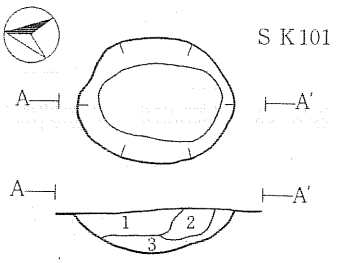
ＬＣ58グリッド南部にあり、地山面で確認された。径84cmほどの円形で、深さは37cmを測る。底面は丸く、全体が碗状で、壁は急角度で立ち上がっている。北西側に18cm×14cmの石と、ほぼ完形の壺形土器が置かれていた。この土器は口縁部を欠き、頸部と肩部の境界部に浅く細い沈線が一条入る他は無文で、全体がよく研磨されている。底径5.6 cm、胴部最大幅14.8cm、器高推定15cmを測る（第41図）。



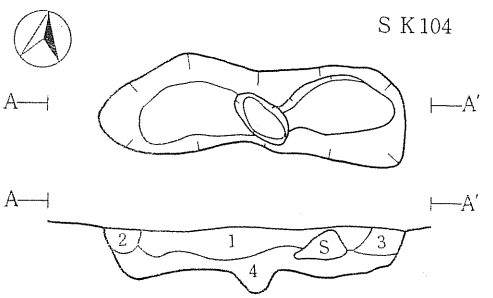
第41図　ＳＫ110出土遺物



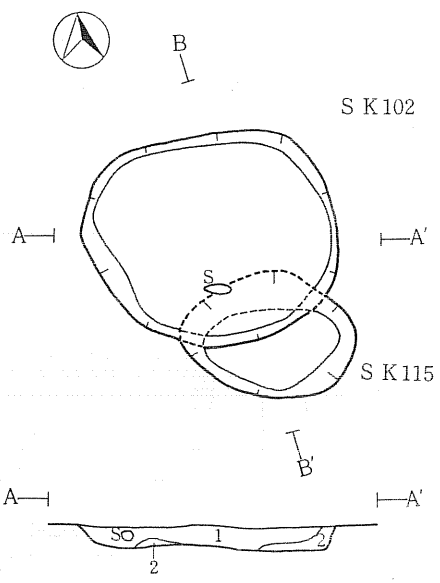
1　暗褐色　(10Y R3/3) 礫多量混入
2　にぶい黄褐色 (10Y R5/3) 砂質　礫多量混入
3　黒褐色　(10Y R3/1) 礫少量、灰黄褐色土少量混入
4　灰黄褐色 (10Y R5/2) 砂質　礫少量混入



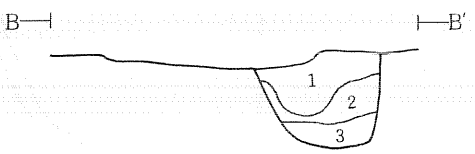
1　黒褐色 (10Y R3/1) 小石少量混入
2　暗褐色 (10Y R3/3) 礫少量混入
3　暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 砂質　粘土少量混入



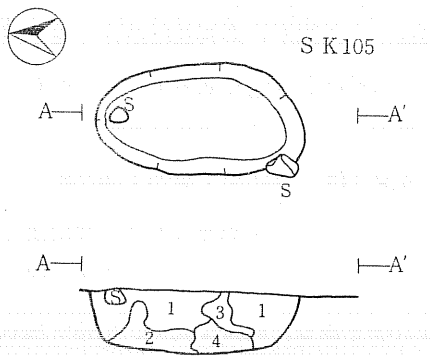
1　褐　色(7.5Y R4/4) 砂質
2　黒　色 (10Y R3/1) 砂質
3　黄褐色 (10Y R5/6) 礫少量混入
4　暗赤褐色 (5 Y R3/6)



1　暗褐色(7.5Y R3/4) 炭化物微量、小石少量混入
2　褐　色 (10Y R4/4) 小石少量混入



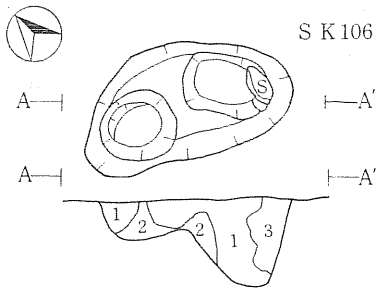
1　暗褐色(7.5Y R3/4) 炭化物少量混入
2　暗褐色 (10Y R3/4) 粘土質　小石少量混入
3　暗褐色 (10Y R3/3) 粘土質　炭化物微量混入



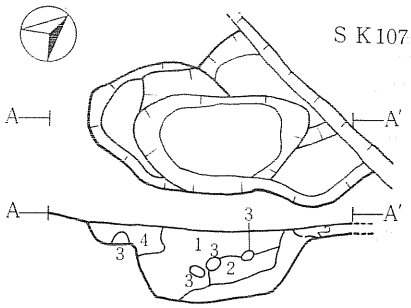
1　黒褐色 (10Y R3/2) 炭化物微量、褐色土微量混入
2　褐　色 (10Y R4/4) 砂質　黒褐色土少量混入
3　暗褐色 (10Y R3/4) 炭化物微量混入
4　灰黄褐色 (10Y R5/2) 黒褐色土微量混入

0　1 m

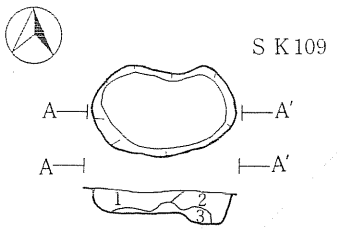
第42図　S K100～102・104・105・115土壙実測図



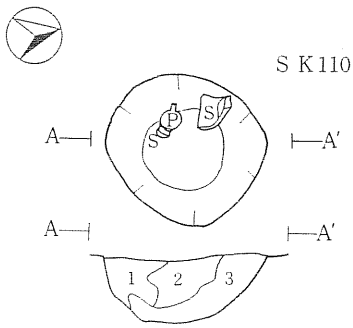
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量、褐色土多量混入
3　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量、褐色粒子少量混入



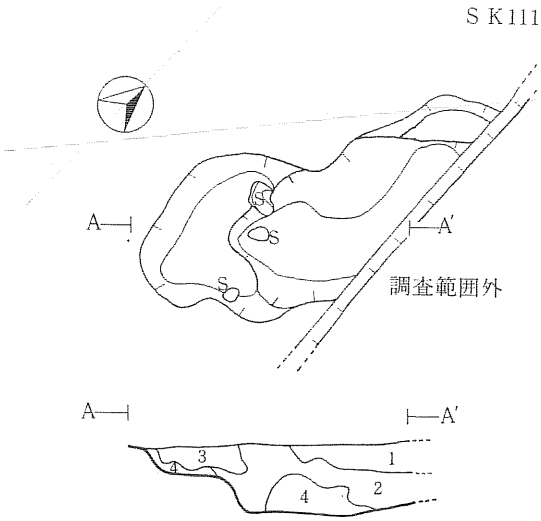
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
2　暗褐色（10Y R3/3）褐色土少量混入
3　褐　色（10Y R4/6）砂質
4　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量、灰黄褐色粘質土微量混入
5　にぶい黄褐色（10Y R4/3）炭化物微量、暗褐色土多量混入



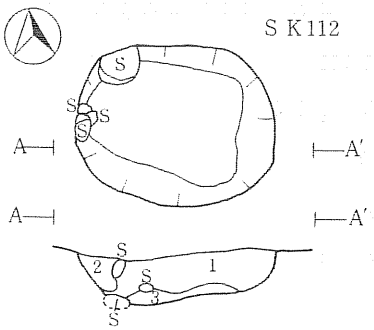
1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量、褐色土微量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）地山ブロック多量混入



1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量、砂少量混入
2　黒　色（10Y R3/1）炭化物微量、砂微量混入
3　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量、砂多量混入



1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量、褐色粒子少量混入
3　黒褐色（10Y R3/4）
4　暗褐色（10Y R3/4）砂多量混入



1　暗褐色(7.5Y R3/4）炭化物微量、礫少量混入
2　褐　色（10Y R4/4）砂質
3　褐　色(7.5Y R4/4）礫少量混入

0　1 m

第43図　S K106・107・109～112土壙実測図

ＳＫ111（第43図）

ＬＣ58グリッド東部にあり、地山面で確認された。未調査のＬＣラインの土層観察用ベルトの中に一部が入り込んでおり、全容は不明であるが北東～南西方位に長軸を有する不整楕円形を呈するもののようである。西側は浅く24cmほどであるが、東側は一段深く40cmの深さである。底面、壁ともに不整形である。土器片が少量出土した。

ＳＫ112（第43図・第21図版）

ＬＦ56グリッド南部にあり、地山面で確認された。106 cm×88cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ75°Ｎ、深さ29cmを測る。底部は方形に近く、底面は略平坦である。底面西側には径20cmほどの石が１個置かれている。壁の立ち上がりは全体にやや緩やかである。大洞Ａ式の土器片少量が出土した。

ＳＫ113（第44図）

ＬＧ57グリッド南東隅に位置し、地山面で確認された。94cm×79cmの不整楕円形で、長軸方位はＮ29°Ｗ、深さは最深部でも14cmと浅い。底面は略平坦で北西に径12cmほどの石を１個置いてある。壁は主として北側が幾分丸みを帯びた立ち上がりを示している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ114（第44図）

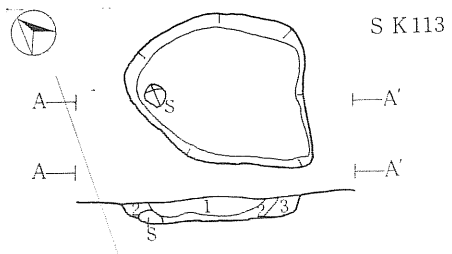
ＬＦ57グリッド北西部にあり、地山面で確認された。平面形は82cm×63cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ60°Ｅを測るが、断面中間部で幅が狭くなっており、最深部では73cmの深さとなる。中間部の西側には10cm×５cmほどの石が数個配されており、北側によ16cm×８cmの石が１個置かれる。壁は北西側では略垂直に立ち上がっているが、南東側では底部から中間部までは垂直に近く、それより上は丸みを有して立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

ＳＫ115（第44図・第20図版）

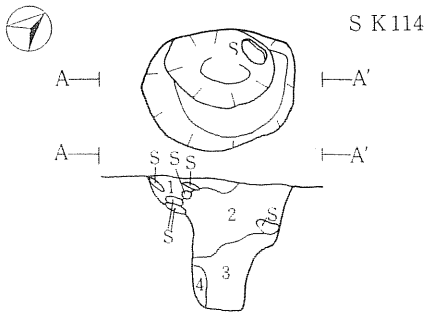
ＬＤ・ＬＥ56にまたがり、地山面で確認された。93cm×63cmの楕円形で長軸方位はＮ70°Ｗ、深さ50cmを測る。底部は中央部が幾分くぼみ、壁は北側がやや緩やかである他は略垂直に近い立ち上がりを示す。ＳＫ102によって切られている。大洞Ａ式の土器片が少量出土した。

ＳＫ116（第44図・第21図版）

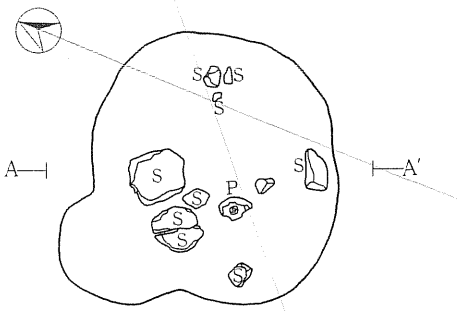
ＫＪ47・48、ＬＡ47・48の４グリッドにまたがり、地山面で検出された。上面に大小の石(５cm×４cm～29cm×25cm）を11個配している。このうち大きめの石は土壙確認面より８～13cmほど出ているが、土壙埋土中にも４～10cm埋没している。151cm×130 cmの略円形を呈し、最深部で56cmの深さを測る。底面から壁にかけて、全体が椀状に丸みを帯びている。土壙埋土中より大洞Ａ式土器と石鏃２、石匙１、凹石１が出土した。

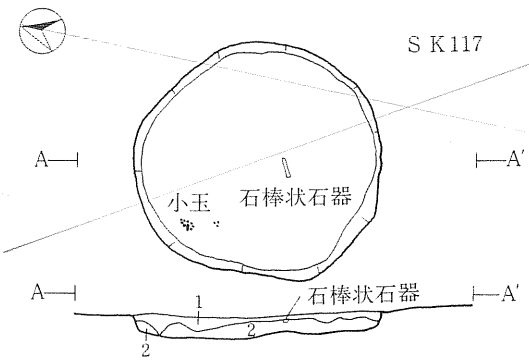


1　黒　色(7.5Y R 1.7/1)
2　褐　色(7.5Y R 4/3)　赤褐色土少量混入
3　黒褐色(7.5Y R 3/2)

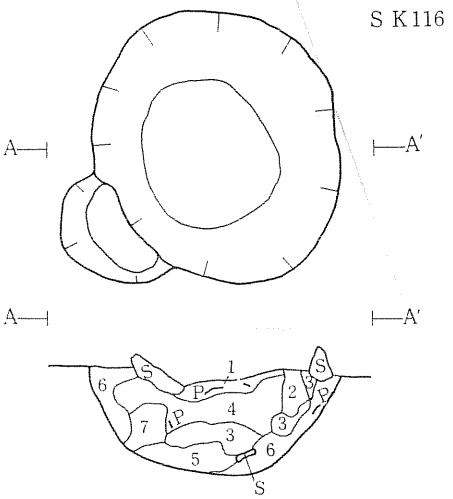


1　黒褐色（10Y R 3/2）黄褐色粒子少量混入
2　黒褐色（2.5 Y 3/2）粘土質
3　暗褐色（10Y R 3/3）粘土質　黄褐色粒子微量混入
4　褐　色（10Y R 4/4）砂質　黒褐色土微量混入

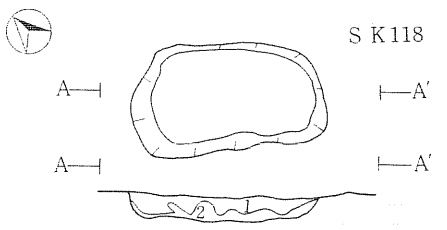




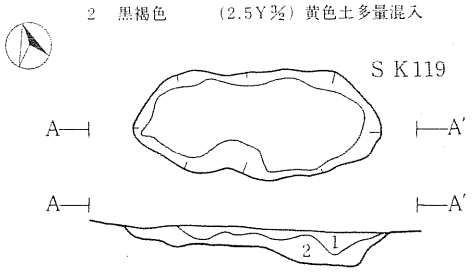
1　オリーブ黒色（5 Y 3/2）炭化物少量混入
2　オリーブ褐色(2.5Y 4/3）暗褐色土多量混入



1　黒褐色（10Y R 3/2）炭化物少量、褐灰色粘質土少量混入
2　黒褐色（10Y R 3/3）褐灰色粘質土多量混入
3　暗褐色（10Y R 3/4）炭化物微量、黄褐色粒子少量混入
4　黒褐色（10Y R 3/1）炭化物少量混入
5　黒褐色（10Y R 3/2）炭化物微量、褐灰色粘質土多量混入
6　黒褐色（10Y R 3/1）炭化物微量、黒色土微量混入
7　暗褐色（10Y R 3/3）炭化物少量混入



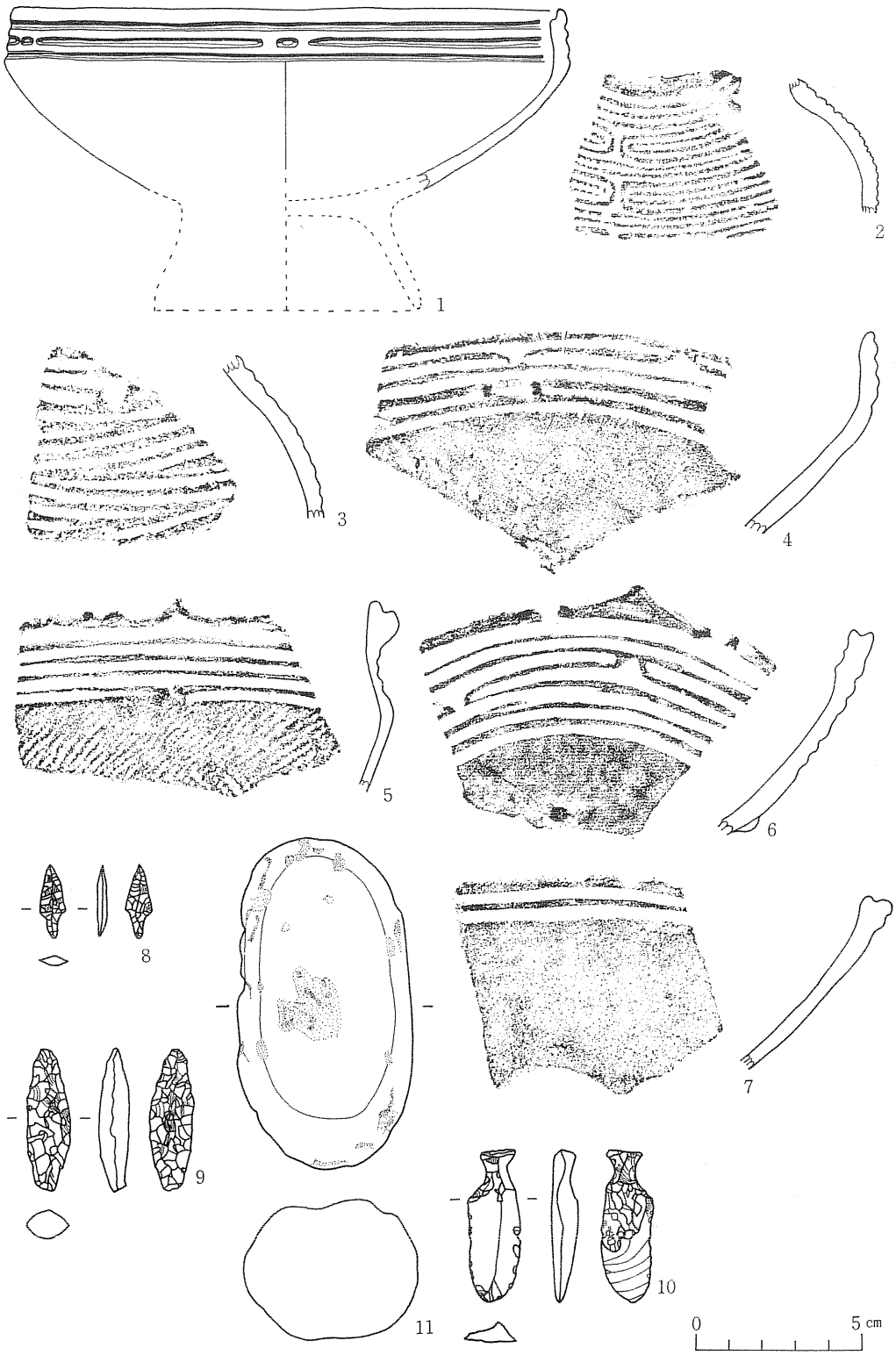
1　オリーブ黒色（5 Y 3/2）黄色土少量混入
2　黒褐色　　(2.5Y 3/2）黄色土多量混入



1　暗赤褐色　　（5 Y R 3/2）炭化物少量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R 4/3）炭化物少量、赤褐色粒子微量混入

0　1 m

第44図　S K113・114・116～119土壙実測図



第45図　ＳＫ116出土遺物

ＳＫ117（第44図・第22図版）

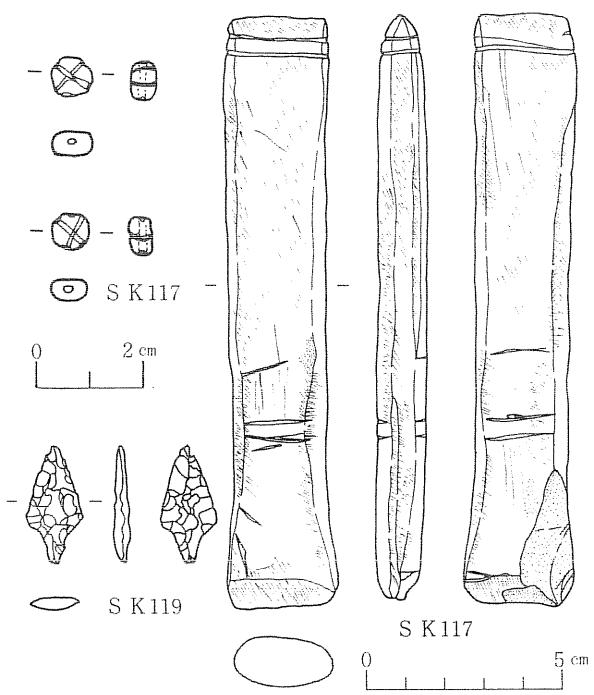
ＬＦ47グリッド北東に位置し、地山面で確認された。132㎝×121㎝のほぼ円形を呈し、深さは15㎝である。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。底部から小玉と石棒状石器が出土した。小玉は土壙北西部に11個と３個がそれぞれ一塊となっており、二組の連綴状態を示すものであろうか。すべて土製で、径７～８㎜、厚さ４～５㎜、たすきがけ状の浅い沈線が両面をめぐり、赤色塗彩されている。14個ともにほぼ同様である。石棒状石器は長さ15.3㎝、最大幅27㎜、厚さ12㎜を測り、折損した石刀をさらに研磨、加工したもので、図下端には折損部断面を残している。上方に２本、中央部に１本、その下方に２本の沈刻線が見られるが、全周を巡るものは１本のみである。両端は両面からの研磨により尖鋭化している（第46図）。

ＳＫ118（第44図）

ＬＨ47グリッド北西部に位置し、地山面で確認された。104㎝×58㎝の楕円形で長軸方位はＮ30°Ｗ、深さは最深部で15㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを有して立ち上がっているが、北東部は急角度となっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ119（第44図）

ＬＩ50・51両グリッドにまたがっており、地山面で確認された。130㎝×58㎝で楕円形を呈し、長軸方位はＮ70°Ｗである。南東隅が最も深く18㎝の深さであるが、北西部では浅くなり10㎝足らずとなる。底面はやや起伏があり、壁は底部付近は急角度で立ち上がるがしだいに緩やかとなる。土器片が少量と石鏃１点が出土している（第46図）。



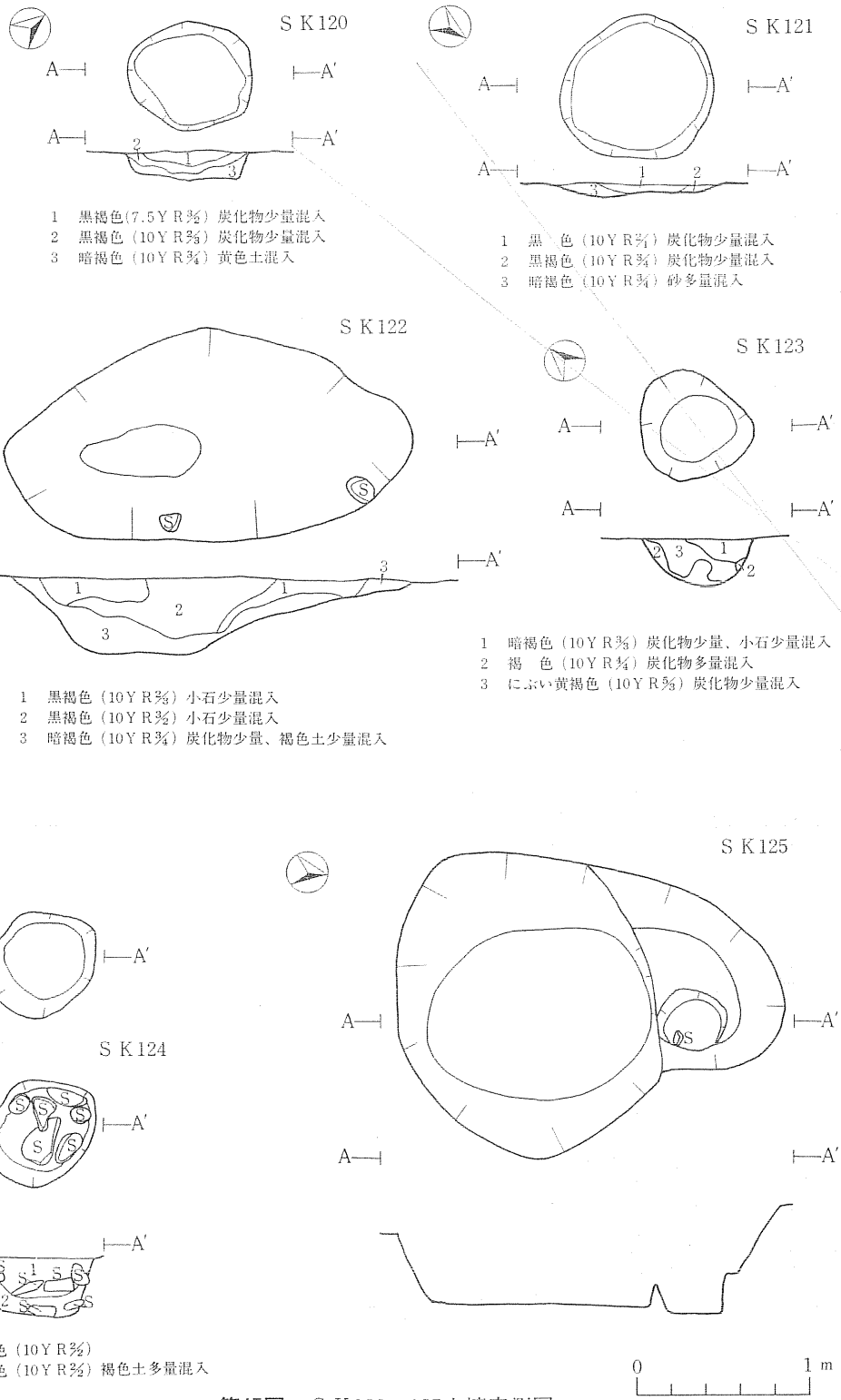
第46図　ＳＫ117・119出土遺物

ＳＫ120（第47図）

ＬＧ51グリッド南端に位置し、地山面で確認された。72㎝×64㎝の略円形で、最深部で19㎝の深さを測る。底面は平坦で、壁は急角度をなしている。少量の土器片が出土した。

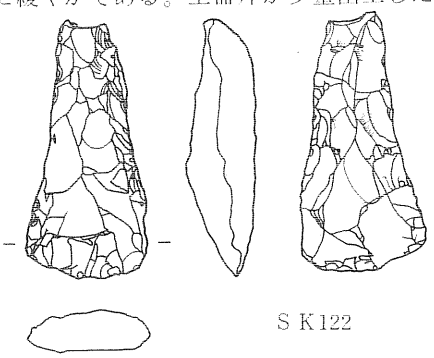
ＳＫ121（第47図）

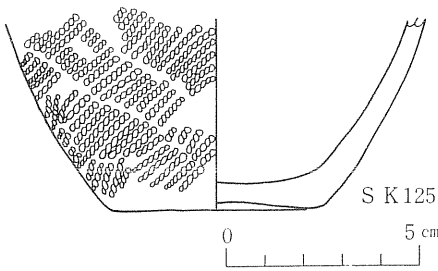
ＬＧ53グリッドにあり、地山面で確認された。径88㎝ほどの円形で、深さは中央付近の最深部でも９㎝、他の部



第47図　S K120～125土壙実測図

分では４～６cmと非常に浅い。底面は中央部がややくぼんでいるがおおよそ平坦で、壁は非常に緩やかである。土器片が少量出土した。





第48図　ＳＫ122・125出土遺物

ＳＫ 122（第47図・第22図版）

ＬＨ55にその大部分があり、地山面で確認された。236cm×126cmの楕円形で、長軸方位はＮ6°Ｗ、最深部で46cmの深さを測る。底面も長楕円形であるが主として南半分が深く、壁の傾斜も全体に緩やかである。北側は特に浅く、なだらかになっている。多量の大洞Ａ式の土器片と篦状石器が出土した（第48図）。

ＳＫ 123（第47図）

ＬＥ・ＬＦ47両グリッドにまたがり、地山面で確認された。68cm×62cmのほぼ円形を呈し、小型であるが深さは30cmを測る。底面に丸みがあり、中心部が最も深く、周辺部は５～７cm浅くなっている。壁は丸みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ 124（第47図）

ＬＥ51グリッド西端の地山面で確認された。69cm×59cmの略円形で深さは35cmを測る。遺構上面に配石は見られないが、覆土中間部、底部には配石がある。底面はほぼ平坦であるが若干北側に傾斜している。壁は南側が幾分緩やかであるが、北側は急である。土器片が少量出土した。

ＳＫ 125（第47図・第18図版）

ＫＩ61杭と62杭のライン上にあり、第Ⅳ層上面で確認された。224 cm× 176 cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はＮ15°Ｅ、確認面から最深部まで59cmを測る。北側に40cm×35cmのピットが１個あり、底面は全体に平坦であるが北側が少し高くなる。壁は直線的に外方へ傾斜している。北側ピット中から大洞Ａ式の土器片が出土している。第48図は縄文が施された底部である。

ＳＫ 126（第49図・第22図版）

ＬＤ47グリッド北東部に位置し、地山面で確認された。136 cm× 109 cmで南側が少々歪んだ楕円形で、長軸方位はＮ11°Ｅ。最深部でも19cmと比較的浅いが、東側と西側との一部では深さが10cm前後とさらに浅くなっている。底面は起伏があり、中心部から北側にかけて径10～15cmの石が４個配されている。壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が少量出土した。

ＳＫ127（第49図・第23図版）

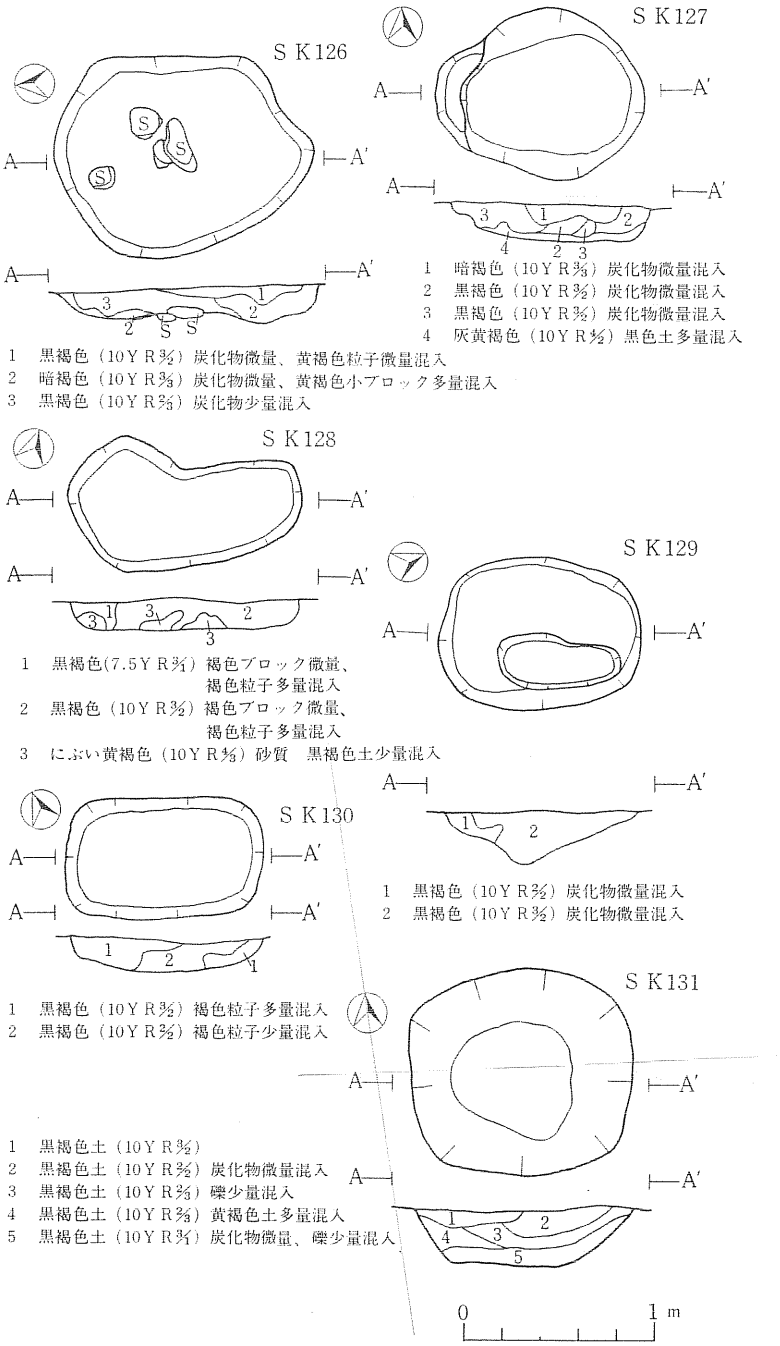
ＬＢ46グリッドの中央付近の地山面で確認された。110cm×92cmの円形に近い楕円形で、長軸方位はＮ80°Ｗ、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、北西隅が若干浅めになっており、西側は底面より10cmほど高い部分がある。壁は東、西側は急角度であるが、南北では緩やかに立ち上がっている。少量の土器片が出土した。

ＳＫ128（第49図・第23図版）

ＬＢ46グリッドの南側に位置し、地山面で確認された。122 cm×72cmの歪んだ楕円形を呈している。中心部分がわずかに低く、17cmの深さである。長軸方向はＮ85°Ｗ、壁は急角度をなしている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ129（第49図・第23図版）

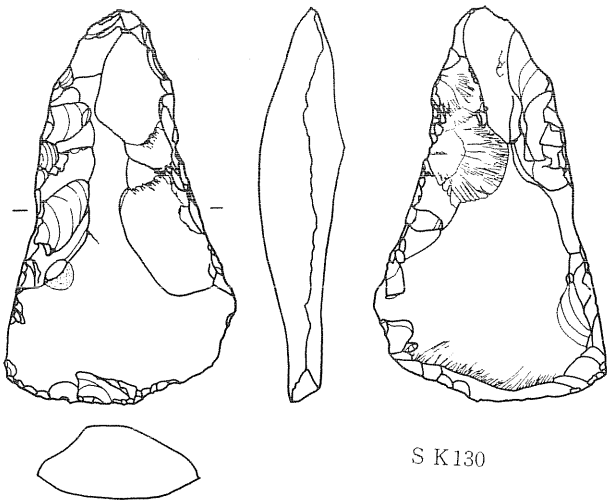
ＬＢ46グリッド南西部に位置し、地山面で確認された。106 cm×82cmの楕円形で、東側に40cm×30cmのピット状のくぼみがあり、この部分で23cmの深さを有する。長軸方位はＮ25°Ｅを測り、壁は緩やかである。大洞C_2式の土器片が少量出土している。

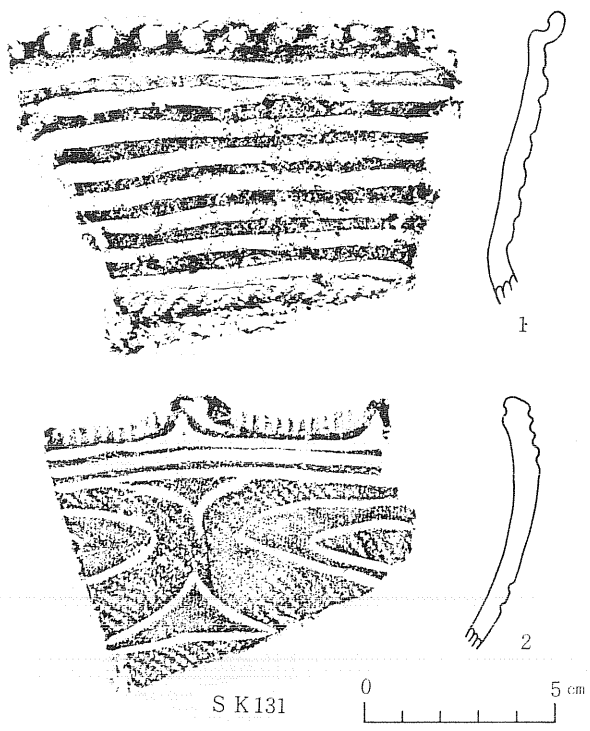


第49図　ＳＫ126～131土壙実測図

ＳＫ130（第49図・第23図版）

ＬＢ・ＬＣ46グリッドにあり、地山面で確認された。104 cm×64cmの隅丸長方形を呈しており、深さ21cm、長軸方位はＮ85°Ｅを測る。中心部付近が最深部で周辺部では５～８cmほど浅く





第50図　S K130・131出土遺物

なっている。壁は少し丸みを帯びて立ち上がっている。少量の土器片と打製石斧１点が出土した（第50図）。

S K 131（第49図・第23図版）

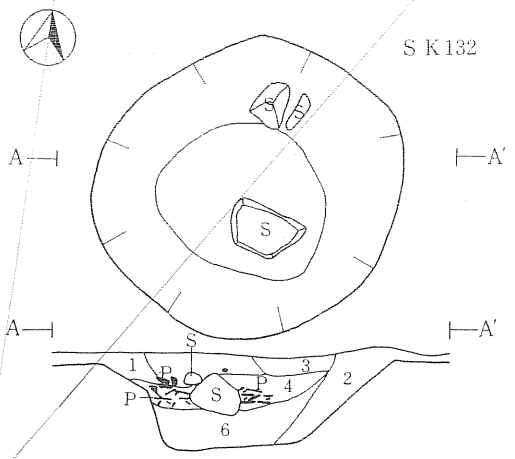
K J 46グリッド北東に位置し、確認は地山面で行われた。116cm×110cmのほぼ円形を呈し、最深部で35cmを測るが、西側でわずかに浅くなっている。壁はなだらかな立ち上がりを示している。大洞C_2式の土器片が出土している（第50図）。

S K 132（第51図・第24図版）

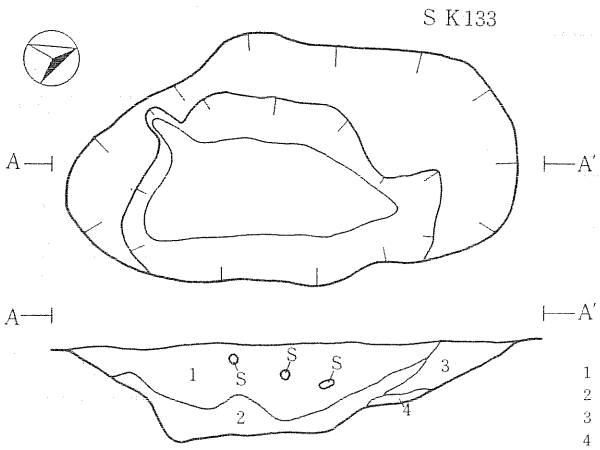
K J 46・47、L A 46・47の４グリッドにかかり、地山面で確認がなされた。径155cmほどの円形で、深さ53cmを測る。底面も円形で、南側が中心部よりも８cmほど浅くなっている。底部には36cm×24cmの大きな石が１個、北側にも２個の石が置かれている。埋土中央部の第Ⅳ層中にも石と大洞C_2式の土器片が多量に含まれている。この他トチの遺体が少量検出された。

S K 133（第51図・第24図版）

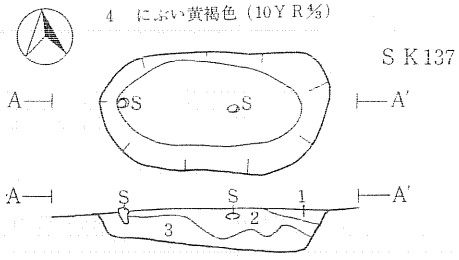
L E 44・45グリッドにあり、地山面で検出された。239cm×130cmの楕円形で、長軸方位はN14°E、深さ46cmを測る。底面は平坦であるが北側および西側がしだいに高くなり、壁は底面から20cmほどまでは丸みをおびているが、その上部では緩やかな立ち上がりとなる。大洞C_2・A式の土器片と折損した石刀先端部が出土している（第52図）。



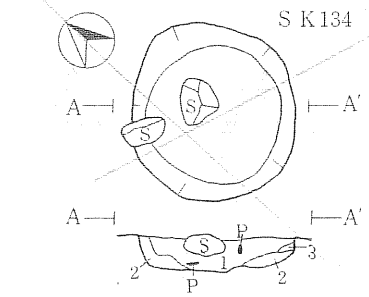
1　黒褐色（10Y R3/2）礫少量混入
2　黒褐色（10Y R3/3）炭化物微量、礫少量混入
3　黒褐色（10Y R3/1）炭化物少量混入
4　黒褐色（10Y R3/1）炭化物微量、礫多量、土器片多量
5　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量混入
6　黒褐色（10Y R3/3）炭化物微量混入



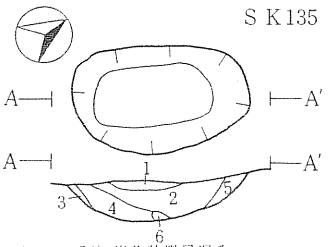
1　暗褐色(7.5Y R3/4）炭化物少量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
4　にぶい黄褐色（10Y R4/3）



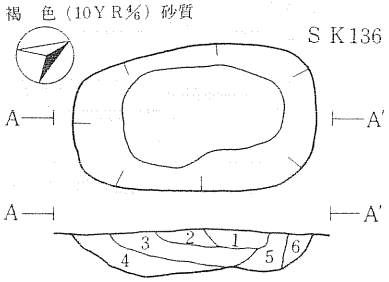
1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量混入
2　褐　色（10Y R4/4）炭化物多量、小石多量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/4）



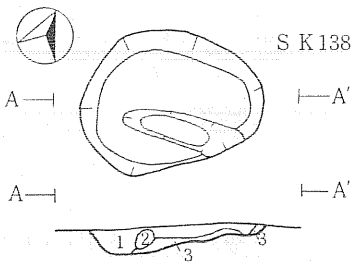
1　黒褐色（10Y R3/2）礫少量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）黄褐色土多量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/4）砂質　黒褐色土多量混入



1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
2　黒褐色（10Y R2/3）炭化物少量、褐色土少量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）褐色土多量混入
4　黒褐色（10Y R2/2）炭化物少量混入
5　黒褐色(7.5Y R2/3)
6　褐　色（10Y R4/6）砂質



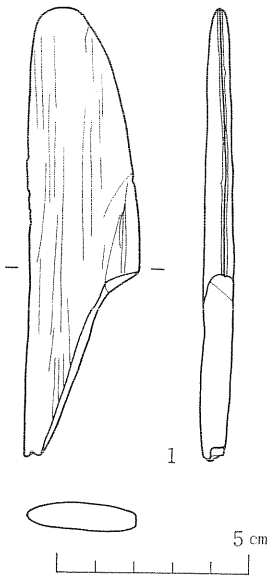
1　黄褐色（2.5 Y5/3）砂質　黒褐色土ブロック多量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
3　黒褐色（10Y R3/2）炭化物多量、礫少量混入
4　黒褐色（10Y R3/2）礫少量、黄褐色土多量混入
5　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量、褐色土多量混入
6　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入



1　暗褐色（10Y R3/4）炭化物少量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）
3　にぶい黄褐色（10Y R4/3）炭化物多量混入

0　1 m

第51図　S K132～138土壙実測図



第52図
ＳＫ133出土遺物

ＳＫ134（第51図・第23図版）

ＫＩ46グリッド南東隅にあり、地山面で確認された。98cm×86cmでほぼ円形を呈し、遺構上面に二個の石が配置されている。深さ19cmで底面も円形で平坦であるが中心部に凹凸が見られる。壁は丸みを帯びて立ち上がっている。土器片が少量と折損した石棒の一部が出土した。

ＳＫ135（第51図・第23図版）

ＫＪ46グリッドの南部にあり、地山面で確認された。95cm×56cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ40°Ｅ、深さ16cmを測る。底面は全体が丸みを帯び、壁はゆるやかである。大洞C_2式の土器片が少量出土した。

ＳＫ136（第51図・第24図版）

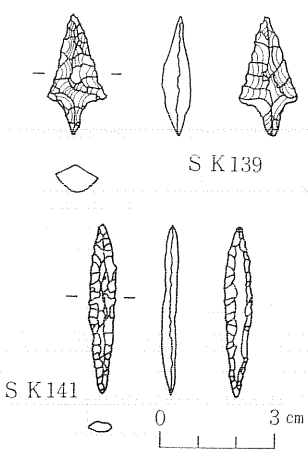
ＫＪ46グリッド西部に位置し、地山面で確認された。127cm×78cmの楕円形で、長軸方位はＮ26°Ｅ、深さ26cmを測る。底面は中央部がやや盛り上がり、壁は丸みを有して緩やかに立ち上がっている。大洞Ａ式の土器片が数点出土した。

ＳＫ137（第51図・第25図版）

ＬＤ44グリッド北西部にあり、地山面で検出した。121cm×63cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ89°Ｗ、最深部で21cmの深さを測る。底面は南西側がやや高くなっているがほぼ平坦で、壁は直線的に傾斜している。少量の土器片が出土した。

ＳＫ138（第51図・第25図版）

ＬＣ45グリッド中央部に位置し、地山面で確認された。96cm×73cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ65°Ｅ、深さ26cmを測る。底面は西側ほど低くなっており、東から中心付近に幅15cmの溝が走る。壁は西側では緩やかであるが、東側では急角度に立ち上がっている。土器片が少量出土している。



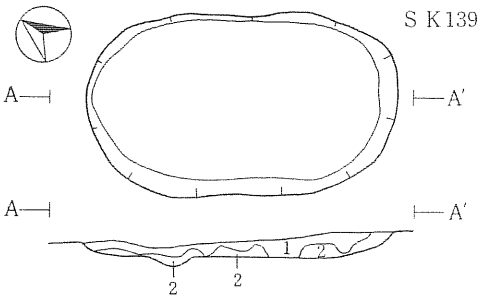
第53図
ＳＫ139・141出土遺物

ＳＫ139（第54図・第25図版）

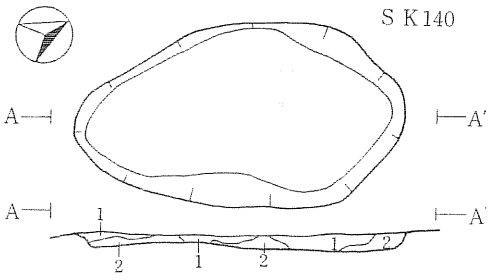
ＬＣ44・45グリッドにまたがり、地山面で確認された。165cm×96cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ30°Ｗ、深さ17cmを測る。底面は南東隅付近が若干高まっている他は、大よそ平坦である。壁は緩やかな立ち上がりを示している。大洞C_2式の土器片が少量と石鏃１点が出土している（第53図）。

ＳＫ140（第54図・第25図版）

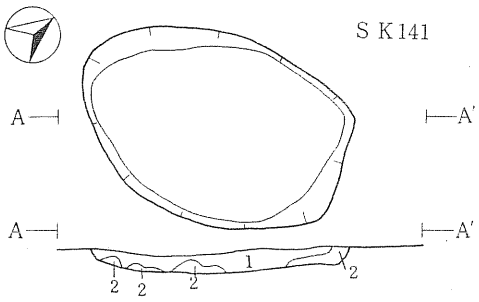
ＬＢ44・45両グリッドにまたがり、地山面で確認された。174cm×97cmの楕円形を呈し、最深部でも13cmと浅い。底面は全体的に平



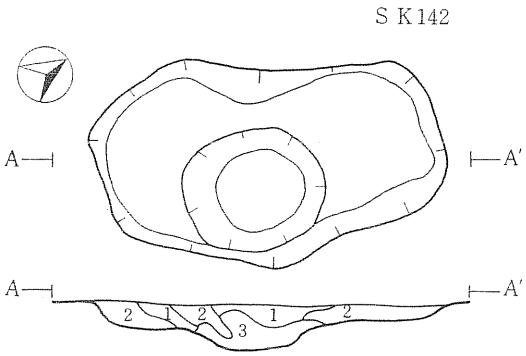
1　暗褐色（10Y R 3/4）
2　褐　色（10Y R 5/4）炭化物多量混入



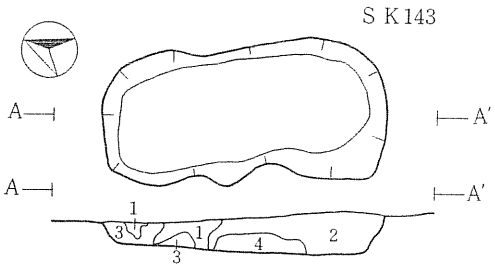
1　黒褐色（10Y R 3/2）炭化物微量混入
2　暗褐色（10Y R 3/3）炭化物微量、地山ブロック少量混入



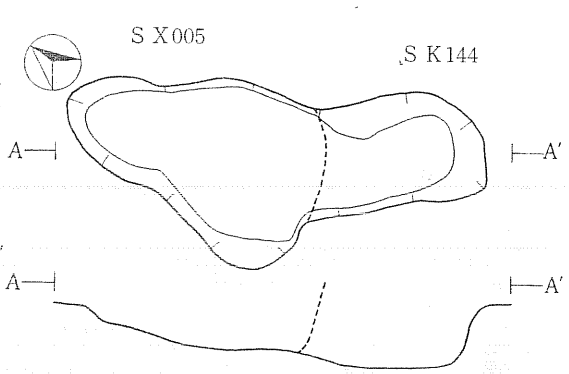
1　黒褐色　灰白色粒子少量混入
2　暗褐色　褐灰色粘質土少量混入

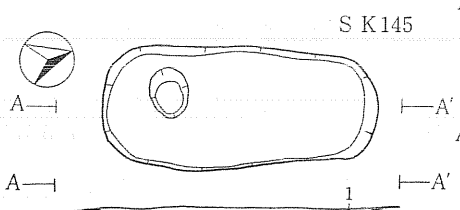


1　黒褐色（10Y R 3/2）灰黄褐色粘質土微量混入
2　暗褐色（10Y R 3/3）褐色ブロック微量混入
3　黒褐色（10Y R 3/2）褐色粒子少量混入



1　黒褐色(2.5Y 3/1)
2　黒褐色（10Y R 3/2）炭化物少量、褐色ブロック多量混入
3　黒褐色（2.5 Y 3/1）炭化物微量、褐色ブロック多量混入
4　黒褐色（10Y R 3/2）褐色粒子少量混入





1　暗褐色（10Y R 3/3）
2　黒褐色（10Y R 2/2）

第54図　S K139～145土壙・S X005実測図

坦で、壁は低いが外方に傾斜して立ち上がっている。長軸方位はＮ21°Ｅ、土器片が少量出土。

ＳＫ 141（第54図・第25図版）

ＬＢ・ＬＣ44グリッドにまたがり、地山面で確認された。146 cm×99cmの楕円形で、深さ16 cm、長軸方位Ｎ82°Ｅを測る。底面は中心付近が周辺よりも５～７cmほど深くなっており、壁は幾分丸みを帯びて立ち上がっている。少量の土器片と石鏃が１点出土した（第53図）。

ＳＫ 142（第54図・第25図版）

ＫＩ44グリッド中央部に位置し、地山面で確認がなされた。183cm×105cmの楕円形で、長軸方位はＮ33°Ｅを測る。底面が円形にくぼんでおり、この部分の深さは25cm、他の浅い所で10cm前後を測る。壁は南側では丸みを帯び、北側では緩やかに立ち上がっている。少量の土器片と土偶の一部が出土した。

ＳＫ 143（第54図・第26図版）

ＫＩ・ＫＪ45両グリッドにまたがっており、地山面で確認された。149 cm×76cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ10°Ｗ、深さ21cmを測る。底面は全体に平坦で、壁は緩く傾斜して立ち上がっている。大洞C_2式土器が出土した。

ＳＫ 144（第54図）

ＬＣ44の南部に位置し、地山面で確認された。ＳＸ005土器一括廃棄遺構を掘り上げた段階で確認されたので本遺構の方が古いと思われる。おおよそ110 cm×58cmの楕円形であろうと思われ、深さは37cm、長軸方位はＮ68°Ｗを測る。底面は西側がしだいに高くなり、壁は急角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ 145（第54図）

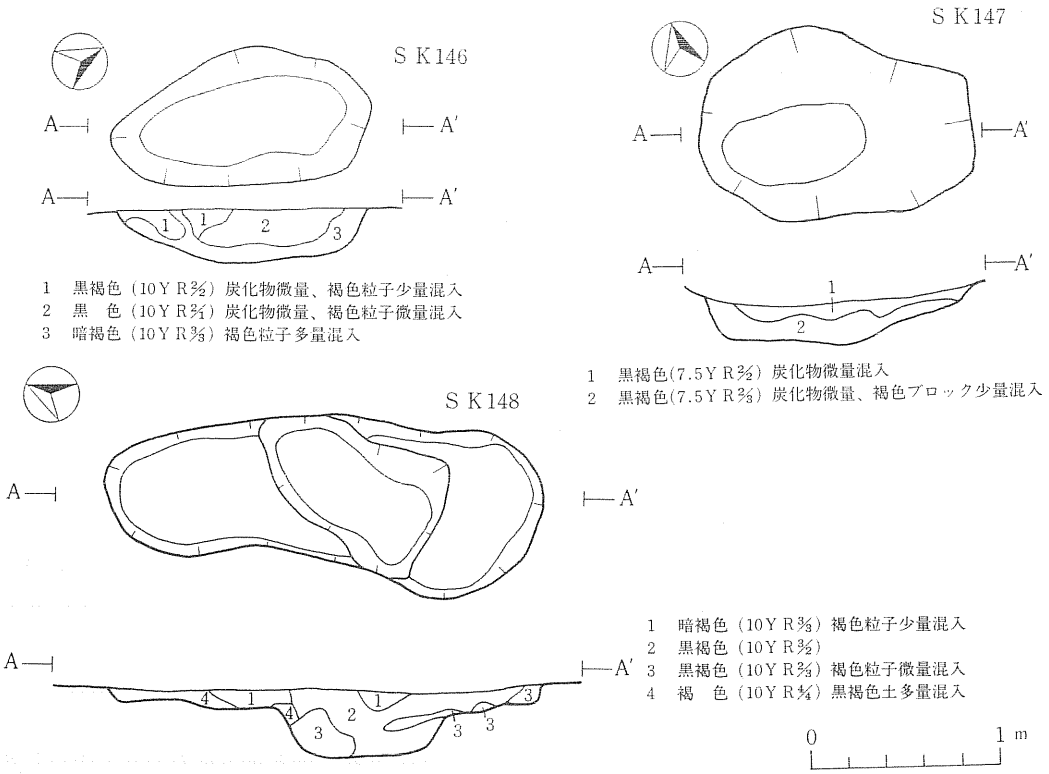
ＫＪ・ＬＡ45両グリッドにあり、地山面で確認された。144 cm×68cmの楕円形を呈し、主軸方位はＮ32°Ｅ、深さは９cmと浅い。底面はほぼ平坦で南側に25cm×19cm、深さ14cmのピットがある。壁は低く、北側がなだらかになっている。大洞C_2式の土器片が少量出土した。

ＳＫ 146（第55図・第26図版）

ＬＡ44・45両グリッドにあり、地山面で確認された。139 cm×72cmの楕円形であるが、南側がやや細くなっている。長軸方位はＮ16°Ｅ、最深部で27cmの深さを測る。底面は平坦ではなく丸みを帯び、壁の立ち上がりは南側が北側よりも緩やかである。大洞C_2式の土器片が少量出土した。

ＳＫ 147（第55図・第26図版）

ＫＨ41・42グリッドに位置し、地山面で確認された。144 cm× 102 cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ71°Ｗ、最深部で36cmの深さを測る。主たる底面は西～中央部にあり、壁は東側がなだらかになっている。大洞Ａ式土器が多量に出土した。



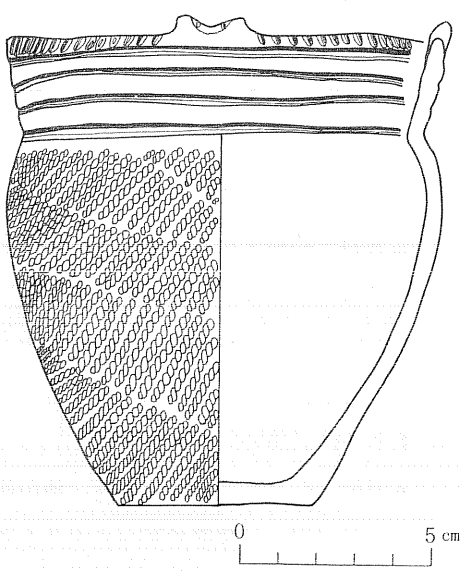
第55図　SK146～148土壙実測図

SK 148（第55図・第27図版）

KF43・44、KG43・44の4グリッドにまたがり、地山面で確認がなされた。232cm×77cmの細長い楕円形を呈し、長軸方位はN15°Wを測る。南北両側が浅く、10cmの深さであるが、中央部で一段低くなり、この部分で38cmの深さを有する。底面は平坦で、壁は中央部、南北両端部ともにわずかな丸みを有しながら傾斜して立ち上がる。中央部のくぼみは土壙の重複の可能性があるが、平面や土層断面では窺い知ることができなかった。大洞A式土器が少量出土した。

SK 149（第189図・第68図版）

平安時代のSK(I)002の床面を精査中に検出された。187cm×111cmの方形に近い形をしており、長軸方位はN25°W、SK(I)002床面からの深さは17cmを測る。底面はほぼ平坦で径10cmほどの石が数個



第56図　SK 149出土遺物

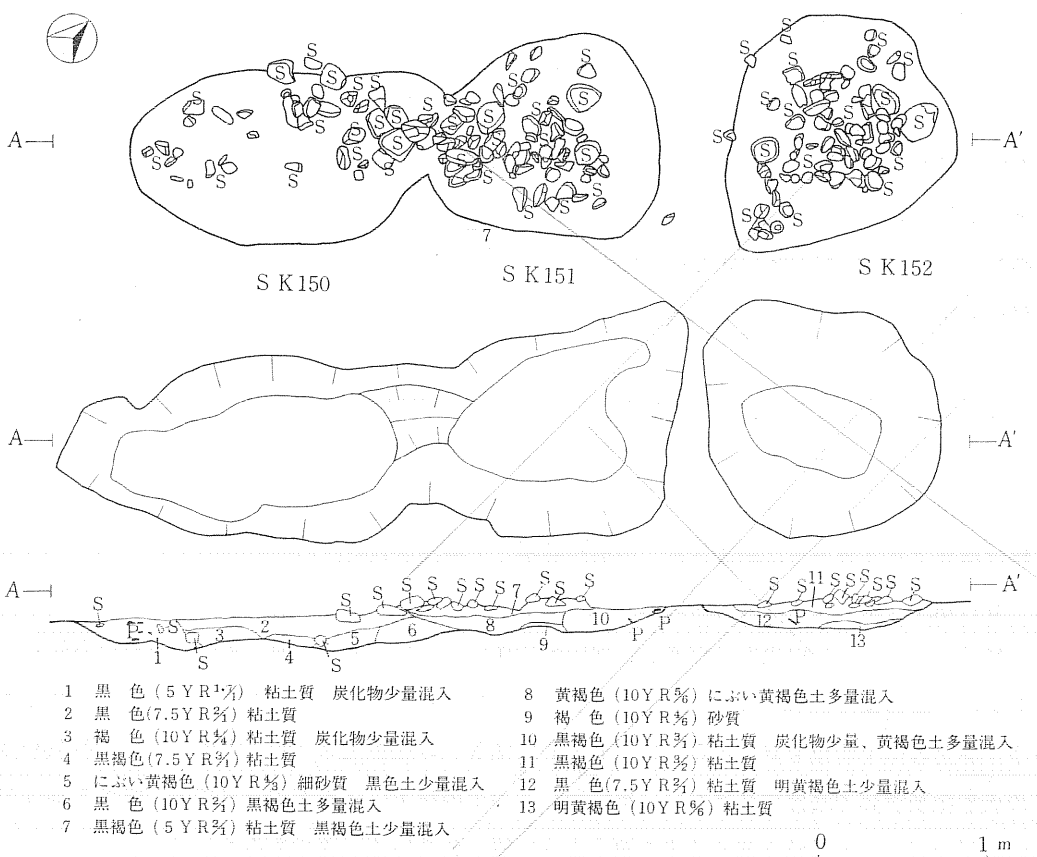
見られる。北東部から完形土器が出土した。口径10.5cm、底径５.３cm、器高13.0cmの小形深鉢で両面に赤色顔料が施され、内面にはその上に褐色の物質が付着している（第56図）。

ＳＫ 150（第57図・第27図版）

ＫＦ・ＫＧ42グリッドに位置し、地山面で確認された。ＳＫ 151により東端を切られているが、確認面ではほぼ190cm×102cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ60°Ｅを測る。遺構上面に40数個の配石があるが土壙上部のみに限られ、埋土中にはほとんど入り込んでいない。底面には凹凸があり、最深部で26cmの深さを有している。壁は緩やかである。大洞Ａ式の土器片少量と、石鏃２点、その他の石器１点（第58図）が出土した。

ＳＫ 151（第57図・第27図版）

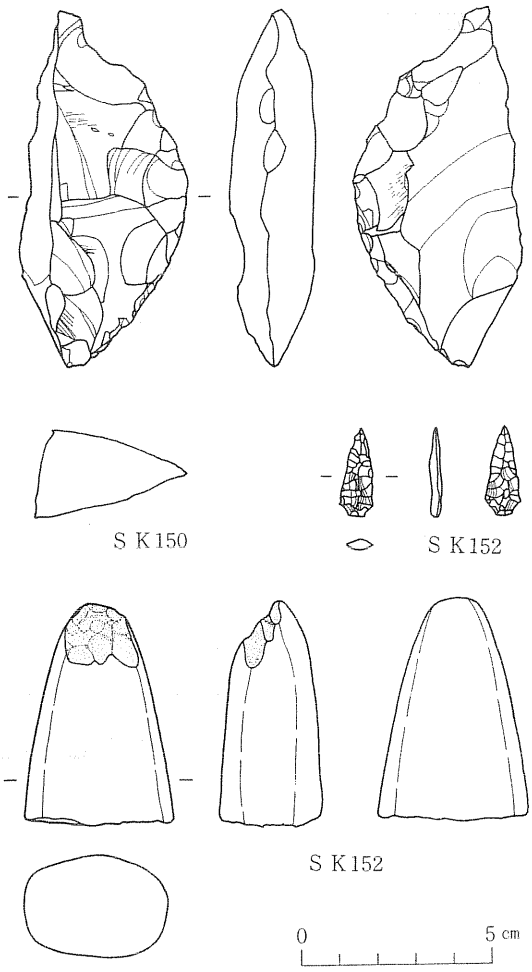
ＫＦ42グリッド中央部にあり、地山面で確認された。確認面では134cm×120cmの略円形で上面に90余個におよぶ配石を施している。配石は遺構上面のみで、土壙埋土中には５～６cm入り込んでいるだけである。土壙上面から底面までは16cmの深さで、壁は非常に緩やかである。土器少量と石鏃１点が出土した（第58図）。



第57図　ＳＫ150～152土壙実測図

ＳＫ 152（第57図・第27図版）

ＫＦ42グリッド北東部に位置し、地山面で確認された。ＳＫ150・151とは北東～南西方向に一直線に並ぶ。確認面の平面形は 162 cm × 130 cmの大きさであるが歪んだ円形である。土壙上面に 100 個ほどの配石が見られる。土壙確認面から最深部までは17cmを測り、底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がっている。土器片少量と、折損した磨製石斧が１点出土した（第58図）。



第58図　ＳＫ150～152出土遺物

②　土器棺墓

ＳＲ 001（第60図・第４・27・68図版）

ＬＩ56グリッド内にあり、地山砂礫層を穿って墓壙を造築している。墓壙上面は径47cmの円形で、深さ37cmを測り、底面より５cm上方に土器棺を正位に置く。土器棺は口径28.5 cm、胴部最大径30.8cm、底径推定10.2cm、器高39.4cmの大形粗製深鉢で底部を一部欠くが穿孔ではない（第67図）。

ＳＲ 002（第60図）

ＮＤ60グリッドにあり、土器棺墓としては西端にある。地山面で確認された。墓壙上面は北側の輪郭が旧水田畦畔により土色が変色しており不明であるが、おおよそ47cm×38cmの楕円形を呈し、墓壙の深さは23cmほどである。土器棺は壙底より３cm上方に納置され、一部が破損して検出された。

ＳＲ 004（第60図・第28・68図版）

ＭＧ52グリッドの中央部に位置し、地山面で検出された。墓壙上面は東側の輪郭が不鮮明であるが、おおよそ径40cmの円形を呈するらしい。墓壙の深さは確認面より29cmを測り、壙底より３cm上方に土器棺を納置する。棺は若干北に傾き、口径推定28.8cm、底径９.７cm、器高30cmの大形粗製深鉢で底部穿孔はない（第67図）。この土器棺上には平面27cm×17cm、厚さ５cmほどの扁平な石が、土器棺上部の北半を覆うように置かれている。蓋であろう。

ＳＲ005（第60図・第28・68図版）

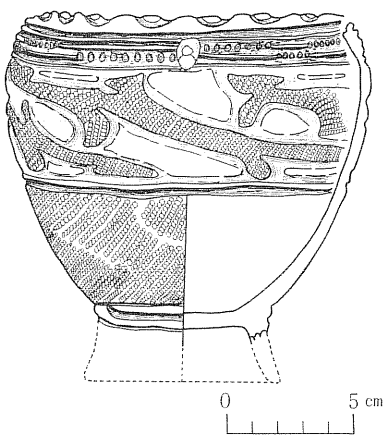
ＭＧ54グリッド内にあり、地山面で検出された。墓壙上面は径40cmの円形を呈するが、下方はやや斜位に穿たれて袋状となり、壙底も平坦ではない。壙底より16cmほど上方に土器棺を若干斜位に納置しているが、この場合、土器棺の傾きは墓壙の傾きと同一である。土器棺は口径29.2cm、底径7.6cm、器高37.7cmの大形粗製深鉢で、底部に穿孔はない（第67図）。

ＳＲ006（第60図）

ＭＨ56グリッドにあり、地山面で検出された。墓壙上面は36cm×29cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。壙底はほぼ平坦で、深さ18cmを測り、壙底より５cm上方に土器棺がほぼ正位に納置される。土器棺は大形粗製深鉢下半部のみで、現存口径28.3cm、底径10.2cm、現存器高19.8cmを測る。底部穿孔はない（第67図）。

ＳＲ007（第61図・第69図版）

ＭＨ54グリッドにあり、地山面で検出された。墓壙上面は径45cmほどの円形で、深さ25cm、側壁は擂鉢状に傾斜し、底面より５cm上方に土器棺が納置される。土器棺は口径推定27.6cm、底径8.0cm、器高29.9cmの大形粗製深鉢で、墓壙内で破損している。底部穿孔はない。土器棺内埋土土層断面図作成時には検出されなかったが、土器棺内に第59図に示す土器が入っていた。精製の小形台付深鉢で、口径12.6cm、高台径推定7.6cm、器高13.9cmを測る（第67図）。



第59図　ＳＲ007棺身内埋納土器

ＳＲ008（第61図）

ＭＧ63グリッド内に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。墓壙上面は44cm×25cmの楕円形で、擂鉢状に下部が細くなる。墓壙の深さは24cmを測り、壙底より13cmほど上方に土器棺が正位に納置されている。

ＳＲ009（第61図・第28・29・69図版）

ＭＡ60グリッド内に位置し、地山面で検出された。墓壙上面は50cm×42cmの楕円形を呈し、垂直に掘り下げているが、側壁北西部は外方へ張り出している。壙底は平坦ではなく、深さ38cmを測り、９cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径28.3cm、胴部最大径推定30.8cm、底径11cm、器高39.9cmを測る大形粗製深鉢である（第68図）。

ＳＲ010（第61図・第29・69図版）

ＬＩ44グリッド杭の西にあり、地山面で確認された。土器棺墓としては最南端にある。墓壙上面は58cm×40cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。壙底は丸みを帯び、４cmほど上方に土器棺が納置されているが、土器棺は底部より５～10cmのところで折れ、大きく北側に傾いている。

土器棺は口径32cm、底径９.３cm器高38.5cmの大形粗製深鉢である（第68図）。

ＳＲ012（第62図・第29図版）

ＭＡ60グリッド内にあり、第Ⅳ層上面で確認された。墓壙上面は46cm×41cmの略円形で、側壁は擂鉢状であるが底部は垂直に近く、深さ32cmを測る。壙底面は平坦で、これより６cm上方に大形粗製深鉢の土器棺が納置されている。土器棺底部付近の埋土には赤色顔料が混入し、これが土器内から流出、浸透したためか、底部周辺及びその下部も赤色化している。

ＳＲ015（第62図・第30・69図版）

ＭＢ61グリッド内にあり、第Ⅳ層上面で確認された。墓壙上面は歪んだ楕円形で54cm×46cm、壙底までの深さは37cmを測る。墓壙はほぼ垂直に掘り下げられており、底面に丸みを有し、これより５cm上方に土器棺が納置される。土器棺は発掘時に口縁部を欠いてしまったが、おおよそ口径23.7cm、底径8.8cm、器高推定38cmの大形粗製深鉢で穿孔はない。

ＳＲ016（第62図・第30・69図版）

ＭＦ58グリッド内、ＳＸ001の東端に検出された。同様にＳＸ001の東端で検出されたものに本遺構の北２ｍのＳＲ017がある。これらはＳＸ001の覆土を若干掘り下げた段階で検出されたものであるが、ＳＸ001より古いとすると土器棺の上部がＳＸ001の掘り込みによって破壊を受けていない点で不自然である。この付近にはＳＲ016・017と距離的に密接して019・022・023と５基の土器棺が構築されており、このうち３基はＳＸ001の外に検出されている。ＳＸ001は現水田の水路に分断されており、水路部分の下の調査は行わず、したがって全容を明らかにしたわけではないが、少なくとも長径８ｍ余りの楕円形を呈する遺構らしく、大洞C_1式の完形土器を含む多量の土器破片や石がくぼみの中に投入された如き状況で出土し、土器棺はその東端のみに検出されている。

以上のことがらからＳＸ001とＳＲ016・017の時期的関係を考慮すると、両遺構が同時存在で、何らかの関連を持った統一体と見なすには積極的根拠に乏しく、むしろ２基の土器棺はＳＸ001埋没後に新たに構築されたものと考えた方が妥当であると判断される。

墓壙上面は径30cmほどの円形で、墓壙はほぼ垂直に掘り込まれている。壙底までの深さは22cmを測り、底部より６cm上方に口径19cm、底径８cm、器高20.5cmの粗製深鉢の土器棺が正位に納置される。土器棺底部に穿孔はない。棺内底部より６cm上方に深鉢下部がこれも正位に納入されており、蓋としての使用が考えられる（図版30）。

ＳＲ017（第62図、第31・69図版）

ＳＲ016の北２ｍの位置にあり、墓壙上面は径50cmほどの円形を呈し、墓壙は側壁が傾斜する擂鉢状となっている。壙底は上面から38cmの深さで、これより６cm上方に土器棺が納置されている。棺身は復原していないが、口径約28cm、底径約10cm、器高約35cmほどの深鉢を用い、

これに口径23.8cm、底径約８cm、器高20.7cmの棺身より一回り小形の深鉢を逆位に被覆して合口蓋としている。合口蓋を有する土器棺は本例のみである。棺身底部に穿孔はない。

ＳＲ018（第63図・第31・69図版）

ＭＣ61グリッド内にあり、平安時代ＳＩ001竪穴住居跡の北隅で検出された。同住居跡壁によって破壊を受けており、墓壙南部の上面輪郭は不明であるが、径38cmほどの円形を呈するものであろうと思われる。墓壙の確認面は地山面で、これより壙底まで26cmを測り、壙底から２cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は口径31cm、底径８.２cm、器高31.３cmの深鉢で、口縁部に幅１.５cmほどの文様帯を有している。底部に穿孔はない（第68図）。

ＳＲ019（第63図、第４・70図版）

ＭＥ59グリッドにあり、第Ⅳ層で確認された。墓壙上面は41cm×35cmの楕円形を呈し、墓壙確認面より33cmの深さを有する。壙底は平坦で壙底より８cm上方に土器棺を正位に納置している。土器棺は口径28.６cm、底径４.７cm、器高33.９cmの深鉢で、口縁部に刺突列点と二条の沈線からなる文様帯を有している。底部穿孔はない（第69図）。

ＳＲ020（第63図、第32図版）

ＭＡ56グリッドにあり、第Ⅳ層上面で確認された。墓壙上面は23cm×17cmの楕円形を呈し、墓壙確認面より壙底まで23cmほどの深さを測る。墓壙は擂鉢状を呈し、底面より３cmほど上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は本例のみ台付鉢で、口径約15cm、器高約10cmを測り、土器棺内埋土下方には赤色顔料が含まれている。

ＳＲ021（第63図・第32・70図版）

ＭＢ56グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認された。墓壙上面は径40cmの円形で、墓壙確認面から墓壙底部までは23cmの深さを測る。底面はやや丸みを有し、これより４cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は底部を欠くが、口径推定24.２cm、器高推定28.３cm、底径推定６.９cmを測る深鉢である（第69図）。

ＳＲ022（第63図・第32・70図版）

ＭＦ59グリッド内にあり、地山面で検出された。ＳＲ016・017・019・023に近接した位置にある。墓壙上部は径42cmほどの円形で、墓壙は側壁が歪みながら下部ほど狭くなり、確認面より壙底まで30cmの深さを測る。しかし土器棺口縁部は墓口確認面より９cm上にあり、墓壙の深さは40cmほどになろう。壙底は平坦で、６cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径28.５cm、底径９.０cm、器高30.９cmの深鉢で、棺内埋土下方には赤色顔料を混入する（第69図）。

ＳＲ023（第64図）

ＭＦ59グリッド内にあり、地山面で検出された。ＳＲ016・017・019・022に極めて近接した位置にある。墓壙上部は径36cmの円形で、確認面から壙底まで27cmの深さを測る。墓壙は中間

部以下が細く、底部が逆円錐形となり、壙底より15cm上方に土器棺を納置している。土器棺は大形粗製深鉢であるが、南に傾斜しており、大きく破損している。

ＳＲ024（第64図）

ＭＡ57グリッドにあり、ＳＲ020の北3.3ｍの位置にある。第Ⅳ層中で確認された。墓壙上面は径38cmの円形で、墓壙確認面から壙底までは15cmの深さを測る。しかし土器棺上端は墓壙上面より12cm上にあるので、実際の深さは30cmほどになろう。壙底より３cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は大形粗製深鉢下半部で、現存口径27.8cm、底径推定８.７cm、器高推定21.3cmを測る（第69図）。

ＳＲ025（第64図）

ＭＢ62グリッド内にあり、地山面で確認された。大形粗製深鉢の底部付近のみであるが、ちょうど旧水田畦畔の真下にあり、畦畔築成時に破壊を受けたものであろう。墓壙確認面では48cm×40cmの歪んだ円形で、壙底まで24cmの深さを測る。壙底から18cm上方に土器棺を正位に納置している。

ＳＲ026（第64図）

ＭＡ59グリッドにあり、第Ⅳ層で確認された。墓壙上面は49cm×35cmの楕円形を呈し、確認面より壙底まで22cmの深さを測る。これも土器棺上端が墓壙確認面の21cm上にあるので、墓壙の真の深さは少なくとも43cmほどになろう。土器棺は壙底より７cmほど上方に正位に納置されている。大形粗製深鉢である。

ＳＲ027（第65図）

ＬＦ58グリッドにあり、地山面で確認された。墓壙上面は41cm×31cmの楕円形で、墓壙側壁はかなり歪みがあり、上面から壙底までは33cmの深さを測る。土器棺は上面でおおよその輪郭が分るが、墓壙内では破片となってほとんど原形を留めない。壙底より６cm上に最下部がある。

ＳＲ028（第65図・第33・70図版）

ＬＧ49グリッドにあり、地山上面で確認された。墓壙は上面が径35cmほどの円形を呈し、下方ほど狭くなり、底部は平坦でない。確認面から壙底までは29cmを測り、壙底より６cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は粗製深鉢で、口径20.5cm、底径９.０cm、器高23.6cm、胴部最大径21.1cmを測り、底部に穿孔はない（第69図）。

ＳＲ029（第65図・第70図版）

ＬＨ53グリッドにあり、地山面で確認された。墓壙上面は径30cmほどの円形を呈し、確認面から壙底までは24cmを測る。墓壙は下方が細く尖る逆円錐形で、壙底から６cm上方に土器棺が正位に納置される。土器棺は口径22.6cm、底径７.４cm、器高35.5cmの大形粗製深鉢である。底部に穿孔はない。

ＳＲ030（第65図・第33・70図版）

ＬＥ47、ＬＦ47両グリッド杭の中間に位置し、墓壙上面は径40cmほどの円形を呈し、墓壙確認面から壙底まで32cmの深さを測る。墓壙は西側壁が緩く傾斜する歪んだ逆円錐形で、壙底に密着させて土器棺を正位に納置している。土器棺は口径29.9cm、底径８.３cm、器高36.0cmの大形粗製深鉢で底部に穿孔はない（第70図）。

ＳＲ031（第66回・第33・70図版）

ＬＧ46グリッド内に位置し、地山面で確認された。墓壙上面は径55cmほどの円形で、墓壙確認面から壙底までは48cmの深さを測る。墓壙は擂鉢状を呈し、底面は平坦で、底面より５cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径36.5cm、底径11.4cm、器高43.7cmの大形粗製深鉢（第70図）で、底部の一部を欠くが意識的な穿孔か否か判断しかねる。土器棺上面と棺内に土器破片が見られ、これを復原すると口径30.6cm、器高37.2cmの粗製大形深鉢となった（第70図）。恐らく合口式の蓋として被せたものであろう。

ＳＲ032（第66図・第70図版）

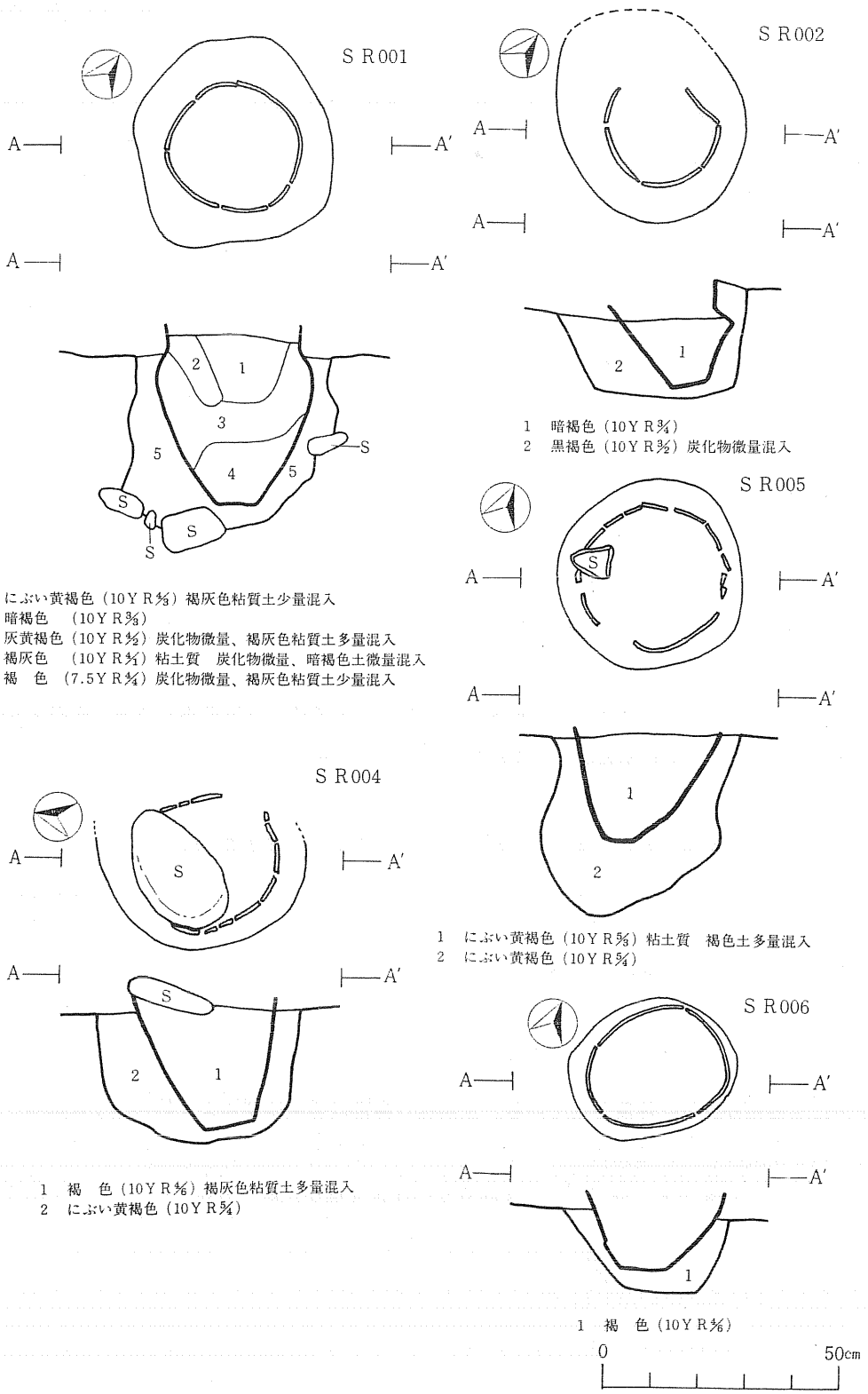
ＬＦ45・46両グリッド杭の中間に位置し、地山面で確認された。墓壙上面は径35cmほどの円形で、墓壙は底部ほど細くなる逆円錐形を呈し、墓壙上面から壙底までは25cmの深さを測る。壙底より７cm上方に土器棺が正位に納置されている。土器棺は口径推定27.5cm、底径８.６cm、器高推定31.5cmの大形粗製深鉢で、底部に穿孔はない（第70図）。

ＳＲ033（第66図）

ＬＧ45グリッド内にあり、地山面で確認された。墓壙の上面は径33cmほどの円形を呈し、墓壙底面は丸みを有して側壁と連なっている。壙底より４cm上方に土器棺が正位に埋置されているが土器棺口縁部は墓壙確認面より約10cm上にある。

ＳＲ034（第66図・第34・71図版）

ＬＦ51グリッドに位置し、地山面で確認された。墓壙の上面は40cm×35cmの楕円形で、墓壙確認面から壙底まで26cmの深さを有する。墓壙は下部ほど細くなる逆円錐形で、壙底より４cm上方に土器棺が正位に埋置されている。土器棺口縁部は墓壙確認面より約10cm上にある。土器棺は口径推定35.7cm、底径12.4cm、器高35.9cmの大形粗製深鉢で、底部に穿孔はない。口縁部に大洞C_2式の精製土器に施文される大腿骨文の如き文様が沈線で表現されている（第70図）。



1　にぶい黄褐色（10Y R⅝）褐灰色粘質土少量混入
2　暗褐色　（10Y R⅜）
3　灰黄褐色（10Y R⅝）炭化物微量、褐灰色粘質土多量混入
4　褐灰色　（10Y R⅓）粘土質　炭化物微量、暗褐色土微量混入
5　褐　色　（7.5Y R¾）炭化物微量、褐灰色粘質土少量混入

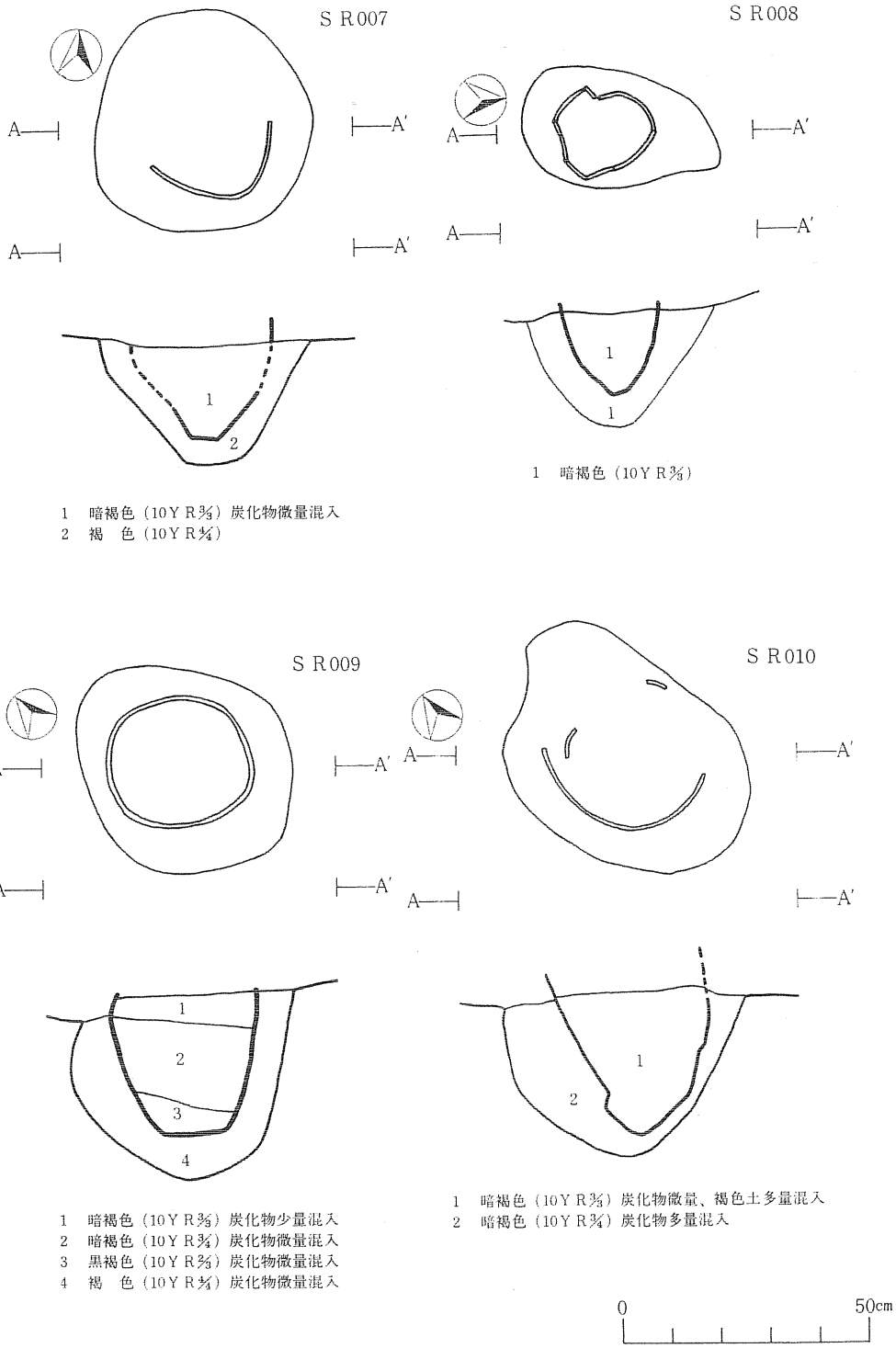
1　暗褐色（10Y R¾）
2　黒褐色（10Y R⅔）炭化物微量混入

1　にぶい黄褐色（10Y R⅝）粘土質　褐色土多量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R⅝）

1　褐　色（10Y R⅝）褐灰色粘質土多量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R⅝）

1　褐　色（10Y R⅝）

第60図　S R001・002・004～006土器棺実測図



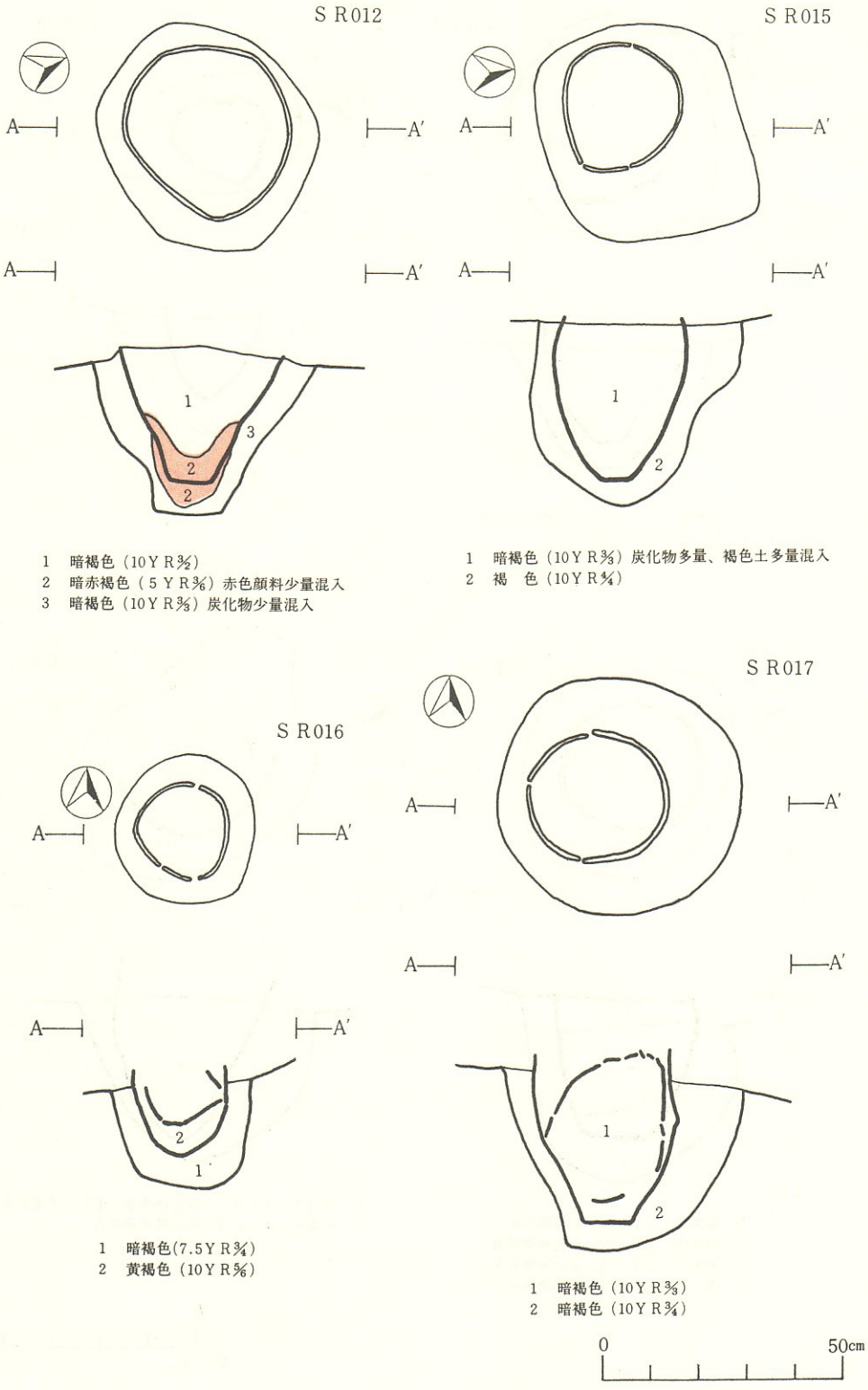
1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量混入
2　褐　色（10Y R4/4）

1　暗褐色（10Y R3/3）

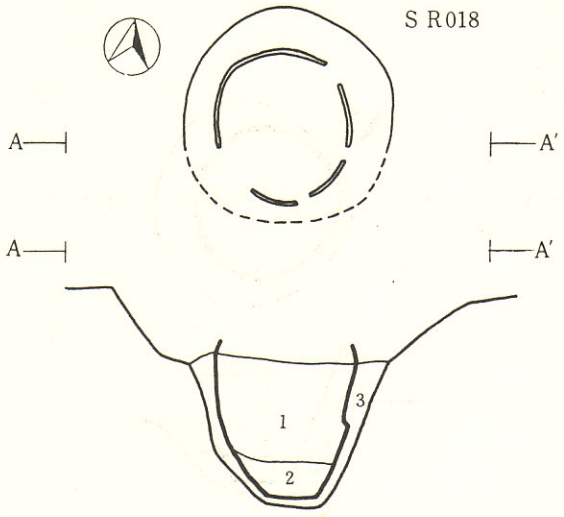
1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物少量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
3　黒褐色（10Y R2/3）炭化物微量混入
4　褐　色（10Y R4/4）炭化物微量混入

1　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量、褐色土多量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物多量混入

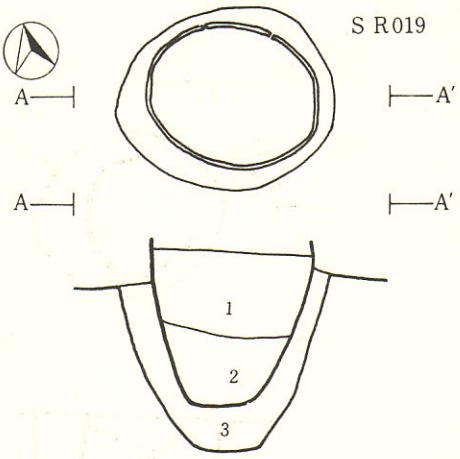
第61図　S R007～010土器棺実測図



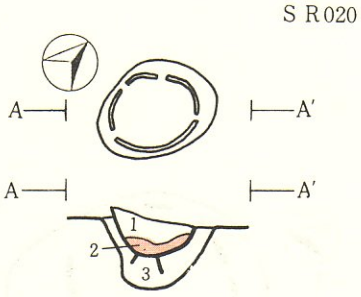
第62図　S R012・015～017土器棺実測図



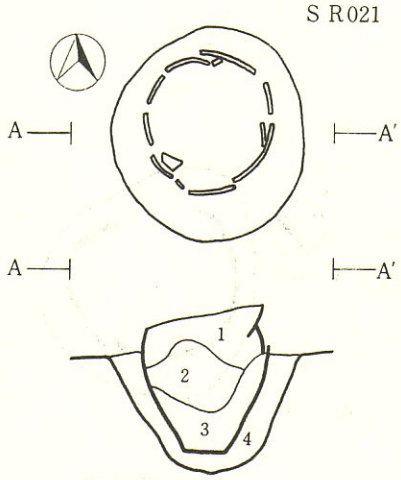
1　黄褐色（10Y R5/8）炭化物多量混入
2　暗赤褐色（5 Y R3/4）
3　褐　色（10Y R5/6）



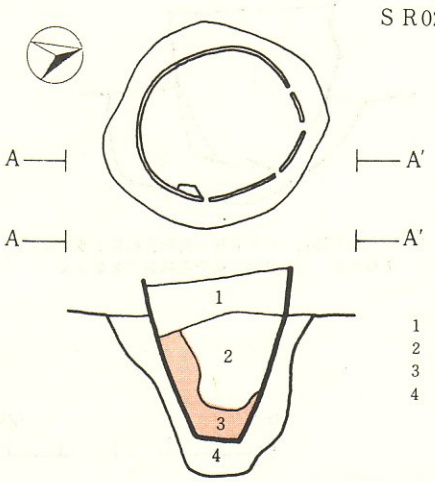
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量混入
2　極暗褐色(7.5Y R3/3）炭化物少量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）



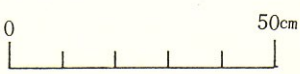
1　にぶい黄褐色（10Y R5/4）
2　褐　色（10Y R5/6）赤色顔料多量混入
3　褐　色（10Y R5/6）



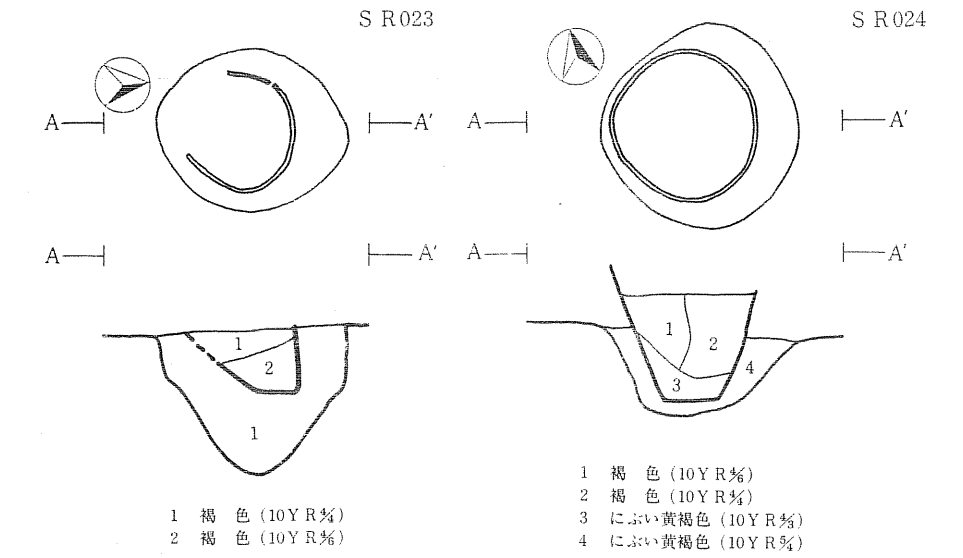
1　暗褐色（10Y R3/3）砂質　礫微量混入
2　褐　色（10Y R5/4）砂質　礫少量混入
3　暗褐色（10Y R3/3）砂質　礫少量混入
4　褐　色（10Y R5/4）砂質

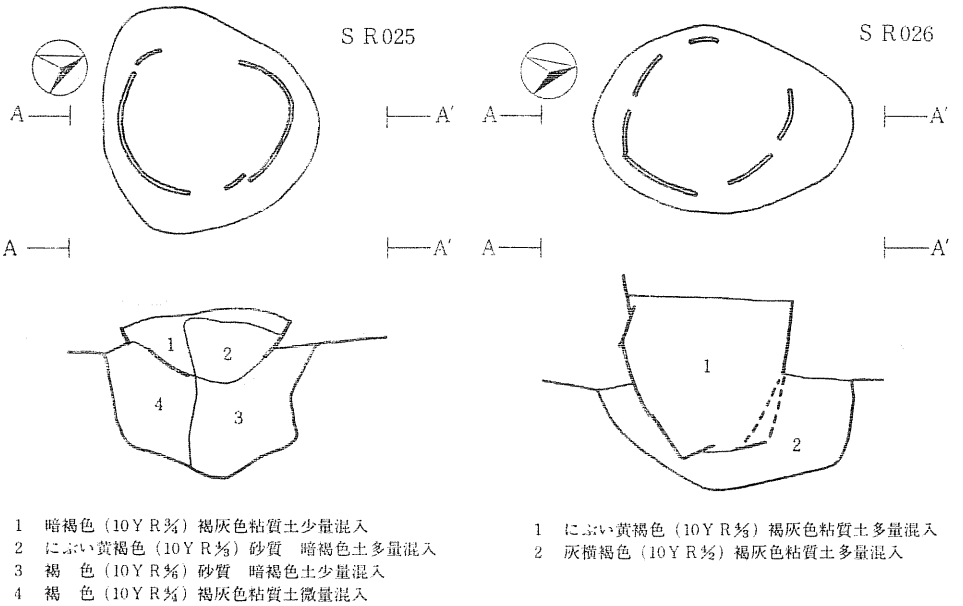


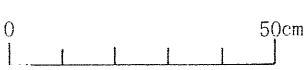
1　褐　色（10Y R5/4）黄褐色土微量混入
2　黄褐色（10Y R5/6）炭化物微量混入
3　にぶい赤褐色（5 Y R5/4）赤色顔料少量混入
4　褐　色（10Y R5/6）黒色土微量混入



第63図　S R018～022土器棺実測図

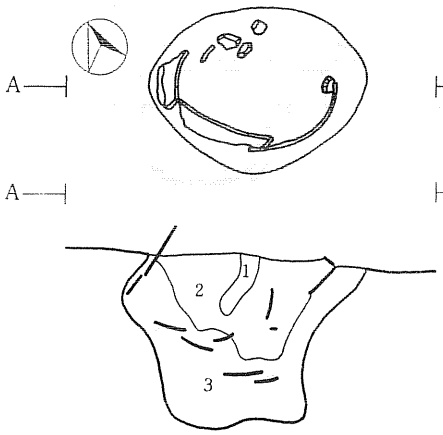






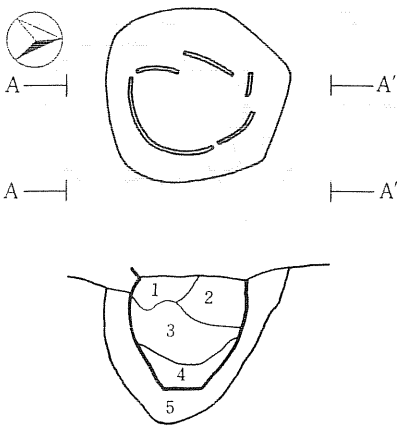
第64図　S R023～026土器棺実測図

S R027



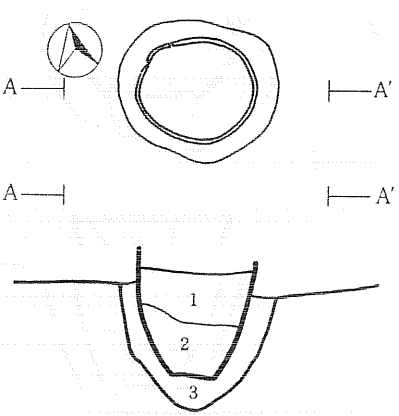
1　にぶい黄褐色（10Y R5/3）砂質　褐灰色粘質土少量混入
2　灰黄褐色（10Y R4/2）粘土質　黄褐色粒子微量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/3）砂質　褐灰色粘質土多量混入

S R028



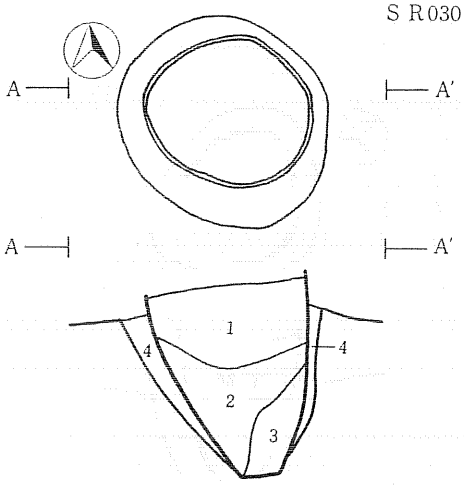
1　黒褐色（10Y R2/3）褐色土少量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物微量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物少量混入
4　褐　色（10Y R4/4）炭化物微量混入
5　にぶい黄褐色（10Y R5/4）粘土質

S R029

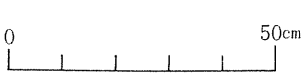


1　にぶい黄褐色（10Y R5/3）粗砂質
2　褐　色（10Y R5/4）
3　にぶい黄褐色（10Y R5/4）粘土質

S R030

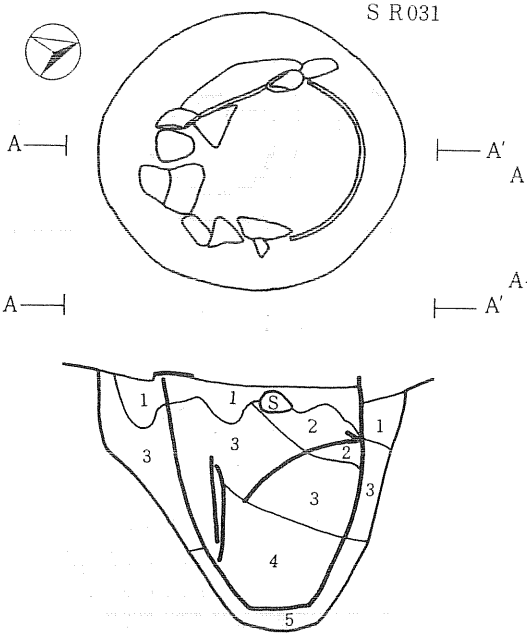


1　褐　色（10Y R5/4）炭化物微量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物微量、小石少量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R5/3）砂質
4　にぶい黄褐色（10Y R5/3）砂質　炭化物微量混入



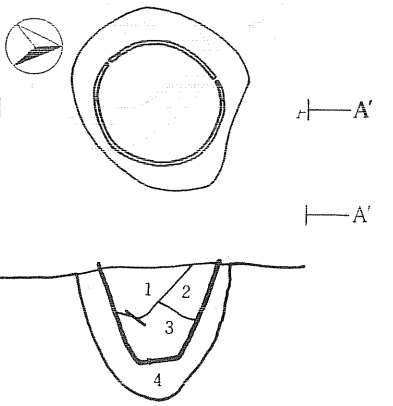
第65図　S R027～030土器棺実測図

S R031



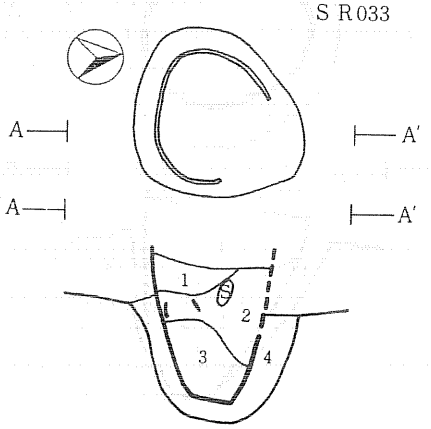
1　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物微量混入
2　黄褐色（10Y R5/6）
3　にぶい黄褐色（10Y R5/4）砂質
4　黄褐色（10Y R5/6）
5　明黄褐色（10Y R5/6）粗砂質

S R032



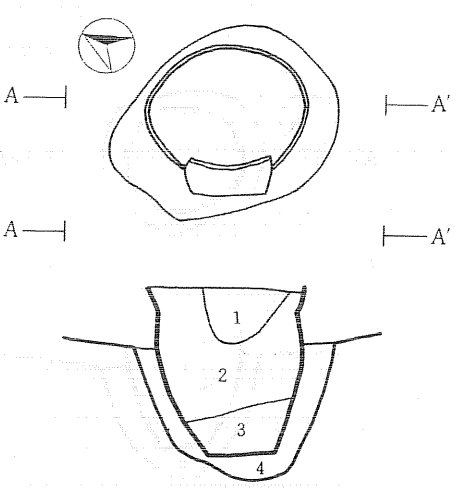
1　褐　色（10Y R4/4）炭化物微量混入
2　黄褐色（10Y R5/6）砂質
3　褐　色（10Y R4/6）炭化物少量混入
4　にぶい黄褐色（10Y R5/4）

S R033

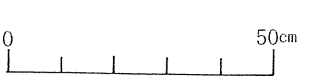


1　にぶい黄褐色（10Y R5/4）炭化物微量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R5/3）
3　褐　色（10Y R4/4）
4　褐　色（10Y R4/6）地山砂質土少量混入

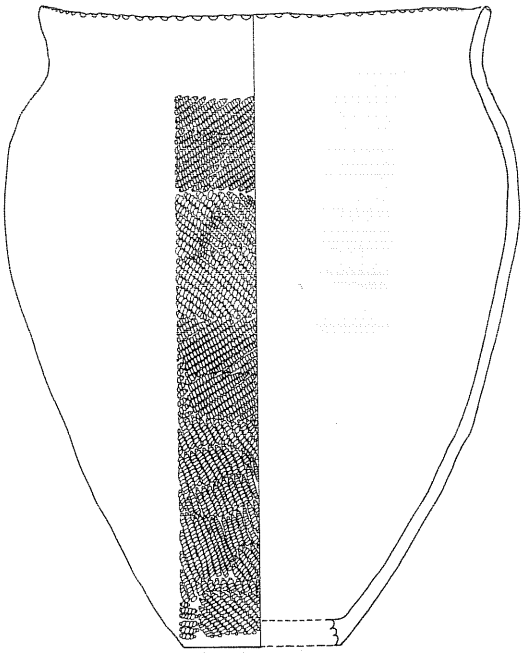
S R034



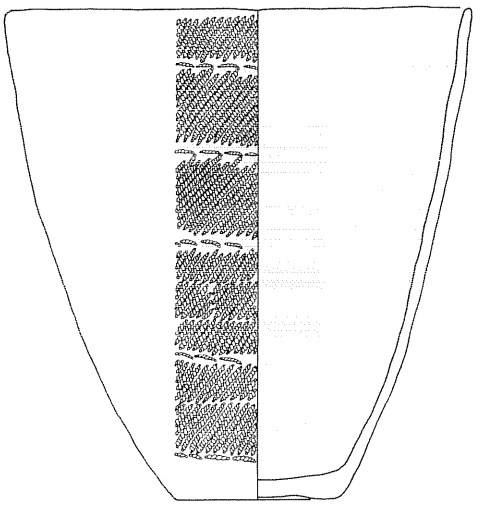
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物少量混入
2　にぶい黄褐色（10Y R5/3）炭化物多量混入
3　褐　色（10Y R4/6）炭化物微量混入
4　黄褐色（10Y R5/6）細砂質



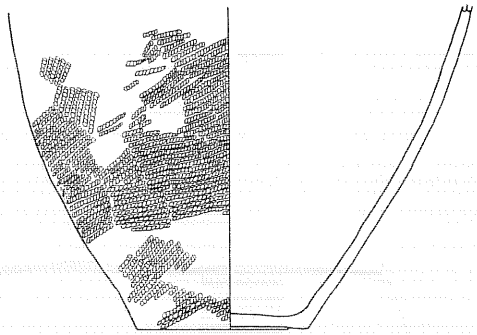
第66図　S R031～034土器棺実測図



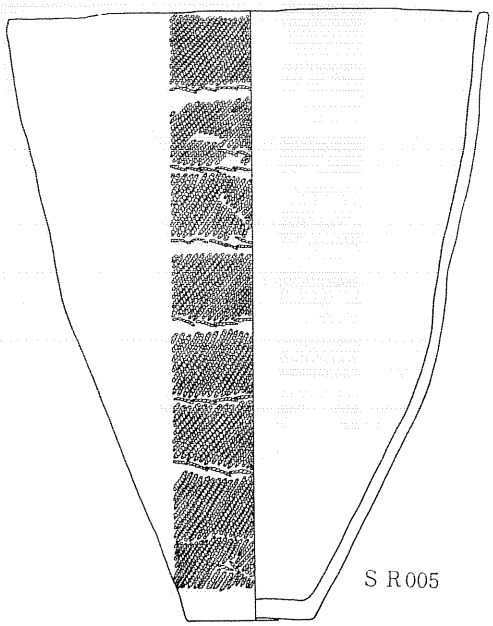
S R001



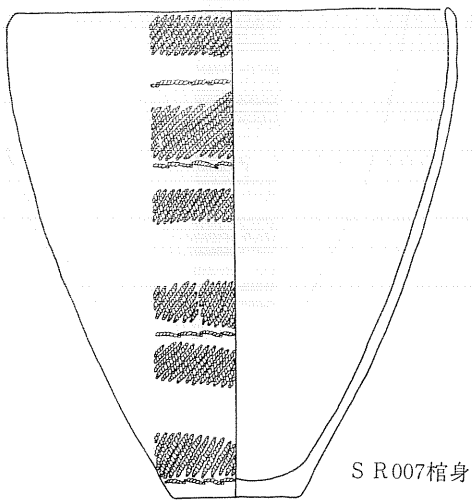
S R004



S R006



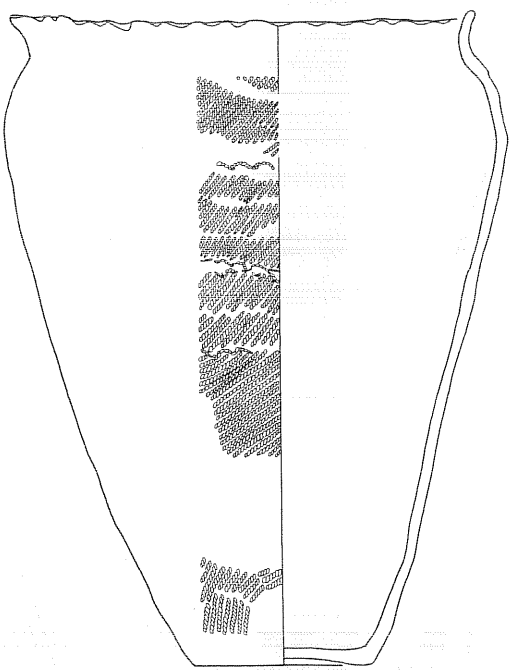
S R005



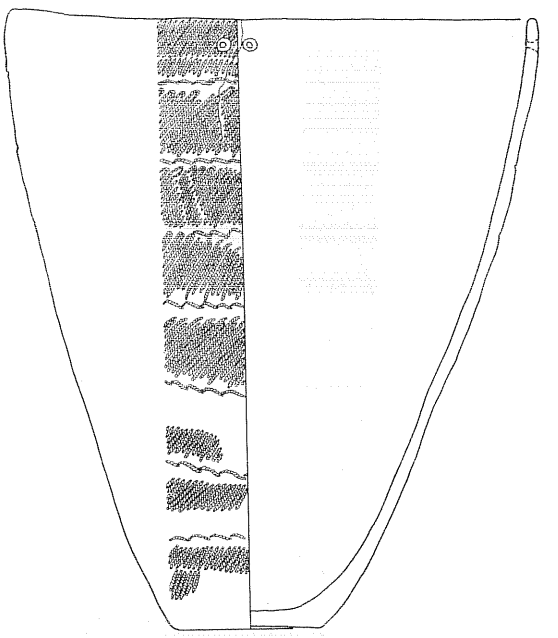
S R007棺身

0 10cm

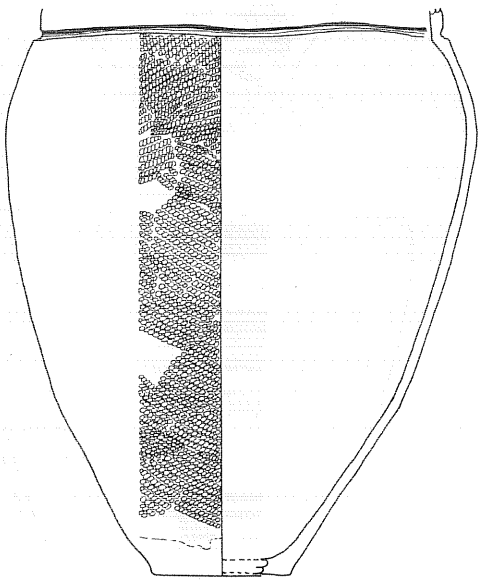
第67図　S R001・004～007土器棺



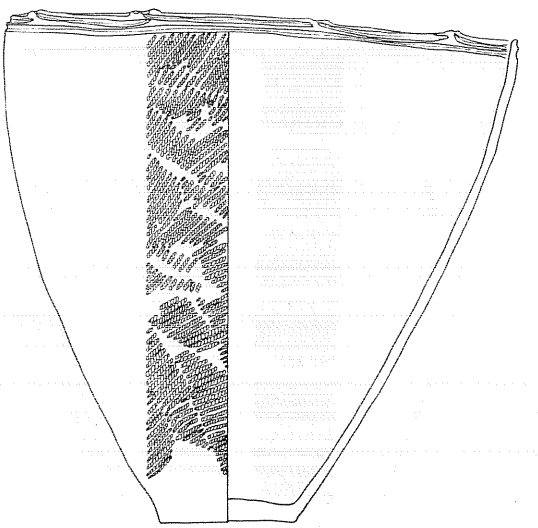
S R009



S R010



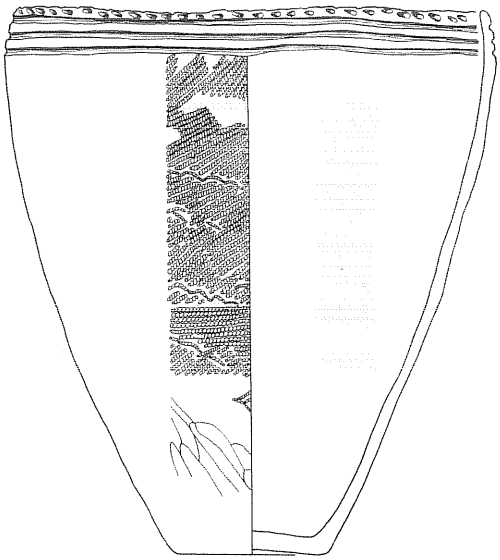
S R015



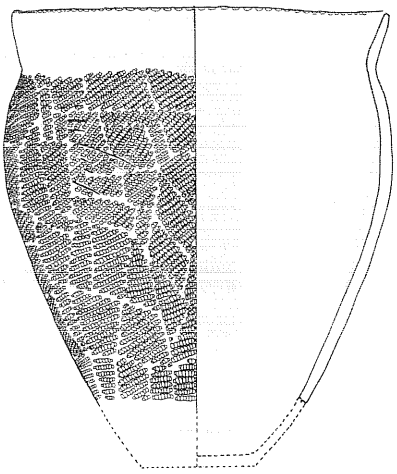
S R018

0 10cm

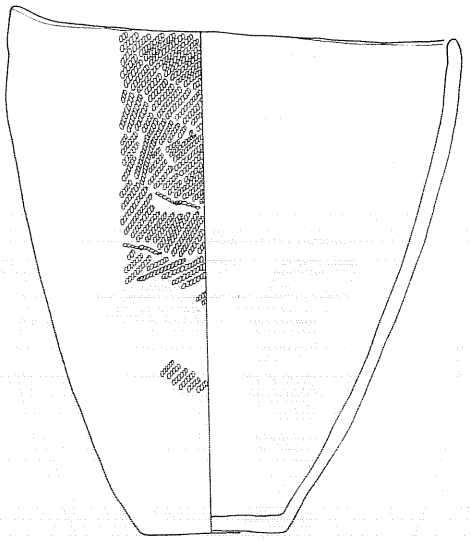
第68図　S R009・010・015・018土器棺



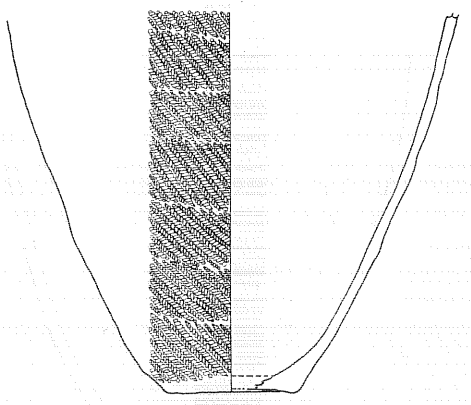
S R019



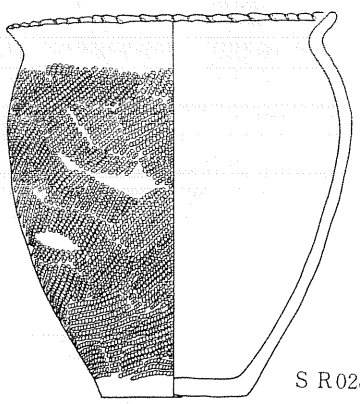
S R021



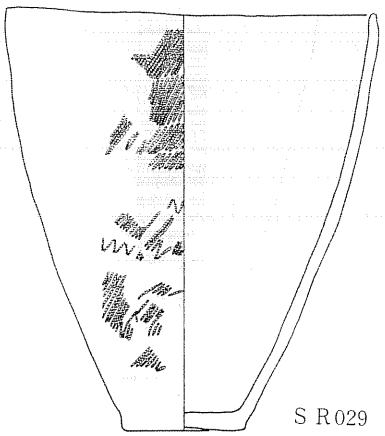
S R022



S R024



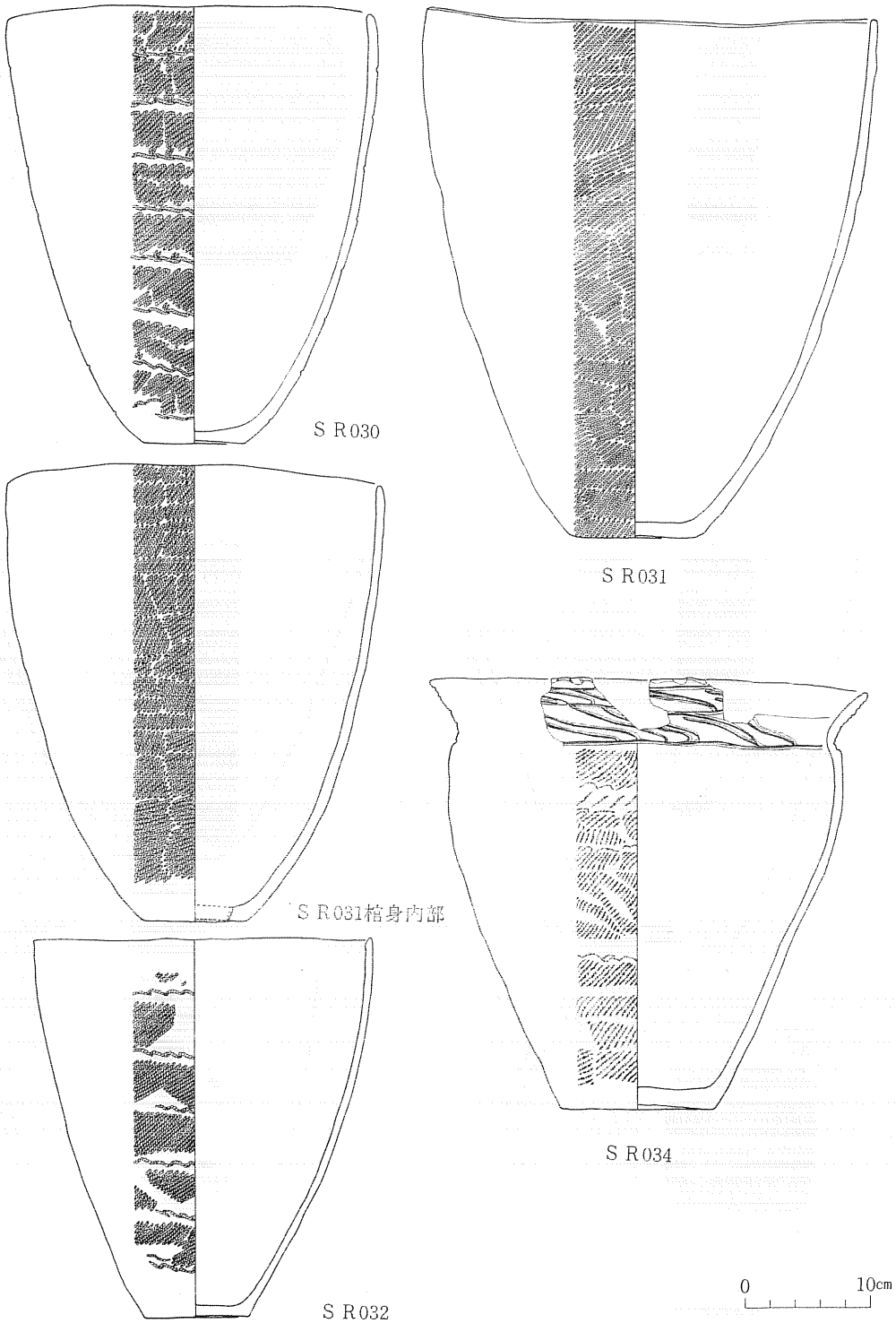
S R028



S R029

0 10

第69図　S R019・021・022・024・028・029土器棺



第70図　S R030～032・034土器棺

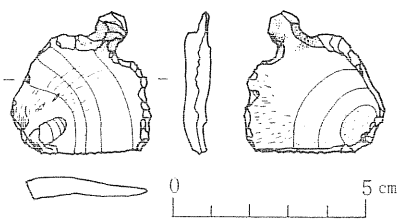
③　石囲炉・焼土遺構

ＳＮ005石囲炉（第72図・第34図版）

ＭＢ60グリッドにあり、第Ⅳ層上面で確認された。平安時代のＳＩ001竪穴住居跡の構築によって破壊を受けており、東半部しか残存せず、石も４個のみである。石囲に使用された石は径10～20cmほどの扁平な石で、全周に囲繞されたものと想定すると、径約100cmの石囲となる。焼土は約８cmの厚さで堆積している。焼土上の覆土から石匙が１点出土した（第71図）。

ＳＮ007焼土遺構（第72図・第34・35図版）

ＬＪ52グリッドに位置し、第Ⅳ層中で確認された。95cm×63cmの楕円形の浅い掘り込みの中に、焼土が５～10cmの厚さで堆積している。



第71図　ＳＮ005出土遺物

ＳＮ008石囲炉（第72図）

ＭＢ52グリッドに位置し、第Ⅳ層中で確認された。石囲は北東側に開口部を有する「コ」の字形を呈し、径60cmを測る。この石囲を構築するための径80cmほどの掘込みが石囲周囲に見られ、石囲中央部の底面には径20cm、深さ10cmの小ピットがあり、この中に土器片が入っている。その上部を覆って厚さ５cmの焼土堆積が見られ、小ピット中に土器を埋設して、火を焚いたことを示している。

ＳＮ012石囲炉（第72図・第35図版）

ＭＡ55グリッドに位置し、地山面で確認された。長さ10～15cmの扁平な石を縦に突き刺して構築した、径55cmを測る円形石囲炉である。ＳＮ008と類似して、中央部に径18cm、深さ12cmの小ピットがあり、この中に土器が埋設され、焼土が充満している。土器は大洞C_1式土器である。

ＳＮ013焼土遺構（第72図）

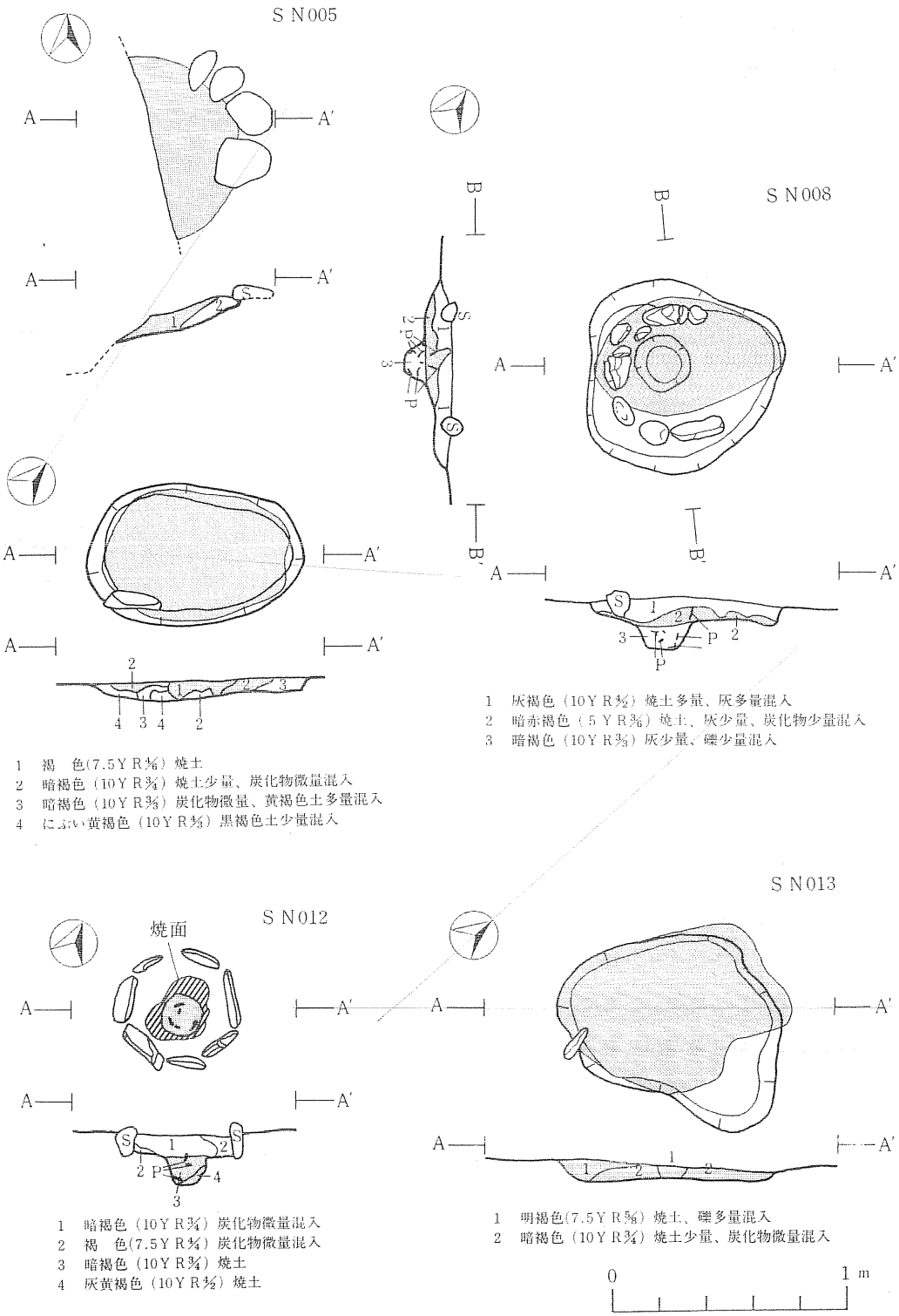
ＭＡ54グリッド内にあり、地山面で検出された。ＳＮ012石囲炉の南2.6ｍに位置する。100cm×65cm、厚さ10cmに焼土が堆積している。

ＳＮ014石囲炉（第73図・第35・36図版）

ＬＡ56グリッド内北側に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。ＳＮ016、ＳＱ016と極めて近接した位置にある。10数個の石をもって径90cmの円形に石を配置しているが南側では石囲が途切れている。中央部に焼土が見られる。大洞Ａ式土器の破片が出土した。

ＳＮ016石囲炉（第73図・第35・36図版）

ＬＡ56グリッド内、ＳＮ014東南の第Ⅳ層上面で確認された。長径20cm内外の石を10個ほど用いて、径90cmほどの石囲を構成している。西側の一部にわずかではあるが、焼土の堆積が認められた。埋土中より、石鏃、箆状石器など７点が出土した（第74図）。



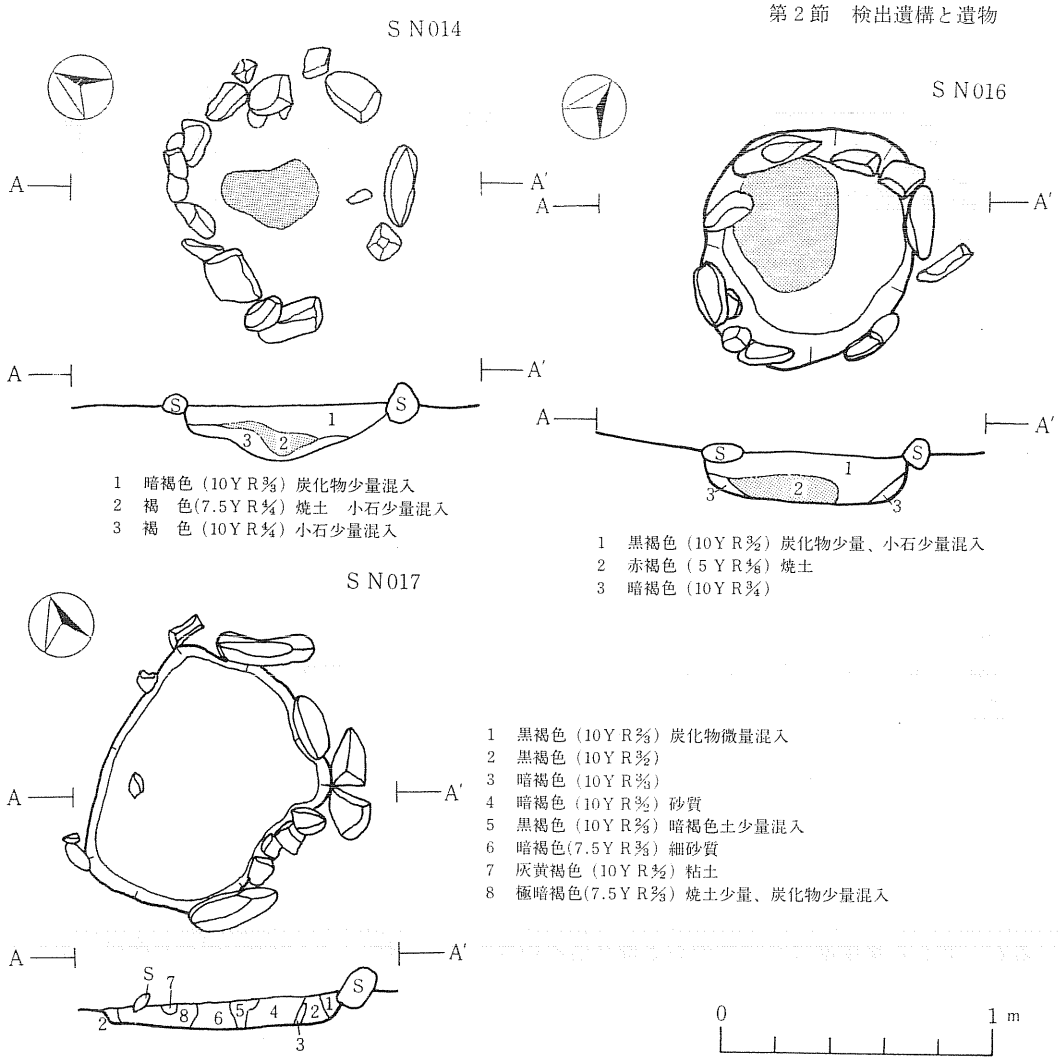
1　褐　色(7.5Y R5/6) 焼土
2　暗褐色 (10Y R3/4) 焼土少量、炭化物微量混入
3　暗褐色 (10Y R3/3) 炭化物微量、黄褐色土多量混入
4　にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 黒褐色土少量混入

1　灰褐色 (10Y R5/2) 焼土多量、灰多量混入
2　暗赤褐色 (5 Y R3/6) 焼土、灰少量、炭化物少量混入
3　暗褐色 (10Y R3/3) 灰少量、礫少量混入

1　暗褐色 (10Y R3/4) 炭化物微量混入
2　褐　色(7.5Y R5/4) 炭化物微量混入
3　暗褐色 (10Y R3/4) 焼土
4　灰黄褐色 (10Y R5/2) 焼土

1　明褐色(7.5Y R5/6) 焼土、礫多量混入
2　暗褐色 (10Y R3/4) 焼土少量、炭化物微量混入

第72図　S N005・007・008・012・018石囲炉・焼土遺構実測図



第73図　ＳＮ014・016・017石囲炉実測図

ＳＮ017石囲炉（第73図・第36図版）

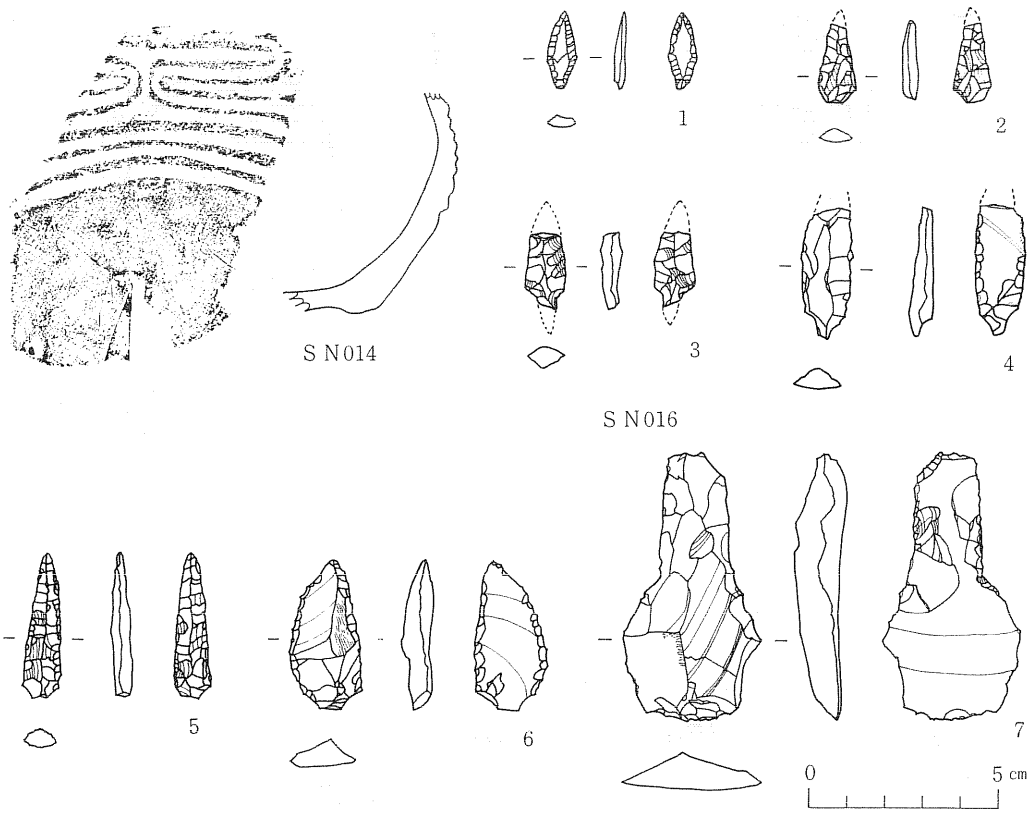
ＬＡ55グリッド内にあり、第Ⅳ層上面で検出された。石囲は東半分のみで、西側にはほとんど見られないが、掘り込みの形態から径100㎝前後を有したものが想定される。東半分に残る石は最大のもので長さ36cmを測る。焼土は西側に極めて少量検出された。

ＳＮ018石囲炉（第75図・第37図版）

ＫＪ53・54グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認された。東隣に接してＳＮ019が存在する。石はかなり乱れており、西側にしか残存しないが、掘り込みの状況から90cm×70cmの楕円形を呈するものと思われる。焼土、焼面は存在しなかった。

ＳＮ019石囲炉（第75図・第37図版）

ＫＪ53・54グリッドの第Ⅳ層上面で確認された。これもＳＮ018同様、西側の石が乱れてい



第74図　ＳＮ014・016出土遺物

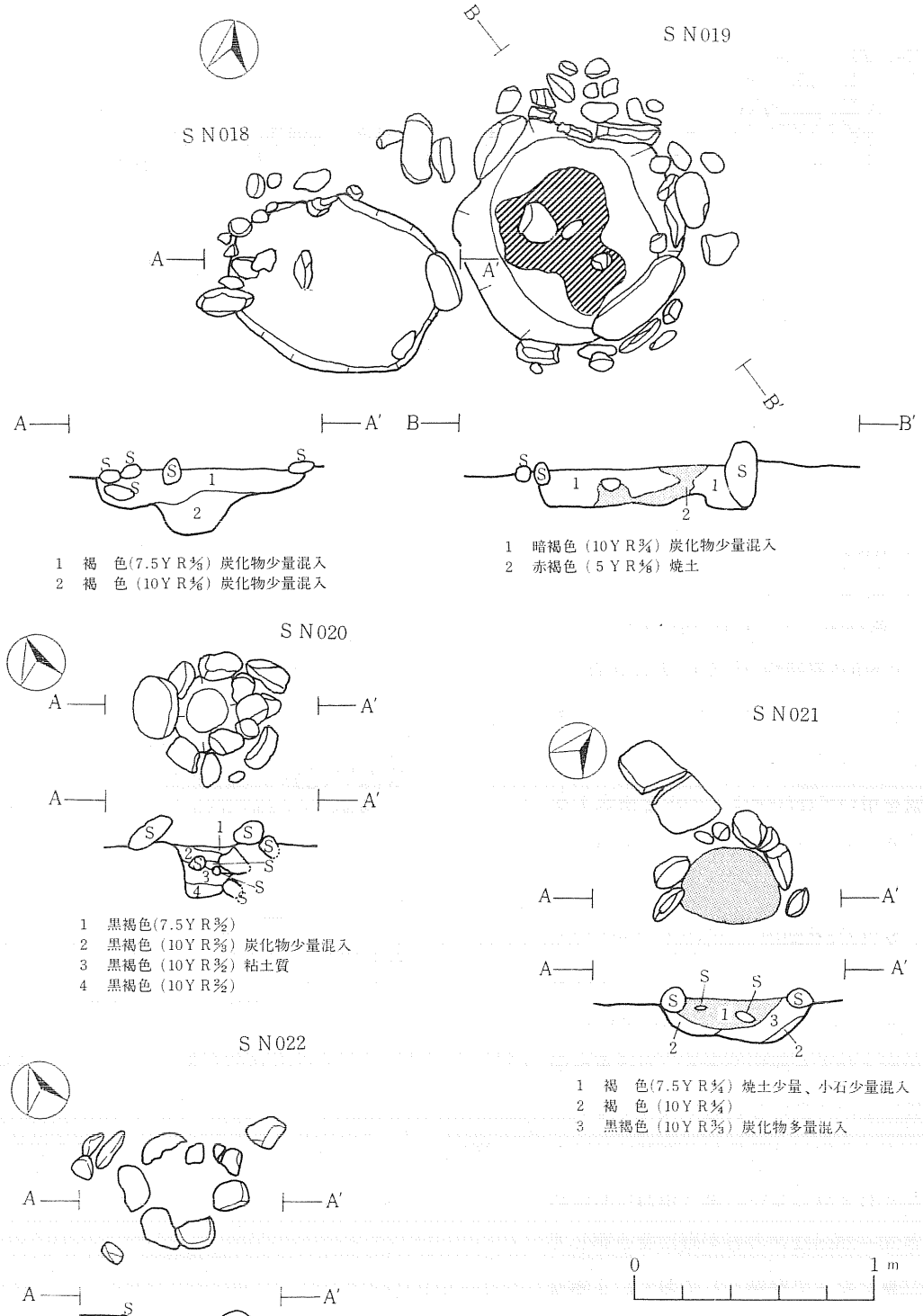
るが、北から東南部にかけての石と掘り込みの状況から、径120～130cmの円形石囲炉が想定される。石囲のうち東南部には長さ48cm、幅15cmのとりわけ大きな石を用い、地山を20cmほど掘り込んで縦に埋設しており、この石の外方にも小さな石を用いて、この部分のみ三重に石が囲む。また北方の石囲も不整ではあるが、やはり三重の石囲を意識したものと思われる。埋土内に焼土を含み、底面には焼面を形成している。埋土中の石も赤変している。

ＳＮ020石囲炉（第75図・第37図版）

ＬＡ51グリッド北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出されたものである。径15～20cmほどの石を使用して、径約60cmの円を構成しているが、西端の石はとりわけ大きく、27cm×20cmを測る。石囲中心部は深さ22cmの小ピットとなるが、焼土、焼面ともに見られない。

ＳＮ021石囲炉（第75図・第38図版）

ＬＡ49グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認された。８個の石を使用しているが北半分のみで、円をなさない。東西両端で66cmを測り、上面から18cmの深さの掘り込みを有する。焼土は12cmの厚さに堆積している。石囲西側に板状の石２枚が並ぶが、石囲炉との関係は明らかでない。



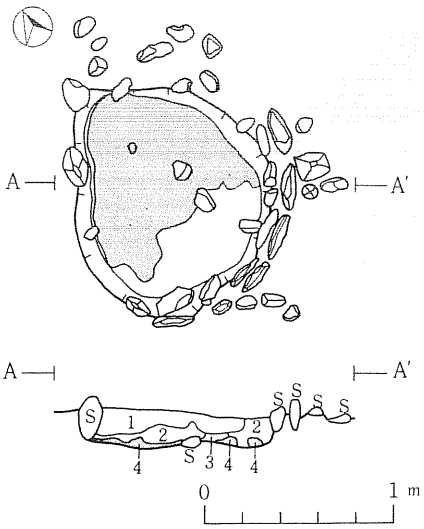
1　褐　色(7.5Y R3/3) 炭化物少量混入
2　褐　色 (10Y R4/6) 炭化物少量混入

1　暗褐色 (10Y R3/4) 炭化物少量混入
2　赤褐色 (5 Y R4/8) 焼土

1　黒褐色(7.5Y R3/2)
2　黒褐色 (10Y R3/3) 炭化物少量混入
3　黒褐色 (10Y R3/2) 粘土質
4　黒褐色 (10Y R3/2)

1　褐　色(7.5Y R4/4) 焼土少量、小石少量混入
2　褐　色 (10Y R4/4)
3　黒褐色 (10Y R3/3) 炭化物多量混入

第75図　S N018～022石囲炉実測図



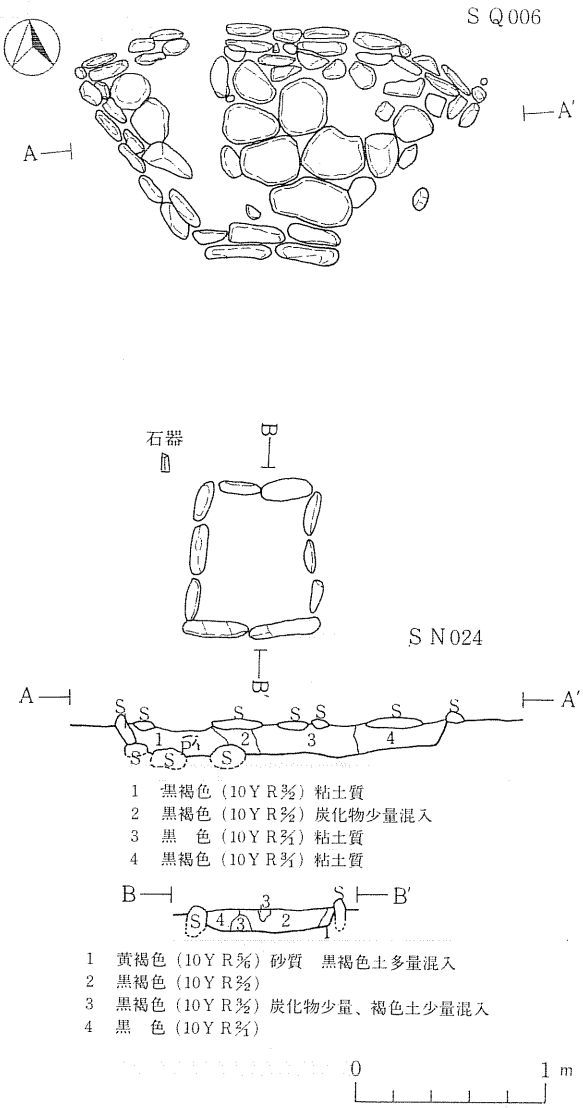
第76図　ＳＮ023石囲炉実測図

ＳＮ022石囲炉（第75図・第22図版）

ＬＤ56グリッド内に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。比較的扁平な石７個を用いて径50cmほどの円を構成する。石囲内部に掘込み及び焼土・焼面は存在しない。

ＳＮ023石囲炉　（第76図・第38図版）

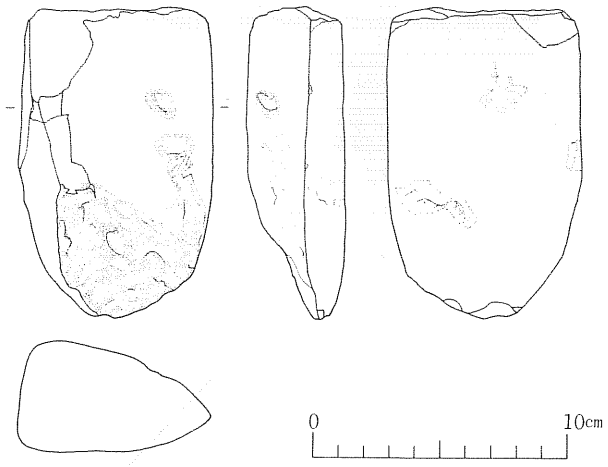
ＬＥ53グリッド内に位置し、第Ⅳ層上面に確認された、160cm×130cmの楕円形となる石囲炉である。石は東～南側にかけて良好な状態で残存するが、北東～北側では散逸し、西側にはほとんど石を有しない。東～南側の石は長さ20～25cmほどの石を縦に突き刺して二重になって整然としており、丁寧な造作の様子が窺える。焼土はないが、底面が焼面となっている。



第77図　ＳＮ024石囲炉・ＳＱ006配石遺構実測図

ＳＮ024石囲炉（第77図・第39図版）

ＬＧ55グリッド内に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。唯一の方形石囲炉で、84cm×72cmの大きさを測る。東西両側はそれぞれ３個、南北両辺はいずれも東西側よりも長大な石２個を使用している。南辺の石は北辺の石よりも大きく、長さ38cm、幅８cmを測り、いずれも地面に対し縦方向に埋め込んでいる。底面は平坦で、焼土、焼面は全く見られず、火を使用したとしても極めて短時間、小規模なものであったと思われる。本遺構内からではないが、石囲北西隅から北西20cmの地点から、断面二等辺三角形の特殊な磨製石器が出土した。本遺構北辺から北1.2ｍの同一面ＳＱ006配石遺構が存在する。いずれも左右対称で、中軸線も一致することから、両者は同時存在の関連する遺構であると考えられる。

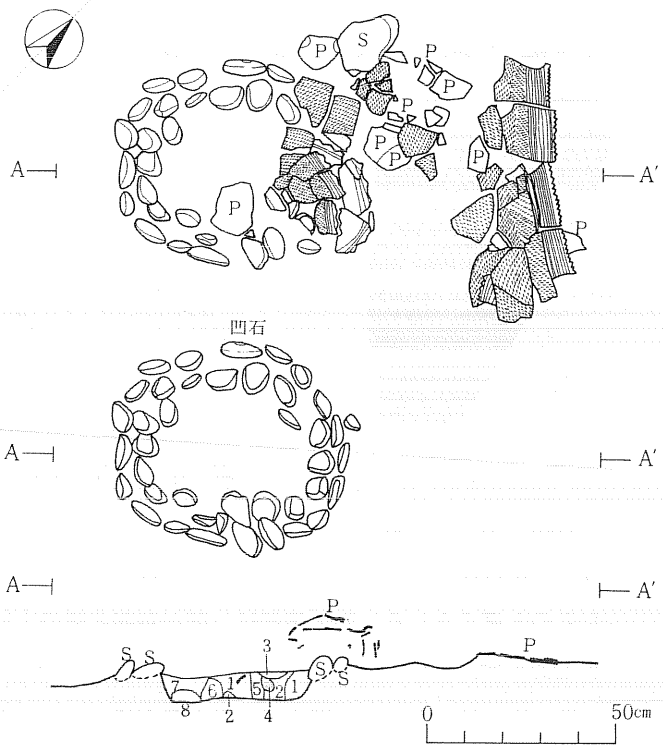


第78図　ＳＮ024付近出土遺物

ＳＮ025石囲炉

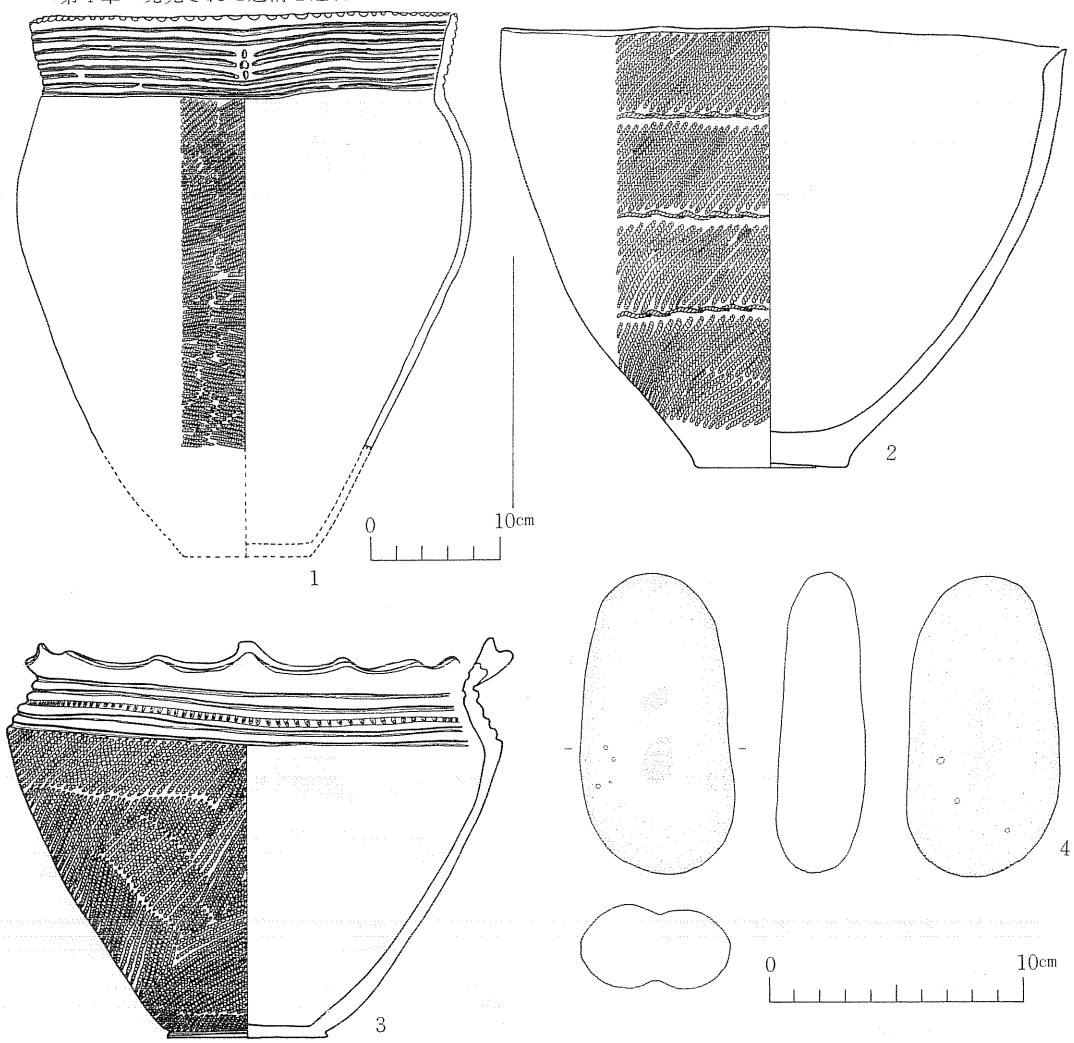
（第79図・第５・39・71図版）

ＬＥ47グリッド内に位置し、第Ⅲ層中に半精製の深鉢形土器（第80図３）が発見され、周辺を精査したところ、その西側に石囲炉、東側からさらに２個体の土器が検出された。石囲は第Ⅳ層中に検出され、角礫ではなく、全て丸味のある石41個をもって二重、部分的に三重に、64cm×57cmの楕円形に構築されている。極めてわずかに焼土、灰が認められた。石囲の中には凹石も使用されている（第80図４）。



1　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）炭化物少量、粘土少量混入
2　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）炭化物少量、黒褐色土多量混入
3　黒　色（7.5Ｙ Ｒ2/1）
4　黒褐色（５Ｙ Ｒ3/2）焼土　炭化物多量混入
5　灰黄褐色（10Ｙ Ｒ4/2）粘土質
6　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/4）黄褐色土少量混入
7　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/3）粘土質
8　黒　色（10Ｙ Ｒ2/1）粘土質

第79図　ＳＮ025石囲炉実測図



第80図　ＳＮ025出土遺物

石囲の東方同一面に、大形粗製深鉢形土器の口縁部大破片４枚が並んでいる。この下面には接合する口縁部は見られないことから、自然に割れたものではなく、意識的に破砕して並置したものと考えられる。胴下半部は一部が石囲北側の上部を覆っており、この下に別の粗製深鉢形土器が検出された(第80図２)。最初に第Ⅲ層中で検出された半精製深鉢形土器は、これら石囲と同一面で検出された土器よりもかなり上位にある。本遺構周辺は完形土器を含む多量の土器を出土する捨て場的状況にあり、この土器も石囲及び他の２点の完形土器と直接の関りを有せず、偶然に下位の遺構と重複した可能性は無いとは言えない。しかし、大形粗製深鉢と編年上大きな時間的懸隔はないと考えられるし、石囲を若干埋土した上に置かれたことも想定できよう。第80図１は、口径33.8cm、胴部最大幅35.5cm、器高推定88.2cmを測り、底部を欠く。口縁部に８条の沈線による文様帯がある。２は口径22.2cm、底径７cm、器高17.3cm、３は口径18.2cm、

底径66cm、器高15.6cmを測る。

ＳＮ026 石囲炉（第82図・第40図版）

ＫＨ58グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認された。径120cmほどの円形石囲炉である。北東部の石が殊に大きく、長さ52cmを測り、これと対峙する位置にある東南部の石がこれに次ぐ。石は地面に対し縦に突き刺してあり、焼土はないが、底面に広く焼面が見られる。

ＳＮ027 石囲炉（82図・第40図版）

ＫＦ58グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認された。北半部の石は散逸しているが、南半分は良好な残存状態で、石を縦に突き刺した二重の石囲となっている。径140cmほどに推定される。焼土及び焼面は見られない。

ＳＮ028 石囲炉（第82図・第40図版）

ＫＣ56グリッド内に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。かなり錯乱しており、西側の石は直線上をなすが、やはり円形ないしは楕円形を呈するものであろう。径100～120cmに推定される。石は縦に突き刺しており、焼土及び焼面はなく、埋土に大洞Ａ式の土器片を含んでいた。

ＳＮ029 石囲炉（第82図・第41図版）

ＫＦ60グリッド内にあり、第Ⅳ層上面で確認された。大きく錯乱を受けており、掘り込み部からかなり離れて石が散逸するが、おおよそ径100cmほどの円形ないしは楕円形を呈するものであろう。掘り込み中央部に小ピットが存在する。焼土、焼面は見られない。

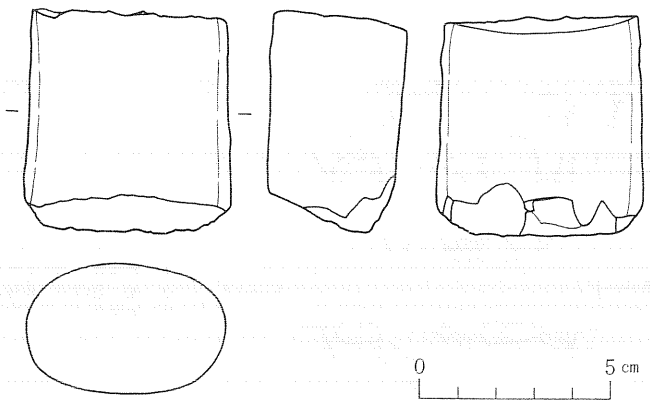
ＳＮ030 石囲炉（第82図・第41図版）

ＫＢ56グリッド内にあり、石囲炉の中では最東端にある。第Ⅳ層上面で検出された。これも石はかなり散乱した状況を示しているが、掘り込みの大きさから90cm×60cmほどの楕円形を呈するものであろう。焼土、焼面ともになく、埋土中より磨製石斧が出土した（第81図）。なお本遺構の北20cmの所に、70cm×50cmの範囲で焼土が薄く分布していた。ここで火を焚いたものではなく、むしろ焼土だけを移動させて捨てたものとの感が強い。

ＳＮ031 焼土遺構

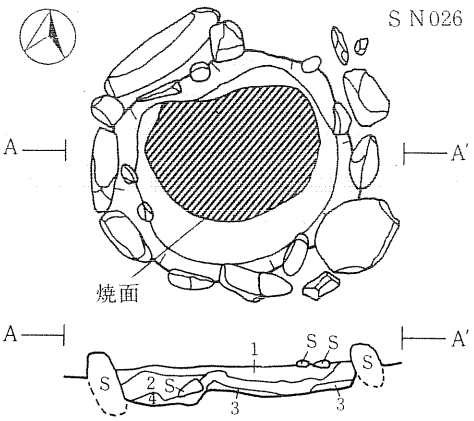
（第83図・第41図版）

ＫＨ61グリッドにあり、第Ⅳ層上面に確認された。平安時代のＳＮ009・032・035に極めて近い位置にあり、本遺構も同時代に属するものかも知れないが、上面の一部に縄文式土器が覆っていること



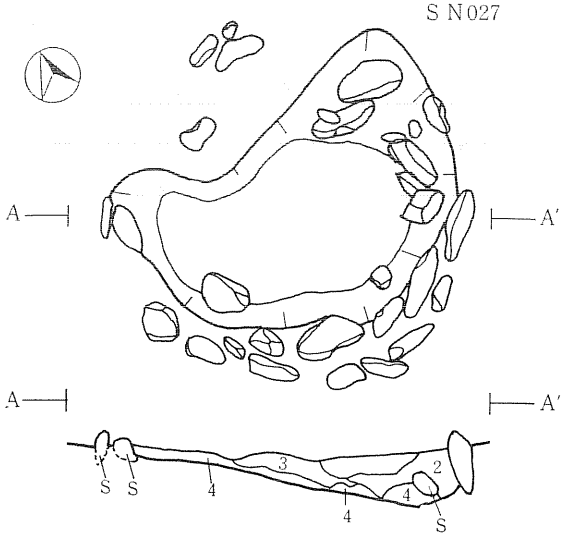
第81図　ＳＮ030出土遺物

S N026



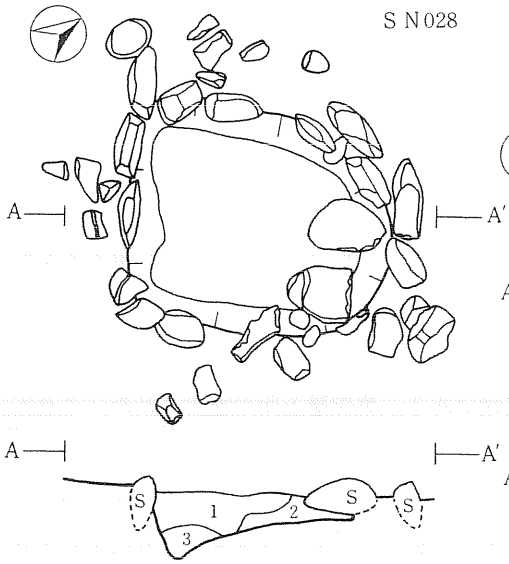
1　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
2　黒褐色(7.5Y R3/2）炭化物少量混入
3　褐　色(7.5Y R4/4）焼土少量混入
4　暗褐色(7.5Y R3/3）

S N027



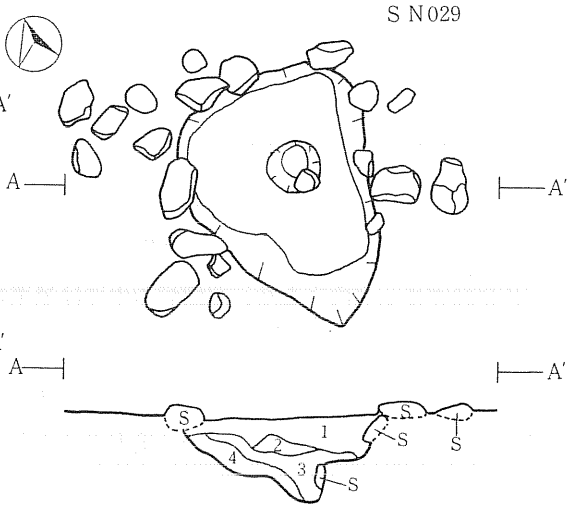
1　黒褐色(7.5Y R3/2）炭化物少量、小石多量混入
2　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量、小石少量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
4　褐　色（10Y R4/6）

S N028



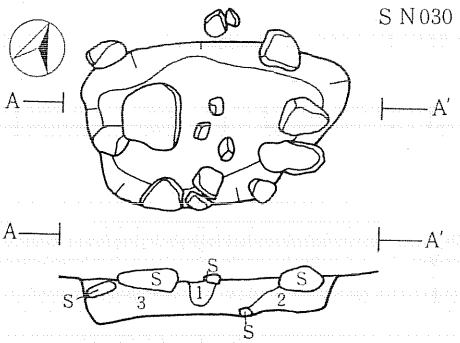
1　黒褐色（10Y R3/2）炭化物微量、小石少量混入
2　暗褐色（10Y R3/3）礫少量混入
3　暗褐色（10Y R3/4）

S N029

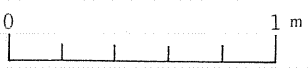


1　黒褐色（10Y R3/2）　炭化物微量、小石少量混入
2　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R4/3）炭化物微量混入
4　にぶい黄褐色（10Y R5/3）炭化物微量、小石少量混入

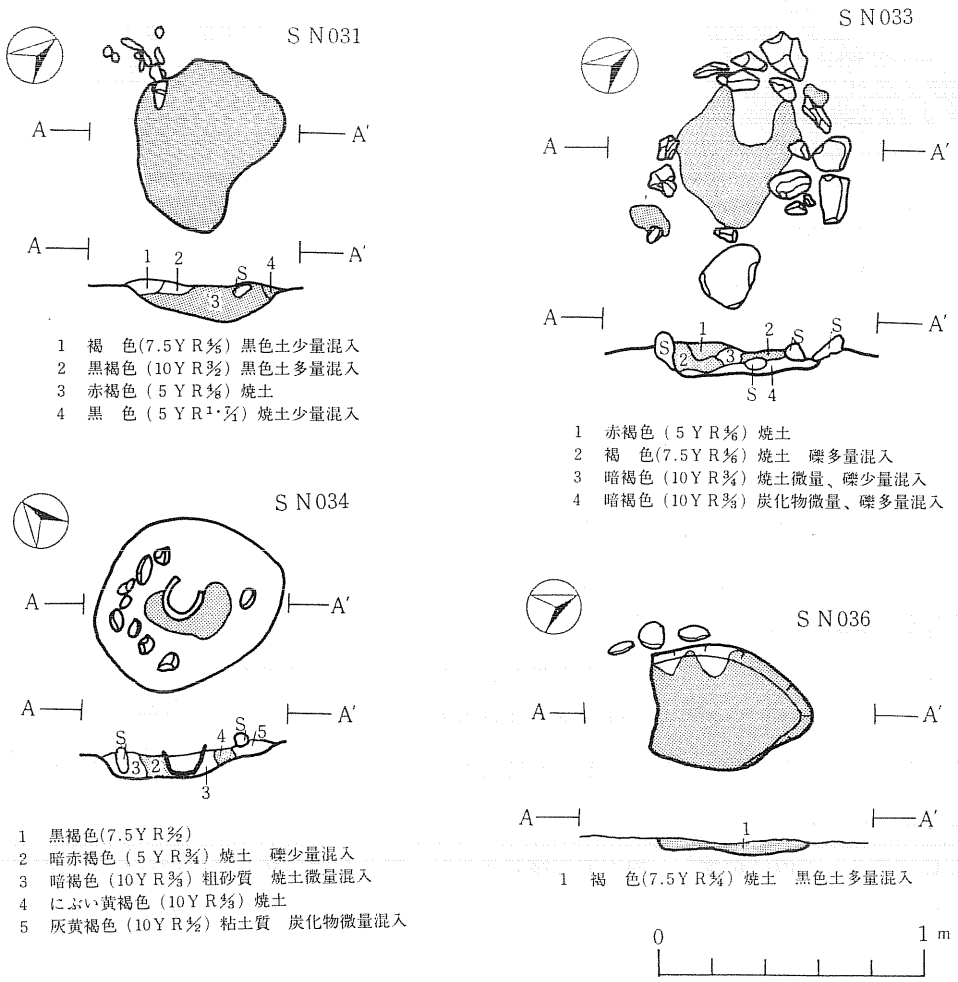
S N030



1　暗褐色(7.5Y R3/3）
2　褐　色(7.5Y R4/3）小石微量混入
3　暗褐色（10Y R3/3）炭化物多量、黄色粘質土少量混入



第82図　S N026～030石囲炉実測図



第83図　ＳＮ031・033・034・036石囲炉・焼土遺構実測図

から縄文時代の遺構と見なした。

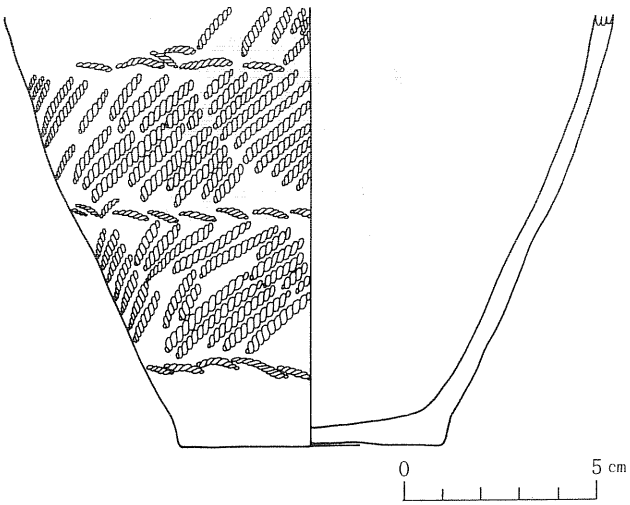
平面は65cm×55cmの不整円形を呈し、焼土の厚さは12cmを測る。

ＳＮ033石囲炉（第83図・第42図版）

ＬＤ58グリッドに位置し、第Ⅳ層中で確認された。石囲がかなり散逸しているが、主として北半部には良好に残存しており、これと焼土の範囲から、径70cmの石囲を想定できる。他の石囲炉に比して焼土が多く、厚さ12cmに堆積している。

ＳＮ034石囲炉（第83図・第42図版）

ＬＥ57グリッド内にあり、ＳＮ033の南西1.9ｍに位置し、第Ⅳ層中で確認された。北及び西側に径５～10cmの８個の小石がＬ字形に並ぶ他は、東南部に１個見られるだけで、石囲はかなり散逸している。平面形態も明確ではないが、石囲周囲の掘り込みの形から、径54cmほどの円



第84図　ＳＮ034埋設土器

形あるいは楕円形となるものであろう。中央部に深さ11cmほどの深鉢形土器の下部（第84図）が埋設されており、その周囲に焼土が分布している。

ＳＮ036石囲炉（第83図）

ＬＧ58グリッド内にあり、ＳＮ039石囲炉の東隣に位置する。第Ⅳ層下部で確認された。60cm×45cmの範囲で焼土が分布するが、西側に３個の石があり、これが散逸した石囲の残余である可能性もある。焼土の厚さは６cmを測る。

ＳＮ037石囲炉（第85図・第43図版）

ＬＨ57グリッド北西端に位置し、第Ⅳ層下部で確認された。本遺構も錯乱を受けており、石囲、焼土ともに雑然としている。殊に焼土は石囲掘り込み部よりもかなり外部にまで広がっている。石囲の大きさは120cm×90cmを測る楕円形で、石囲内の焼土は厚さ７cmに堆積している。

ＳＮ038焼土遺構（第85図）

ＬＣ57グリッド内に位置し、地山面で確認された。深さ12cmの掘り込み内に40cm×40cmの範囲で焼土が分布するが、西側はこの遺構よりも新しいピットに切られている。焼土は３～６cmの厚さで堆積している。

ＳＮ039石囲炉（第85図・第43図版）

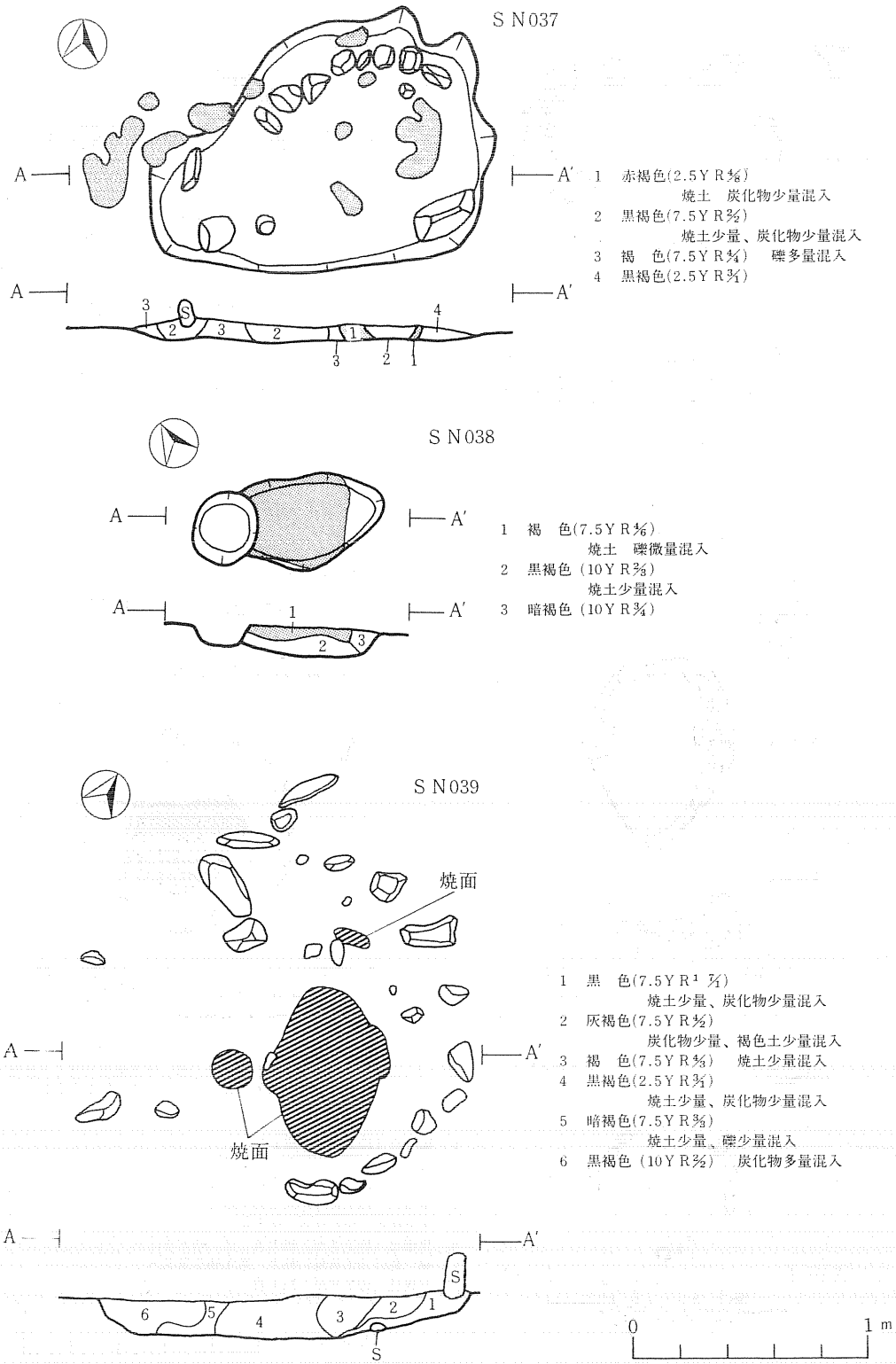
ＬＧ58内にあり、ＳＮ036焼土遺構の西隣に位置する。第Ⅳ層下部で確認された。石囲は東南部では良好に残存しているが、他は乱れており、西～南側にはほとんど残存しない。石囲の掘り込みは径160cmと大きく、石囲の径も140～150cmに推定される。上面と埋土中には焼土がわずかに見られるが、底面には焼面を形成している。

ＳＮ040石囲炉（第86図・第44図版）

ＫＨ54グリッド北部に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。10個の石をもって径104～116cmの円形石囲炉を構築している。残存状態はほぼ良好で、掘り込みは20cmを測る。焼土、焼面は見られない。

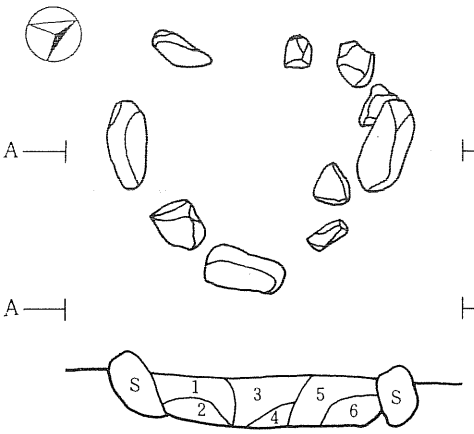
ＳＮ041石囲炉（第86図）

ＫＩ48グリッド杭のすぐ南側に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。石は７個を数えるが、散



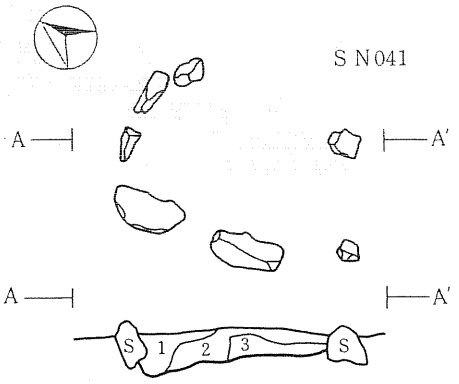
第85図 S N037～039石囲炉・焼土遺構実測図

S N040



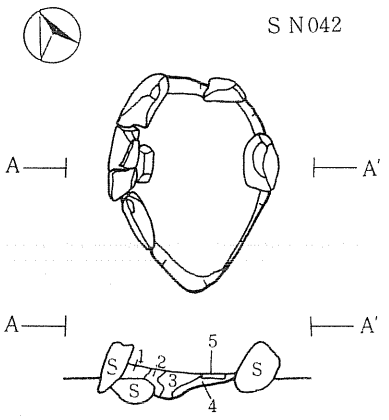
1　黒褐色（10Y R 3/2）粘土質
2　にぶい黄褐色（10Y R 4/3）粘土質
3　黒褐色(7.5Y R 3/2)
4　褐　色（10Y R 4/4）
5　黒褐色（10Y R 3/3）粘土質
6　暗褐色（10Y R 3/3）炭化物少量混入

S N041



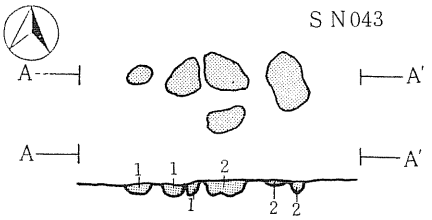
1　暗褐色（10Y R 3/4）炭化物少量、褐色土少量混入
2　褐　色（10Y R 4/4）炭化物微量混入
3　にぶい黄褐色（10Y R 4/3）明褐色土少量混入

S N042



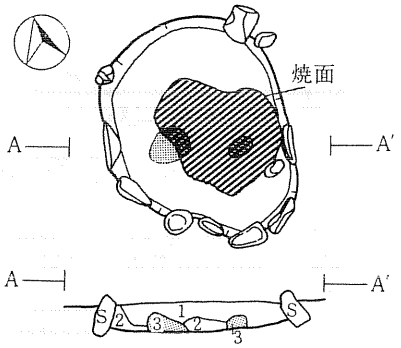
1　暗褐色（10Y R 3/4）粘土質　炭化物微量混入
2　褐　色（10Y R 4/4）灰白色土微量混入
3　褐　色(7.5Y R 4/3）焼土微量、炭化物微量混入

S N043



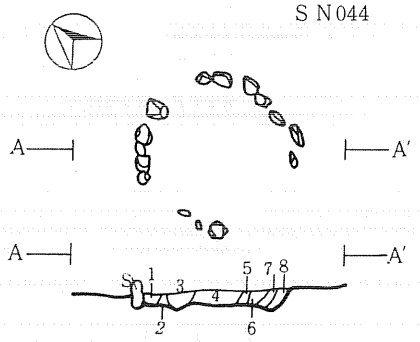
1　暗褐色(7.5Y R 3/4）焼土
2　褐　色(7.5Y R 4/6）焼土

S N046



1　灰黄褐色（10Y R 4/2）粘土質
2　褐　色(7.5Y R 4/4）焼土少量、灰黄褐色粘質土少量混入
3　赤褐色（5 Y R 5/6）焼土　灰黄褐色粘質土少量混入

S N044



1　褐灰色（10Y R 4/1）粘土質
2　褐　色（10Y R 4/4）小石少量混入
3　黒褐色（10Y R 3/2）炭化物少量混入
4　暗褐色（10Y R 3/4）炭化物少量混入
5　灰黄褐色（10Y R 5/2）粘土質
6　黒褐色（10Y R 3/1）粘土質　炭化物少量混入
7　褐　色(7.5Y R 4/4）粘土　炭化物少量混入
8　暗褐色（10Y R 3/3）粘土質

0　1 m

第86図　S N040～044・046石囲炉・焼土遺構実測図

逸した状況を示すものと思われる。東側には石は存在しないが、西側に長さ28cm、幅14cmの他の石よりもことさら大きな石２個を用いている。掘り込みは深さ16cmを測るが、焼土、焼面は存在しない。102cm×70cmほどの大きさを測る。

ＳＮ042 石囲炉（第86図・第44図版）

ＫＪ51グリッド杭のすぐ西側に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。石は７個を数えるのみで南側には残存せず、北側の石囲も途切れており散逸した状況にある。しかし、掘り込みの大きさから80cm×65cmの楕円形を呈するものと看取される。焼土、焼面ともに存在しない。

ＳＮ043 焼土遺構（第86図）

ＬＦ50グリッド内にあり、第Ⅳ層の捨て場的状況を示す極めて多量の遺物出土地点の中に、わずかながら焼土が検出された。他地点から焼土のみを運んだものではなく、この位置での火の使用が考えられる。おおよそ70cm×30cmの範囲を測る。

ＳＮ044 石囲炉（第86図・第44図版）

ＬＩ52グリッド内にあり、地山面で確認された。径10cmに満たない小石を使用した円形石囲炉である。石は15個を数え、南側には全くないが、北側、西側の一部も途ぎれていることから、「コ」の字形の石囲炉と見るよりは、散逸した状況を示すものと思う。径60cmほどを測る。

ＳＮ046 石囲炉（第86図）

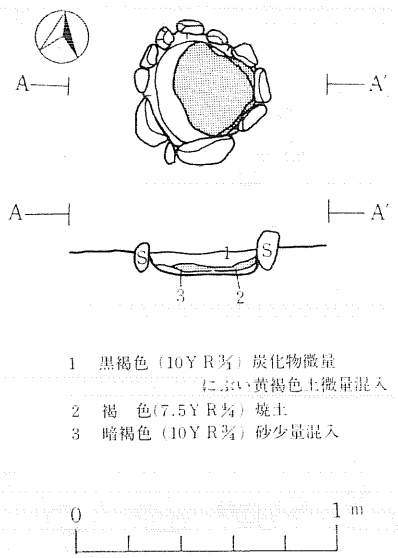
ＫＩ52グリッドにあり、第Ⅳ層上面で確認された。石はかなり散逸しているが、90cm×75cmほどの楕円形を呈するものであろう。焼土が５～８cmの厚さに堆積し、底面に焼面がある。

ＳＮ047 石囲炉（第87図・第45図版）

ＫＩ46グリッドにあり、地山面で確認された。残存状態は良好で、径58cmを測る。石は地面に対して縦方向に突きさしており、南側に長径20cmほどの殊に大きな石を用いている。焼土がわずかに分布している。

ＳＮ048 石囲炉（第20図・第45図版）

ＫＩ46グリッドにあり、地山面で確認された。ＳＫ026の西にほぼ接している。径60cmほどの掘り込みの中に石９個を用いて径45cmの円形石囲炉を構成する。遺構中央部に、上端径15cmの深鉢形土器底部が埋設され、この横～下部にかけて焼土が堆積していた。また土器周辺から径３～５mmほどの骨片が数片出土した。

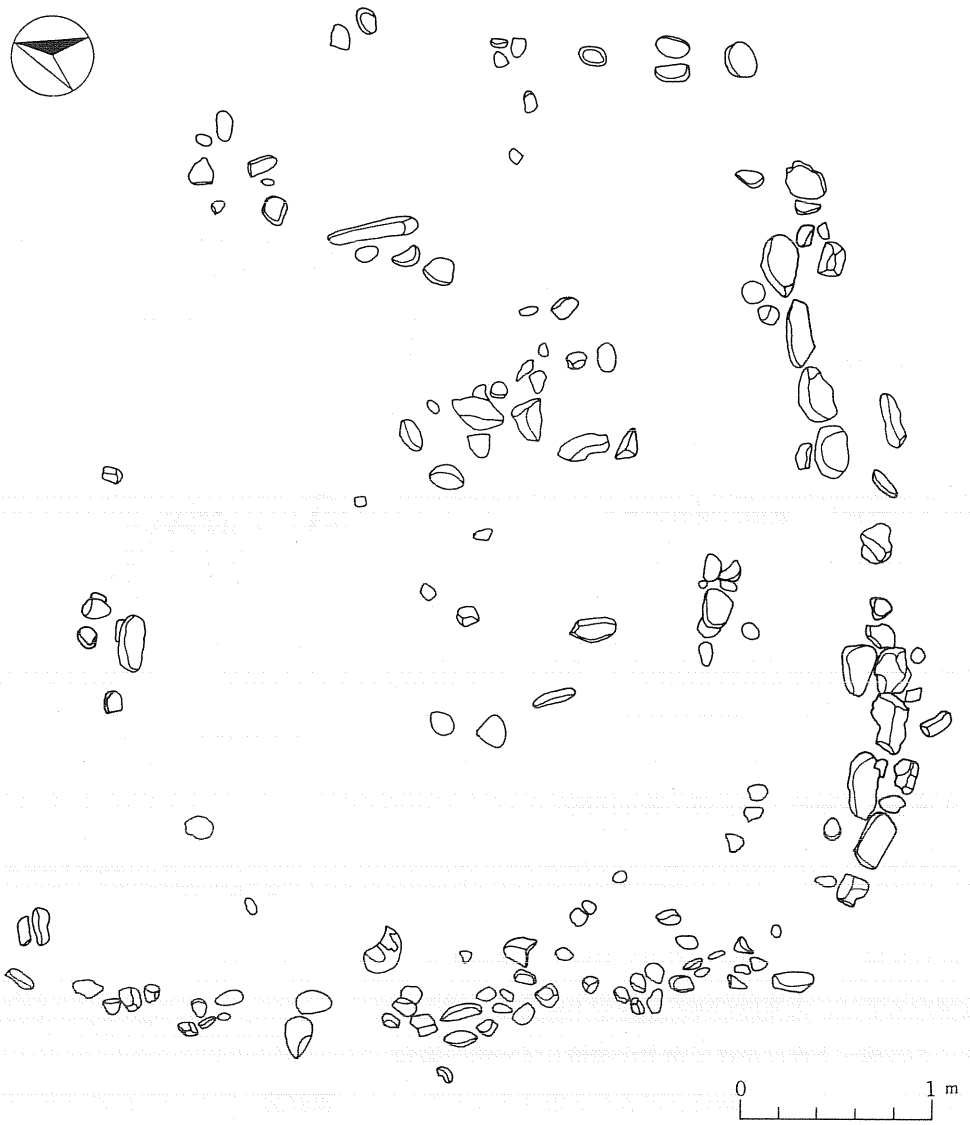


第87図　ＳＮ047石囲炉実測図

④　配石遺構

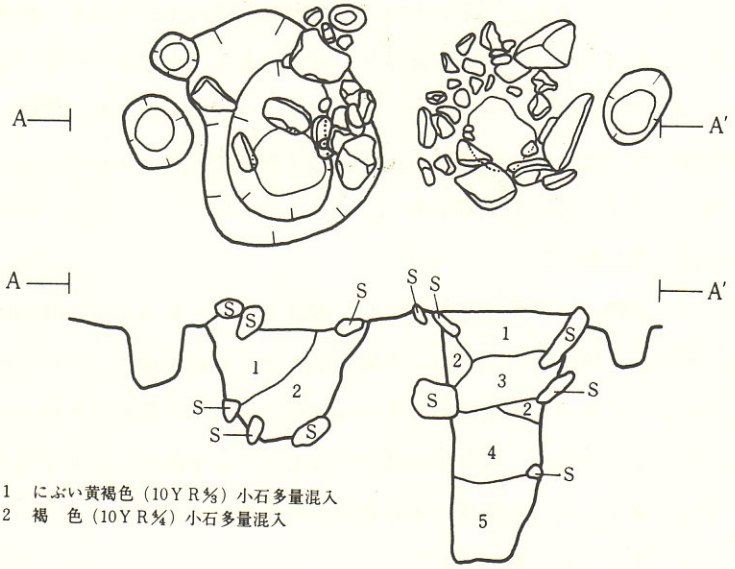
ＳＱ001（第88図・第５図版）

ＬＣ54・55、ＬＤ54・55の４グリッドにかかり、Ⅳ層上面で確認された。東西560㎝、南北460㎝の方形を呈している。配石の状況を見ると、西側では径５～10㎝の石が２～３列に並べられ、その中に径20㎝ほどの石が少数点在する。石列は緩やかにカーブを描いて東西方向の直線となるが、この列では30㎝×15㎝ほどの大きめの石が主体となり、ほぼ一列に並んでいる。東側列は石が少ないが、径10㎝ほどの石である。北側にはほとんど石が見られず、ラインを形



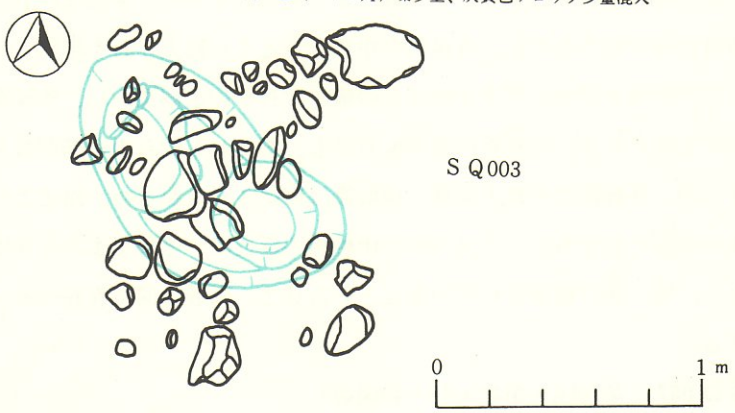
第88図　ＳＱ001配石遺構実測図

S Q002

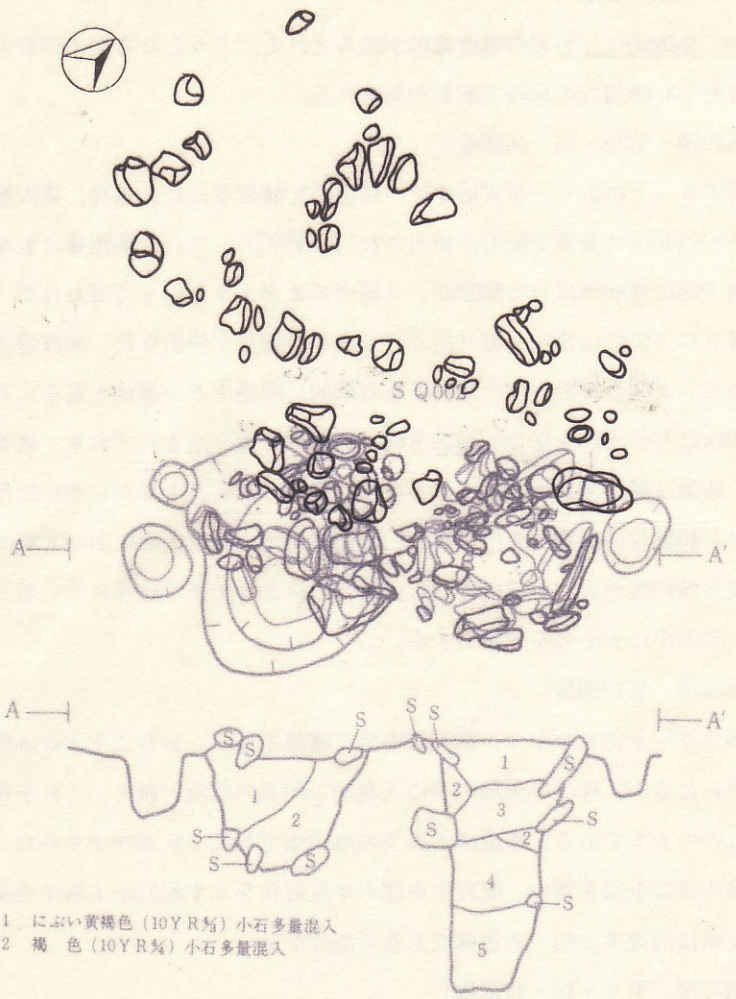


1　にぶい黄褐色（10Y R 5/3）小石多量混入
2　褐　色（10Y R 5/4）小石多量混入

1　黒褐色（10Y R 3/1）礫微量、黄褐色粒子多量混入
2　褐　色（10Y R 5/4）砂質　黒褐色土多量混入
3　褐灰色（10Y R 5/1）粘土質
4　黄灰色（2.5Y 5/1）粘土質
5　褐　色（10Y R 5/4）礫多量、灰黄色ブロック少量混入

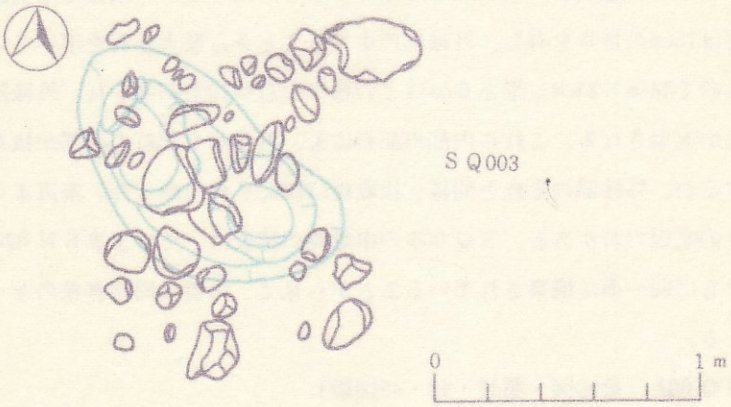


第89図　S Q002・003配石遺構実測図



1　にぶい黄褐色（10YR5/4）小石多量混入
2　褐　色（10YR5/4）小石多量混入

1　黒褐色（10YR3/1）礫微量、黄褐色粒子多量混入
2　褐　色（10YR5/4）砂質　黒褐色土多量混入
3　褐灰色（10YR5/1）粘土質
4　黄灰色(2.5Y5/1）粘土質
5　褐　色（10YR5/4）礫多量、灰黄色ブロック少量混入



第89図　SQ002・003配石遺構実測図

成していないが、全体的には方形の遺構輪郭が読みとれる。こうした方形の列石の内側やや南寄りに、おおよそ200cm四方の範囲で配石が見られる。

ＳＱ002（第89図・第36・45・46図版）

ＬＣ56・57両グリッドにあり、第Ⅳ層中位～地山面で確認された。当初、第Ⅳ層を若干掘り下げた所で220cm×150cmの範囲で配石が検出され(第89図①)、これを実測後に取り除くと、この配石東～南側下部に径80cmほどの配石が、２箇所のまとまりとなって現われた（第89図②)。さらにそれら各々の下位には地山を掘り込んで土壙が付随して検出され、第Ⅳ層中に検出された配石をも含めて、土壙とその上位の配石とを有機的に関連する一遺構と見なした。東側の土壙は上面が径50cmほどの円形を呈し、垂直方向に円筒形に掘り込まれており、底部までの深さは92cmを測る。底面は36cm×18cmの楕円形となり、平坦である。上部から中位にかけて石が含まれ、埋土中から10数片の土器片が出土した。その西側の土壙は上面において85cm×70cmの楕円形を呈し、幾分傾斜度の大きい側壁を有し、48cmの深さまで掘り込まれている。上部から底部に至るまで、埋土中に大小の石を含有する。

ＳＱ003（第89図・第42図版）

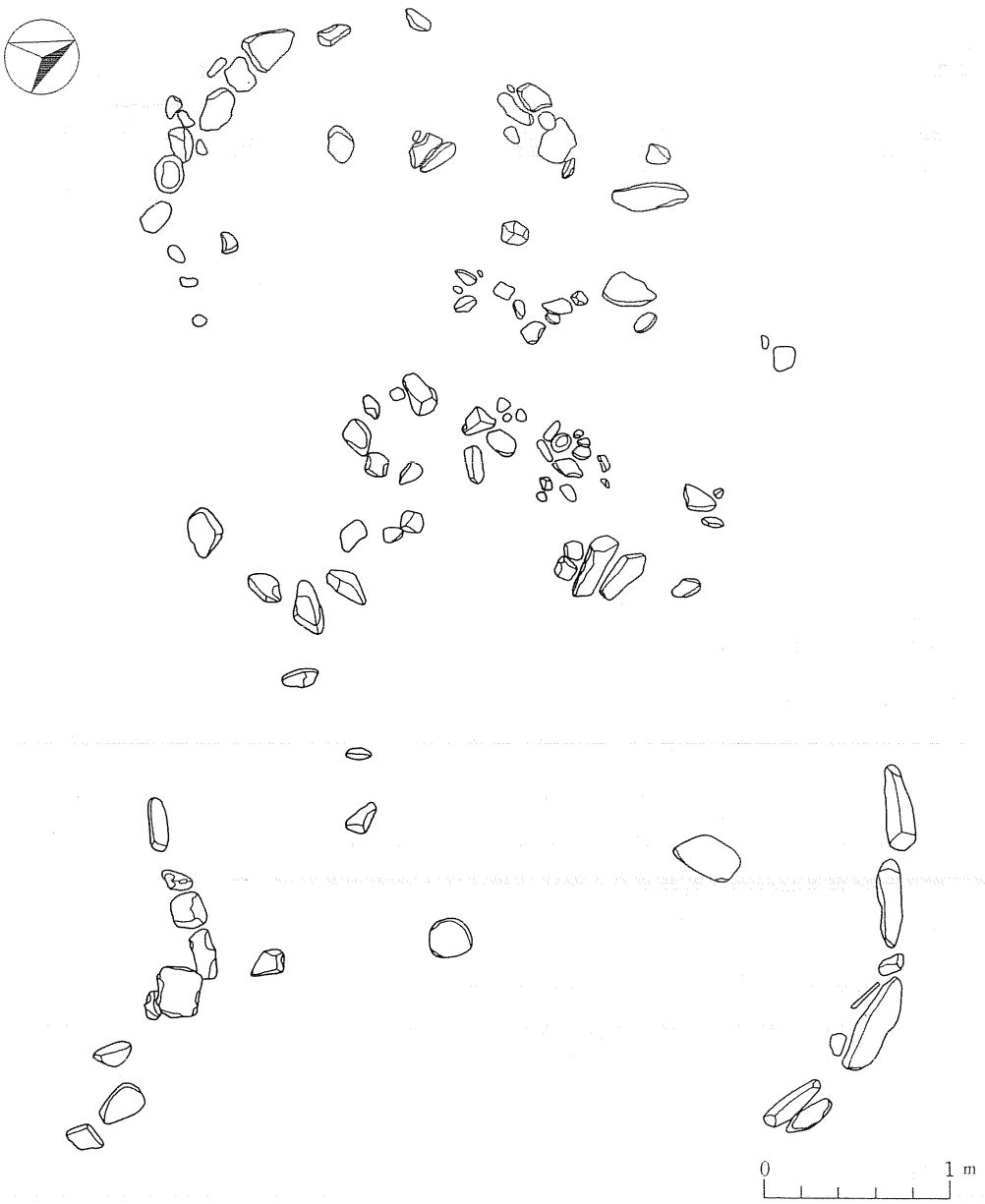
ＬＤ57・58両グリッドにまたがり、第Ⅳ層中位で確認された。おおよそ150cm四方の範囲で石の分布が認められるが、殊に中央部の石に人為的な配石の状況が窺え、これを中心として配石が行われたもののようである。本遺構の直下の地山面でＳＫ106が検出された。両者の大きさは配石が土壙のほぼ全面を覆い、配石中央部の半放射状を示す配石が土壙中央部の位置にあたる。配石と土壙は関連する同一の遺構である可能性が強い。

ＳＱ006（第77図・第６・46・47図版）

ＬＧ55グリッド北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。台形もしくは扇形を呈し、左右対称で、北側に弧状に湾曲する長辺を有する。長辺の東西端は216cm、南北の中軸線は124cmを測る。扁平な石を縦に突き刺して外縁ラインを形成するが、東辺ほぼ全部と北辺の一部を欠く。南辺は75cmの長さを有し、外縁部の中でもことさら長大な石を用いている。この内側には大きいもので44cm×23cm、厚さ６cmほどの扁平な石が10余個置かれ、外縁部の石との隙間にも小さな石が充塡される。これら内部の配石にも、あたかも配石の一部が抜き取られた如き空間が存在するが、外縁部のそれと同様、抜取痕は確認されなかった。南辺より114cm南に前述のＳＮ024の北辺の石がある。ＳＱ006の中軸線の延長は、そのままＳＮ024の中軸線と合致し、両者ともに同一面に構築されていることから見て、両者は同時存在のセットとして把握できると考える。

ＳＱ007（第90図・第47・48・49図版）

ＬＡ50、ＬＢ49・50、ＬＣ50のグリッドにまたがり、第Ⅳ層上面で確認された。北東部に長

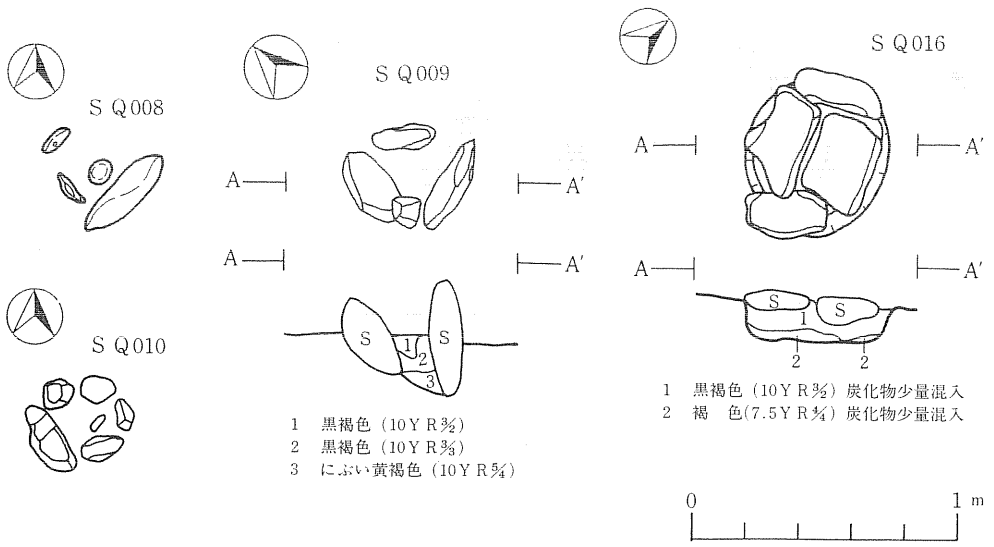


第90図　ＳＱ007配石遺構実測図

さ29cm～56cmの長大な石５個を弧状に配し、これに呼応するが如く、南西端にも長さ２ｍほどの弧状の配石があり、南西端にも１ｍの長さで直線状となる４個の列石が見られ、全体としては660cm×500cmの楕円形を意識したもののようである。この内側の主として西半にではあるが、幾つかの小円形を呈する配石のまとまりが、弧状の配石に内包される様相で看取される。

ＳＱ008（第91図）

ＬＤ51グリッド北西部にあり、地山面で確認された。東南部に40cm×12cmの長大な石１個を



第91図　ＳＱ008～010・016配石遺構実測図

置き、この北西部に径８～14cmの小さな石３個を配し、全体としては46cm×38cmの範囲に収まる小さな配石である。遺物は検出されなかった。

ＳＱ 009（第91図・第49図版）

ＬＢ47グリッド南西部に位置し、地山面で確認された。これも50cm×40cmの範囲内に収まる小さな遺構である。配石の状況は、長大な石３個で三角形を構成し、その一頂点に径12cmの球形の石１個を据えている。長大な石のうち最も大きなものは、平面形で長さ38cm、幅12cmを測り、断面では長さ44cmのうち約半分を地山に埋め込んで直立させている。

ＳＱ 010（第91図）

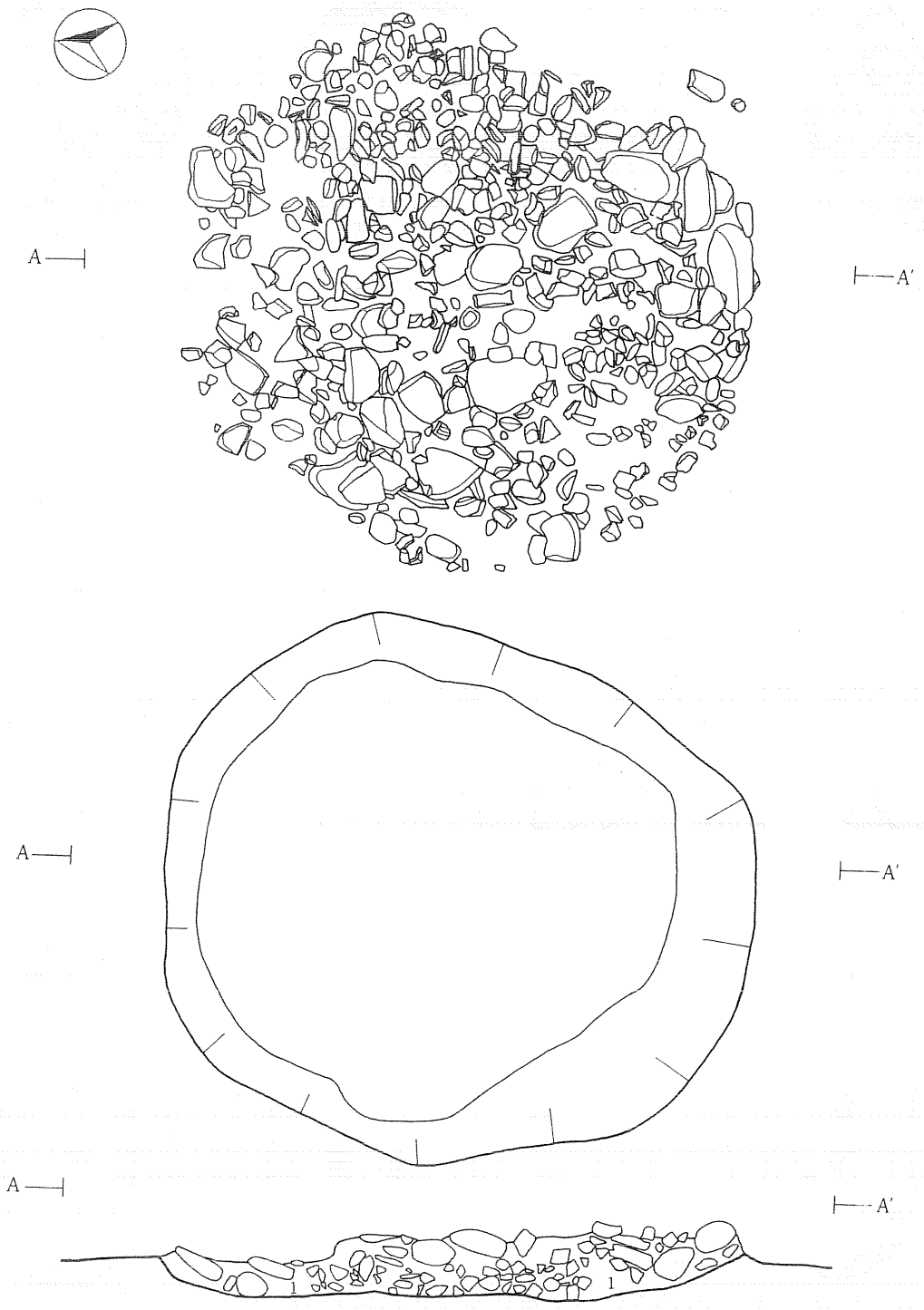
ＬＥ51・52両グリッドにまたがり、第Ⅳ層で確認された。ＳＱ008の北北西1.2ｍに位置する。南西側に長さ30cm、幅12cmの最大の石を置き、これに径10cm前後の円形に近い石４個を加え、全体としては径40cmの円形となる。石を埋設するための掘り込みはなく、遺物も出土しなかった。

ＳＱ 014（第92図・第６図版）

ＬＤ44・45にあり、地山面で確認された。地山面に250cm×200cm、深さ20cmの掘り込みを穿ち、この中に大小の石を充填させたものである。配石上面には径20cm以上の大きめの石が多く石のレベルは地山面レベルよりも17～18cm上位にあるので、掘り込み下面までの深さは40cm近くに達する箇所がある。底面はほぼ平坦で、緩やかに立ち上がる壁を有している。配石中に鍬状の打製石器、凹石、特殊磨製石器が含まれていた（第93図）。

ＳＱ 015（第94図・図版49・50）

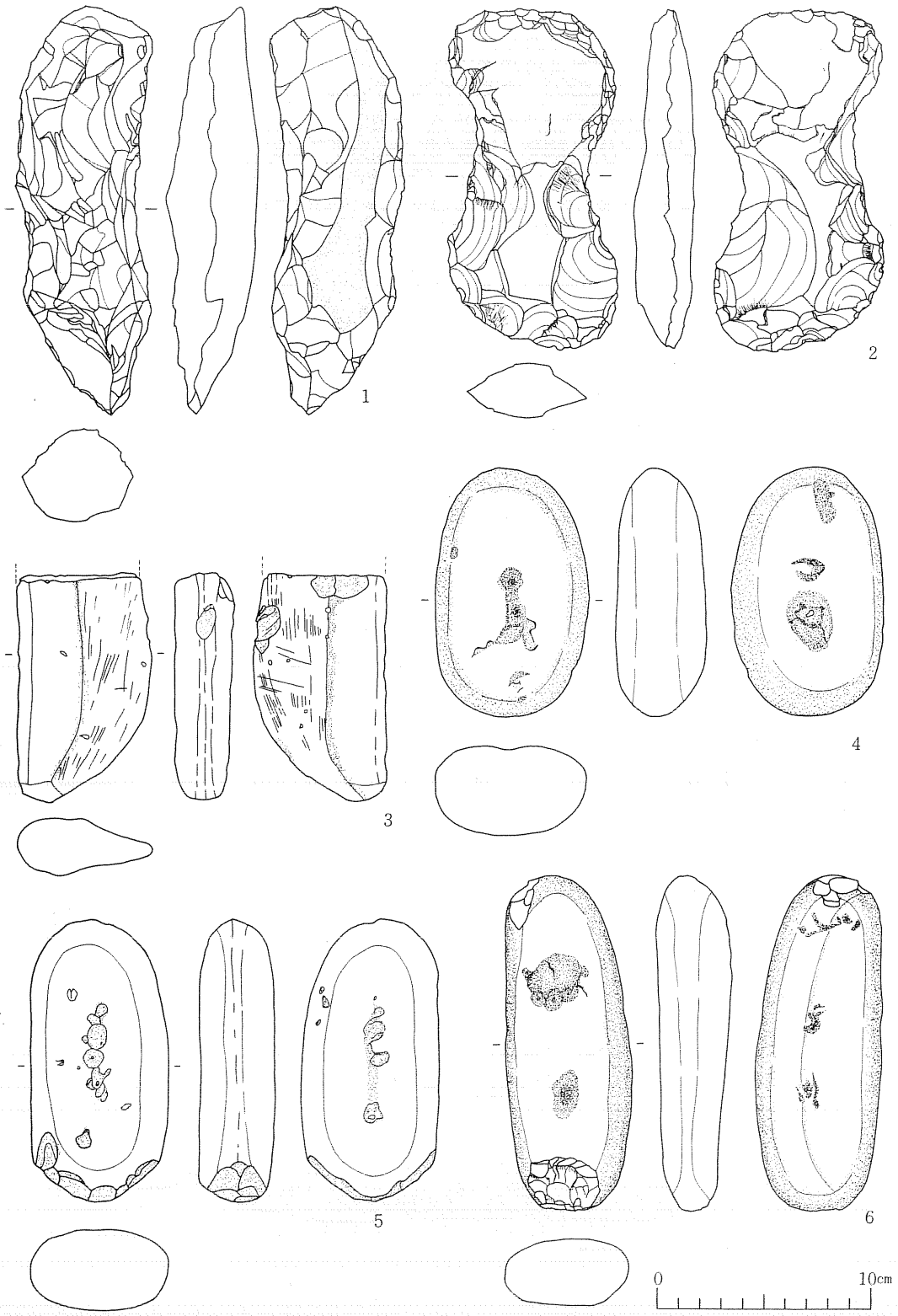
ＭＣ67・68両グリッドにかかり、地山面で確認された。西側は水路造成時に破壊を受け、配



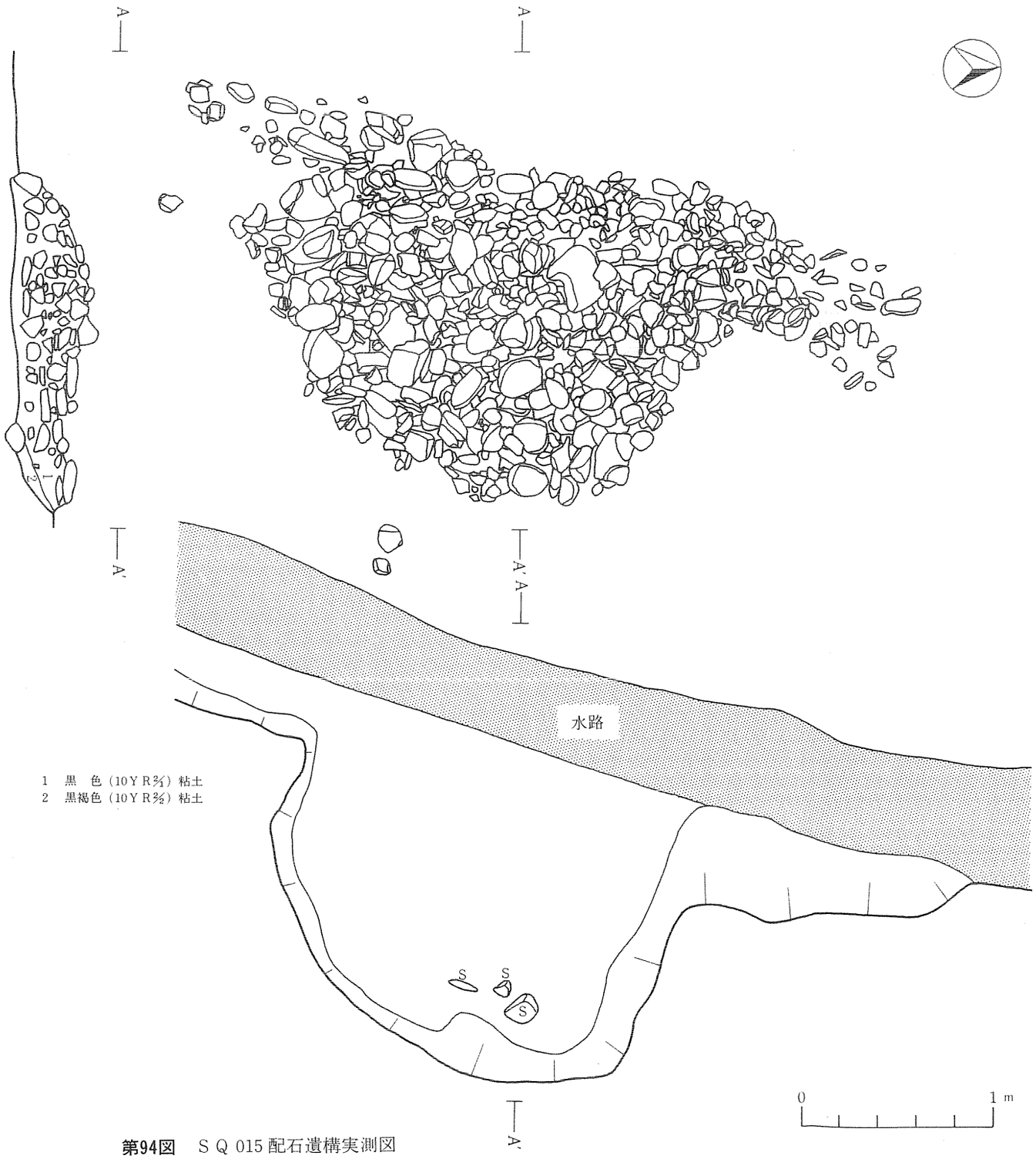
1　黒褐色（10YR3/1）粘土質

0　1 m

第92図　ＳＱ014配石遺構実測図



第93図　ＳＱ014出土遺物

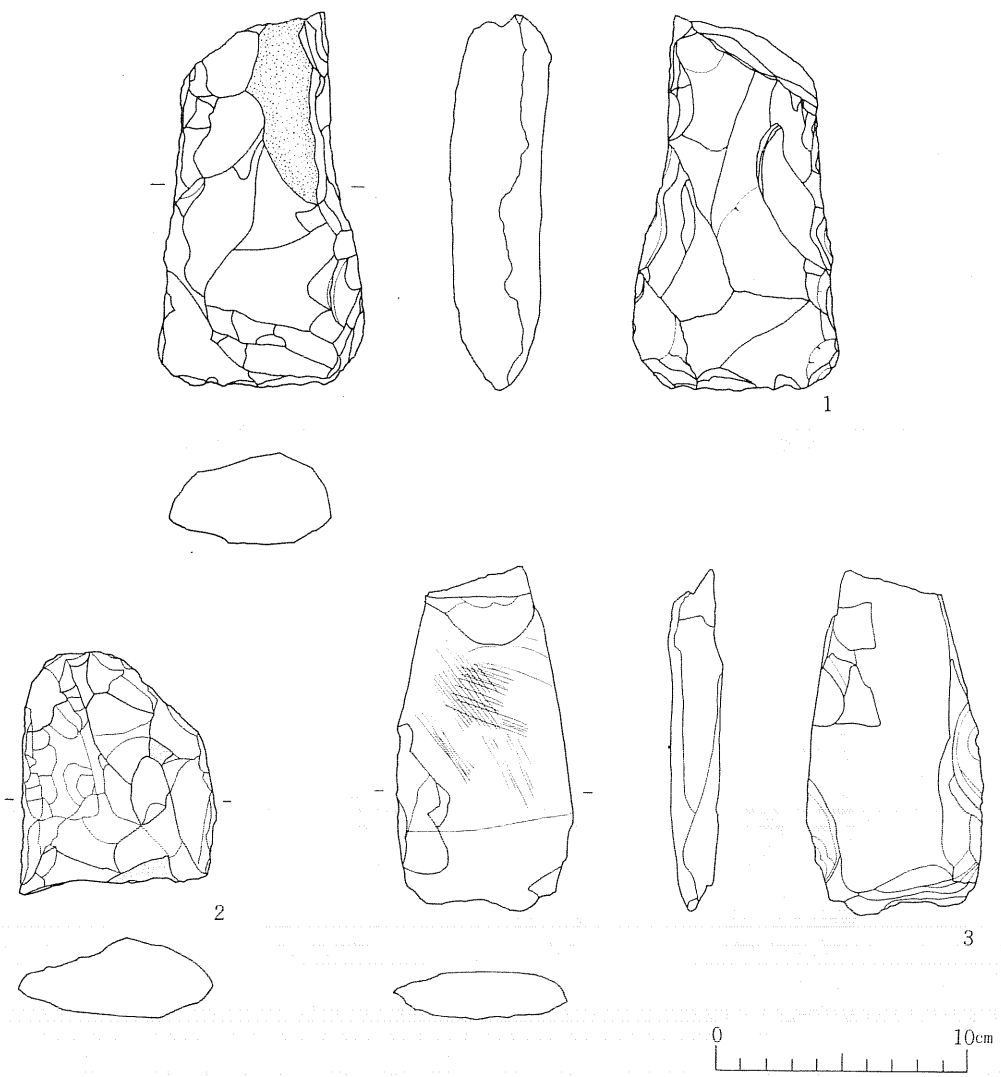


第94図　ＳＱ015配石遺構実測図

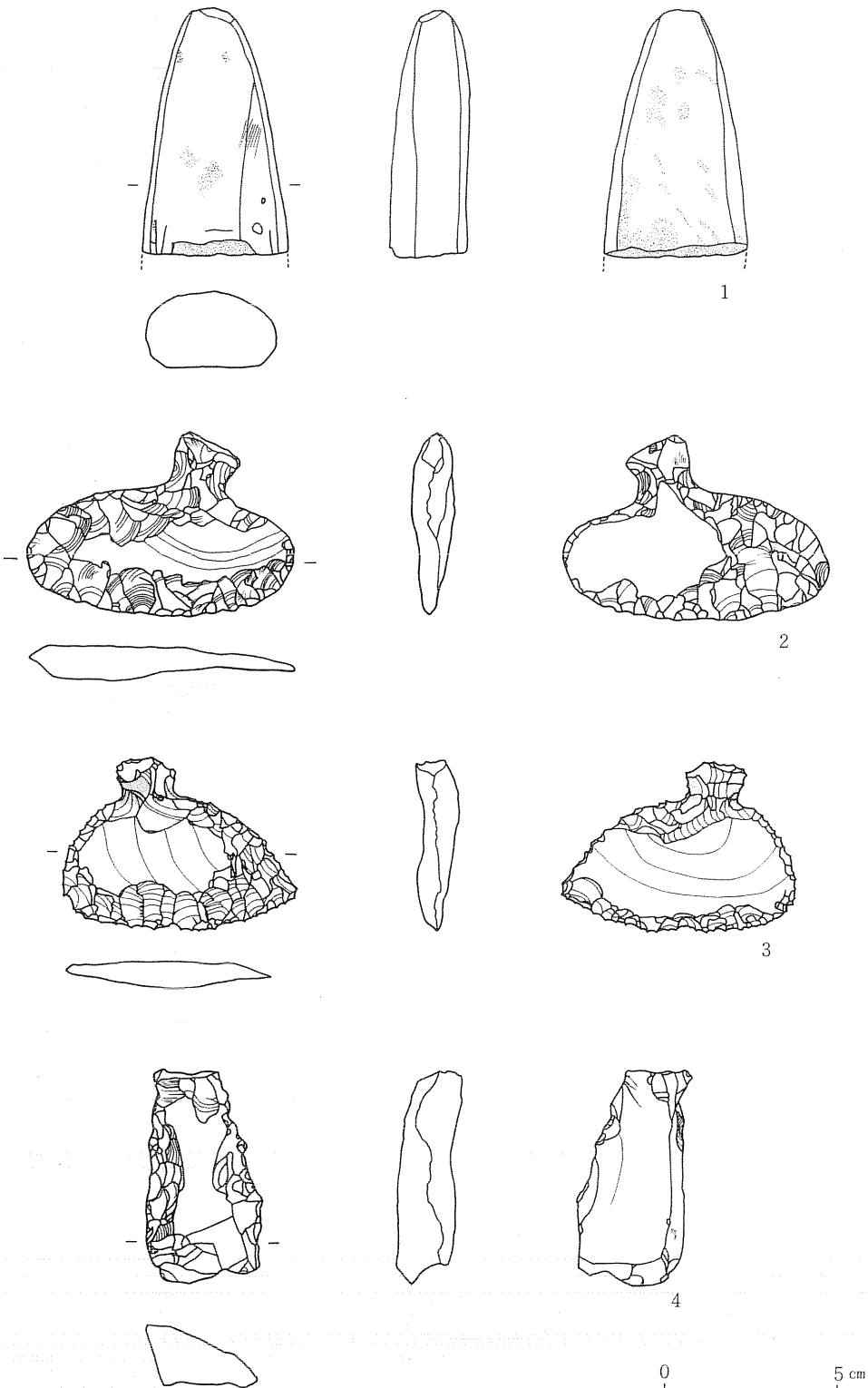
石が水路内に拡散しているが、平面形はＳＱ014同様楕円形を呈するものと思われる。東側約½のみの残存であるが、地山面から深さ約20cmの掘り込み内に多数の石を充填させている。配石は地山確認面よりも最高で30cm上位に達し、最大のもので36cm×32cmの大きさを測る。掘り込み底面はほぼ平坦で、壁は緩やかである。配石中より打製石斧（第95図１～３）、磨製石斧（第96図１）、石匙（同図２・３）、箆状石器（同図４）が出土した。

ＳＱ016（第91図・第50図版）

ＫＪ56グリッドにあり、ＳＮ014の南東約80cmの位置にある。第Ⅳ層上面で検出された。35cm×24cmほどの四角い板状の石を並置し、この両側にも35cm×15cmほどの石を２個配置して、全体では65cm×50cmの大きさを測る。配石下に浅い掘り込みを有するが、遺物はない。



第95図　ＳＱ015出土遺物（1）

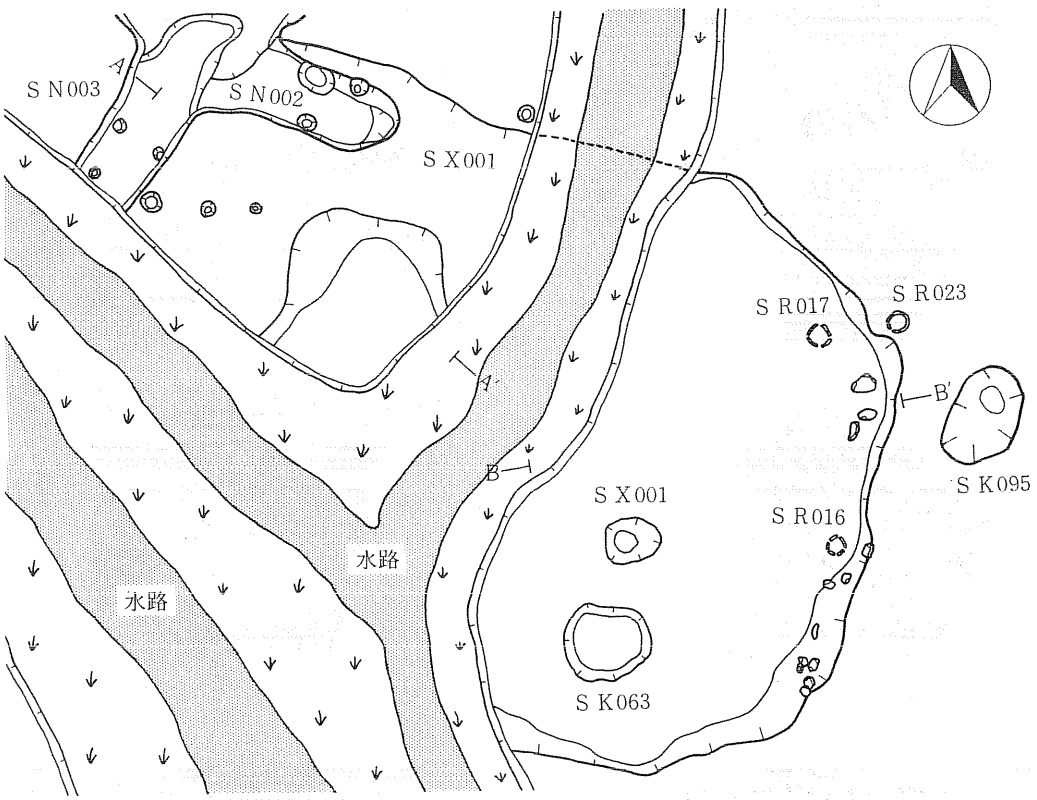


第96図　ＳＱ015出土遺物　(2)

⑤　その他の遺構

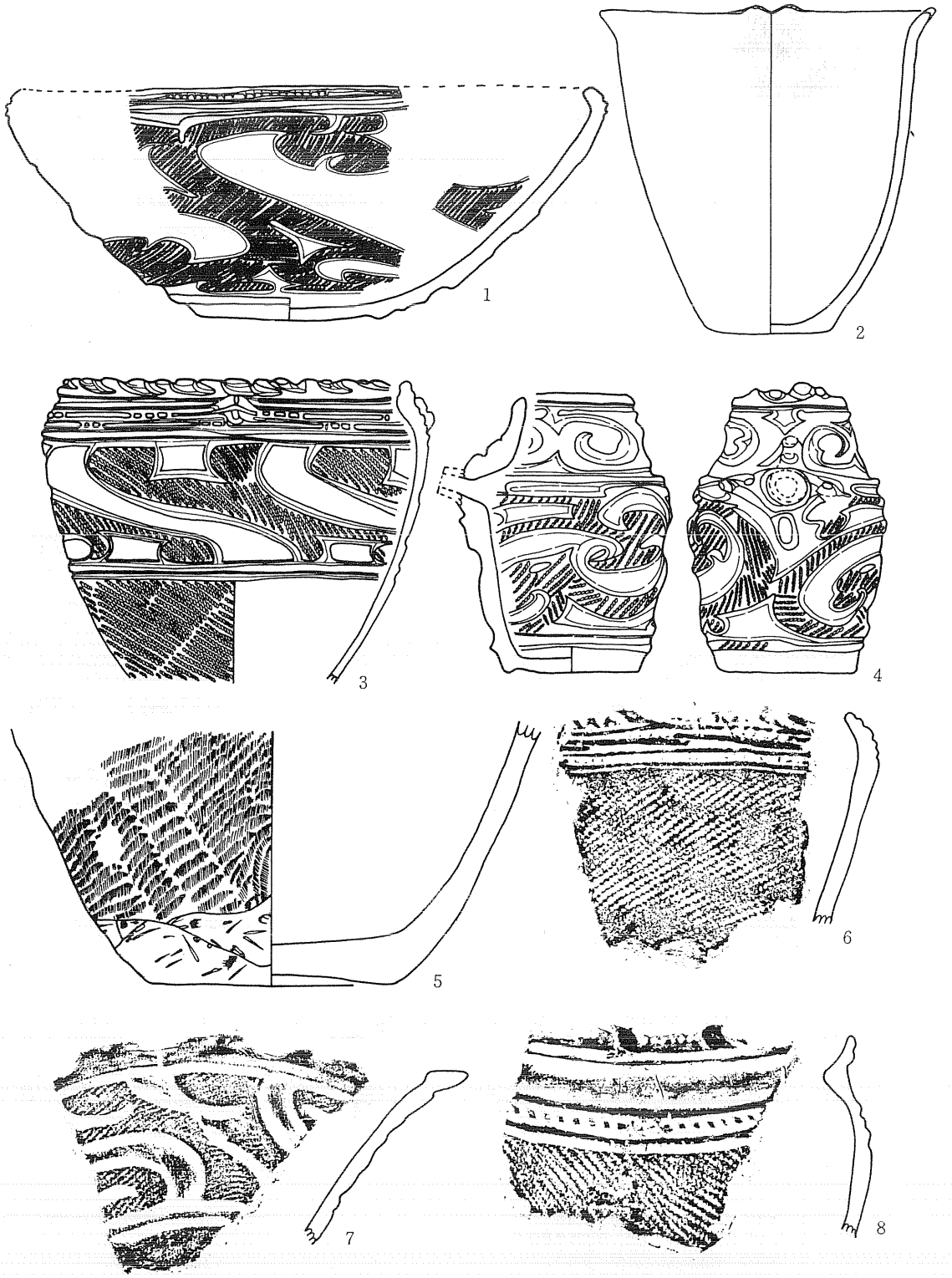
ＳＸ001（第97図・第51・71図版）

ＭＦ58・59、ＭＧ58・59、ＭＨ59グリッドに渡り、地山面で検出された。水路及び畦畔によって大きく切られ、北西部にはＳＮ001～004焼土遺構が重複する。加えて、地山面と埋土との識別が難しく、正確な輪郭は把握できなかったが、おおよそ９ｍ×６ｍの楕円形を呈するものであろう。中心部に向かって極めて緩やかに凹んでおり、自然の落ち込みであると判断される。最深部で確認面から約20cmの深さを測る。大洞C_1式の完形土器を含む多量の土器片と石器、自然石が投げ込まれた状況で出土した。

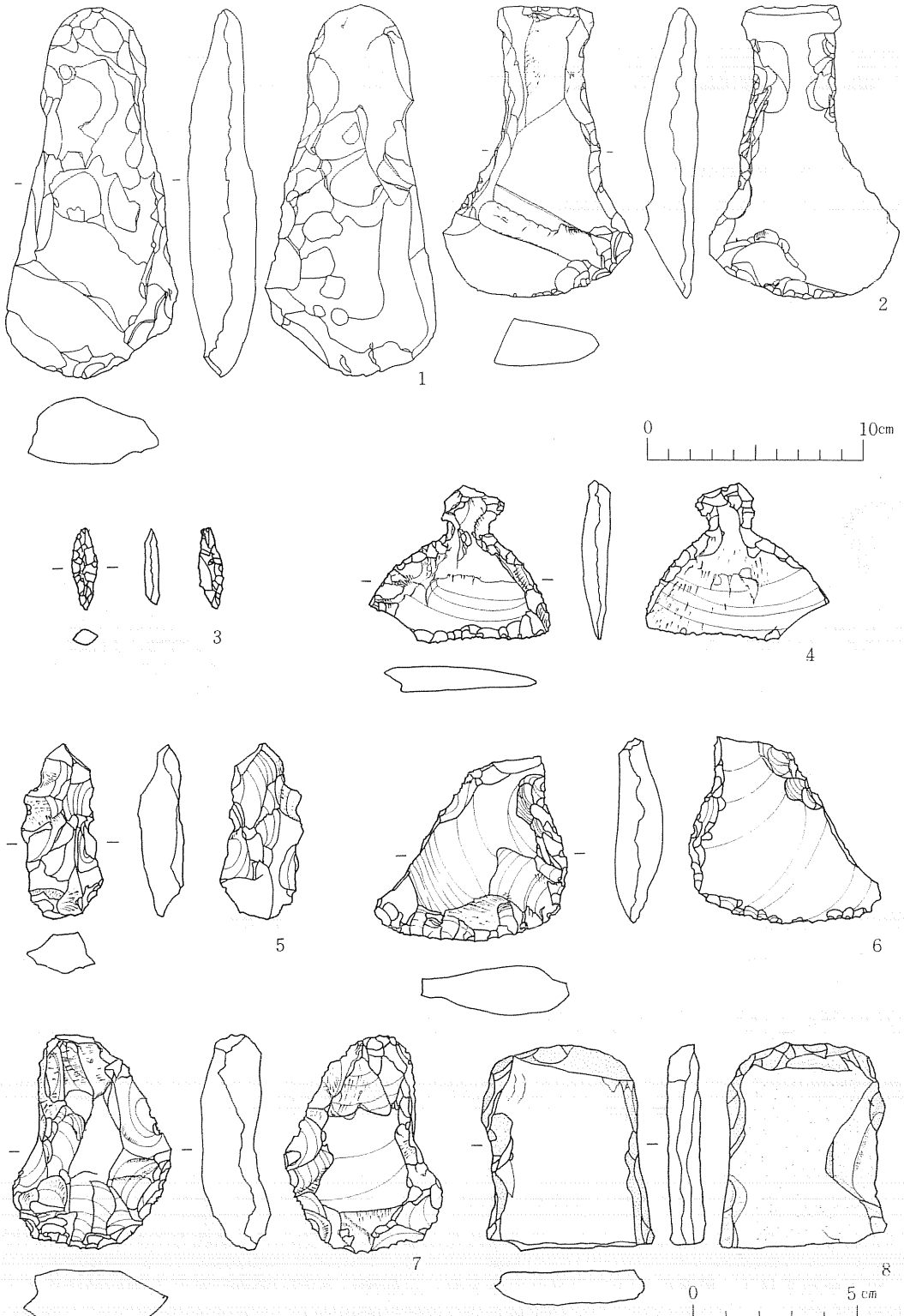


1　黒褐色（10ＹＲ3/2）炭化物少量混入
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）炭化物多量混入
3　暗褐色（10ＹＲ3/4）炭化物少量混入
4　黄褐色（10ＹＲ5/6）炭化物少量混入

第97図　ＳＸ001実測図



第98図　ＳＸ001出土遺物　(1)



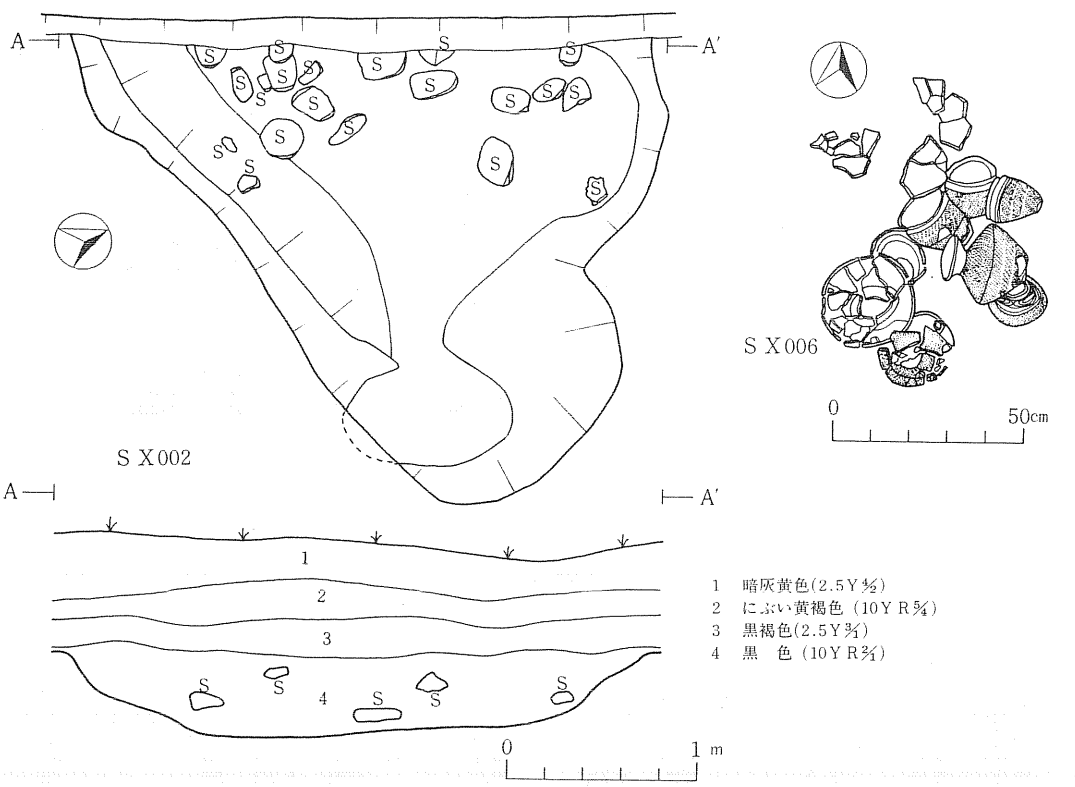
第99図　ＳＸ001出土遺物　(2)

第1表　ＳＸ001出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第98図 1	第71図版31	浅鉢	(18.0)cm	7.6cm	5.2cm	—	
〃 2	第71図版32	深鉢	(10.6)cm	10.3cm	3.8cm	10.3cm	
〃	———	深鉢	11.1cm	—	—	12.3cm	
〃 4	第71図版33	注口土器	4.0cm	8.7cm	4.4cm	6.4cm	
〃 5	第71図版34	深鉢	—	—	—	7.8cm	

ＳＸ002（第100図・第51図版）

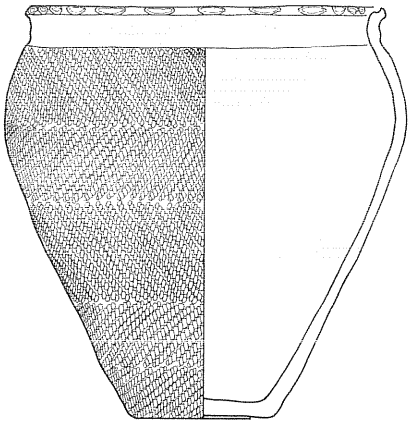
ＭＦ62グリッドの東側に位置し、地山面で確認された。西側は水路によって切られている。検出部分のみで東西240cm、南北300cm、不整形で、底面は東側から西側に向かってなだらかに落ち込んでいる。径20cm大の石が投げ込まれており、覆土下方から縄文土器片、上方から中世陶器が1点出土した。



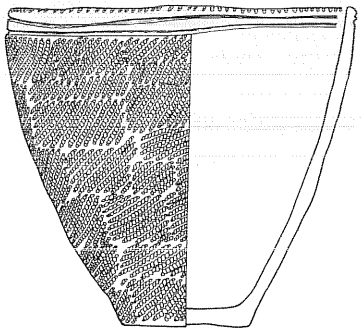
第100図　ＳＸ002・006土器一括廃棄遺構実測図

ＳＸ005土器一括廃棄遺構（第54図・第52・72・73図版）

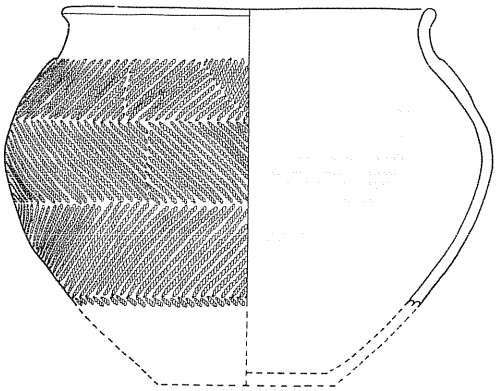
ＬＣ44グリッド南側にあり、地山面で確認された。ＳＫ144を切っており、東南端が不明瞭であるが、140cm×92cmの大きさに推定される土壙状の掘り込みで、北西方向が細く、南西側が広がっており、最深部で25cmの深さを有する。この中に大洞C_2式期の完形土器13個体及び土器破片、石鏃、小形の独鈷石、有溝半球状石製品が、一括廃棄された状態で出土した。



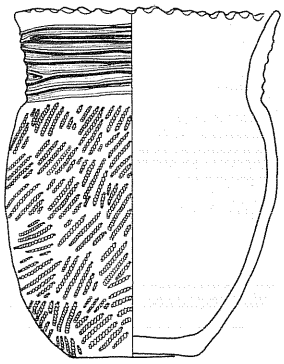
1



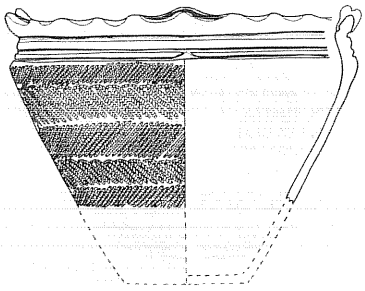
2



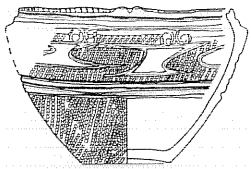
3



4



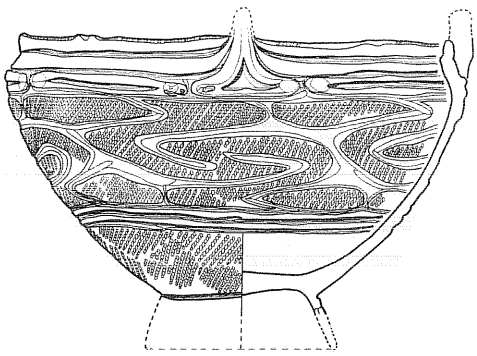
5



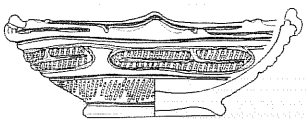
6

0 10cm

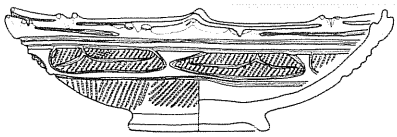
第101図　ＳＸ005出土遺物　(1)



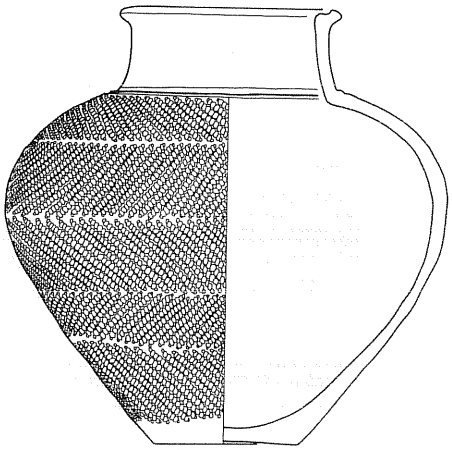
7



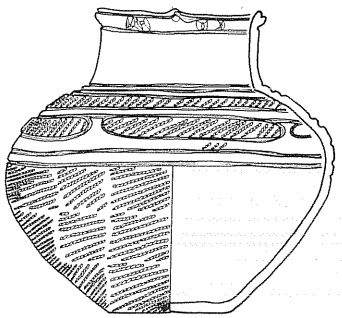
8



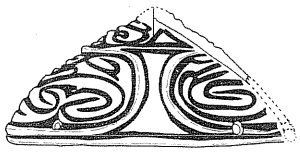
9

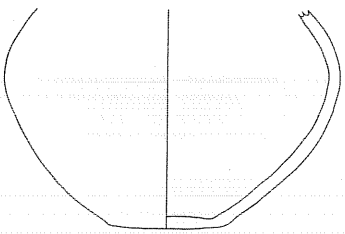


10

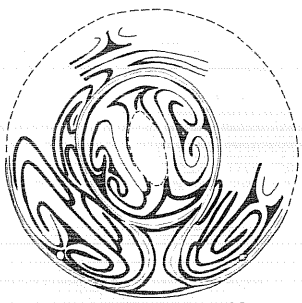


11





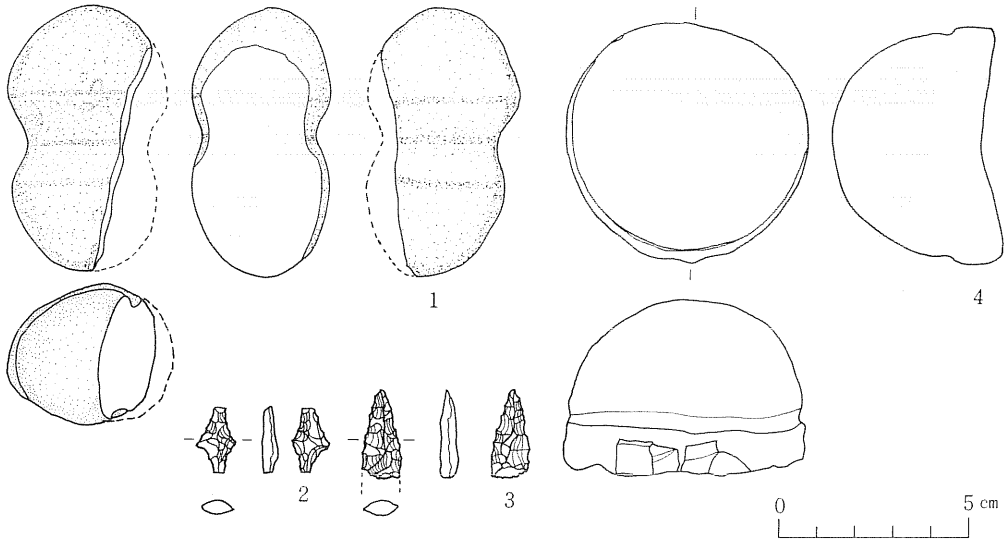
12



13

0 10cm

第102図　ＳＸ005出土遺物　(2)



第103図　ＳＸ005出土遺物　(3)

第２表　ＳＸ005出土土器計測値

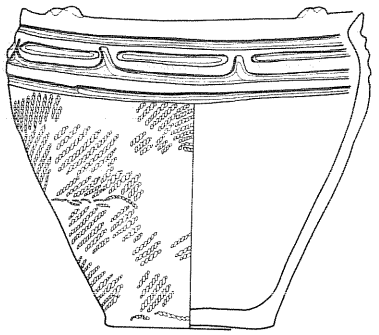
図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第101図 1	第72図版35	深鉢	13.6cm	16.2cm	5.7cm	17.9cm	
〃 2	〃 36	深鉢	13.6cm	12.7cm	5.0cm	—cm	
〃 3	〃 37	壺	14.8cm	(14.9)cm	(7.0)cm	(19.3)cm	
〃 4	———	深鉢	(10.3)cm	13.9cm	5.0cm	(10.7)cm	
〃 5	第72図版39	鉢	14.1cm	(11.0)cm	4.8cm	13.8cm	
〃 6	〃 39	鉢	(8.5)cm	6.2cm	3.5cm	(9.6)cm	
第102図 7	〃 40	台付鉢	17.3cm	(11.1)cm	6.9cm	18.4cm	
〃 8	〃 41	台付浅鉢	(11.5)cm	(4.2)cm	5.3cm	—cm	
〃 9	〃 42	台付浅鉢	15.5cm	4.9cm	5.4cm	—cm	
〃 10	———	壺	8.8cm	17.3cm	6.5cm	17.5cm	
〃 11	第73図版43	壺	6.5cm	12.4cm	4.9cm	12.8cm	
〃 12	〃 44	壺	—cm	—cm	4.8cm	13.8cm	
〃 13	〃 45	蓋	12.0cm	5.6cm	—cm	—cm	朱塗

ＳＸ006土器一括廃棄遺構（第100図・第７・52・53・73・74図版）

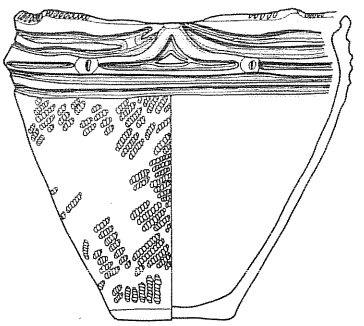
ＬＩ53・54グリッドにまたがり、第Ⅳ層上面の捨て場的状況の中に、壺、浅鉢、半精製鉢等８個体の完形土器が一括して廃棄された状態で検出された。土器は大洞Ａ式土器である。

第３表　ＳＸ006出土土器計測値

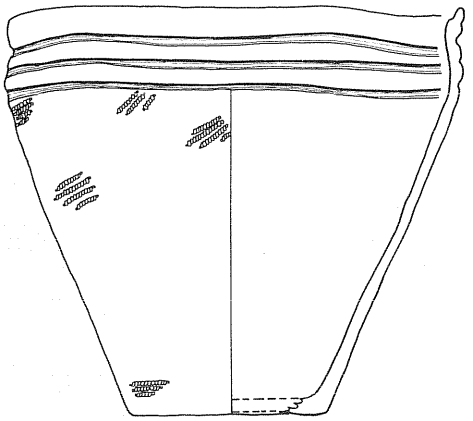
図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第104図 1	第73図版46	深鉢	13.4cm	12.9cm	6.5cm	14.4cm	
〃 2	〃 47	深鉢	13.0cm	12.5cm	4.7cm	13.9cm	
〃 3	〃 48	深鉢	18.5cm	16.1cm	7.6cm	19.1cm	
〃 4	〃 49	台付鉢	15.8cm	(14.3)cm	(7.0)cm	15.6cm	
〃 5	〃 50	壺	—	—	7.1cm	22.0cm	
〃 6	第74図版51	壺	—	—	7.3cm	17.3cm	
第105図 7	〃 52	壺	—	—	7.0cm	22.9cm	
〃 8	〃 53	壺	12.8cm	20.7cm	6.7cm	22.7cm	



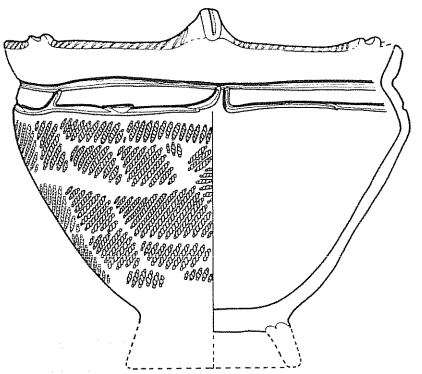
1



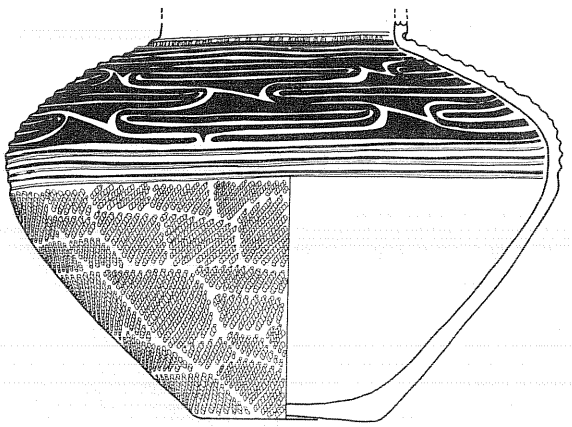
2



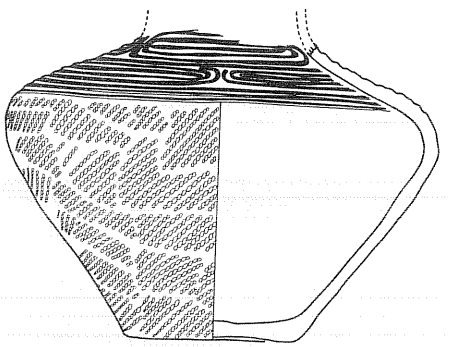
3



4



5



6

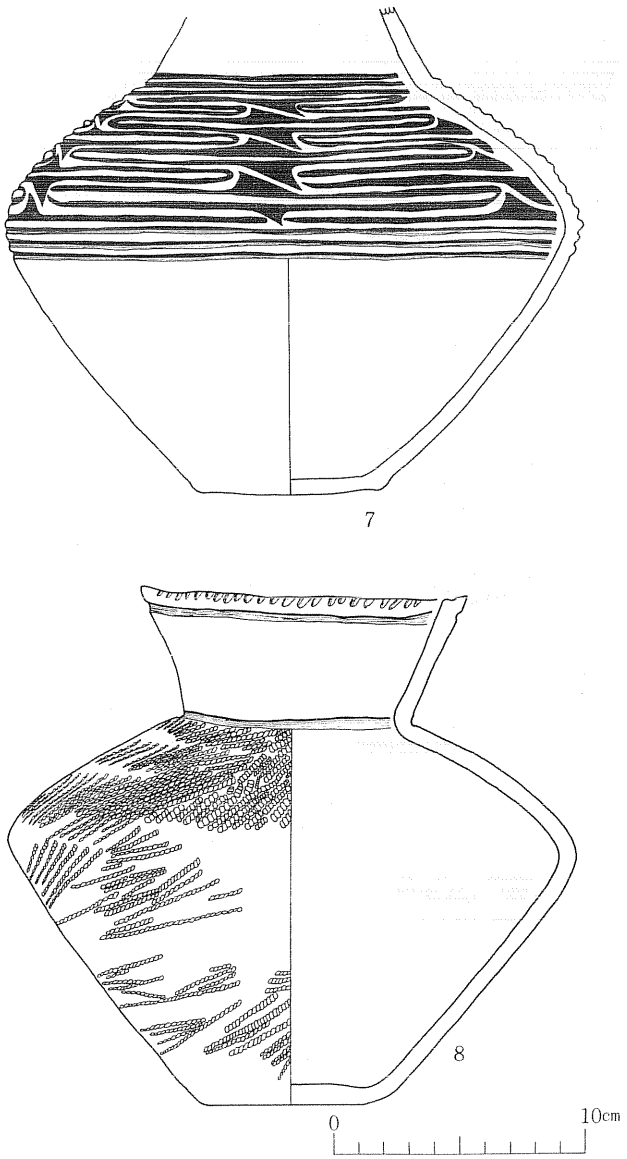
0 10cm

第104図　ＳＸ006出土遺物　(1)

ＳＸ008包含層

（第12図・第53図版）

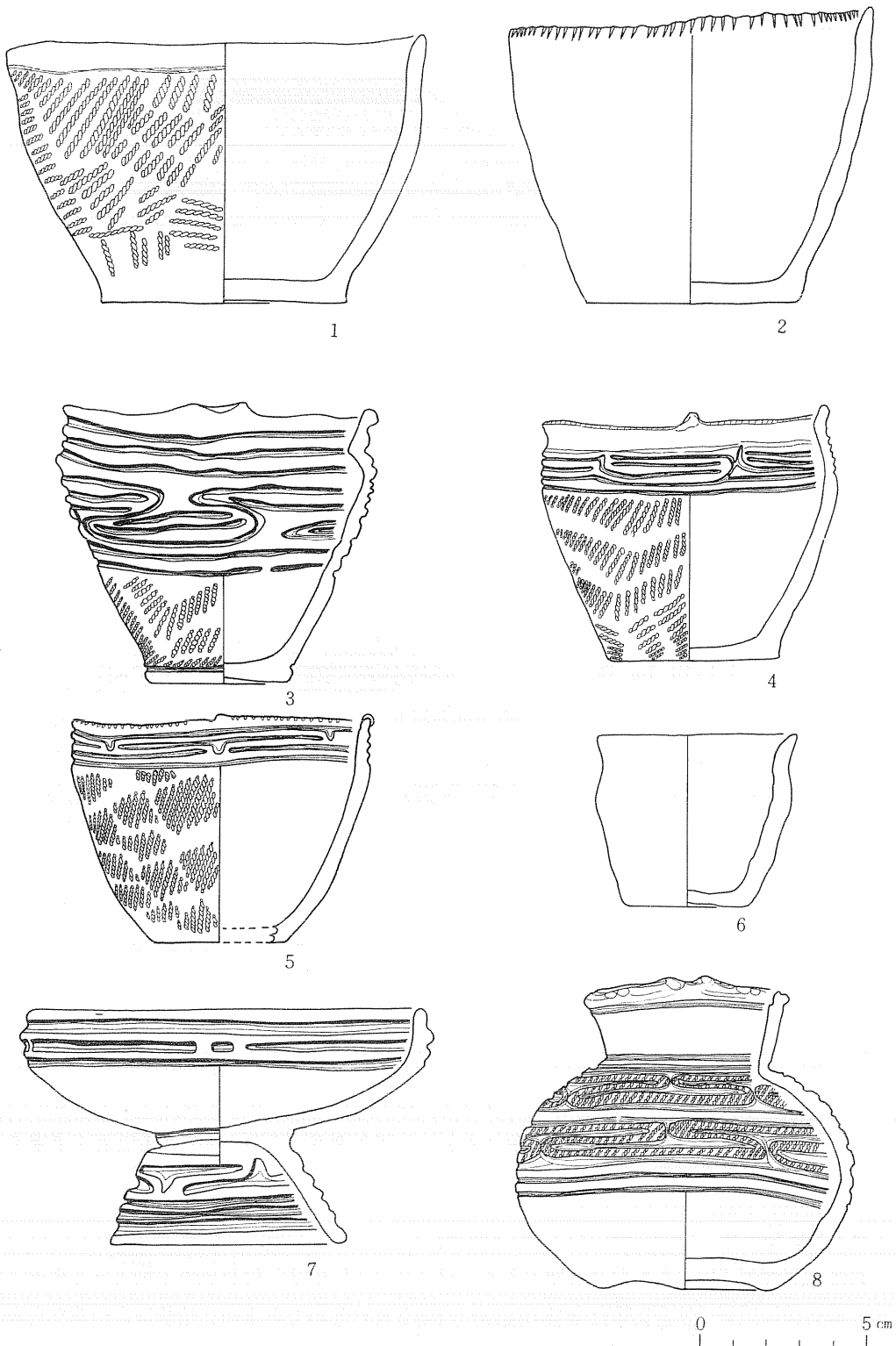
調査区最北端に検出された遺物包含層である。ＬＣラインで土層断面図作成のためＬＣラインに沿って幅２ｍのトレンチを入れたが、トレンチ最北端のＬＣ71グリッド杭直下から南へ傾斜する土層があり、これを追究したところ、ＬＣ69グリッド杭より南1.4ｍ、地表下1.5ｍの地点で消失した。東西方向の拡がりを把握するため71ラインに東西方向のトレンチを設定したところ、包含層の分布範囲はＬＣ71グリッド杭より東は4.5ｍ、西は５ｍの範囲に把握できた。ＬＣ71杭の直下では層厚70cmを測り、北側の高位置から流入する形で堆積したことが明らかであるが、これより北方は調査範囲外であるため、北側への追求は不可能であった。包含層からの出土土器は大洞C_1式で、基本層位第Ⅳ層にあたる。ＬＣラインでは60グリッド内で第Ⅳ層が消失し、それ以北では遺物包含層の存在がなく空白地帯を形成しており、この北端の包含層の存在は特異である。土層が北方からの流入であることを考慮すると、調査区域北方にも遺構の存在が推察される。



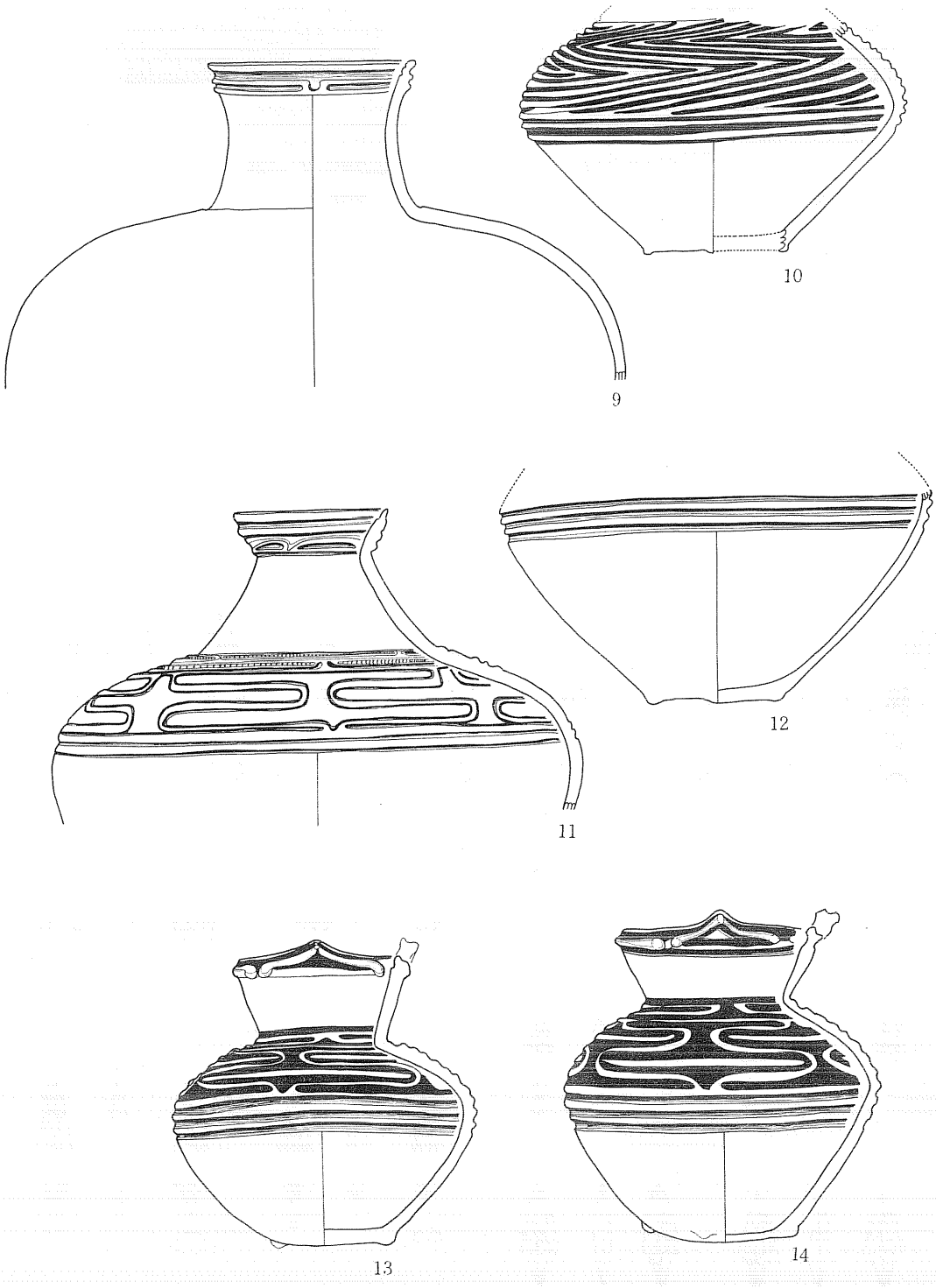
第105図　ＳＸ006出土遺物　(2)

ＳＸ009捨て場（第53・54・74・75・76図版）

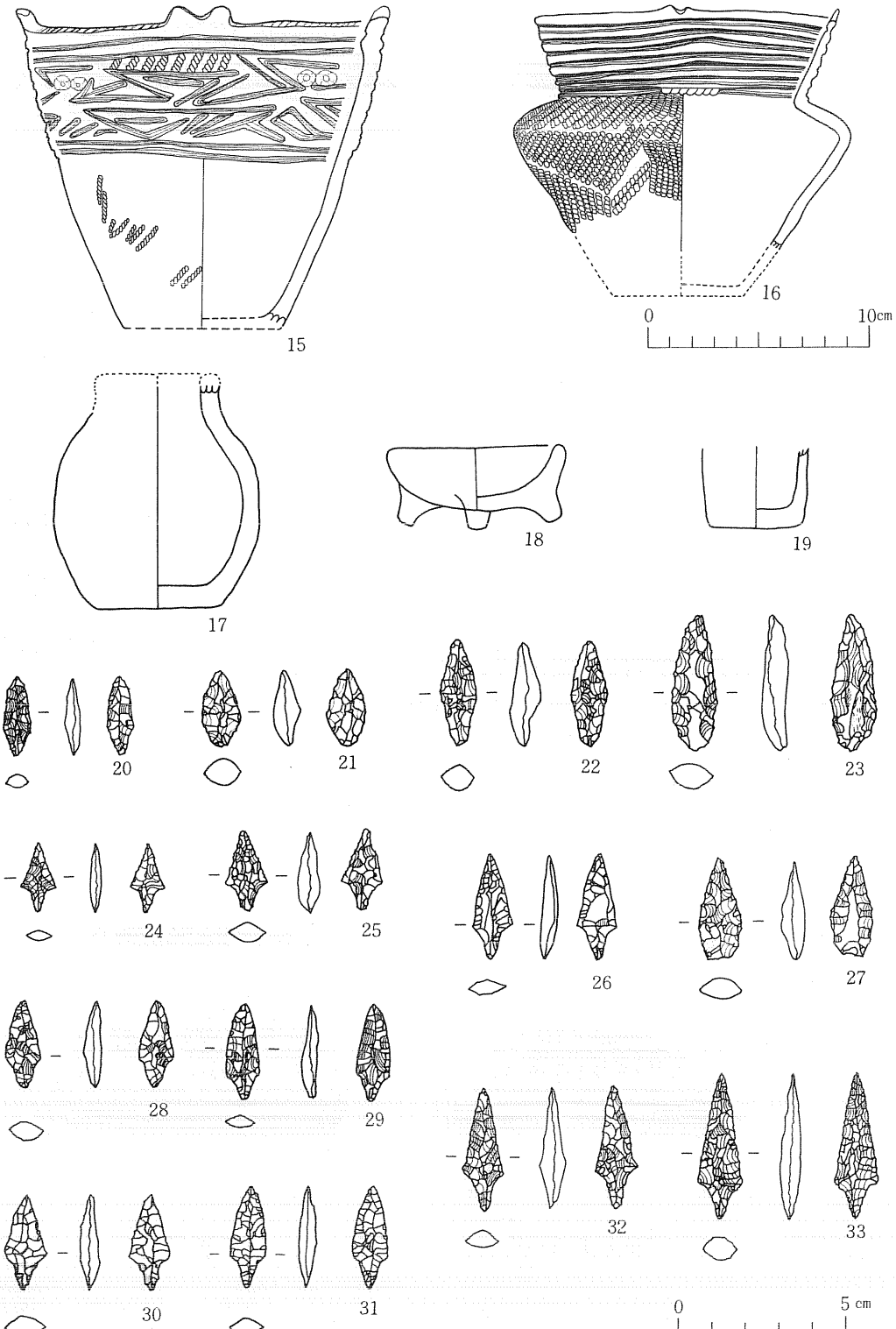
調査範囲南端に検出された捨て場である。11グリッドに渡り、長さ18ｍ、幅７ｍで地山上の浅い落ち込みがあり、この中に多量の遺物が投棄されたものであるが、遺物はこの落ち込みを越えてその南北両側にも分布している。東側は調査区域外の樹園地に入り込んでおり、東北東



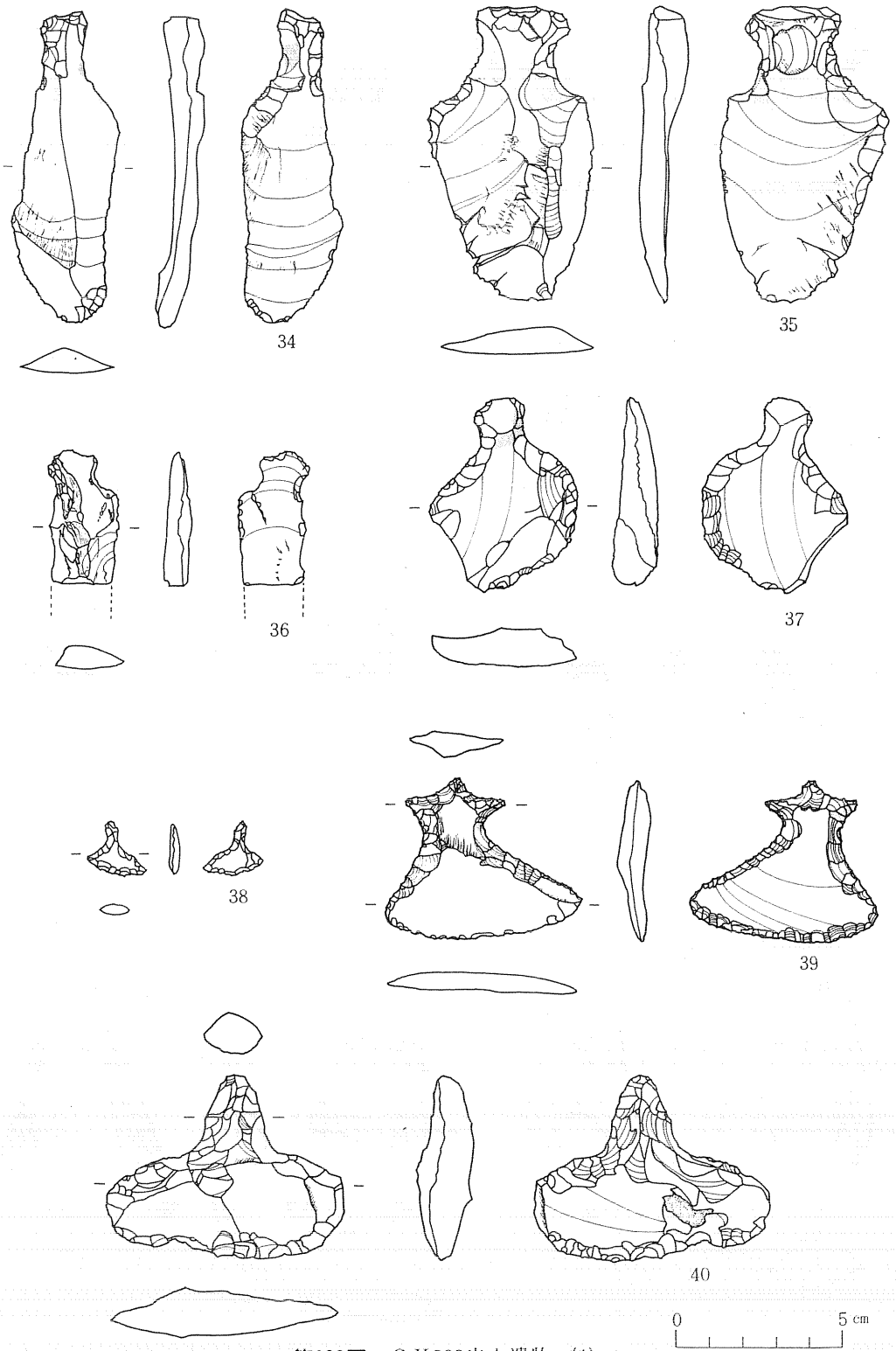
第106図　ＳＸ009出土遺物　(1)



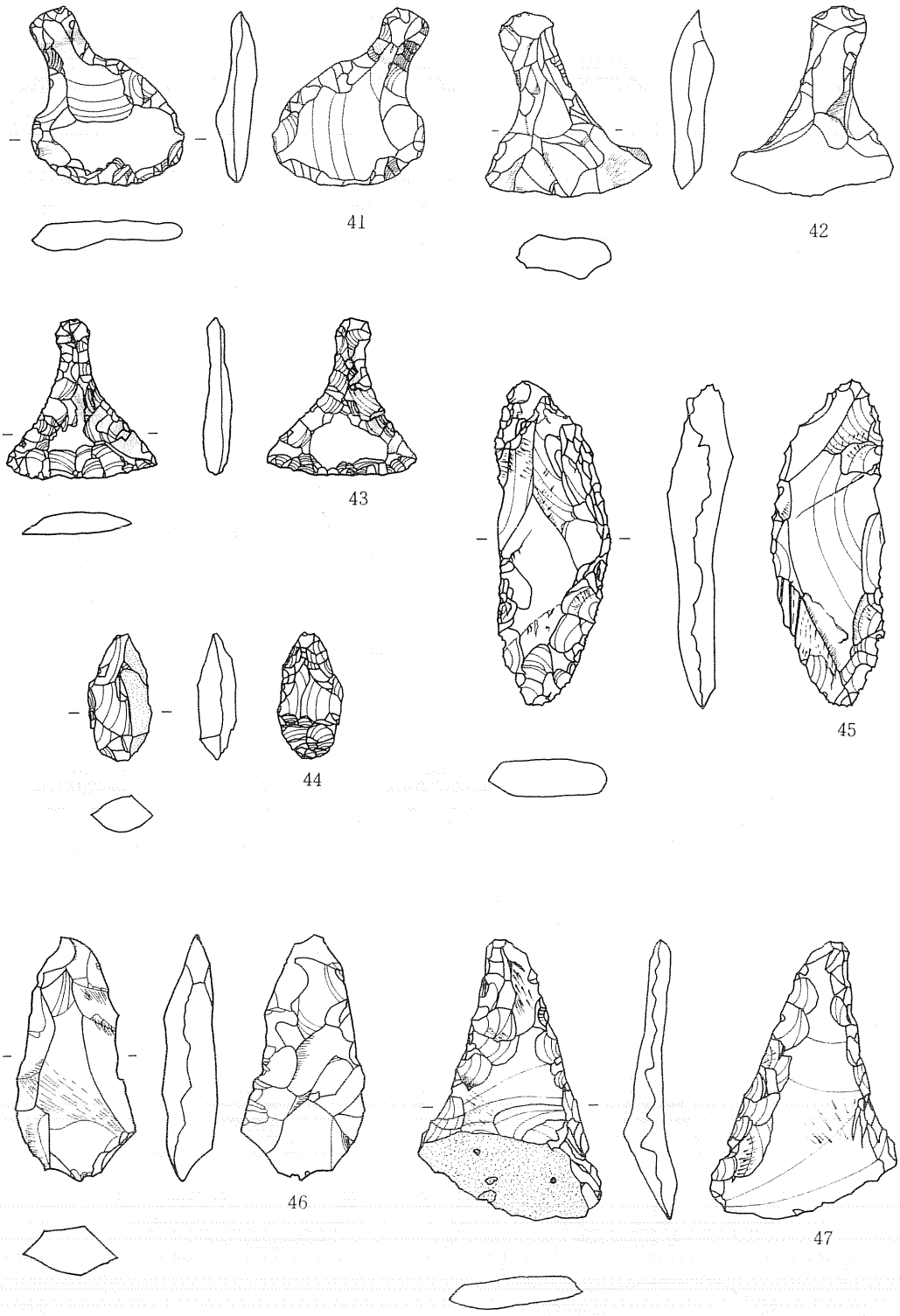
第107図　ＳＸ009出土遺物　(2)



第108図　ＳＸ009出土遺物　(3)

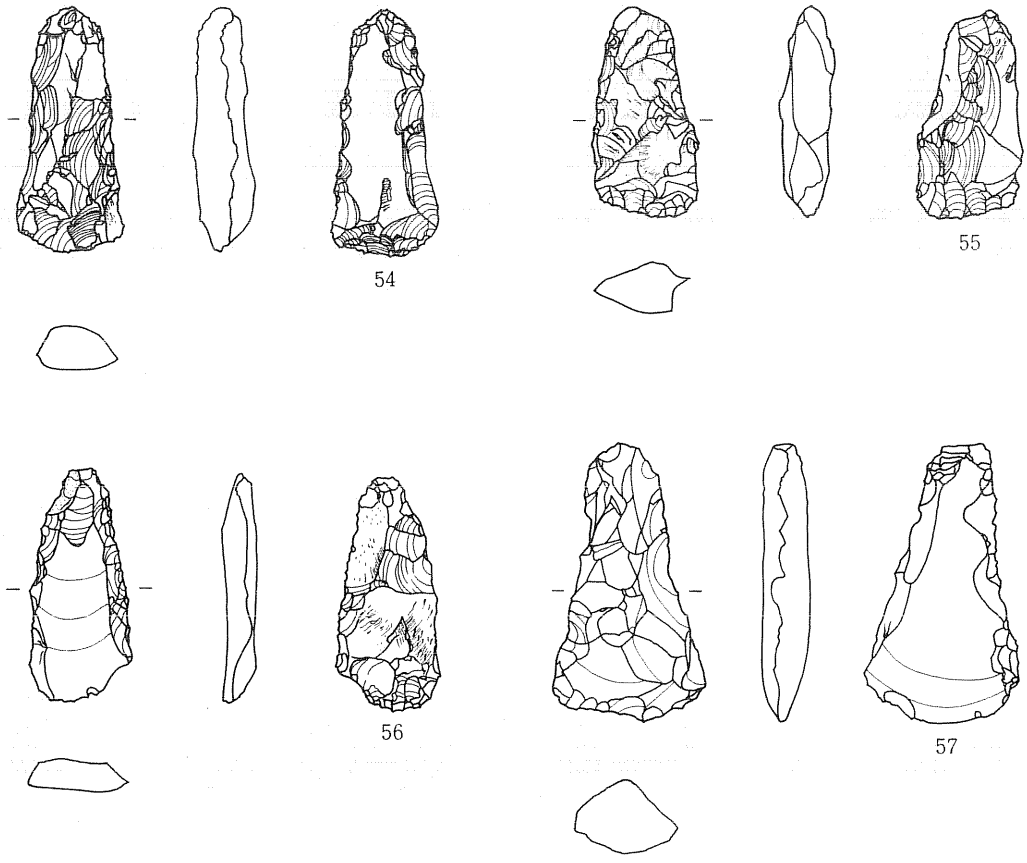


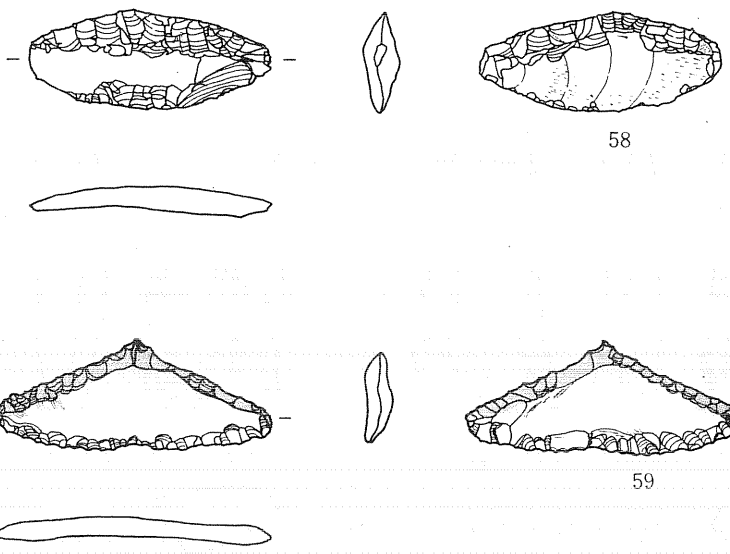
第109図　ＳＸ009出土遺物　(4)



第110図　ＳＸ009出土遺物　(5)

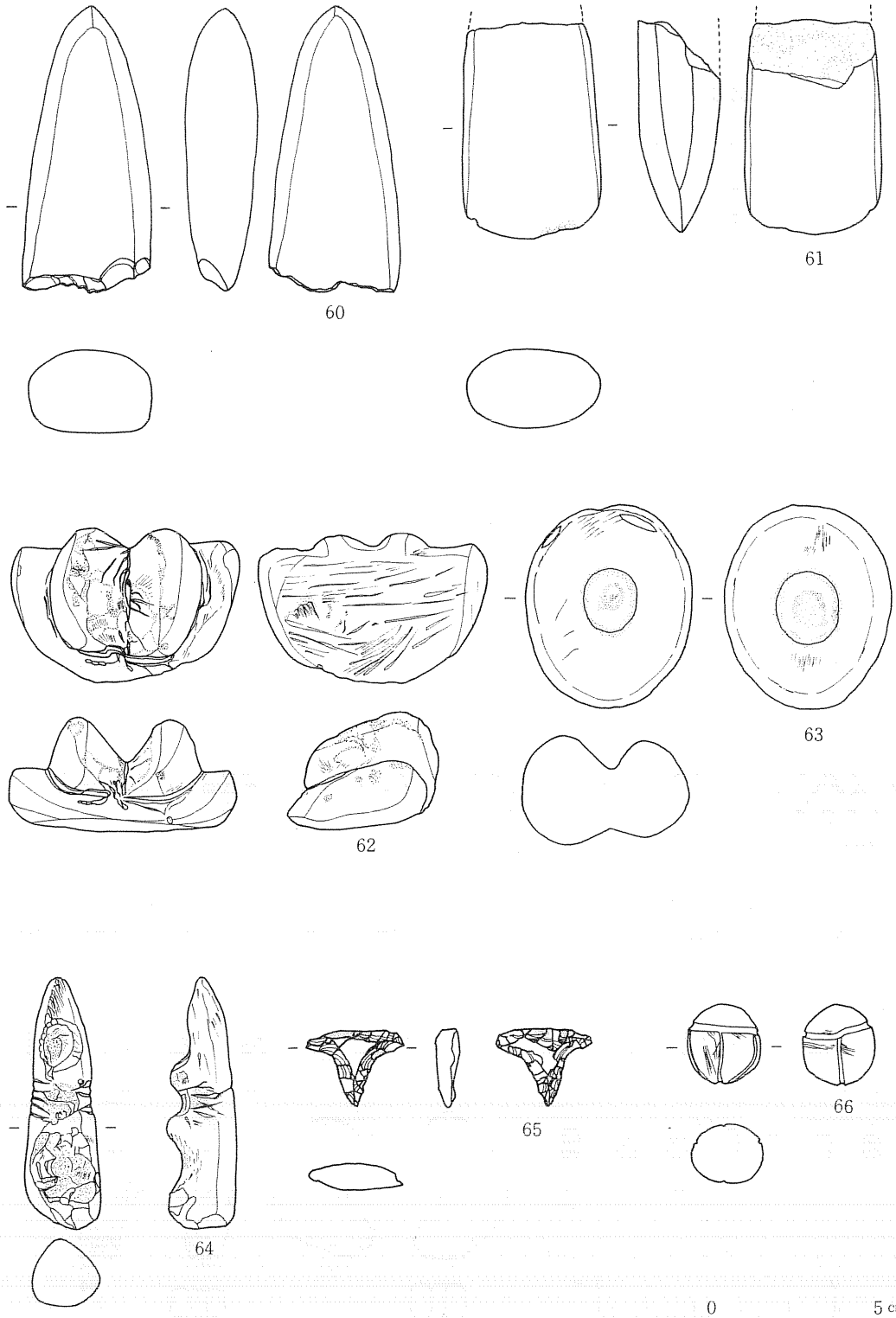
第111図　ＳＸ009出土遺物　(6)



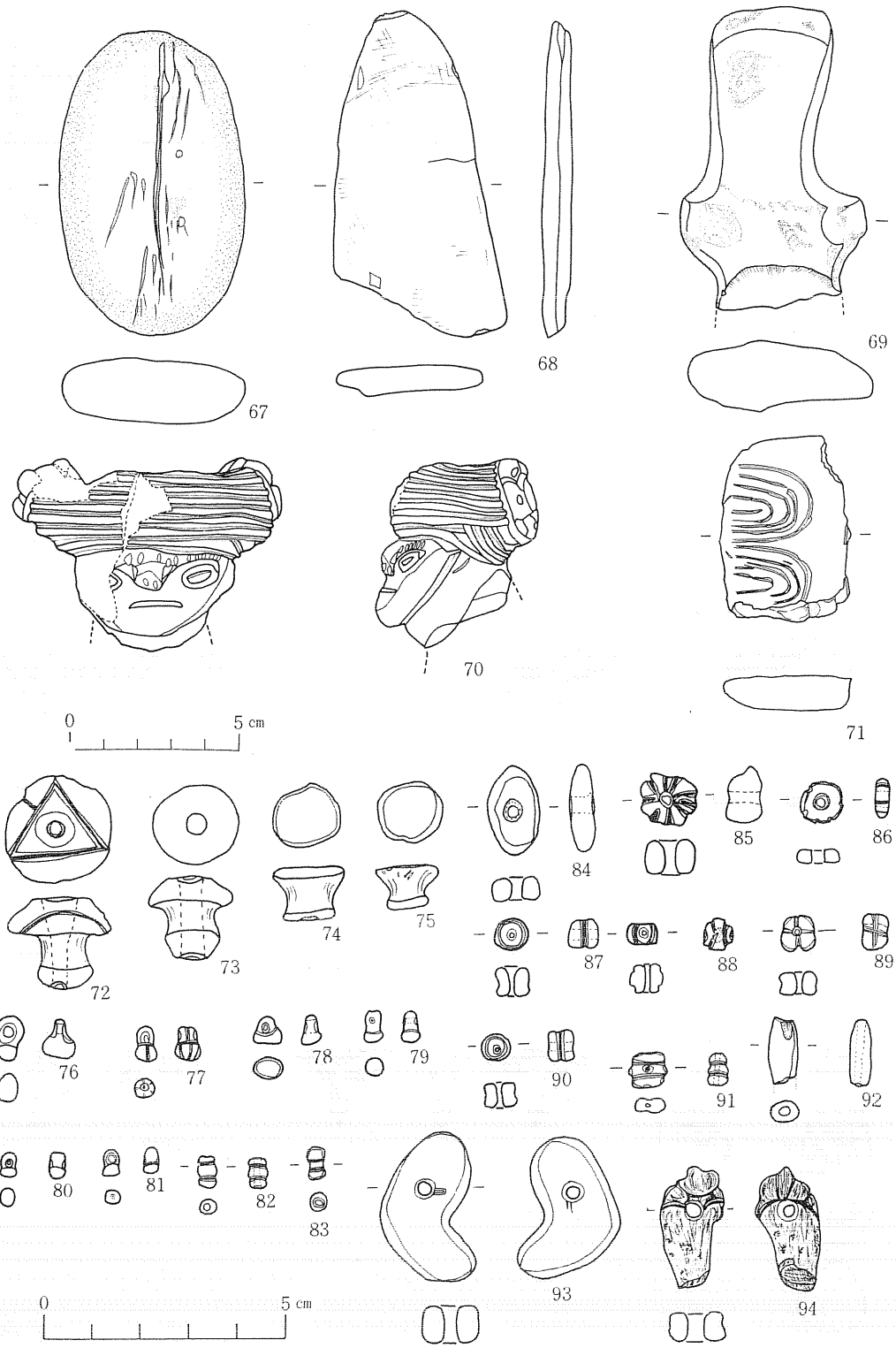


0 5 cm

第112図　ＳＸ009出土遺物　(7)



第113図　ＳＸ009出土遺物　(8)



第114図　ＳＸ009出土遺物　(9)

方向に延びていることが窺われる。遺構としては最南端の位置にあり、これより南の区域にも幾つかのグリッド及びトレンチを設定したが、遺構・遺物は皆無であった。出土土器は全て大洞A式に限られ、他型式の土器は全く混入していない。土器は復原、実測し得たもので16個体。石鏃、石斧・石匙、非実用的な石製品、土偶頭部、土版などの他、完形品だけで総計664個の装飾品類が発見された（第106図～第114図）。勾玉は碧玉製、石製小玉のうち多くは凝灰岩製である。

第4表　SX009出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第106図 1	第74図版54	鉢	12.3cm	7.9cm	7.4cm	—cm	
〃 2	〃 55	鉢	10.4cm	8.9cm	6.3cm	—cm	
〃 3	〃 56	鉢	9.4cm	8.3cm	4.3cm	9.6cm	
〃 4	〃 57	鉢	8.4cm	7.7cm	5.1cm	8.8cm	
〃 5	〃 58	鉢	(9.0)cm	6.5cm	(3.9)cm	—cm	
〃 6	第75図版59	鉢	(5.5)cm	(5.5)cm	4.0cm	(6.0)cm	
〃 7	〃 60	台付浅鉢	12.3cm	7.0cm	6.9cm	12.5cm	
〃 8	〃 61	壺	6.6cm	9.0cm	5.6cm	15.0cm	
第107図 9	〃 62	壺	9.5cm	—cm	—cm	(28.0)cm	
〃 10	〃 63	壺	—cm	—cm	(6.1)cm	17.7cm	
〃 11	〃 64	壺	7.0cm	—cm	—cm	24.0cm	
〃 12	〃 65	壺	—cm	—cm	6.4cm	(19.7)cm	
〃 13	〃 66	壺	8.3cm	13.9cm	6.8cm	13.9cm	
〃 14	第76図版67	壺	9.6cm	15.1cm	6.9cm	14.1cm	
第108図15	〃 68	深鉢	16.7cm	14.3cm	6.4cm	—cm	
〃 16	〃 69	深鉢	12.5cm	(13.1)cm	(5.7)cm	15.3cm	
〃 17	〃 70	壺	(4.0)cm	(7.1)cm	3.4cm	6.2cm	
〃 18	〃 71	袖珍土器	5.4cm	2.4cm	—cm	—cm	
〃 19	〃 72	袖珍土器	—cm	—cm	2.1cm	—cm	

第5表　SX009出土装飾品類グリッド別出土数一覧表

種類＼グリッド	KD38	KD39	KD40	KD41	KE38	KE39	KE40	KE41	KF39	KF40	KF41	KG39	KG40	計
土製耳飾	1		4	3	2	2	10		2		1	4		29
勾玉												1		1
土製小玉	4		2	6	5	34	134	2	84	217		46	20	554
石製小玉	2		2	1	4	11	11		16	8		17	3	75
土製管玉										1				1
その他						1			3					4
総計	7		8	10	11	48	155	2	105	226	1	18	23	664

(2) 遺構外出土遺物

調査によって出土した遺物はコンテナ450箱の多きに上るが、縄文時代の遺物が圧倒的大多数を占めている。この縄文時代遺物のうち土壙などの遺構に伴って出土したものは極めて少なく、大部分は遺構外からの出土である。しかし、遺構外とは言え、調査区中央部には完形土器を含む極めて多くの土器片、石器などの遺物を出土するゾーンが、土壙、土器棺墓、石囲炉、配石などの遺構と重なっており、これら遺構の構築と同時進行する形で形成されたと考えられ、「捨て場」の如くそれ自体がひとつの遺構と見なすこともできよう。だが、明らかに時間差のある他の多くの遺構と重複し、また範囲も極めて広範に渡っているので、それら多くの遺物を遺構外出土遺物として取り扱うことにする。遺構配置図には殊に遺物出土量の多い範囲を図示してあるが、必ずしもこの内部出土とは限らない。

遺物整理にあたっては極めて限定された時間内にこれら多くの遺物を処理し、報告することは不可能であるし、また、その方法論をも持ち合わせてはいない。復原、実測して図示した土器は134個体であるが、これらは現場の調査時点において完形資料またはそれに近い状態で出土したもののみであって、詳細に復原、実測作業を行うならば、図示可能な土器は、恐らくこの数倍の数になろう。石器、装飾品類なども同様であって、図示し得たものは限定された一部のみにすぎない。しかし、各器種ごとの代表例は網羅し得たと思う。

①　土　器

深鉢・鉢（第115図1～第122図42、図版76～81）
台付鉢（第122図43～第125図59、図版81～83）
浅　鉢（第125図60～第127図70、図版84～85）
台付浅鉢（第127図71～第128図74、図版85）
壺　（第128図75～第135図115、図版85～90）
注口土器（第136図116～第137図120、図版91）
皿　（第137図121～第138図123、図版91）
筒形土器（第138図124、図版92）
袖珍土器（第138図125～134、図版92）

②　石　器

石　鏃（第139図1～43）
石　槍（第139図44～第141図59）
篦状石器（第141図60～第144図85）
石　匙（第145図86～第148図108）
掻　器（第149図109～第150図126）

打製石斧（第152図127～第154図140）

磨製石斧（第155図141～第156図152）

石　　錐（第157図153～164）

凹　　石（第158図165～172）

石棒・石刀（第159図173～第161図206）

独鈷石・独鈷石状石製品（第162図207～第163図222）

円盤状石製品（第163図223～228）

石鋸状石冠（第164図229～233）

石　　冠（第165図234～237 ）

有孔石製品（第165図238～第166図245）

有溝石製品（第166図243～244）

扁平磨製石製品（第166図245～248）

玉　　類（第166図249～254）

岩　　版（第168図264、267）

その他の石器（第167図256～260）

③　土製品

土　　版（第168図261～263、265～266）

土　　偶（第169図268～第171図282）

石冠状土製品（第172図）

有孔円盤（第172図284）

円柱形土製品（第172図285）

玉　　類（第166図255）

④　獣　　骨

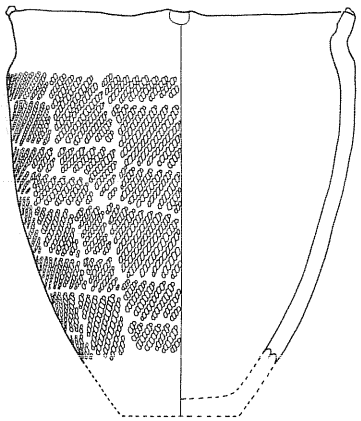
遺跡内各所から骨片が少量出土している。山口　敏氏によるとどの骨片も多かれ少なかれ火燃を受けて細かな破片となっているため、人骨、獣骨の区別もできないものもあるが、少なくとも明らかに人骨片と認められるものはないとのことである。中央部捨て場とＳＸ009捨て場の中から、土器・石器等に混じって出土したものが大部分で、他にＳＮ009・021からもほとんど粉状になって検出された。以下の獣骨が判明した。

シカ　　中足骨(？)、遠位骨端　　クマ　　左中足骨

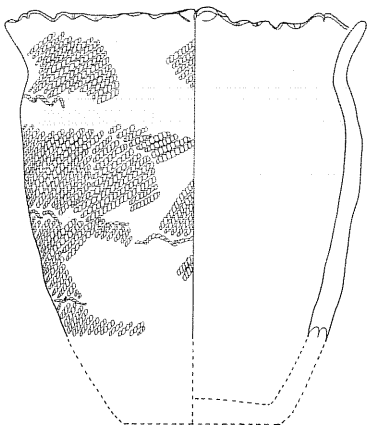
シカ　　左中足骨

シカ　　左中足骨または中平骨の遠位骨端

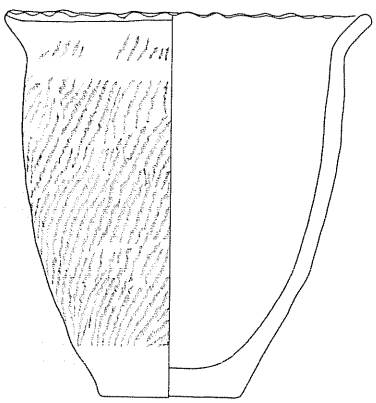
シカ　　左距骨



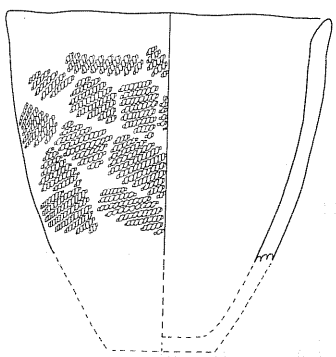
1



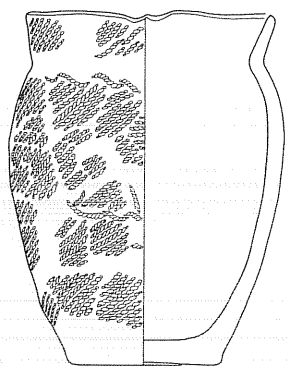
2



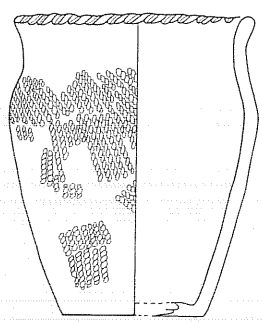
3



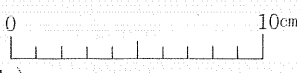
4



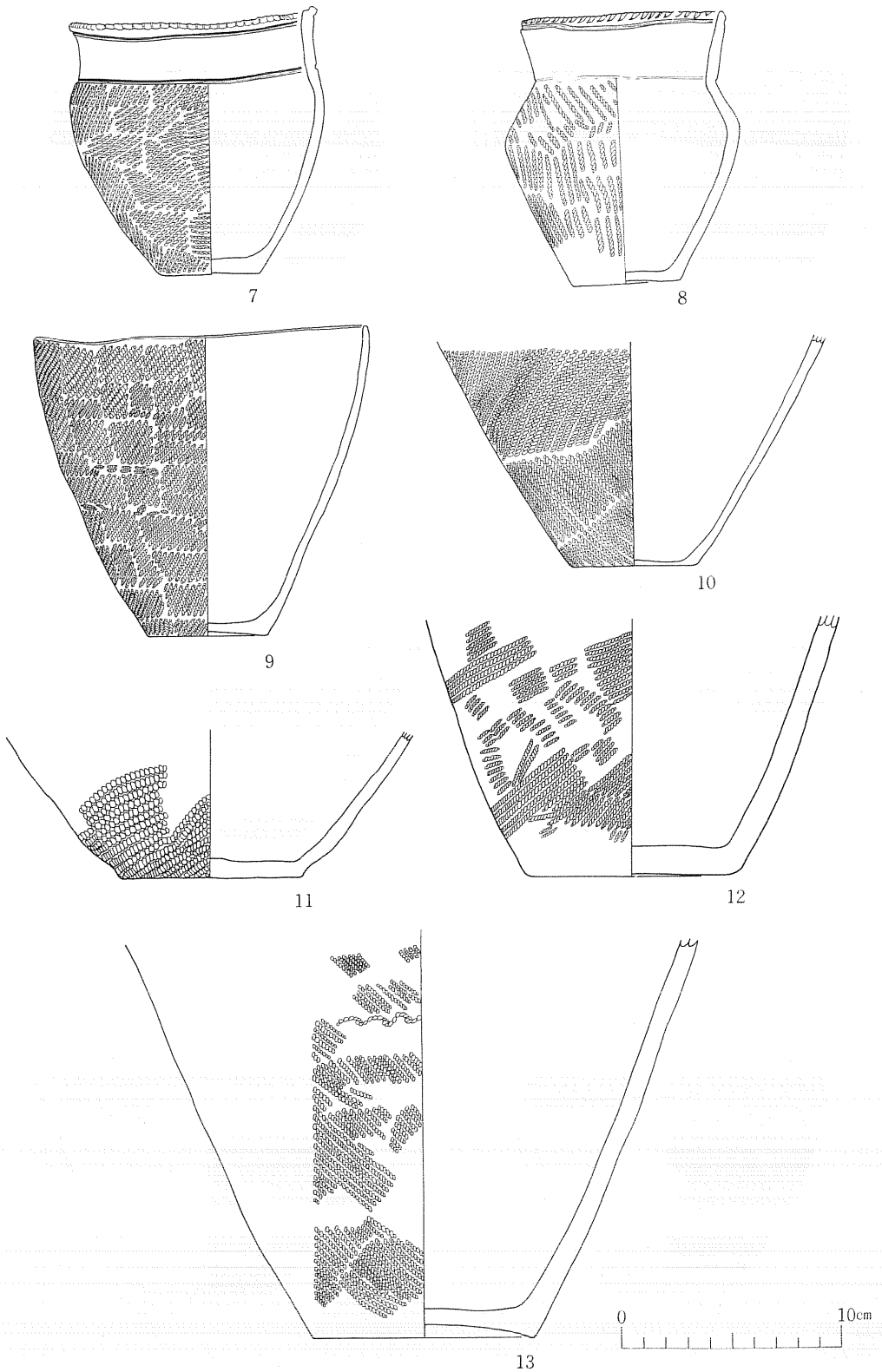
5



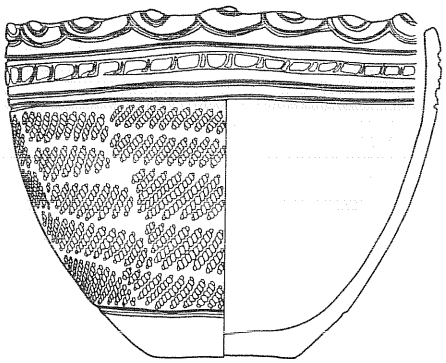
6



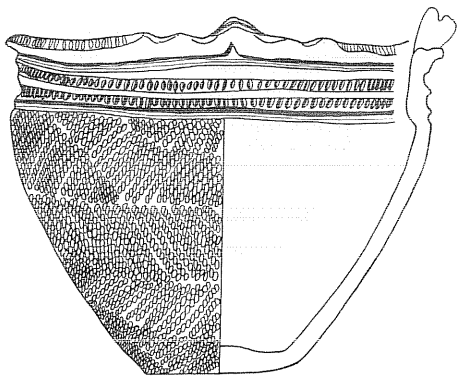
第115図　遺構外出土遺物　（縄文１）



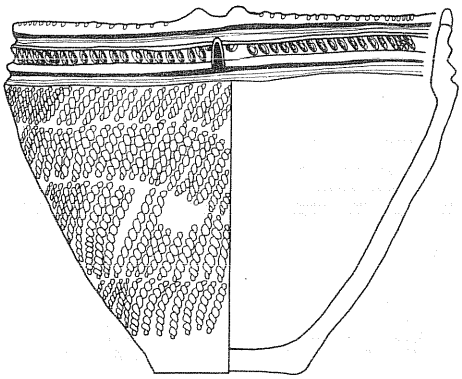
第116図　遺構外出土遺物　（縄文２）



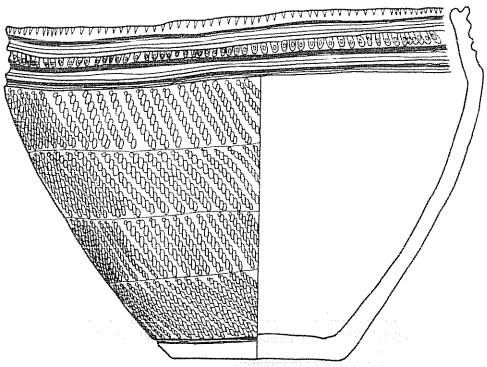
14



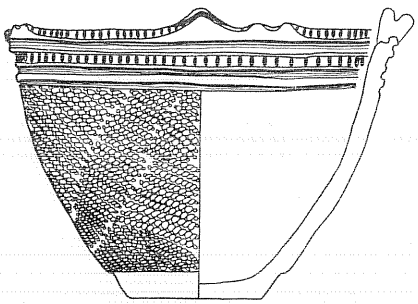
15



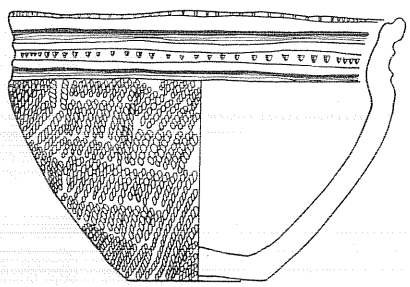
16



17



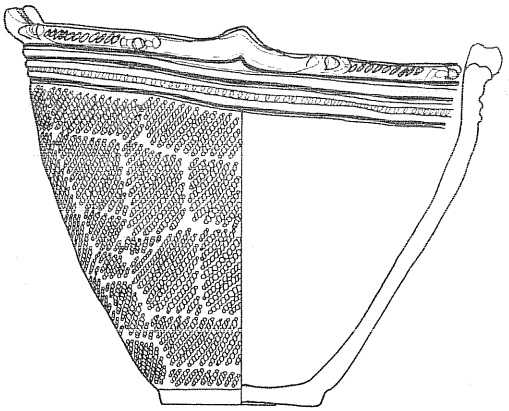
18



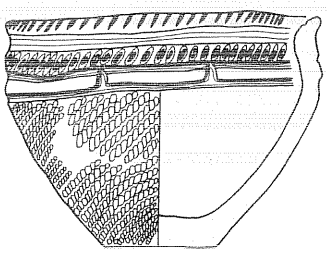
19

0 5 cm

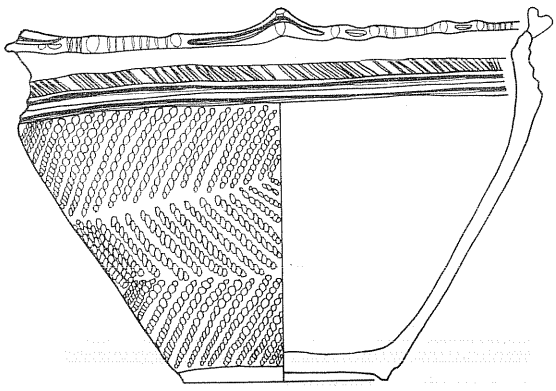
第117図　遺構外出土遺物　（縄文３）



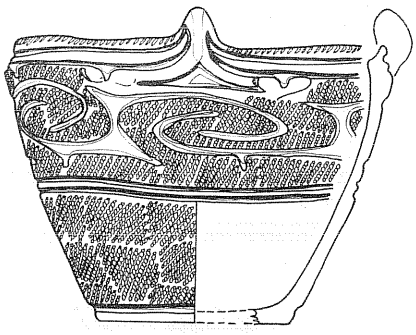
20



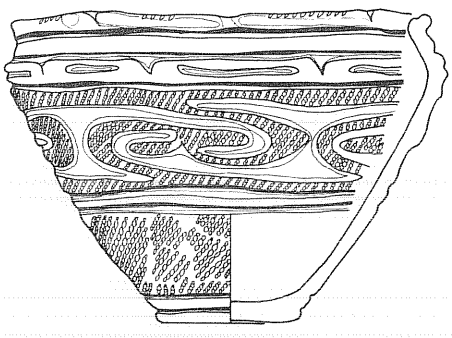
21



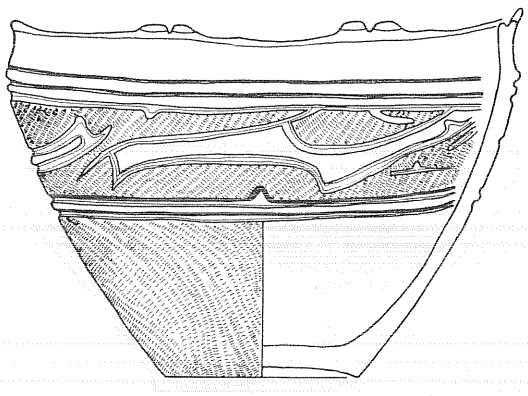
22



23



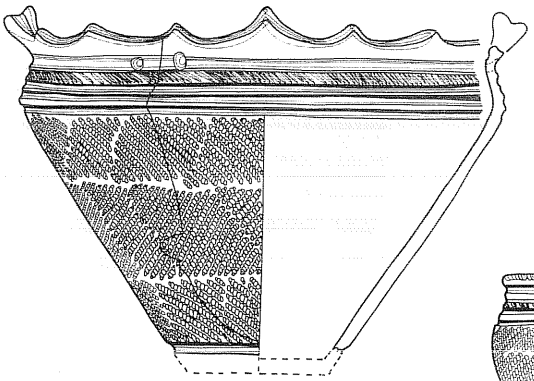
24



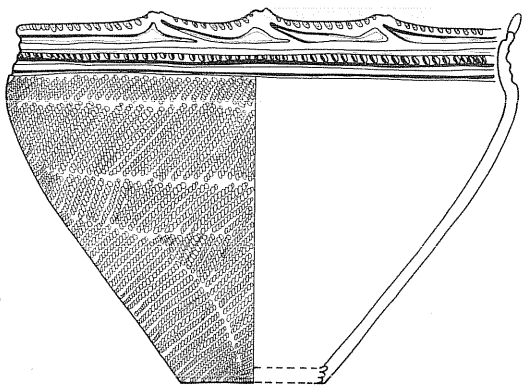
25

0 5 cm

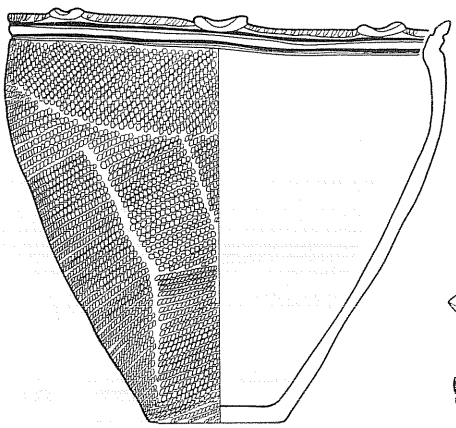
第118図　遺構外出土遺物　（縄文４）



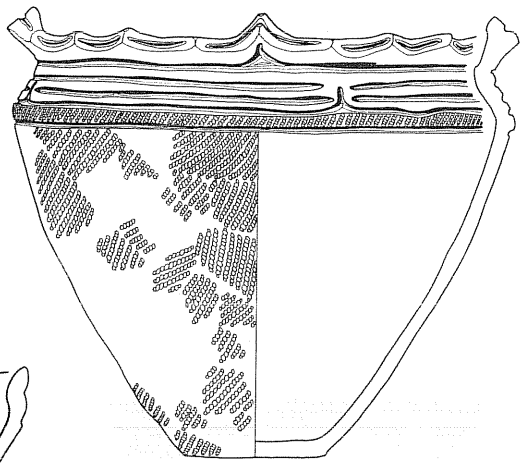
26



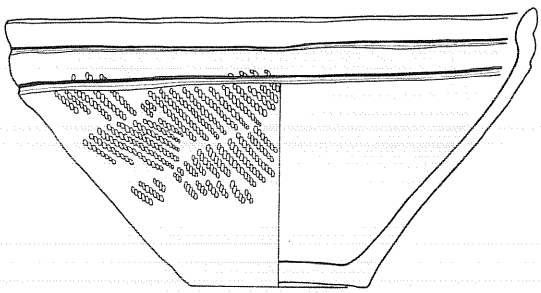
27



28



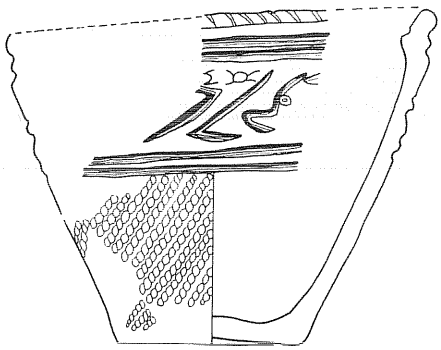
29



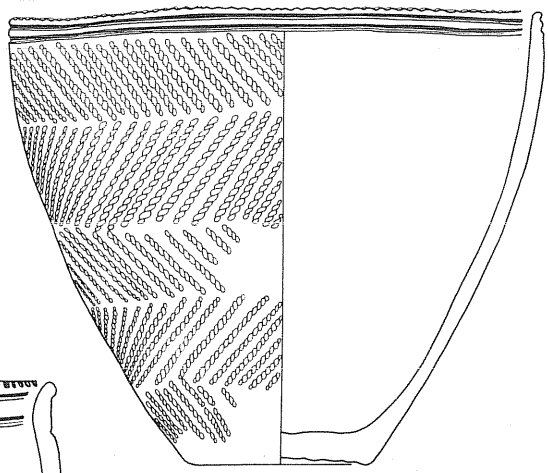
30

0 10cm

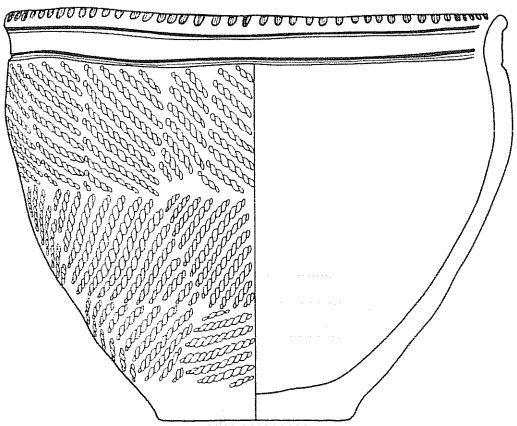
第119図　遺構外出土遺物　（縄文５）



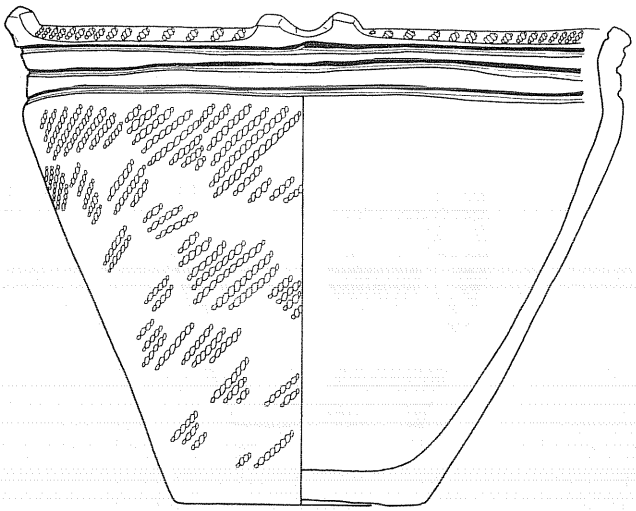
31



32



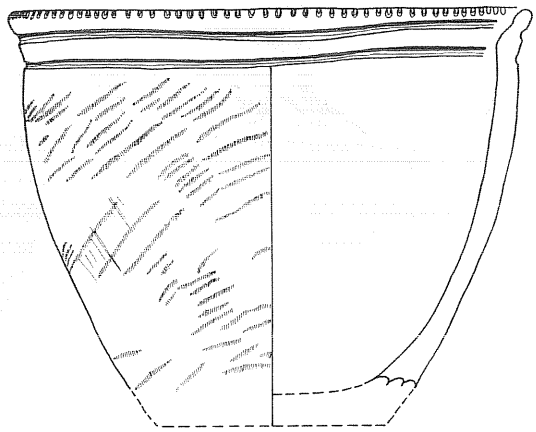
33



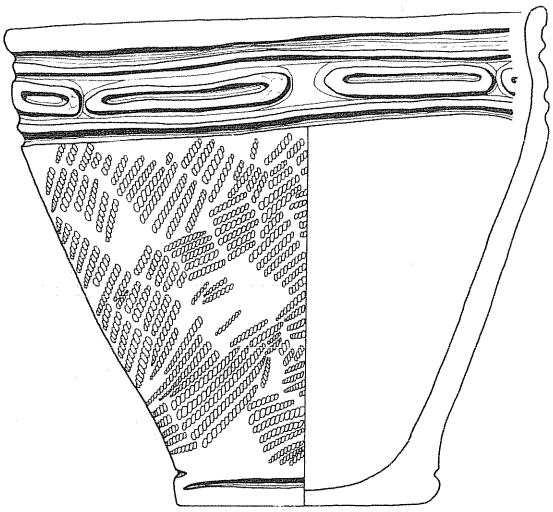
34

0 5 cm

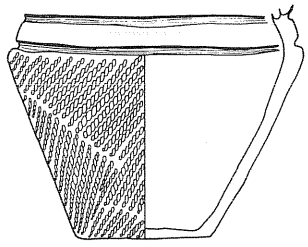
第120図　遺構外出土遺物　（縄文６）



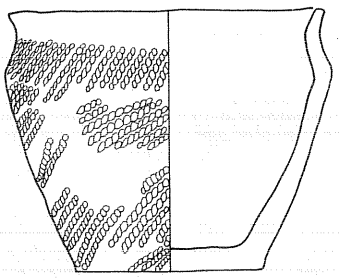
35



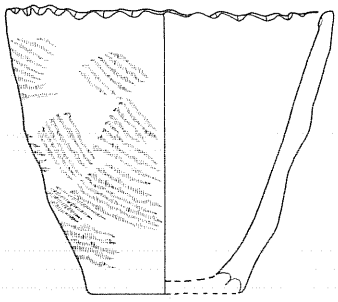
36



37



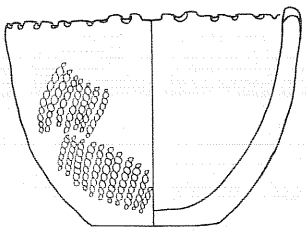
38



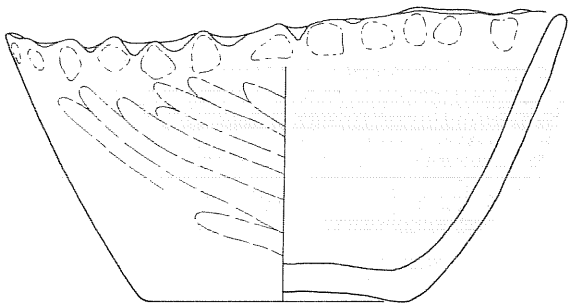
39

0 5 cm

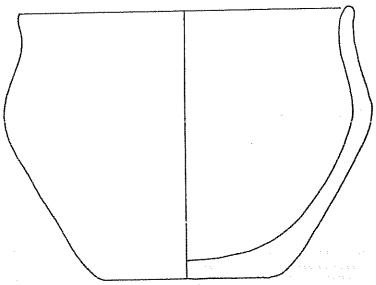
第121図　遺構外出土遺物　（縄文７）



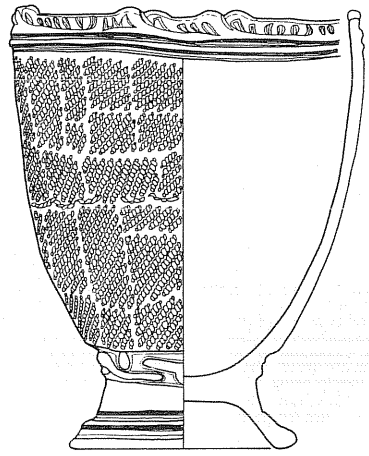
40



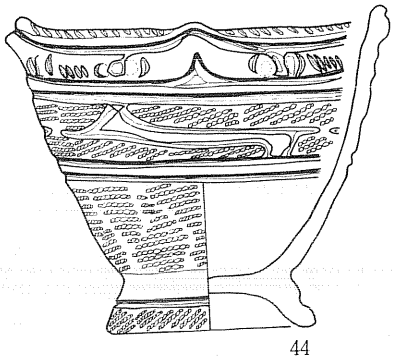
41



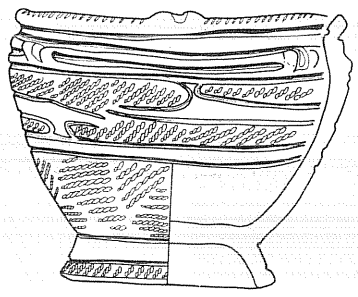
42



43



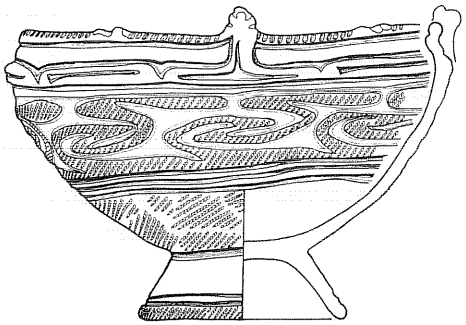
44



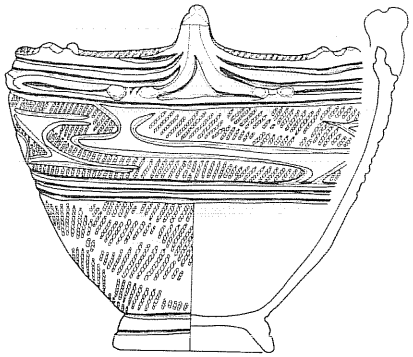
45

0 5 cm

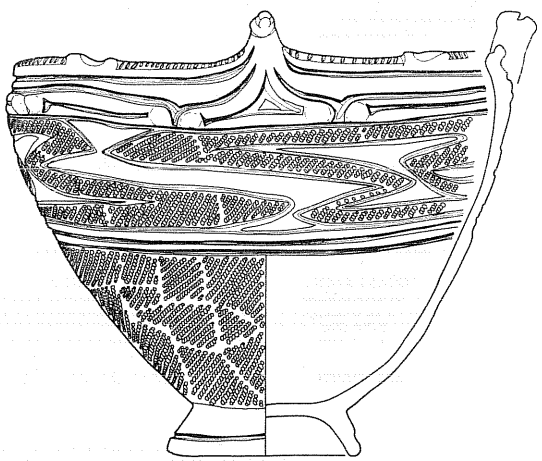
第122図　遺構外出土遺物　（縄文８）



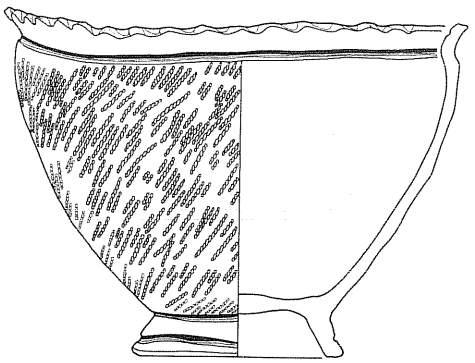
46



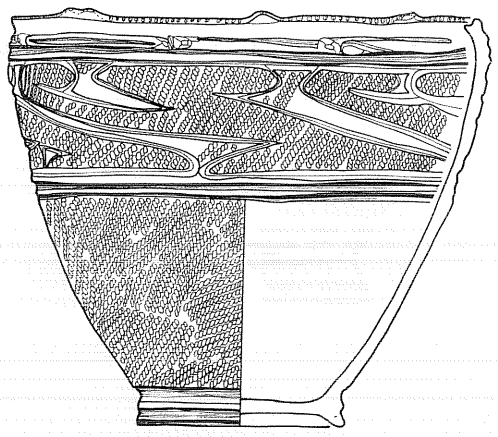
47



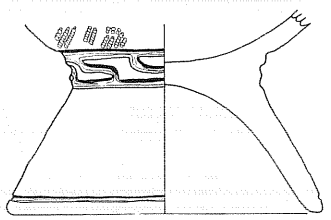
48



49



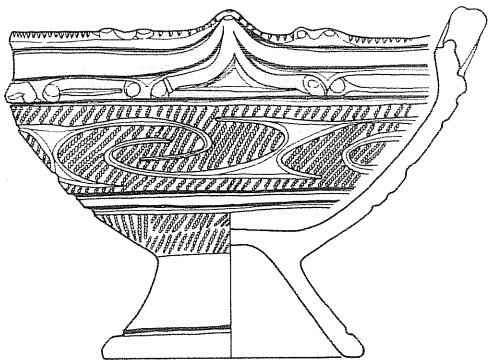
50



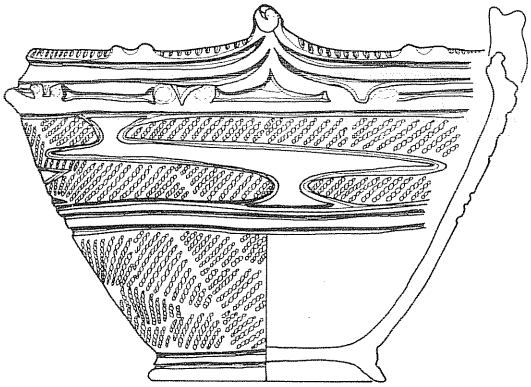
51

0 10cm

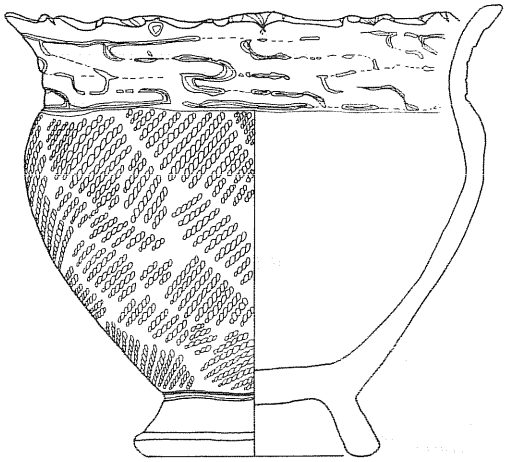
第123図　遺構外出土遺物　（縄文９）



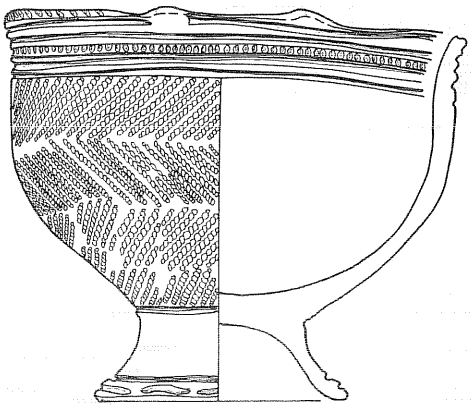
52



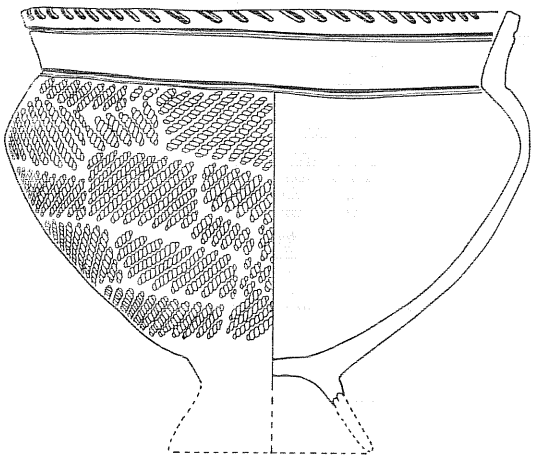
53



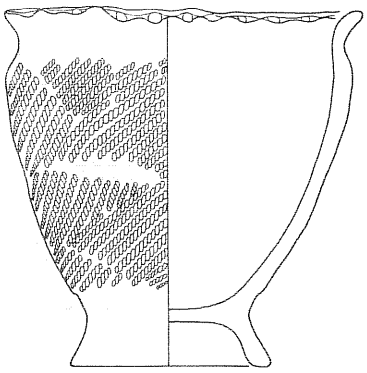
54



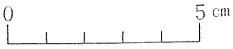
55



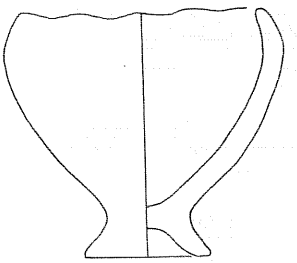
56



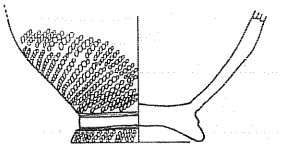
57



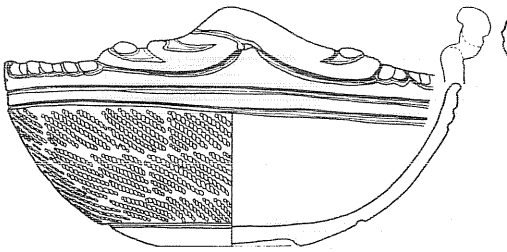
第124図　遺構外出土遺物　（縄文10）



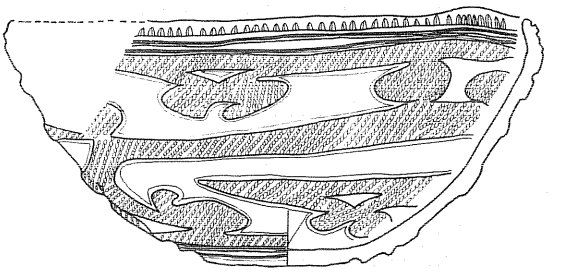
58



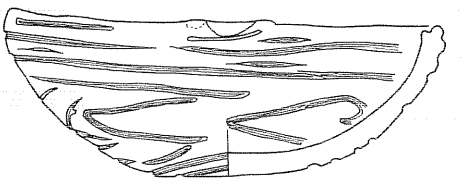
59



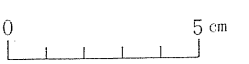
60



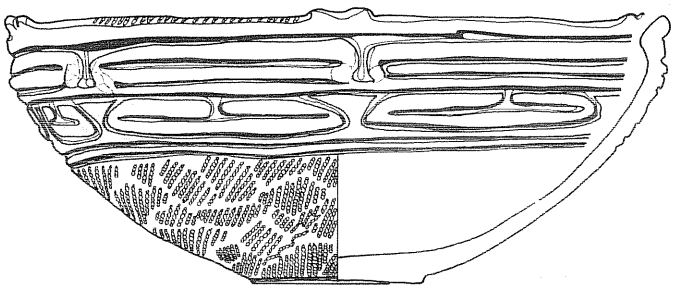
61



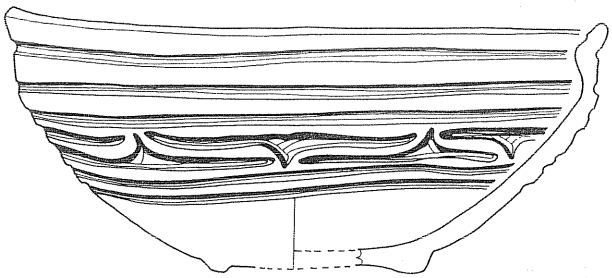
62



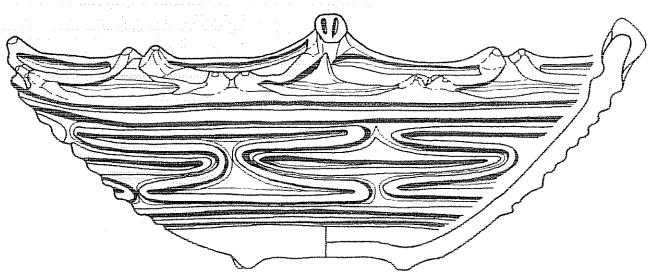
第125図　遺構外出土遺物　（縄文11）



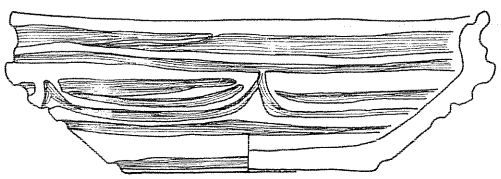
63



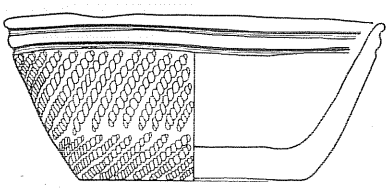
64



65



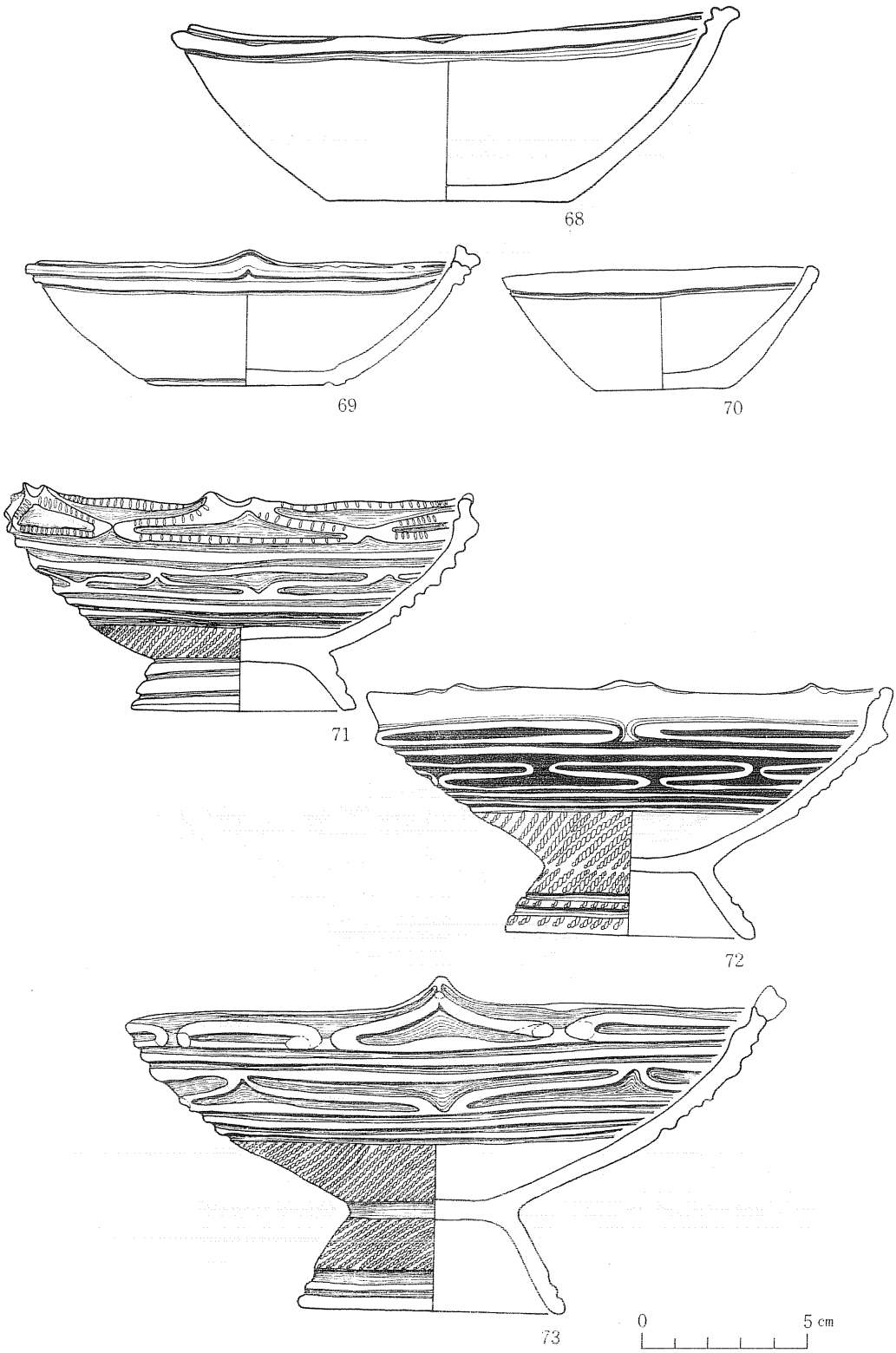
66



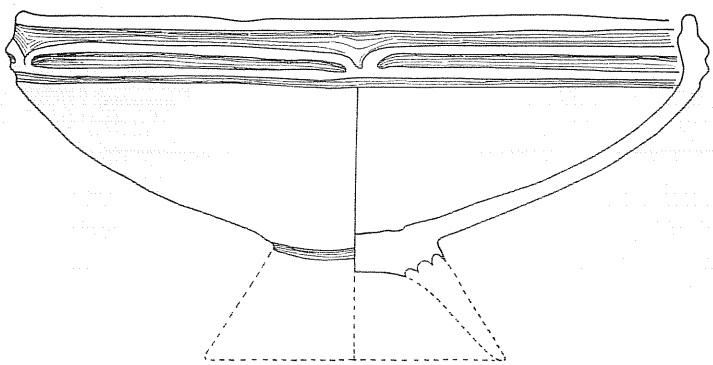
67

0 5cm

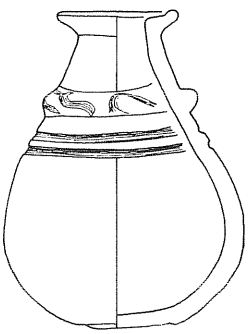
第126図　遺構外出土遺物　（縄文12）



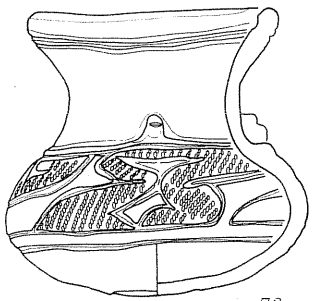
第127図　遺構外出土遺物　（縄文13）



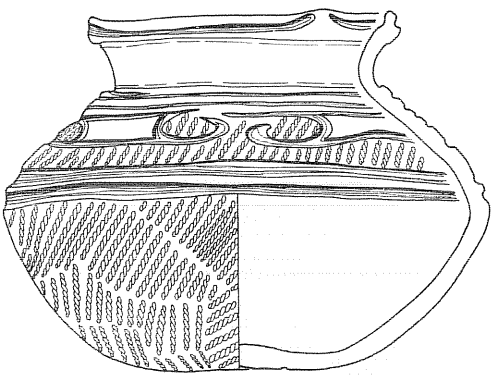
74



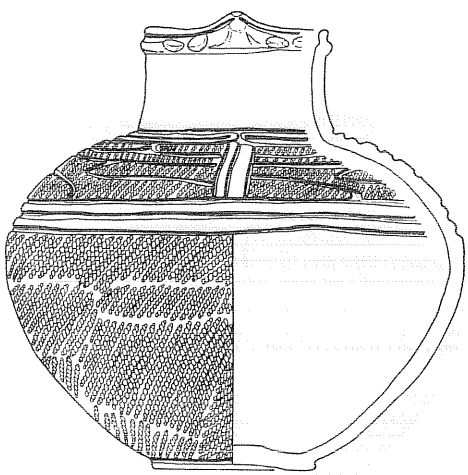
75



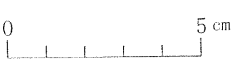
76



77

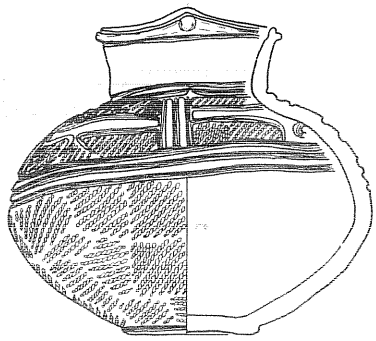


78

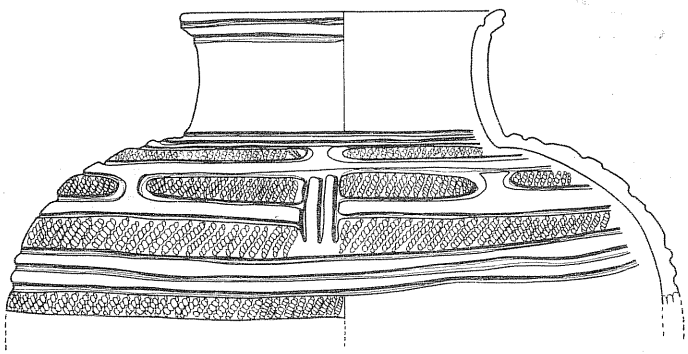


第128図　遺構外出土遺物　（縄文14）

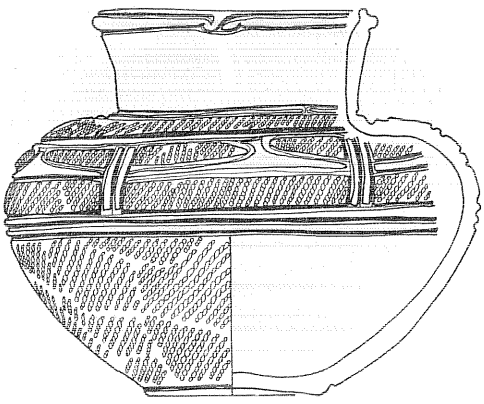
97 79



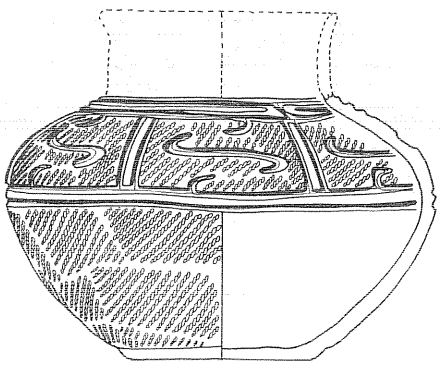
80



81



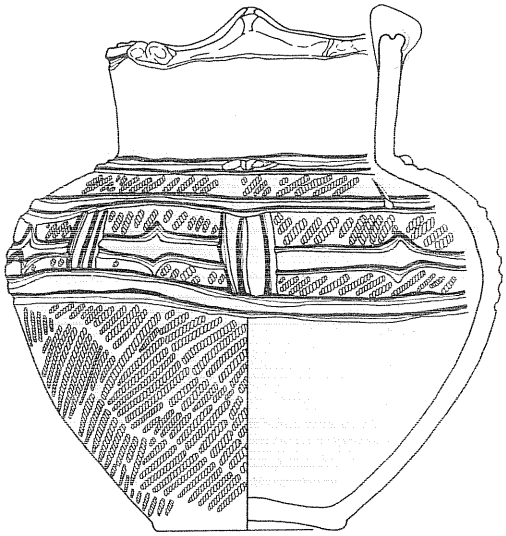
82



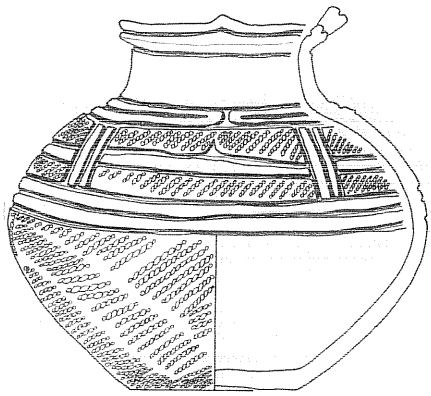
83

0 5 cm

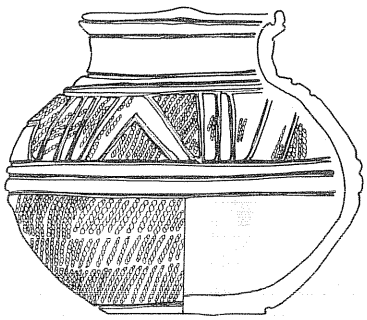
第129図　遺構外出土遺物　（縄文15）



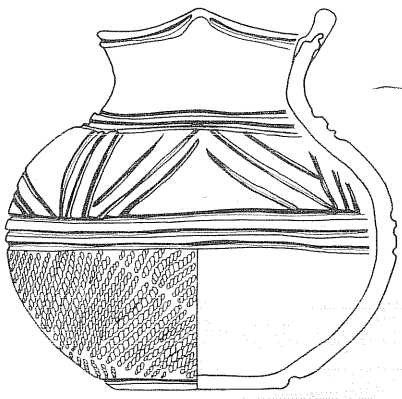
84



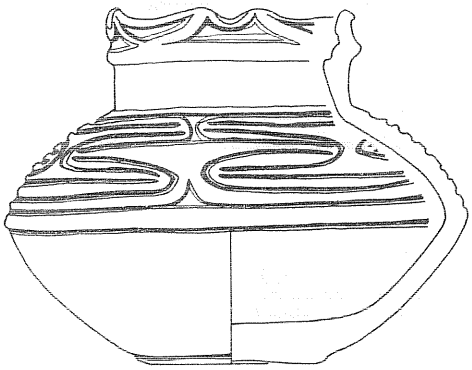
85



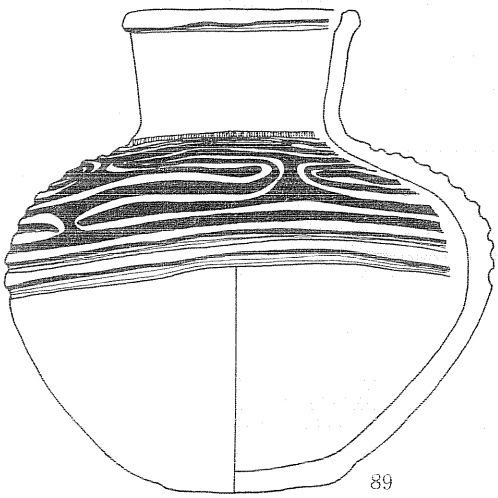
86



87



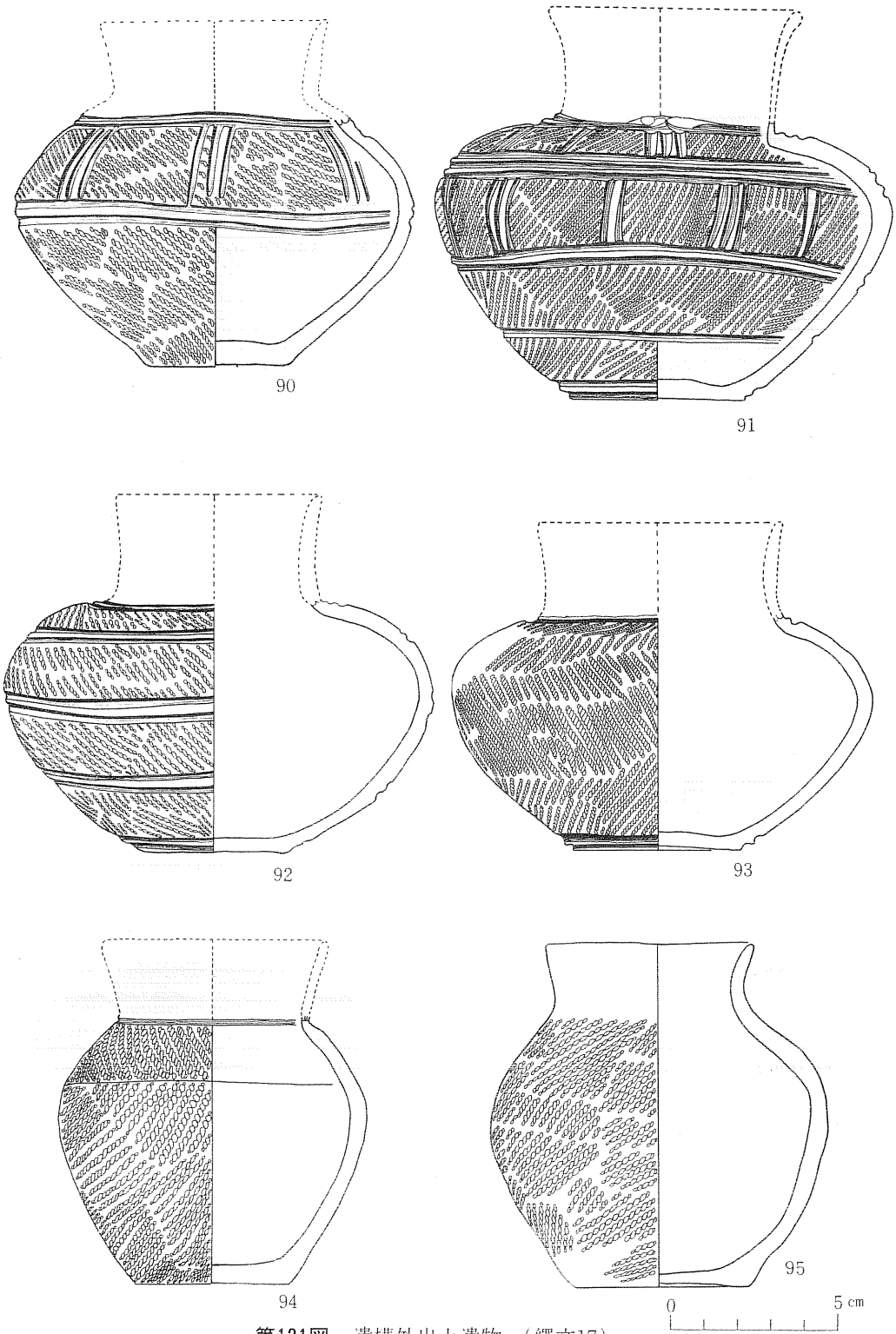
88



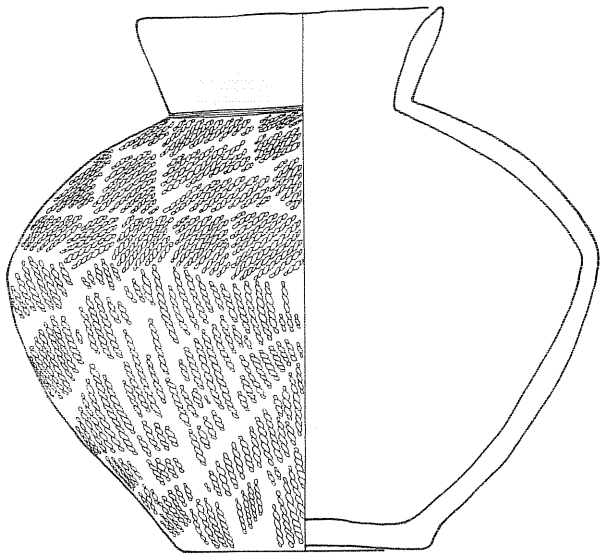
89

0 5 cm

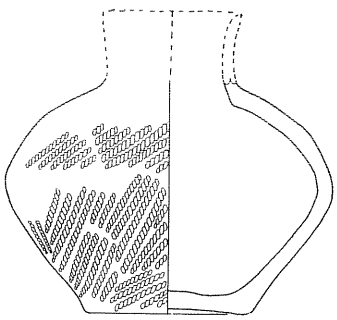
第130図　遺構外出土遺物　（縄文16）



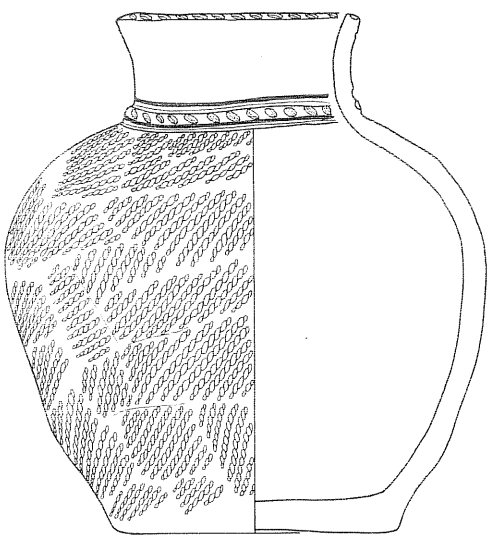
第131図　遺構外出土遺物　（縄文17）



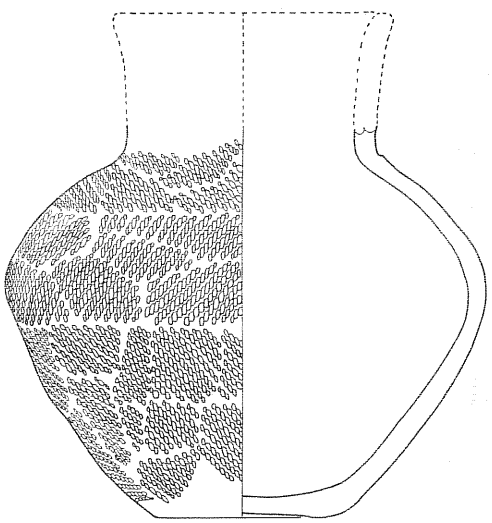
96



97



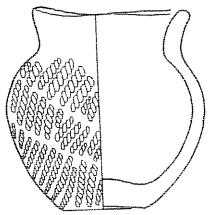
98



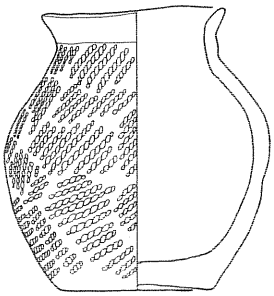
99

0 5 cm

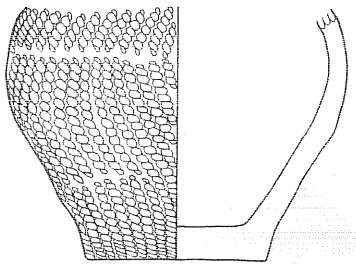
第132図　遺構外出土遺物　（縄文18）



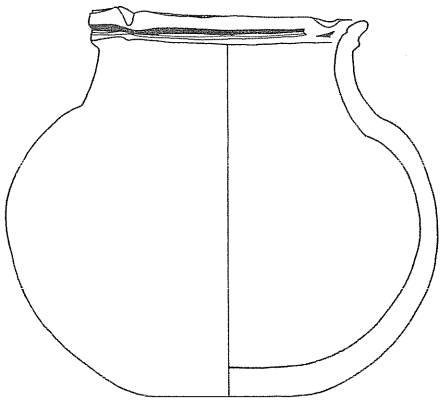
100



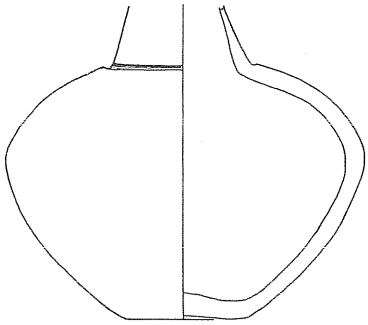
101



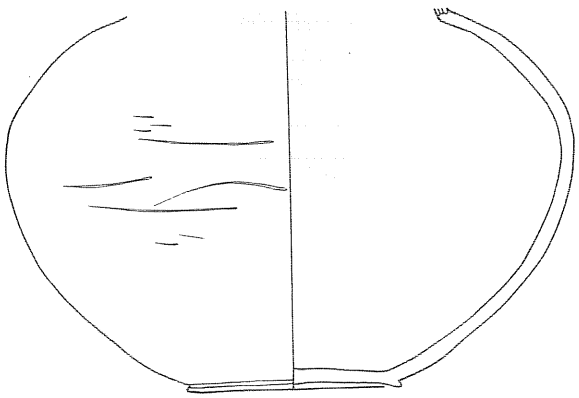
102



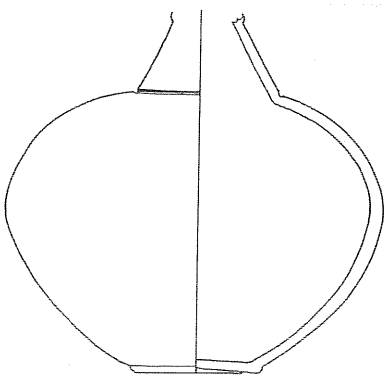
103



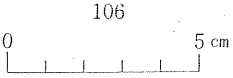
104



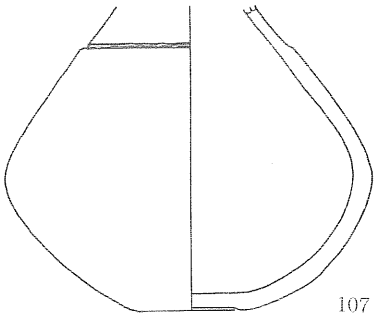
105

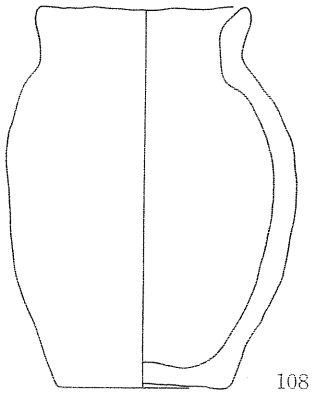


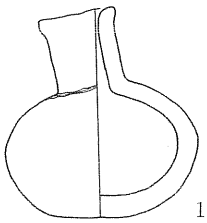
106

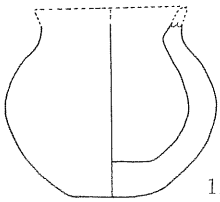


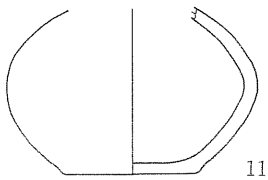
第133図　遺構外出土遺物　（縄文19）

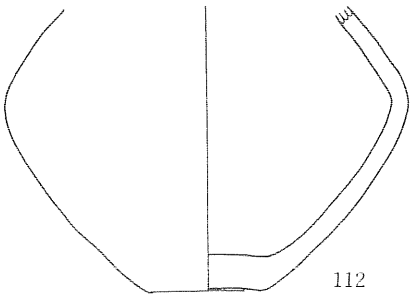


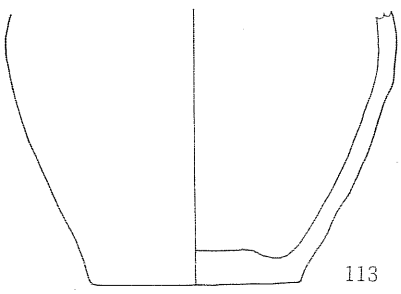


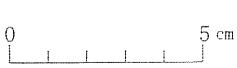




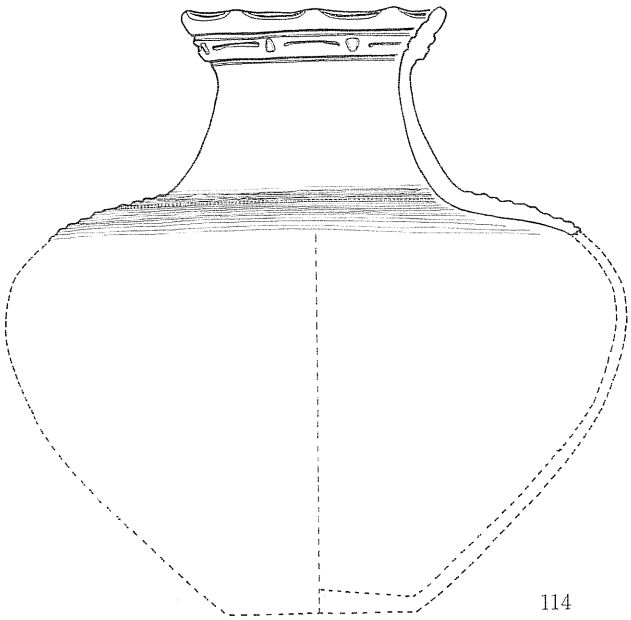


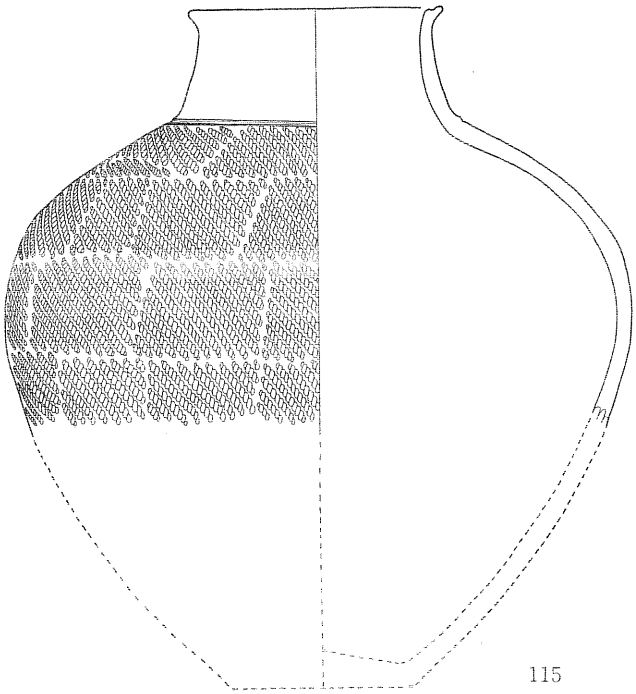




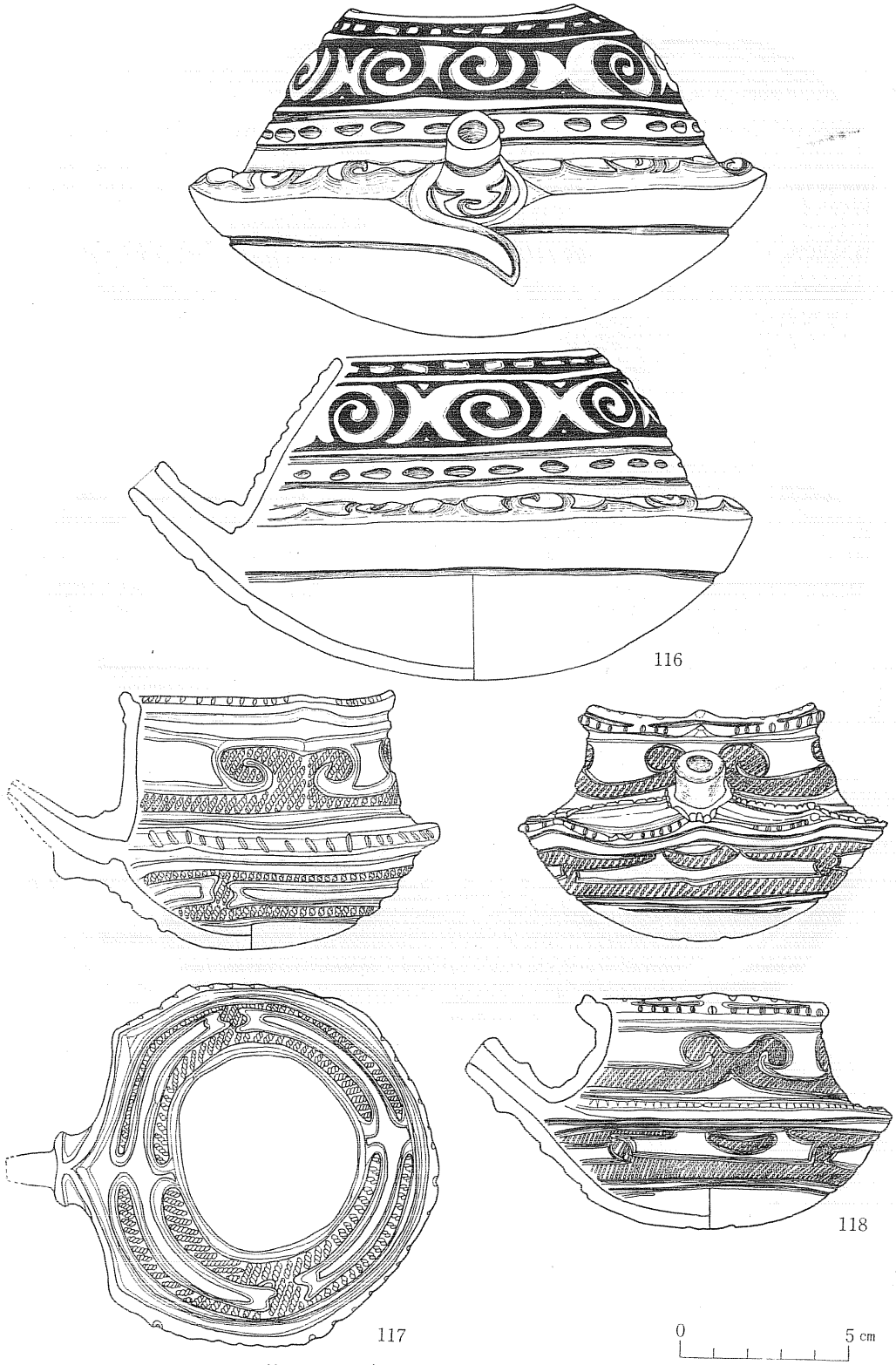


第134図　遺構外出土遺物　（縄文20）

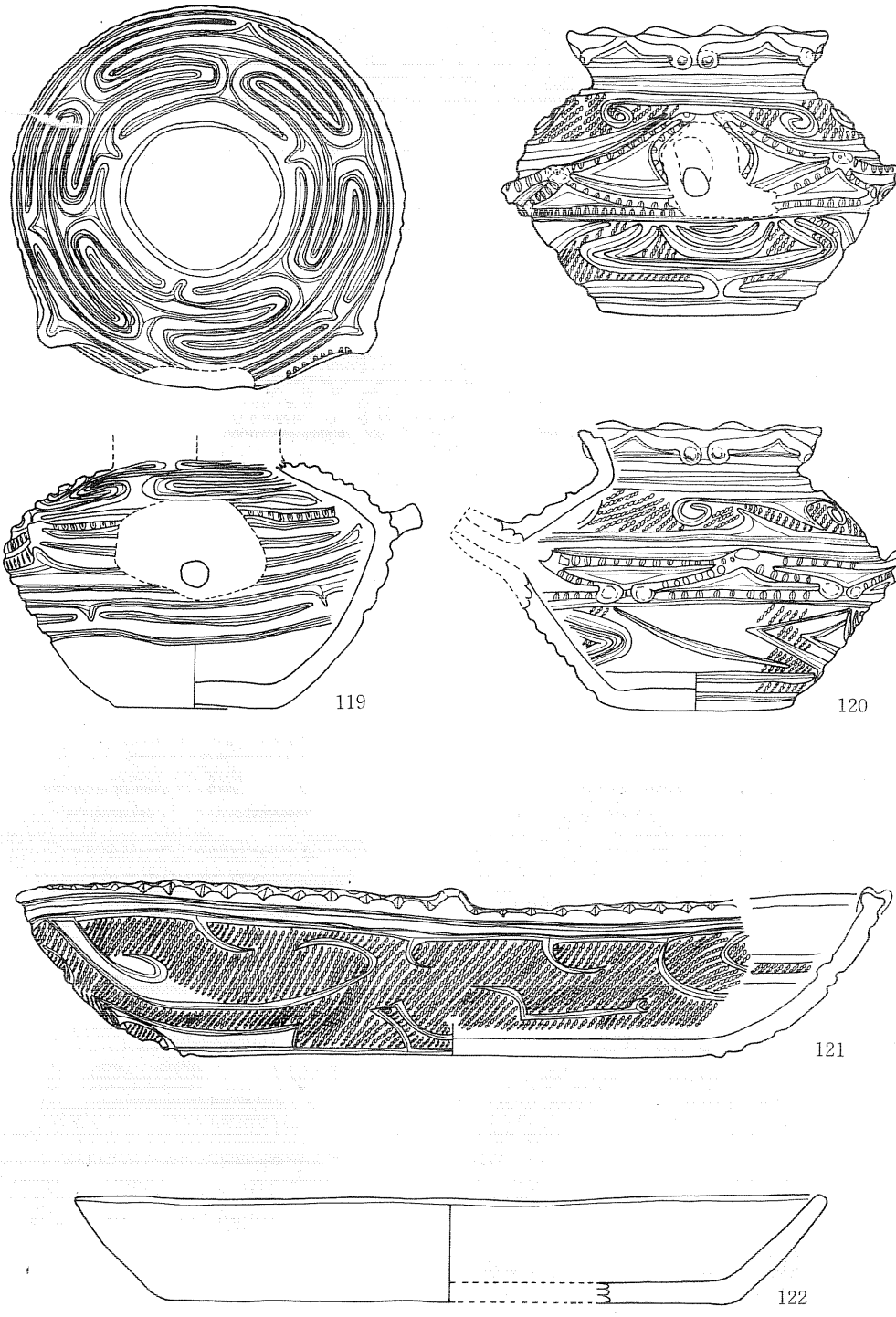




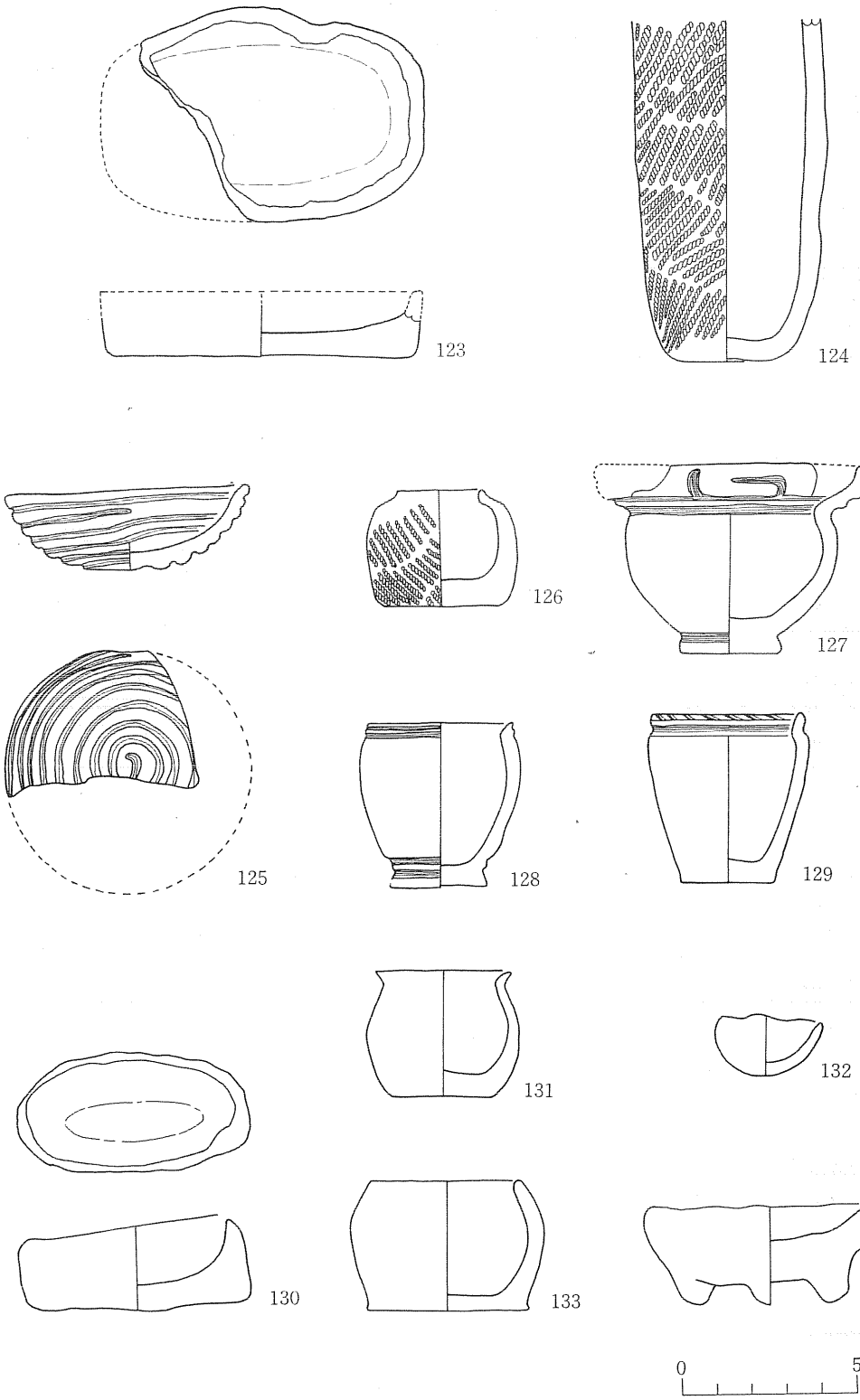
第135図　遺構外出土遺物　（縄文21）



第136図　遺構外出土遺物　（縄文22）



第137図　遺構外出土遺物　（縄文23）



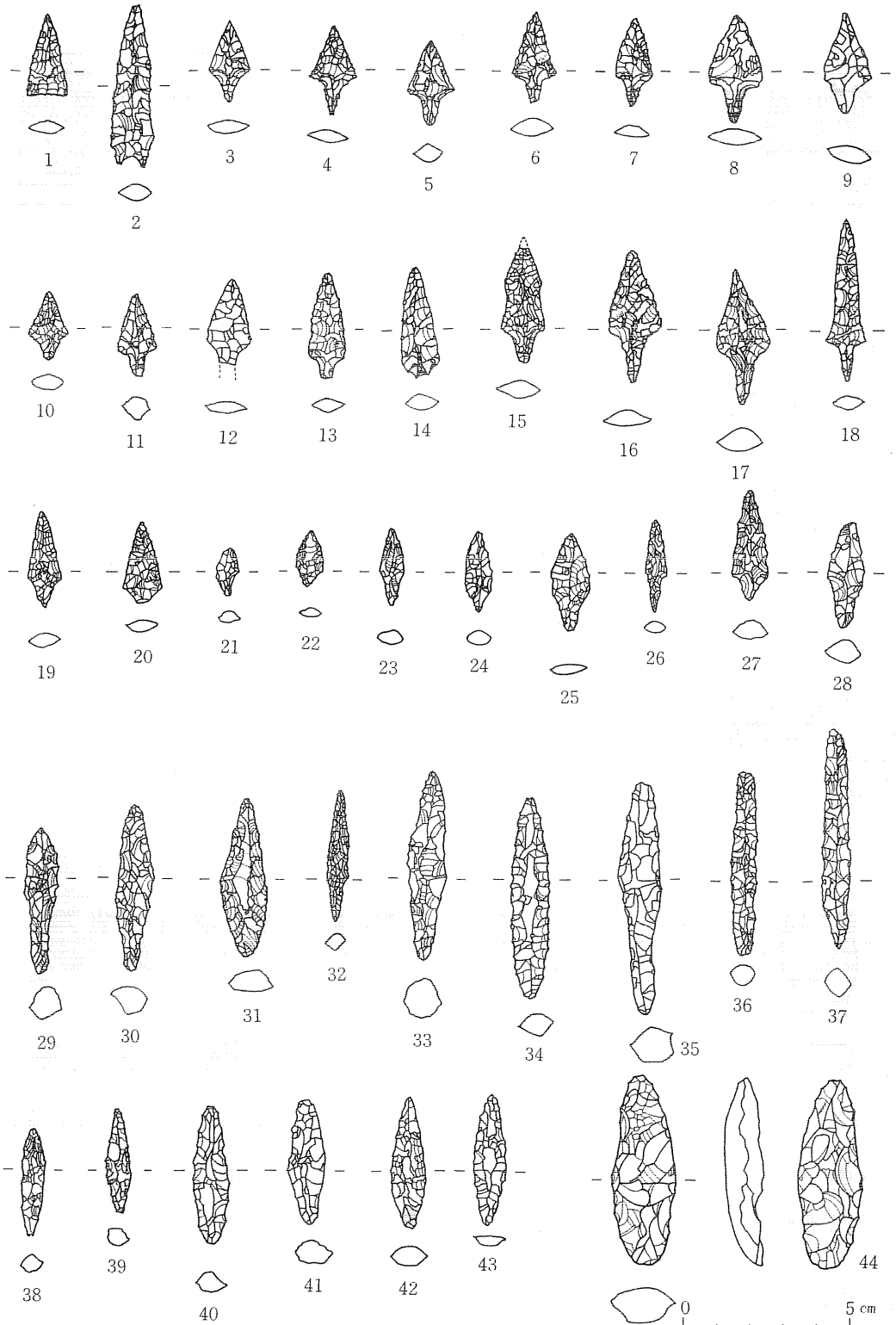
第138図　遺構外出土遺物　（縄文24）

第6表　遺構外出土土器計測値

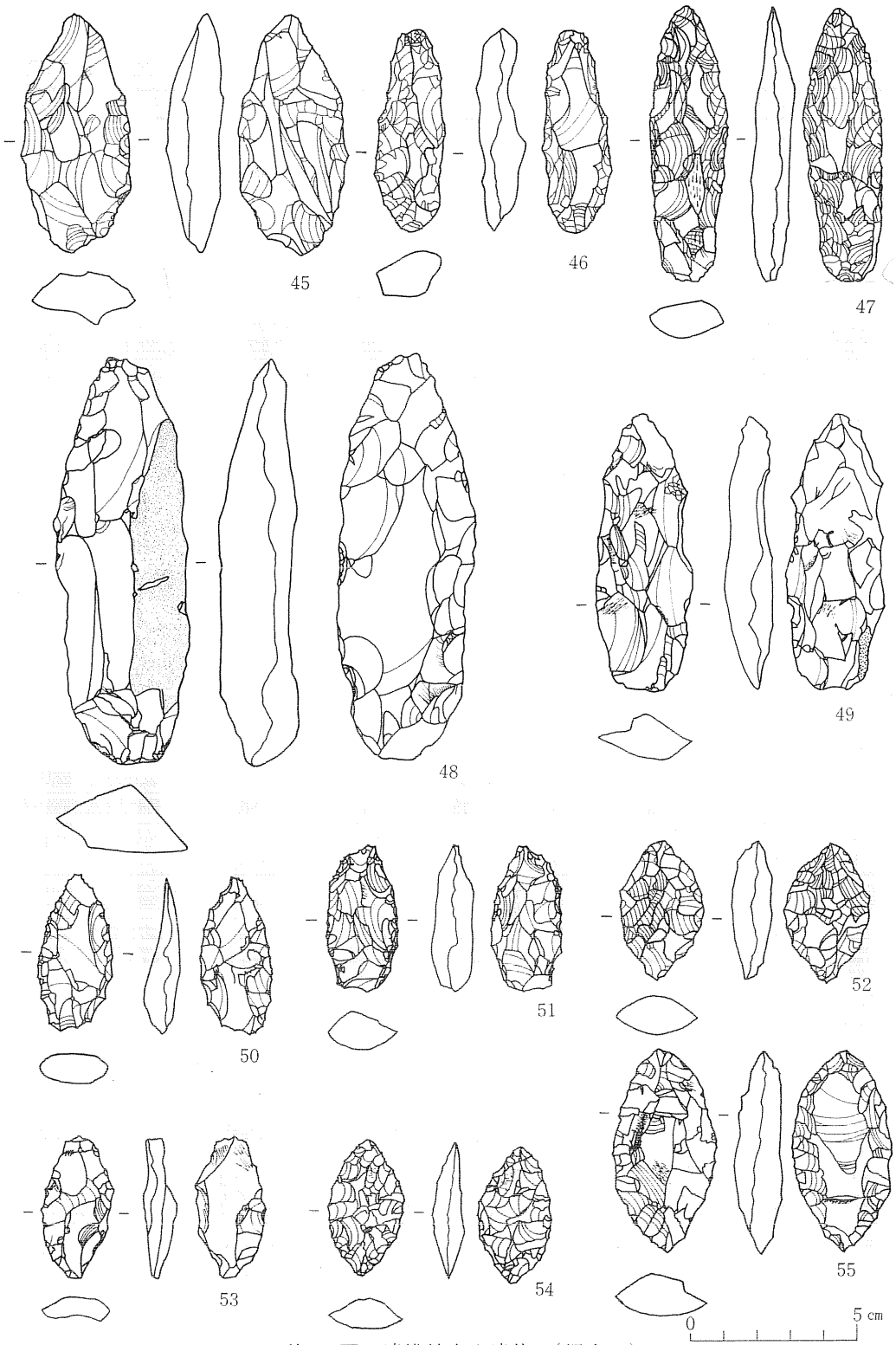
図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	出土地点
第115図 1	第76図版73	深鉢	13.4cm	16.6cm	4.6cm	13.8cm	MA60III層
〃 2	〃 74	深鉢	14.2cm	(16.6)cm	6.2cm	13.5cm	不明
〃 3	第77図版75	深鉢	(14.5)cm	15.2cm	5.6cm	—cm	LI51IV層
〃 4	〃 76	深鉢	(12.9)cm	(13.5)cm	(4.3)cm	—cm	LJ48IV層下部
〃 5	〃 77	深鉢	(10.3)cm	14.0cm	5.9cm	11.1cm	MB50III層下部
〃 6	〃 78	深鉢	9.4cm	11.7cm	5.5cm	9.9cm	KJ46IV層
第116図 7	〃 79	深鉢	11.4cm	12.0cm	11.6cm	4.1cm	LF51IV層
〃 8	〃 80	深鉢	9.4cm	12.3cm	4.8cm	10.8cm	不明
〃 9	〃 81	深鉢	15.4cm	14.3cm	5.9cm	—cm	LG50IV層
〃 10	〃 82	深鉢	—cm	—cm	5.6cm	—cm	MB49IV層
〃 11	第78図版83	深鉢	—cm	—cm	8.6cm	—cm	LB58III層
〃 12	〃 84	深鉢	—cm	—cm	8.9cm	—cm	LD48IV層
〃 13	———	深鉢	—cm	—cm	10.0cm	—cm	LI53IV層下部
第117図14	第78図版85	鉢	11.4cm	8.8cm	3.9cm	11.4cm	LD53III層
〃 15	〃 86	鉢	12.3cm	9.6cm	4.2cm	12.3cm	LA48IV層上部
〃 16	〃 87	鉢	(12.1)cm	9.4cm	4.2cm	12.6cm	LI56IV層上部
〃 17	〃 88	鉢	(11.9)cm	9.0cm	4.5cm	12.6cm	LI57IV層上部
〃 18	〃 89	鉢	(14.0)cm	7.7cm	3.4cm	—cm	KI45IV層
〃 19	〃 90	鉢	10.4cm	7.2cm	3.6cm	10.2cm	KI45IV層
第118図20	第79図版91	鉢	(12.5)cm	10.1cm	4.2cm	—cm	KH45IV層
〃 21	〃 92	鉢	8.3cm	6.0cm	2.8cm	8.3cm	MC48III層
〃 22	〃 93	鉢	(14.0)cm	10.0cm	5.5cm	—cm	MB48IV層上部
〃 23	〃 94	鉢	11.0cm	(8.3)cm	(5.1)cm	(10.8)cm	LE48内落込
〃 24	〃 95	鉢	10.4cm	8.3cm	3.8cm	11.4cm	LH48III層下部
〃 25	〃 96	鉢	13.3cm	9.6cm	5.0cm	13.9cm	LC48IV層上部
第119図26	〃 97	鉢	19.5cm	(14.7)cm	(5.6)cm	(19.4)cm	MB47IV層上部
〃 27	〃 98	鉢	20.1cm	14.4cm	5.8cm	19.8cm	LA47IV層
〃 28	第80図版99	鉢	18.1cm	15.9cm	5.2cm	17.3cm	LA45IV層下部
〃 29	〃 100	鉢	19.0cm	17.9cm	5.6cm	19.8cm	LF47IV層
〃 30	〃 101	鉢	21.2cm	11.6cm	7.7cm	21.2cm	LE53IV層
第120図31	〃 102	鉢	(11.4)cm	9.0cm	5.3cm	(11.2)cm	LG52III層上部
〃 32	〃 103	鉢	14.0cm	11.9cm	4.9cm	—cm	LG51IV層
〃 33	〃 104	鉢	13.1cm	11.0cm	5.0cm	—cm	MB49IV層上部
〃 34	〃 105	鉢	16.6cm	13.0cm	6.9cm	16.1cm	LC58地山面
第121図35	〃 106	鉢	(13.9)cm	(11.0)cm	(6.1)cm	—cm	LJ60IV層上部
〃 36	第81図版107	鉢	(14.4)cm	(13.3)cm	6.5cm	—cm	KG46IV層
〃 37	〃 108	鉢	—cm	6.6cm	3.4cm	7.7cm	LE55IV層上部
〃 38	〃 109	鉢	(8.3)cm	(7.1)cm	4.9cm	8.7cm	LE58IV層上部
〃 39	〃 110	鉢	8.4cm	7.8cm	4.2cm	—cm	MB48IV層上部
第122図40	〃 111	鉢	7.9cm	5.7cm	3.4cm	—cm	LH53IV層上部
〃 41	〃 112	鉢	14.6cm	7.6cm	7.8cm	—cm	LE50IV層
〃 42	〃 113	鉢	8.7cm	7.3cm	4.7cm	(9.7)cm	MA52IV層
〃 43	〃 114	台付鉢	(9.0)cm	11.6cm	6.0cm	—cm	LJ54地山面
〃 44	第82図版115	台付鉢	9.4cm	8.5cm	5.2cm	—cm	LB48IV層下部
〃 45	〃 116	台付鉢	8.8cm	7.1cm	5.6cm	9.3cm	不明
第123図46	〃 117	台付鉢	16.5cm	12.5cm	8.2cm	17.4cm	LH48III層下部
〃 47	〃 118	台付鉢	14.6cm	13.9cm	6.4cm	15.8cm	MB48IV層上部
〃 48	〃 119	台付鉢	19.5cm	16.2cm	7.7cm	20.1cm	LA45IV層

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	出土地点
第123図49	第82図版120	台付鉢	18.4cm	13.9cm	8.2cm	18.4cm	KI50地山面
〃 50	〃 121	台付鉢	19.2cm	16.2cm	8.3cm	18.6cm	LF48III層下部
〃 51	〃 122	台付鉢	—cm	—cm	12.5cm	—cm	MF58IV層
第124図52	第83図版123	台付鉢	12.2cm	9.7cm	6.7cm	—cm	LE48III層下部
〃 53	〃 124	台付鉢	12.7cm	8.6cm	6.3cm	—cm	LH48III層下部
〃 54	〃 125	台付鉢	12.1cm	11.8cm	6.3cm	12.6cm	MD59IV層
〃 55	〃 126	台付鉢	12.2cm	10.5cm	6.4cm	—cm	LF51IV層
〃 56	〃 127	台付鉢	(12.5)cm	(10.6)cm	(4.0)cm	(13.9)cm	LG50IV層
〃 57	〃 128	台付鉢	(9.3)cm	9.5cm	5.5cm	—cm	LJ50II層
第125図58	〃 129	台付鉢	7.0cm	6.4cm	3.4cm	7.4cm	LD49倒木痕
〃 59	〃 130	台付鉢	—cm	—cm	3.6cm	—cm	LH55IV層
〃 60	第84図版131	浅鉢	11.9cm	4.9cm	3.9cm	—cm	LB53III層下部
〃 61	〃 132	浅鉢	(13.8)cm	6.7cm	4.2cm	—cm	MA55IV層下部
〃 62	〃 133	浅鉢	11.7cm	4.8cm	—cm	—cm	LE47III層
第126図63	〃 134	浅鉢	16.9cm	7.4cm	4.6cm	—cm	MB48IV層上部
〃 64	〃 135	浅鉢	15.7cm	7.1cm	7.0cm	—cm	LI57IV層
〃 65	〃 136	浅鉢	16.0cm	6.4cm	6.5cm	—cm	LH57III層
〃 66	〃 137	浅鉢	12.6cm	3.9cm	6.0cm	—cm	MA50III層
〃 67	〃 138	浅鉢	10.0cm	4.1cm	6.1cm	—cm	KC60IV層　弥生？
第127図68	第85図版139	浅鉢	16.6cm	6.0cm	7.7cm	—cm	LF48III層下部
〃 69	〃 140	浅鉢	13.7cm	4.5cm	5.7cm	—cm	LD50IV層
〃 70	〃 141	浅鉢	9.3cm	3.8cm	4.0cm	—cm	KF46IV層
〃 71	〃 142	台付浅鉢	14.5cm	6.9cm	6.8cm	—cm	MB58IV層
〃 72	〃 143	台付浅鉢	15.6cm	7.6cm	7.6cm	—cm	LD53IV層
〃 73	〃 144	台付浅鉢	19.5cm	10.4cm	7.5cm	—cm	LC52IV層
第128図74	〃 145	台付浅鉢	18.2cm	(9.7)cm	(8.1)cm	—cm	LI51IV層
〃 75	〃 146	壺	3.1cm	8.3cm	2.9cm	6.3cm	MD57IV層
〃 76	第86図版147	壺	6.9cm	7.9cm	2.3cm	8.1cm	MB50IV層
〃 77	〃 148	壺	8cm	9.5cm	4.2cm	12.9cm	不明
〃 78	〃 149	壺	(4.8)cm	(12.1)cm	4.1cm	12.7cm	LA45IV層
第129図79	〃 150	壺	4.5cm	7.8cm	3.6cm	8.5cm	LE48III層下部
〃 80	〃 151	壺	5.2cm	8.6cm	3.7cm	9.6cm	LA45IV層
〃 81	〃 152	壺	(8.5)cm	—cm	—cm	—cm	MB47IV層
〃 82	〃 153	壺	(7.7)cm	10.2cm	4.6cm	12.4cm	LE49IV層
〃 83	〃 154	壺	(6.3)cm	(9.3)cm	4.9cm	11.5cm	LF51IV層
第130図84	第87図版155	壺	8.1cm	13.1cm	4.9cm	13.0cm	LF49IV層
〃 85	〃 156	壺	5.6cm	10.0cm	4.4cm	10.9cm	MB47IV層上部
〃 86	〃 157	壺	5.4cm	8.3cm	4.1cm	9.3cm	MB57IV層下部
〃 87	〃 158	壺	5.3cm	10.1cm	4.4cm	(10.3)cm	MA47IV層
〃 88	〃 159	壺	6.6cm	9.4cm	5.0cm	12.2cm	LD53III層
〃 89	〃 160	壺	6.7cm	13.0cm	5.1cm	12.9cm	LG56IV層
第131図90	〃 161	壺	6.8cm	10.5cm	3.3cm	12.0cm	KI47IV層上部
〃 91	〃 162	壺	(7.7)cm	(12.0)cm	5.2cm	13.9cm	LE49IV層上部
〃 92	第88図版163	壺	(6.2)cm	(11.0)cm	4.6cm	7.8cm	LB48IV層下部
〃 93	〃 164	壺	(7.5)cm	(10.0)cm	5.1cm	13.2cm	KJ48IV層上部
〃 94	〃 165	壺	(6.7)cm	8.7cm	5.1cm	9.2cm	LA48IV層上部
〃 95	〃 166	壺	6.3cm	10.2cm	5.2cm	10.2cm	LG51IV層上部
第132図96	〃 167	壺	8.8cm	14.5cm	6.6cm	15.6cm	LB47倒木痕
〃 97	〃 168	壺	(3.7)cm	(8.0)cm	4.4cm	(8.7)cm	MB58III層

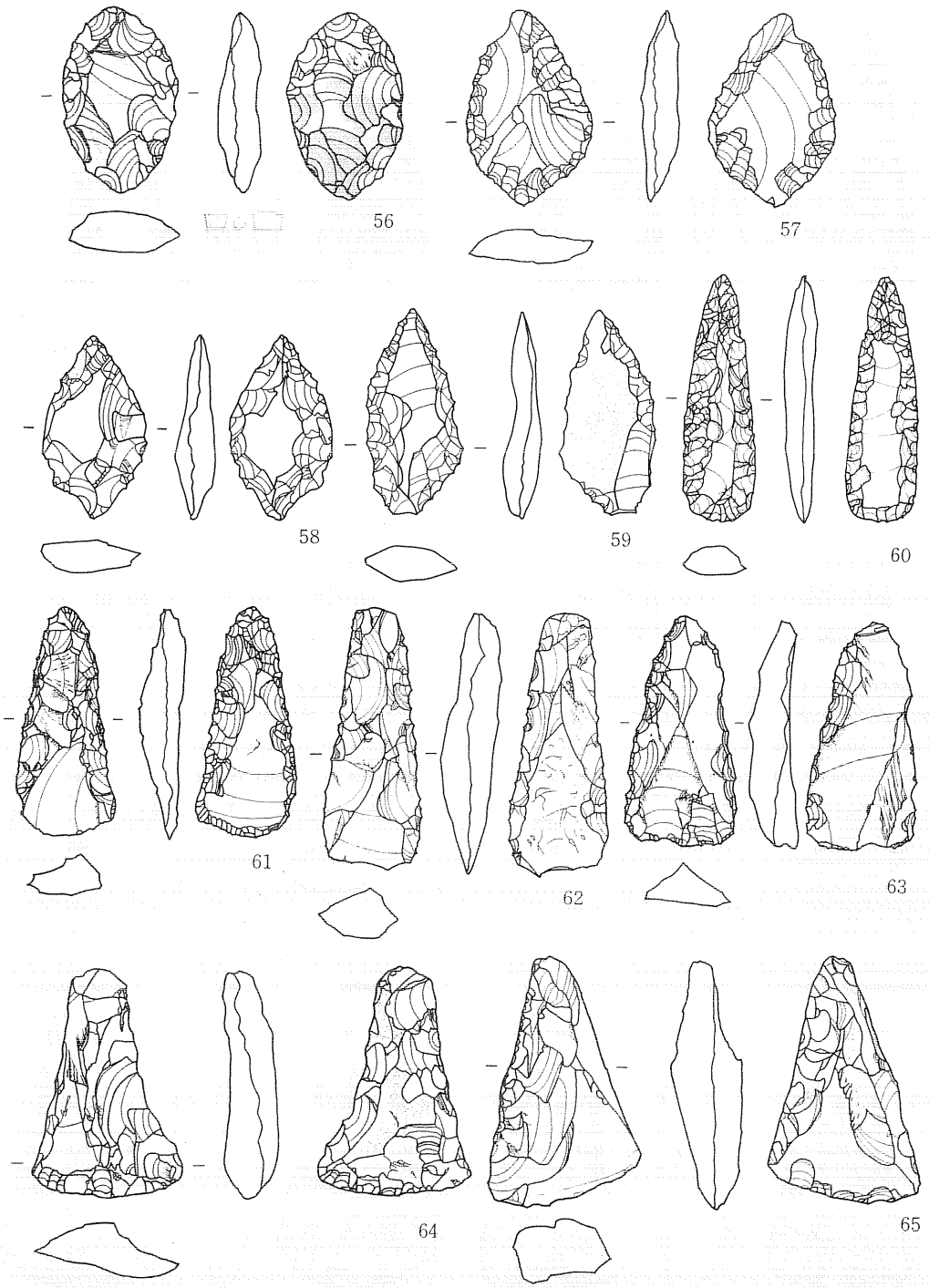
図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	出土地点
第132図98	第88図版169	壺	6.4cm	14.0cm	8.1cm	12.8cm	LI53IV層
〃 99	〃 170	壺	—cm	—cm	4.6cm	12.8cm	MA48III層
第133図100	第89図版171	壺	4.5cm	4.7cm	3.1cm	5.3cm	LG57IV層上部
〃 101	172	壺	4.9cm	7.6cm	4.1cm	6.9cm	LE47III層
〃 102	173	壺	—cm	—cm	4.7cm	(9.1)cm	LC49IV層
〃 103	174	壺	7.5cm	9.9cm	5.3cm	11.2cm	LE47III層下部
〃 104	175	壺	—cm	—cm	(3.2)cm	9.4cm	LD46IV層
〃 105	176	壺	—cm	—cm	5.5cm	14.6cm	KI45III層
〃 106	177	壺	—cm	—cm	3.4cm	10.1cm	LE48IV層
第134図107	178	壺	—cm	—cm	—cm	9.6cm	LH49III層下部
〃 108	第90図版179	壺	5.7cm	10.3cm	4.1cm	7.8cm	MC59IV層
〃 109	180	壺	2.4cm	5.6cm	1.6cm	5.1cm	KJ49IV層上部
〃 110	181	壺	(4.1)cm	(4.7)cm	2.4cm	(5.6)cm	KH43III層
〃 111	182	壺	—cm	—cm	3.4cm	6.4cm	LC55II層
〃 112	183	壺	—cm	—cm	3.0cm	10.6cm	LB48IV層
〃 113	184	壺	—cm	—cm	5.5cm	(10.4)cm	LC48IV層上部
第135図114	185	壺	(10.0)cm	—cm	—cm	(24.7)cm	LI57III層
〃 115	186	壺	10.3cm	—cm	—cm	(24.9)cm	LF49IV層
第136図116	第91図版187	注口土器	8.4cm	9.8cm	—cm	17.3cm	MG65地山面
〃 117	188	注口土器	8.7cm	8.4cm	6.4cm	6.2cm	LI50IV層下部
〃 118	189	注口土器	7.4cm	7.4cm	7.7cm	10.3cm	LG53IV層
第137図119	190	注口土器	(4.9)cm	7.8cm	5.5cm	6.1cm	LC48IV層上部
〃 120	191	注口土器	7.4cm	8.7cm	5.6cm	7.0cm	LB47倒木痕
〃 121	192	皿	25.4cm	5.1cm	15.7cm	—cm	LG53IV層
〃 122	193	皿	(21.6)cm	3.1cm	(16.1)cm	—cm	MA53IV層下部
第138図123	194	皿	(9.4)cm	(1.9)cm	(8.6)cm	—cm	LF58IV層
〃 124	第92図版195	筒形土器	—cm	—cm	2.9cm	—cm	LD48IV層
〃 125	196	袖珍土器	(7.0)cm	2.4cm	—cm	—cm	LF46IV層上部
〃 126	197	袖珍土器	3.2cm	3.5cm	5.1cm	4.6cm	LD56IV層上部
〃 127	198	袖珍土器	(6.2)cm	(5.6)cm	(2.8)cm	—cm	LE58IV層下部
〃 128	199	袖珍土器	4.9cm	4.8cm	2.8cm	5.0cm	ME56IV層下部
〃 129	200	袖珍土器	(5.3)cm	4.9cm	2.8cm	—cm	MA53IV層上部
〃 130	201	袖珍土器	6.2cm	2.5cm	6.2cm	—cm	LG48地山面
〃 131	202	袖珍土器	(4.0)cm	3.8cm	3.0cm	4.4cm	LJ51IV層下部
〃 132	第93図版203	袖珍土器	3.5cm	1.8cm	—cm	—cm	MA54IV層上部
〃 133	204	袖珍土器	(5.0)cm	(3.8)cm	4.8cm	5.6cm	MB47IV層上部
〃 134	205	袖珍土器	(6.9)cm	(2.9)cm	4.8cm	(6.9)cm	MB48III層



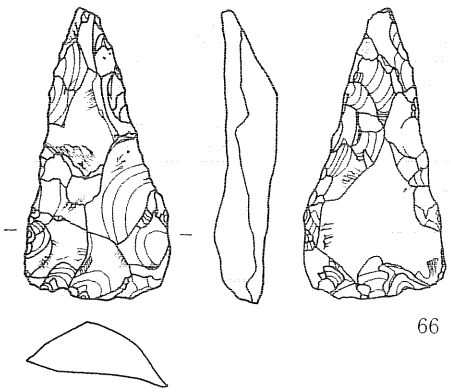
第139図　遺構外出土遺物　（縄文25）

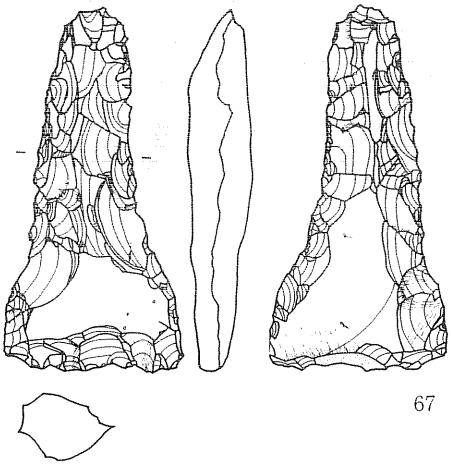


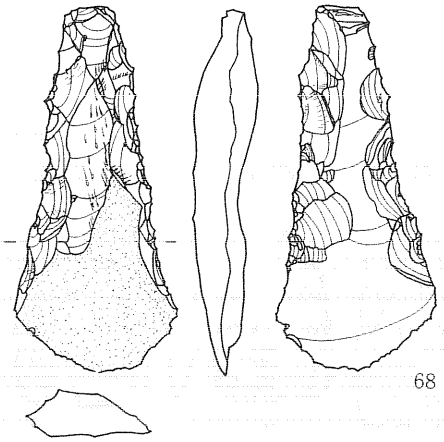
第140図　遺構外出土遺物　（縄文26）

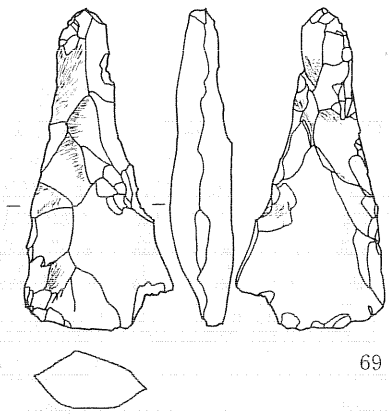


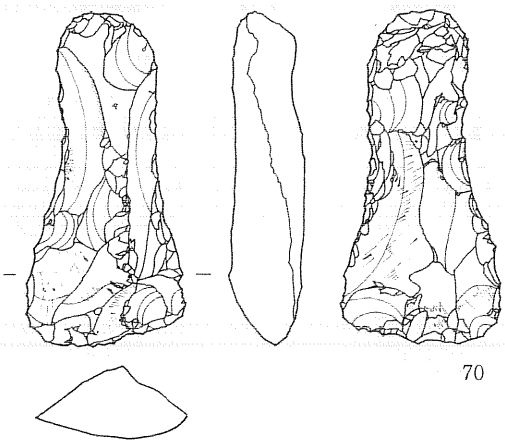
第141図　遺構外出土遺物　（縄文27）

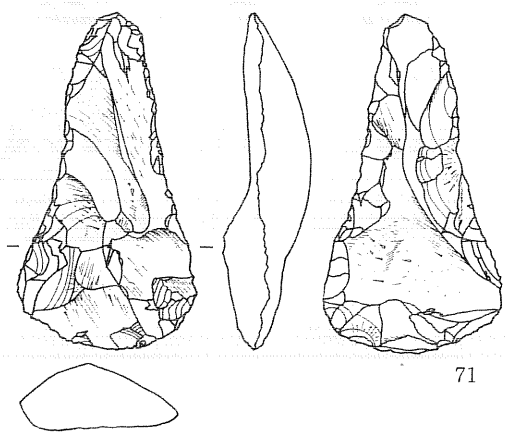


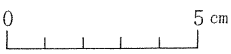




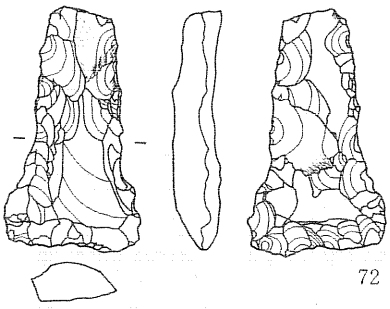


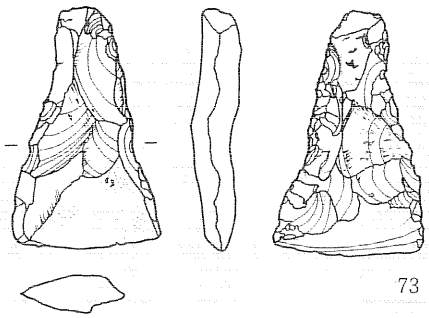


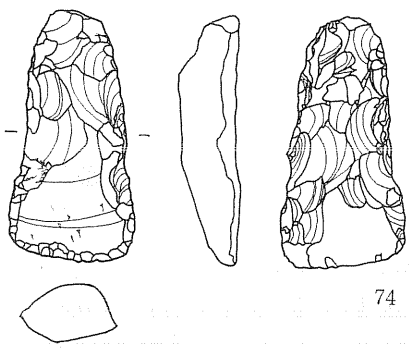


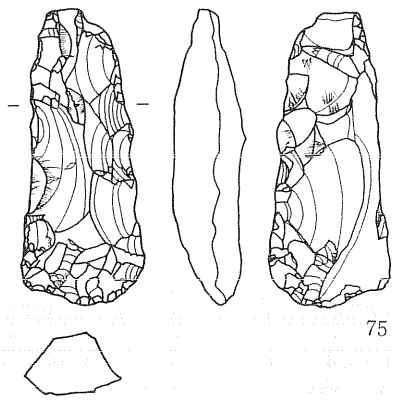


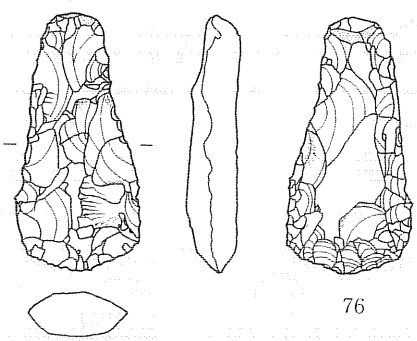
第142図　遺構外出土遺物　（縄文28）

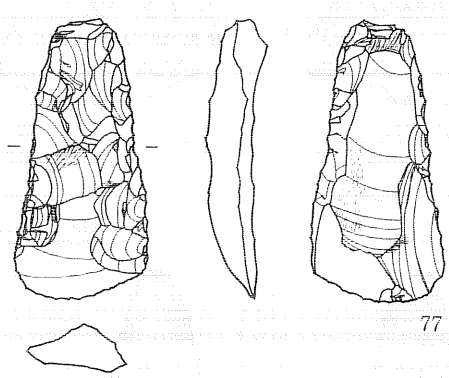


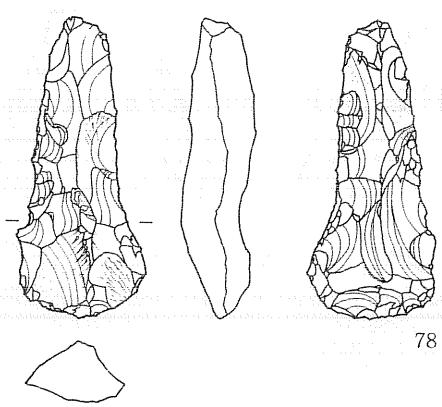


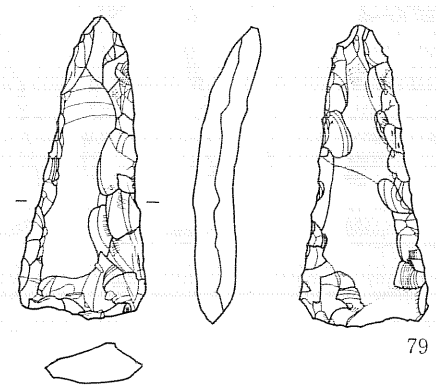


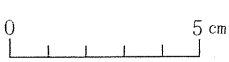




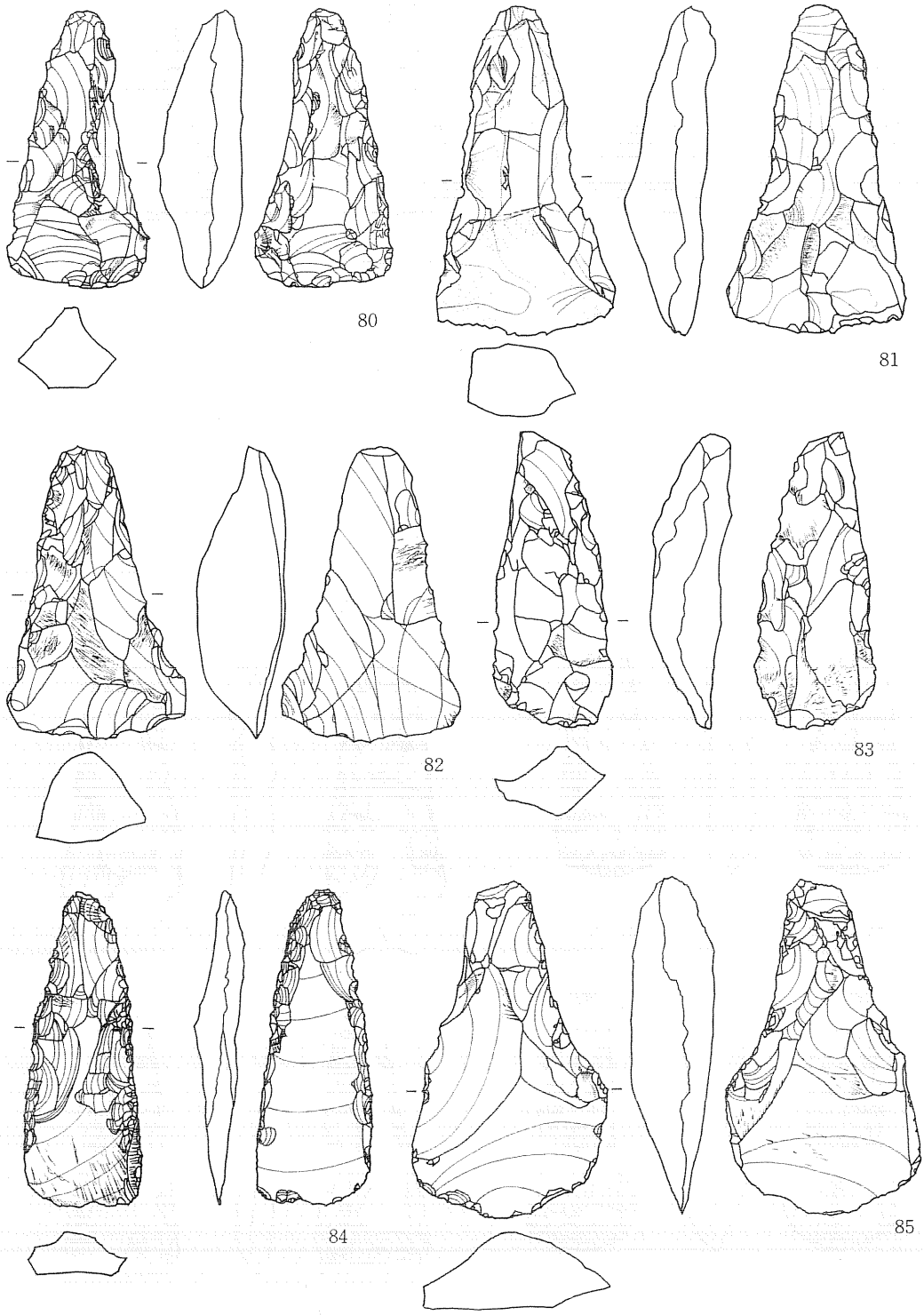




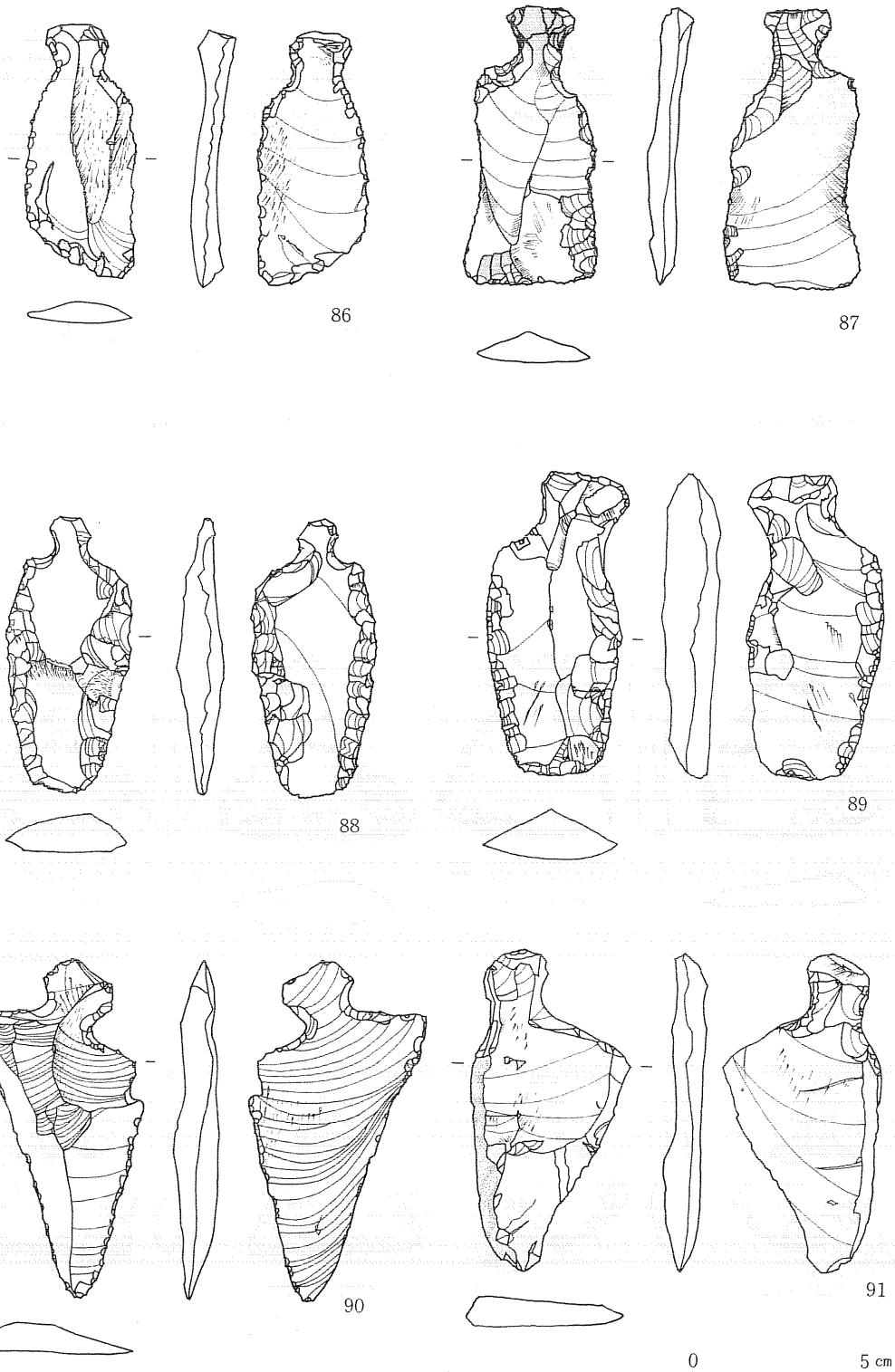




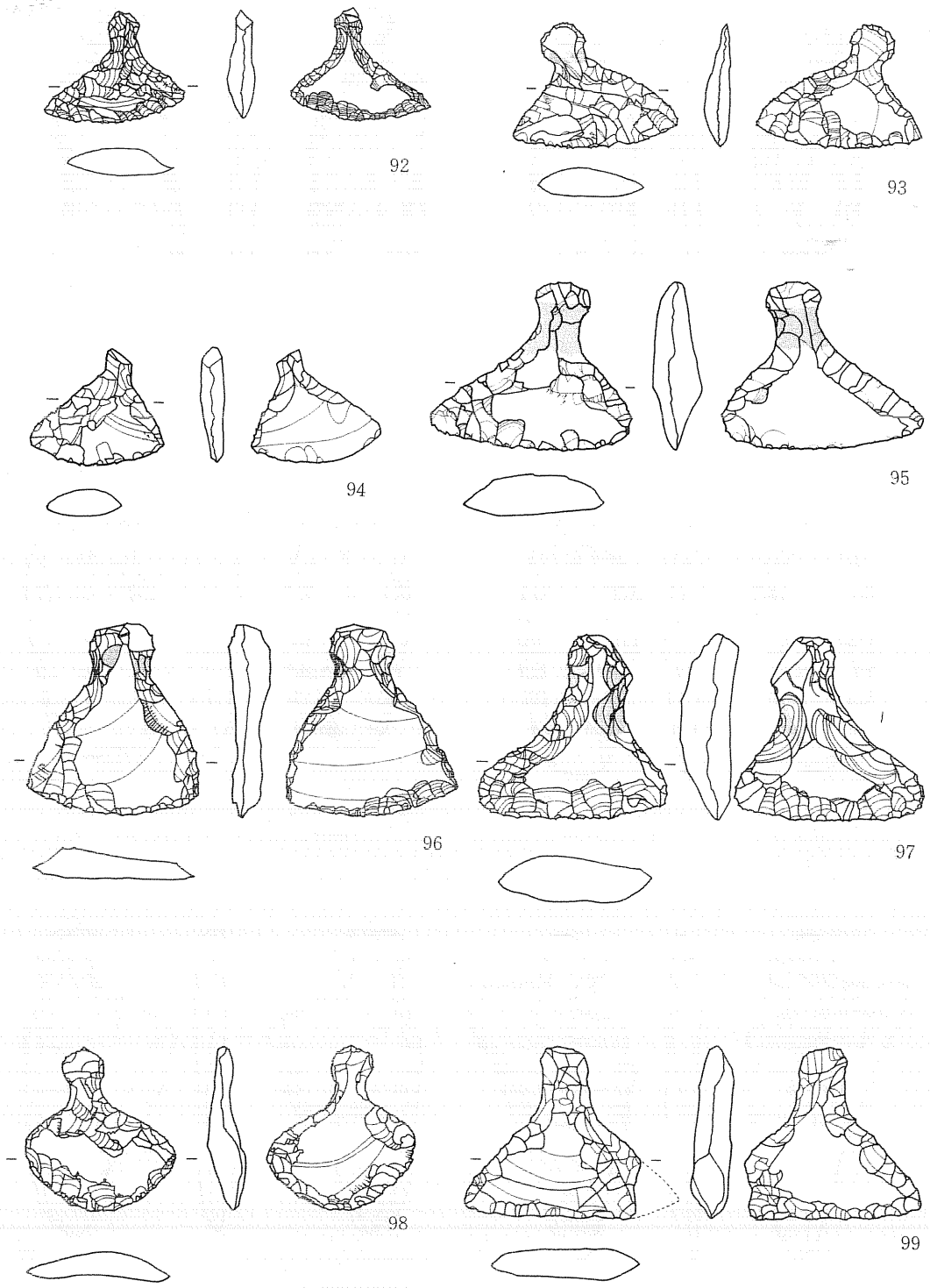
第143図　遺構外出土遺物　（縄文29）



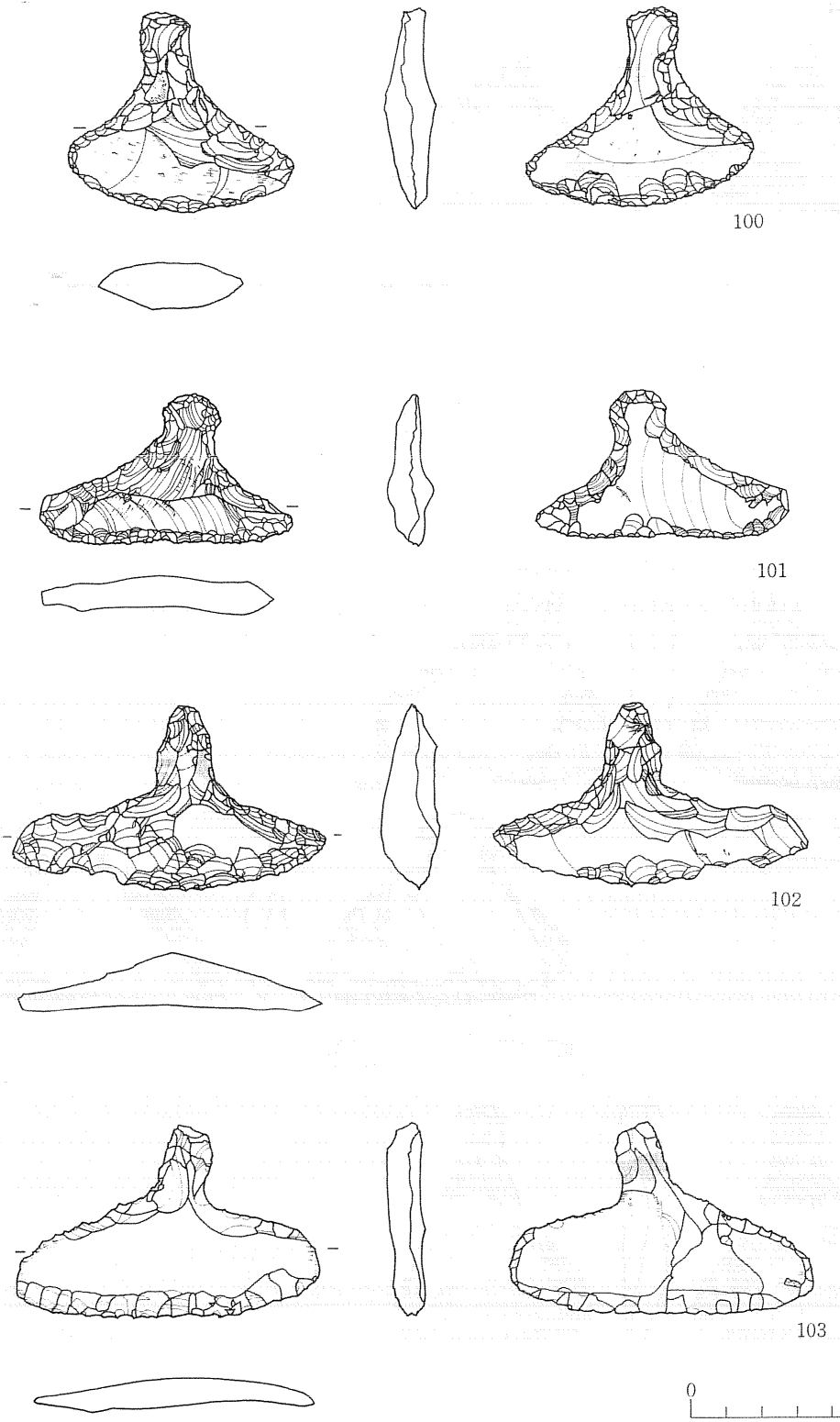
第144図　遺構外出土遺物　（縄文30）



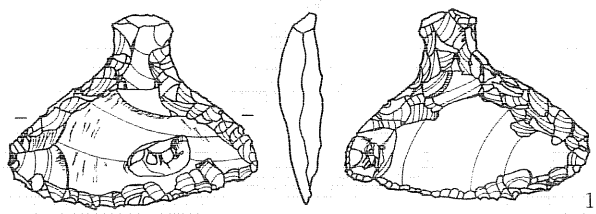
第145図　遺構外出土遺物　（縄文31）

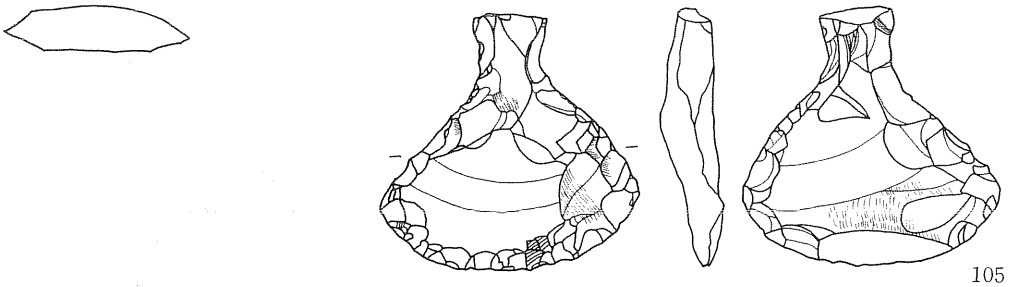


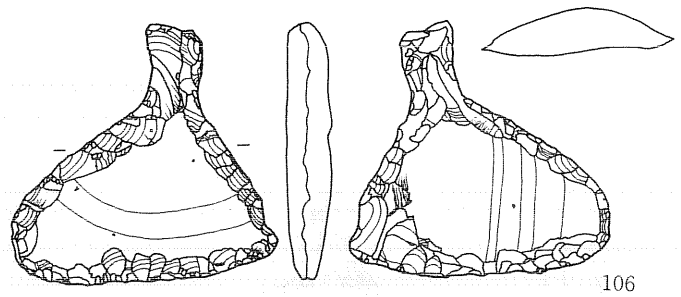
第146図　遺構外出土遺物　（縄文32）

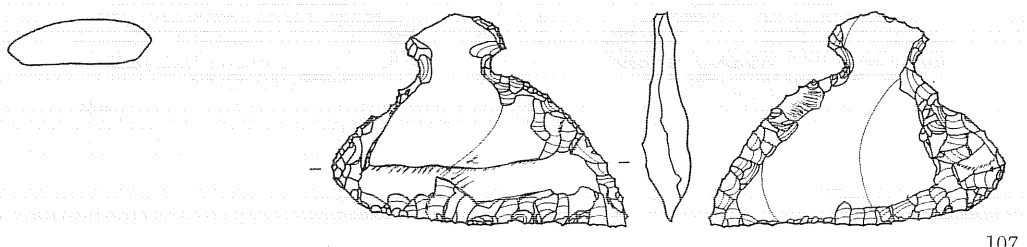


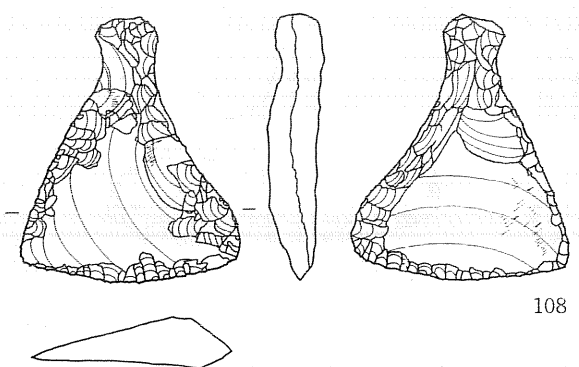
第147図　遺構外出土遺物　（縄文33）


104


105

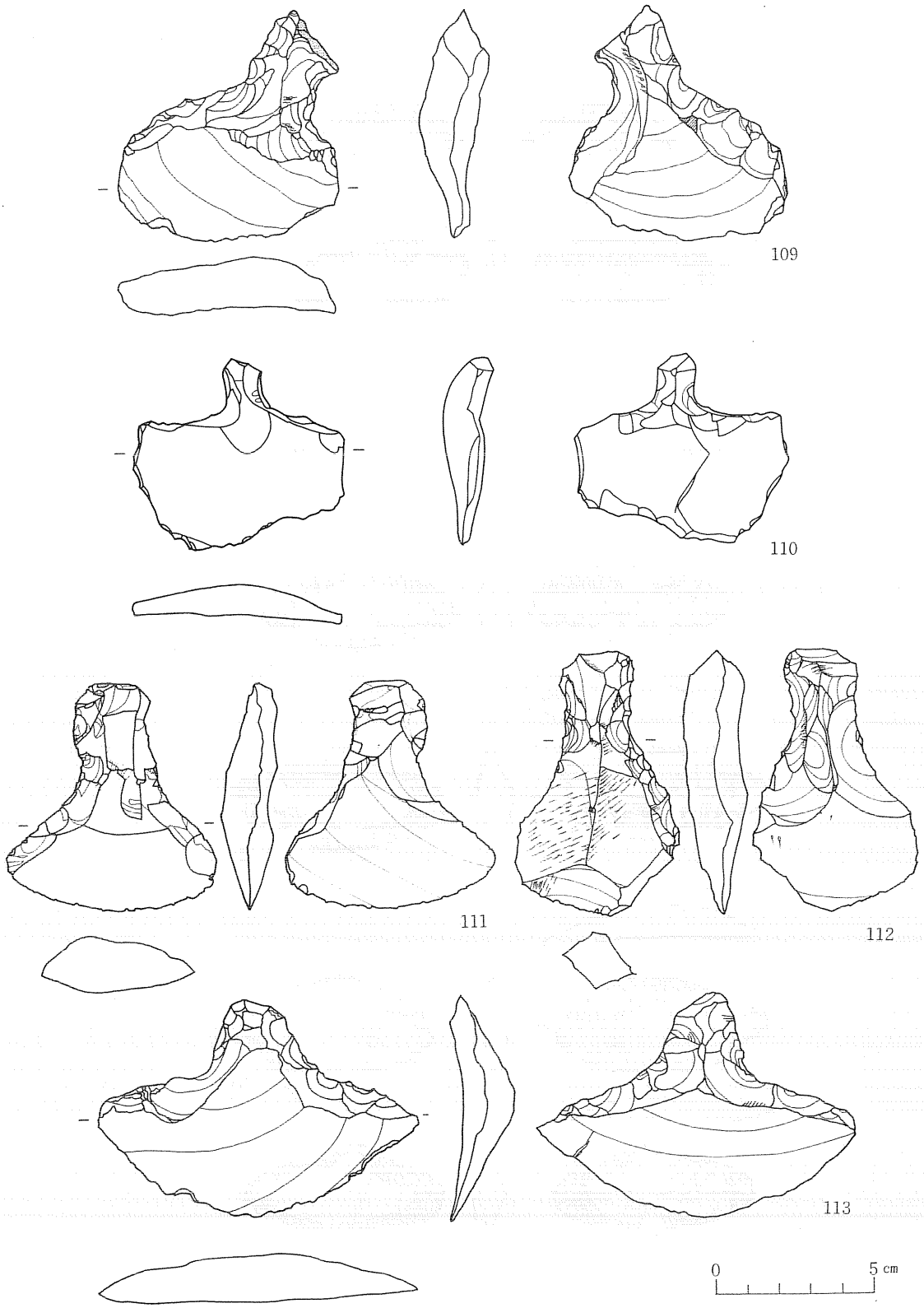

106


107

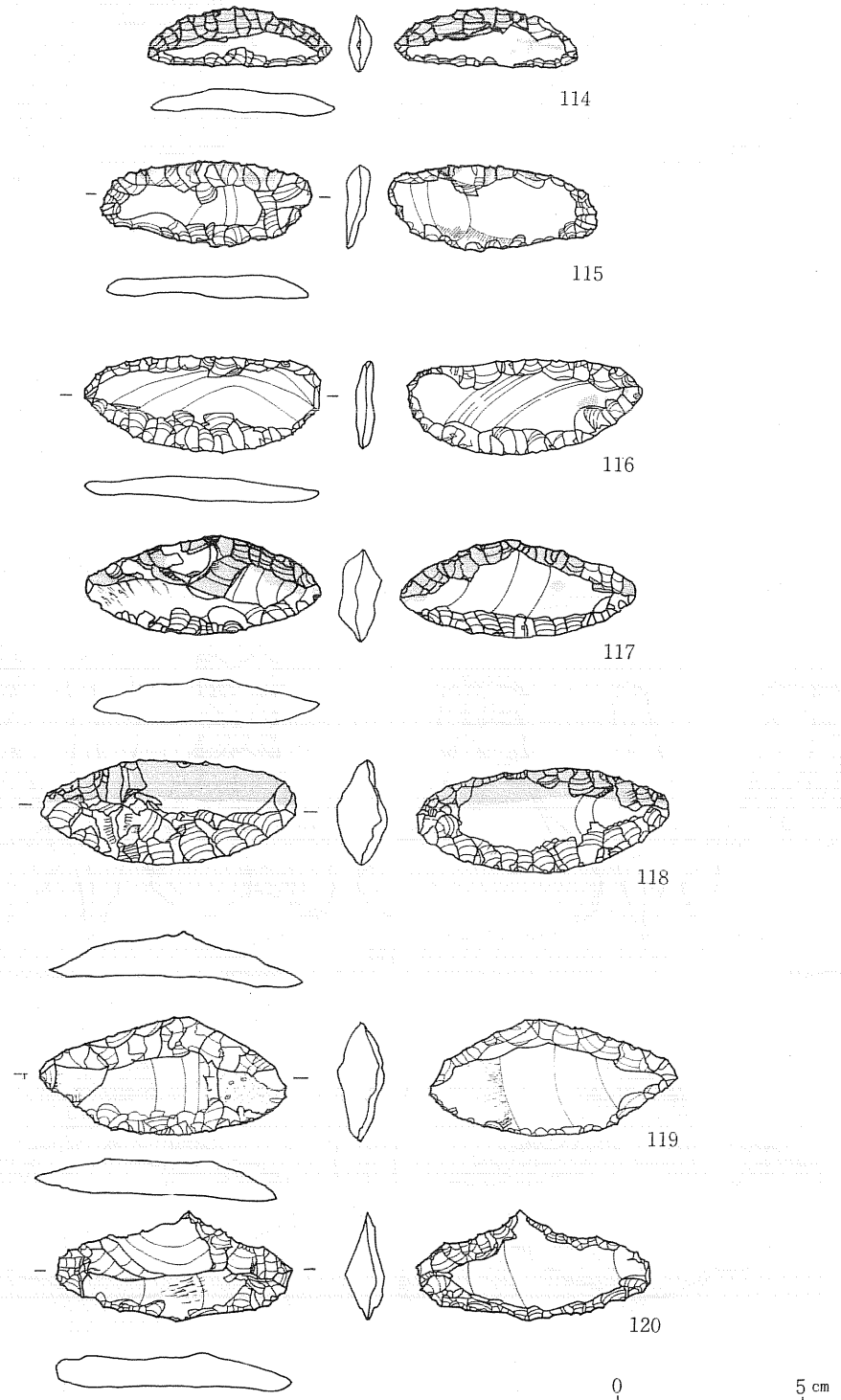

108

0 5 cm

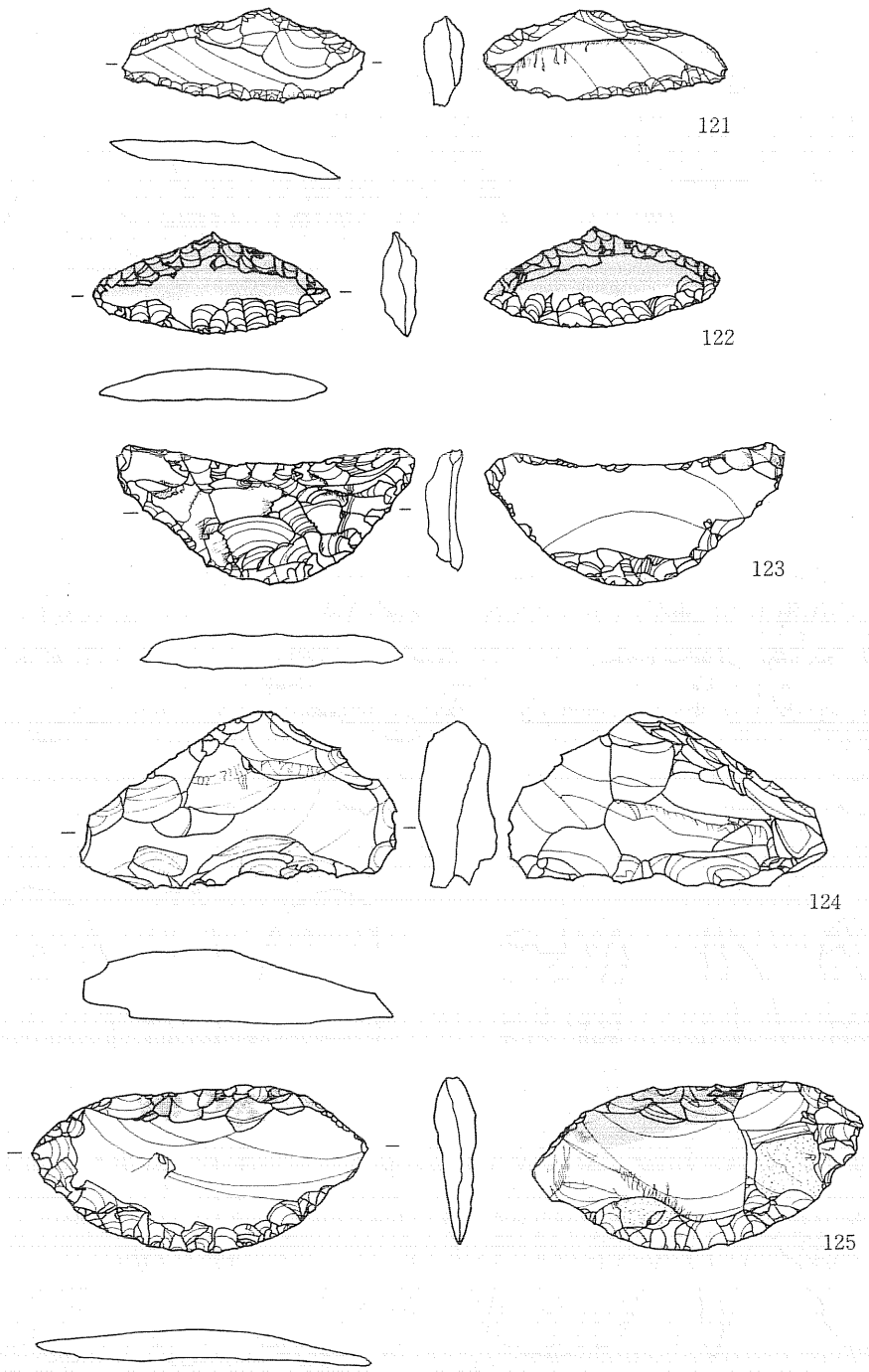
第148図　遺構外出土遺物　（縄文34）



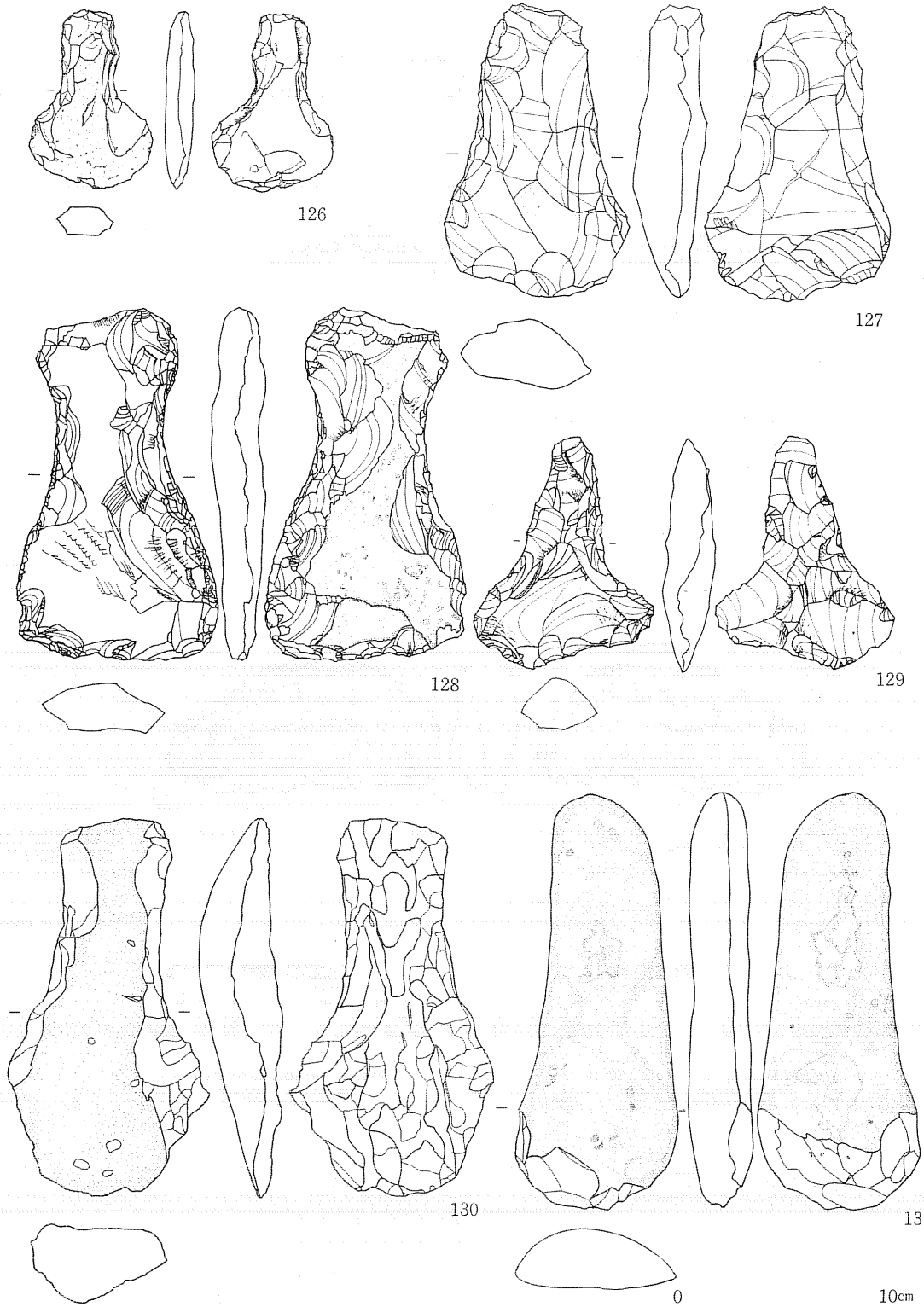
第149図　遺構外出土遺物　（縄文35）



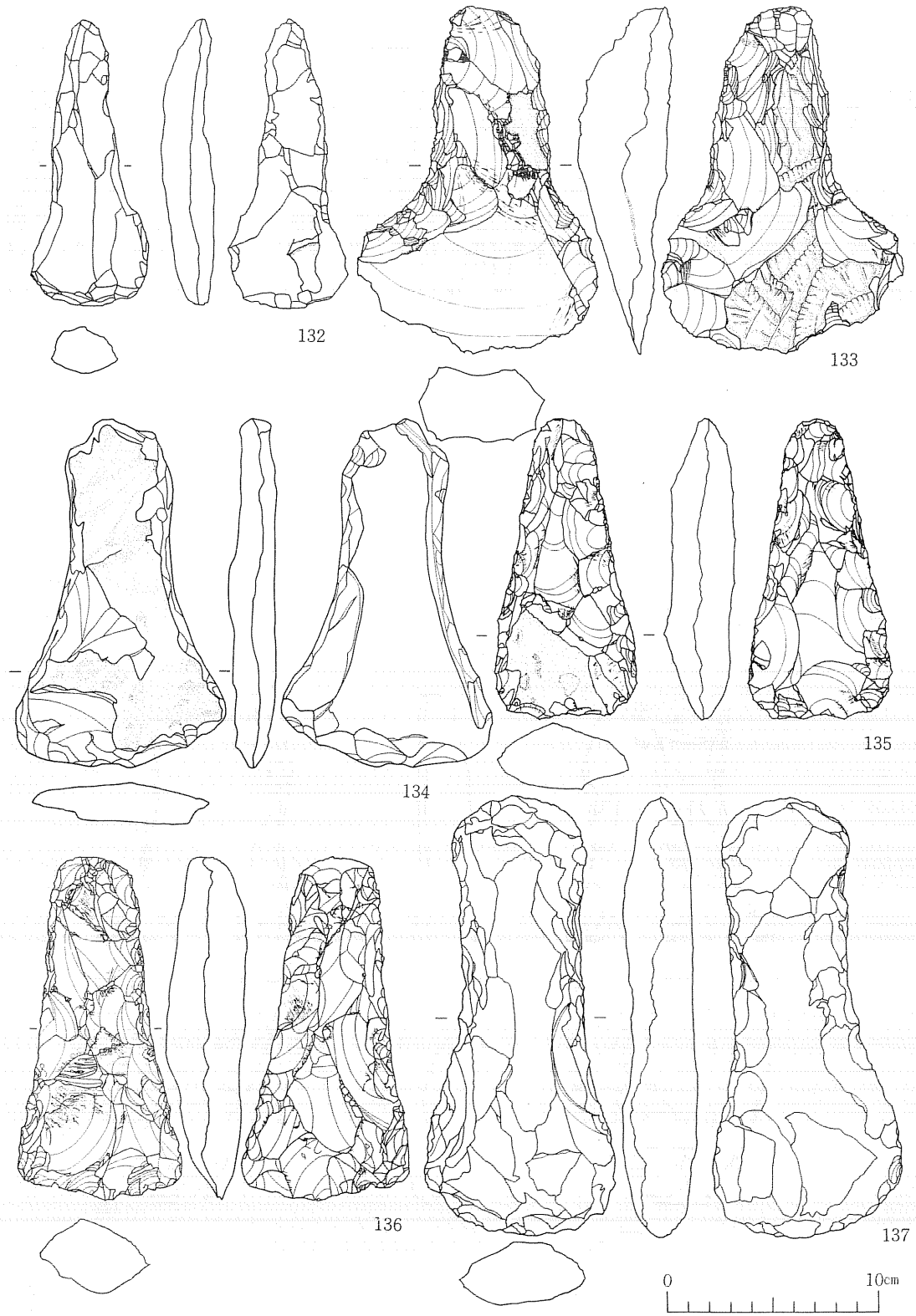
第150図　遺構外出土遺物　（縄文36）



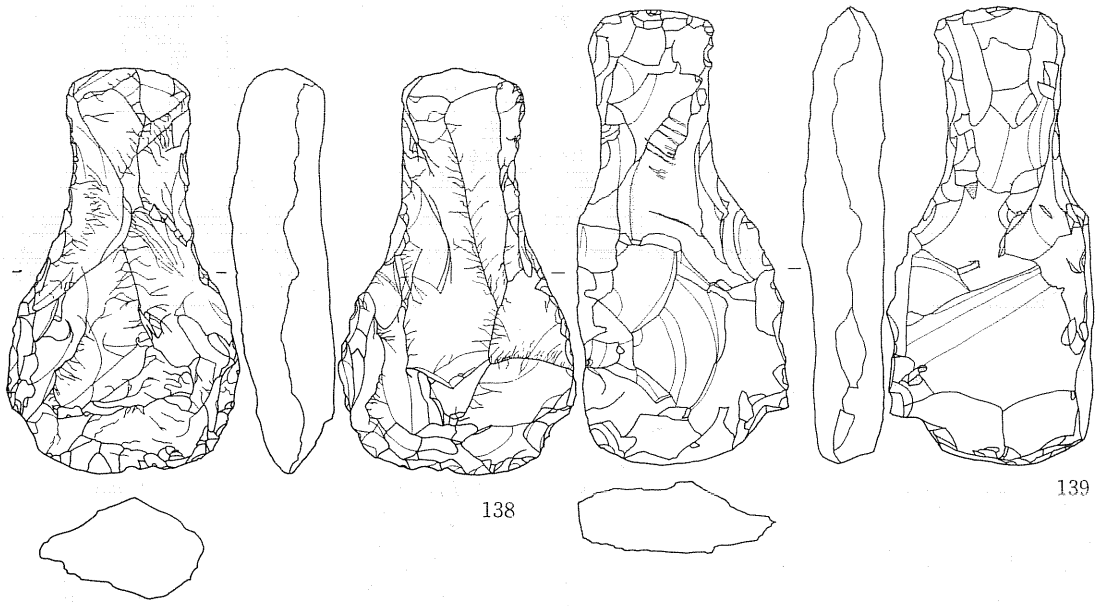
第151図　遺構外出土遺物　（縄文37）

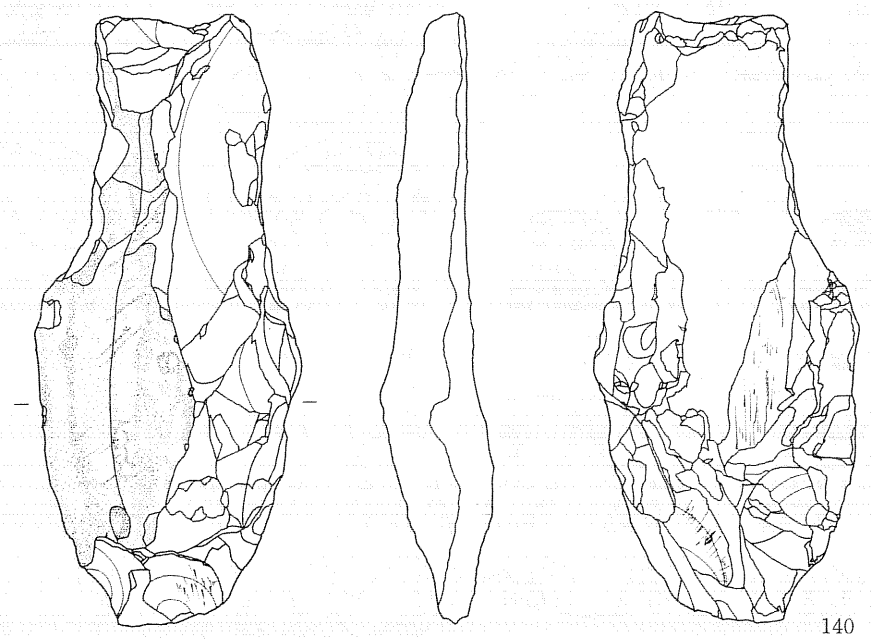


第152図　遺構外出土遺物　（縄文38）

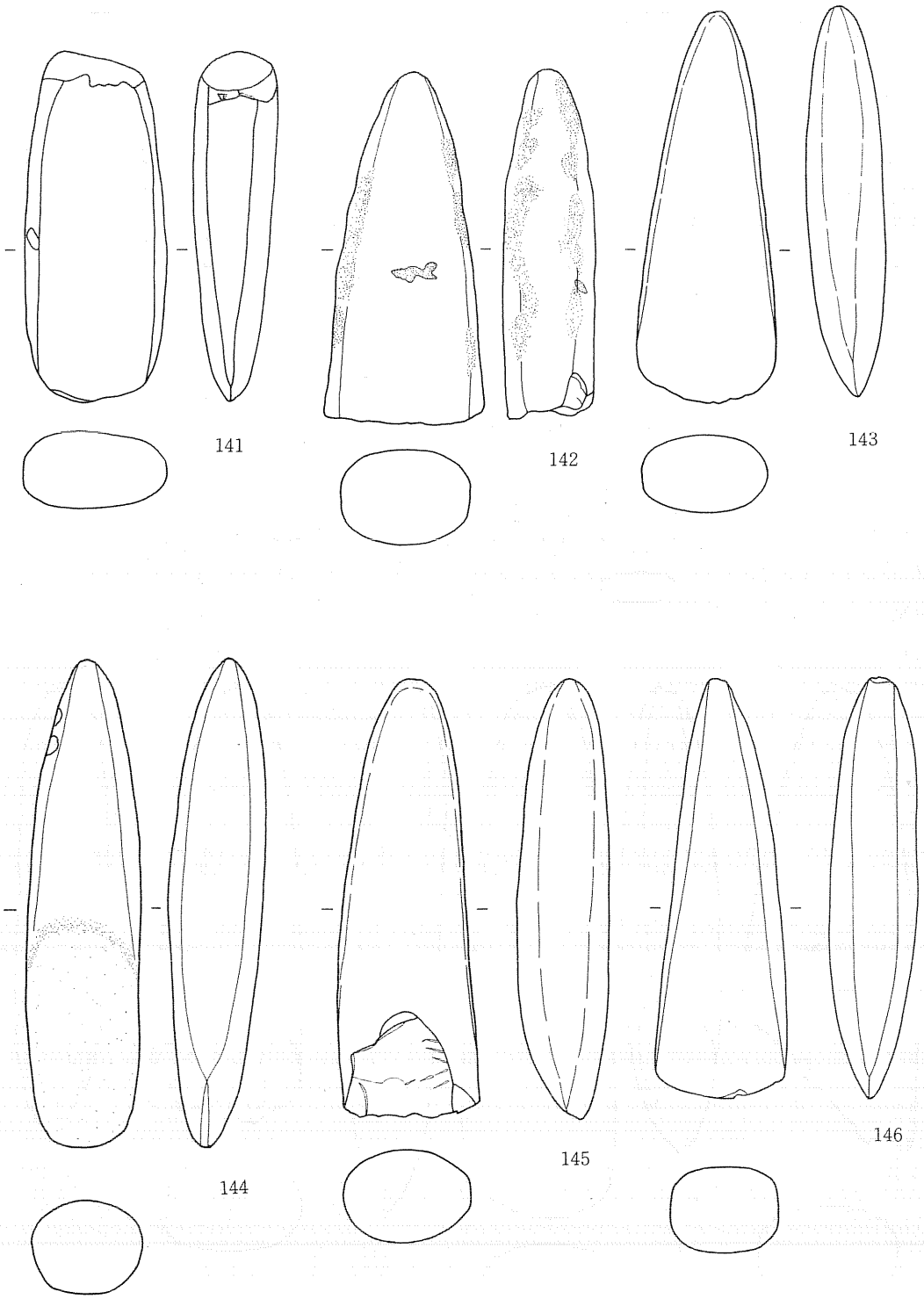


第153図　遺構外出土遺物　（縄文39）

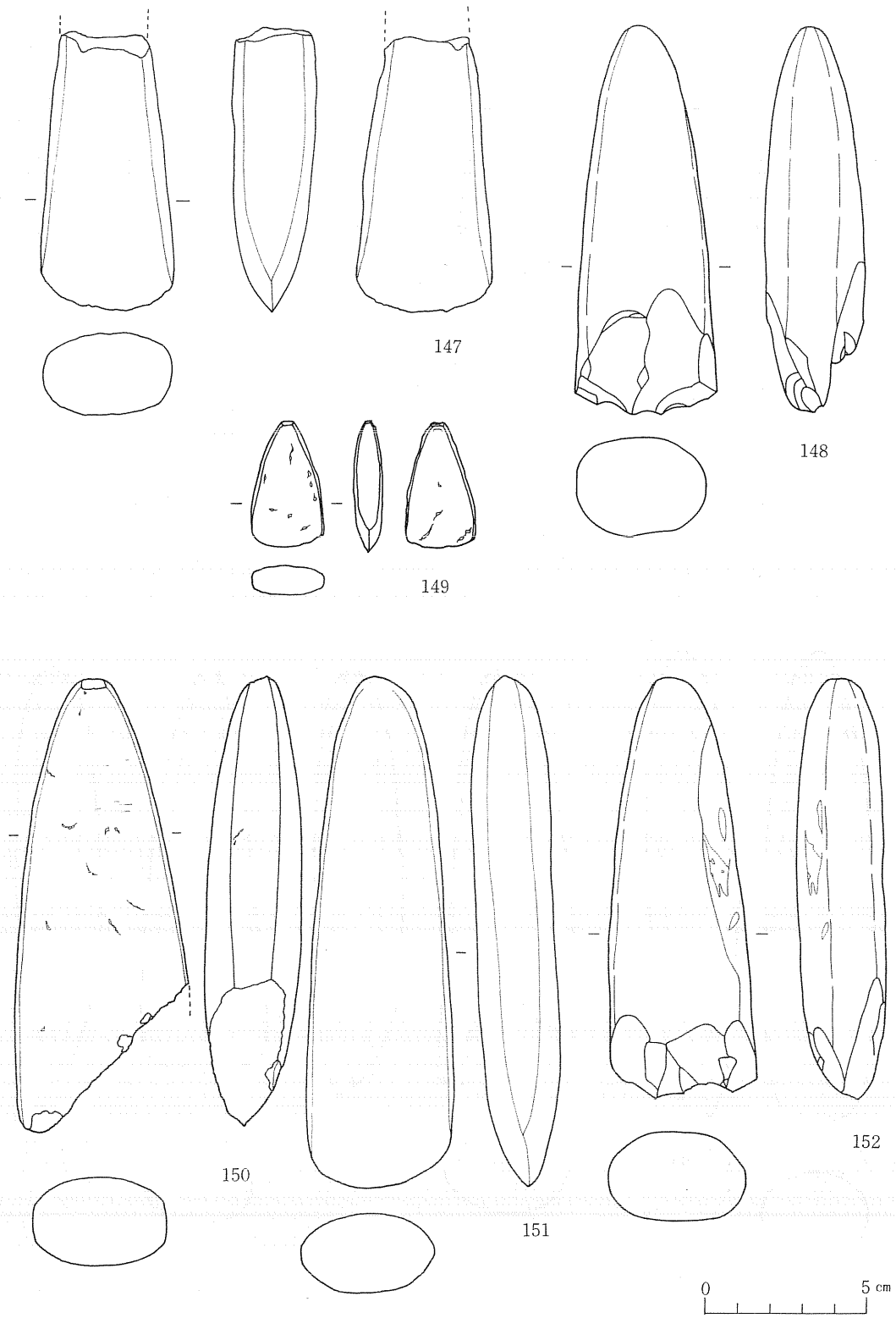




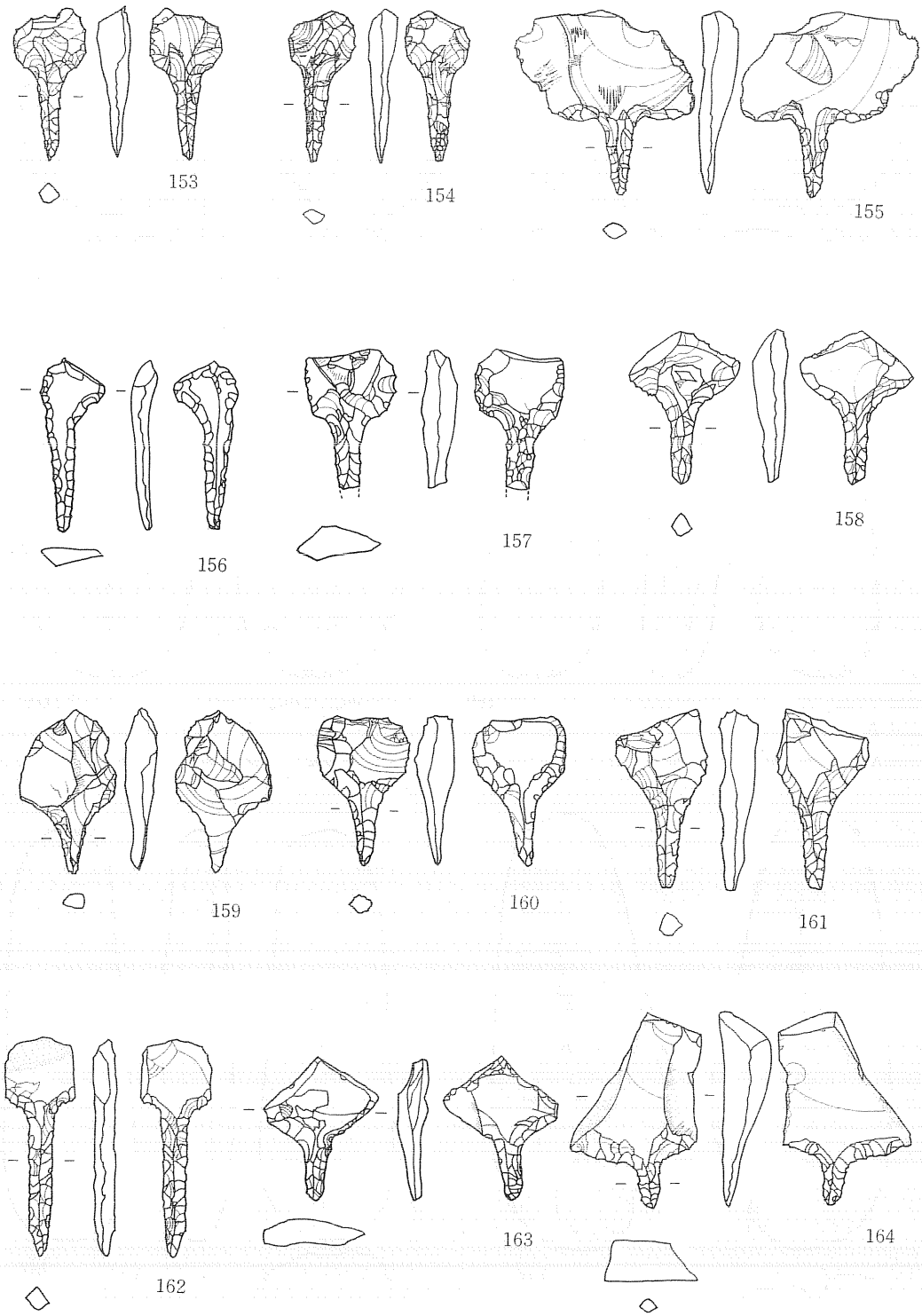
第154図　遺構外出土遺物　（縄文40）



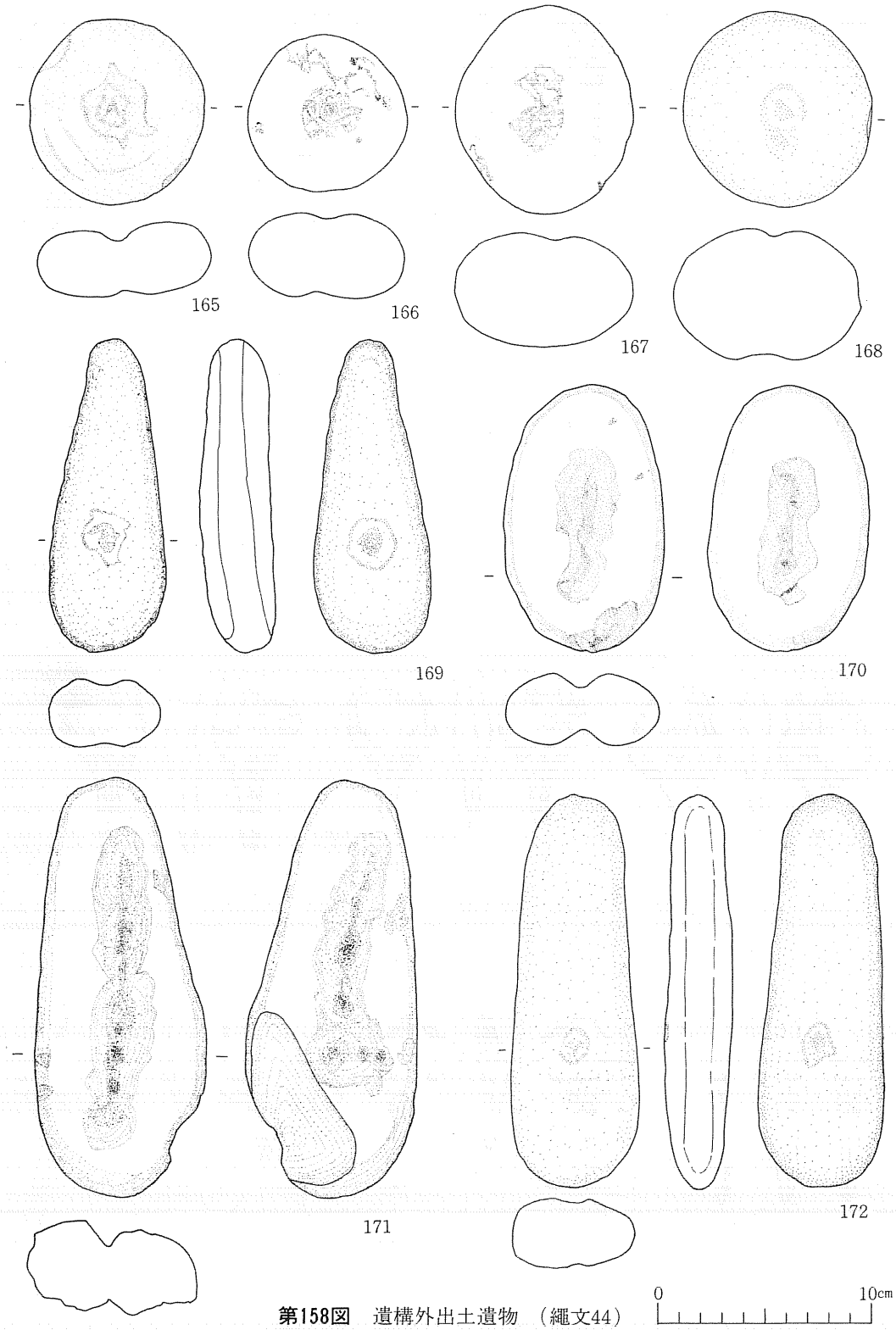
第155図　遺構外出土遺物　（縄文41）



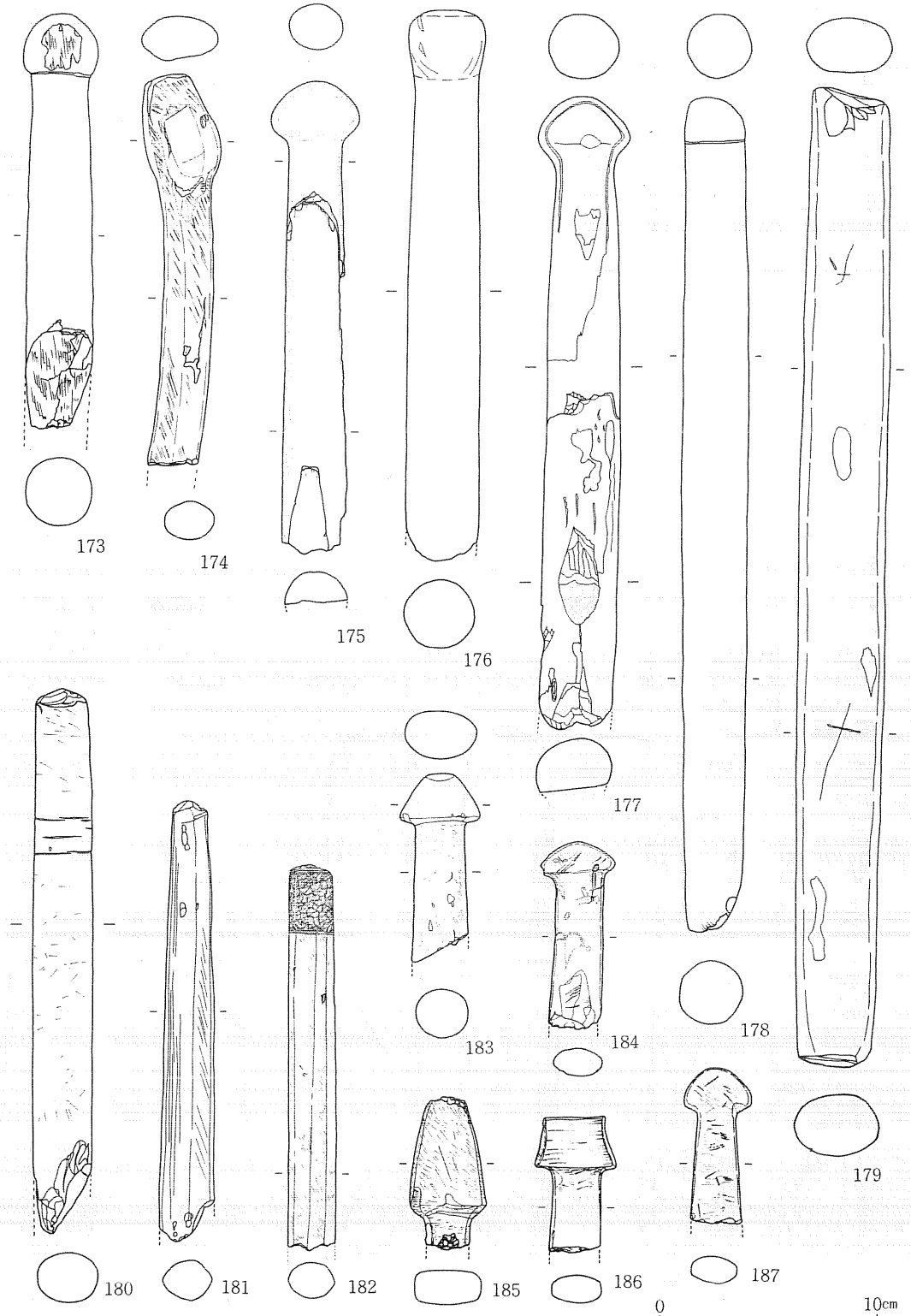
第156図　遺構外出土遺物　（縄文42）



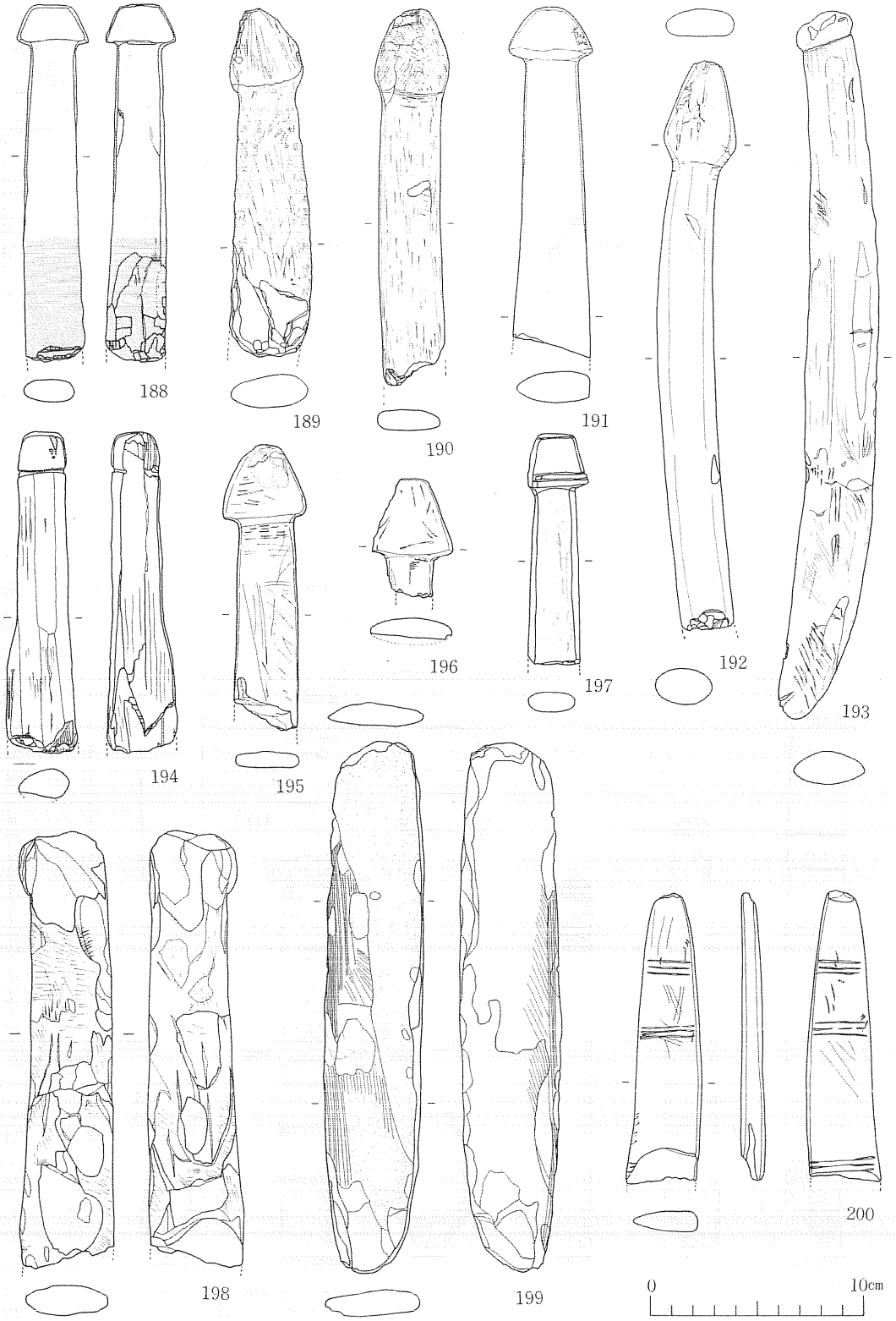
第157図　遺構外出土遺物　（縄文43）



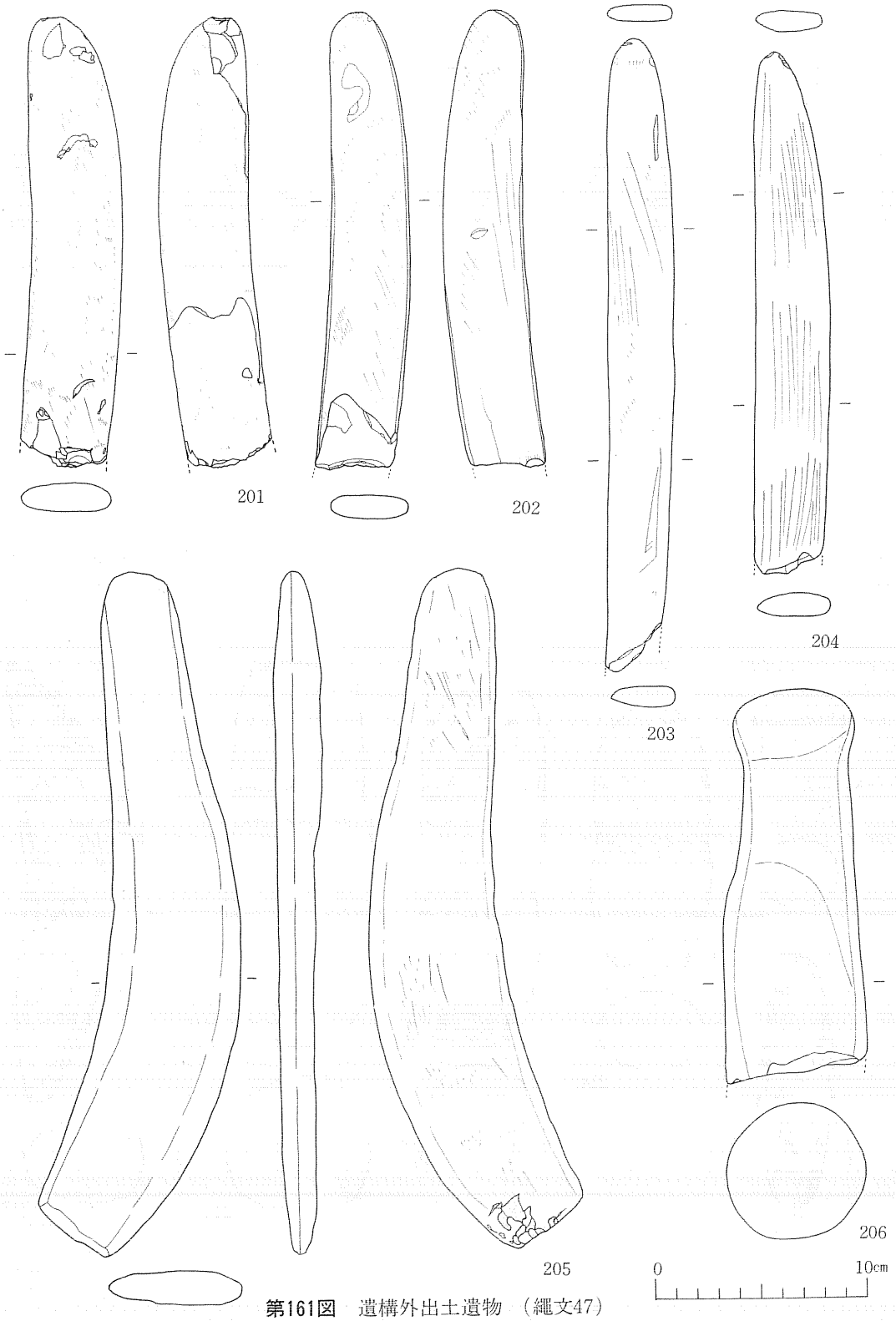
第158図　遺構外出土遺物　（縄文44）



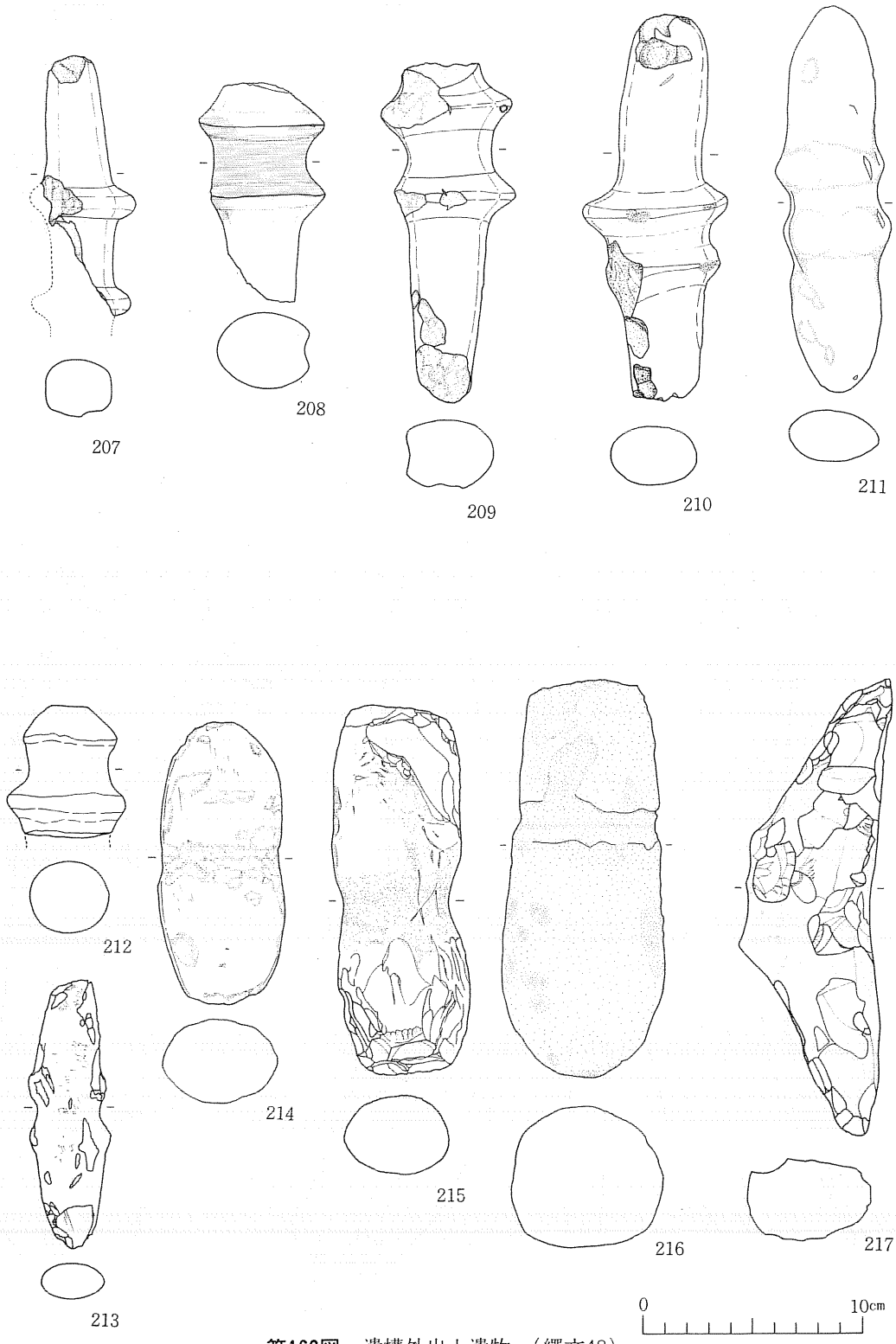
第159図　遺構外出土遺物　（縄文45）



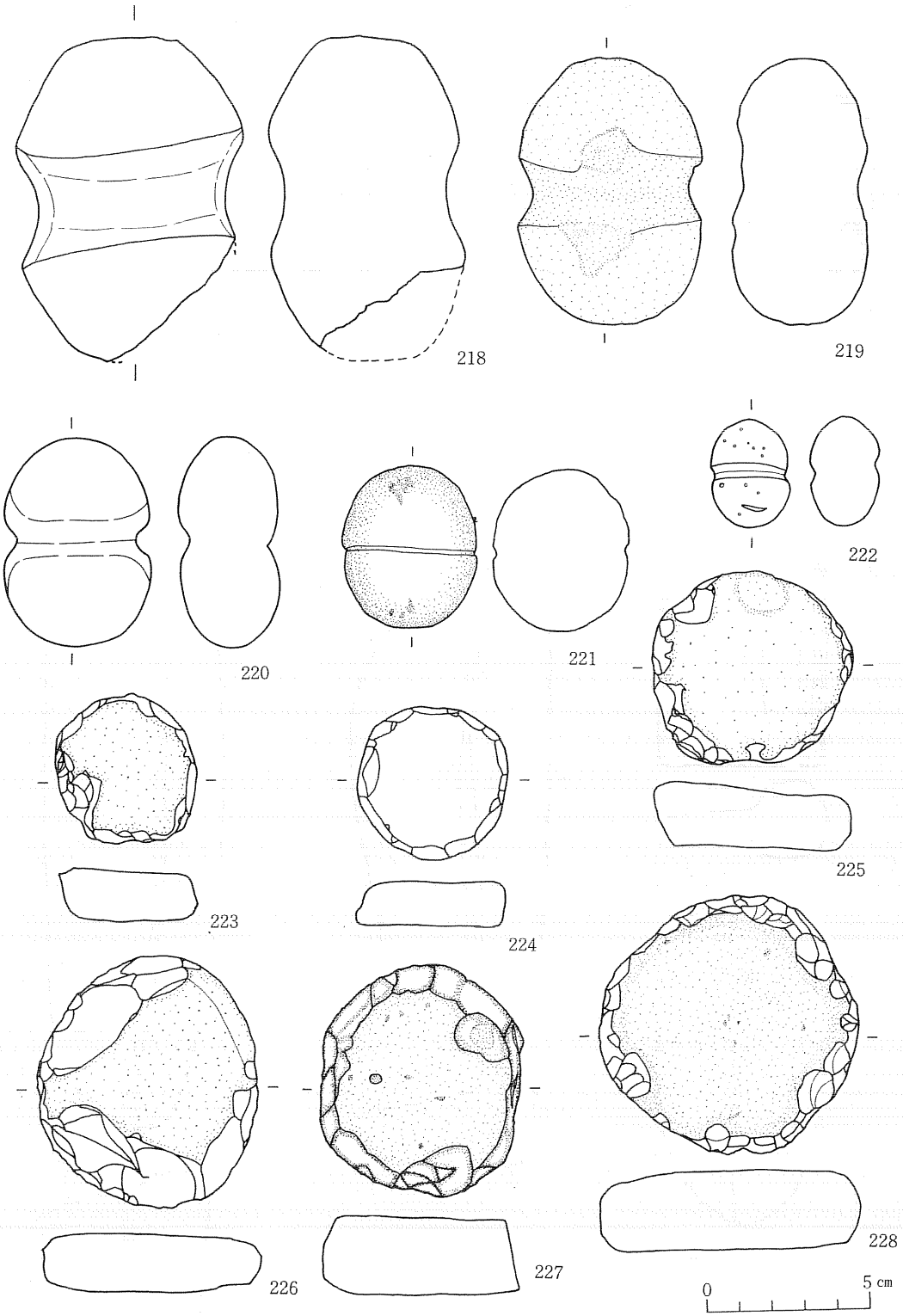
第160図　遺構外出土遺物　（縄文46）



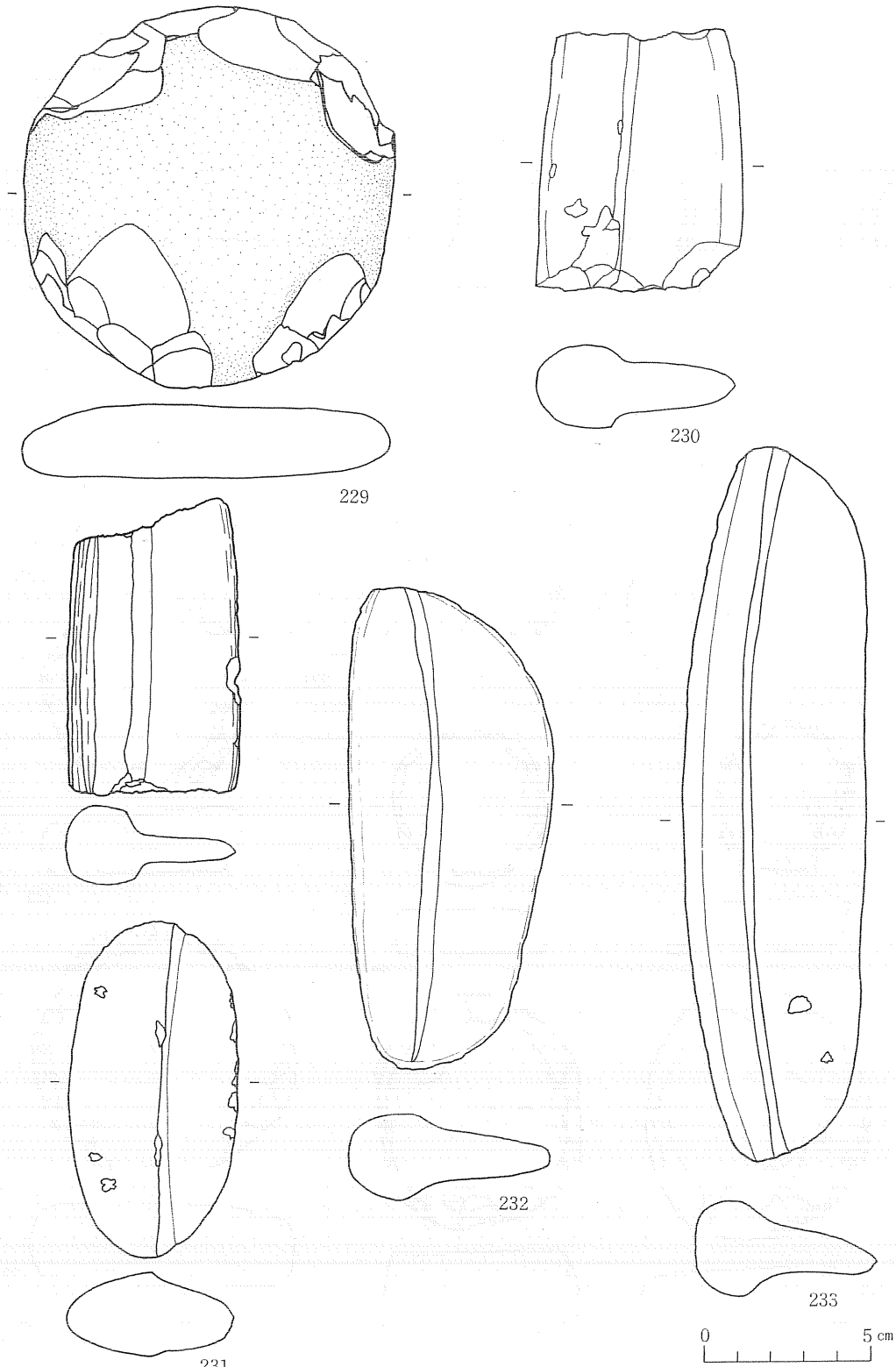
第161図　遺構外出土遺物　（縄文47）



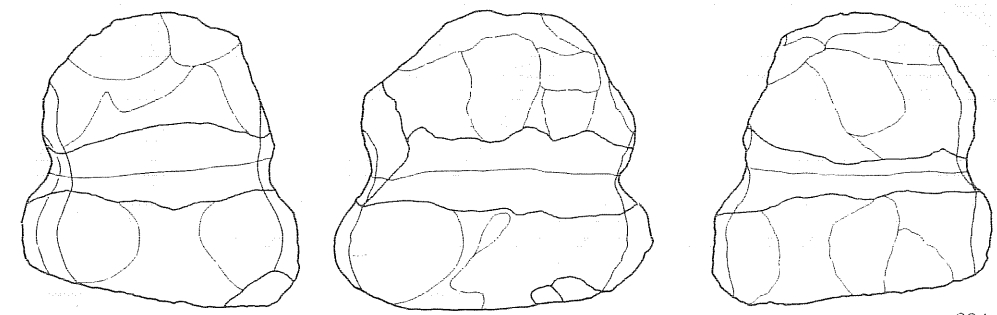
第162図　遺構外出土遺物　（縄文48）

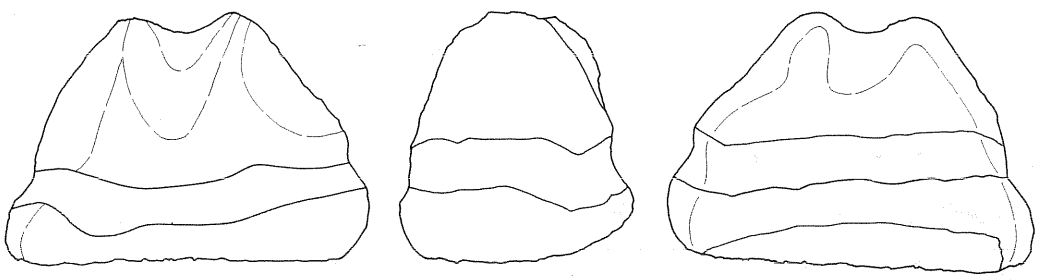


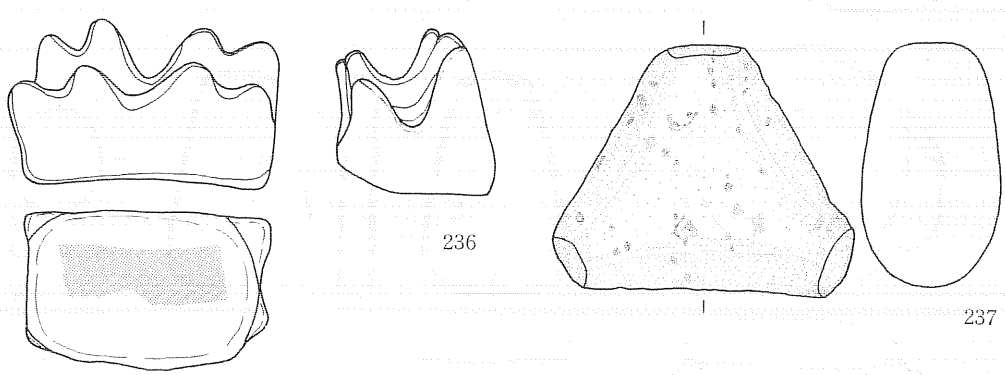
第163図　遺構外出土遺物　（縄文49）

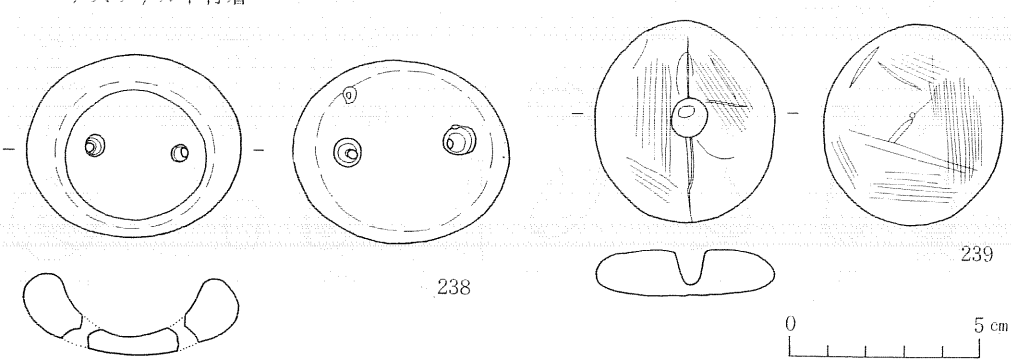


第164図　遺構外出土遺物　（縄文50）

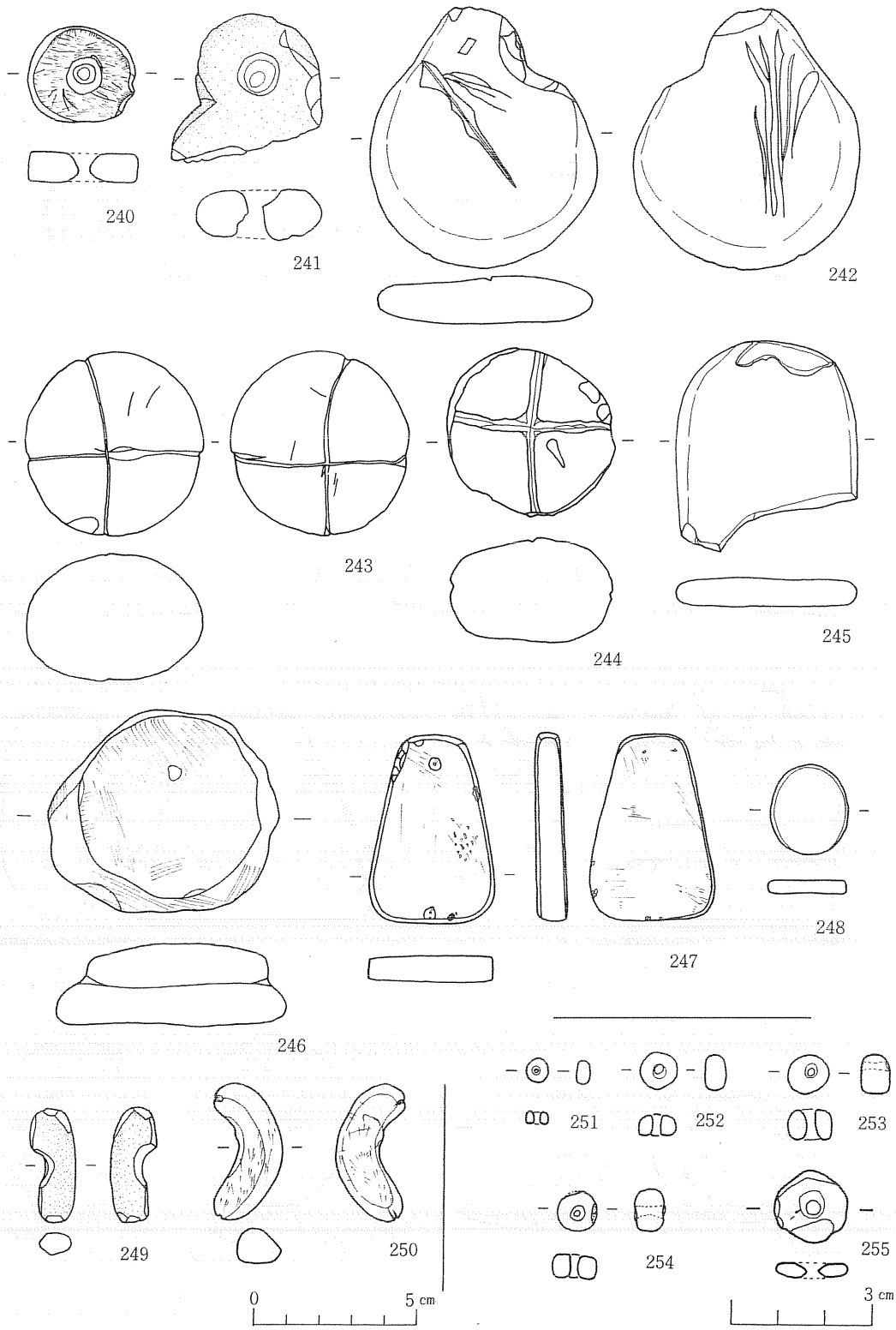




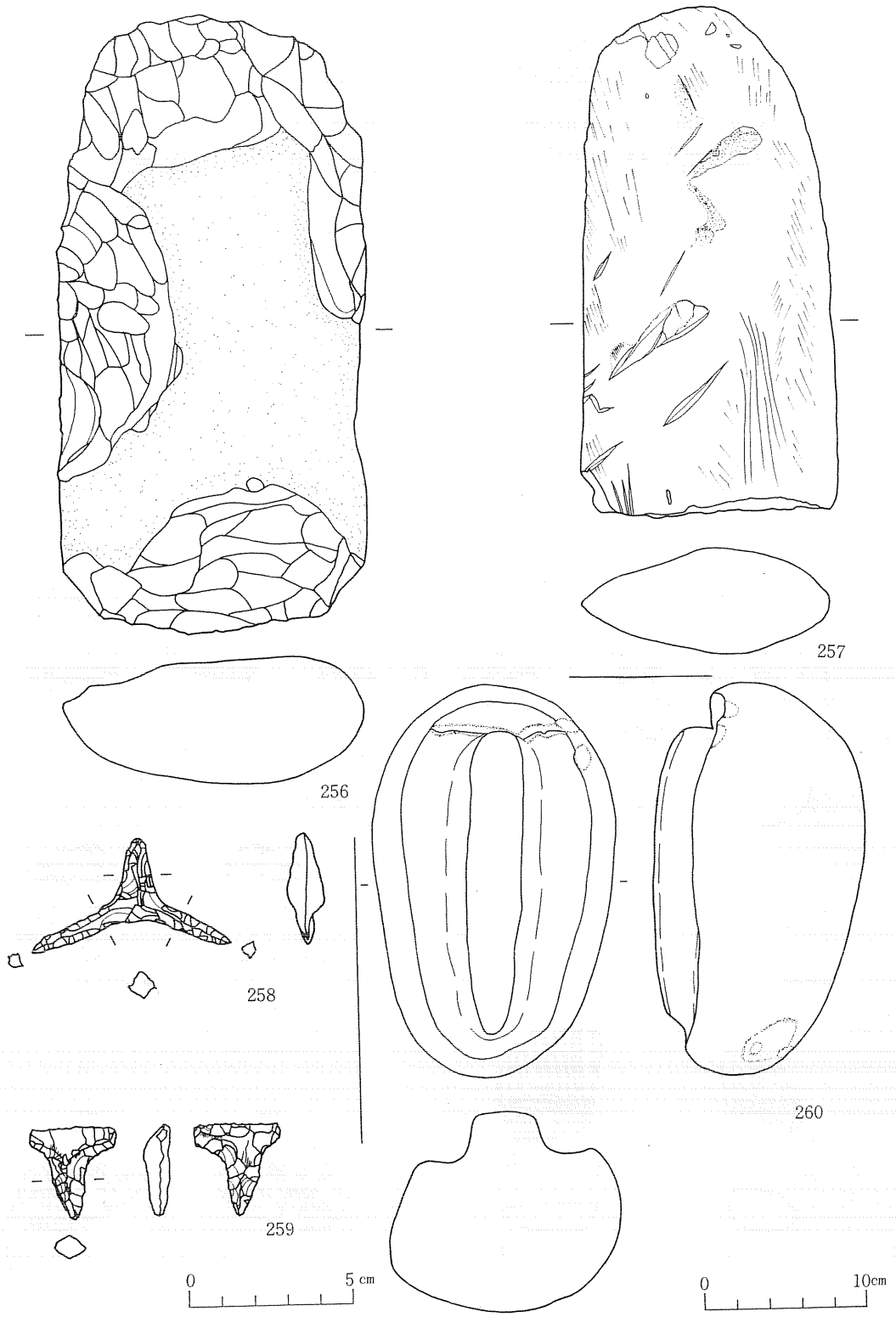




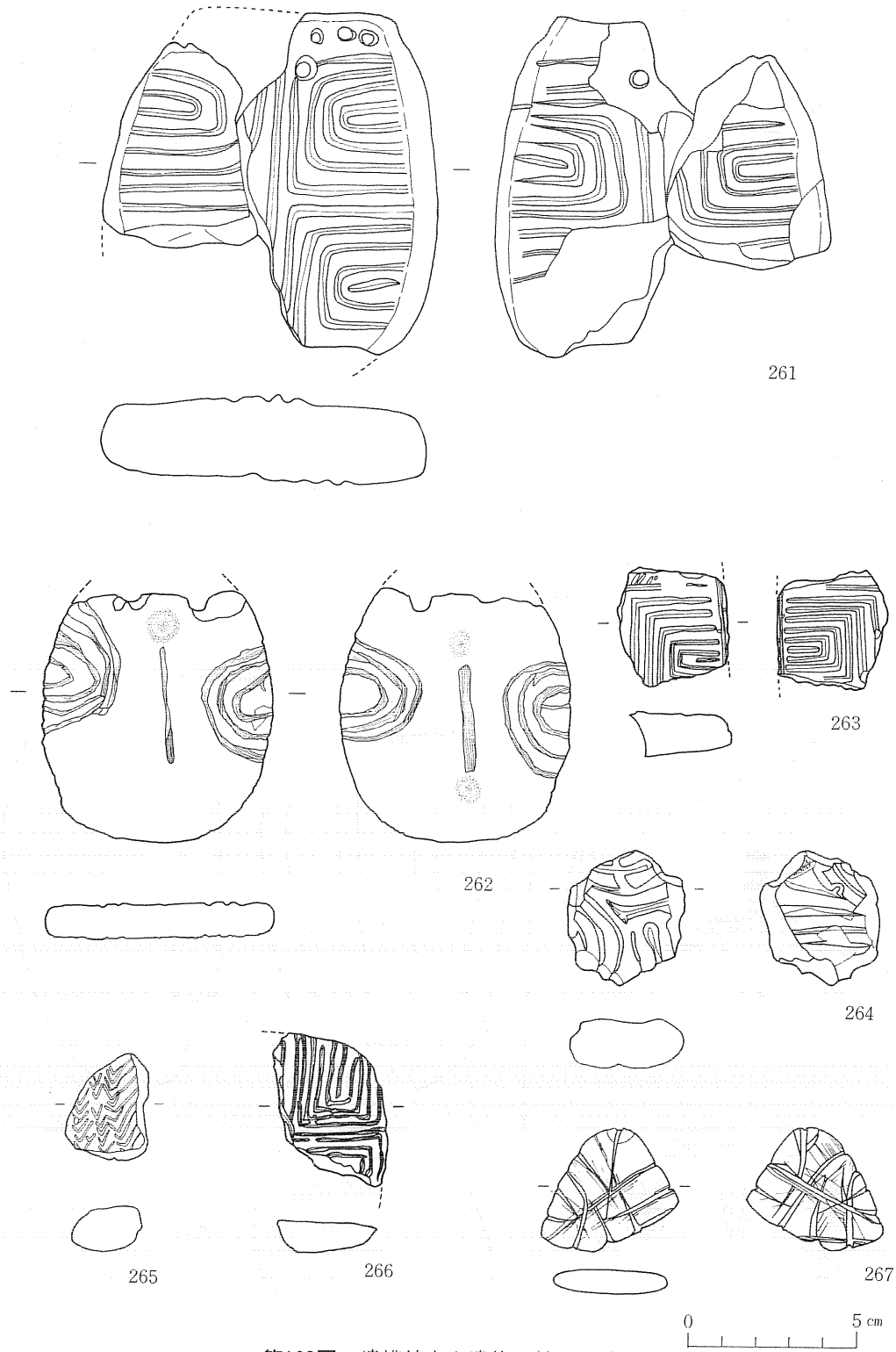
第165図　遺構外出土遺物　（縄文51）



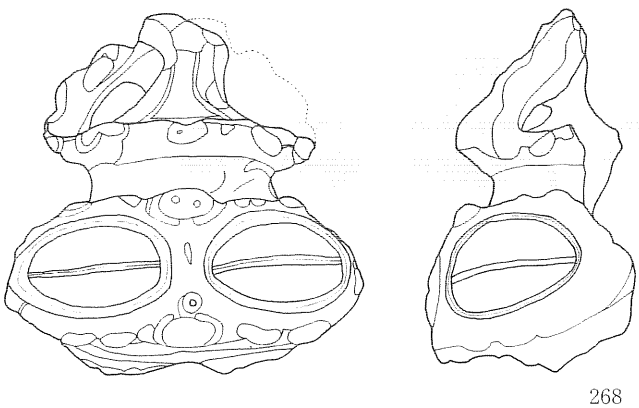
第166図　遺構外出土遺物　（縄文52）

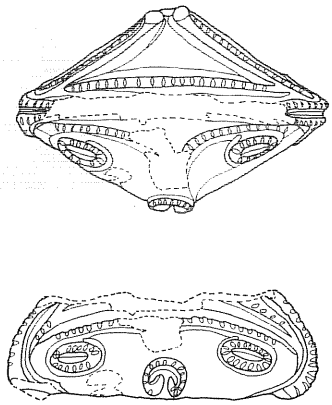


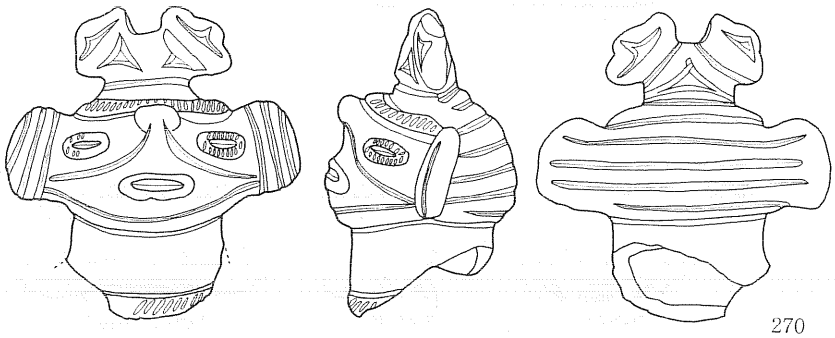
第167図　遺構外出土遺物　（縄文53）

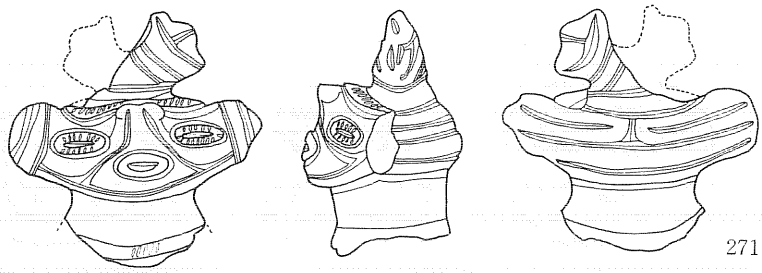


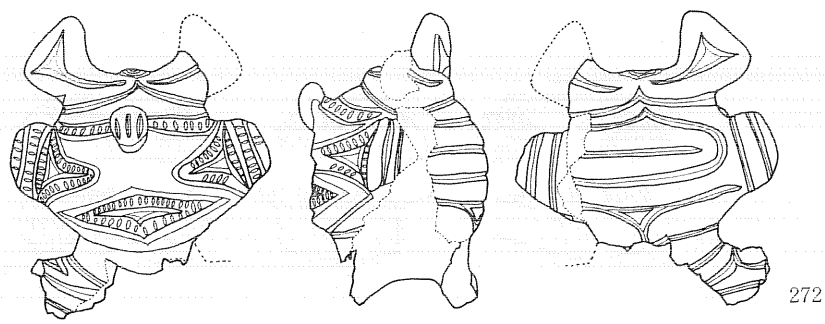
第168図　遺構外出土遺物　（縄文54）





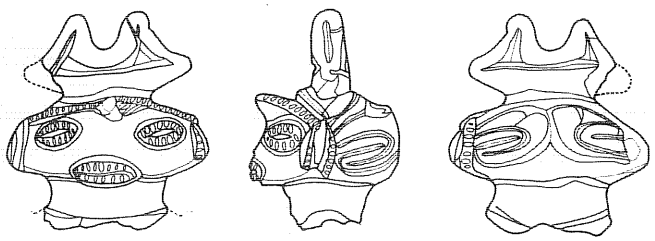






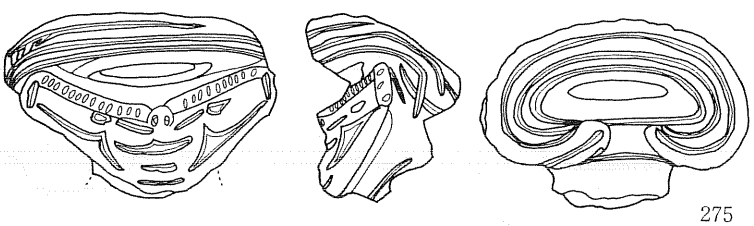
0 5 cm

第169図　遺構外出土遺物　（縄文55）

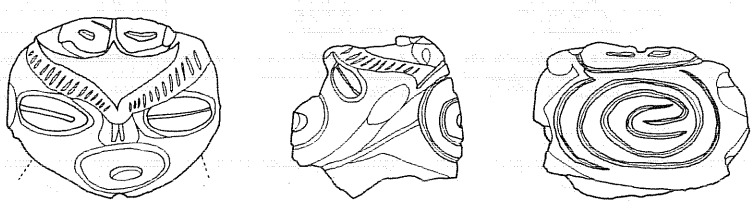


273

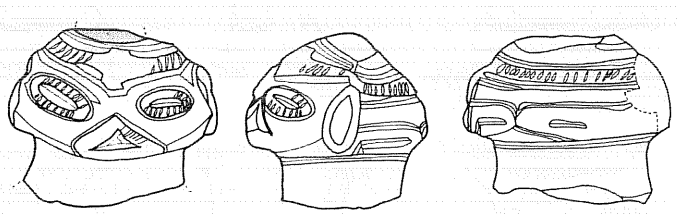
274



275



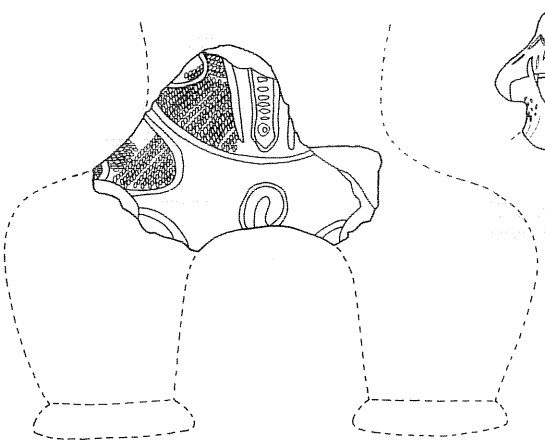
276



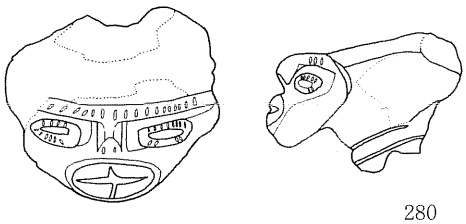
277

0 5 cm

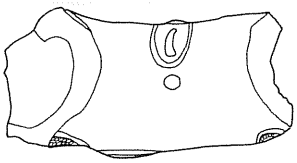
第170図　遺構外出土遺物　（縄文56）



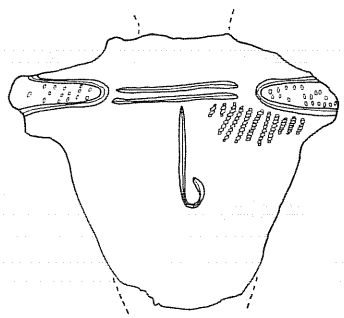
279

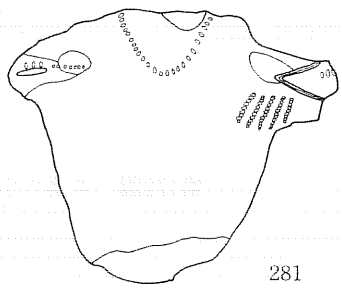


280

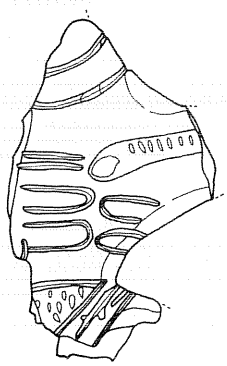


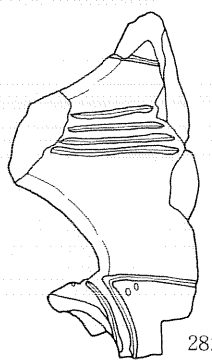
278



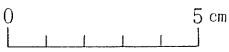


281

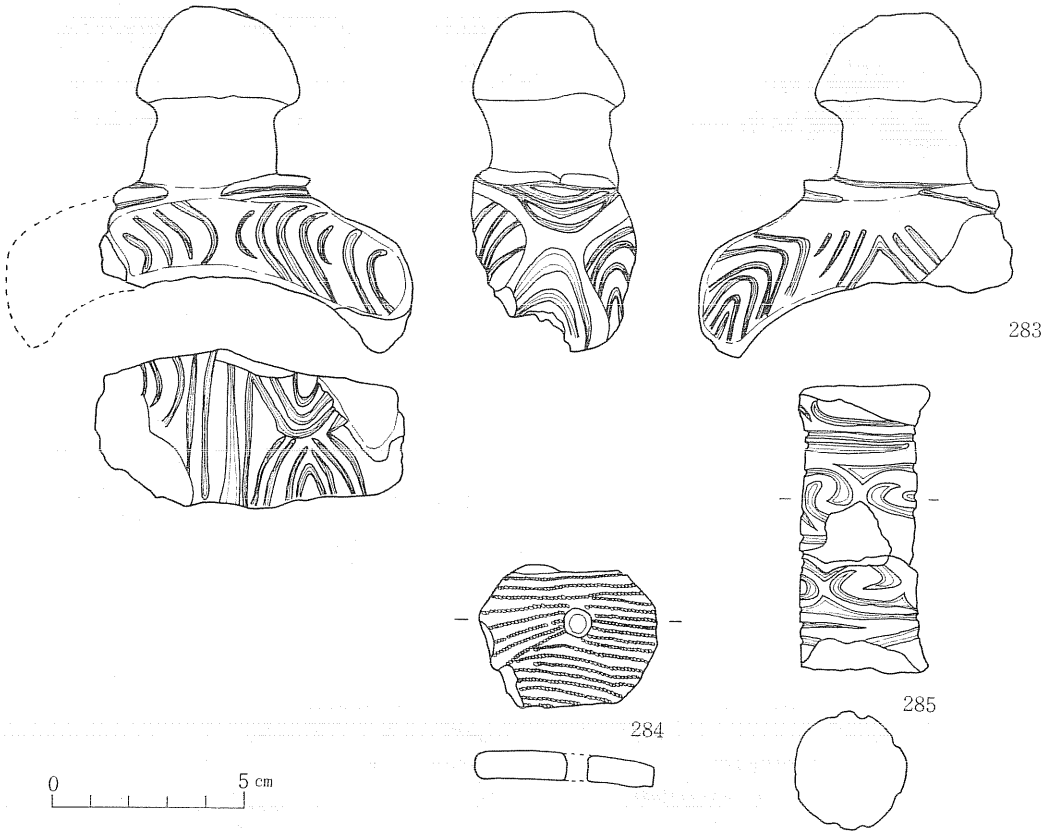




282



第171図　遺構外出土遺物　（縄文57）



第172図　遺構外出土遺物　（縄文58）

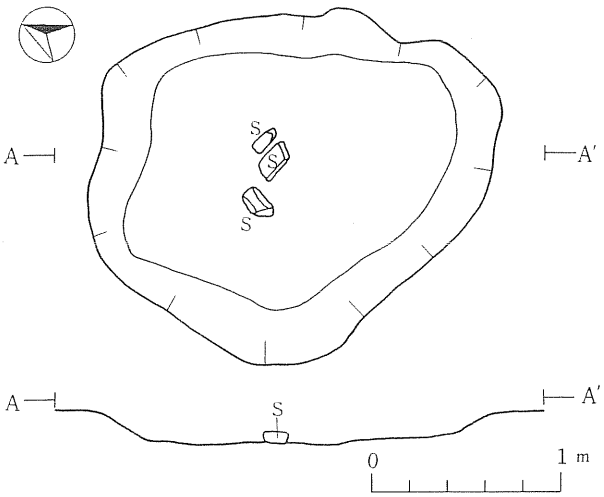
２　弥生時代

(1)　遺構と遺構内出土遺物

①　土　　壙

ＳＫ077（第173図）

ＫＪ55グリッド内にあり、第Ⅳ層上面で確認された。確認時には平面プランが不明瞭であったが、225cm×185cmの不整円形を呈し、深さ20cmを測るものとなった。東側に接して倒木痕があり、本遺構も人為的な掘り込みと見るよりは、倒木痕の凹みの一部と考える方が妥当かも知れない。20cm×10cm大の自然石数個と弥生土器が、覆土中に一括して投げ込まれた如き状況で出土した。



第173図　ＳＫ077土壙実測図

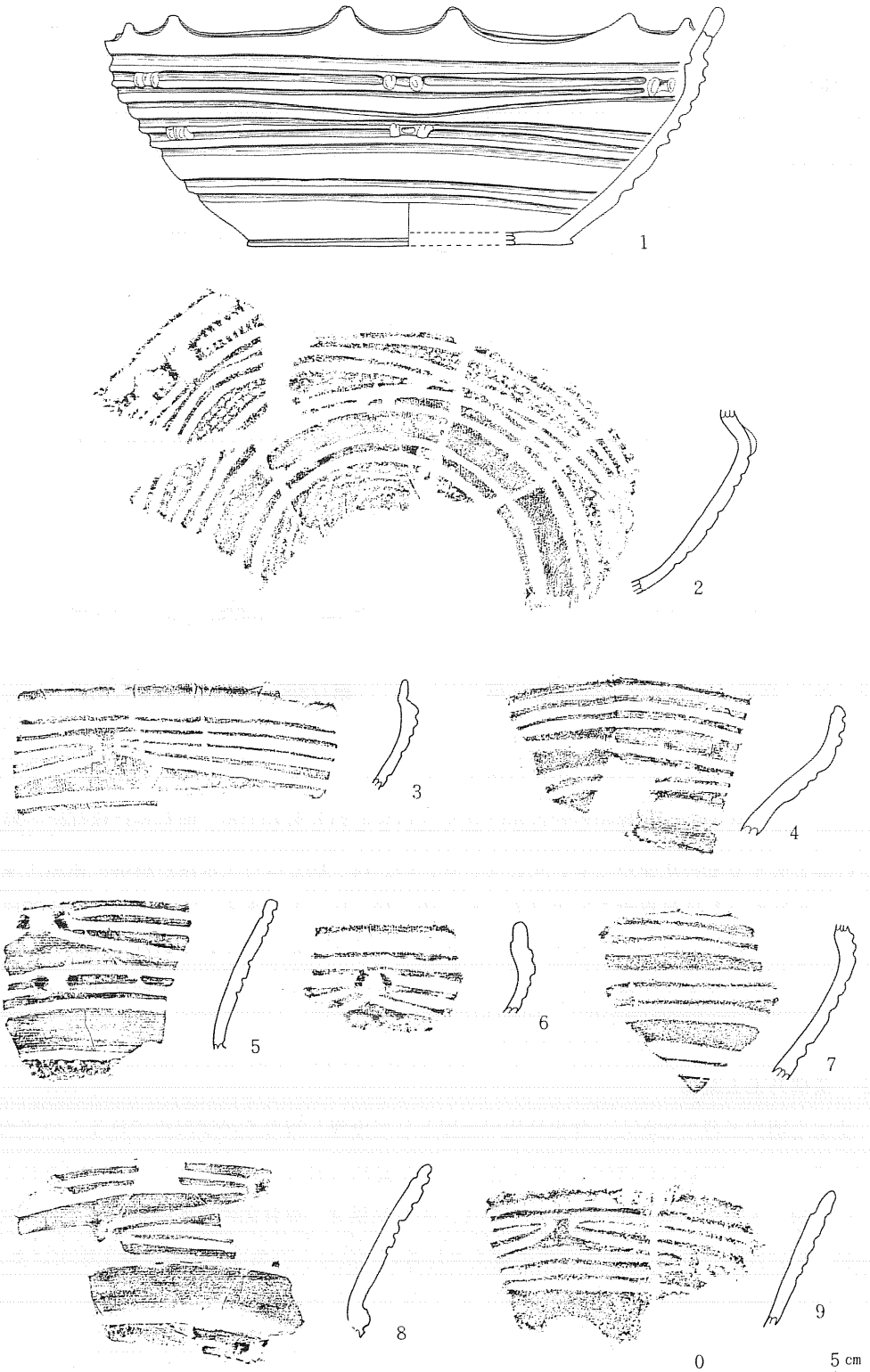
土器には浅鉢(第175図17)、壺（175図18、19)、高坏(第175図22、23)、蓋（第175図24)の器形が認められる。１の浅鉢は図上復原であるが、口径推定23cm、底径推定12cm、器高8.8cm、24の蓋は完形資料で、口径16.5cm、器高8.8cm、つまみ部径8.2cmを測る。浅鉢形土器には、底部から体部がなだらかに立ち上がるものもある(1)が、明らかに体部に一段のくびれ部を有するものが多い（２、４、５、８、10、12～16)。この中には口縁部が直立するもの(4)と、外傾ないしは外反するもの（５、８、10、12～16）とがある。文様は太めの沈線による変形工字文と平行沈線文で、三角形の交点や平行沈線間彫去による粘土粒貼付が見られる。この他、縄文施文のみの小破片が出土しているが、磨消縄文の施文された土器は皆無である。石器としては石匙(第175図25)が１点出土した。

(2)　遺構外出土遺物

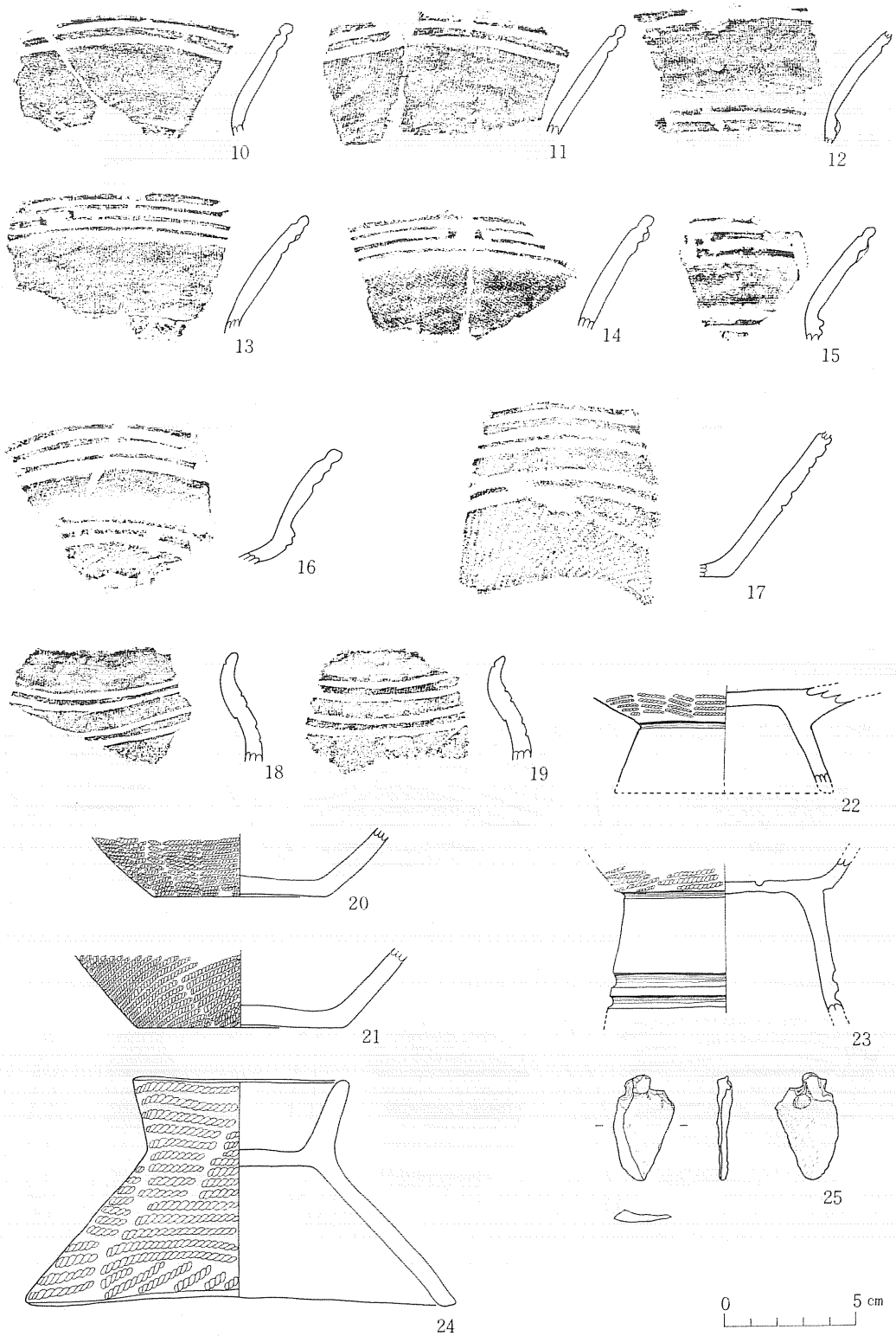
豊富な縄文土器の中から、弥生時代の土器として分離し得たものは24片である。いずれも小破片であるが、器形には浅鉢、深鉢、壺、高坏が認められる。文様から５類に分類される。

第１類：太めの沈線を用い、変形工字文、平行沈線文、波状文の施されるもの（第176図１～12、第177図13～16)。変形工字文の施文されるものには、三角文の接点に粘土彫去による粘土粒の貼付されるもの（１、４、５、７）と、それが見られないもの（６、８、10）とがある。

第２類：充填縄文の施されたもの(第177図17・18)。いずれも弧線間に充填縄文技法を用いている。

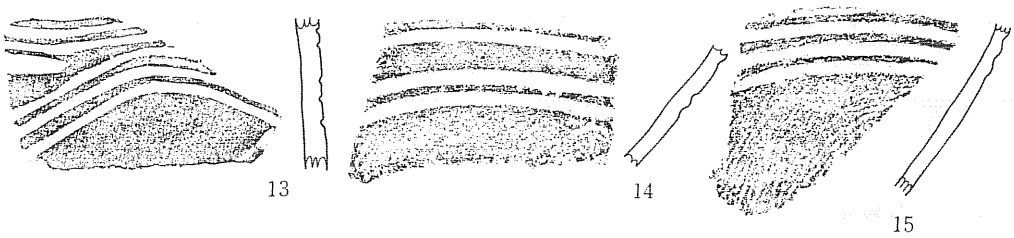


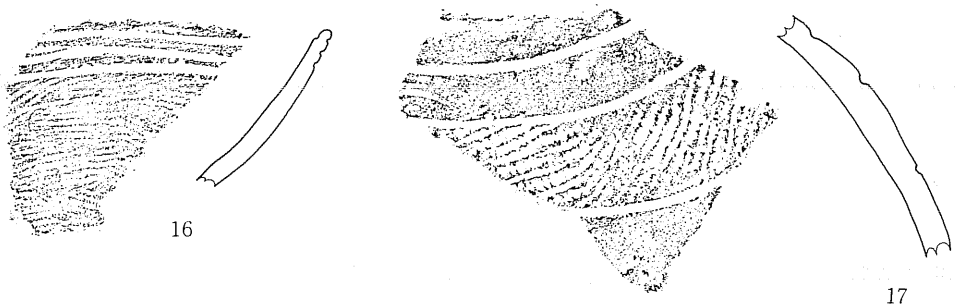
第174図　ＳＫ077出土遺物　(1)

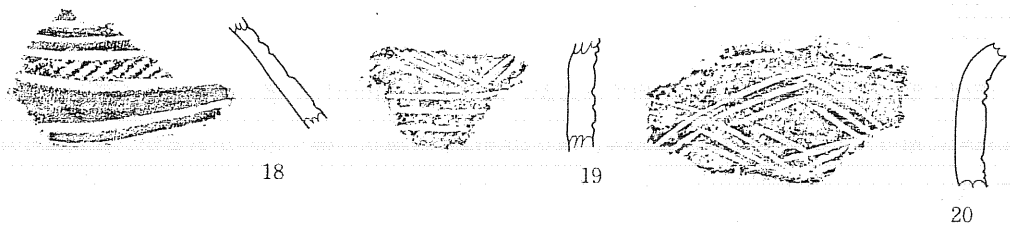


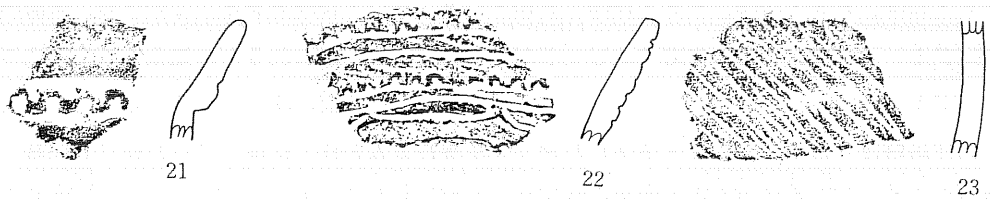
第175図　ＳＫ077出土遺物　(2)

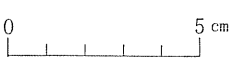
第176図　遺構外出土遺物（弥生１）











第177図　遺構外出土遺物（弥生２）

第３類：３本単位の細い沈線により、重菱形文の施されたもの（第177図19・20）。

第４類：口縁部に交互刺突文の施されたもの（第177図21・22）。

第５類：撚糸文の施されたもの（第177図23）。

3　平安時代

(1)　遺構と遺構出土の遺物

①　竪穴住居跡

SI001 竪穴住居跡（第178図・第62図版）

位置：ＭＣ59・60、ＭＤ60グリッド

確認面：Ⅲｅ層あるいはⅢｆ層を掘り込んで構築されているはずであるが、両層が極めて薄いためか、縄文晩期大洞C_1・C_2式期のⅣ層上面で確認された。

確認状況：Ⅳ層上面に方形の火山灰層の分布と、その上位の黒色土が落ち込みの様に検出され、これを立ち割ったところ確認された。

形態：方形

規模：壁長は、北東壁430㎝、北西・南東壁410㎝、南西壁440㎝、壁高は、北東壁24～28㎝、北西壁17㎝、南東壁13㎝、南西壁17㎝を測る。

面積：21.6㎡

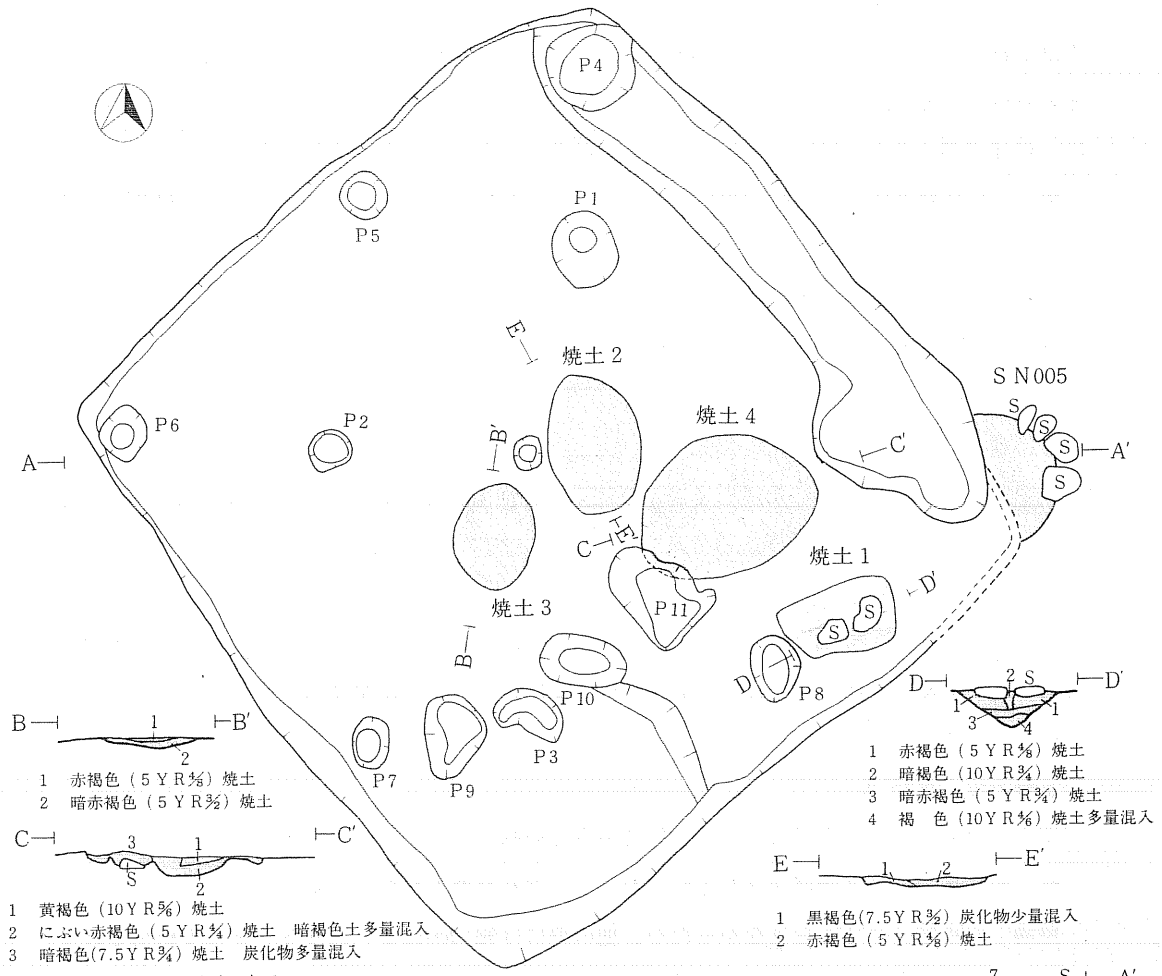
主軸方位：Ｎ40°Ｗ

床面：堅くしまり、全体的に平坦であるが、南西部分に10㎝程度落ち込んでいる所がある。北東壁に沿って、長さ350㎝、幅60㎝、深さ25㎝ほどの溝状の掘り込みがあるが、性格は不明である。

壁：四壁ともにほぼ垂直な立ち上がりを示す。

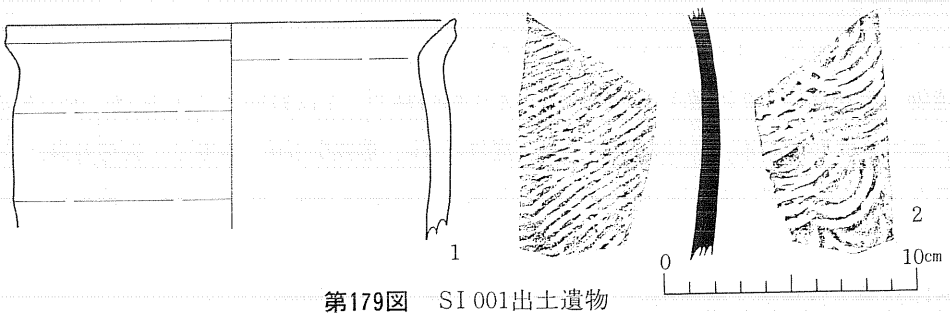
柱穴：ピットは床面内部に６個（Ｐ１～３・９・10・11）、壁寄りに５個（Ｐ４～８）検出された。深さはＰ１・40㎝、Ｐ２・45㎝、Ｐ３・18㎝、Ｐ４・27㎝、Ｐ５・43㎝、Ｐ６・49㎝、Ｐ７・22㎝、Ｐ８・16㎝、Ｐ９・15㎝、Ｐ10・13㎝、Ｐ11・18㎝を測る。このうち、床面内部にはＰ１～３の他、これに対応するピットが存在したものと思われるが、焼土４の掘り込みによって消失したらしい。焼土４はこれらの柱穴より新しい時期の構築と判断され、したがってこの住居跡は、当初Ｐ１～３と消失したピットを含む４本の柱を使用していたが、その後、壁際のピット４～８を柱穴とする配置に建て替えを行ったものと考えられる。しかし、建て替え後の柱穴は北西壁の他は明確でない。

炉：床面４箇所に焼土が分布する。このうち焼土１は床面からの掘り込みが43㎝と深いが、焼土２・３は10～12㎝、焼土４は23㎝と、焼土１よりははるかに浅い。また、焼土１の掘り込



1 黒 色(7.5YR2/1) 黒褐色土多量混入
2 暗褐色（10YR3/4）赤褐色土多量混入
3 にぶい黄橙色（10YR6/4）火山灰層 暗褐色土多量混入
4 暗褐色（10YR3/4）褐色土ブロック多量混入
5 暗褐色(7.5YR3/3)
6 褐 色（10YR5/6）
7 黒褐色(7.5YR3/2)
8 褐 色(7.5YR5/6）明褐色土ブロック多量混入

第178図 SI001竪穴住居跡実測図



第179図 SI001出土遺物

みは擂鉢状を呈し、床面レベルに径20cmほどの石が２個存在する。住居跡南東隅の壁は崩壊し、その外側にあるSK076上部にも焼土がわずかに拡がっている。こうしたことから、この位置に、柱建て替え前の住居跡に付随するカマドの存在を考えるべきかも知れない。

備考：住居跡北隅に土器棺が検出された。この土器棺（SR018）を切って住居が構築されている。

遺物：覆土下方より、土師器甕、須恵器破片が出土した（第179図）。

SI002 竪穴住居跡（第180図・第63・93図版）

位置：ＭＣ61・62・63、ＭＤ62

確認面：地山面

確認状況：SI001周辺の第Ⅳ層を掘り下げ中に、地山面で確認した。SI001同様に第Ⅲｅ層あるいは第Ⅲｆ層からの掘り込みであろうが、地山面に至るまで確認はできなかった。

形態：方形

規模：壁長は、北東壁で340cm、北西壁344cm、南西壁340cm、南東壁353cm、壁高は地山面からの測定であるが、北東壁で19cm、北西・南西壁は12～15cm、南東壁は17～22cmを測る。

面積：15.5㎡

主軸方位：Ｎ45°Ｅ

床面：全体にほぼ平坦であるが、砂質であるため軟らかい。

壁：四壁ともにほぼ垂直な立ち上がりを示し、遺存状態も良好である。

壁溝：北東壁には認められなかったが、他の壁には幅10cmほど、深さ３～９cmで検出された。

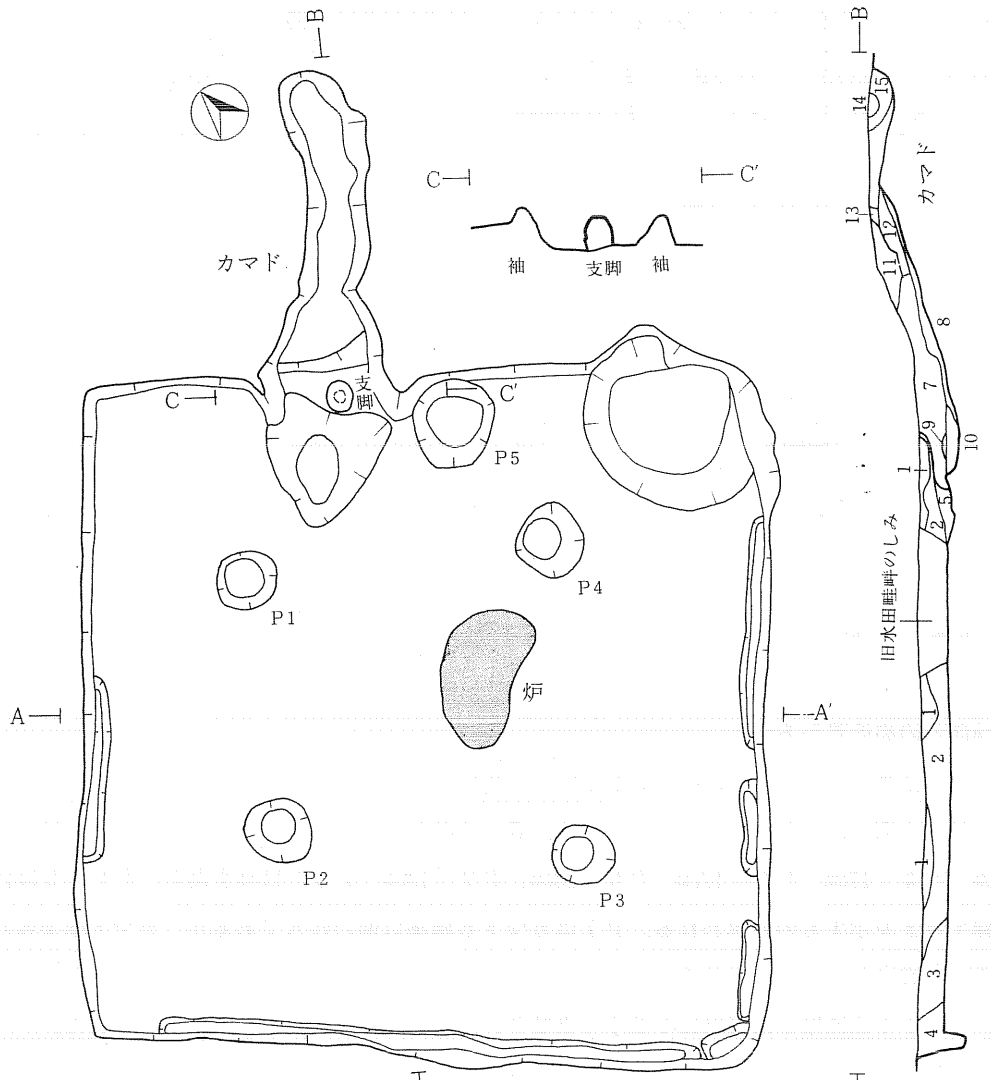
柱穴：床面中央寄りに４個、北東壁中央部に１個のピットが検出された。深さはＰ１・20cm、Ｐ２・50cm、Ｐ３・35cm、Ｐ４・51cm、Ｐ５・13cmで、口径は32～47cmを測る。Ｐ１～Ｐ４が柱穴である。

カマド：北西壁のやや北寄りに付設されている。燃焼部は幅70cm、奥行80cm、底面奥部に土師器甕を利用した支脚を置く。燃焼部内は底面、壁面ともによく焼けており、燃焼部奥壁は10cmほど立ち上がって煙道部へ移行する。煙道部は最大幅45cm、住居跡壁から煙出までの長さは170cmを測る。

炉：床面中央部に74cm×40cmの大きさの炉が見られる。

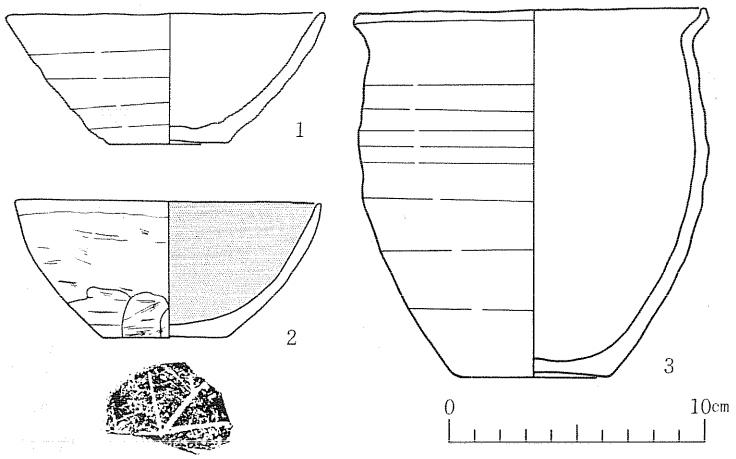
遺物：第181図１・２は覆土中から出土した土師器杯で、１は口径12.5cm、底径4.9cm、器高5.2cm、ロクロ成形である。２は口径12.1cm、底径4.9cm、器高5.3cm、内黒で、底部外縁に手持ちヘラケズリを施している。３はカマド内の支脚で、口径14.3cm、底径6.2cm、器高14.6cmを測る土師器甕である。ロクロ成形で二次調整は施されない。

SI003 竪穴住居跡（第182図・第63・64・65・66・93・94図版）



1　暗褐色（10Y R3/4）
2　黒褐色（10Y R3/2）
3　暗褐色（10Y R3/4）明褐色土ブロック少量混入
4　黒褐色（10Y R3/3）
5　暗褐色（10Y R3/3）
6　赤褐色（5Y R4/6）焼土
7　褐　色(7.5Y R4/4）焼土多量、炭化物微量混入
8　暗褐色（10Y R3/4）炭化物微量混入
9　褐　色(7.5Y R4/6）
10　赤褐色（5Y R4/6）焼土
11　暗褐色（10Y R3/3）炭化物微量混入
12　黒褐色（10Y R3/3）炭化物少量混入
13　赤褐色（5Y R4/6）焼土
14　黒褐色(7.5Y R3/2）焼土多量混入
15　黒褐色（10Y R3/2）

第180図　SI002竪穴住居跡実測図



第181図　ＳＩ002出土遺物

位置：ＫＧ59・60、ＫＨ59・60

確認面：第Ⅳ層上面

確認状況：第Ⅳ層上面精査中に、火山灰の拡がりを検出し、立ち割ったところ確認された。

形態：方形

規模：壁長は北東壁が425cm、北西壁が450cm、南東壁410cm、南西壁350cmで、壁高はそれぞれ、12～14cm、10cm、16～22cm、25～29cmを測る。

主軸方位：Ｎ29°Ｅ

面積：19.8㎡

床面：中央部が最も低く、壁に向かって全体に緩やかな上昇を示す。中央部と壁際では約15cmほどの高低差がある。

壁：全体に歪みがあり直線をなさない。やや外方に傾斜して立ち上がっている。

柱穴：床面に７個のピットが見られる。各々の深さは、Ｐ１・18cm、Ｐ２・16cm、Ｐ３・17cm、Ｐ４・17cm、Ｐ５・17cm、Ｐ６・13cm、Ｐ７・13cm、Ｐ８・11cmを測る。Ｐ２～５は柱の建て替えを示すものと思われる。Ｐ７はカマドＢ構築以前の柱穴であるが、カマド構築後の柱穴は明確でなかった。

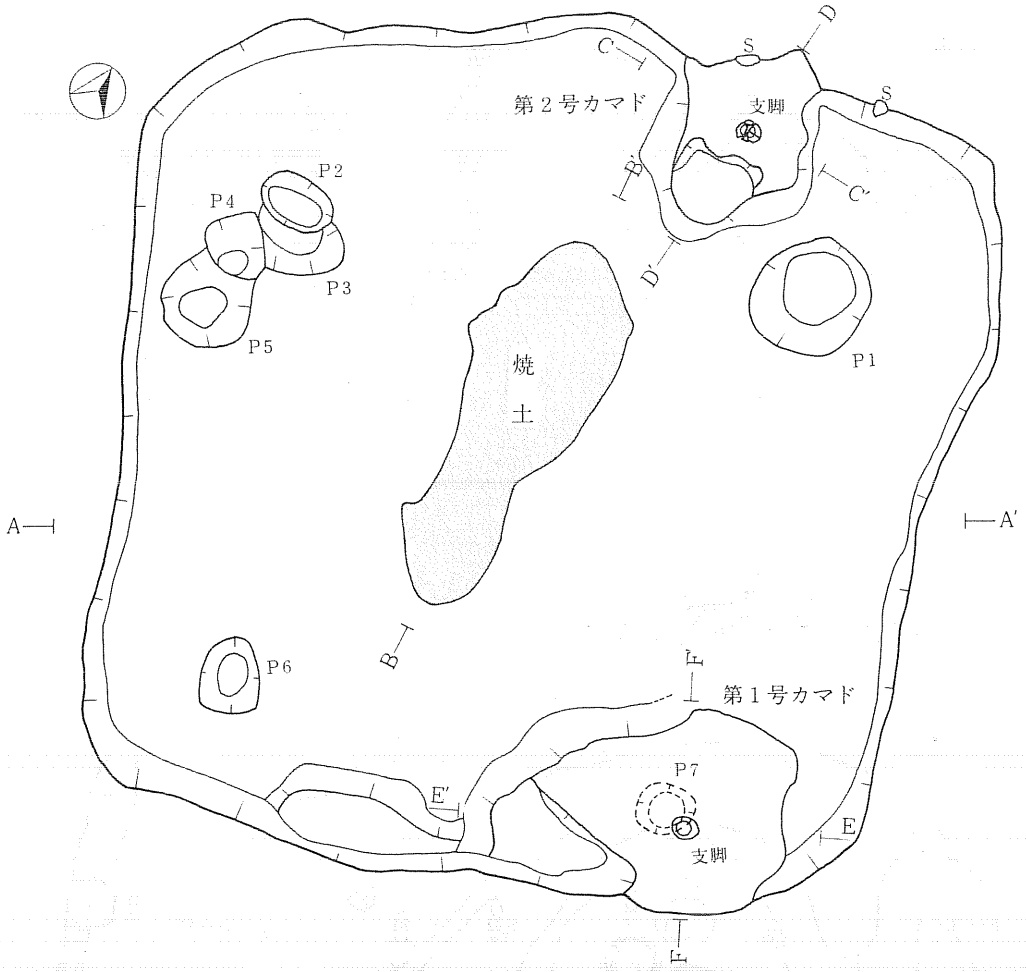
カマド：北西壁と南東壁に１基ずつ構築されており、各々を第１号、第２号とした。

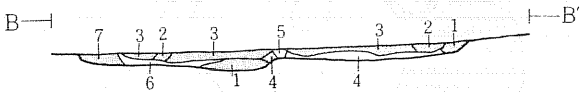
〈第１号カマド〉北西壁の東寄りに付設され、袖が残存している。両袖幅は80cm、奥行75cmを測り、燃焼部中央に土師器甕転用の支脚がある。燃焼部底面は焼面となっている。煙道部はほとんどなく、煙出しも定かではない。

〈第２号カマド〉南東壁の東寄りに付設されたもので、粘土を使用した袖が残存する。両袖幅150cm、奥行き100cmを測り、燃焼部中央に土師器甕転用の支脚がある。隣接してさらにもう１個土師器甕が出土した。底面は焼面を形成している。

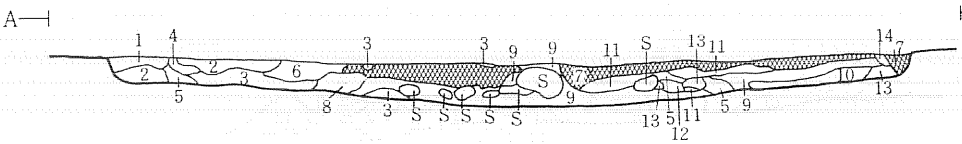
炉：床面中央部に２基の炉がある。北側は130cm×85cm、南側は110cm×50cmほどを測る楕円形で、平面では南側の炉が北側のそれを切っていることが明らかであった。

備考：床面直上にワラ状の炭化物が全体に広がっており、焼失家屋と判断される。覆土上部に火山灰が堆積している。





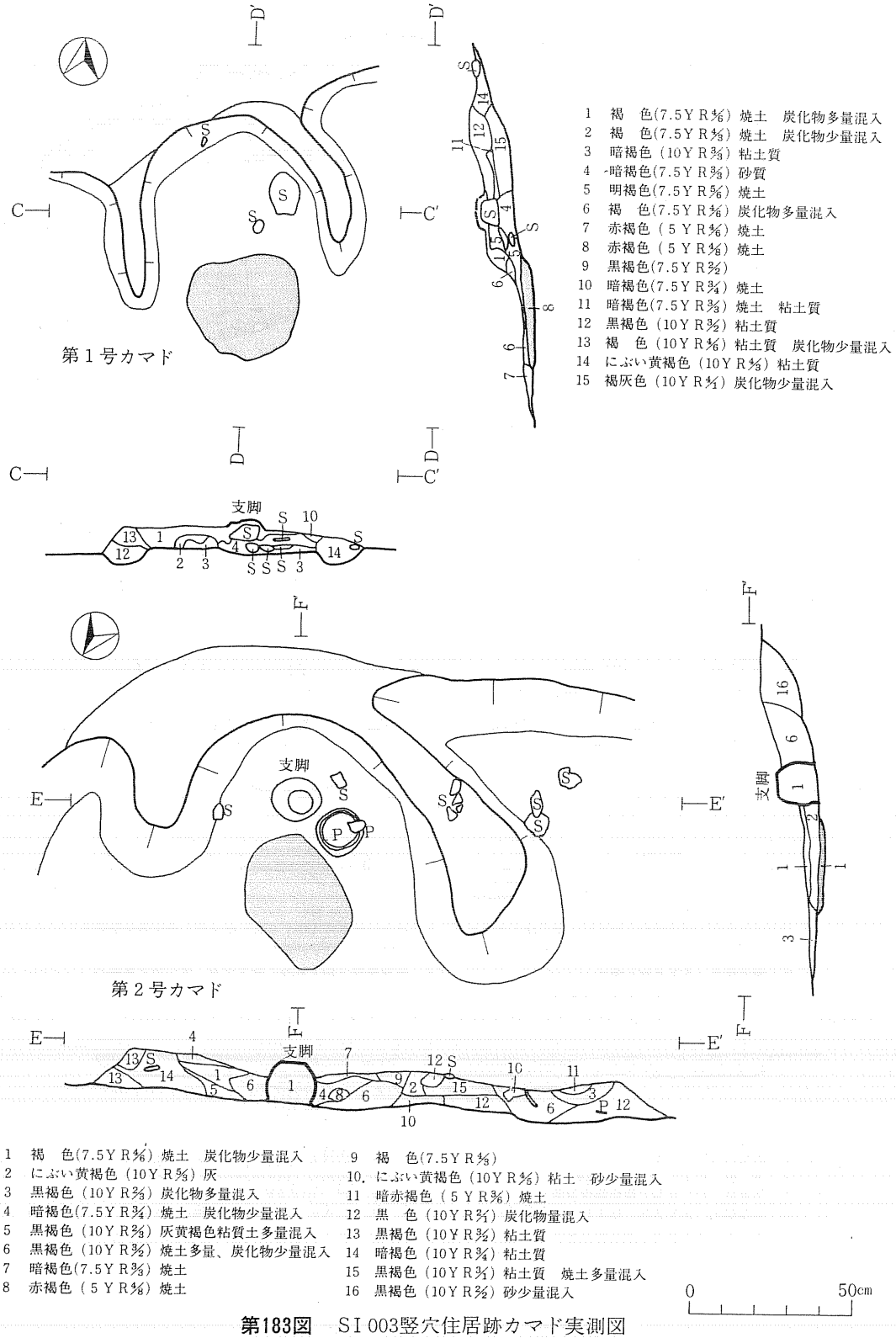
1　暗赤褐色（５ＹＲ3/2）炭化物少量、焼土少量混入
2　黒褐色　（５ＹＲ3/1）炭化物層　焼土少量混入
3　明赤褐色（５ＹＲ5/8）焼土
4　褐　色(7.5ＹＲ4/6）炭化物微量混入
5　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質　炭化物少量混入
6　暗褐色　(7.5ＹＲ3/4)
7　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）焼土少量、炭化物少量混入



1　黒褐色　（10ＹＲ3/3）
2　黒褐色（10ＹＲ3/2））
3　黒　色（10ＹＲ1.7/1）炭化物層
4　黒褐色（10ＹＲ3/2）炭化物少量混入
5　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘土質　礫多量混入
6　黒　色(7.5ＹＲ2/1）炭化物少量混入
7　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）火山灰層　黒褐色土少量混入
8　黒　色（10ＹＲ2/1）明黄褐色土多量混入
9　黒褐色(7.5ＹＲ3/1）炭化物多量混入
10　黒褐色（10ＹＲ3/2）炭化物少量混入
11　黒　色(7.5ＹＲ2/1）炭化物層
12　黒褐色（10ＹＲ3/2）黄褐色土少量混入
13　黒褐色（10ＹＲ3/1）粘土質　明黄褐色土多量混入
14　黒　色（５ＹＲ1.7/1）暗褐色土多量混入

0　1 m

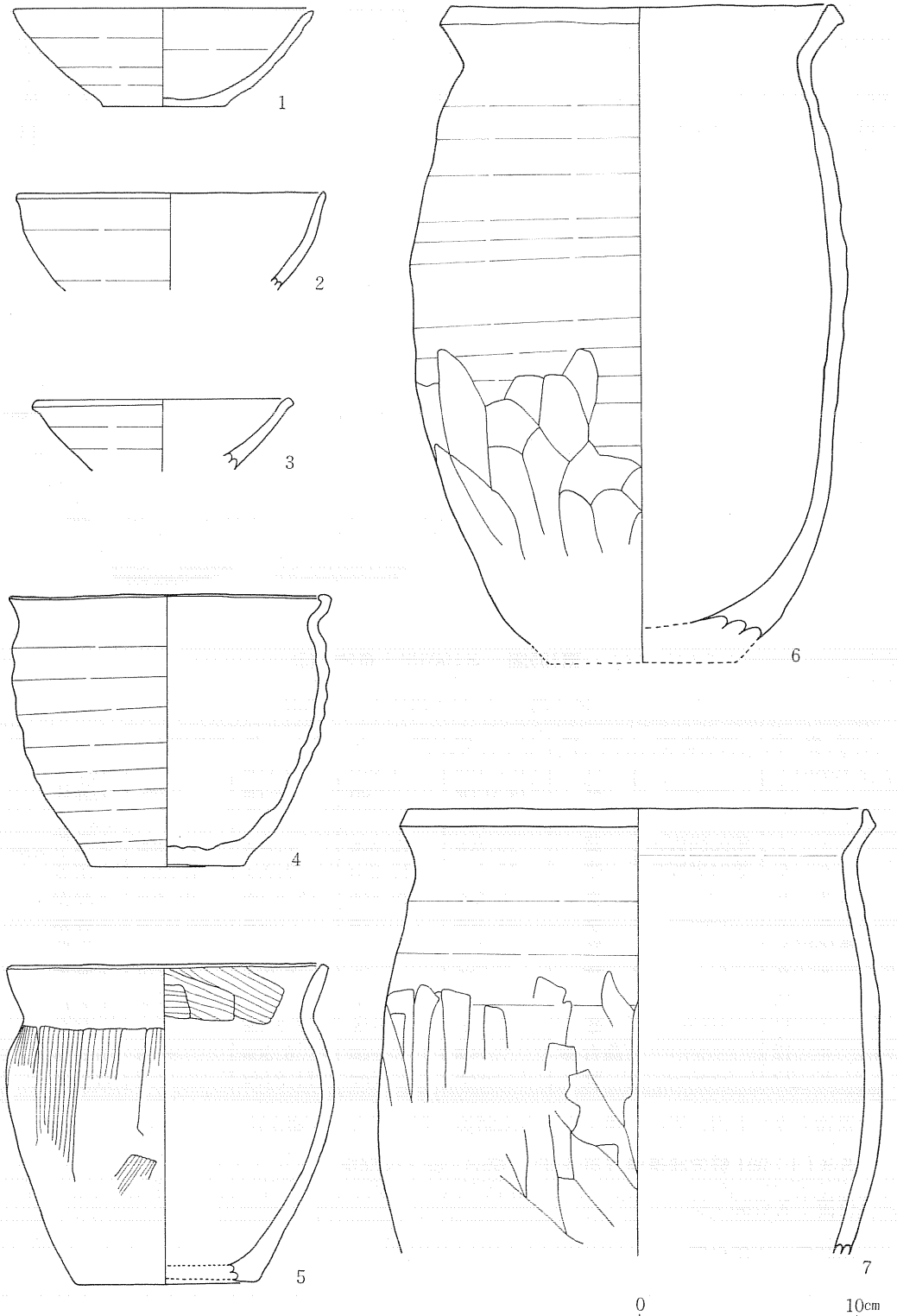
第182図　SI 003竪穴住居跡実測図



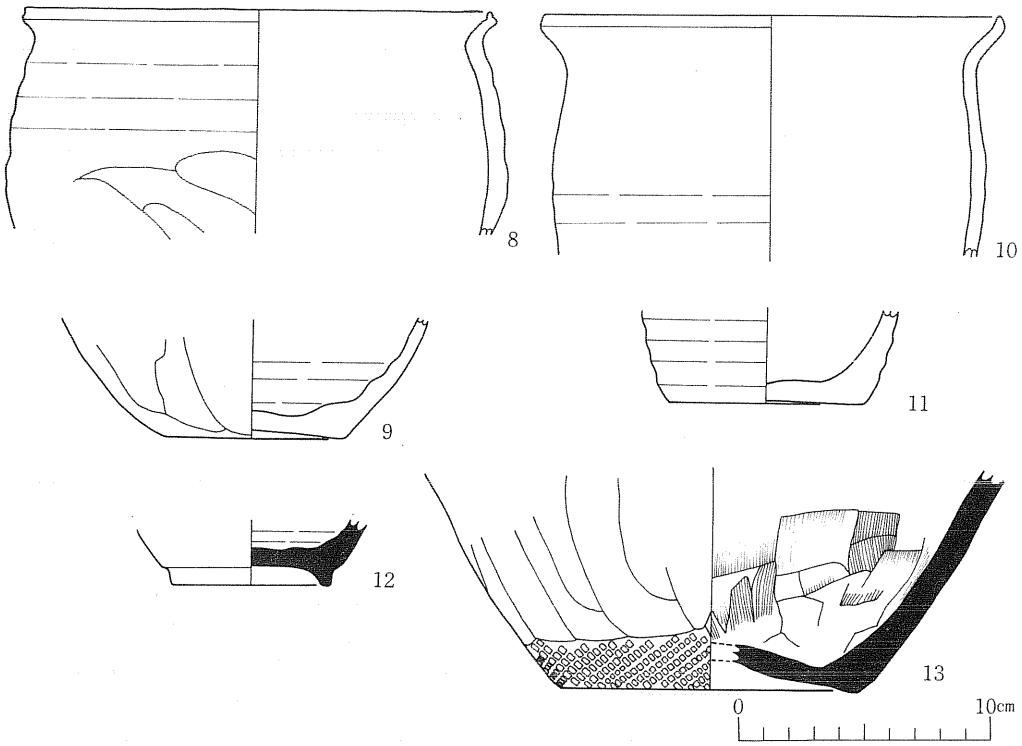
1 褐 色(7.5YR4/6) 焼土 炭化物多量混入
2 褐 色(7.5YR4/3) 焼土 炭化物少量混入
3 暗褐色 (10YR3/3) 粘土質
4 暗褐色(7.5YR3/3) 砂質
5 明褐色(7.5YR5/6) 焼土
6 褐 色(7.5YR4/6) 炭化物多量混入
7 赤褐色 (5YR4/6) 焼土
8 赤褐色 (5YR4/8) 焼土
9 黒褐色(7.5YR2/2)
10 暗褐色(7.5YR3/4) 焼土
11 暗褐色(7.5YR3/3) 焼土 粘土質
12 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質
13 褐 色 (10YR4/6) 粘土質 炭化物少量混入
14 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質
15 褐灰色 (10YR4/1) 炭化物少量混入

1 褐 色(7.5YR4/6) 焼土 炭化物少量混入
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 灰
3 黒褐色 (10YR3/3) 炭化物多量混入
4 暗褐色(7.5YR3/4) 焼土 炭化物少量混入
5 黒褐色 (10YR3/3) 灰黄褐色粘質土多量混入
6 黒褐色 (10YR3/2) 焼土多量、炭化物少量混入
7 暗褐色(7.5YR3/3) 焼土
8 赤褐色 (5YR4/6) 焼土
9 褐 色(7.5YR5/3)
10. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土 砂少量混入
11 暗赤褐色 (5YR3/6) 焼土
12 黒 色 (10YR2/1) 炭化物量混入
13 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質
14 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質
15 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質 焼土多量混入
16 黒褐色 (10YR3/2) 砂少量混入

第183図 SI 003竪穴住居跡カマド実測図



第184図　SI 003出土遺物 (1)



第185図　SI003出土遺物 (2)

第７表　SI003 出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第184図 1	―――	杯	(13.7)cm	4.6cm	5.5cm	―cm	土師器
〃 2	―――	杯	(14.0)cm	―cm	―cm	―cm	土師器
〃 3	―――	杯	(11.6)cm	―cm	―cm	―cm	土師器
〃 4	第93図版210	甕	15.3cm	12.5cm	7.2cm	14.9cm	土師器 カマド支脚
〃 5	第94図版211	甕	15.1cm	15.2cm	9.9cm	15.0cm	土師器
〃 6	〃 212	甕	18.4cm	29.8cm	(8.5)cm	20.3cm	土師器
〃 7	―――	甕	21.1cm	―cm	―cm	(23.0)cm	土師器
第185図 8	―――	甕	(18.4)cm	―cm	―cm	(19.9)cm	土師器
〃 9	―――	甕	―cm	―cm	6.9cm	―cm	土師器
〃 10	―――	甕	(18.0)cm	―cm	―cm	(17.2)cm	土師器
〃 11	―――	甕	―cm	―cm	(7.7)cm	―cm	土師器
〃 12	―――	高台杯	―cm	―cm	6.3cm	―cm	須恵器
〃 13	―――	甕	―cm	―cm	(11.8)cm	―cm	須恵器

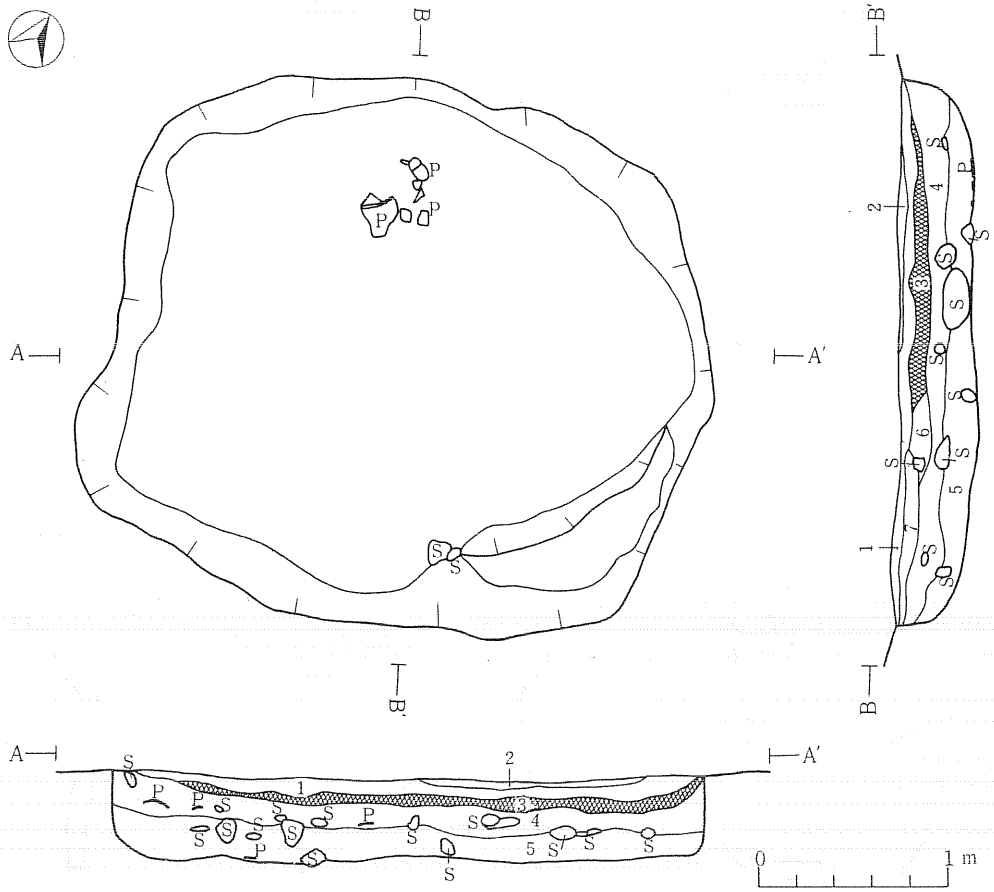
遺物：カマド内、床面、覆土中から土師器、須恵器の杯・甕が出土した（第185・186図）。

ＳＫ(Ｉ)001 竪穴状遺構（第186図・第65・66・94図版）

位置：ＫＧ60・61

確認面：Ⅳ層上面

確認状況：第Ⅳ層を精査中に、火山灰の拡がりと、その上位の黒色土を検出し、遺構と判断した。



1　黒　色（５ＹＲ$^{1}/_{1}$）火山灰少量混入
2　黒褐色（2.5Ｙ$^{3}/_{2}$）褐色土多量混入
3　にぶい黄橙色（10ＹＲ$^{7}/_{3}$）火山灰層　暗褐色土多量混入
4　黒褐色（10ＹＲ$^{3}/_{2}$）火山灰少量、炭化物少量混入
5　黒褐色（10ＹＲ$^{3}/_{2}$）炭化物多量、粘土多量混入
6　暗褐色（10ＹＲ$^{3}/_{3}$）火山灰少量混入
7　暗褐色（10ＹＲ$^{3}/_{3}$）火山灰少量、炭化物少量混入

第186図　SK(Ⅰ)001竪穴状遺構実測図

形態：隅丸方形である。

規模：東西310cm、南北290cmを測る。

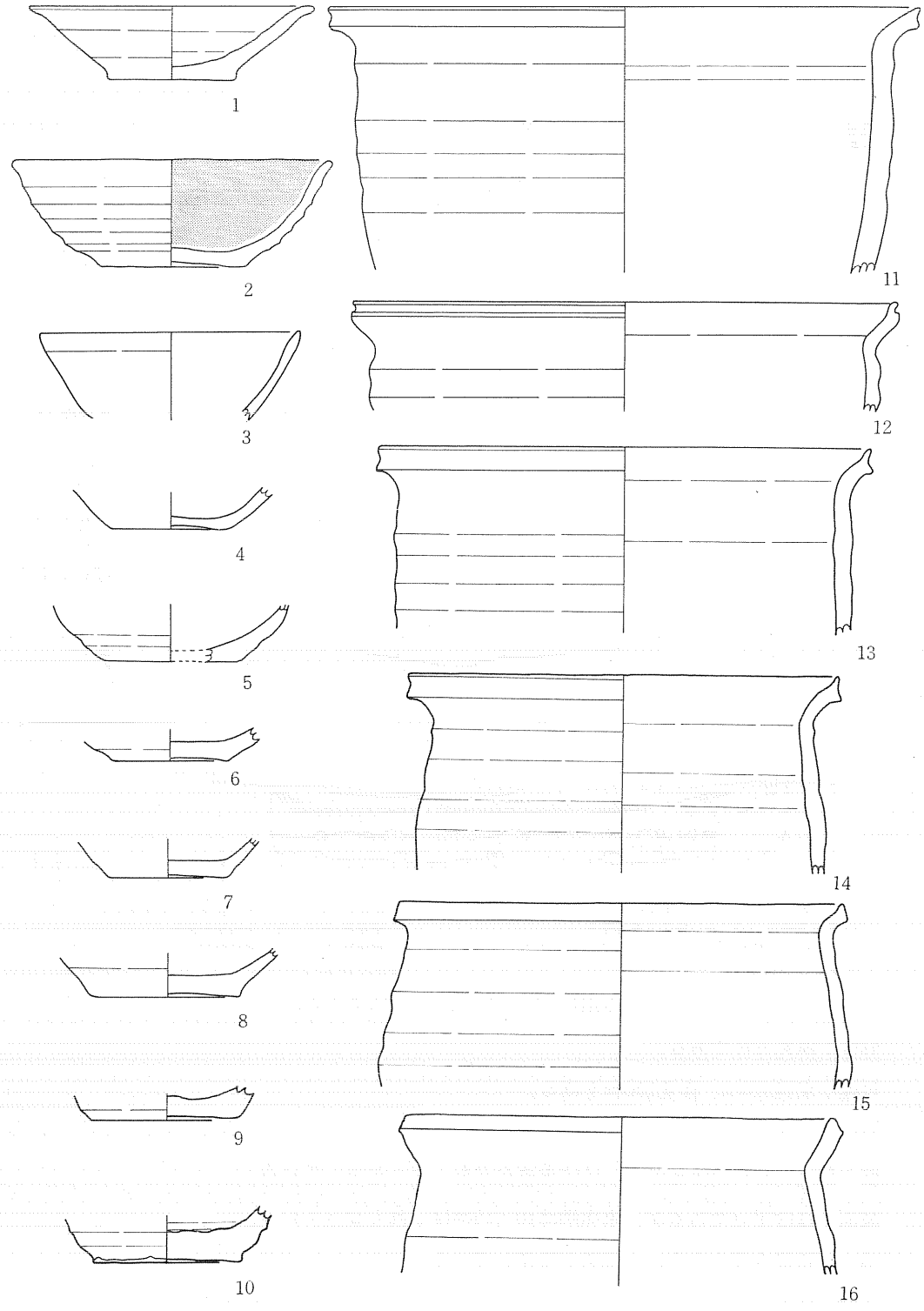
面積：8.0m²

壁：壁高は40～43cmを測り、ほぼ垂直な立ち上がりを示している。

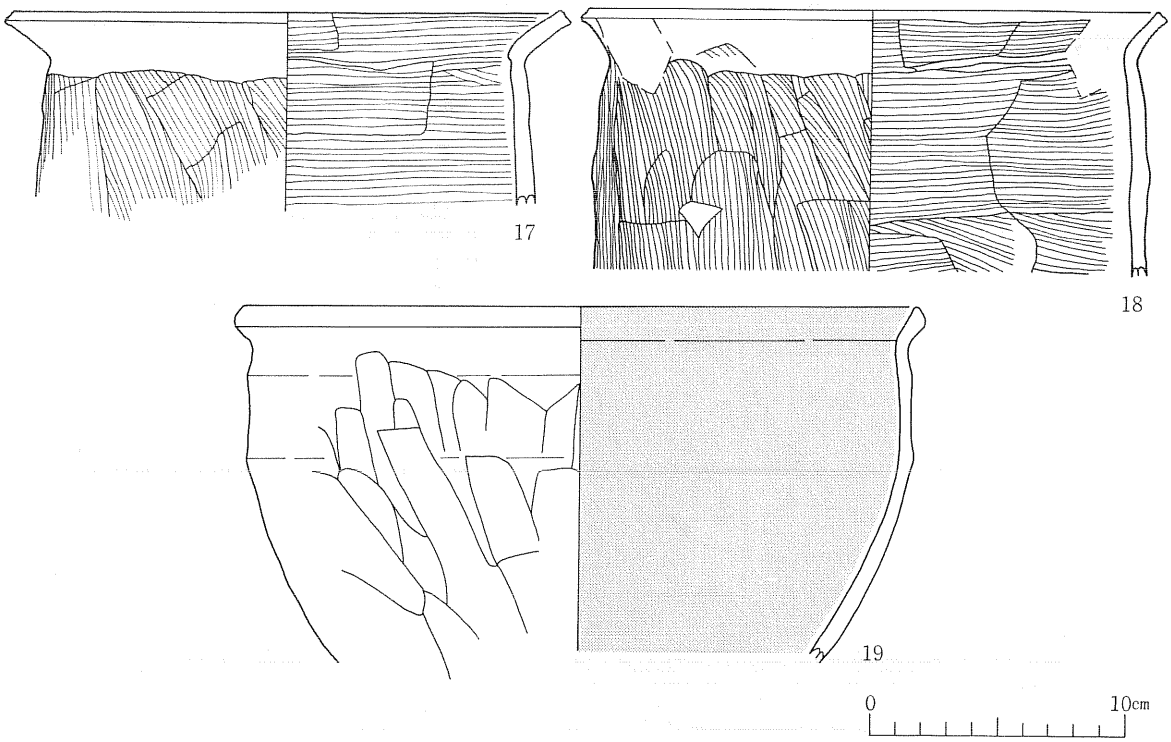
底面：ほぼ平坦であるが、東南隅は10～15cmほど高くなっている。

備考：遺構内覆土上方に火山灰が堆積している。

遺物：底面に密着して、土師器杯・甕が多量に出土した（第187・188図）。



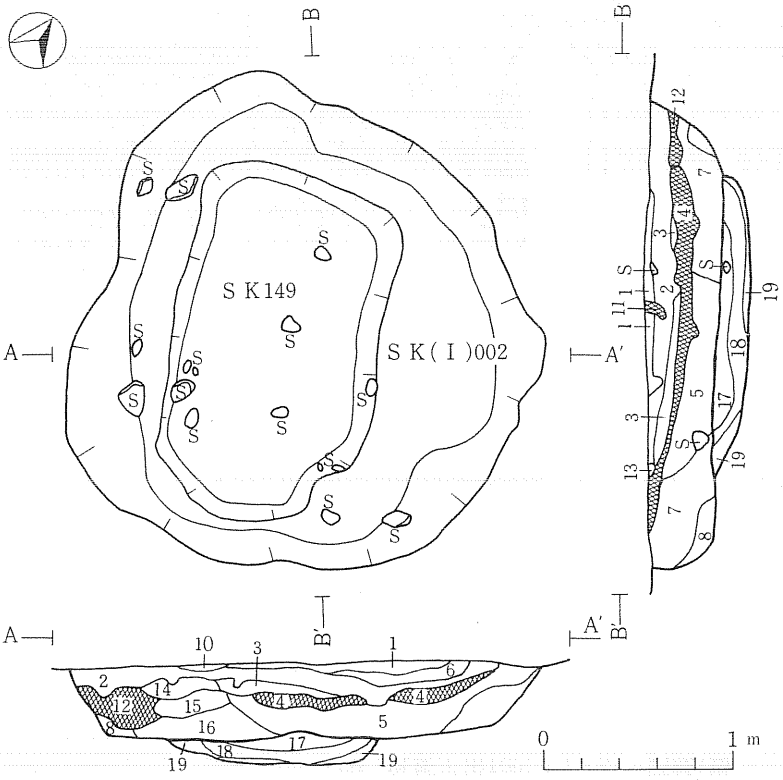
第187図　SK(Ⅰ)001出土遺物 (1)



第188図　SK(Ⅰ)001出土遺物　(2)

第8表　SK(Ⅰ)001出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第187図 1	———	杯	13.0cm	3.4cm	5.8cm	—cm	土師器
〃 2	第94図版213	杯	14.6cm	4.9cm	(6.4)cm	—cm	土師器、内黒
〃 3	———	杯	(11.9)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 4	———	杯	—cm	—cm	5.8cm	—cm	土師器
〃 5	———	杯	—cm	—cm	(6.0)cm	—cm	土師器
〃 6	———	杯	—cm	—cm	(5.1)cm	—cm	土師器
〃 7	———	杯	—cm	—cm	(5.4)cm	—cm	土師器
〃 8	———	杯	—cm	—cm	6.9cm	—cm	土師器
〃 9	———	甕	—cm	—cm	(6.6)cm	—cm	土師器
〃 10	———	甕	—cm	—cm	(7.2)cm	—cm	土師器
〃 11	———	甕	(26.9)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 12	———	甕	(24.9)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 13	———	甕	(22.6)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 14	———	甕	(19.8)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 15	———	甕	(20.7)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 16	———	甕	(20.3)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
第188図 17	———	甕	(22.2)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 18	———	甕	(23.2)cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 19	———	甕	(27.2)cm	—cm	—cm	(26.3)cm	土師器、内黒



1　黒褐色（2.5 Y 3/2）褐色土多量混入
2　黒　色（5 YR 1.7/1）火山灰少量、暗褐色土多量混入
3　暗褐色（10Y R 3/3）火山灰少量混入
4　にぶい黄橙色（10Y R 7/3）火山灰層　暗褐色土多量混入
5　黒褐色（10Y R 3/2）炭化物少量混入
6　黒　色(7.5Y R 1.7/1）火山灰少量、暗褐色土少量混入
7　暗褐色(7.5Y R 3/3）炭化物少量、礫多量混入
8　にぶい黄褐色（10Y R 5/4）砂質
9　暗褐色（10Y R 3/3）火山灰少量、炭化物少量、灰黄褐色土多量混入
10　にぶい黄褐色（10Y R 5/4）黒褐色土少量混入
11　黄褐色（10Y R 5/6）火山灰層　黒褐色土多量混入
12　灰黄褐色（10Y R 6/2）火山灰層　炭化物少量混入
13　赤黒色(2.5Y R 1.7/1)
14　褐　色（10Y R 4/3）炭化物多量、黒褐色土多量混入
15　暗褐色（10Y R 3/4）砂質　炭化物少量混入
16　褐　色（10Y R 4/4）砂質
17　暗褐色（10Y R 3/3）砂質　炭化物微量、礫少量混入
18　暗褐色（10Y R 3/4）砂質　礫少量混入
19　黒褐色（10Y R 3/2）砂質　礫少量混入

第189図　ＳＫ(Ⅰ)竪穴状遺構・ＳＫ149土壙実測図

ＳＫ(Ⅰ)002竪穴状遺構（第189図・第65・66図版）

位置：ＫＩ60・61、ＫＪ60・61

確認面：第Ⅳ層上面

確認状況：第Ⅳ層上面精査中に、火山灰とその上に堆積した黒色土の拡がりを確認し、遺構と判断した。

形態：不整円形

規模：260cm×250cm

面積：4.9m²

壁：高さ33～40cmで下方に丸みを有しながら急角度で立ち上がる。

底面：ほぼ全体に平坦である。

備考：縄文時代のＳＫ149が底面に検出され、この遺構を竪穴状遺構が掘り込んで構築されている。覆土上部に火山灰層が堆積している。

遺物：土師器破片が少量出土した。

ＳＫ(Ⅰ)003竪穴状遺構（第190図・第65・66図版）

位置：ＫＨ62・ＫＩ62

確認面：第Ⅳ層上面

確認状況：第Ⅳ層上面精査中に、火山灰と黒色土の拡がりを確認し、遺構と判断した。

形態：不整方形

規模：280cm×160cm

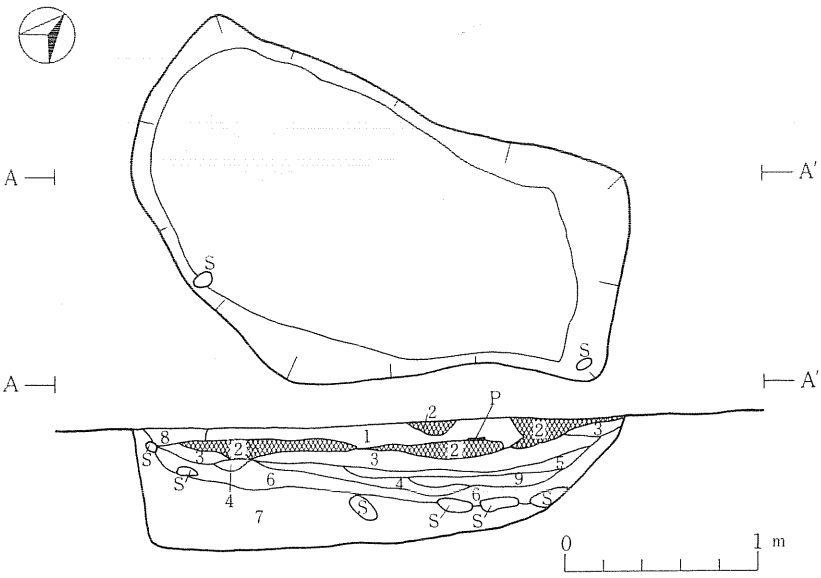
面積：3.7m²

壁：西側では垂直に立ち上がっているが、東側はなだらかで、幾分丸みを帯びている。西側は高さ63cmを測る。

底面：全体にほぼ平坦であるが、東側が若干浅くなっている。

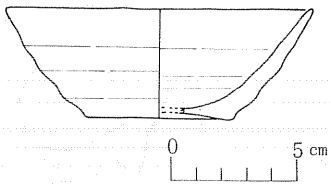
備考：遺構内覆土上方に火山灰が堆積している。

遺物：土師器坏が出土した。口径11.2cm、底径推定6.8cm、器高4.4cmを測り、ロクロ成形である（第191図）。



1　黒　色（５ＹＲ²/₁）火山灰多量、炭化物少量、にぶい黄褐色土少量混入
2　にぶい黄橙色（10ＹＲ⁶/₃）火山灰層　暗褐色土多量混入
3　黒褐色（10ＹＲ³/₃）炭化物少量混入
4　黒褐色（10ＹＲ³/₁）炭化物多量、礫多量混入
5　黒　色（10ＹＲ¹·⁷/₁）黒褐色土多量混入
6　黒褐色（10ＹＲ³/₂）細砂質　礫多量混入
7　黒褐色（10ＹＲ³/₁）炭化物微量、礫多量、黄褐色土少量混入
8　黒褐色(2.5Ｙ³/₁）火山灰少量混入
9　暗褐色（10ＹＲ³/₂）粘土質

第190図　ＳＫ(Ｉ)003実測図



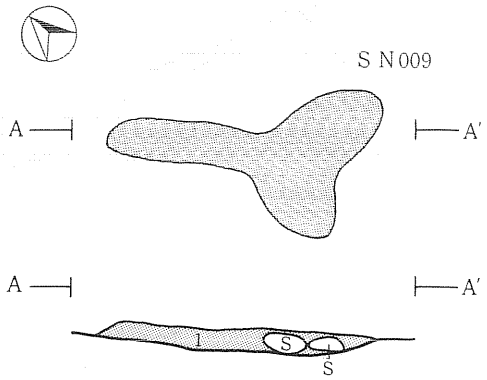
第191図　ＳＫ(I)003出土遺物

ＳＮ001焼土遺構（第15図・第66図版）

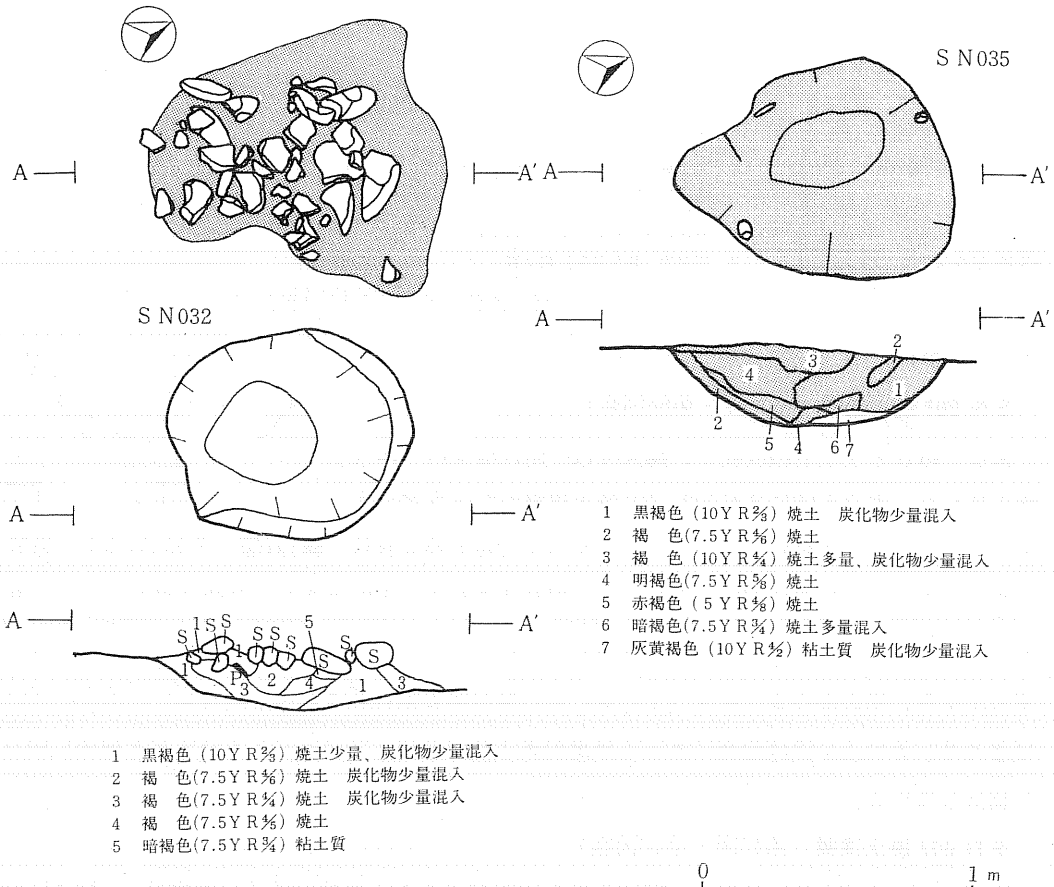
ＭＧ・ＭＨグリッド内にあり、縄文時代の第Ⅳ層と同一面で検出された。すぐそばにＳＮ002～004焼土遺構がちょうど十字形に背を向ける形で構築されている。ＳＮ001は最も残存状態が良い。平面では長径は不明であるが、土層断面を見ると130cmあり、短径は平面で80cm、底面までの深さは20cmを測る。底部は丸みのある舟底状を呈し、先端部は急激に反転して上方に立ち上がり、煙出部のようになっている。この反対側を焚口部としたものらしい。焼土が10cmほどあり、その上にほぼ全面に渡って多量の炭化物が堆積している。ＳＫ004を先端部で切って構築している。

ＳＮ002焼土遺構（第15図・第66図版）

ＳＮ001のすぐ南側に位置し、平面形は長楕円形である。長軸124cm、短軸72cm、深さ25cmを測る。底面は鍋底状を呈し、焼土が馬蹄形状の拡がりを見せる。炭化物が焼土上から覆土にかけて散在する。ＳＮ001の様な先端部の煙出はなく、なだらかになっている。



1　明赤褐色（5 Y R 5/8）焼土



1　黒褐色（10 Y R 2/3）焼土　炭化物少量混入
2　褐　色(7.5 Y R 4/6）焼土
3　褐　色（10 Y R 3/4）焼土多量、炭化物少量混入
4　明褐色(7.5 Y R 5/6）焼土
5　赤褐色（5 Y R 4/8）焼土
6　暗褐色(7.5 Y R 3/4）焼土多量混入
7　灰黄褐色（10 Y R 4/2）粘土質　炭化物少量混入

1　黒褐色（10 Y R 2/3）焼土少量、炭化物少量混入
2　褐　色(7.5 Y R 4/6）焼土　炭化物少量混入
3　褐　色(7.5 Y R 3/4）焼土　炭化物少量混入
4　褐　色(7.5 Y R 4/6）焼土
5　暗褐色(7.5 Y R 3/4）粘土質

0　1 m

第192図　SN009・032・035焼土遺構実測図

ＳＮ003 焼土遺構（第15図）

ＭＨ59内にあるが、南半は水路によって切られており不明であるが、ＳＮ001・002同様の形態を呈するものであろう。現存部の短径は74cmを測り、確認面から底面までの深さは７cmと浅い。底面は鍋底状を呈し、焼面を有する。炭化物が焼土中と埋土に点在している。

ＳＮ004 焼土遺構（第15図）

ＭＨ60内にあり、ＳＤ003を切って構築されている。長径150cm、短径70cmほどであるが、焼土は底面にわずかに見られるだけで、その上に炭化物を含む褐色土層が底部に存在する。先端部の立ち上がりは急である。

ＳＮ009 焼土遺構（第192図）

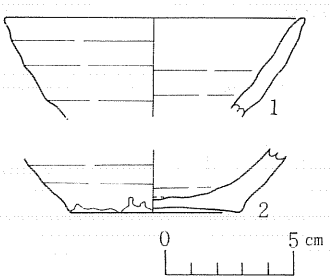
ＫＨ61グリッドに位置し、第Ⅳ層の縄文時代遺構とほぼ同一面で検出された。ＳＮ032・035に極めて近い位置にあり、周辺に竪穴住居跡、竪穴遺構も多い。100cm×50cmの範囲で、厚さ10cmほどに焼土が堆積している。焼土中から土師器と骨片が出土した。

ＳＮ032 焼土遺構（第192図）

ＫＨ60グリッドにあり、第Ⅳ層上面で検出した。焼土は115cm×106cmの範囲で拡がり、厚さは20cmほどを測る。焼土上面に大小の角礫が乗っており、いずれも火熱を受けて赤色化している。これらの間から土師器杯が２点出土した。いずれもロクロ成形である。

ＳＮ035 焼土遺構（第192図）

ＫＨ61グリッド内にあり、ＳＮ009・035の中間に位置する。106cm×83cmの範囲で、深さ30cmほどに焼土が堆積している。焼土底面は丸みを帯び、全体になだらかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。



第193図　ＳＮ032出土遺物

ＳＤ003 溝（第15図）

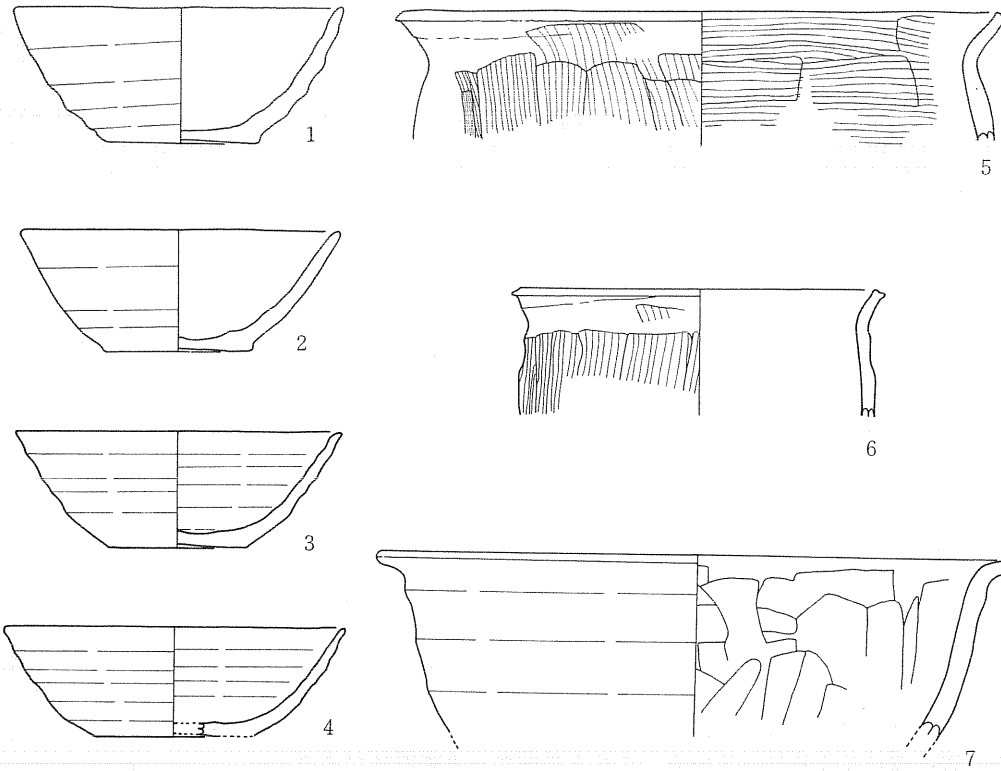
ＭＨ60・ＭＧ60両グリッド内の北東～南西方向に、全長794cmに渡って検出された。幅13cmと細長く、深さは一部落ち込んでいる箇所もあるが、全体的に３～４cmと浅い。底面はほぼ平坦でＳＮ004により切られている箇所がある。

(2)　遺構外出土遺物

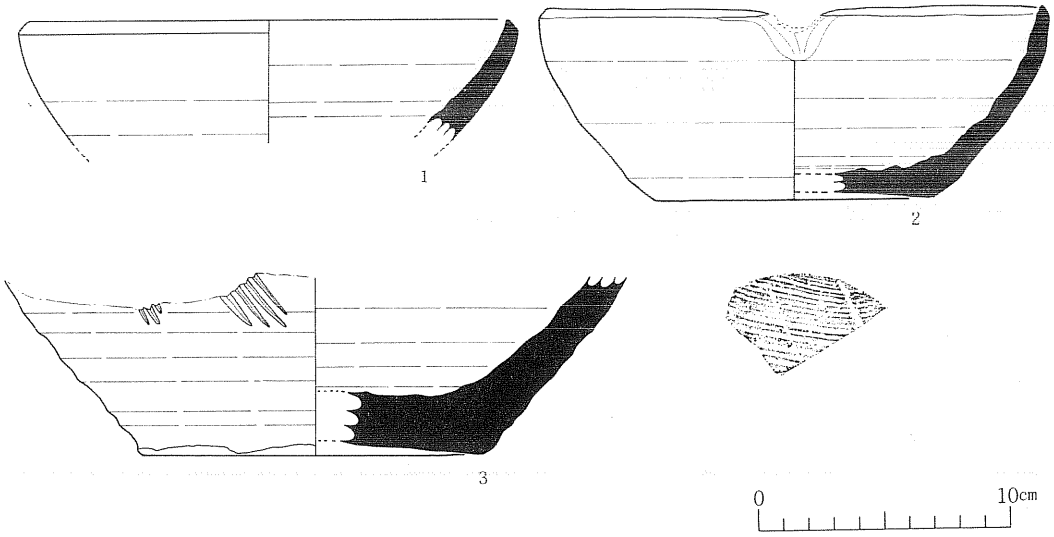
縄文土器とほとんど同一レベルで土師器杯・甕・鍋、須恵器壺・甕の破片が出土した。

４．中　　世

中世の遺構と断定し得るものは発見されなかった。しかし、遺物(第195図）は珠洲系陶器の他、青磁の小破片が１点出土しており、調査地点周辺に何らかの遺構の存在を予測させる。



第194図　遺構外出土遺物（平安）



第195図　遺構外出土遺物（中世）

第 9 表　遺構外出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第194図 1	———	杯	13.1cm	5.6cm	6.1cm	—cm	土師器
〃 2	———	杯	12.6cm	4.9cm	5.7cm	—cm	土師器
〃 3	———	杯	12.9cm	4.7cm	5.5cm	—cm	土師器
〃 4	———	杯	13.5cm	4.4cm	6.3cm	—cm	土師器
〃 5	———	甕	23.6cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 6	———	甕	14.1cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 7	———	鍋	25.4cm	—cm	—cm	—cm	土師器
〃 8	———	甕	—cm	—cm	6.4cm	—cm	土師器
〃 9	———	壺	(17.6)cm	—cm	—cm	—cm	須恵器
〃 10	———	壺	(15.7)cm	—cm	—cm	—cm	須恵器
〃 11	———	壺	—cm	—cm	—cm	—cm	須恵器
〃 12	———	高台杯	—cm	—cm	6.6cm	—cm	須恵器

第10表　遺構外出土土器計測値

図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	備考
第195図 1	———	鉢	(19.0)cm	—cm	—cm	—cm	中世陶器
〃 2	———	鉢	(20.2)cm	(7.6)cm	(11.1)cm	—cm	中世陶器
〃 3	———	甕	—cm	—cm	(13.5)cm	—cm	中世陶器

第5章　ま　と　め

第1節　検出された遺構、遺物の検討

平鹿遺跡は4カ月半に渡り、7,650㎡を発掘調査した。その結果、縄文時代、弥生時代、平安時代及び中世の遺構、遺物が検出された。その主体は縄文時代晩期にある。遺物はコンテナ450箱にものぼり、秋田県での一遺跡の発掘調査による出土量としては最大規模となり、現場での調査と並行して、連日洗浄作業を行ったのであるが、作業完了までには発掘終了後3カ月の期間を要した。この厖大な量の出土遺物の一々に目を通し、復原、実測する作業を限られた時間内に完遂することは不可能と言わざるを得ず、したがって本書にかろうじて掲載し得た遺物は、その中から抽出した一部分に過ぎない。また、本章も主として平鹿遺跡の主体を占める縄文時代晩期の遺構、遺物を極めて簡便に整理したものに過ぎないが、これをもってまとめに替えたいと思う。

1　遺跡の規模

平鹿遺跡の発掘調査範囲は東西156ｍ、南北172ｍの枠内に収まる。縄文時代の遺構、遺物はほぼ全域から検出されているが、より微視的に述べるならば、ほとんど遺構、遺物が検出されず、また、包含層のあり方から見ても、その限界が明白なのは発掘区域内南端部であって、ＳＸ009捨て場をその遺跡の南限とすることができ、これ以南には遺構、遺物の存在する可能性はほとんどない。

西側は土地改良事業に伴い水路・道路の造成地区にあたり、この部分をトレンチ状に調査したのであるが、ＳＲ002・004ないし007土器棺は、ほぼ西端にあたるものと考えてよい。

北限を端的に示すものはＬＣラインの土層断面観察によって検出されたＳＸ008遺物包含層である。この包含層は基本層位第Ⅳ層にあたり、大洞C_1式土器を包含するが、東西に設定したトレンチでは東西幅9.5ｍを測り、北方から傾斜して流入している。ＬＣライン上ではその南端を把握しているが、流入角度と東西幅から見て、包含層は大きく北方に延びて存在するとは思われない。恐らく、包含層自体の範囲は小さく、この位置に限られたあり方を示すものであろう。しかし、より北方に遺構の存在する可能性はある。

北西部ではＳＫ035土壙などの、遺構上面に配石を有する土壙が群となって構築され、また道路予定地では、その北端に至るまで包含層があり、遺物を出土している。したがってこの方面では必ずしも北西限界を把握してはいない。ところが、調査区域内中央部には厖大な量の遺

物を出土するゾーンがあって、おおよそ、この地帯を中心として土壙、土器棺、石囲炉などの遺構が配置されており、前述のようにＳＸ009が南端にある状況を考えるならば、北西端も調査区域より大幅に外方に延びているものとは思われない。

東側では調査区域東端に至るまで石囲炉が検出されている。調査にあたり、この東端より40ｍ北の休耕田にプレハブを設営したのであるが、その付近にも明らかに遺物包含層の存在が見られる。加えて、56ライン以北のＬＣライン東側は、調査期間の制約から第Ⅳ層上面までで掘り下げを中止しており、第Ⅳ層が薄く、地山面が露出する箇所もあるが、完全に地山面までは掘り下げておらず、第Ⅳ層上面で検出した石囲炉の下に遺構が隠されていた可能性はある。こうしたことから、遺跡はかなり東方に拡がるものと推察される。

東南側は調査対象外の樹園地となっているが、ＳＸ009は北東に延びてこの中に入り込んでいる。中央部の捨て場ゾーンもこの中に入っているが、それは一部に過ぎない。

以上の遺構、遺物の分布状態から、平鹿遺跡の規模は東側の未調査区域を除外すれば、おおまかではあるが調査範囲内に表出していると考えてよい。その大きさは中央部捨て場を中心として、北東―南西方向100ｍ、北西―南東方向160ｍの拡がりを有し、北から35°西方向に偏位した長軸線をもつ楕円形を呈している。

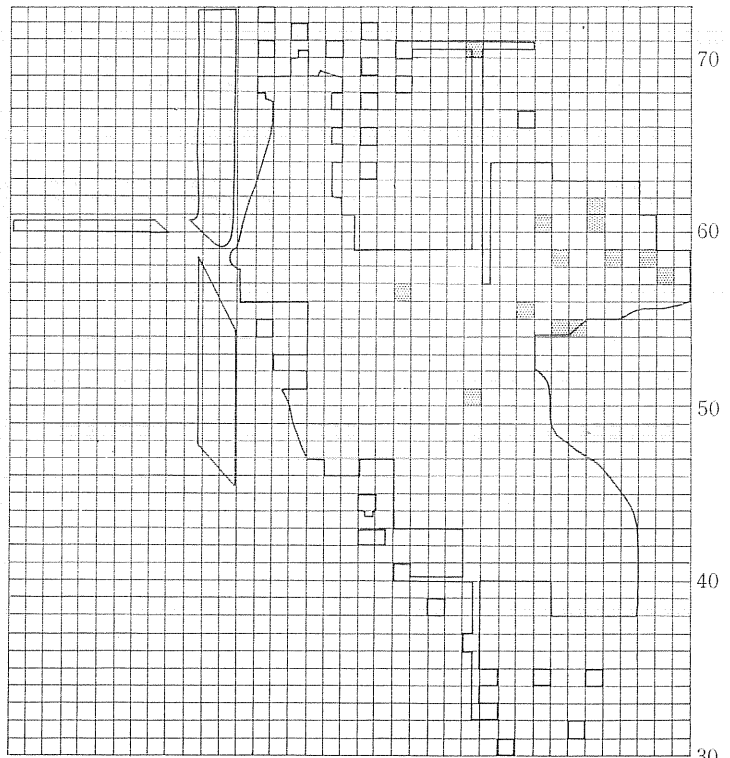
2　各種遺構とその分析

縄文時代晩期の遺跡としての平鹿遺跡は、山内清男の土器編年大綱(註1)に基づけば、大洞ＢＣ式を最古として、C_1・C_2・Ａ式の時間的範囲内で存続しており、その主体は大洞C_1～Ａ式期にある。

調査により検出された遺構は以下のとおりである。時代ごとの遺物分布の変遷は第196図、197図の如くである。このうち、縄文時代晩期の各種遺構について検討する。

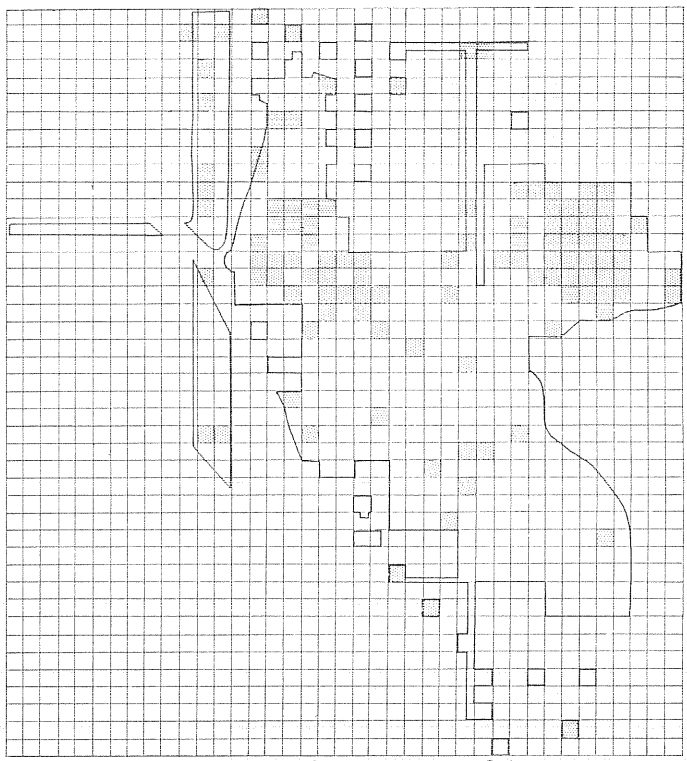
縄文時代晩期	土壙	127	弥生時代	土壙	1
	土器棺	30	平安時代	竪穴住居跡	3
	石囲炉・焼土遺構	36		竪穴状遺構	3
	配石遺構	11		焼土遺構	7
	捨て場(中央部を含む)	2		溝	1
	その他の遺構	6	中　世	遺物のみ	

縄文土器

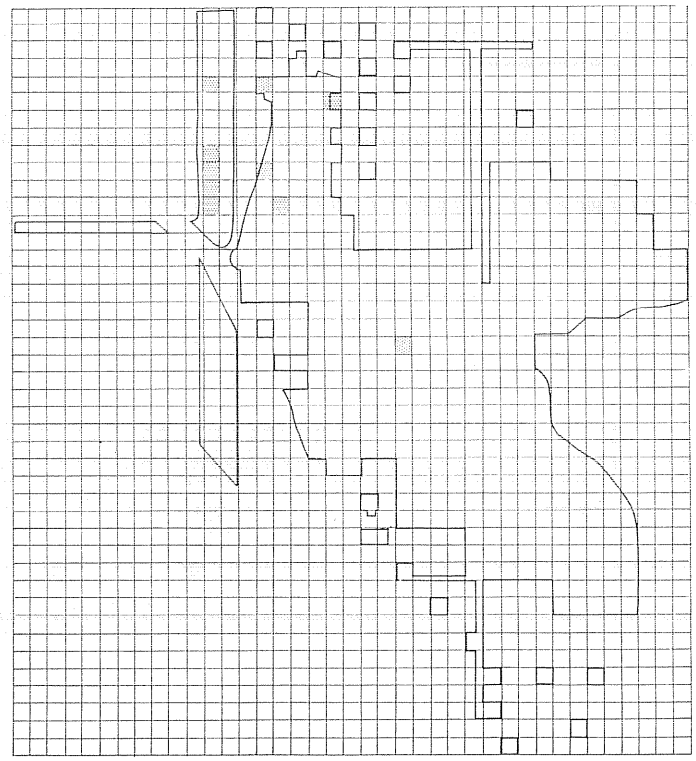


弥生土器

第196図　時代別遺物の分布状想　(1)



土師器・須恵器



中世陶器

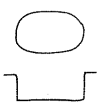
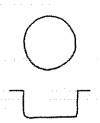
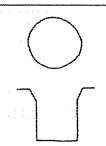
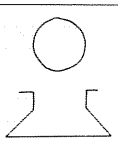
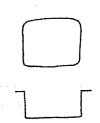
第197図　時代別遺物の分布状態　(2)

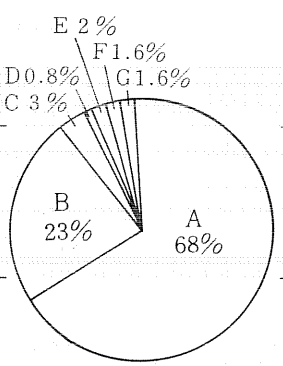
(1) 土　　壙

平鹿遺跡における土壙総数は127基を数え、広範囲な分布を示している。これらは地面を掘削して構築された何らかの遺構と判断されるもののうち、明らかに竪穴住居跡、竪穴状遺構、溝などと区別されるものを指しており、慣習的に壙の字を当ててはいるが、字義の示す墓穴を指して用いているわけではない。

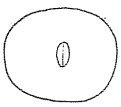
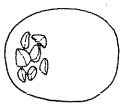
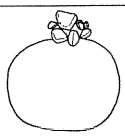
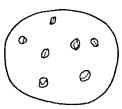
確かに、遺構内からは人骨の検出は皆無であり、遺体に塗付されたと考えられる赤色顔料の存在もＳＫ038のみである。しかし、平鹿遺跡の土壙のあり方は、同じく縄文晩期の墓跡として報告された諸例に徴して見るに、少なからずの類似性を看取することができ、その大部分を土

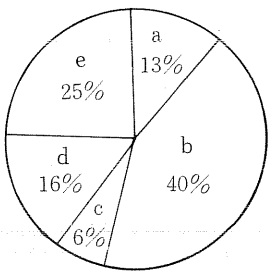
第11表　土壙の型式分類

模式図	型式	土壙番号	土壙数	頻度率(%)
	A	2、3、4、11、12、20、24、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊶、㊷、㊸、㊹、46、47、㊽、51、53、57、61、63、67、68、69、70、㉒、73、㉘、79、80、83、88、90、91、93、94、95、96、97、98、99、100、101、104、105、106、107、109、111、112、113、115、118、119、122、125、126、127、128、129、133、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、㊿	86	68.0
	B	1、㉖、㉞、45、50、58、59、62、65、71、㉔、75、㉛、84、㉟、87、102、110、㉖、117、120、121、123、124、131、132、㉞、㉛、㉜	29	23.0
	C	㊵、76、㊷、114 ○印は上面に配石を伴うもの	4	3.0
	D	86	1	0.8
	E	10、130、149	3	2.0
不整形	F	13、19	2	1.6
不明	G	5、55	2	1.6



第12表　配石の型式分類

模式図	形式	土壙番号	土壙数	頻度率(%)
	a	72、78、92、134	4	13
	b	31、32、33、35、37、38、41、43、44、48、67、116、150	13	40
	c	34、85	2	6
	d	2 、26、27、29、74	5	16
	e	28、30、36、39、40 42、151、152	8	25



壙墓として認識することは、何ら根拠のない妄想ではないと考える。

土壙の型式分類　土壙は平面形態及び断面形態の組み合わせから、便宜的に６類に分類され、これに形状把握の不可能なものが加わる（第11表）。

Ａ型式：平面が楕円形で、垂直ないし緩やかに外傾する掘り込みを有するもの。

Ｂ型式：平面が円形ないしそれに近い略円形を呈し、Ａ類同様の掘り込みを有するもの。

Ｃ型式：平面は円形であるが、平面直径と同等か、それ以上に深い掘り込みを有するもの。

Ｄ型式：開口部は円形に近いが、下方が末広がりとなるフラスコ形を呈するもの。

Ｅ型式：平面が隅丸方形を呈し、Ａ・Ｂ類と同様の掘り込みを有するもの。

Ｆ型式：Ａ～Ｅ類とは異なり、平面が不整形で、底面に凹凸の多いもの。

Ｇ型式：形態不明のもの。

以上のうち、Ａ類が最も多く、これにＢ類が次ぐ。両者合わせた頻度は９割を占める。Ｃ類のうち、ＳＫ040・076の２基は、口径に比して深さがかなり深い井戸状の形態となっている。これに類似する遺構はＳＱ002配石遺構下の２個の竪穴で、上面に配石を伴う。Ａ・Ｂ類に比べ、土壙墓の可能性は低い。

配石の型式分類　土壙には上面に配石を伴うものがあり、中には底面にまで及ぶものもある。

上面の配石のあり方に限ってその分布形態を見ると、おおよそ5類に分類される。

a型式：土壙上面中央部付近に1、2個配石のあるもの。

b型式：配石がどちらか一方、あるいは両端に片寄るもの。全面に配石のあるものでも特に大きな石を片側に置くもの。

c型式：土壙の輪郭からほとんど外れた位置にあるもの。

d型式：全面にまばらに配石されるもの。

e型式：全面に多くの石を用いているもの。

このうち、最も多いのはb・e類であり、両者で配石を伴う土壙の半数以上を越えている。土壙型式と配石型式の相関関係は以下のとおりである。(第13表)。

第13表　土壙と配石の関連

土壙型式	配石型式	土壙番号	土壙数	頻度率(%)
A	a	72、78	2	6
	b	31、32、33、35、37、38、41、43、44、48、50、67	12	34
	d	2、27、29	3	9
	e	28、30、36、39、42	5	15
B	a	134	1	3
	b	81、116	2	6
	c	34、85	2	6
	d	26、74	2	6
	e	151、152	2	6
C	a	92	1	3
	e	40	1	3

長軸・短軸の相関　A型式の楕円形土壙の長軸全長はSK029の60cmを最短とし、SK020の301cmを最長とするが、75～160cmの間に集中する傾向が窺える。短軸はSK073の26cmを最短とし、SK125の176cmを最長とするが、45～120cmの間への集中が見られる(第198図)。

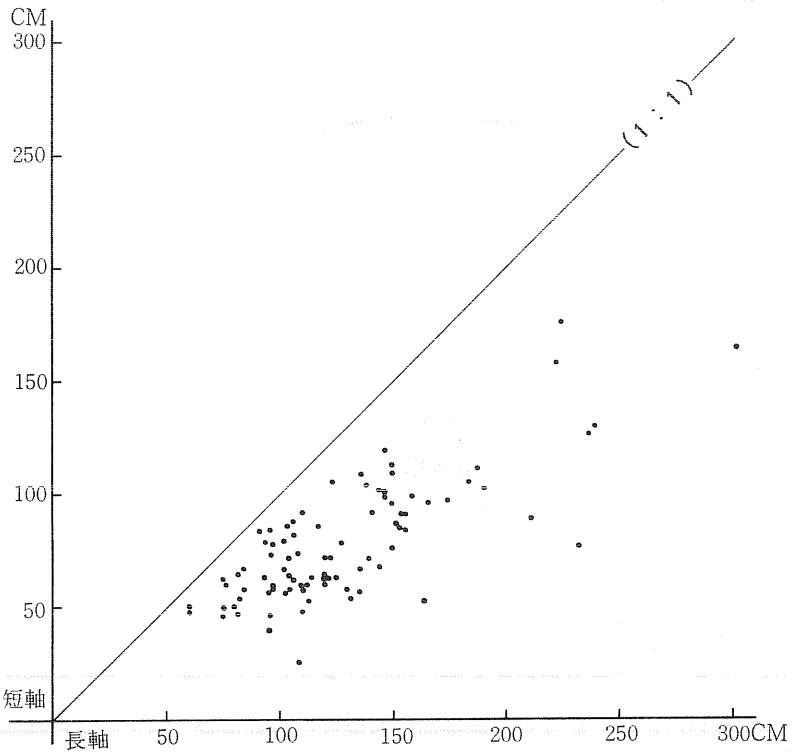
B型式の円形土壙は完全な円形ではなく、やはり長径・短径があるから敢えて相関図に示した(第199図)。最小径はSK074の36cmであり、SK087のみ孤立的存在となっているが、他はほぼ60～160cmの間に渡っており、特に集中は看取されない。強いて言うならば60～100cmの間にわずかに集中度が高いと言えようか。

長軸方位：土壙のうち長軸方位が測定可能なもの、すなわち平面形が楕円形を呈するA型式、及び隅丸方形を呈するE型式の長軸方位を測定した(第200図)が、何ら片寄りは見られない。

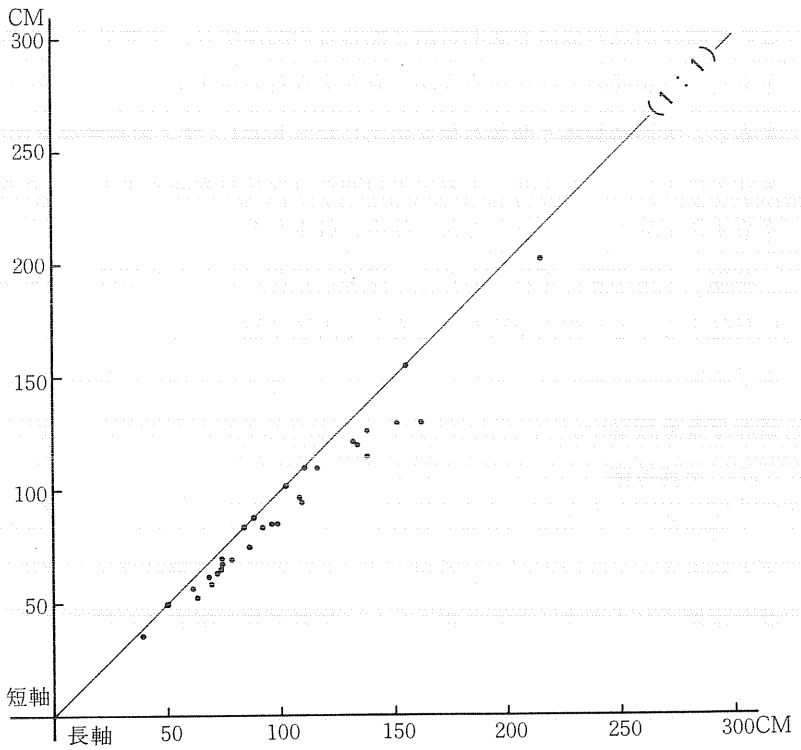
遺体の埋葬頭位地形決定説[註2]に従うならば、傾斜面の全くない平坦地にある平鹿遺跡の場合、長軸方位にまとまりがないのは当然と言えよう。

土壙の長軸方位にまとまりが見られたとしても、それだけでは遺体の埋葬頭位は決定できない。人骨の遺存しない土壙の場合、埋葬頭位の決め手とすべきものはベニガラや装飾品などの位置であろう。が、これらも検出されない本遺跡において、埋葬頭位を明確に打ち出すことには困難が伴う。一つの可能性としては遺構上面の配石の片寄りが考えられるが、その位置の下に人骨頭部が検出されない限りは根拠を欠く。

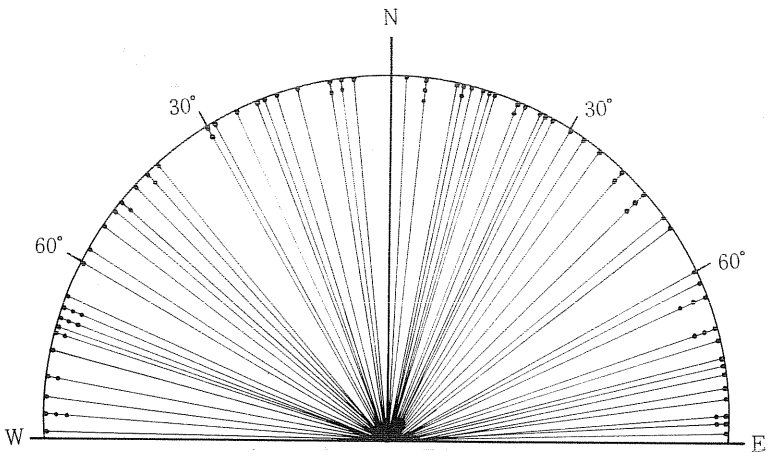
長軸方位図は平鹿遺跡の土壙全体を通して集成した図であって、林謙作の言うよ



第198図　土壙（楕円形）における長軸と短軸との相関グラフ



第199図　土壙（円形）における長軸と短軸との相関グラフ



第200図　土壙長軸方位

うに墓域中に「埋葬区」[註3]が存在するならば、その「埋葬区」ごとの土壙長軸方位の検討が必要であろう。

赤色顔料　土壙墓には埋葬人骨の頭部にベニガラが塗布された例[註4]や、底面の片寄った位置にベニガラが散布する例[註5]があるが、平鹿遺跡では土器棺内からは検出されたが、土壙内からは検出されなかった。

副葬品　土壙内からは完形土器、土器片、石鏃、打製石斧、磨製石斧、装飾品などが出土した。しかし、土壙を埋め戻す際に付近にあったものが混入する可能性は大きく、全てを副葬品とするわけにはいかない。副葬品の可能性のある遺物を出土した遺構はＳＫ051・071・076・087・110・117・149の７基である。ＳＫ076は完形の半精製深鉢が遺構上部に置かれていたが、この土壙は前述の様に形態的特徴と配石との関連から、土壙墓と考えるよりはむしろ祭祀遺構と考えた方が妥当ではなかろうか。直立する石刀を出土したＳＫ051もその可能性がある。とすると、大形精製鉢と磨製石斧を出土したＳＫ051、サメ歯垂飾品を出土したＳＫ087、完形無文壺を出土したＳＫ116、土製小玉14個と石棒状石製品を出土したＳＫ117の５基が、副葬品を有する土壙ということになる。就中、確実なものは、ＳＫ117のあり方であろう。

時期　土壙相互に重複はあるが、確実に時期の知られる遺構との重複は少ない。また、土壙に付随することが確実な副葬品を有する土壙は僅少であるし、土壙埋土中出土の土器片も、確実な時期決定材料にはならない。したがって個々の土壙の所属時期を決するには困難が多いと言わざるを得ない。

(2)　土器棺墓

土器棺墓とした遺構は30基である。しかし土器の中からは土壙と同様に人骨遺体はその片鱗すら検出されてはいない。したがって、これだけで土器が遺体を埋納した棺であるとの断定は甚だ根拠を欠くと言わざるを得ないし、被葬者層も限定され得ない。

縄文時代の遺跡で埋甕、土器埋設遺構などと呼称される遺構のうち、住居内の入口下から発見される埋甕を、出産に関する呪術用容器とする見解がある[註6]が、平鹿遺跡例は全て屋外から単独に発見される遺構であることから、この説は考えなくともよいし、配石下からの出土でもない

祭祀施設と考えることはできない。[註7]

実際に土器の中に人骨の収納された例は、渡辺誠の集成によれば44例あげられる[註8]が、長谷部言人報文では岩手・宮城両県の縄文晩期貝塚検出例のうち、十中八、九は死産児であるという[註9]。加えて、晩期中葉の宮城県前浜貝塚では、成人骨埋葬の土壙墓に極めて近接する位置から胎児骨を収納した土器棺が検出された例がある[註10]。幼児や死産児を土器に収納するという埋葬方法は、小金井良精の言うように単に成人埋納用の大形土器を作ることができなかったから[註11]ではなく、土器を母胎と見たて、霊魂不滅の思想の下に、再生への願望をこめて行われたとする想定[註12]は注意を惹く。遺体頭部にベニガラを塗布する行為は柏子所に好例を見る[註13]し、人骨の遺存しない土壙墓内にもベニガラ散布の認められる場合があり[註14]、平鹿遺跡の土器内の赤色顔料の存在に共通する事象であると言える。

以上のことから考えて、平鹿遺跡の単独埋設の深鉢形土器は、幼児、死産児用の棺である可能性は十分に高いと考える。縄文後期十腰内Ⅰ式期の「改葬甕棺墓[註15]」や、弥生時代の「再葬墓[註16]」の様に、成人骨を二次埋葬したものとの想定は残るが、前者は地域的、時間的に極めて限定されること、後者の葬法が展開するのは関東地方、東北地方南部の弥生初頭に限られること[註17]、加えて、縄文時代土器棺に成人骨埋納例は極めて少ないこと[註18]などを考え合わせると、平鹿遺跡の場合も、幼児・死産児用の土器棺とする考えを積極的に否定する根拠は極めて乏しくなる。

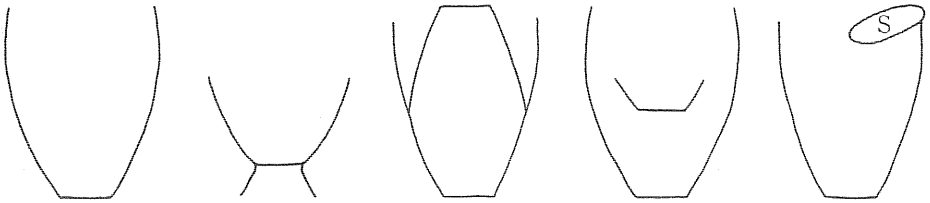
分布　土器棺はＳＲ012を北限とし、ＳＲ010をその南限とする。西端は水路造成予定地のＮＤ60グリッド内に検出されたＳＲ002であり、大局的には土壙と似通った分布を示す。ところが、発掘区域内中央部のＳＱ001・007付近には存在せず、中央部ほど分布が希薄となる傾向が窺える。土器棺相互の重複、土壙との重複はなく、北端や南端の土壙密集地では土壙群の内部にはなく、その外側に検出されている。ＭＢ64内のＳＲ012、南端のＳＲ030～033のあり方が、それを端的に示している。分布密度は土壙の分布が希薄となるＳＩ001・002竪穴住居跡付近が最も濃い。以上から、土器棺は主として各種遺構分布域の中でもその外方の西側及び南側にあり、大筋としては土壙と近似する分布形態をなすが、土器棺墓構築の場所選定にあたって、土壙とは意識的に区別されていたことが窺える。

型式分類　土器棺は原則として大形粗製深鉢を使用しており、精製土器は用いられず、台付浅鉢を用いたＳＲ020は例外的存在である。また、器面に煤状物質の付着が見られ、日常使用した土器の転用である。蓋の有無から２大別されるが、これに棺身土器形態を組み合わせて、５型式に分類される。

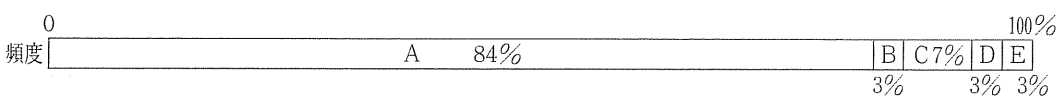
Ａ型式：深鉢形土器を棺身とし、蓋を有しないもので、25例あり全体の80％以上を占める。これは土器下半部を用いたものに細分可能である。

Ｂ型式：台付浅鉢形土器を棺身とし、蓋を有しないもので、この器形を棺身としたものは本

第14表　土器棺の型式分類とその頻度率



型式	A	B	C	D	E
土器棺	1・2・5・6・7 8・9・10・⑫・15 18・19・21・㉒・23 24・25・26・27・28 29・30・32・33・34	⑳	17 31	16	4 ○印は赤色顔料の検出されたもの
蓋	無		有		
数	25	1	2	1	1



例のみである。

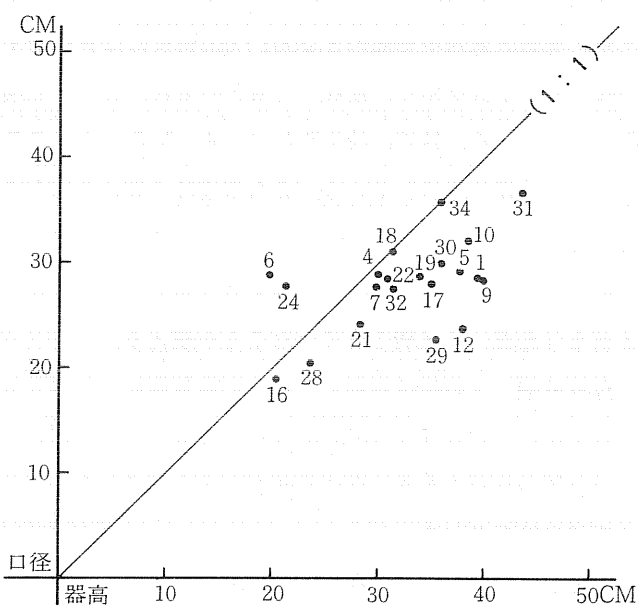
C型式：深鉢形土器を棺身とし、これに上方から倒立伏位の土器を棺身内部に入れて蓋としたもの。

D型式：深鉢形土器を棺身とし、その内部に別個体の深鉢形土器底部を納入して蓋としたもの。

E型式：深鉢形土器を棺身とし、上部を扁平な自然石を使用した蓋で覆うもの。

土器棺の法量

土器棺30基のうち、復原し、法量を知り得るものは21基である。口径はSR016の19.0cmを最小としてSR031の36.5cmを最大値とする。器高も同じくSR016の20.5cmが最小値、SR031の43.7cmが最大値であり、土器の口径、器高



第201図　土器棺における口径と器高との相関グラフ

は正比例する傾向が窺える。ＳＲ006と024は胴部下半部のみを用いているので器高に比して口径が小さいが、他はいずれも口径、器高が同一か、口径よりも器高が上回る土器を使用している。口径は27～33cm、器高は30～38cmの間に集中度が高い（第201図）。

赤色顔料・副葬品　５型式に分類された土器棺のうち、Ａ型式に２例、Ｂ型式に一例、棺内底部付近に赤色顔料の認められるものがあった。棺内から確実に副葬品と考えられる遺物の出土は見られなかった。しかし、ＳＲ007土器棺内には完形の小形精製台付深鉢が出土しており、これを副葬品と見るべきかも知れない。

時　　期　土器は全て型式表徴の少ない粗製土器を使用しており、土器型式の時期決定には少なからず困難を伴なう。だが、口縁部装飾帯を有するものは精製土器との対比が不可能ではなく、ＳＲ018は大洞ＢＣ～C_1式、ＳＲ019は大洞C_2式、ＳＲ007は大洞C_1式に対比できよう。

(3)　石囲炉・焼土遺構

分　　布　石囲炉は31基、焼土遺構は５基検出された。遺構配置図を見ると一見してその分布のあり方が、土壙、土器棺の分布とは異なることに気づく。すなわち、土壙は平鹿遺跡の南東～北西両端に至るまで広く分布しながらも大きく４群に分かれ、土器棺は土壙群からは少し外方に離れ、主として遺跡の西～南側の外縁を形作っているのに対し、石囲炉・焼土遺構は外縁部に少なく、むしろ中央部に点々とではあるが広く分布するというあり方を示している。しかもそれは東側にあるＳＮ026～030の５基と、北西端で孤立的存在にあるＳＮ048とを除外すれば、中央部にある厖大な量の遺物や自然石を出土するゾーンとほぼ一致する現象に気付くのであり、そこに捨て場の形成と石囲炉・焼土遺構の構築、使円行為との間に有機的関連を推考させるのである。

型式分類　石囲炉・焼土遺構は、形態的には竪穴住居跡中に付設される炉と何ら変わりがない。石囲炉は一般に火の使用による焼土堆積、焼面の形成、石の赤色化が少なく、火を用いたとしても短時間の使用であったと思う。平面形及び遺物のあり方から５型式に分類される。

Ａ型式：平面形が円形ないし楕円形を呈し、石囲のみからなるもので、石囲は二重になるものを含む。25基を数える。

Ｂ型式：平面形は円形ないし楕円形であるが、中央部に土器を埋設するもの。

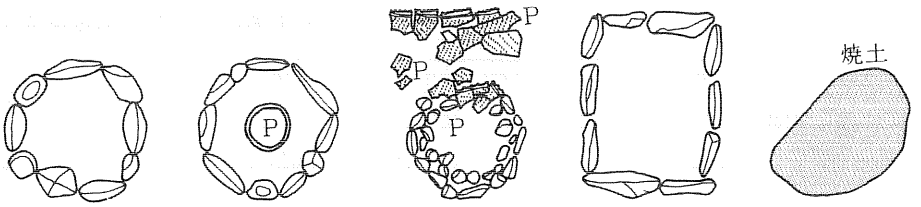
Ｃ型式：石囲炉に供献土器を伴なうもの。

Ｄ型式：石囲が方形を呈するもの。

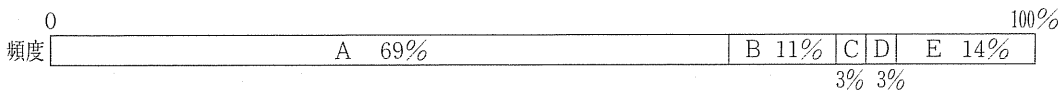
Ｅ型式：石囲を用いず、焼土のみからなるもの。

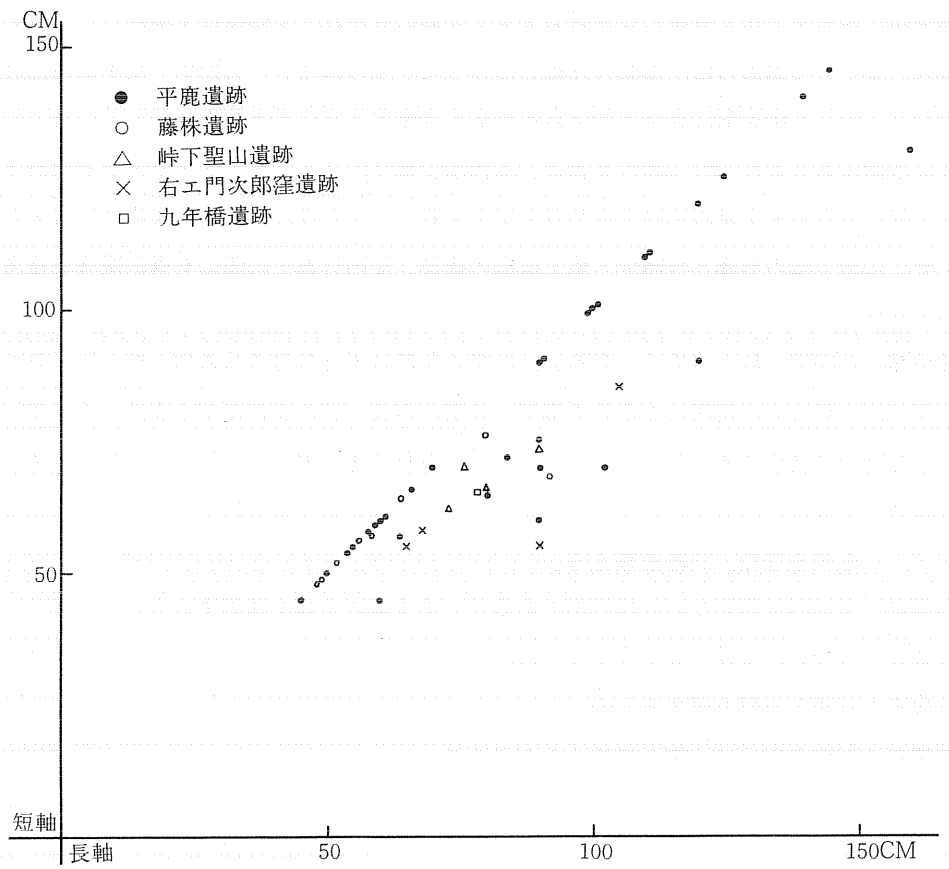
平鹿遺跡における31基の石囲炉は、円形ないし楕円形となるものが大部分で、方形は一例だけである。大きさを見ると、最小径はＳＮ048の45cmで、ＳＮ023の長径160cmが最大径である。縄文時代晩期の屋外石囲炉が検出された秋田県鷹巣町藤株[註19]、北海道七飯町聖の、祭祀用具、

第15表　石囲炉・焼土遺構の型式分類とその頻度率



型式	A	B	C	D	E
石囲炉・焼土遺構	5・14・16・17・18	8	25	24	7
	19・20・21・22・23	12			3
	26・27・28・29・30	34			31
	33・36・37・39・40	48			38
	41・42・44・46・47				43
数	25	4	1	1	5





第202図　5遺跡における石囲炉の規模

山[注20]、青森県南郷村右エ門次郎窪[注21]、岩手県北上市九年橋[注22]の４遺跡の例では、個体数が少ないせいもあろうが、４遺跡ともに石囲炉の大きさにまとまりが見られる。だが、平鹿例ではほとんどまとまりがなく、個体相互の大きさのばらつきが大きいと言わねばならない。

石囲炉のうち特異なあり方を示すものは、ＳＮ024と025である。ＳＮ024は既述の様に、共通する中軸線を有するＳＱ006配石と近距離、同一面に構築されており、配石と有機的関連性を持って構築、使用されたと考えることができる。また、ＳＱ025は丁寧に作られた二重の石囲と同一面、あるいはその上方に、３個体の完形またはそれに近い土器を共伴しており、ＳＮ024と共に火を使用した祭祀行為の営みを想定させる。焼土遺構もまた、他から運搬された焼土ではなく、その位置で火を使用した結果であるから、石囲炉同様の機能を有する遺構と考えてよさそうである。前述の聖山、右エ門次郎窪、九年橋の諸例では、石囲炉が住居内に付随する炉ではなく屋外の炉であるとの立場から、祭祀遺構とする性格づけを行っている。平鹿遺跡では石囲炉・焼土遺構の周囲に確実な柱穴、壁が検出されず、前記３遺跡同様に屋外での使用を考えた。

石囲炉の石は遺存状態が悪く、かなり散逸した状況にあるものが多い。これは遺存状態の良好なＳＮ024・025の存在などを考慮すると、意図的に破壊したと考えるよりは、そのままに近い状態で屋外に放置されたものが多いことによるものではなかろうか。

(4) 配　　石

配石は11基検出された。分布を見ると、調査区域内中央部に集中する傾向が歴然としておりＳＱ014・015を例外とするたらば、その分布は中央部の捨て場ゾーン内に完全に収納されることになる。殊にＳＱ001は平鹿遺跡の北東―南西100ｍ、北西―南東160ｍの範囲のほぼ中心に位置している。

形態、規模に多様性があり、簡単に分類すべきではないが、石の配置のあり方には、

Ａ：ある範囲内に密接して石が敷き詰められるもの……ＳＱ006・014・015・016

Ｂ：石がまばらに分散するもの……ＳＱ002・003

Ｃ：規模が小さく、石囲炉に類似するもの……ＳＱ008・009・010

Ｄ：Ｂ・Ｃの集合した形で、規模の大きなもの……ＳＱ001・007

以上Ａ～Ｄの４形態のあることが看取される。

配石にはＳＱ006の様に方形石囲炉と結びついて機能したと考えられるものや、配石下に深い円筒状土壙があり、これが土壙の中でも特異なあり方を示すＳＫ076の土壙形態と類似するものなど、他の遺構と不可分の関係にあるものがある。また、ＳＱ014・015はいずれも同一の形態で、しかも遺跡の北西端と南端の土壙群にそれぞれが付随する如くに対峙しており、その性格には共通のものがあろう。

(5)　捨て場

捨て場と考えた遺構はＳＸ009であるが、この他に調査区域内中央部には極めて厖大な量の遺物を出土するゾーンがあり、これをも捨て場と考えることができる。

中央部捨て場はおおよそ北東一南西50ｍ、北西一南東80ｍの楕円形を呈し、基本層位第Ⅲｆ層、第Ⅳ層から成り、復原し得た完形土器の大部分はこの内部からの出土である。第Ⅳ層下部からは、わずかではあるが大洞ＢＣ式に含まれると思われる土器や該時期の遮光器土偶などがあり、上部からⅢｆ層にかけては大洞C_1・C_2・Ａ各型式の土器が出土し、本遺跡形成の当初から一貫して捨て場として利用され続けたことが分かる。より微細に土器型式と出土層位及び出土地点の関連を追求するならば、その形成過程の復原も難しくはないであろう。

土器の出土状態を見ると、復原のできない小破片が圧倒的に多く、これらに混じってほとんど無傷の完形土器やそれに近い状態の土器が１個ずつ点々と発見され、複数まとまっての出土は至って少ない。遺物は土器ばかりではなく、完形で使用に堪え得ると思われる石器もまた多い。

他の遺構との関連を見ると、土壙、土器棺墓、石囲炉、配石がこの範囲の中に含まれ、これら遺構の周囲やその上方に、多くの遺物が重層的に堆積しており、各種遺構群の構築と同時に捨て場の形成が進行したことを物語っている。

こうした中にＳＸ006の大洞Ａ式土器８個の出土があり、捨て場のゾーンからは若干南に位置するが、大洞C_2式水器13個の同様の出土状態、さらにＭＢ47・48グリッドの３個の土器出土状態（第56図版）などの存在は、ある時点にこうした複数の完形土器が一括廃棄された状態を如実に示すものである。

遺構としては最南端に検出されたＳＸ009は、地山上に自然に形成された浅い落ち込みの中に、これも多量の遺物を廃棄したものであるが、中央部捨て場とは幾つかの相違点が指摘される。まず形成時期についてであるが、大洞Ａ式期だけに限られ、より古い時期の土器を含んでおらず、むしろ大洞Ａ式の中でもC_2式の面影の少ない、よりA′式に近い土器が多く、本遺構の形成はかなり限られた時間的範囲内に行われたことが言える。次に位置であるが、遺跡内最南端にあり、中央部捨て場との間にはより古い時時期の遺物包含層が薄く存在すだけで連続性を持たず、明らかに中央部捨て場とは区別されて隔絶性を帯びた位置にあると言えよう。

さらに根本的相違点は、勾玉・小玉・耳栓など664個の装飾品類の存在である。これは完形品のみの点数であり、破損品も含めるならば、これをはるかに陵駕する数値となり、こうした極めて多数の装飾品類がＳＫ117の様な個人墓への副葬品としてではなく、土器、石器類などと同様にこの場所に廃棄されているのである。

この様に、中央部捨て場とＳＸ009捨て場との間には、その形成に際し別種の要因の介在を

強く推測せしめるものがある。

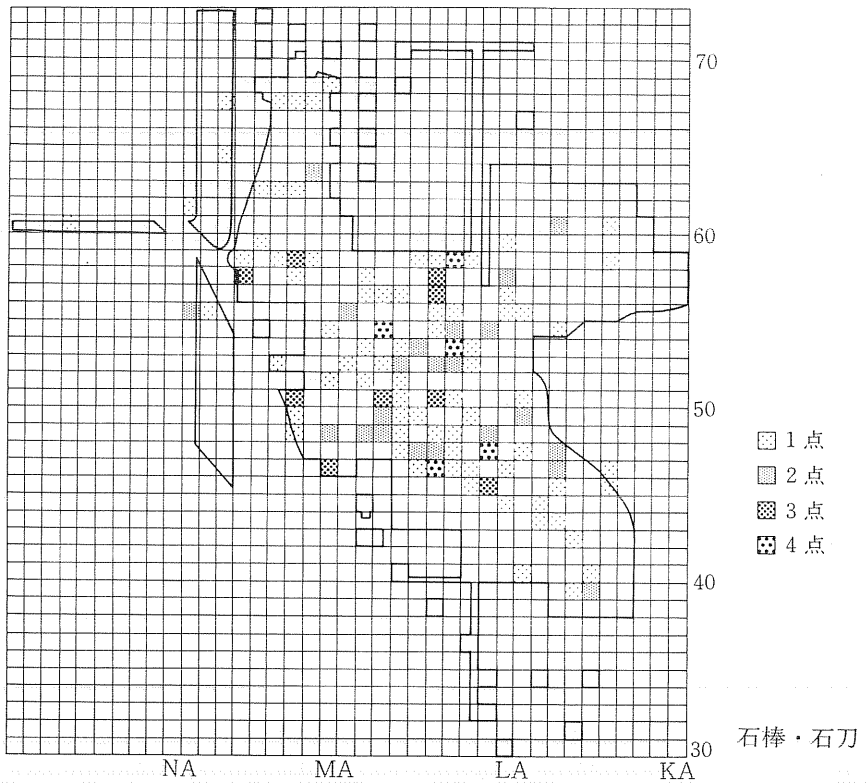
さて、亀ケ岡文化にせよ、またその時空的範疇以外の遺跡にせよ、完形土器を含む多量の遺物の出土状況に対し、その形成要因の解明には幾つかの異なる見解が生まれている。例えば、住居内の出土状況と、遺跡内他地点でのあり方を分類した小林達雄は、これを土器作りのシーズナリティの問題として把え、縄文人の行動パターンの一つに位置付け、季節性の上に展開させることによって縄文社会を叙述しようとしている。[註23] また、亀ケ岡遺跡その他の縄文晩期の遺跡を調査した清水潤三は、祭祀行為の結果と考えている。[註24] 聖山遺跡を調査した芹沢長介らは、こうした状況に対して生活の根拠地（集落）から無用になったものを搬入し、集中的に廃棄したゴミ捨て場と結論し、その廃棄行為に伴なう祭祀行為の存在を想定する。[註25] 九年橋遺跡の調査を担当した藤村東男は、焼土の堆積と遺物廃棄が同時進行したとの観察から、火の使用と結びついた廃棄行為を考えている。[註26]

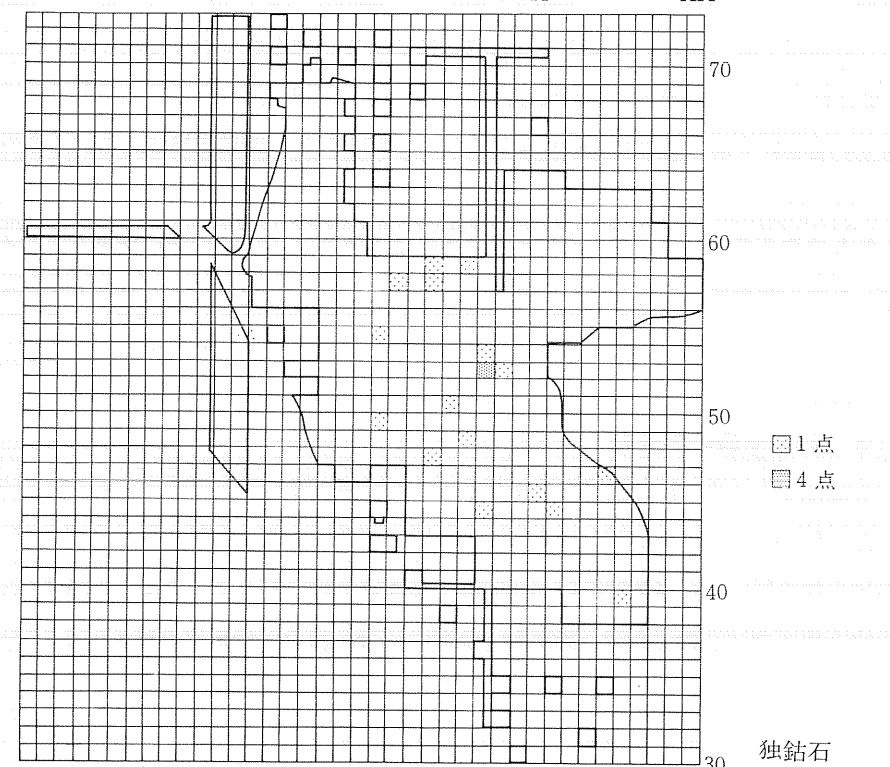
こうして、廃棄行為そのものの動機の解釈は、土器製作という生産的側面から解釈を加えるものと、祭祀という思惟的、精神的側面から解釈を加える立場と二様に分かれている。また、廃棄行為の結果としての廃棄場所（捨て場）の形成や遺物出土状態の認識を、社会規範—文化の問題として把え、廃棄行為とその形態や内容から縄文時代の歴史像にせまろうとする主張もある。[註27]

これら捨て場の形成要因に関する諸説を踏まえて平鹿遺跡における捨て場のあり方を見ると平鹿遺跡の場合は土壙墓、土器棺墓群という人間の墓地と同一の場所に遺物の捨て場が形成されているという点に着目しなければなるまい。すなわち、平鹿遺跡は、個々の人間にせよ、あるいは人間が日常生活において製作、使用したところの様々な道具類にせよ、すでに生命を失ったものや不要になったものの集積地であると見るべきで、その中に構築された石囲炉と配石が、それらに対する祭祀行為の所産であるならば、人間の埋葬儀礼も諸遺物の廃棄行為も同一の観念の下に行われ、一脈通じるものがあったと考える鈴木克彦の論[註28]は正鵠を得たものであると言えよう。

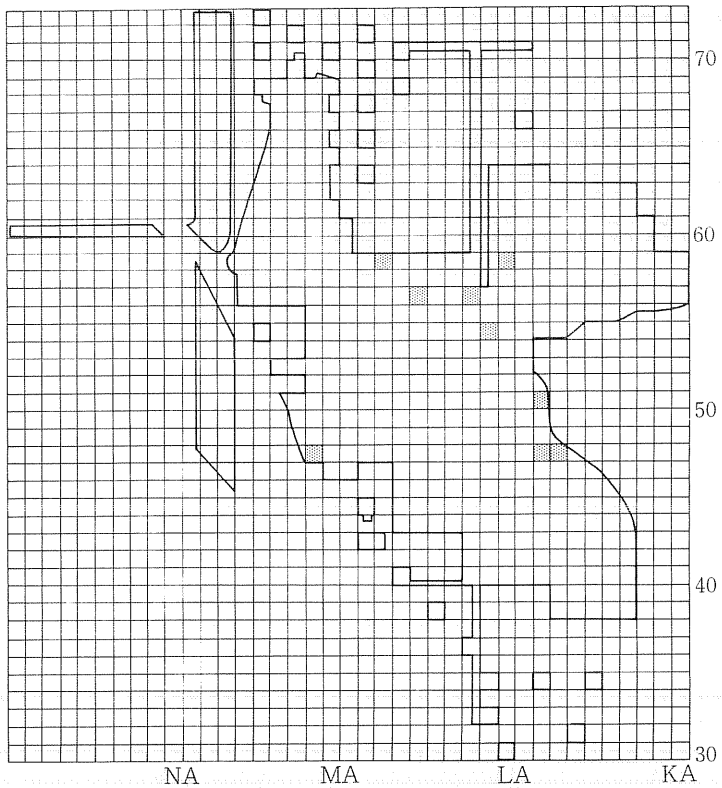
3　石器その他の分布

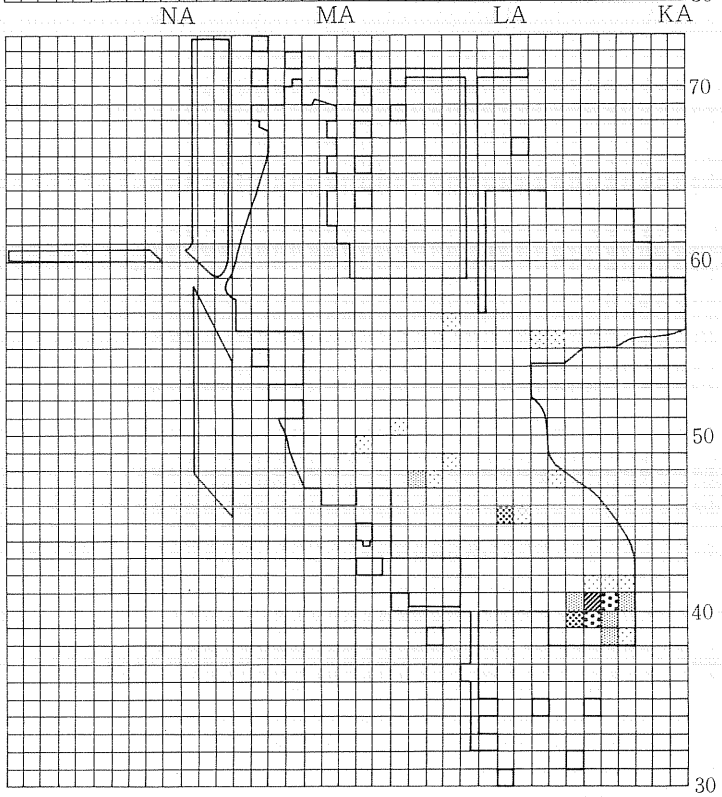
石器はごく一部を取り上げて実測図を示したに過ぎないが、このうち非生産用具である石棒石刀、独鈷石、石鋸状石冠に加え、装飾品類、土偶、土版、岩版を取り上げ、各グリッドごとの出土数を図示した（第203図～第205図）。装飾品類は完形品を1点とし、他は破片であっても1点と数えた。石棒・石刀、独鈷石、土偶には特定地点への集中は見られず、中央部捨て場を中心として広く拡散する状況を呈しているが、装飾品類はやはりSX009捨て場に集中する。石鋸状石冠と、土状・岩版はほぼ共通した分布状態にあり、遺構との関連を見るならば、やや乱暴ではあるが配石の分布と一致する傾向が読み取れる。



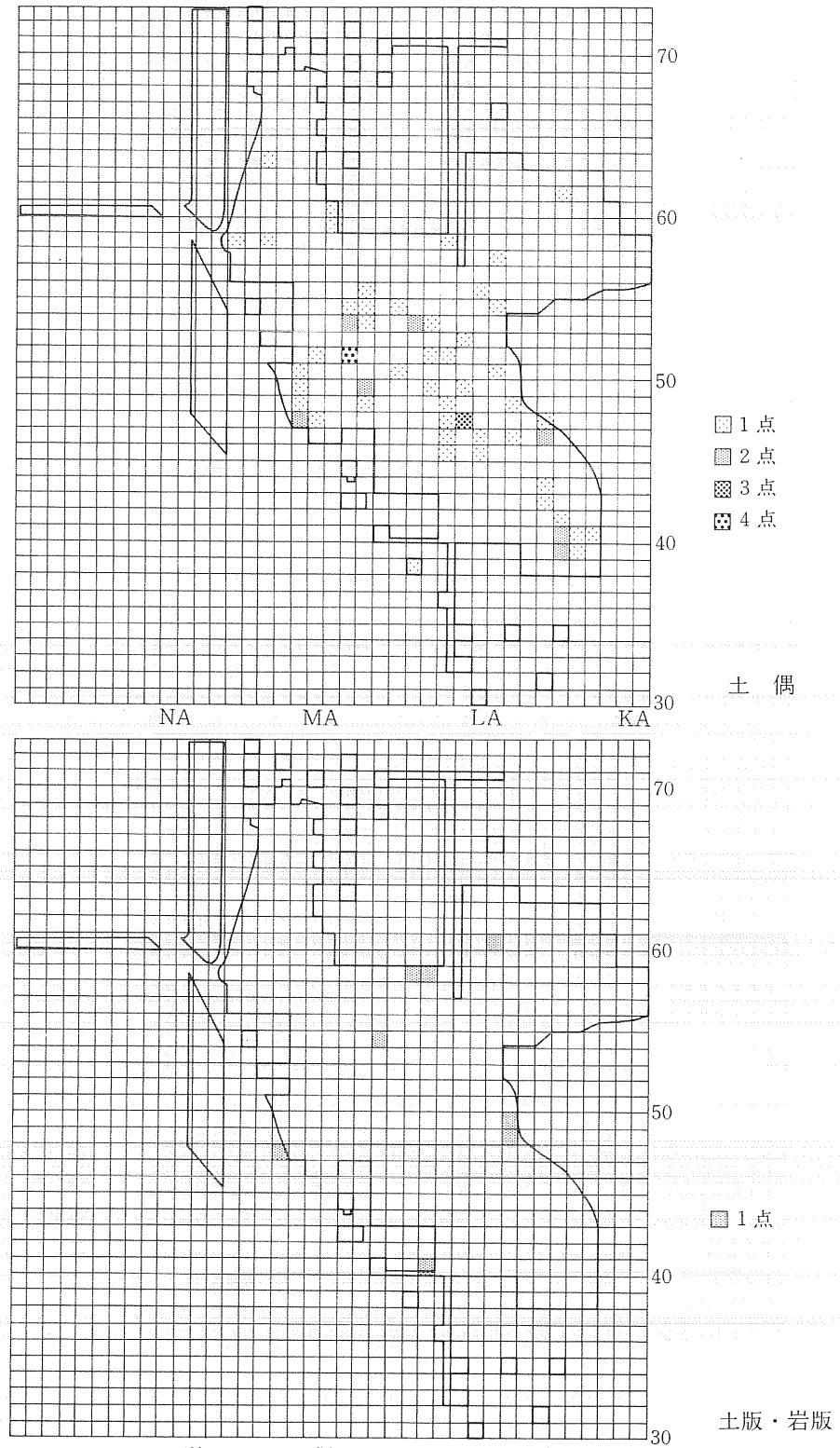


第203図　石棒・石刀・独鈷石の分布状態





第204図　石鋸状石冠・装飾品の分布状態



第205図 土偶・土版・岩版の分布状態

特徴ある石器の一つに鍬状の打製石斧がある。量的には磨製石斧よりも圧倒的に多く、その形態は土掘り具としての機能を想起させる。これをもって直ちに農耕用具とすることはできないが、亀ヶ岡遺跡その他の晩期遺跡における栽培植物花粉の検出は[註29]、この石器の機能を考える上で、大いに参考とすべきと考える。

4　弥生土器について

弥生土器のうち、ＳＫ077出土土器は一括出土である点で好資料と言える。第174図1の浅鉢は砂沢式、第175図24の蓋は宮城県青木畑出土土器に類例があり、その他の変形工字文のある土器も青木畑出土土器に近い様相を示すという[註30]。青木畑(式)[註31]土器は北上川流域の大洞A'式土器直後に位置付けられ、山王Ⅲ層式の前段階、大泉式の初期として報告されている[註32]。山王Ⅲ層式には磨消縄文のある変形工字文の施された土器が伴うが[註33]、青木畑出土土器の中には極めて少ない。平鹿遺跡ＳＫ077出土土器は小破片が多く、量的にも少ないが、磨消縄文の施された土器は1点も含まれない。秋田県内出土例と比較すると、形態的にも文様からも、新間遺跡Ａ類土器[註34]に最も近い土器と考えられ、この後に手取清水遺跡4～6類[註35]と上の台遺跡Ⅰ群Ａ類[註36]が編年されよう。

5　平安時代遺構、遺物の年代

平鹿遺跡において検出された平安時代遺構中の覆土には、上方に火山灰層の堆積が見られる。分析結果によれば、宮城県一帯に広く分布する灰白色火山灰と同一であるという。この灰白色火山灰の降下年代は10世紀前半ごろの年代が与えられており[註37]、平鹿遺跡の平安時代遺構、遺物はこれよりも遡及する年代が考えられる。

第2節　結　　語

以上で、平鹿遺跡で検出された各種の遺構と厖大な量の出土遺物に対し、極めて限定された時間内でなされた皮相的観察結果の集約を終えることとする。

すでに秋田県内においては、矢石館[註38]、柏子所[註39]、玉内[註40]、湯出野[註41]、梨ノ木塚[註42]、上新城中学校[註43]、藤株[註44]という縄文時代晩期の墓跡が調査されており、それらの成果を踏まえた上での縄文社会の解明を今後の課題としたい。

土壙墓・土器棺墓が共存する墓制は弥生時代にも連綿として継続している。土器棺墓は桝形式期以前の再葬墓研究の陰に隠れ、等閑に付されてきた傾向があるが、福島県天神原遺跡の研究報告にはその研究成果が余す所なく披瀝されている[註45]。天神原遺跡は桜井式と伊勢林前式期との間に挿入される遺跡で、成人用土坑墓・幼児用土器棺墓の共存する様態は、湯出野・梨ノ木塚・平鹿の諸例と極めて良く近似する姿相を呈している。

関東・東北南部の弥生初頭の再葬墓は縄文時代からの伝統の下に盛行した成人墓であるが、同時期の幼児墓は不明である。だが天神原式期の墓制が縄文時代の伝統的墓制であることが確実ならば、再葬墓盛行期にも単独の土器棺墓が存在した可能性はないとは言えない。

平鹿遺跡が縄文時代晩期に盛行していた頃、近畿付近までは既に弥生文化が展開していたとする見解は多い(註46)。九州の一角では、大陸の照葉樹林帯の中に淵源を発する稲作農耕が照葉樹林文化の道(註47)を通って伝来し、かなりの規模に組織化された形で営まれていることが知られている(註48)。平鹿遺跡の縄文人も、そうした時代の動きを鋭敏に感じとり、新たなる編成へ向けて解体したのかも知れない。

註１　山内清男「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』　第１巻第３号　1930年

註２　渡辺　誠「亀ケ岡文化における埋葬形態をめぐる二三の問題」『北奥古代文代』　第２号　1969年

註３　林　謙作「縄文期の葬制　第Ⅱ部　遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』　第63巻第３号　1977年

註４　大和久震平『柏子所貝塚第２次・第３次発掘調査報告書』　秋田県教育委員会・能代市教育委員会　1966年

註５　畠山憲司『湯出野遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1978年

註６ａ木下　忠「所口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル』　No.42　1970年

ｂ木下　忠『埋甕――古代の出産習俗』　考古学選書　18　1981年

註７　山本暉久「縄文時代中期末、後期初頭期の屋外埋甕について㈠」『信濃』　第29巻第11号　1977年

註８　渡辺　誠「縄文時代の甕棺」『考古学ジャーナル』　No.208　1982年

註９　長谷部言人「石器時代の死産児甕葬」『人類学雑誌』　第42巻第８号　1927年

註10　小井川和夫『前浜貝塚』　本吉町教育委員会　1979年

註11　小金井良精「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』　第38巻第１号　1921年

註12　平野仁啓『日本の神々』　講談社現代新書　664　1982年

註13　註４に同じ。

註14　註５に同じ。

註15　江坂輝弥「縄文土器文化後期における改葬甕棺墓の研究」『北奥古代文化』　第６号　1968年

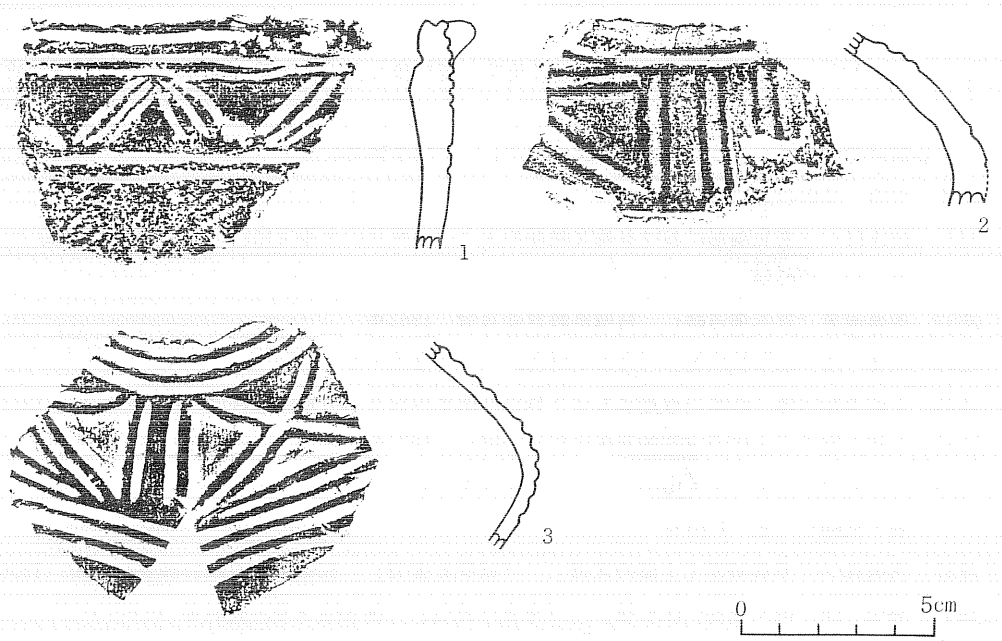
註16　杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』　明治大学文学部考古学研究報告　第４冊　1974年

註17　須藤　隆「東日本における弥生時代初頭の墓制について」『文化』　第43巻第１・２号　1979年

註18　註８に同じ。
註19　高橋忠彦『藤株遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1981年
註20　片沢長介『聖山』　東北大学考古学研究会考古学資料　別冊２　1979年
註21　春日信興『右エ門次郎窪遺跡・三合山遺跡・石ノ窪遺跡発掘調査報告書』　青森県教育委員会　1982年
註22　藤村東男『九年橋遺跡第３次発掘調査報告書』　北上市教育委員会　1977年
註23ａ小林達雄「縄文社会復原へのアプローチ」『季刊どるめん』　第８号　1976年
ｂ小林達雄編『日本原始美術大系　１　縄文土器』　1977年
ｃ小林達雄編『日本の美術』　No.145　1978年
註24ａ清水潤三『亀ケ岡遺蹟――青森県亀ケ岡低湿地遺蹟の研究――』　考古学・民族学叢刊第三冊　三田史学会　1959年
ｂ清水潤三『是川遺跡』　中央公論美術出版　美術文化シリーズ　1966年
註25　註20に同じ。
註26　藤村東男『九年橋遺跡第５次発掘調査報告書』　北上市教育委員会　1979年
註27　鈴木克彦「廃棄論の再構成と課題――亀ケ岡パターンの認識から――」『考古学ジャーナル』No.142　1977年
註28　註27に同じ。
註29ａ市原寿文他「縄文後期・晩期の低地性遺跡と環境復元」『考古学・美術史の自然科学的研究』古文化財編集委員会編　1980年
ｂ那須孝悌「縄文人は栽培ソバを食べた？」　『科学朝日』　第41巻６号　1981年
註30　須藤　隆氏の御教示による。
註31　佐藤信行「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化(下)」『考古風土記』第６号　1981年
註32　加藤道男『青木畑遺跡』　宮城県教育委員会　1982年
註33　須藤　隆「土器組成論」『考古学研究』　第19巻第４号　1973年
註34　小武海松四郎『籾痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について』　1977年
註35　大和久震平『手取清水遺跡発掘調査報告書』　1974年
註36　畠山憲司・小玉　準「由利町上の台遺跡採集の弥生式土器」『本荘市史研究』　第１号　本荘市史編さん室　1981年
註37　白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」　『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所　1980年
註38　奥山　潤「縄文晩期の組石棺」　『考古学雑誌』　第40巻２号　1954年
註39　註４に同じ
註40　阿部義平「配石墓の成立」　『考古学雑誌』　第54巻１号　1968年
註41　註５に同じ
註42　畠山憲司『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1979年
註43　菅原俊行『上新城中学校遺跡』　秋田市産業部・秋田市教育委員会　1980年
註44　註19に同じ
註45　馬目順一『楢葉天神原弥生遺蹟の研究Ⅰ・Ⅱ』　楢葉町教育委員会　1982年

註46ａ坪井清足「縄文文化論」『岩波講座日本歴史　原始および古代１』　1962年
ｂ坪井清足「縄文時代晩期の北陸と近畿」『日本海地域の歴史と文化』　日本海史編纂事務局　1979年
ｃ坪井清足「縄文文化雑感」『森貞二郎博士古稀記念古文化論集』　上巻　1982年
ｄ林　謙作「縄文晩期という時代」『縄文土器大成　４　晩期』　1981年
註47　佐々木高明『照葉樹林文化の道』　1982年
註48ａ中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」『歴史公論』　第８巻第１号　1982年
ｂ中島直幸「初期稲作期の凸帯文土器――唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心に――」『森貞二郎博士古稀記念論集』　上巻　1982年
ｃ中島直幸「縄文晩期後半の水田跡」『季刊考古学』　創刊号　1982年

本報告書脱稿後、以下の土器３片が橿原式及びそれに類する土器である旨、北海道大学林謙作氏、東北歴史資料館藤沼邦彦氏より御教示を受けた。出土地点は１、ＬＧ52、２、ＬＤ51、３、ＬＥ54で１・２が大洞C_2・Ａ式と、３が大洞Ａ式とそれぞれ伴出した。



別編Ⅰ　秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析

東北大学農学部

庄子貞雄
山田一郎

1　分析方法

一次鉱物組成分析用の試料は、火山灰全体の場合はそのまま篩で0.1～0.2㎜部分を採取し、次いでテトラブロムエタン（比重2.96）で重鉱物部分と軽鉱物部分に区分した。軽石部分の分析用試料ははじめに分離した軽石を軽く粉砕した後、火山灰の場合と同じように重鉱物と軽鉱物の二つの部分に分けた。各部分の鉱物組成は、それぞれ200～300粒検鏡し、その結果を粒数%でしめした。

火山ガラスの形態はスポンジ状、繊維状、扁平状、顆粒状の4種に区分した。スポンジ状は無色で鋭角な多数の突起をもつガラスであり、内部に小気胞の多いものから少ないものまで含めた。繊維状ガラスは無色であたかも繊維が束状になったようにみえるものである。扁平状ガラスは無色で扁平であり、スポンジ状や繊維状ガラスより厚みがある。顆粒状ガラスは茶褐色から黒褐色であり、多数の微晶を有する角塊状のガラスである。

火山灰中の磁鉄鉱の特定の化学成分を定量することにより、火山灰の岩質判定や噴出源の同定が有効であることが、庄子ら[1),2)]により明らかにされているので、これを供試火山灰にも適用した。磁鉄鉱の化学分析用の試料は、火山灰全体の場合はそのまま、分離された軽石は乳鉢で十分粉砕した後、磁石で磁鉄鉱を分離した。さらに不純物を除くため、メノウ乳鉢で磨砕した磁鉄鉱を水の入ったビーカーに入れ、マグネティクスターラーで回転しながら浮遊物を除去した。この操作を浮遊物がなくなるまでくり返した。次にこの磁鉄鉱を分解し、Fe、Ti、Zn、Vを定量した。

2　分析結果

1）一次鉱物組成（表1）

はりま館遺跡のNo.2（MB75—MD75、第1層）は本質物である軽石が大部分である。一方同遺跡のNo.7（MB75—MD75、第6層）は類質物である多量の岩片を含んでいる。このため、No.7は試料全体の分析と、試料より分離した軽石部分とに分けて分析した。大岱ⅡのNo.9（T

W45、ＯＰⅡNo.－11、第２層）案内Ｖ（１ＡＮＶ、ＳＸ08、第４層）および払田柵のNo.21（ＤＨＴＨ、第49次ＫＤ37）の各試料も、同様に火山灰全体と、軽石部分に分けて分析した。平鹿遺跡のNo.22（８ＨＫ、ＤＯ２）は細粒な火山灰であったので、全体部分のみを分析した。

はりま館遺跡のNo.２の重鉱物部分は全体の４％と少なく、その組成はシソ輝石と磁鉄鉱と少量の普通輝石から成る。軽鉱物組成は無色火山ガラスが圧倒的に多く、その形態は大部分がスポンジ状である。軽鉱物中には少量の斜長石が含まれている。同遺跡のNo.７の軽石部分は、重鉱物含量ともNo.２とまったく同様の鉱物組成をしめす。これに対し、同遺跡のNo.７の全体部分は、重鉱物中に少量の角閃石が含まれている。また軽鉱物組成は斜長石が26％と軽石部分より多く、火山ガラスも顆粒状のものが大部分である。

大岱Ⅱ、案内Ｖ、払田柵の各遺跡の各試料の全体部分の一次鉱物組成は、はりま館遺跡のNo.７の全体部分と同様の結果である。そして、これらの遺跡の各試料より分離した軽石部の一次鉱物組成も、はりま館遺跡のNo.２およびNo.７の軽石部と同様の結果である。ただし、案内Ｖ遺跡の全体部分の重鉱物含量が34％と高い値になっているが、これは案内Ｖ遺跡の概要にも記してあるように、火山灰が降下後、移動堆積したためと考えられる。

平鹿遺跡の火山灰は全体部分を分析したにもかかわらず、その一次鉱物組成は、軽石部分とほぼ同様の結果となっている。このことは、同遺跡の火山灰は、大部分本質物から成ることをしめている。

2）　磁鉄鉱の化学組成（表２）

各遺跡の分析試料は、はりま館遺跡の部分にはNo.２とNo.７の全体と軽石部分、大岱Ⅱ遺跡ではNo.９の試料全体と軽石部分、および案内Ｖ遺跡ではNo.17の全体、払田柵跡遺跡ではNo.21の全体、平鹿遺跡ではNo.22の全体である。

Shoji[2)]らは日本各地より採取した新鮮な軽石やスコリア中に含まれる磁鉄鉱の化学分析を行い、磁鉄鉱中のZn/Fe＋Ti値が高い程、火山灰は珪長質であり、逆にV/Fe＋Ti値が高い程火山灰は苦鉄質であることをしめした。

各試料のZn/Fe＋TiおよびV/Fe＋Ti値をShoji[2)]らのV－Znベルト上にプロットすると、払田柵のNo.21以外は全て、火山灰は流紋岩質となる。ただし、これらの試料で平鹿遺跡のものだけはZn/Fe＋Ti値がやや低く、V/Fe＋Ti値がやや高くなっている。磁鉄鉱は湿性条件下では変質しやすい。払田柵遺跡は水田状態の湿性状態にあったため、この遺跡の火山灰中の磁鉄鉱は変質を受けているものとおもわれる。

磁鉄鉱の化学組成からみると、火山灰ははりま館、大岱Ⅱ、案内Ｖの各遺跡のものと平鹿遺跡のものの二つに区分できる。払田柵遺跡の火山灰は、磁鉄鉱が変質を受けているため区分不可能である。

3　考察とまとめ

東北地方とくに青森県、岩手県および宮城県の多くの古代遺跡中に珪長質な灰白色の火山灰が見出されている。井上ら[3]はそれらを十和田－ａ（To—a、大池による名称[4]—青森県の東半部に広く分布する）、秋田焼石軽石（ＡＹＰ、岩手県中央部に分布）、胆沢火山灰（岩手県南部に分布）、灰白色火山灰（宮城県一帯に分布）に区分した。しかしこれらの中で胆沢火山灰と灰白色火山灰は同じ火山灰の可能性が強い。

さて秋田県の遺跡火山灰と井上らの四火山灰との関係は以下の通りである。

はりま館の火山灰

No.２は、磁鉄鉱の化学組成はTo—a（Fe%＝55～60%、Ti%＝10%、ZnおよびV≒1000ppm）ときわめて似ている。しかし、一次鉱物組成はTo—a火山灰（重鉱物含量は５%以下、重鉱物組成はシソ輝石≒50%、普通輝石≒20%、磁鉄鉱≒30%であり、軽鉱物組成は無色火山ガラスが圧倒的でそのうちの半分以上が扁平状ガラスである）とは次の点で異っている。火山ガラスの形態はTo—aは扁平が大部分であるが、No.２はスポンジ状が大部分である。No.２の普通輝石含量はTo—aより少なく、磁鉄鉱含量はTo—aよりも多い。従って、No.２の火山灰はTo—aとは異るものとおもわれる。

同遺跡のNo.６の火山灰は、岩片が多量に含まれること、および火山ガラスは顆粒状のものが多いこと、さらに軽石の火山ガラスはスポンジ状が多いことなどからTo—aとは区別される。

従って、はりま館遺跡のNo.２とNo.６の火山灰はTo—aの噴出直前に十和田カルデラより噴出した大湯軽石とおもわれる。

大岱Ⅱ遺跡と案内Ⅴ遺跡の火山灰

大岱Ⅱ遺跡、案内Ⅴ遺跡の火山灰も、岩片が多量に含まれること、火山ガラスは顆粒状のものが大部分であること、そして軽石中の火山ガラスもスポンジ状が多いことなどからTo—aとは区別され、大湯軽石とおもわれる。

払田柵遺跡の火山灰

払田柵遺跡の火山灰は、腐植がかなり含まれており純粋でないこと、また湿性条件にあったため磁鉄鉱が変質しているとおもわれることなどから、井上らの四火山灰との対比は難しい。従って今後払田柵遺跡の近辺の丘陵地の遺跡または土壌中の新鮮な火山灰を用い分析する必要がある。

平鹿遺跡の火山灰

平鹿遺跡の火山灰は宮城県一帯に認められる灰白色火山灰（重鉱物含量は５%以下、重鉱物組成はシソ輝石≒60%、普通輝石≒20%、磁鉄鉱≒20%、軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的で、その形態は大部分がスポンジ状である。磁鉄鉱の化学組成は、Fe＝55～60%、Ti＝10%、Zn＝

1000ppm、V≒2000ppm）と一次鉱物組成、磁鉄鉱の化学組成ともきわめて類似しており、灰白火山灰と同一の火山灰と思われる。なお灰白色火山灰の年代は、10世紀前半と推定されている[5]。

引用文献

1）庄子貞雄、小林進介、増井淳一（1974）「火山灰中の強磁性鉱物の化学組成と噴出源との関係について」『岩鉱誌』　69　pp.110～120

2）Shoji S.、Kobayashi S.、Yamada I.、and Masui J.（1975）Relationships between the Geochemistory and Ferromognetic Component and the Chemical Properties of Air-born Pyroclastic Materials, J. Japan. Asscc. Min. Petr. Eco. Gecl.,　70　pp.12～24

3）井上克弘、山田一郎（1982）「東北地方における奈良～平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて」『岩手県文化財調査報告書』　第72集　pp.442～450

4）大池昭二（1972）「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』　11　pp.228～235

5）白鳥良一（1980）「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所紀要』　7　pp.1～38

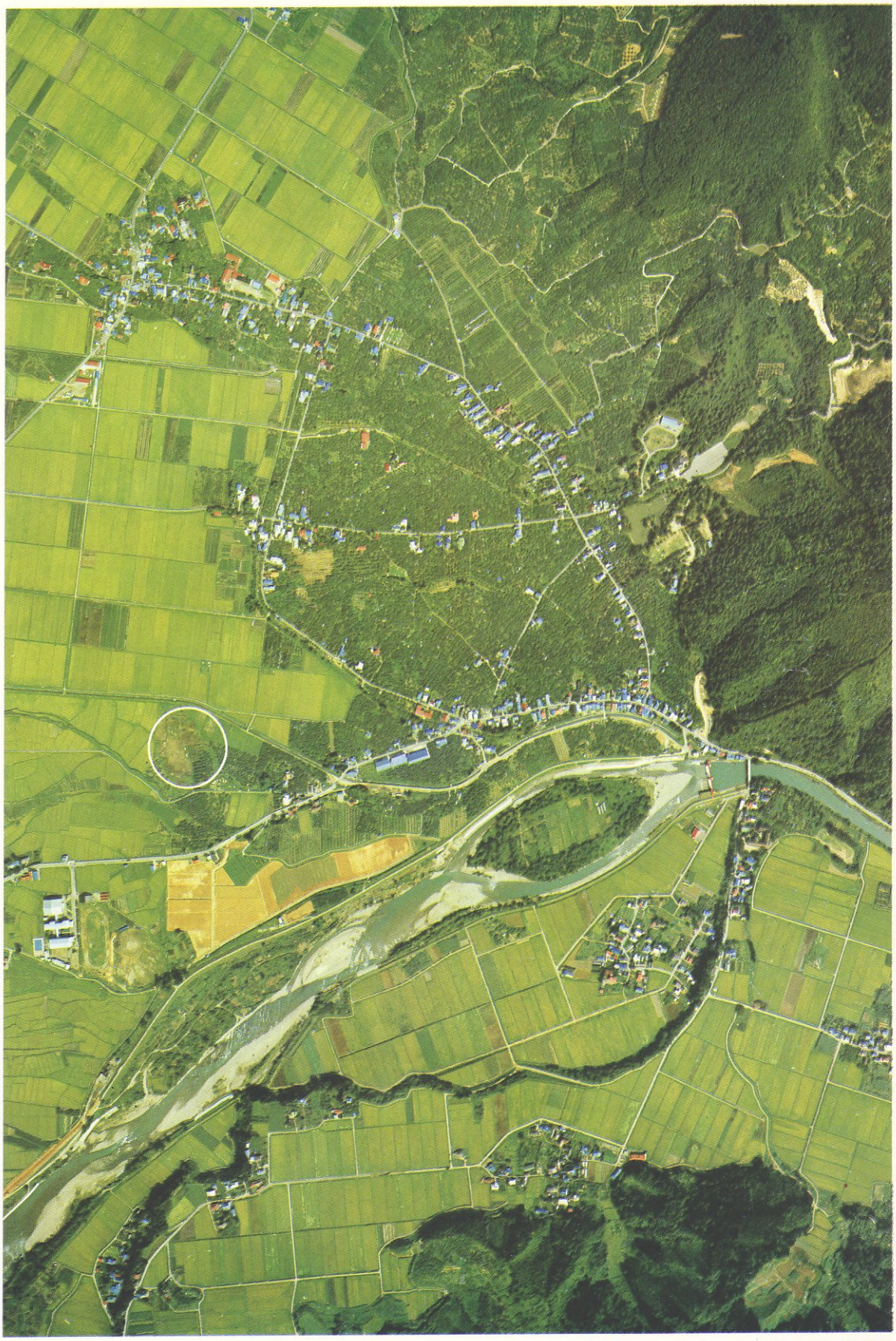
表1　一次鉱物組成（粒数 %）

遺跡名および試料名	重鉱物組成				軽鉱物組成				斜長石	石英	重鉱物含量（重量%）
	シソ輝石	普通輝石	普通角閃石	磁鉄鉱	火山ガラス（形態別）						
					スポンジ	繊維	扁平	顆粒			
はりま館											
No.2　MB75—MD75第1層	46	4		50	82	10	1	2	4		4
No.7　MB75—MD75第6層	37	9	3	52	3	17	6	66	26		9
No.7　同上　軽石	43	2		55	78	11	1	1	9		6
大岱 II											
No.9　TW45、ODII No.11第2層	36	9	17	55		3	3	70	24	1	10
No.9　同上　軽石	46	7	17	46	76	8	17	17	16		6
案内 V											
No.17　1ANV SX08第4層	30	7	17	63	13	1	6	64	15	1	34
No.17　同上　軽石	43	3		55	91	4	1		4		3
払田柵											
No.21　DHTH第49次KD37	57	15	17	27	2	1	7	60	28	1	10
No.21　同上　軽石	52	11	1	36	77	3		16	2	1	1
平鹿											
No.22　8HK SK(I)002	48	18	17	33	54	6	7	18	14	17	4

表2　磁鉄鉱の化学組成

遺跡名および試料名	Fe %	Ti %	Zn ppm	V ppm	(×10⁻⁴) Zn/Fe+Ti	(×10⁻³) V/Fe+Ti
はりま館						
No.2　MB75～MD75　第1層	56.58	9.90	1094	1050	16.5	1.6
No.7　MB75～MD75　第6層	65.70	7.41	1408	1294	19.36	1.87
No.7　同　上　軽石	59.62	10.00	1272	1215	18.3	1.8
大岱 II						
No.9　TW45　ODIINo.11　第2層	59.72	6.96	1274	1281	19.1	1.92
No.9　同　上　軽石	59.03	10.10	1320	1203	19.1	1.7
案内 V						
No.17　1ANV　SX08　第4層	59.73	7.86	1196	1102	17.7	1.6
払田柵						
No.21　DHTH　第49次KD37	52.15	14.41	782	1248	11.8	1.9
平鹿						
No.22　8HK　SK(I)002	57.23	10.67	1015	2009	15.0	3.0

図　　版



空から見た平鹿遺跡　　高度2,130ｍより　1982年９月16日撮影

1　南東方向から見た平鹿遺跡

2　西方真人山頂より見た平鹿遺跡

1　ＳＫ030～037・073・075土壙

2　ＳＫ030～037・073・075土壙

1　ＳＲ001土器棺

2　ＳＲ019土器棺

1　ＳＮ025石囲炉

2　ＳＱ001配石

1　ＳＮ024石囲炉　ＳＱ006配石

2　ＳＱ014配石

1　ＳＸ006大洞Ａ式土器一括出土状態

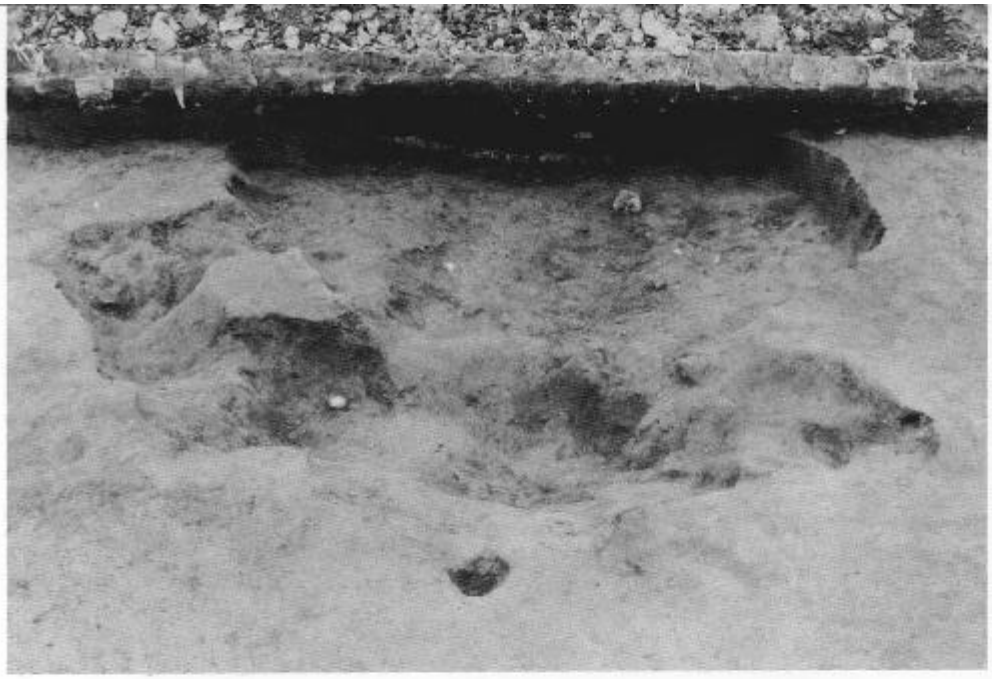
2　第Ⅳ層の遺物出土状態

1　石製小玉出土状態

2　装身具類

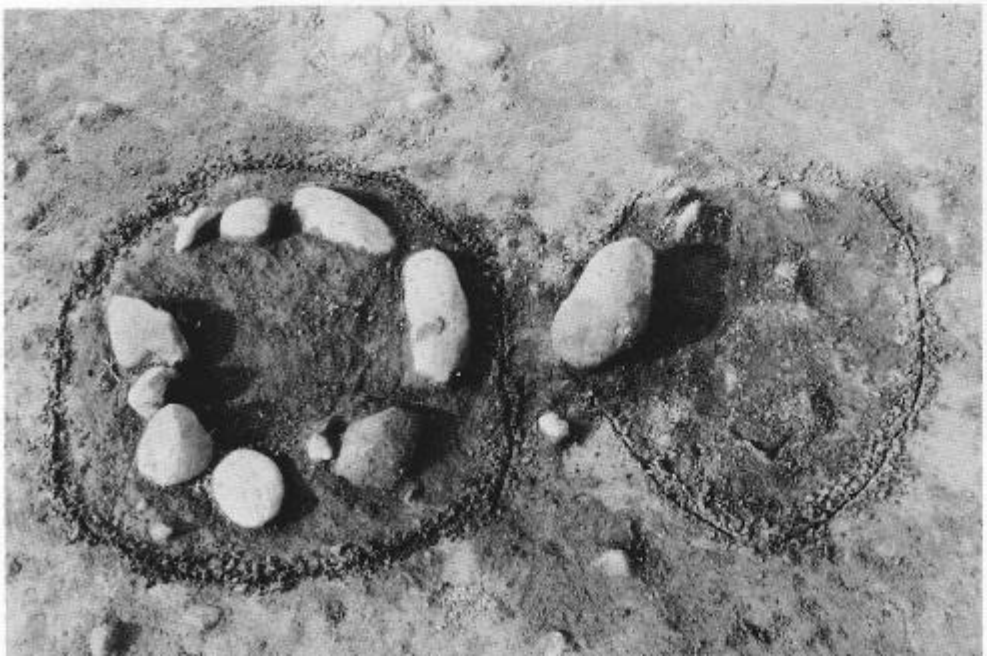
1　土壙群

2　配石を伴なう土壙群

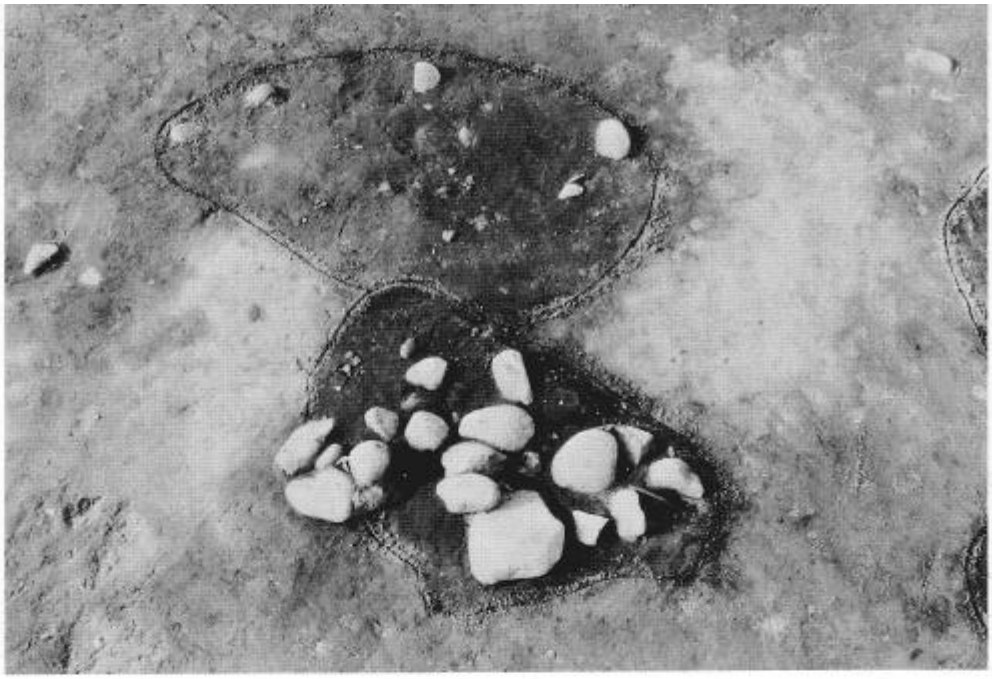


1　SK013・019土壙

2　SK024 土壙

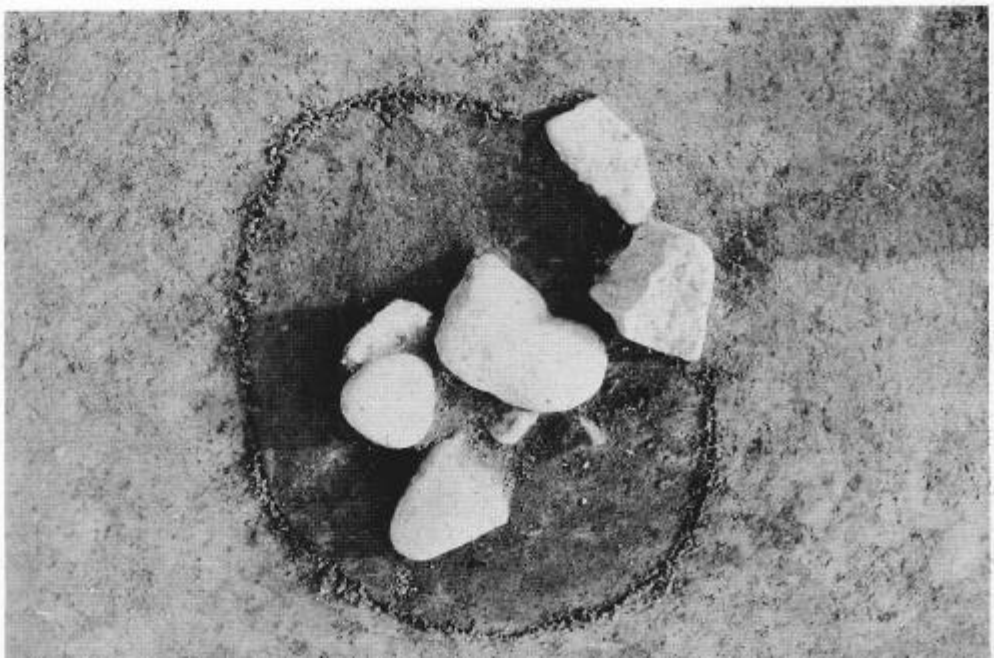


3　SK026 土壙
SN048 石囲炉



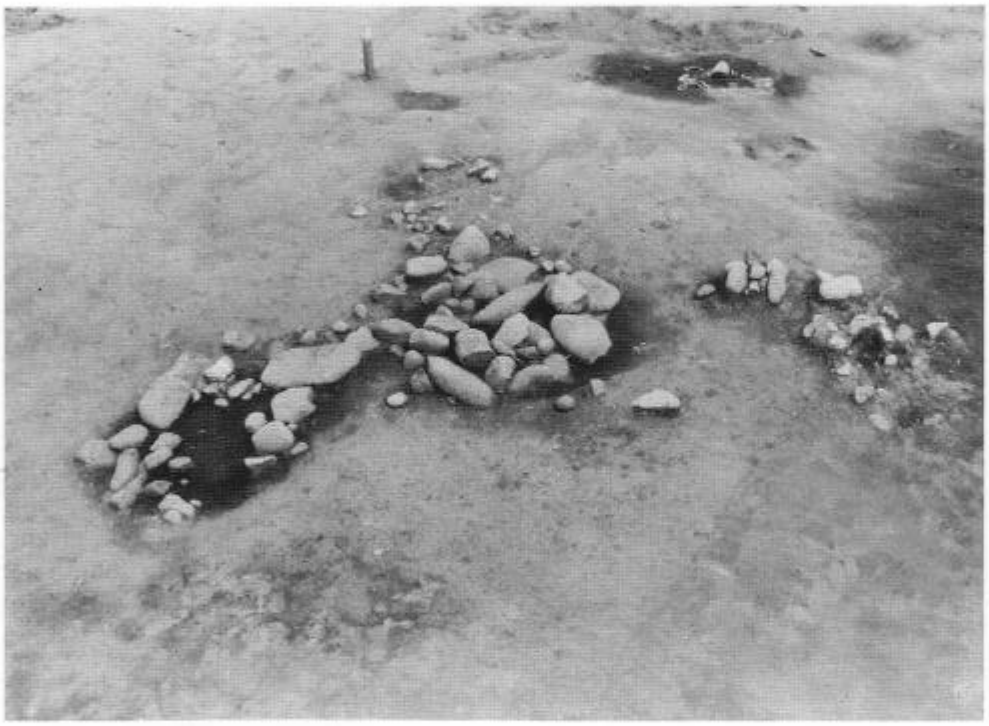
1　ＳＫ027・028土壙

2　ＳＫ027土壙

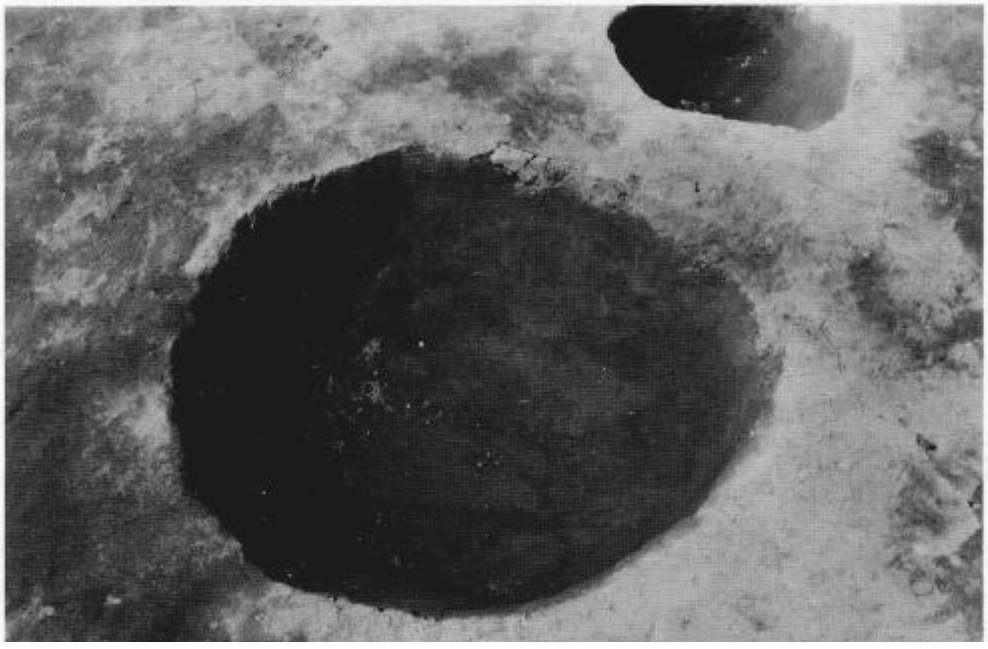


3　ＳＫ029土壙

1　ＳＫ030土壙



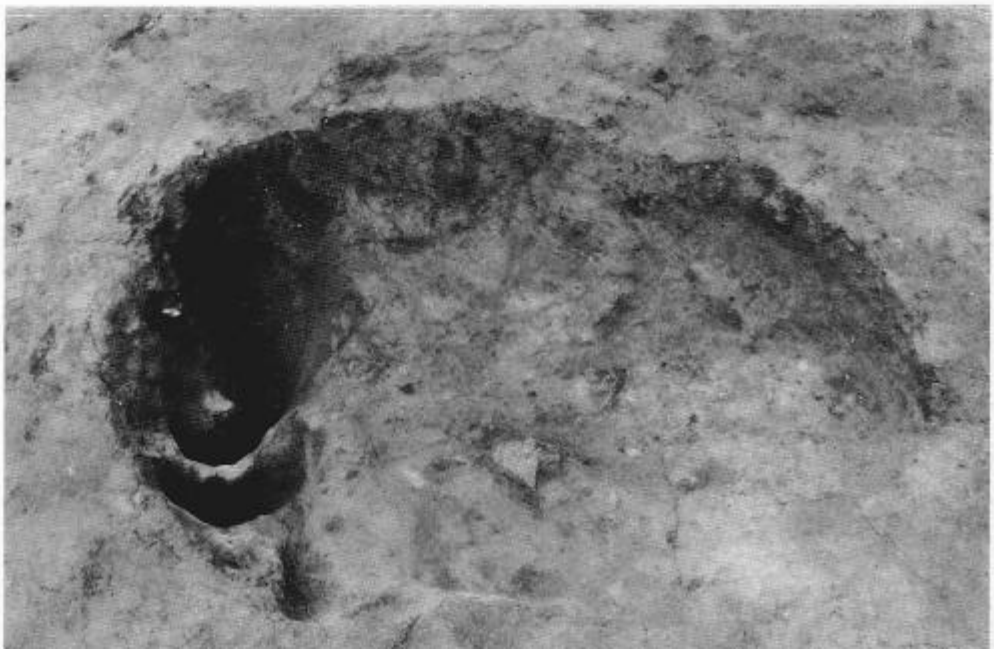
2　ＳＫ038～041土壙



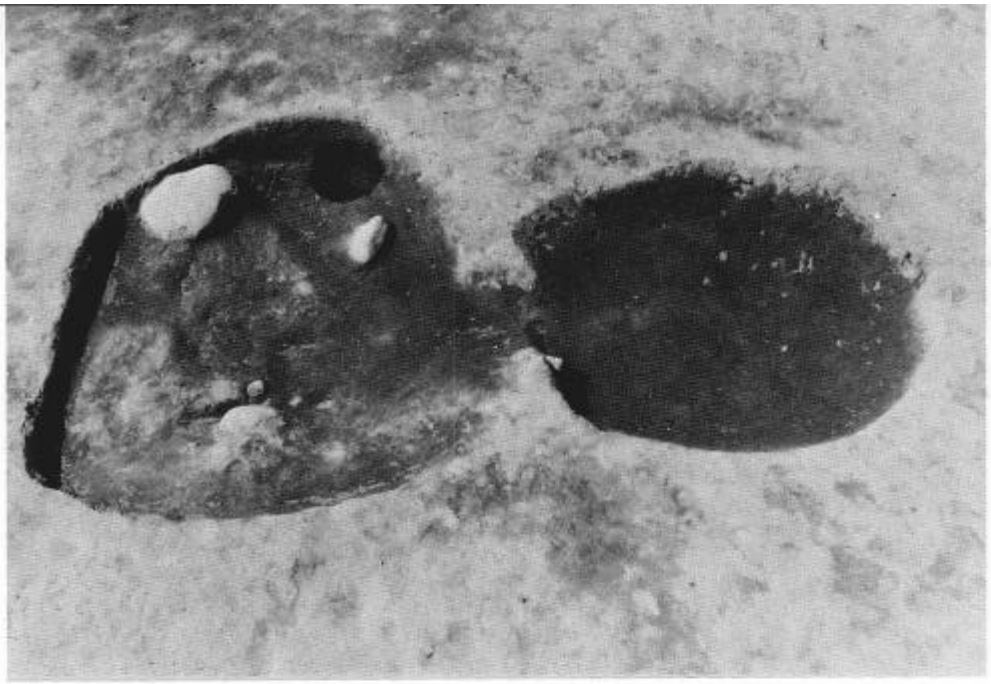
3　ＳＫ050土壙

1　ＳＫ051土壙

2　ＳＫ053土壙

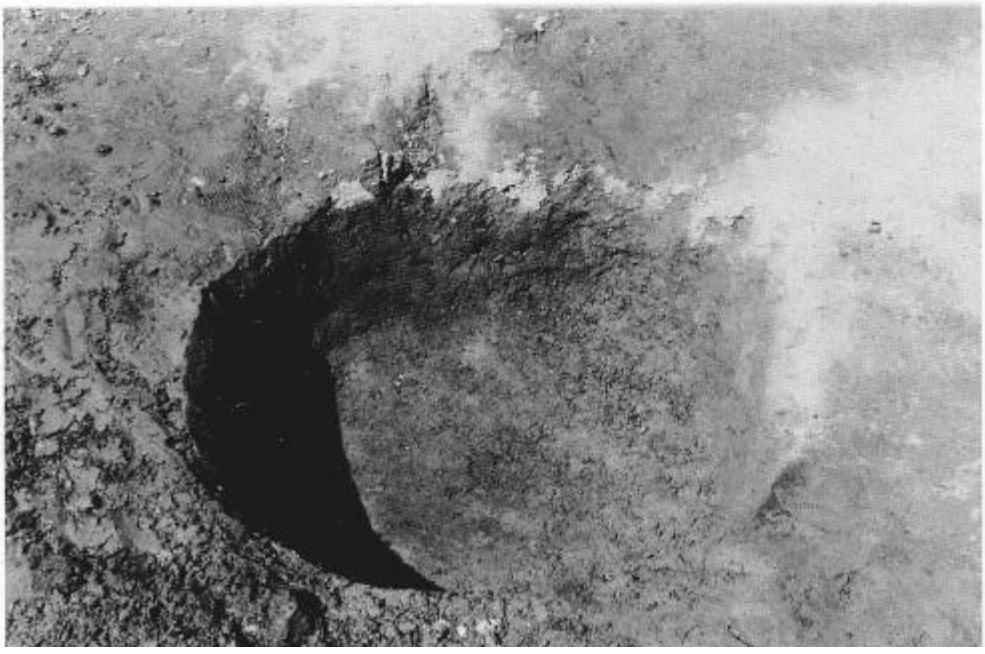


3　ＳＫ057土壙



1　S K058・059土壙

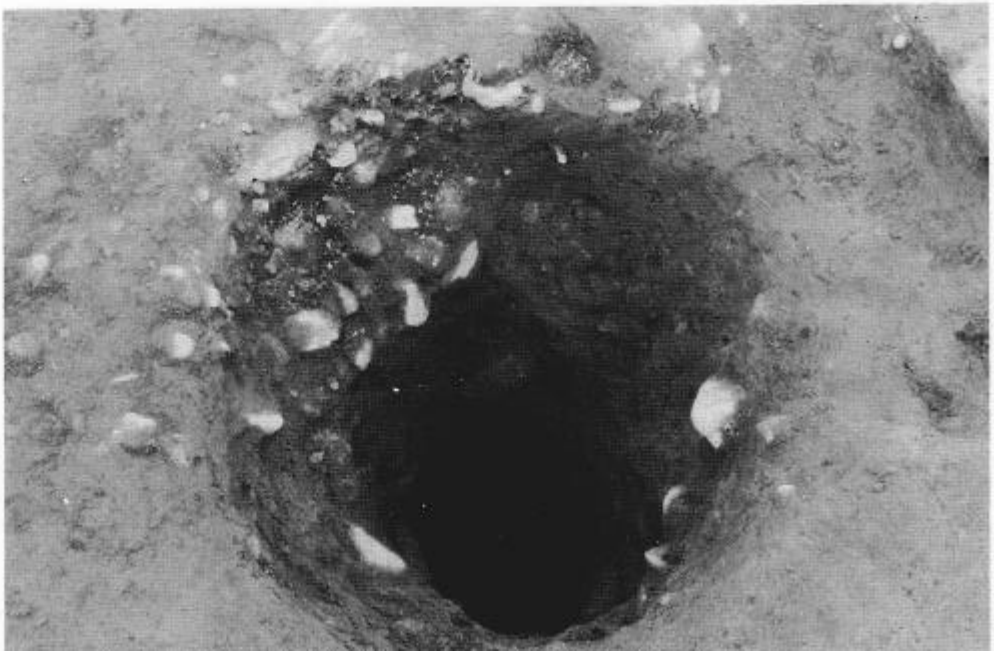
2　S K062土壙



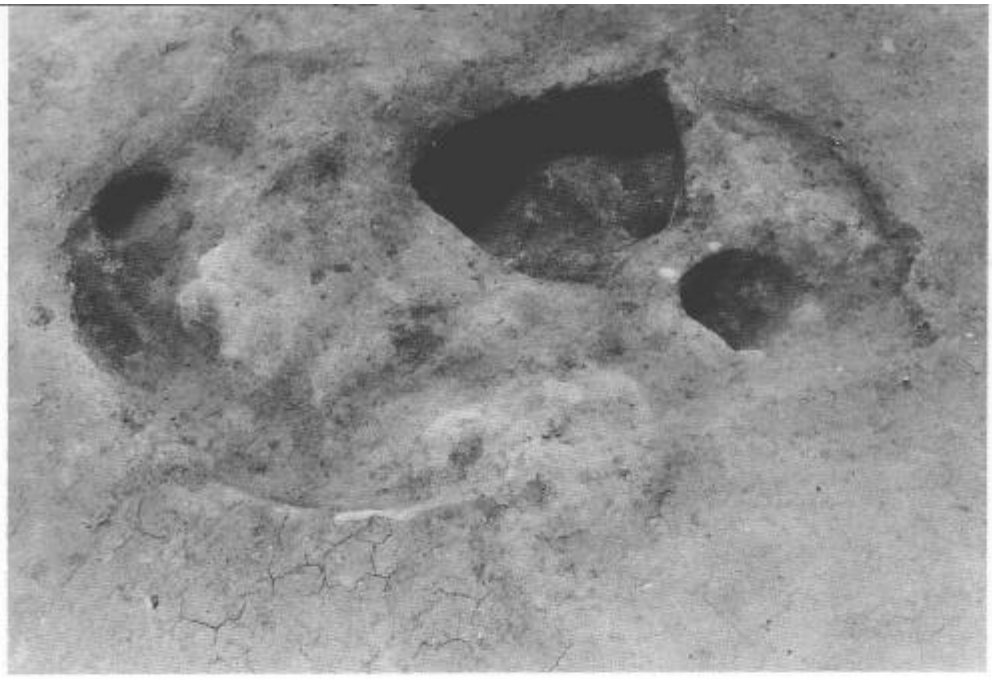
3　S K063土壙

1　S K071土壙

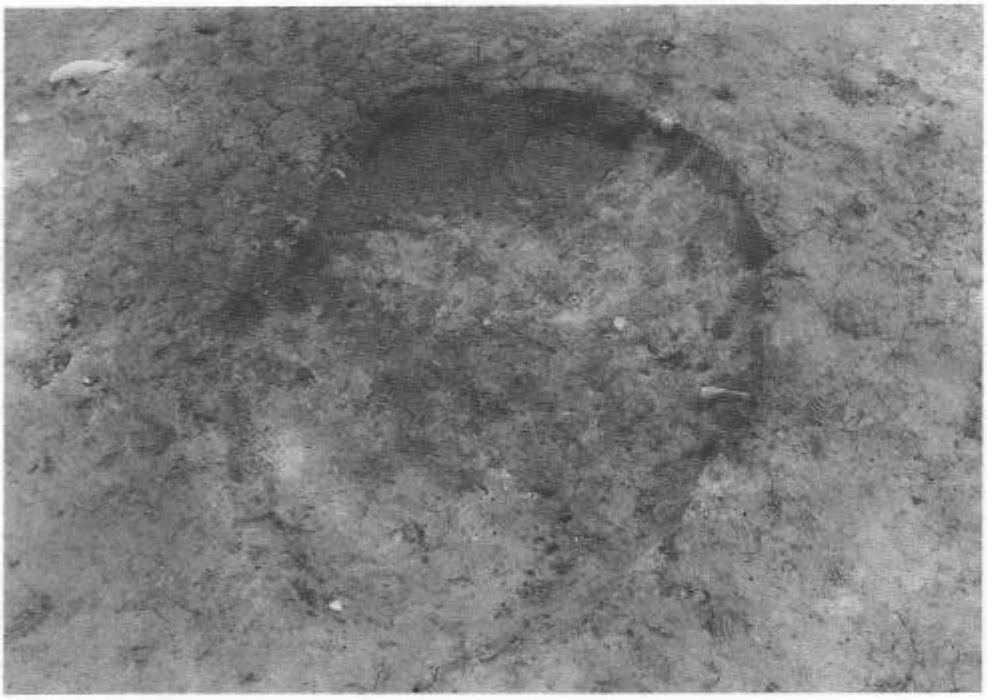
2　S K076土壙



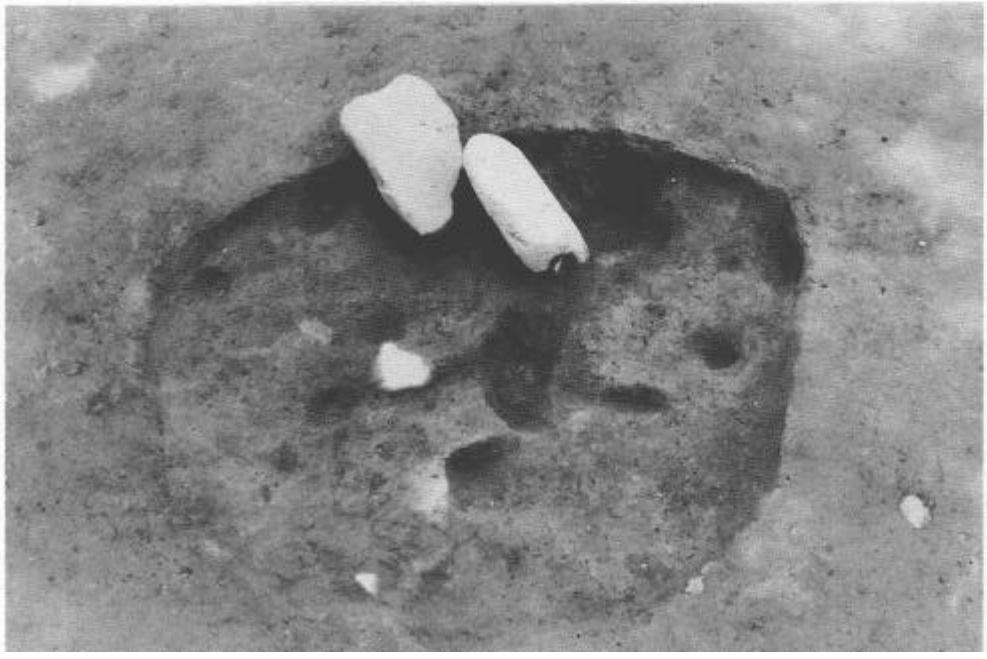
3　S K076土壙



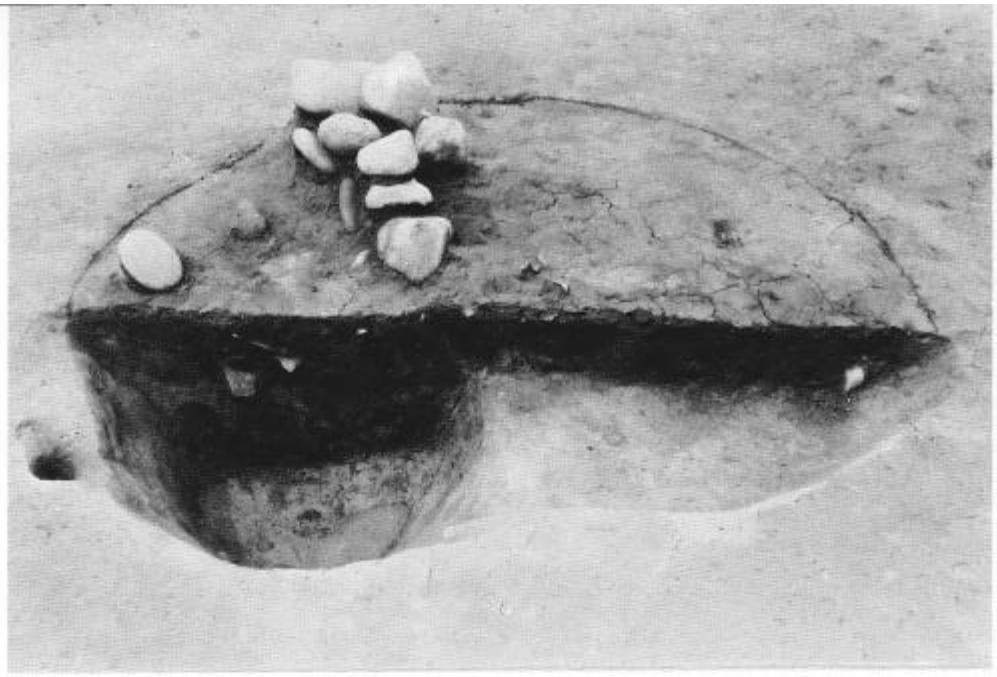
1　ＳＫ079土壙



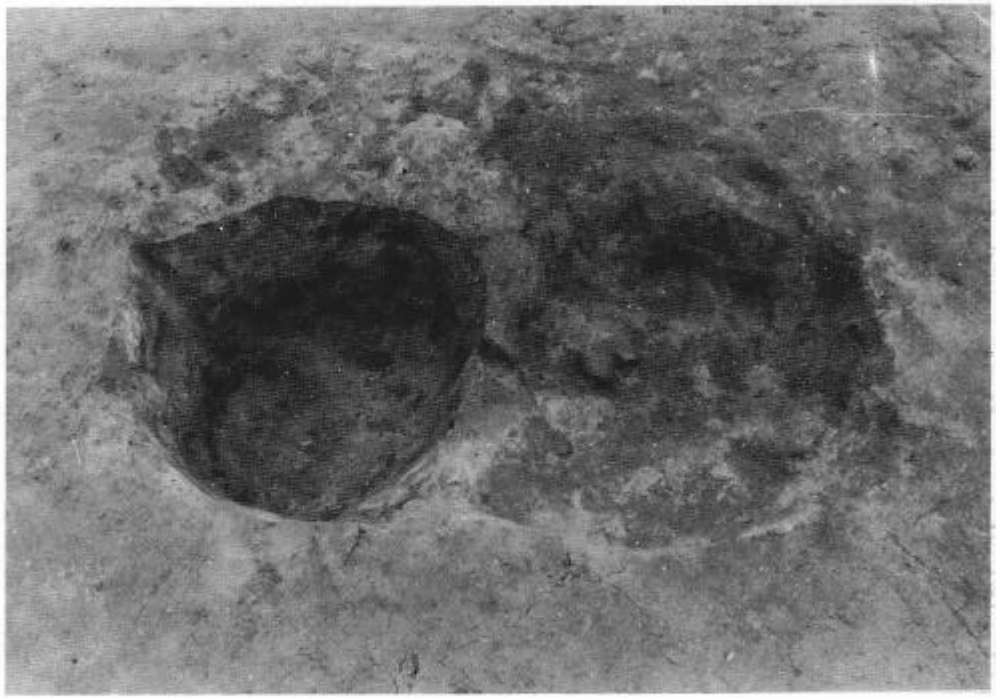
2　ＳＫ080土壙



3　ＳＫ081土壙

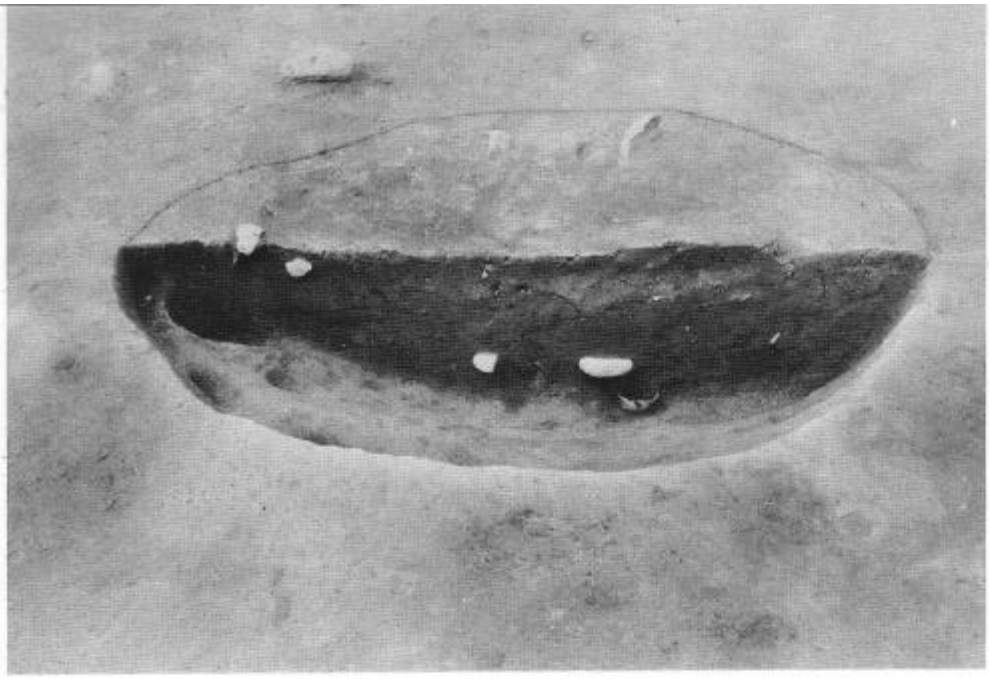


1　S K084・085土壙

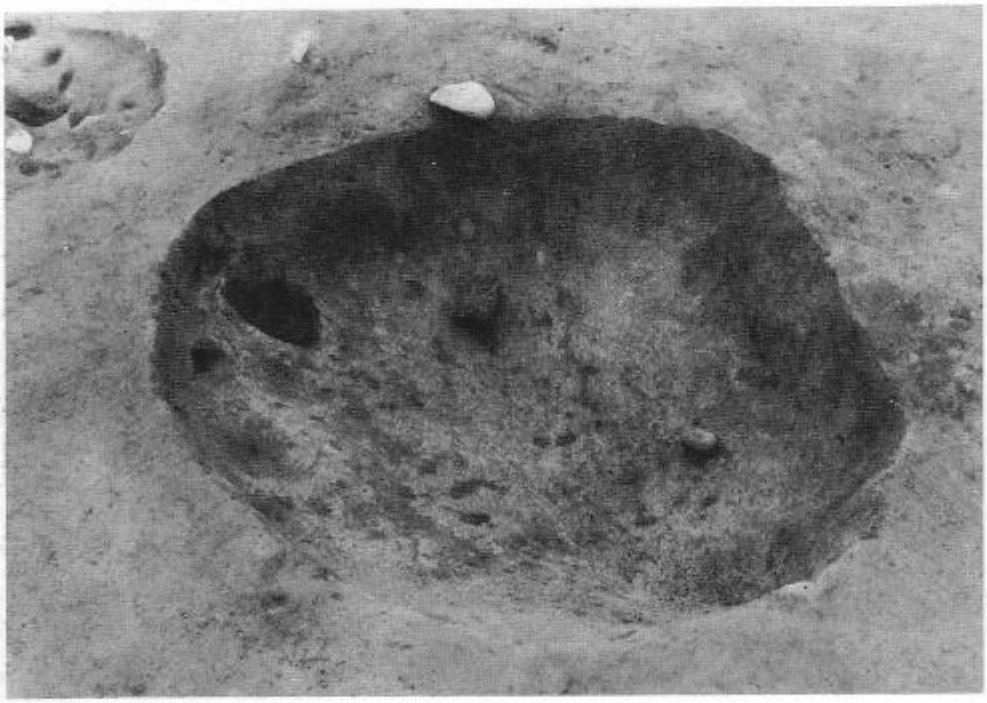


2　S K084・085土壙

3　S K086土壙



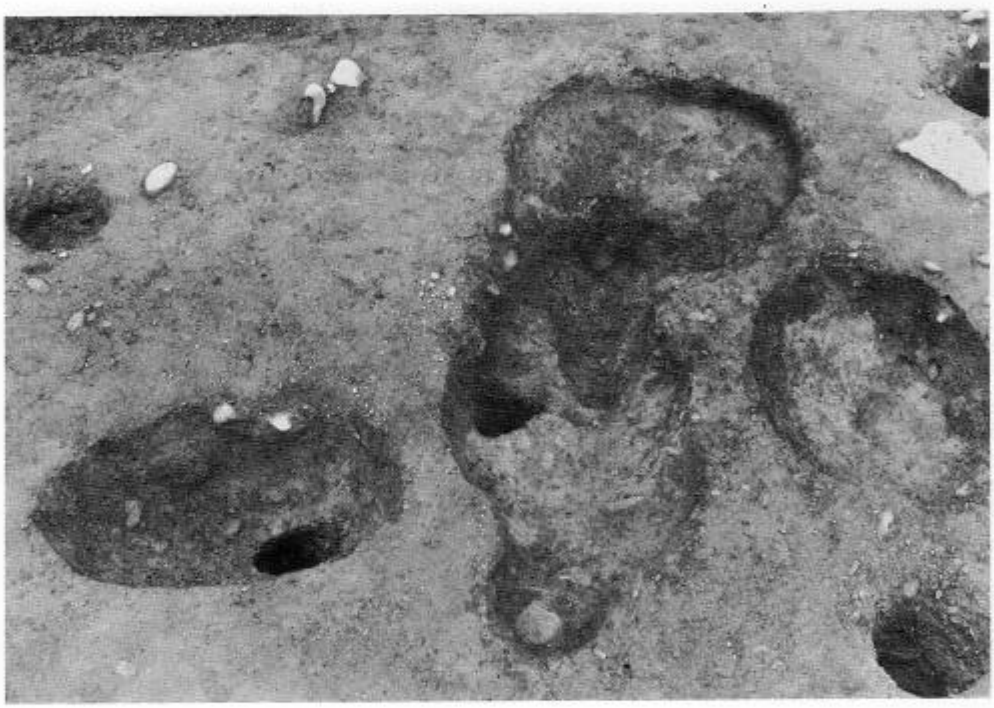
1　ＳＫ087土壙



2　ＳＫ087土壙

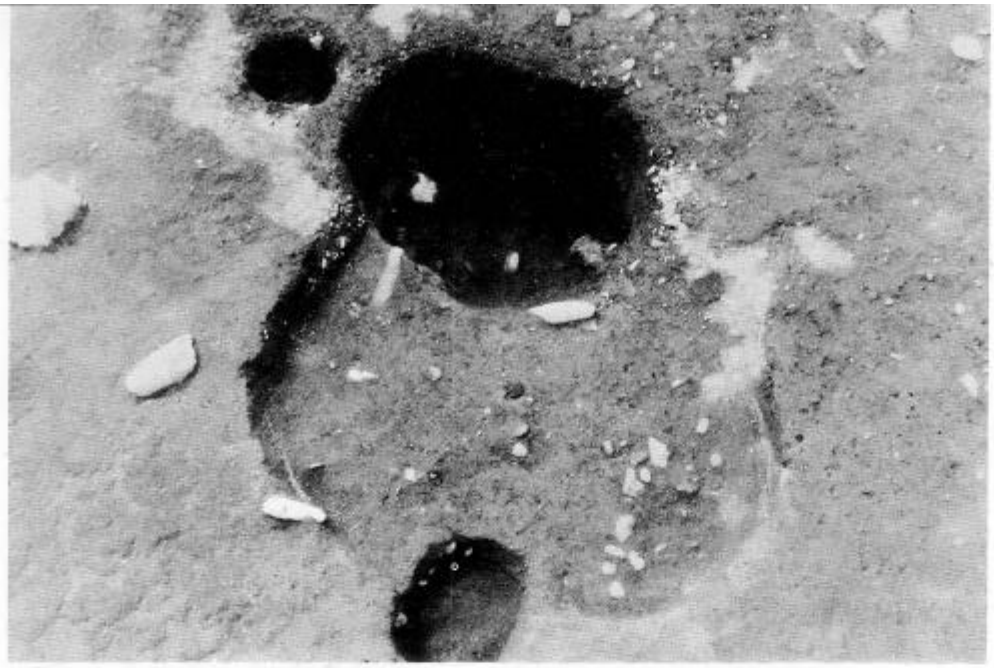
3　ＳＫ083・088～090土壙

1　S K092土壙

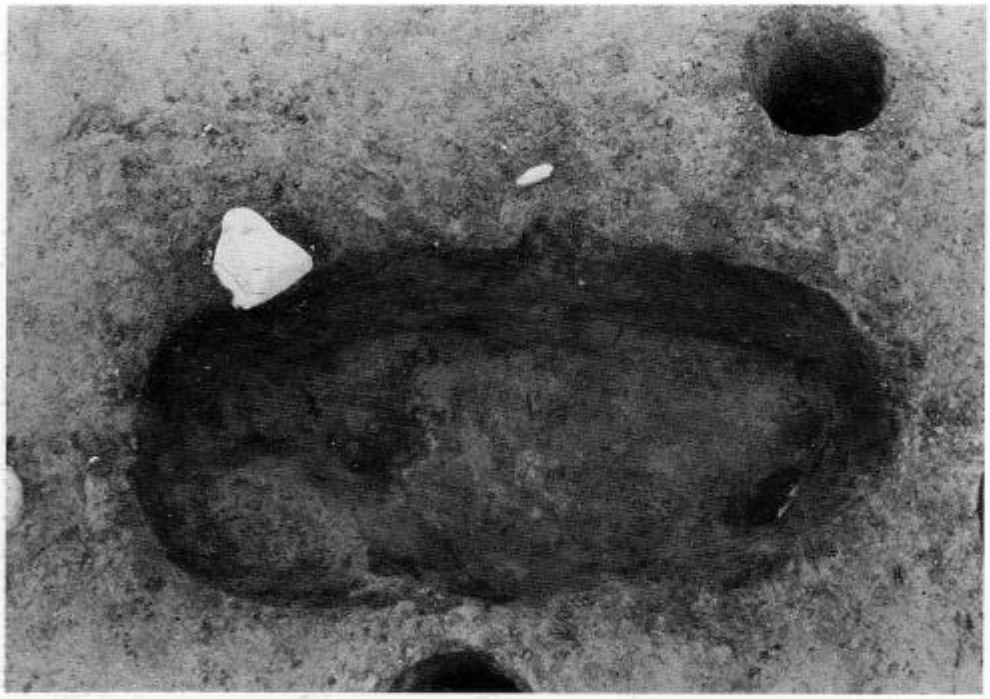


2　S K097・100・101
土壙

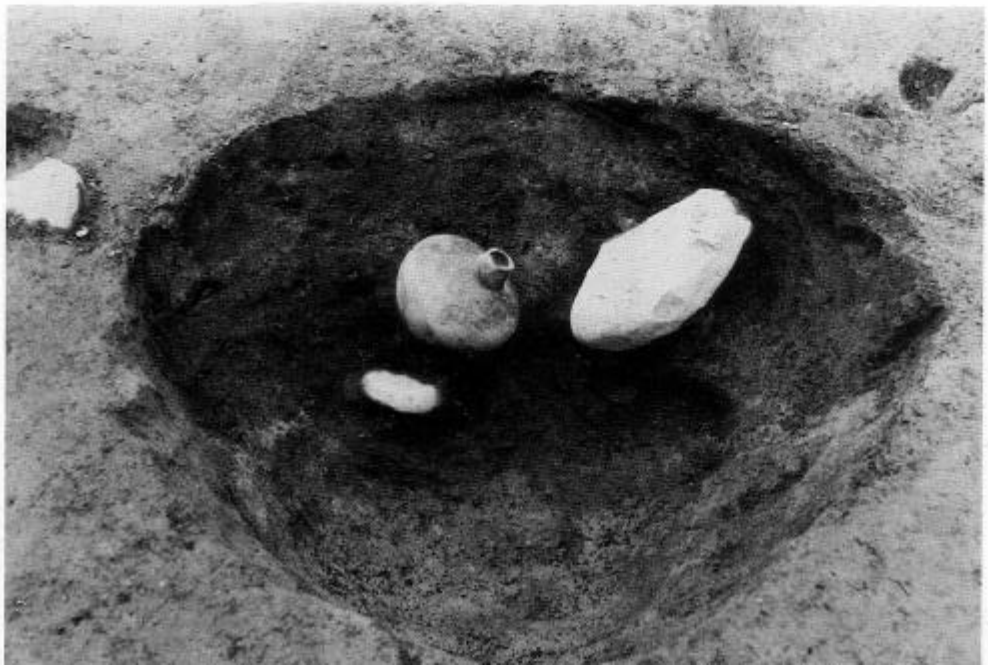
3　S K098土壙



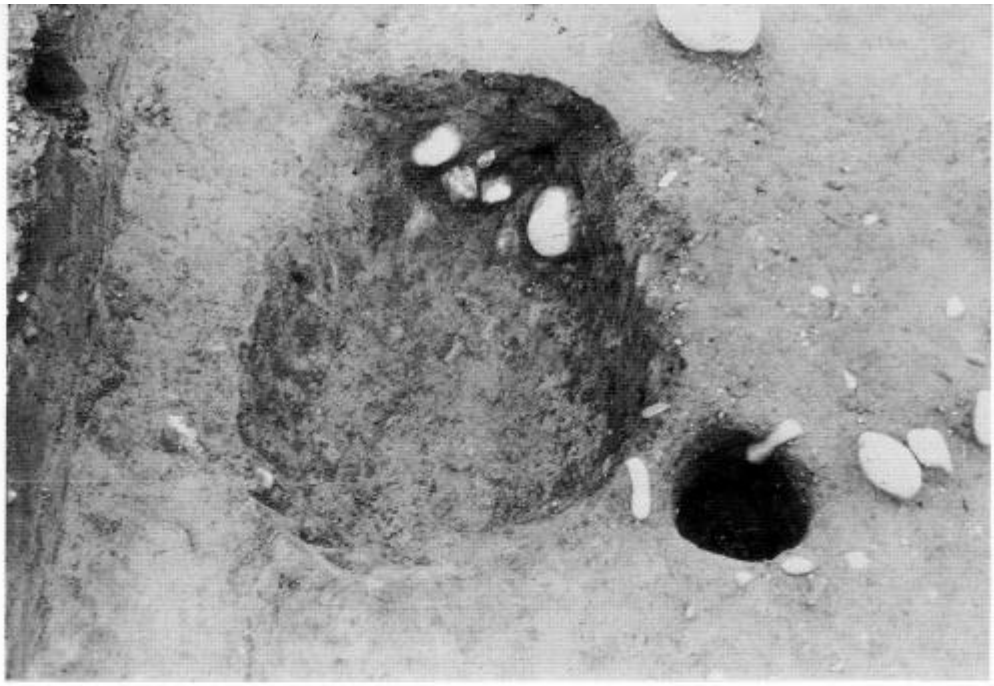
1　ＳＫ102・115土壙



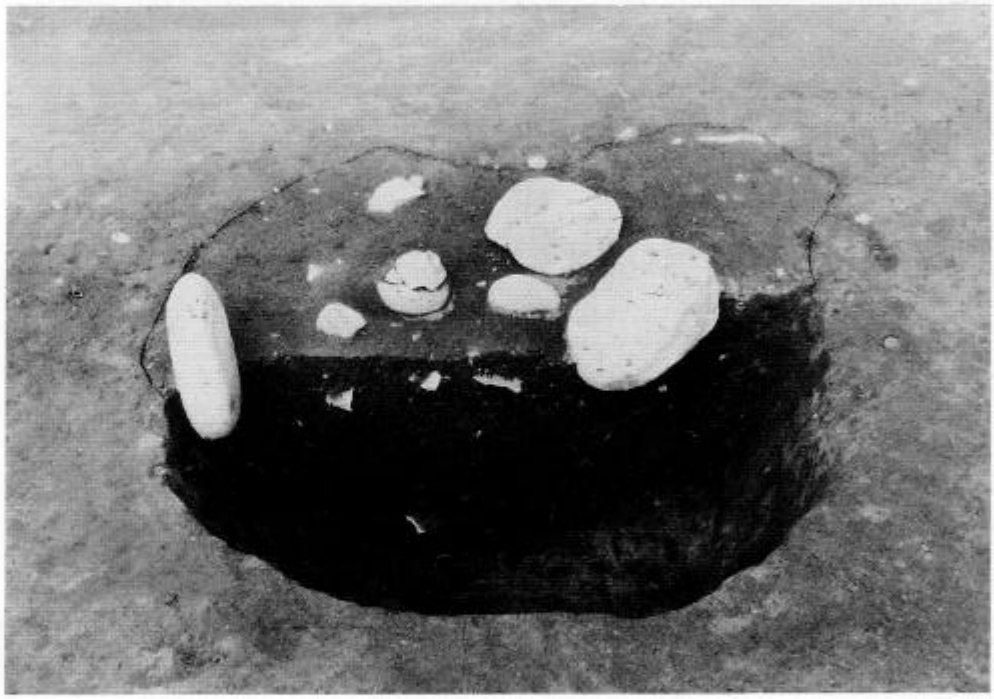
2　ＳＫ105土壙



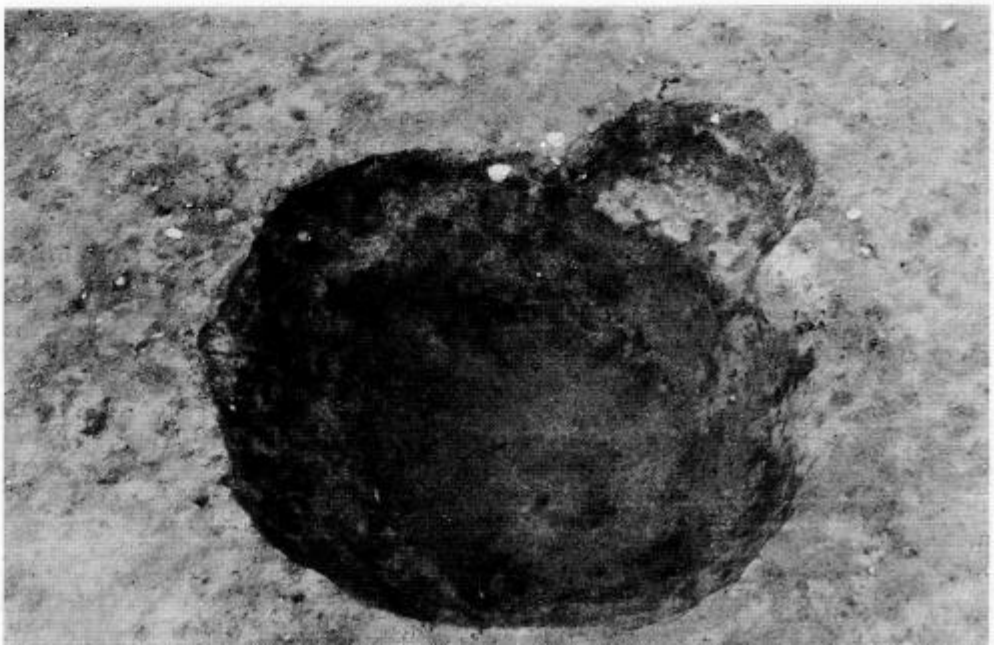
3　ＳＫ110土壙



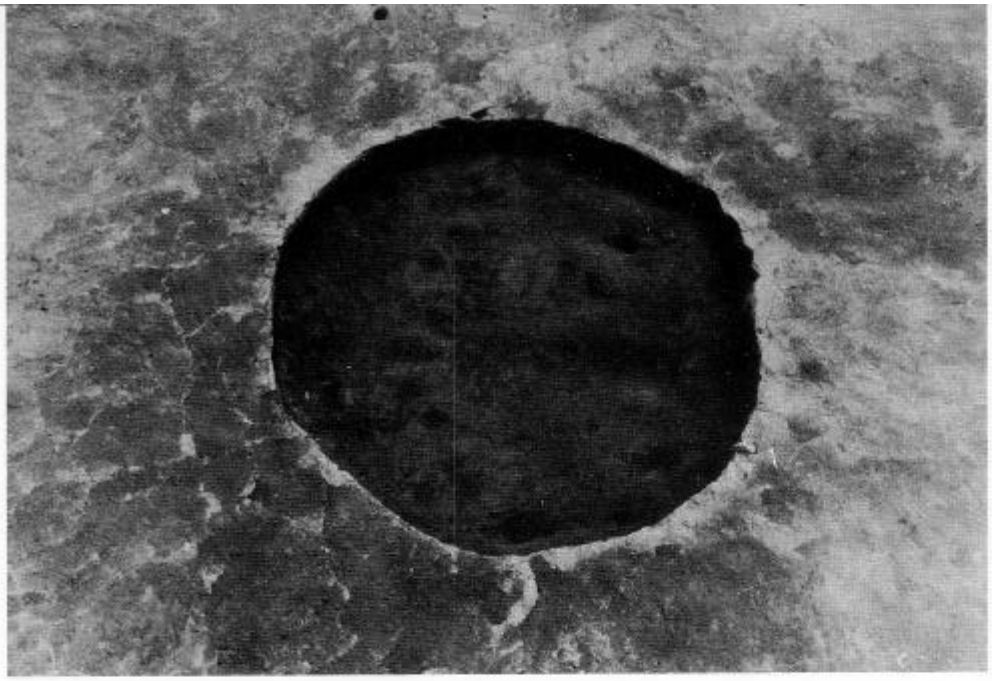
1　ＳＫ112土壙



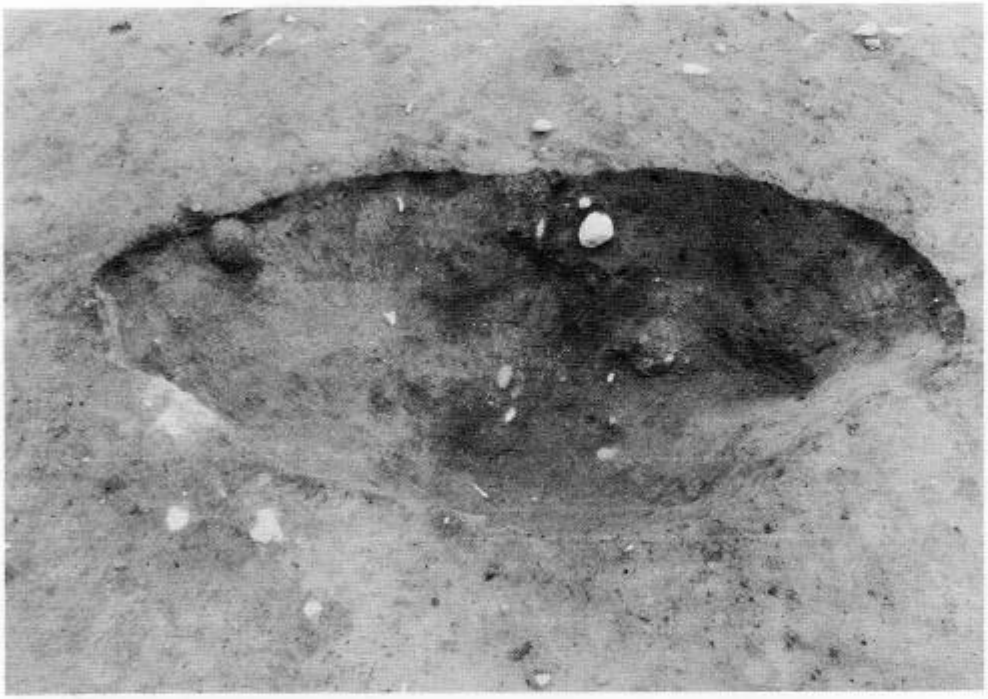
2　ＳＫ116土壙



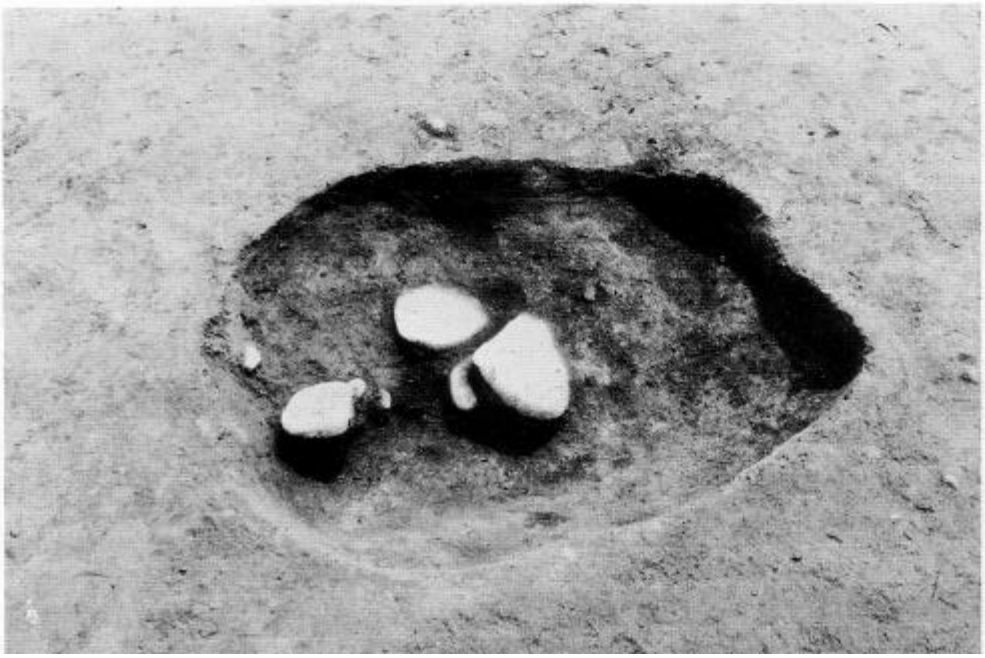
3　ＳＫ116土壙



1　ＳＫ117土壙

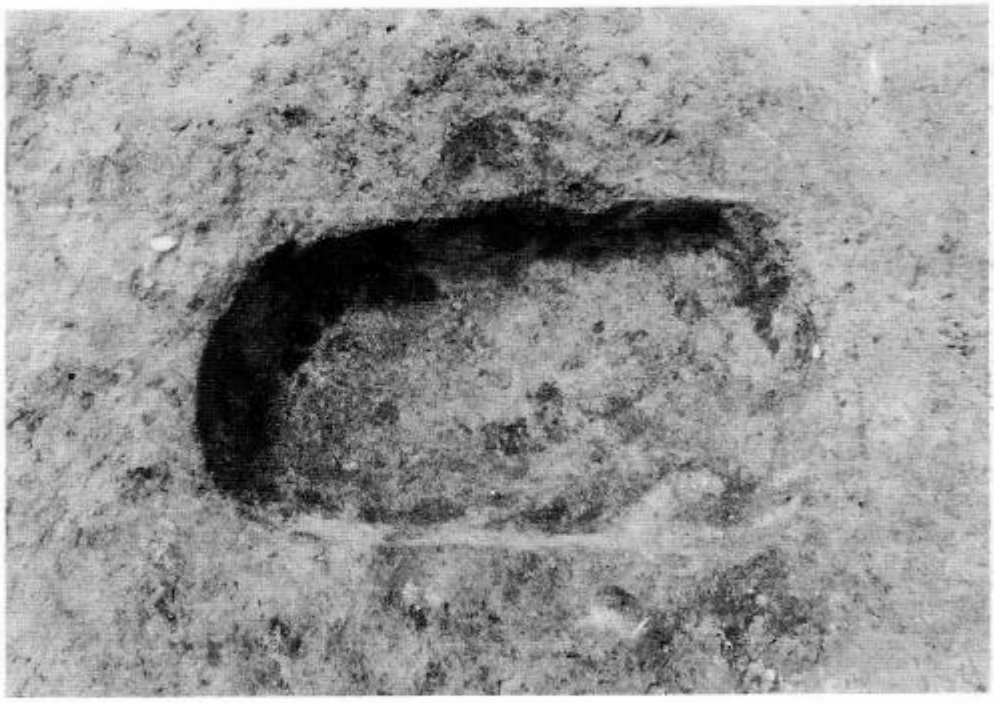


2　ＳＫ122土壙

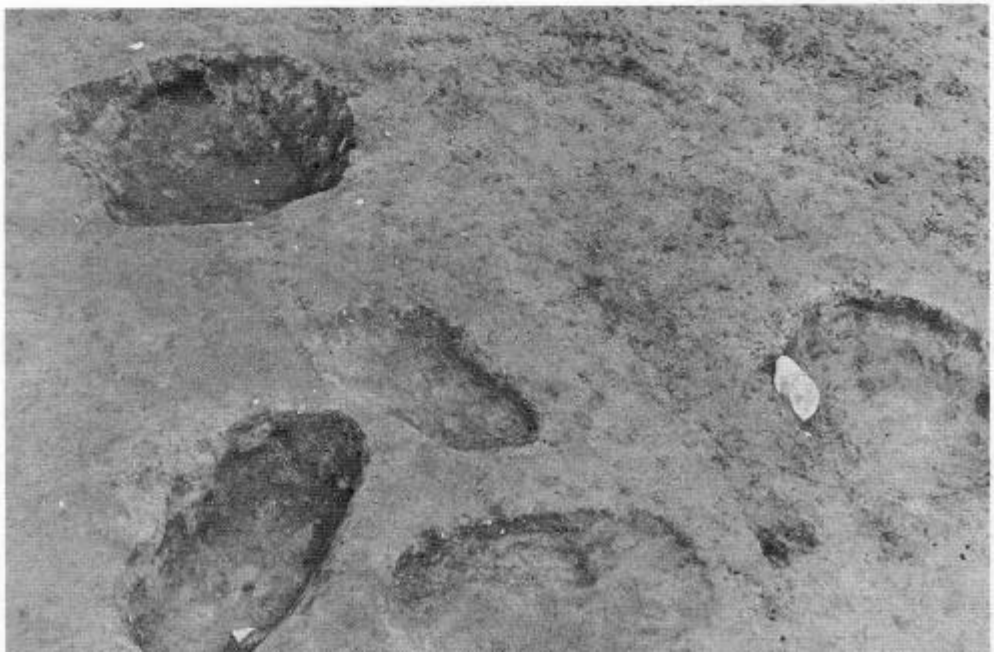


3　ＳＫ126土壙

1　S K127～129土壙



2　S K130土壙

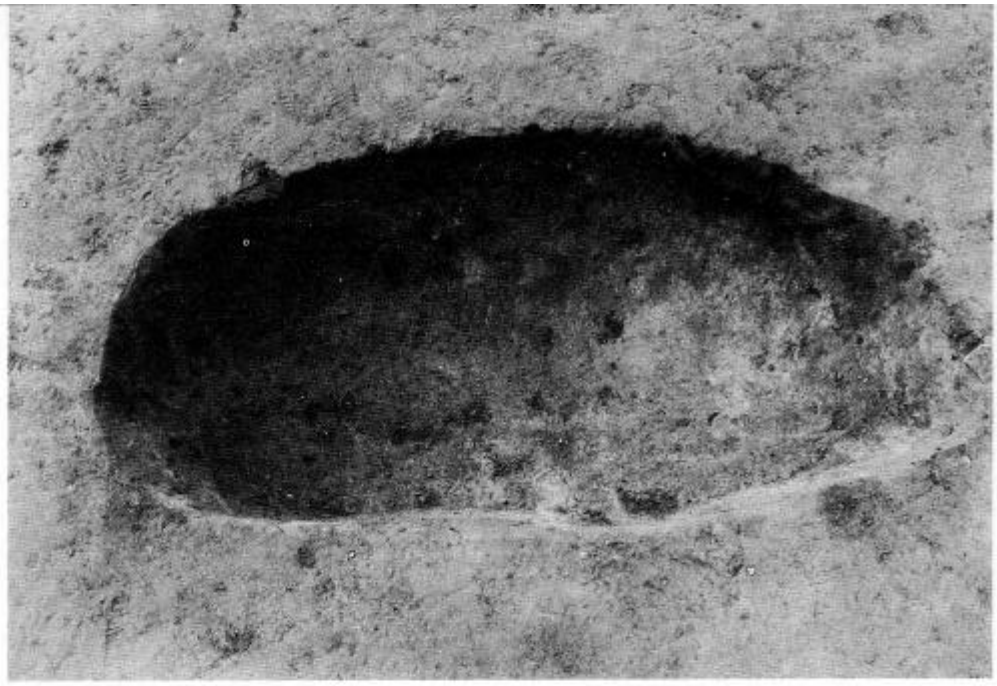


3　S K131・134・135
土壙

1　ＳＫ132土壙

2　ＳＫ133土壙

3　ＳＫ136土壙

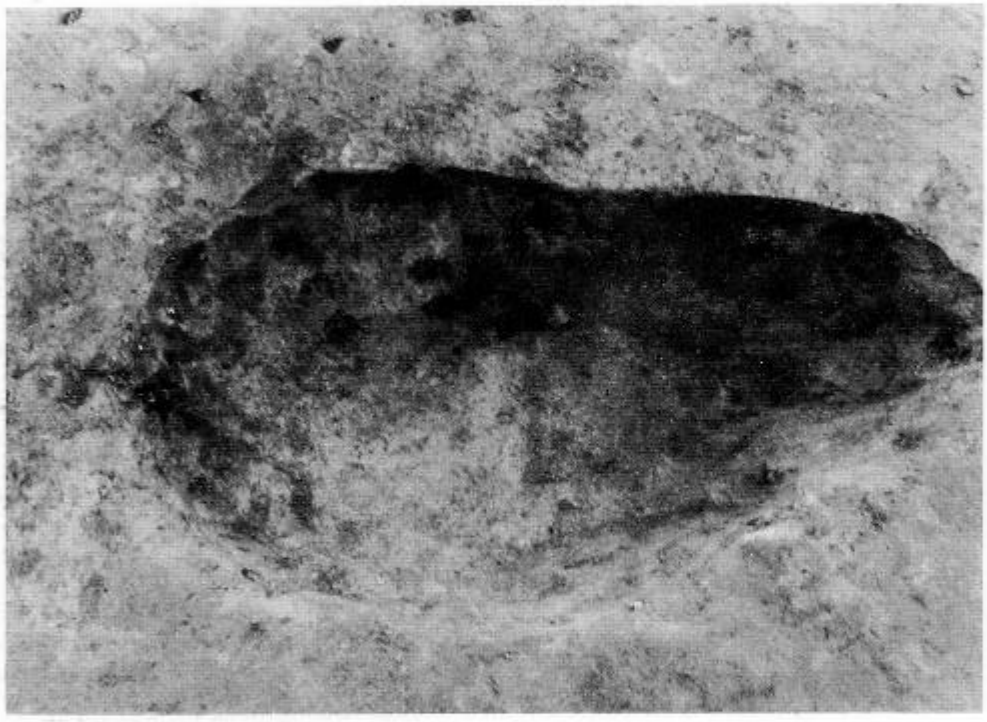


1　ＳＫ137土壙

2　ＳＫ138～141土壙

3　ＳＫ142土壙

1　ＳＫ143土壙



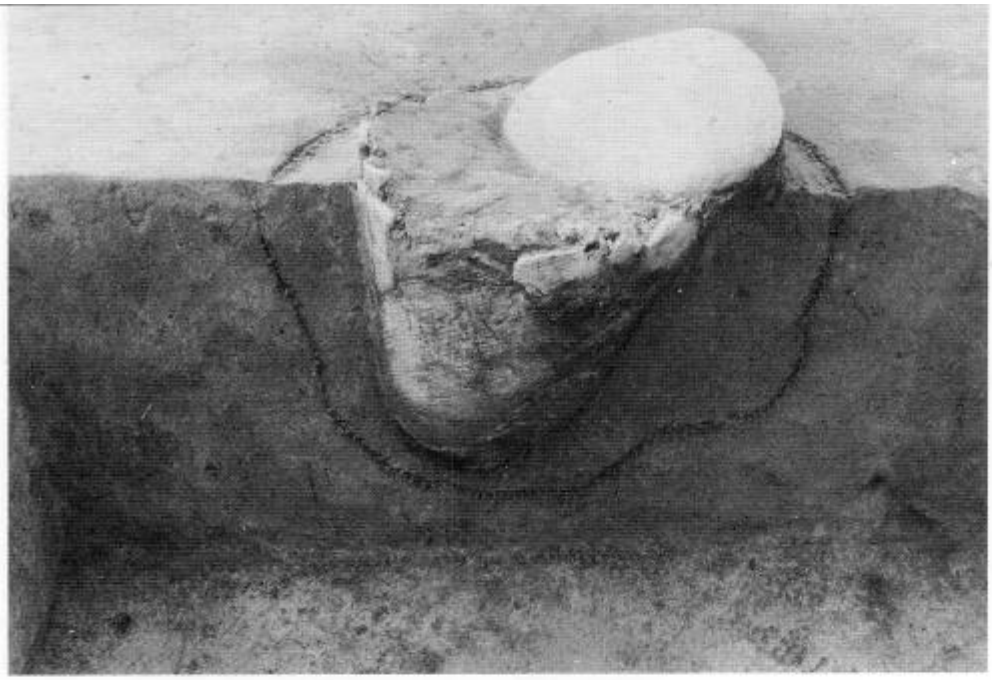
2　ＳＫ146土壙

3　ＳＫ147土壙

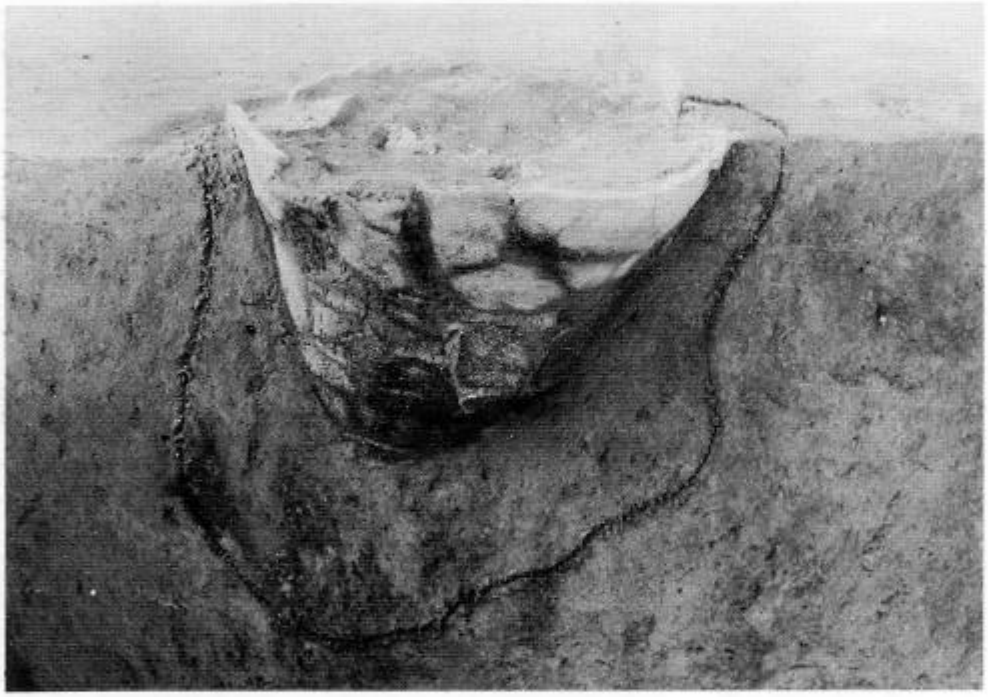
1　ＳＫ148土壙

2　ＳＫ150～152土壙

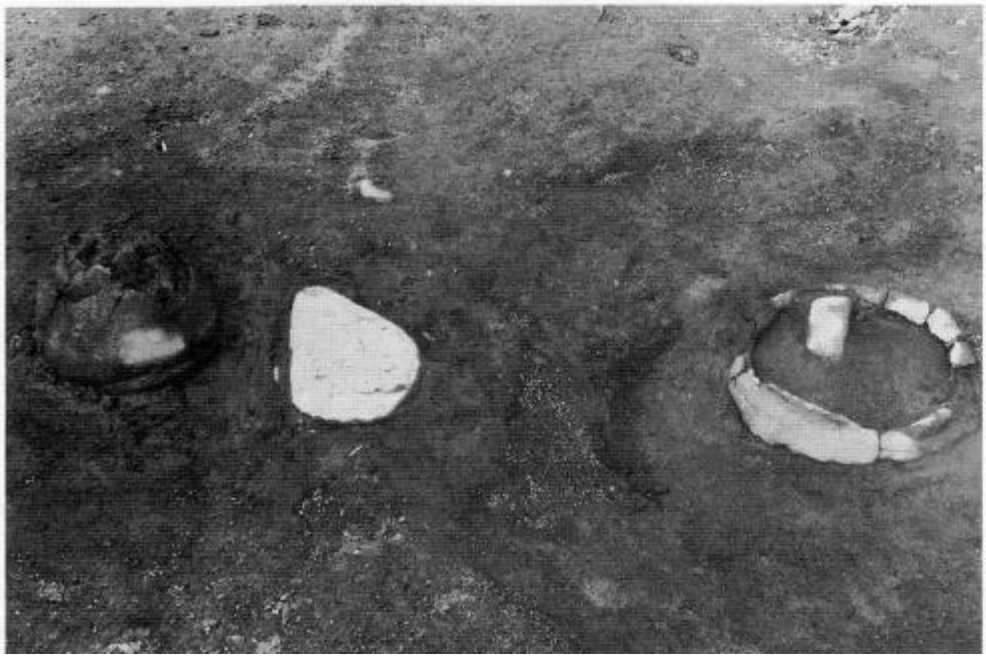
3　ＳＲ001土器棺と土層



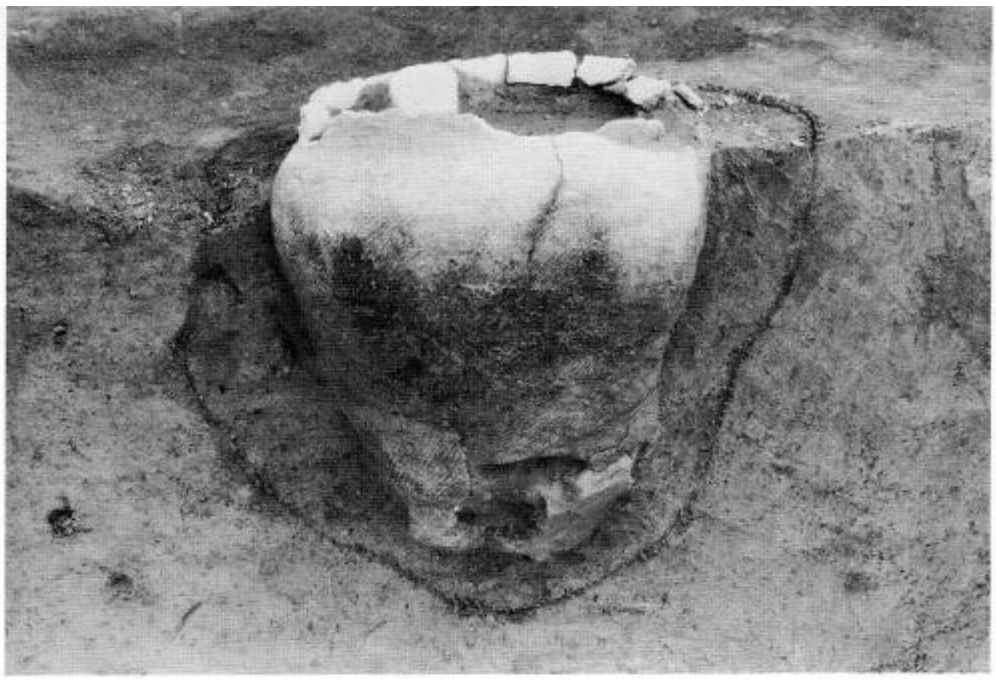
1　ＳＲ004土器棺



2　ＳＲ005土器棺

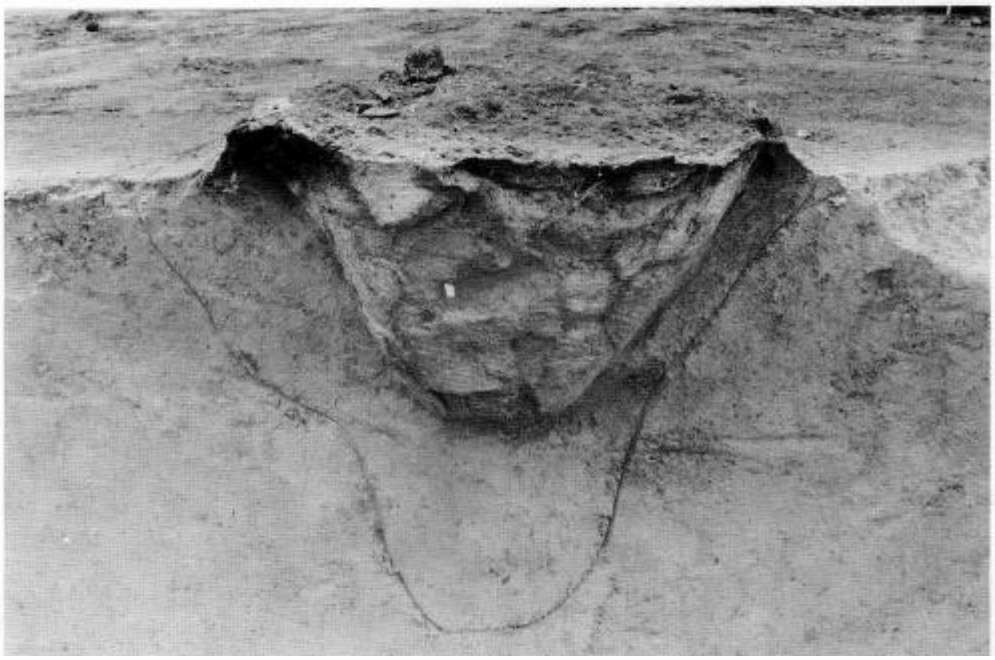


3　ＳＲ009土器棺



1　S R009土器棺

2　S R010土器棺



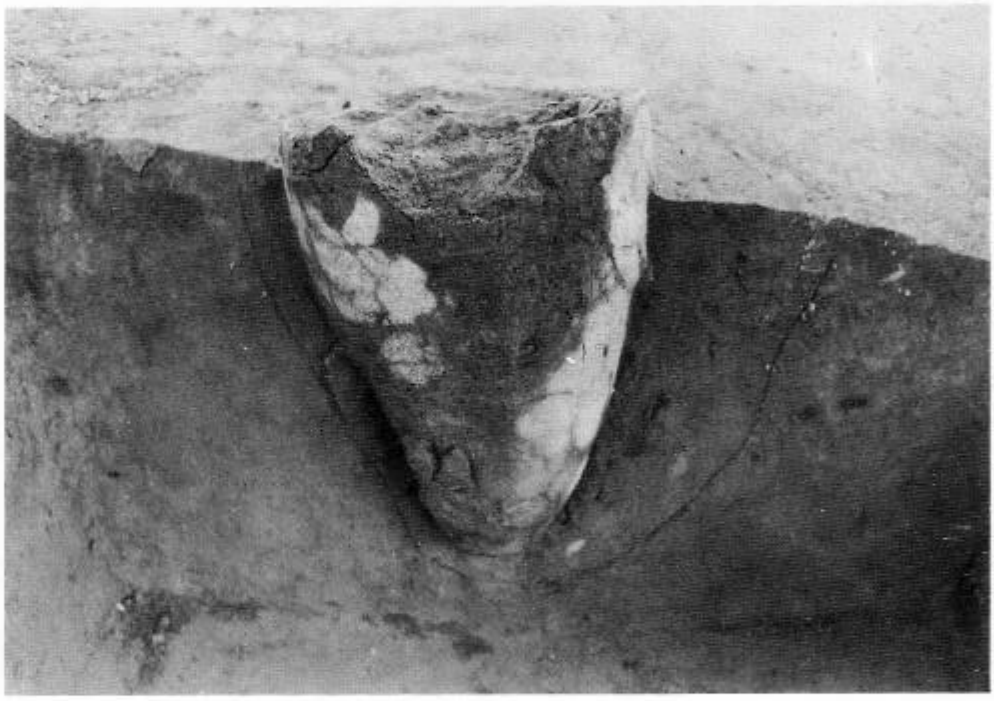
3　S R012土器棺

1　S R015土器棺

2　S R016土器棺

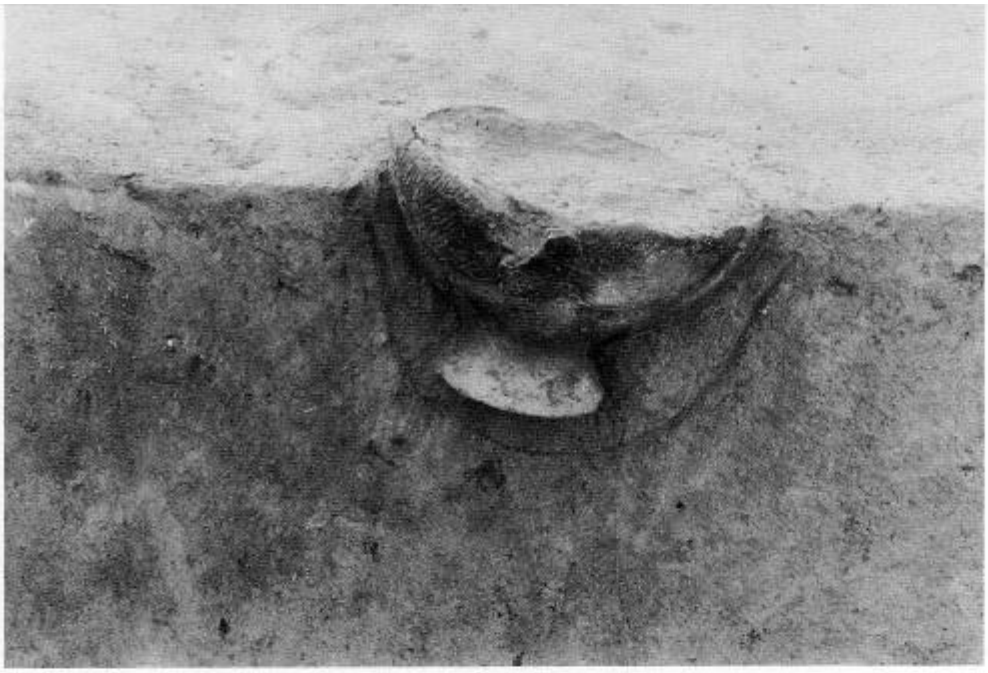
3　S R016土器棺

1　S R017土器棺

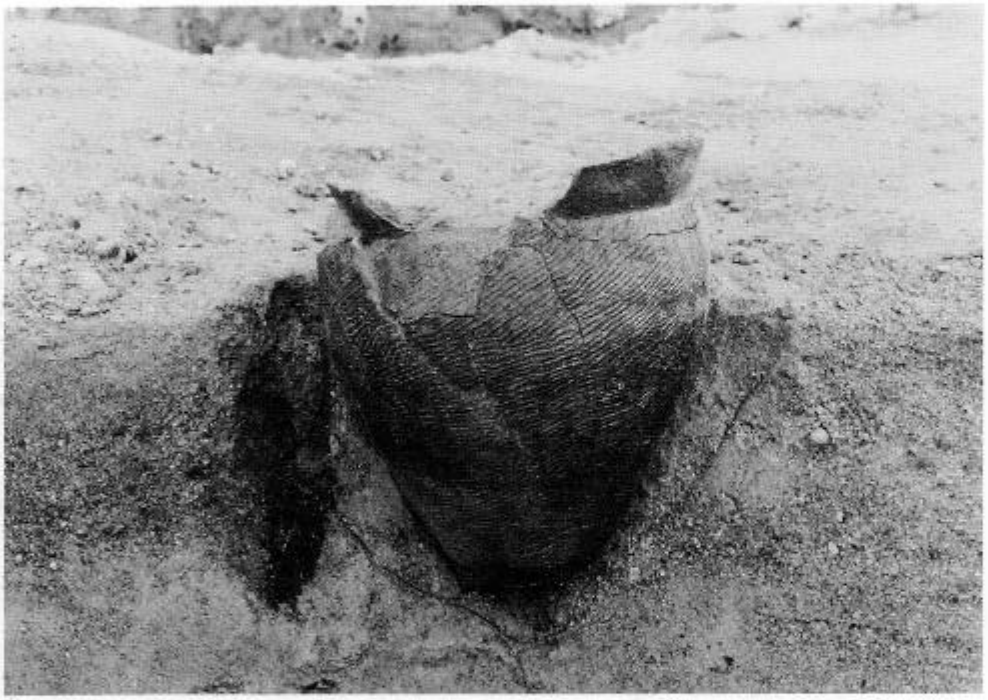


2　S R017土器棺

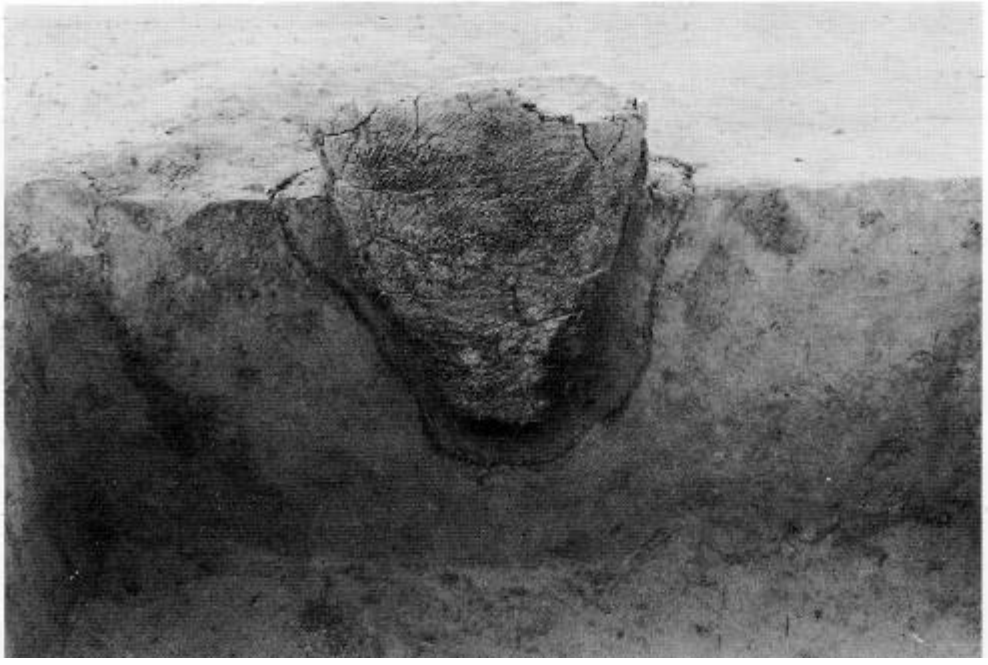
3　S R018土器棺



1　ＳＲ020土器棺



2　ＳＲ021土器棺

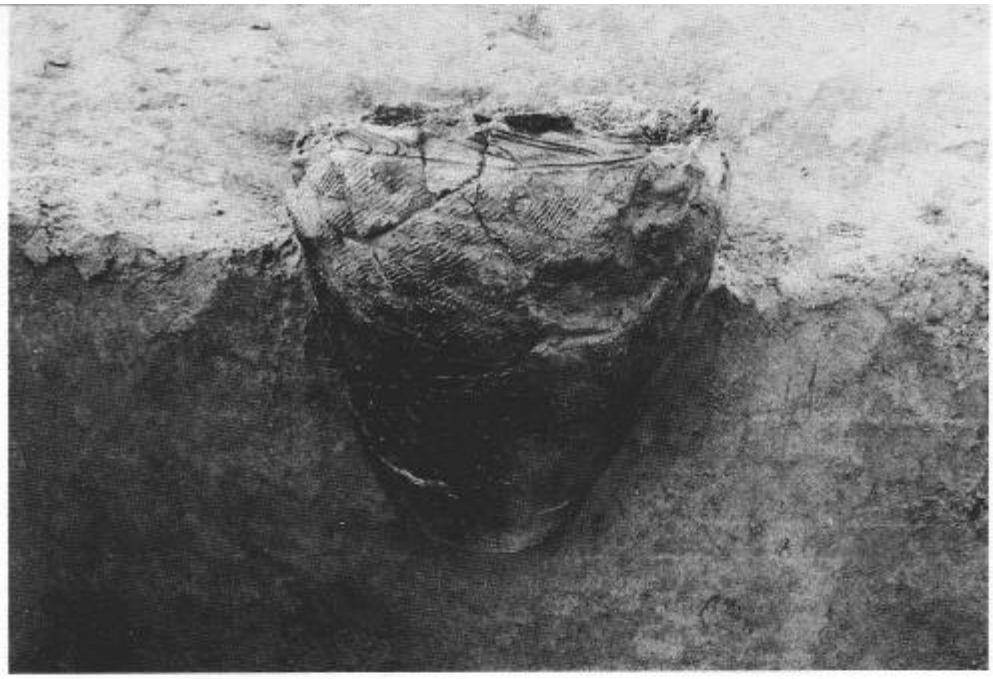


3　ＳＲ022土器棺

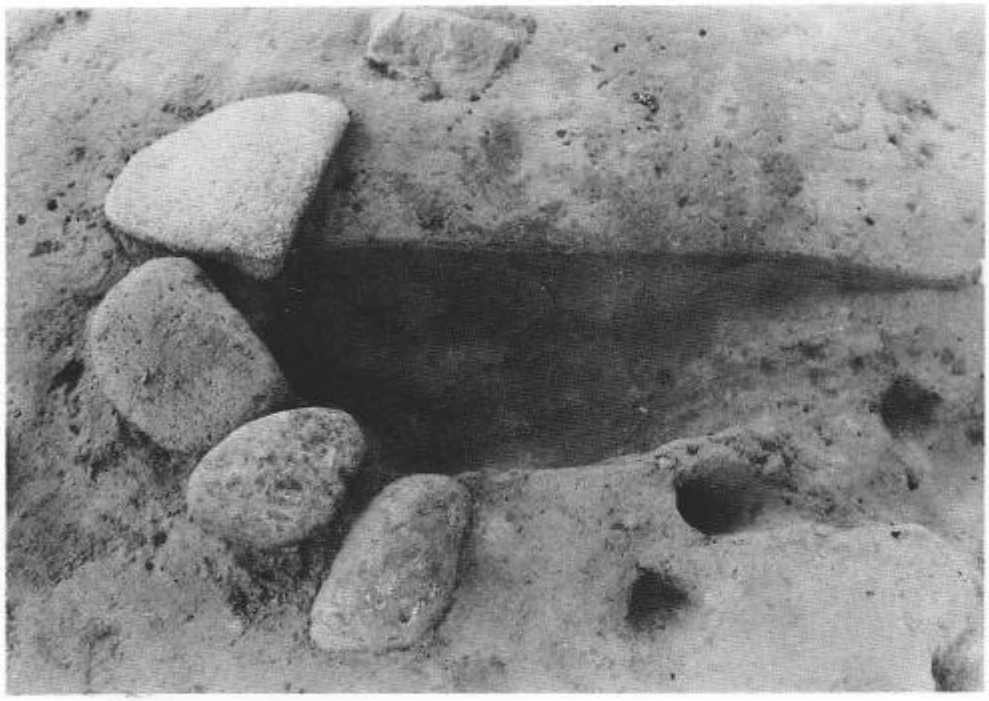
1　S R028土器棺

2　S R030土器棺

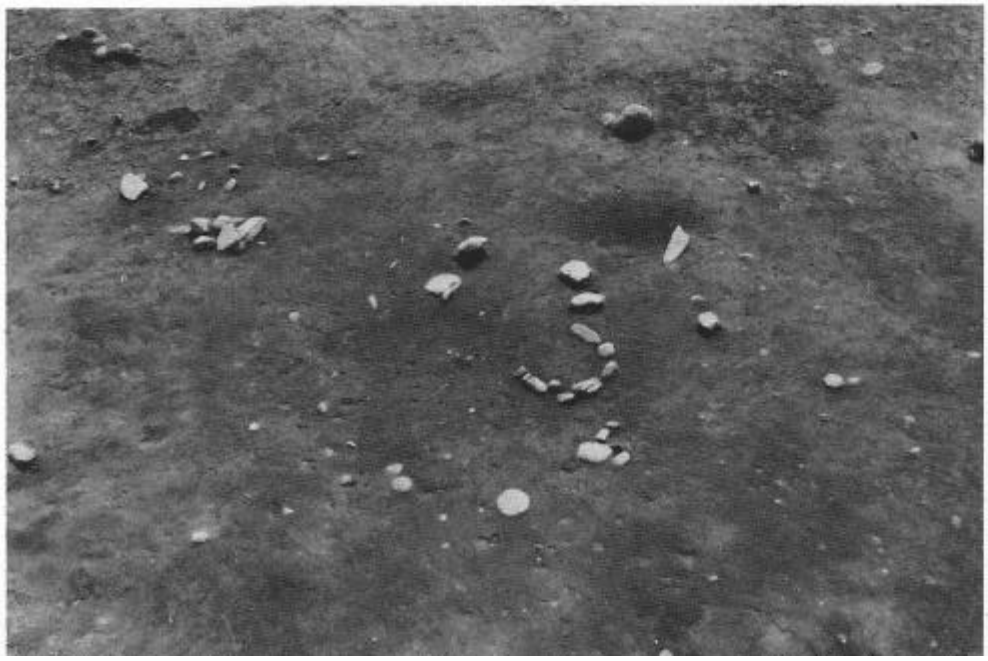
3　S R031土器棺



1　ＳＲ034土器棺

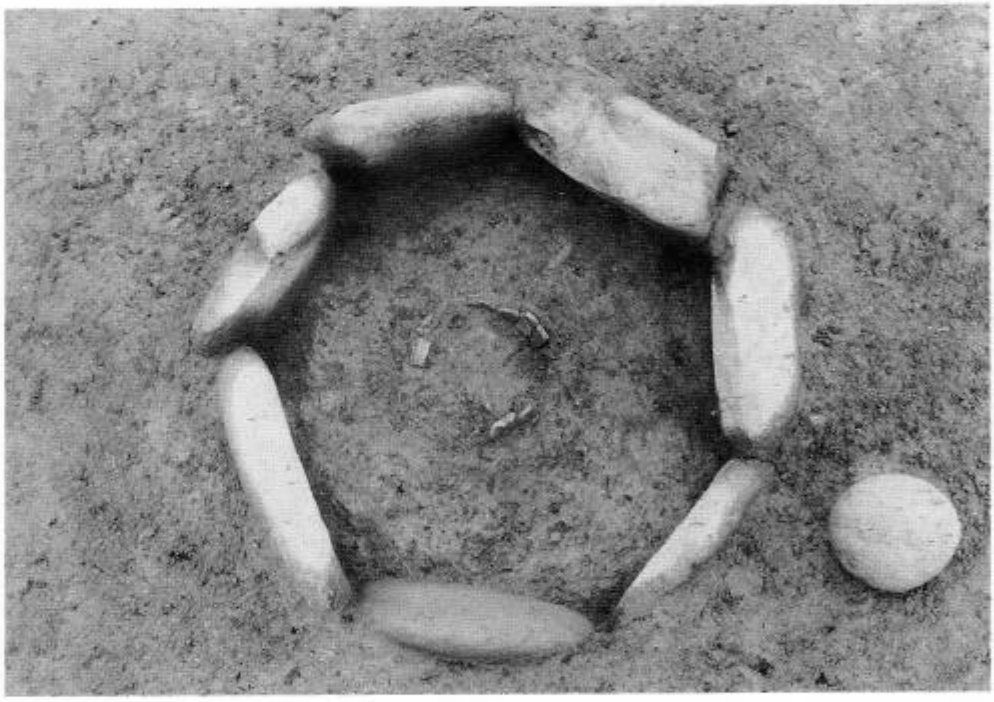


2　ＳＮ005石囲炉

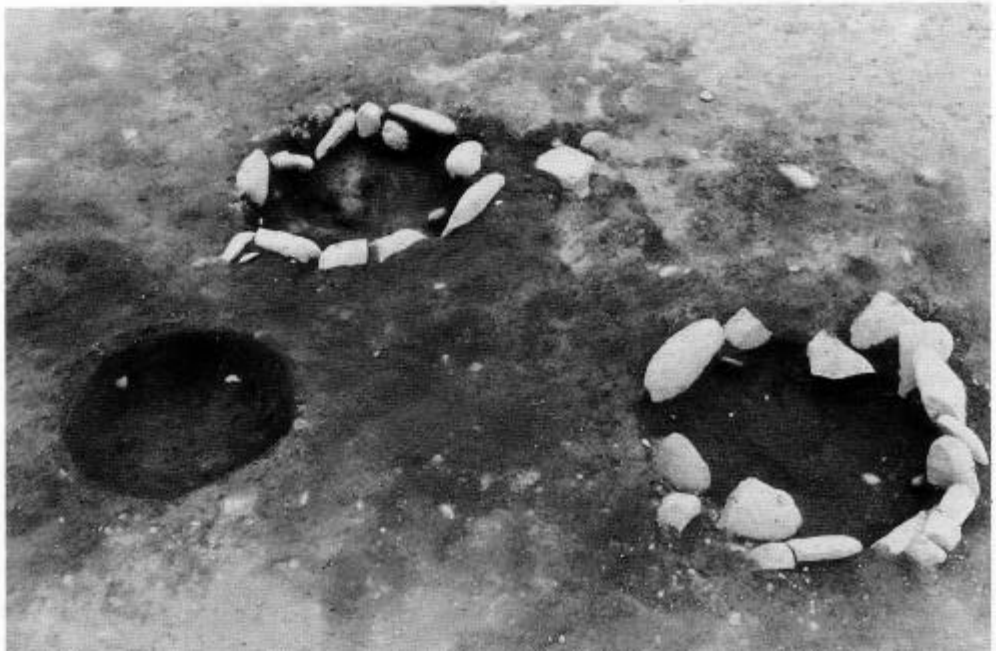


3　ＳＮ007石囲炉

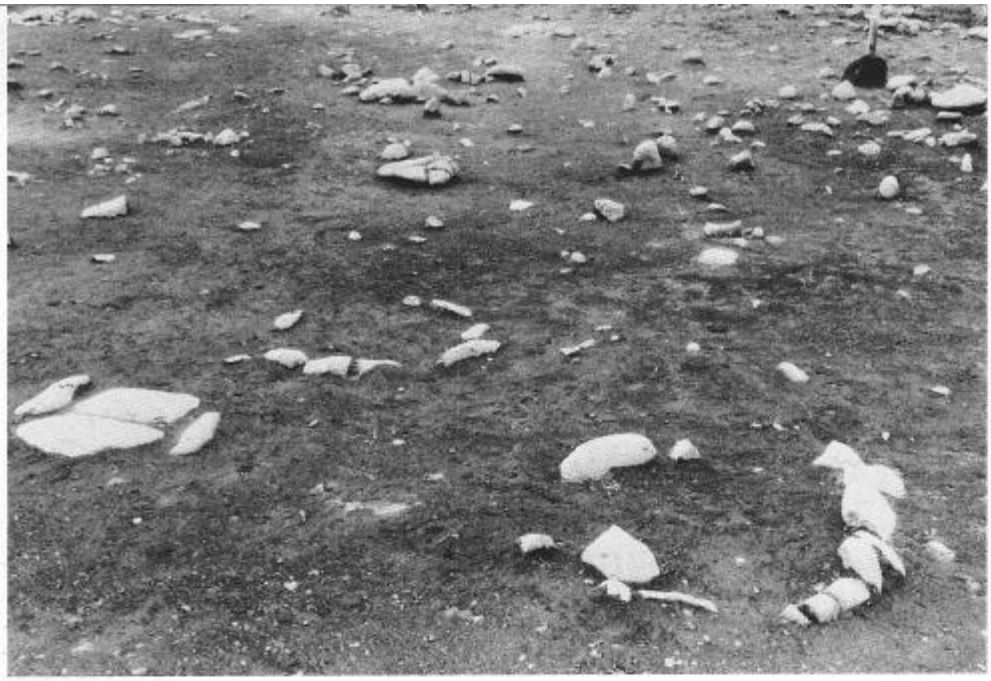
1　S N007石囲炉



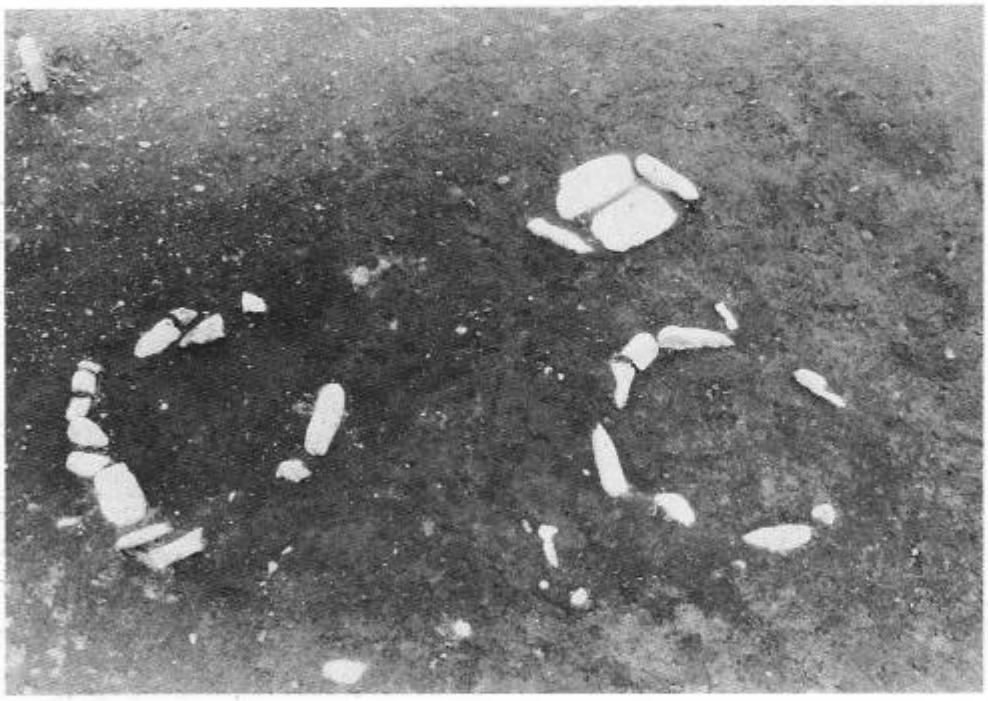
2　S N012石囲炉



3　S N014・016石囲炉

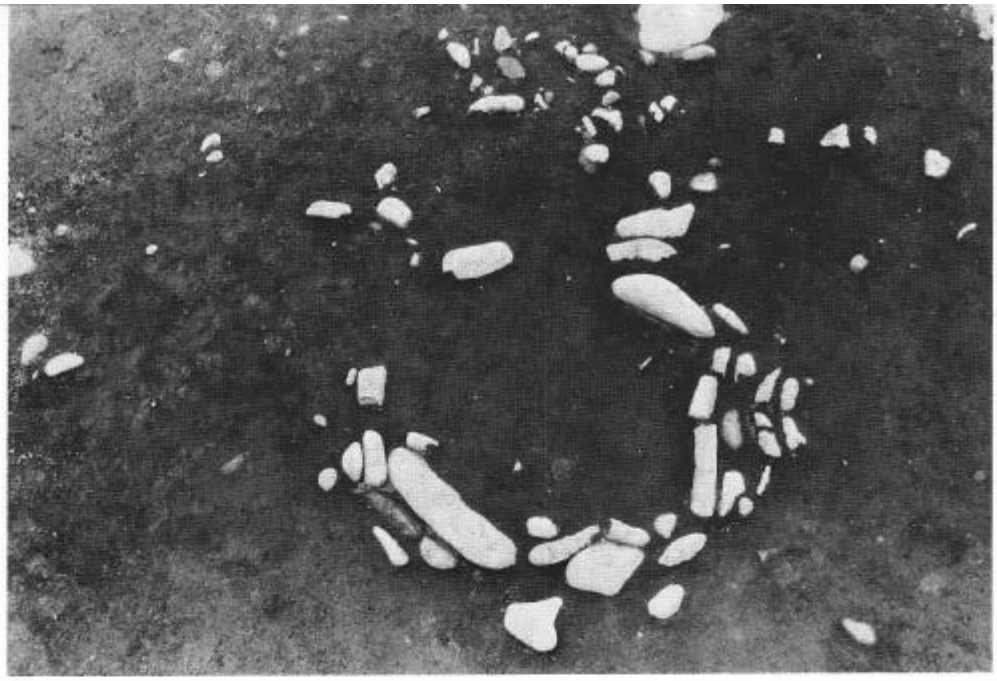


1　S N014・016石囲炉
S Q002配石

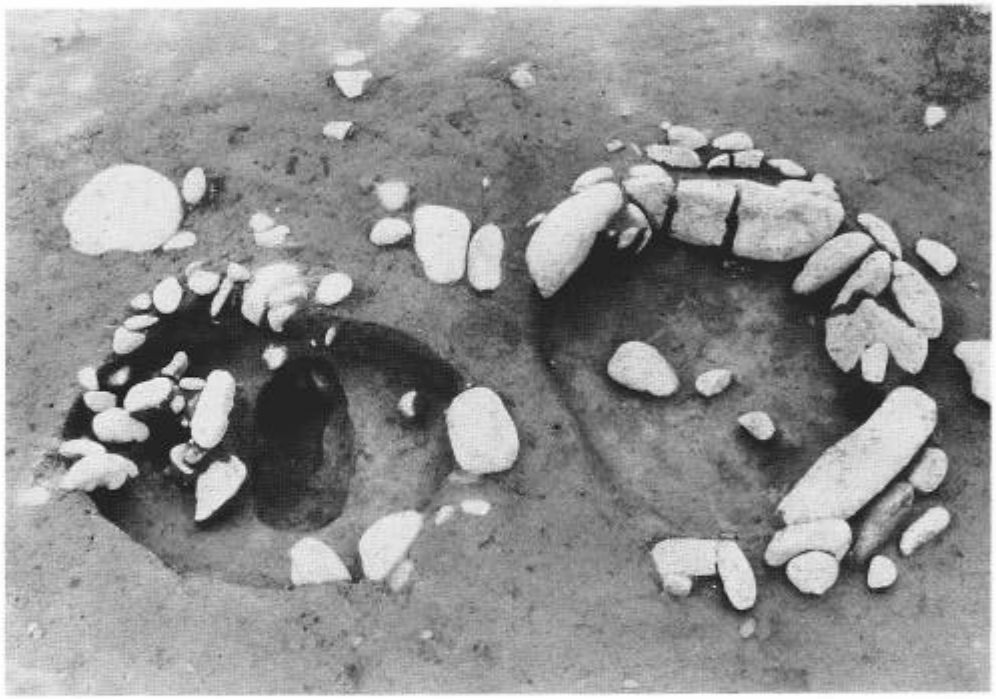


2　S N014石囲炉
S Q002配石

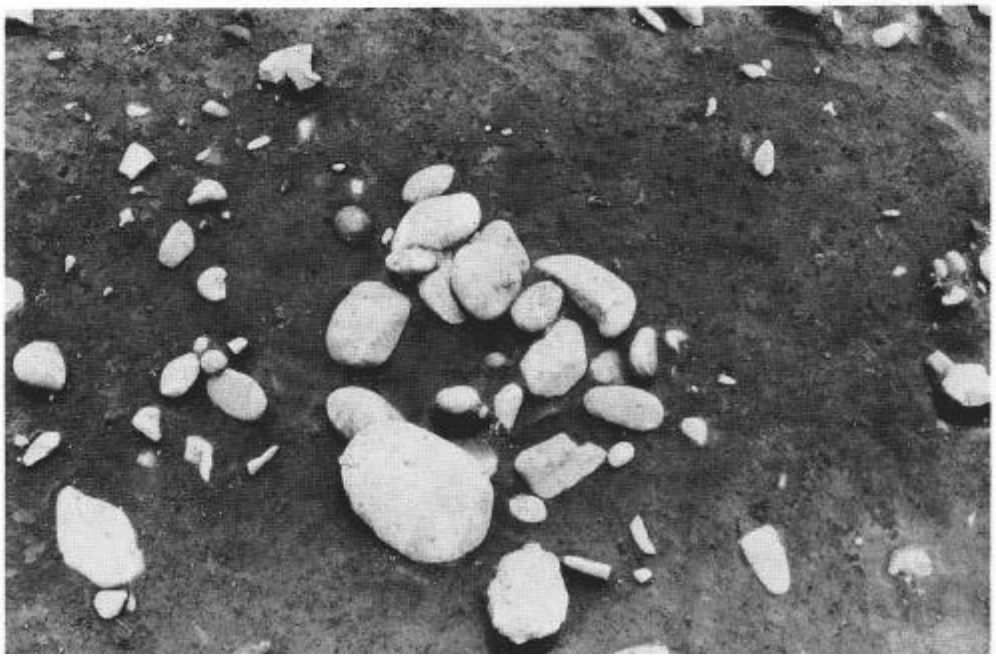
3　S N017石囲炉



1　S N018・019石囲炉

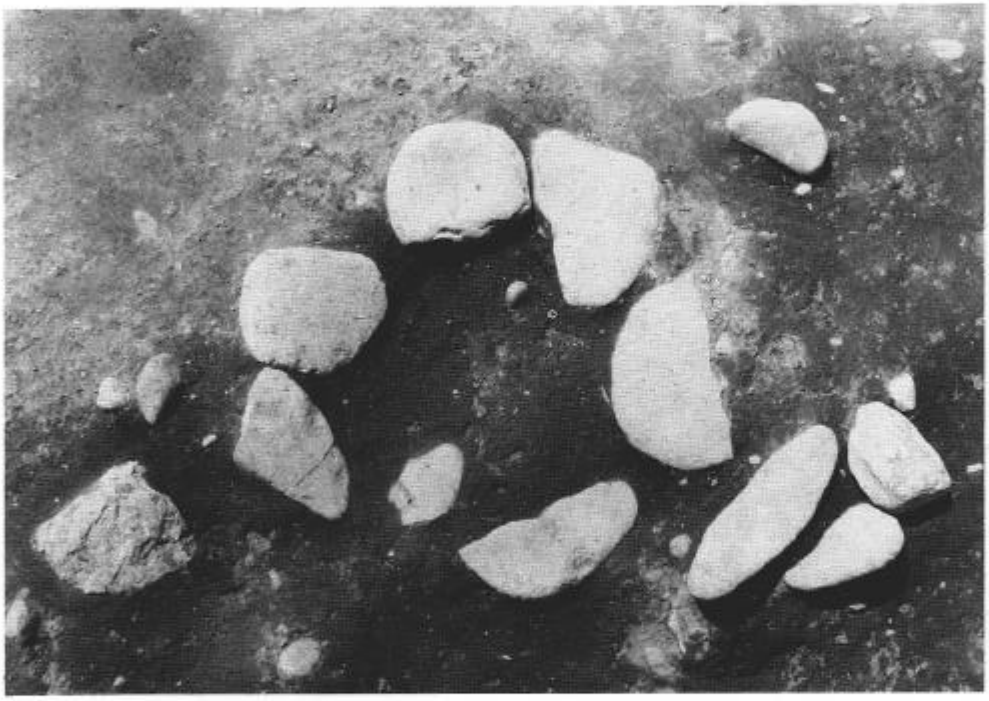


2　S N018・019石囲炉

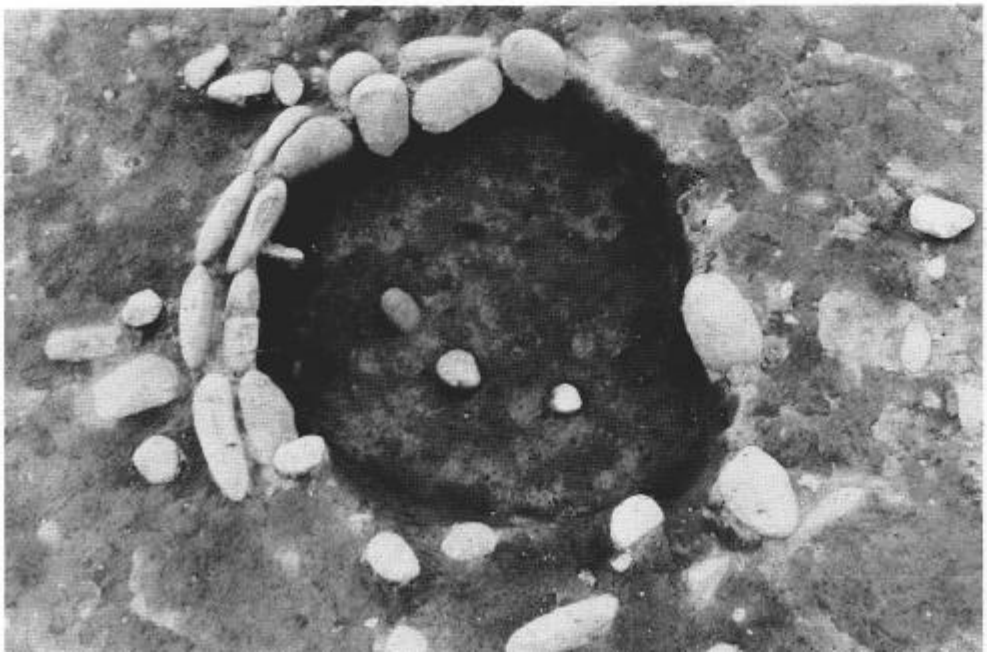


3　S N020石囲炉

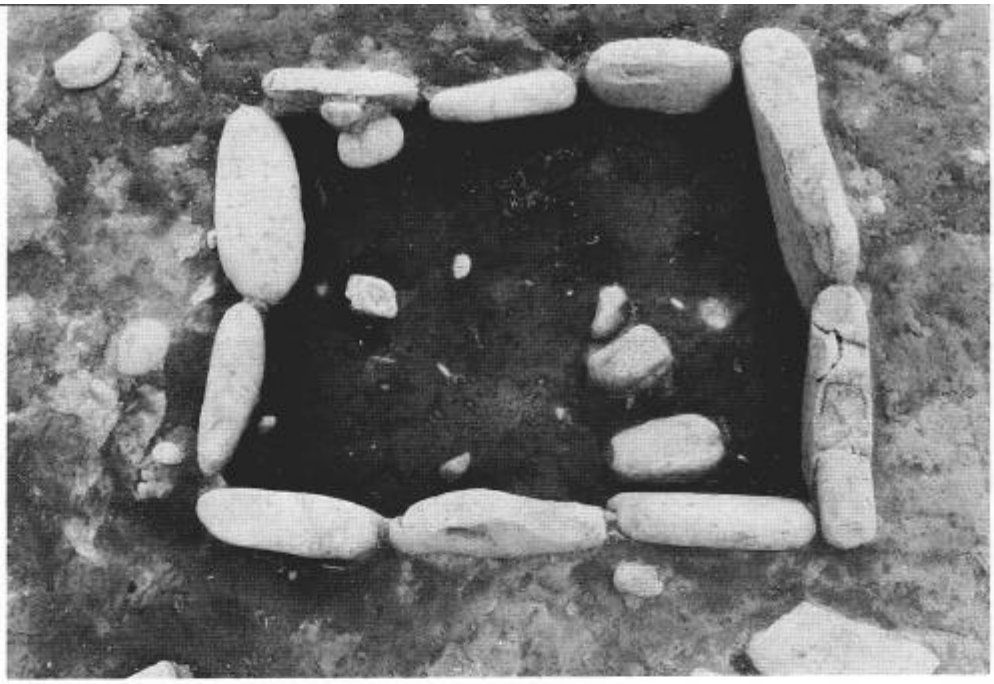
1　S N021石囲炉



2　S N022石囲炉

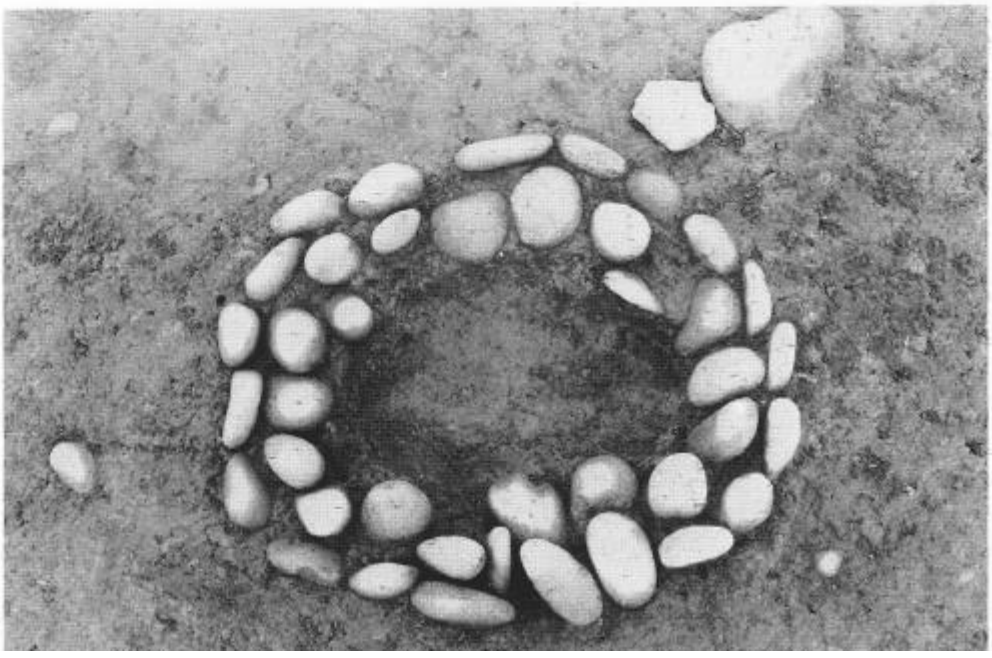


3　S N023石囲炉

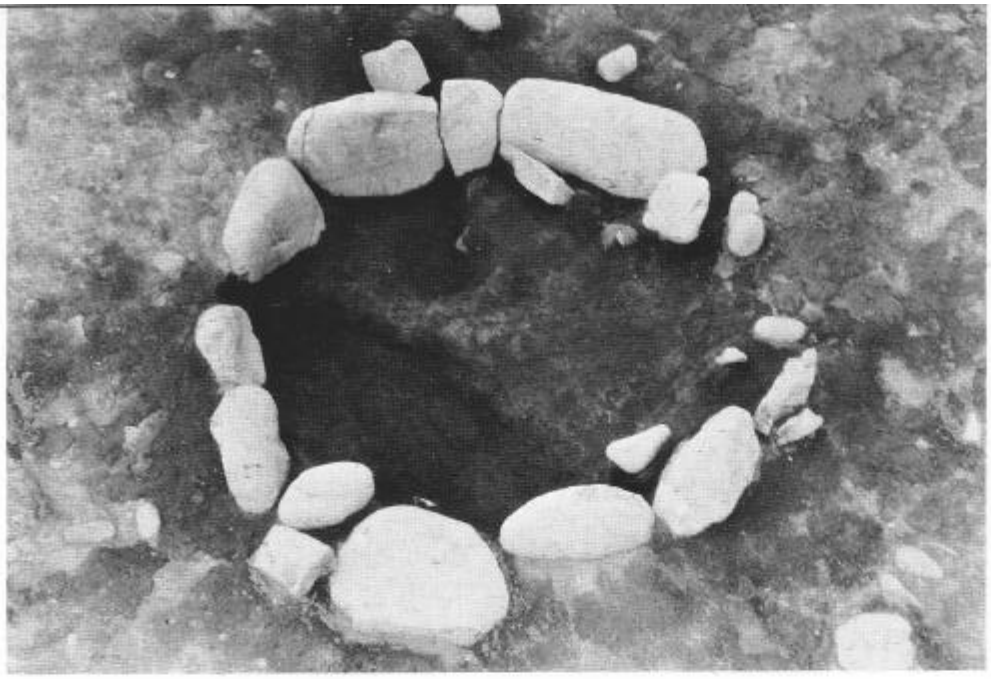


1　ＳＮ024石囲炉

2　ＳＮ025石囲炉

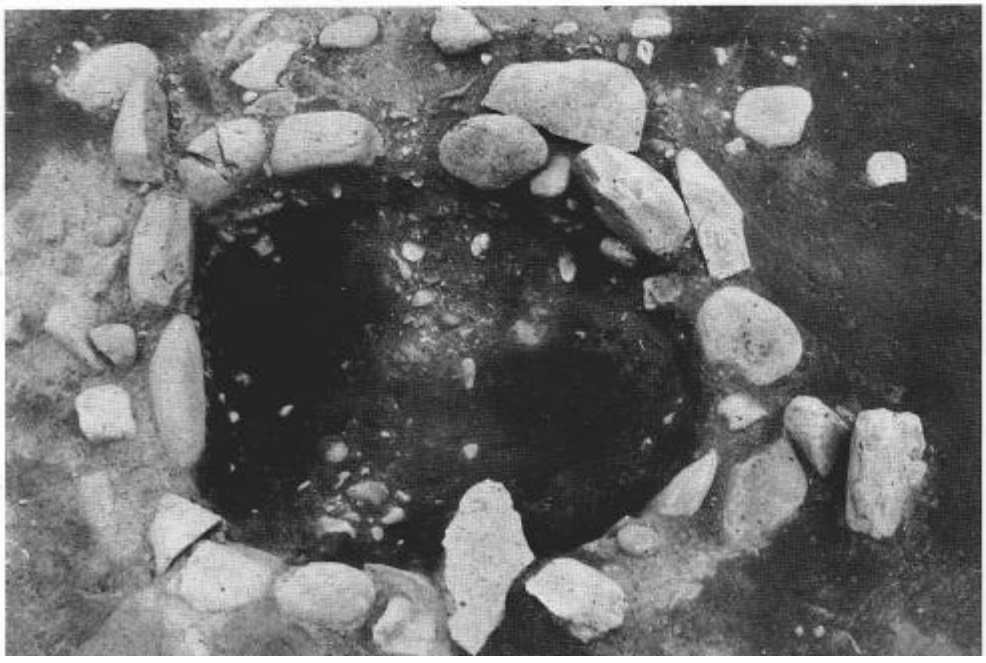


3　ＳＮ025石囲炉

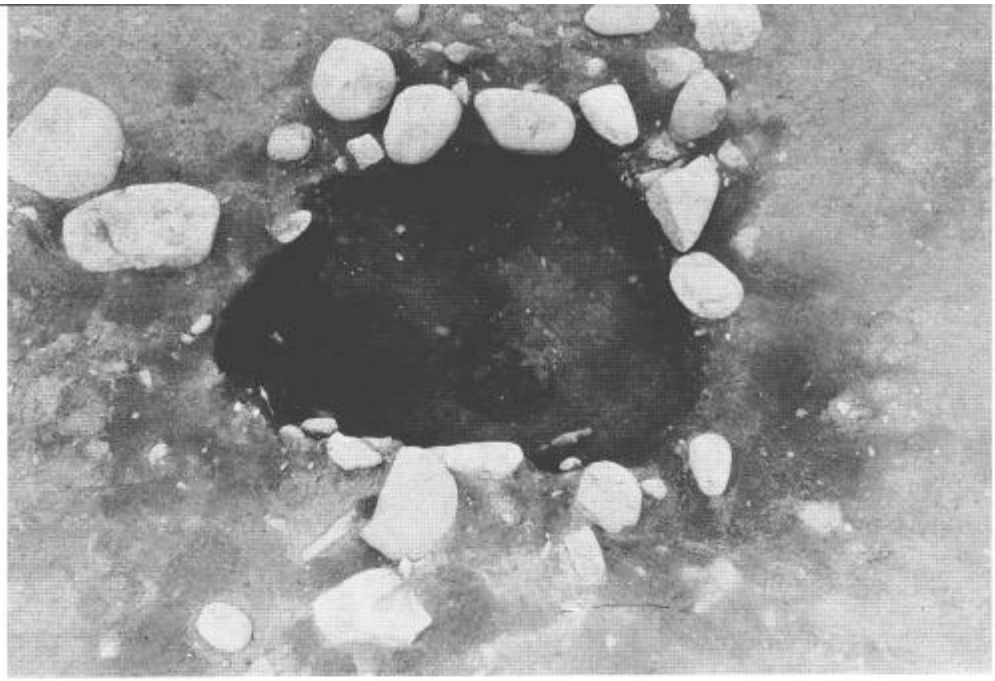


1　ＳＮ026石囲炉

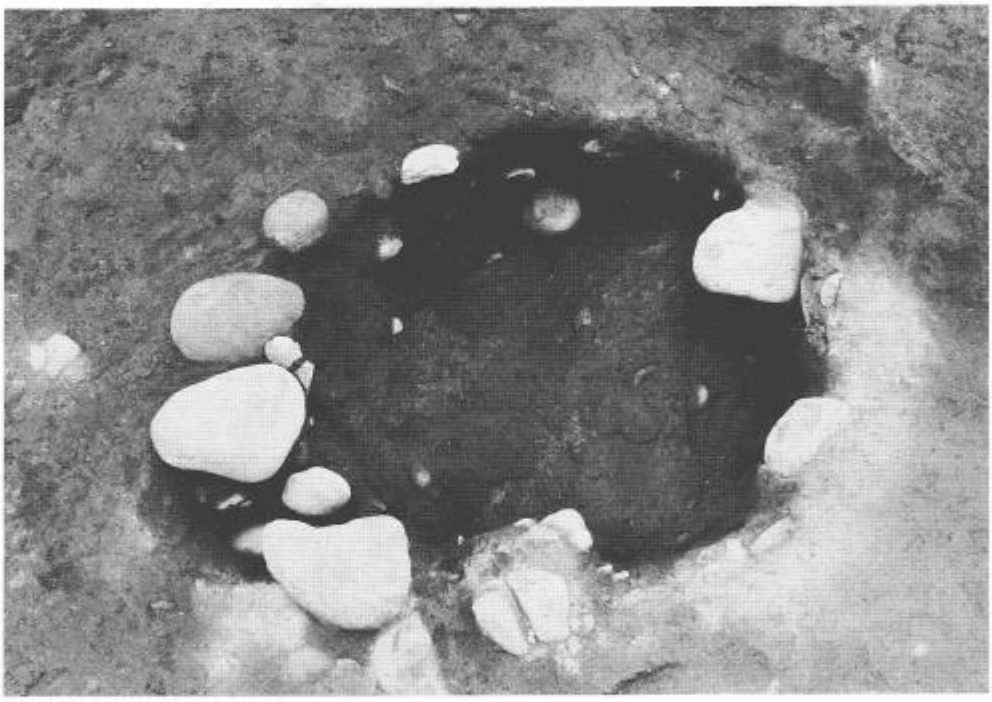
2　ＳＮ027石囲炉



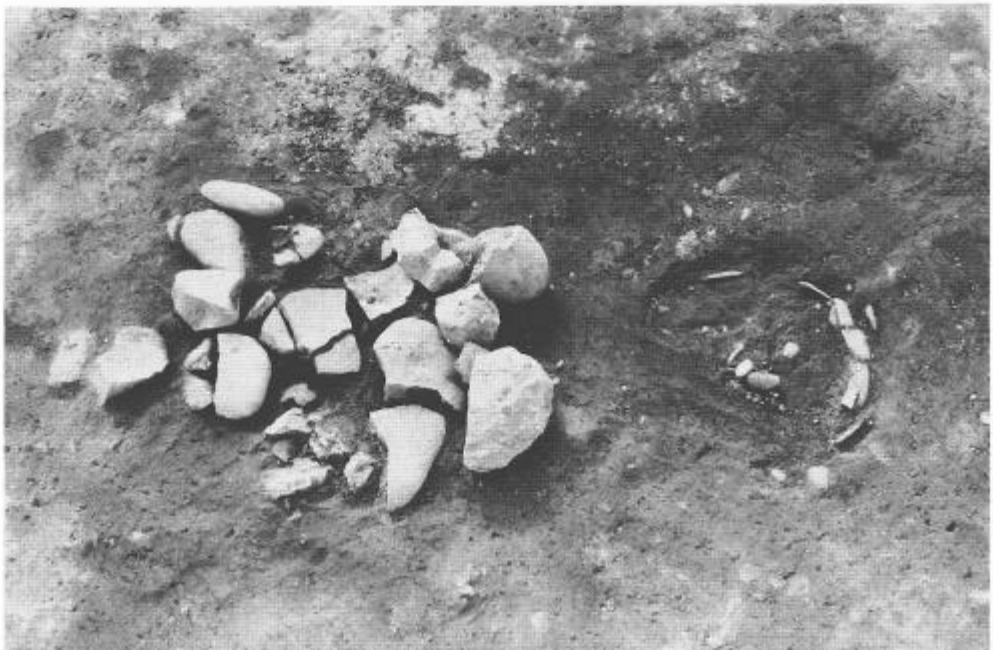
3　ＳＮ028石囲炉



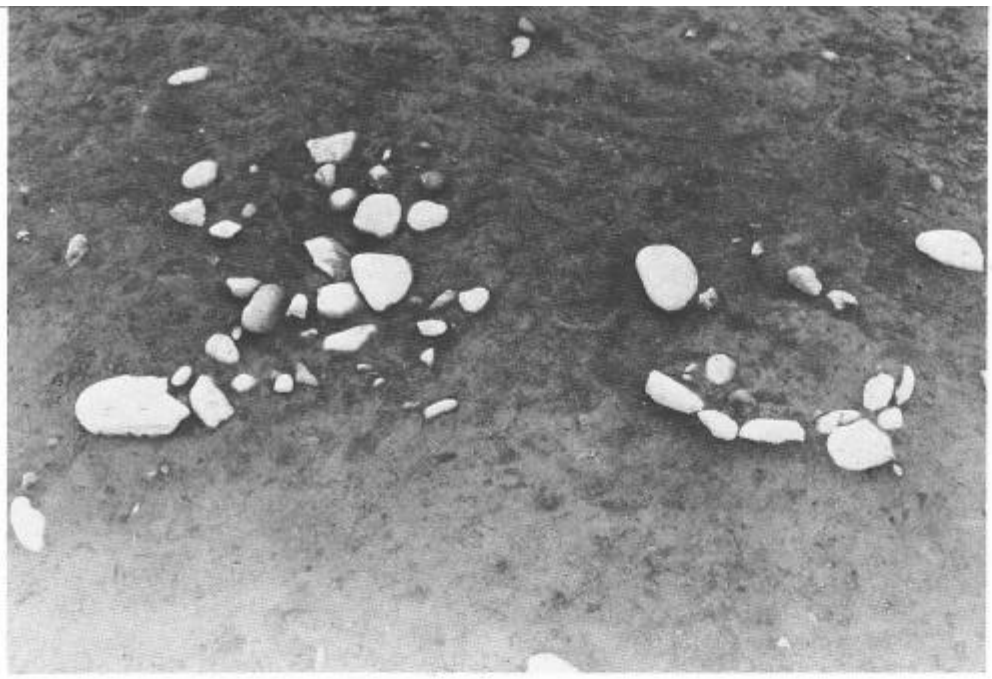
1　ＳＮ029石囲炉



2　ＳＮ030石囲炉



3　ＳＮ031・032石囲炉

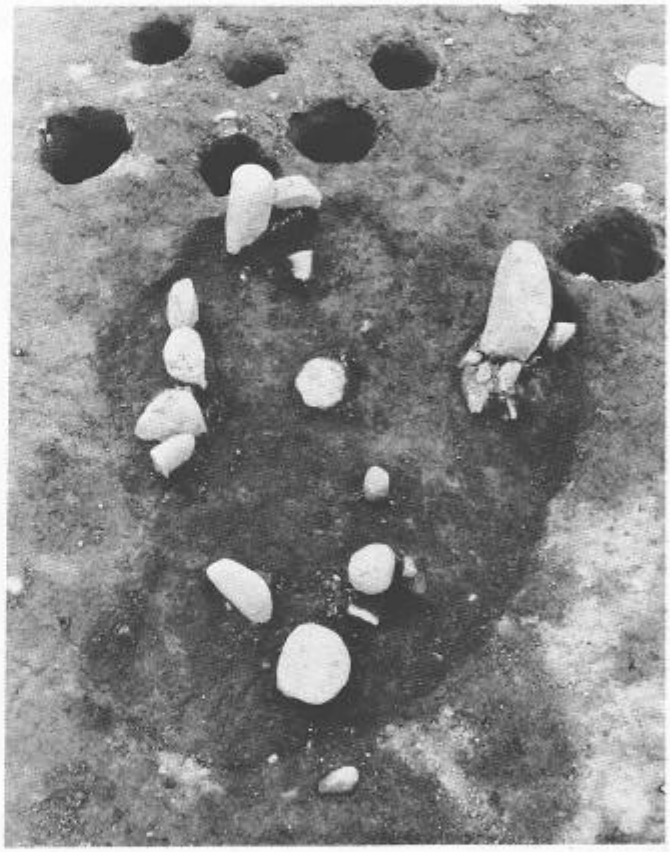


1　ＳＮ033石囲炉
ＳＱ003配石

2　ＳＮ033石囲炉

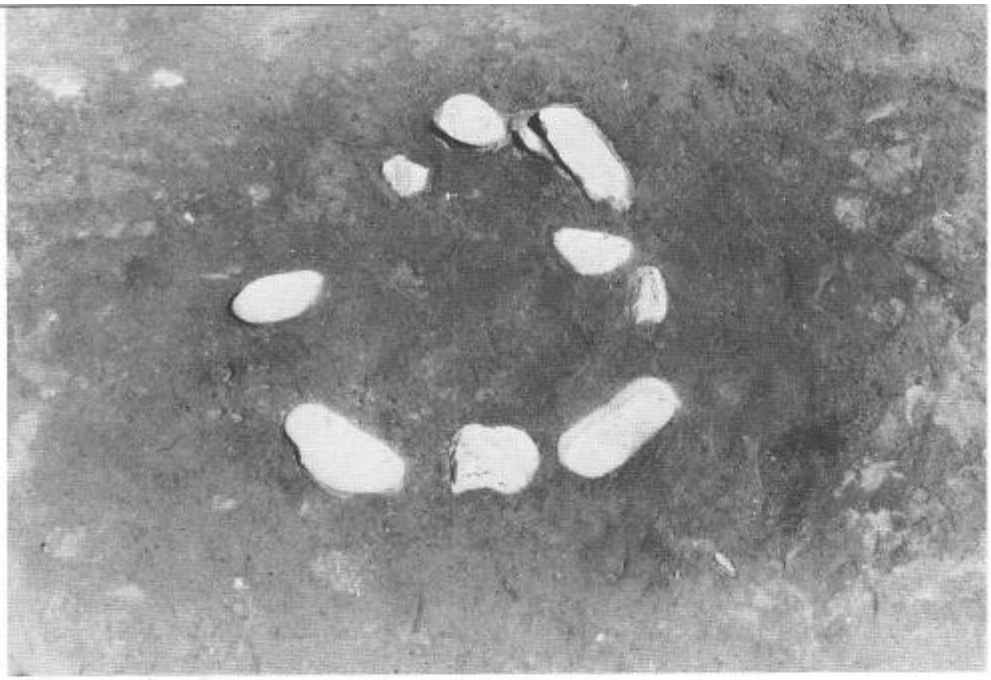
3　ＳＮ034石囲炉

1　ＳＮ037石囲炉

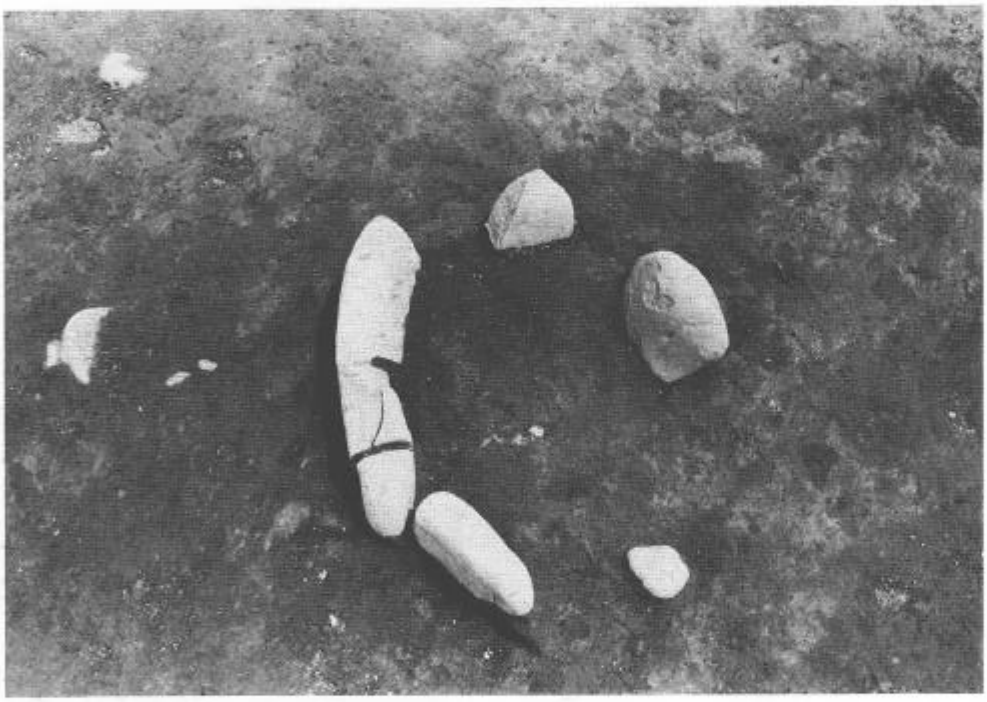


2　ＳＮ037石囲炉

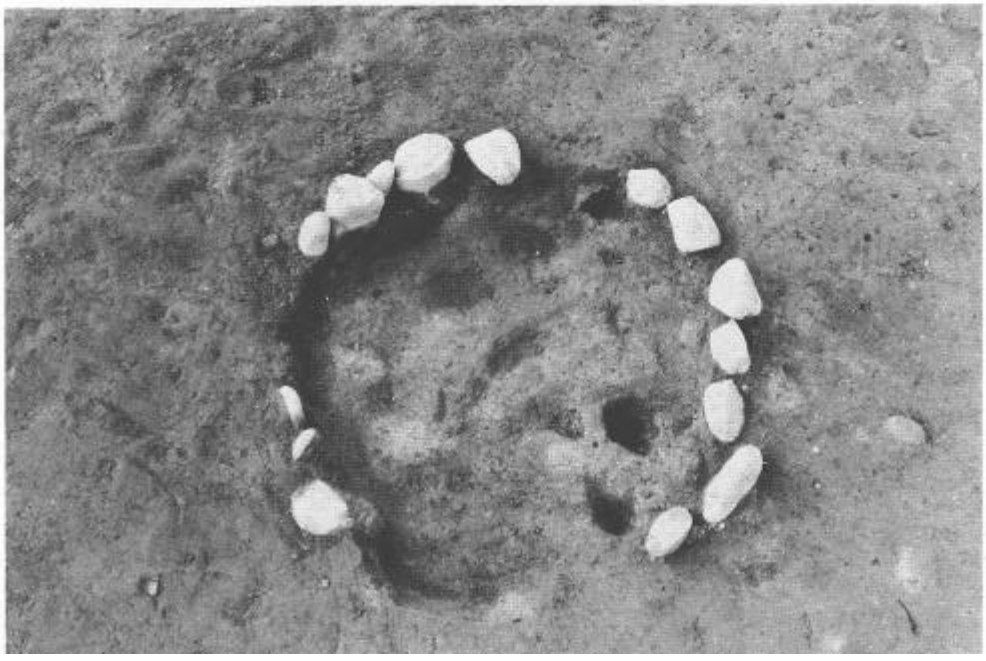
3　SN039石囲炉



1　ＳＮ040石囲炉



2　ＳＮ042石囲炉



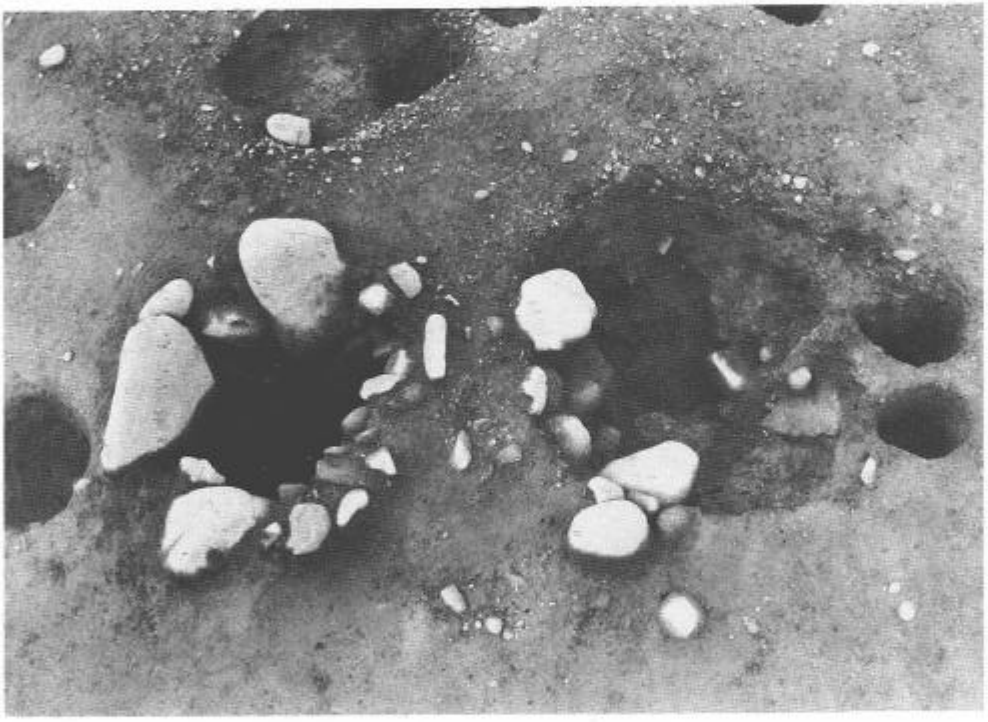
3　ＳＮ044石囲炉

1　ＳＮ047石囲炉

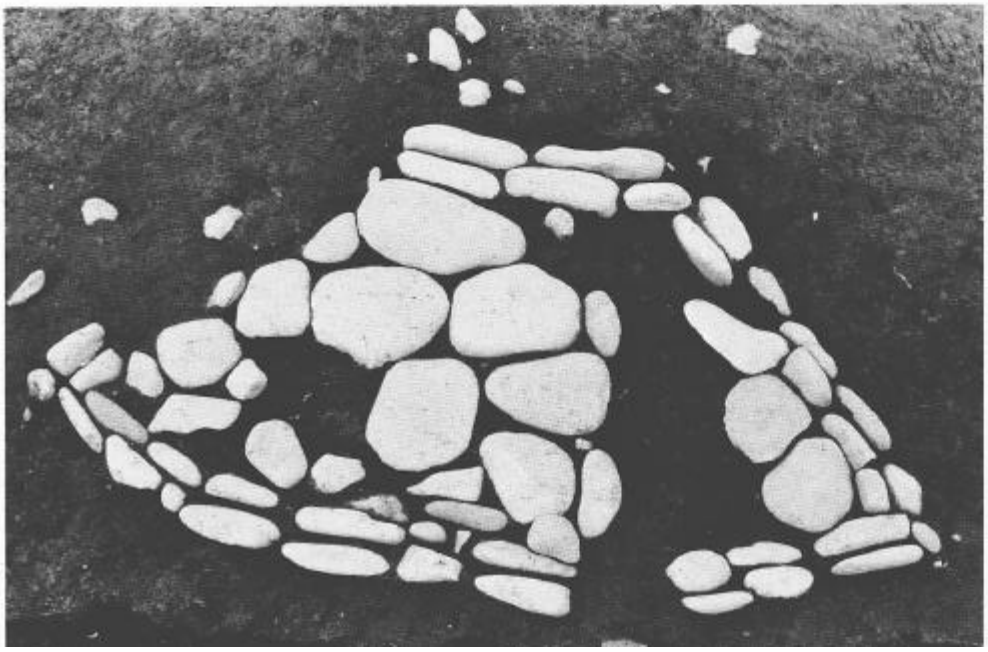
2　ＳＮ048石囲炉

3　ＳＱ002配石

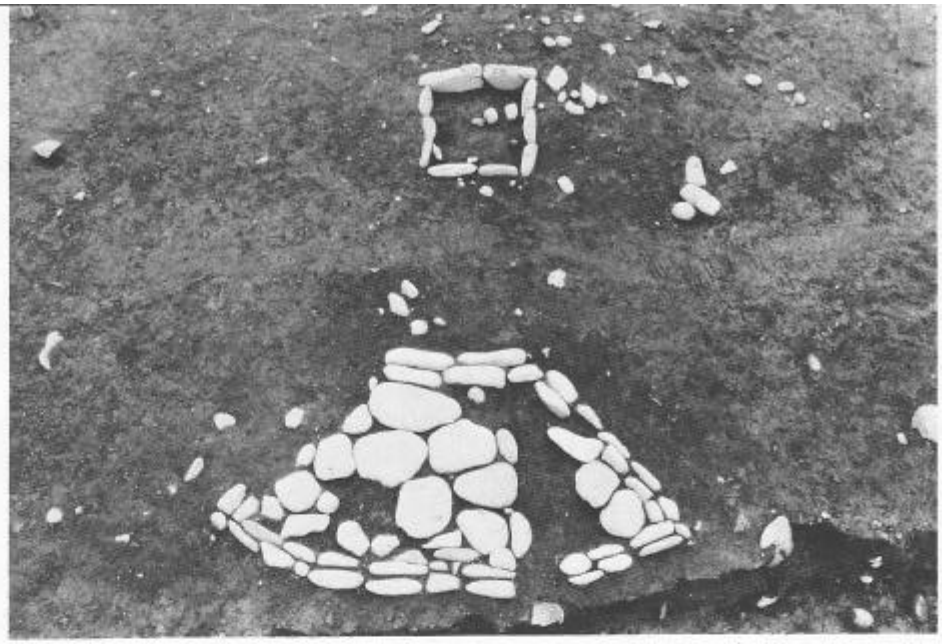
1　S Q002配石



2　S Q002配石



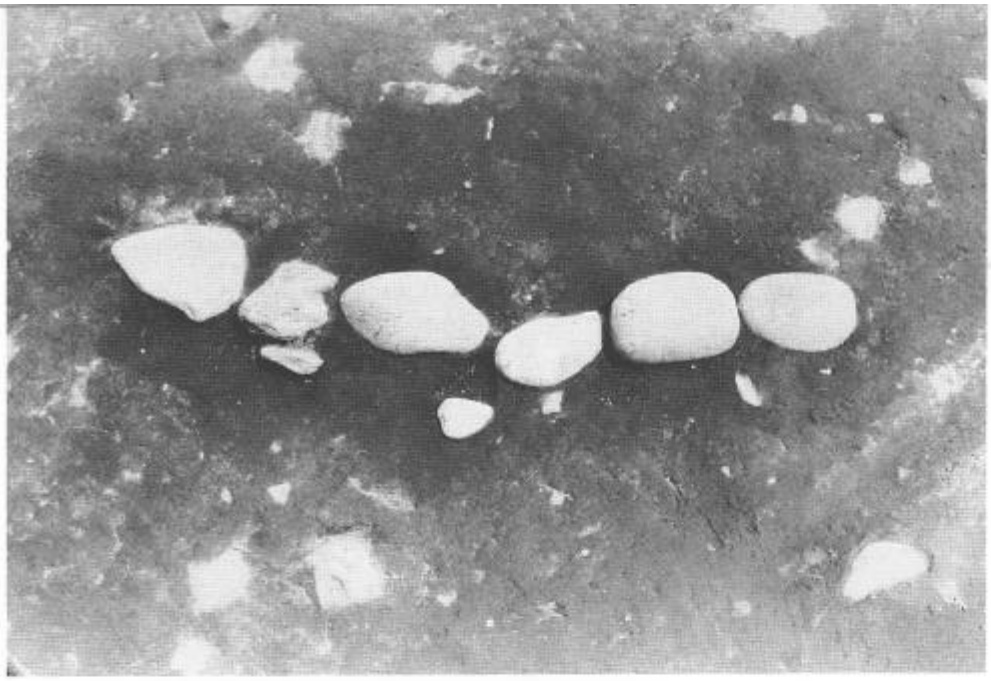
3　S Q006配石



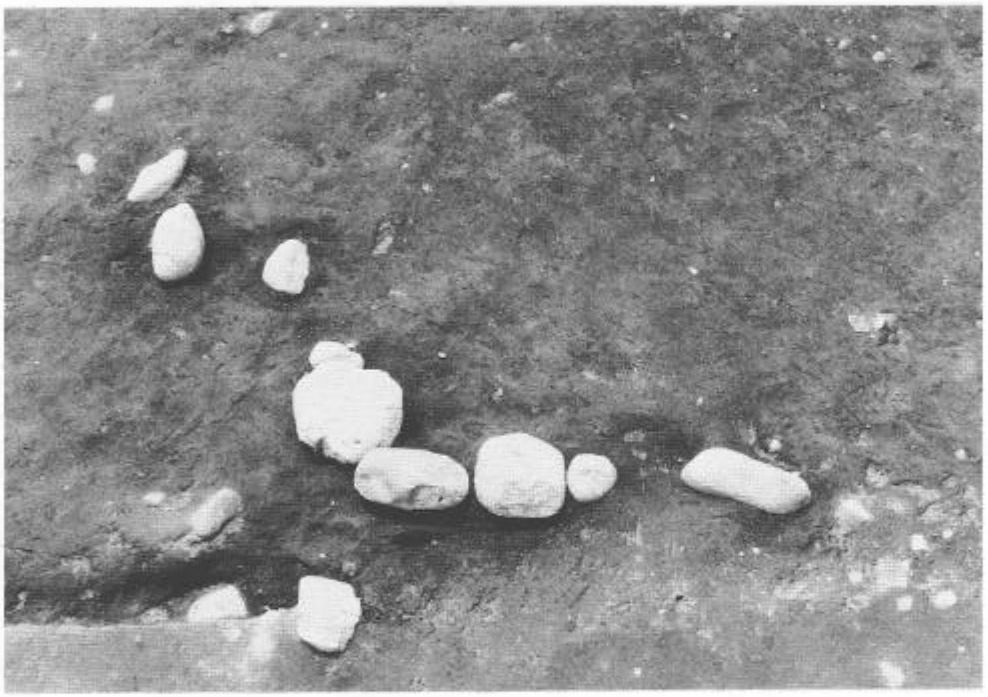
1　S Q006配石
　　S N024石囲炉

2　S Q007配石

3　S Q007配石

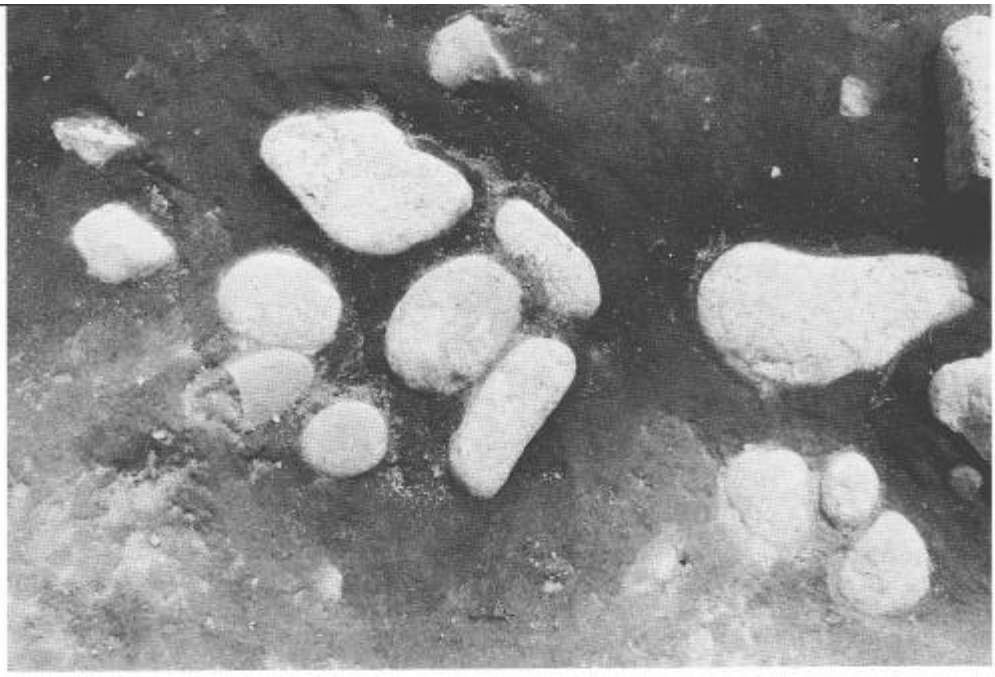


1　ＳＱ007配石

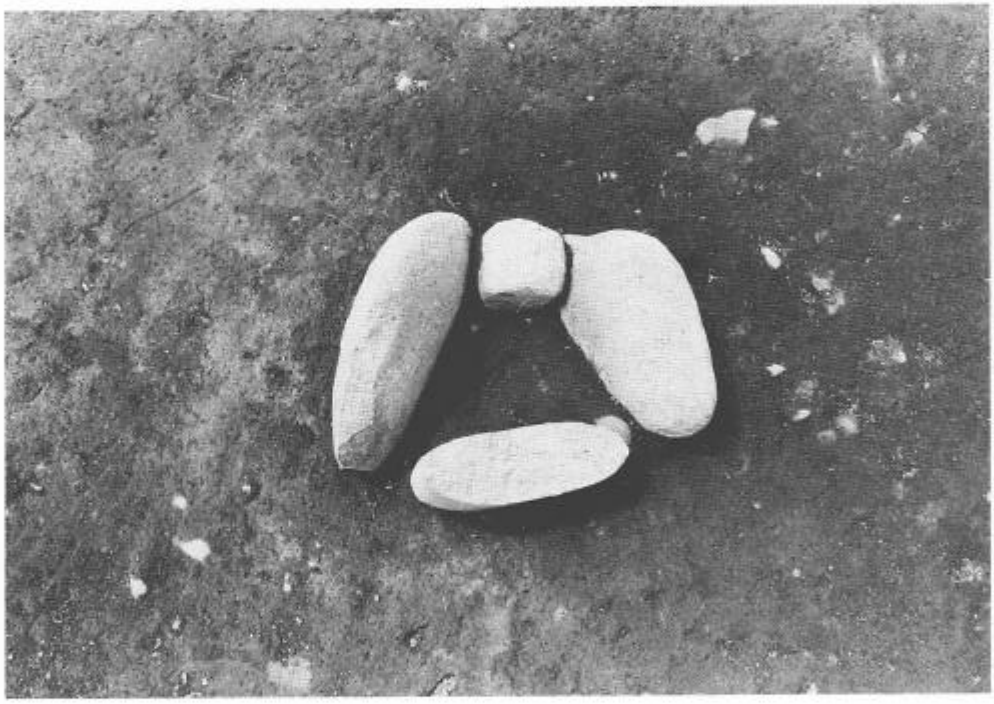


2　ＳＱ007配石

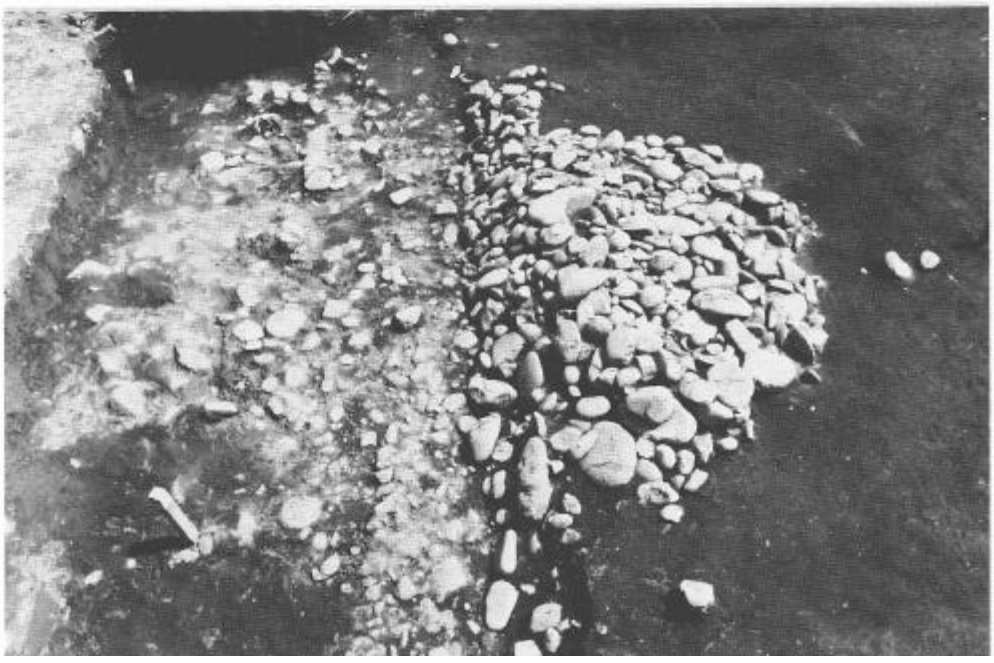
3　ＳＱ007配石



1　S Q007配石

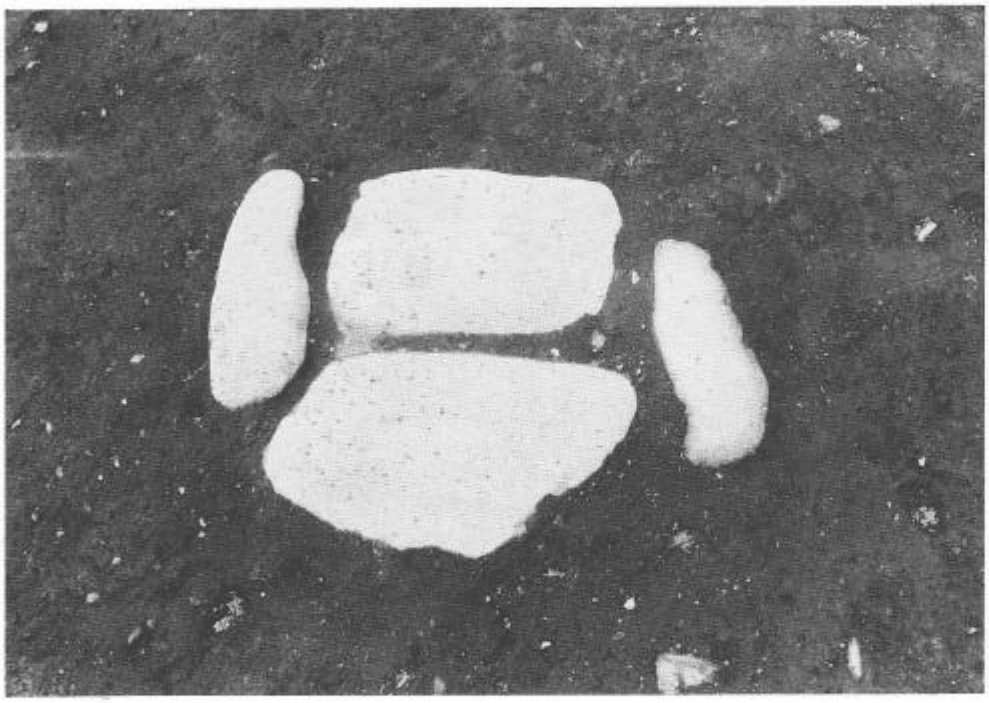


2　S Q009配石



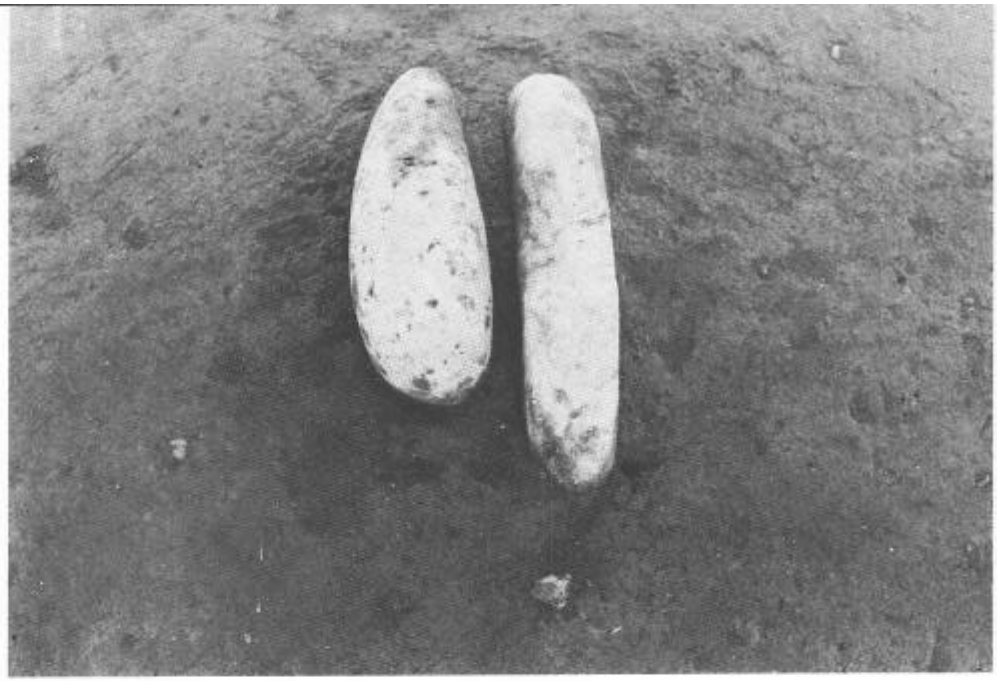
3　S Q015配石

1　S Q015配石



2　S Q016配石

3　M D59IV層上面の配石



1　ＭＢ59地山面の配石

2　ＳＸ001その他の遺構

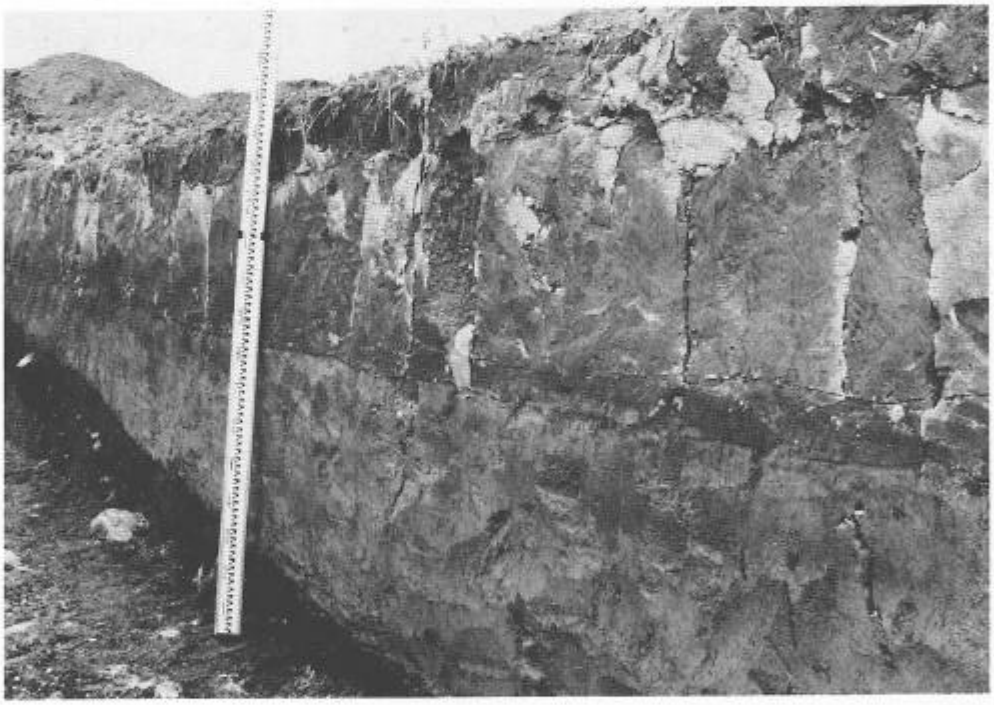
3　ＳＸ002その他の遺構

1　ＳＸ005大洞C₂式土器
一括出土状態

2　ＳＸ005大洞C₂式土器
一括出土状態

3　ＳＸ006大洞Ａ式土器
一括出土状態

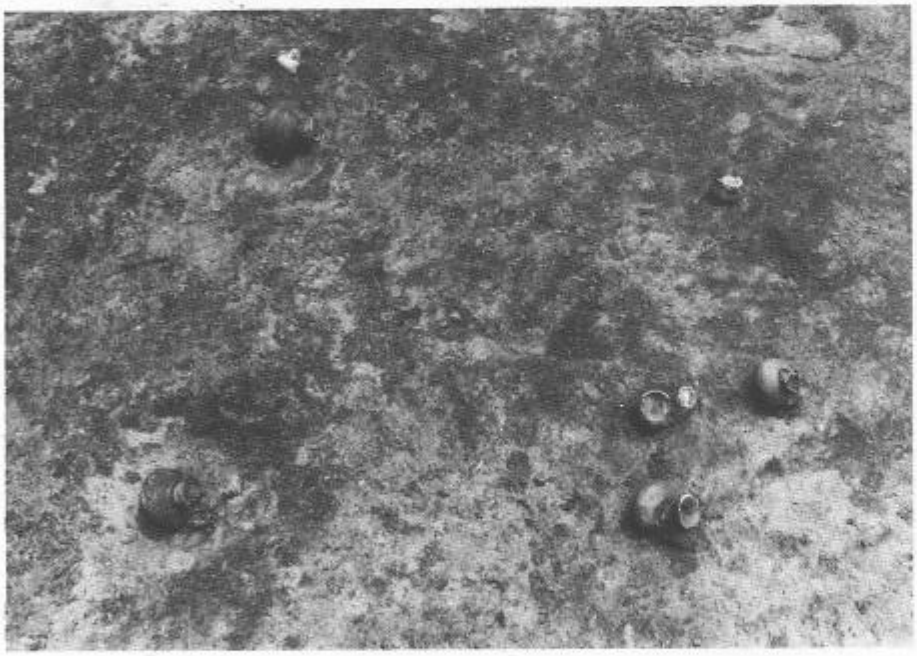
1　ＳＸ006大洞Ａ式土器
一括出土状態



2　ＳＸ008包含層

3　ＳＸ009捨て場遺物
出土状態

1　ＳＸ009捨て場遺物出土状態

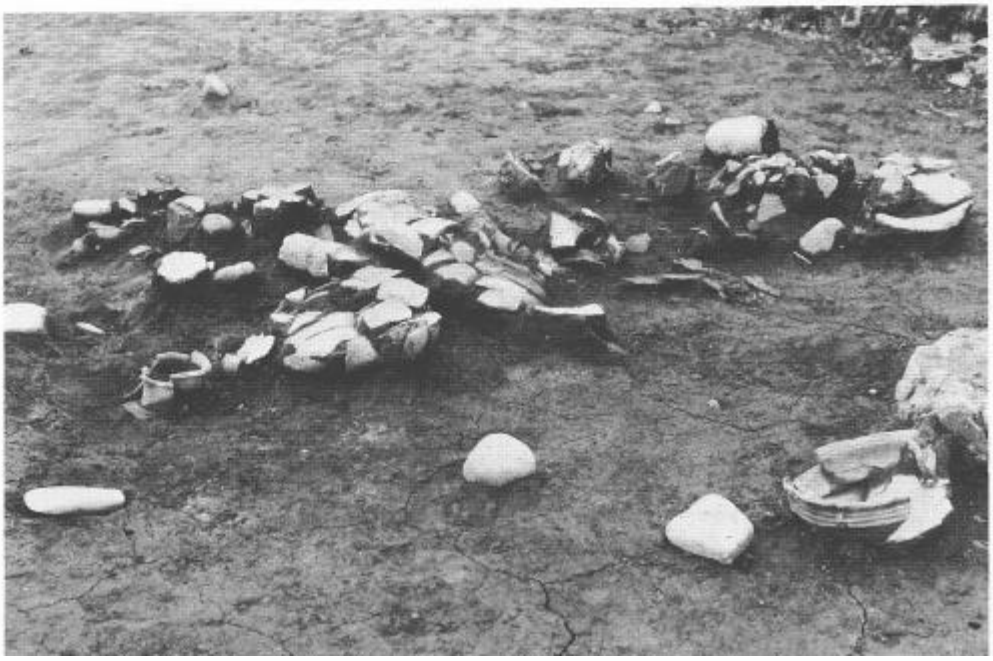


2　ＳＸ009捨て場遺物出土状態

3　ＳＸ009捨て場遺物出土状態

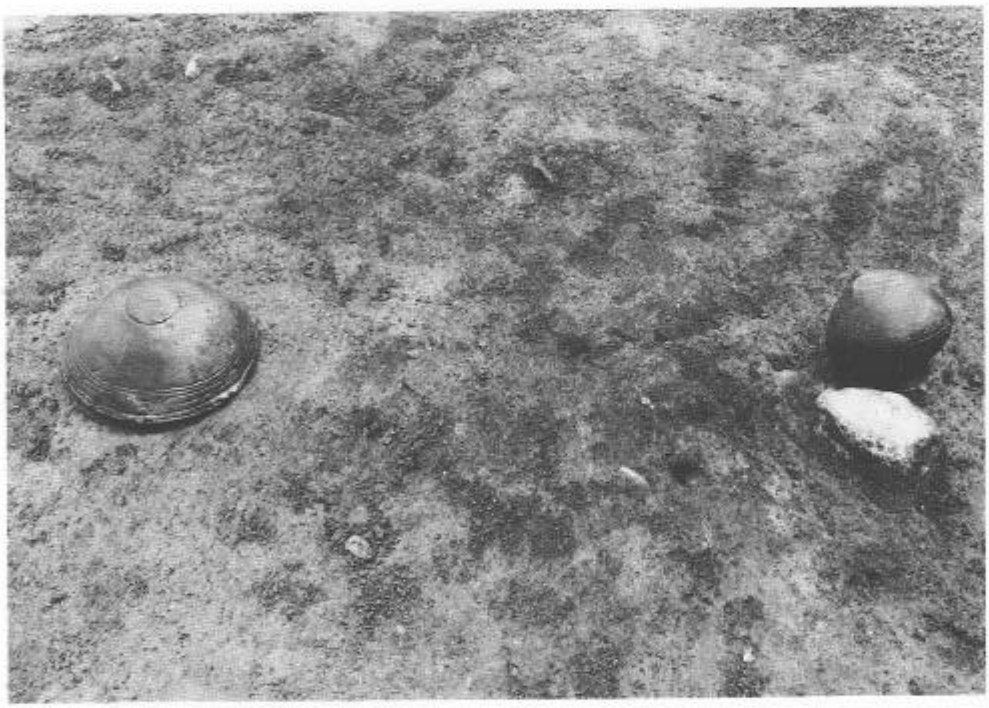
1　第IV層上面の状態

2　第IV層上面の状態



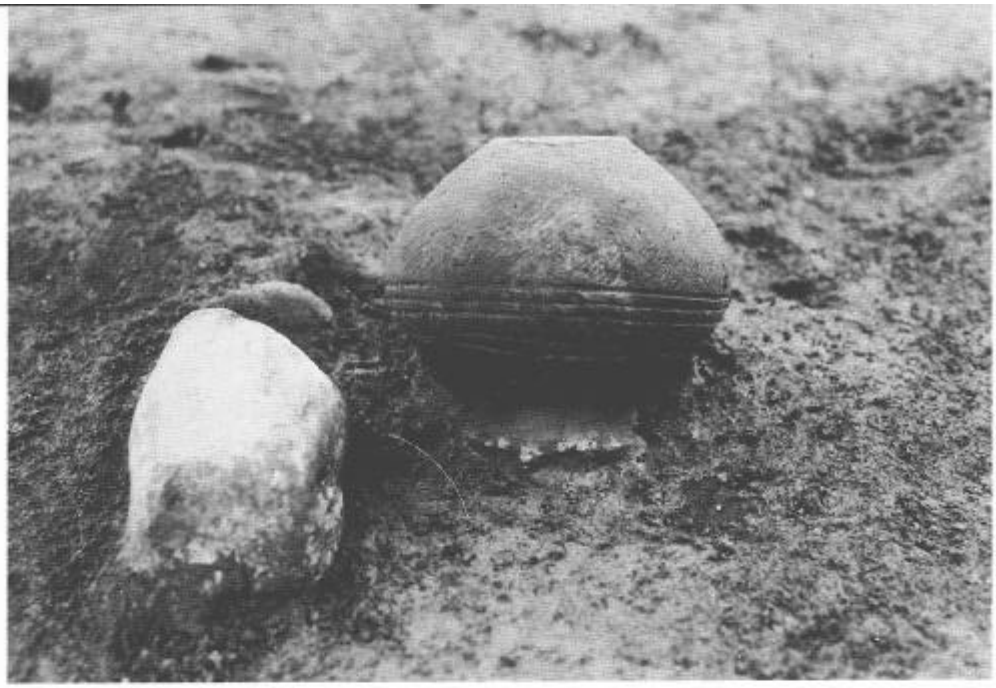
3　土器出土状態

1　土器出土状態



2　土器出土状態

3　土器出土状態

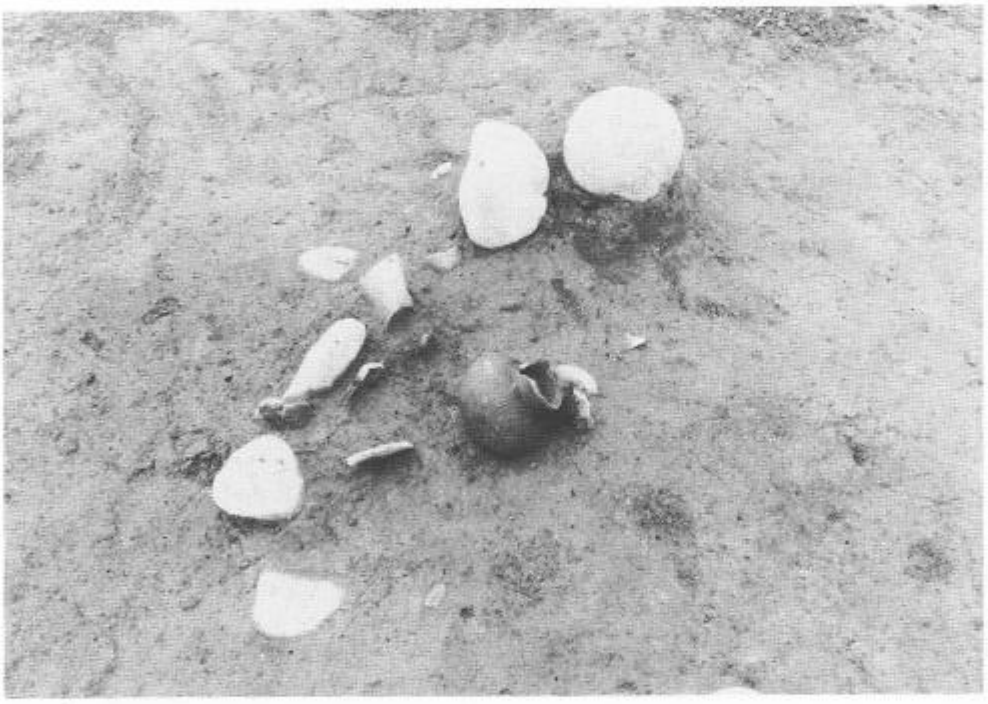


1　土器出土状態

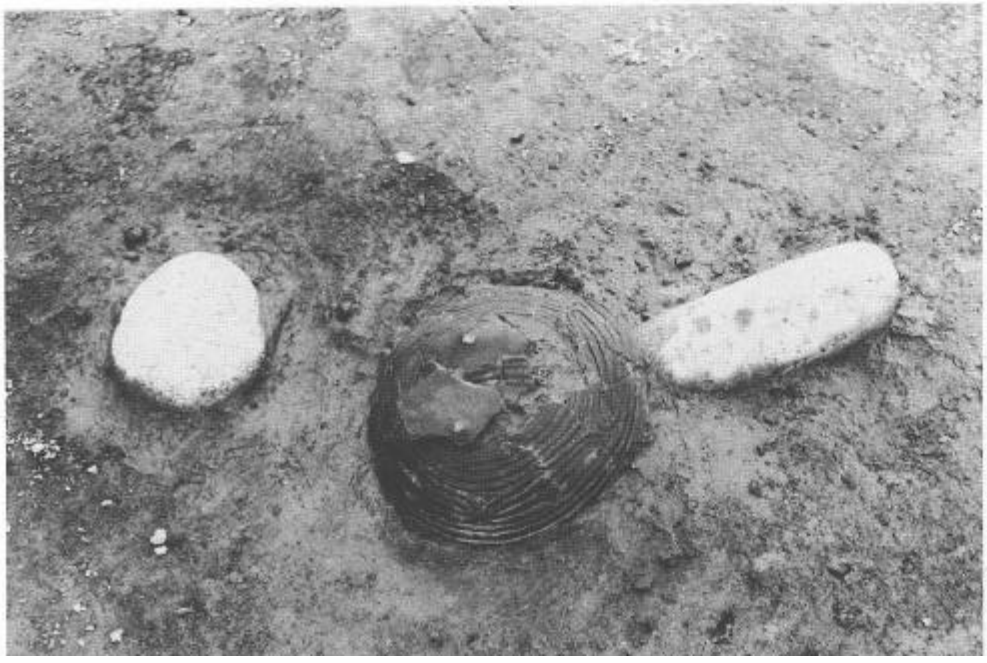
2　土器出土状態

3　土器出土状態

1　土器出土状態



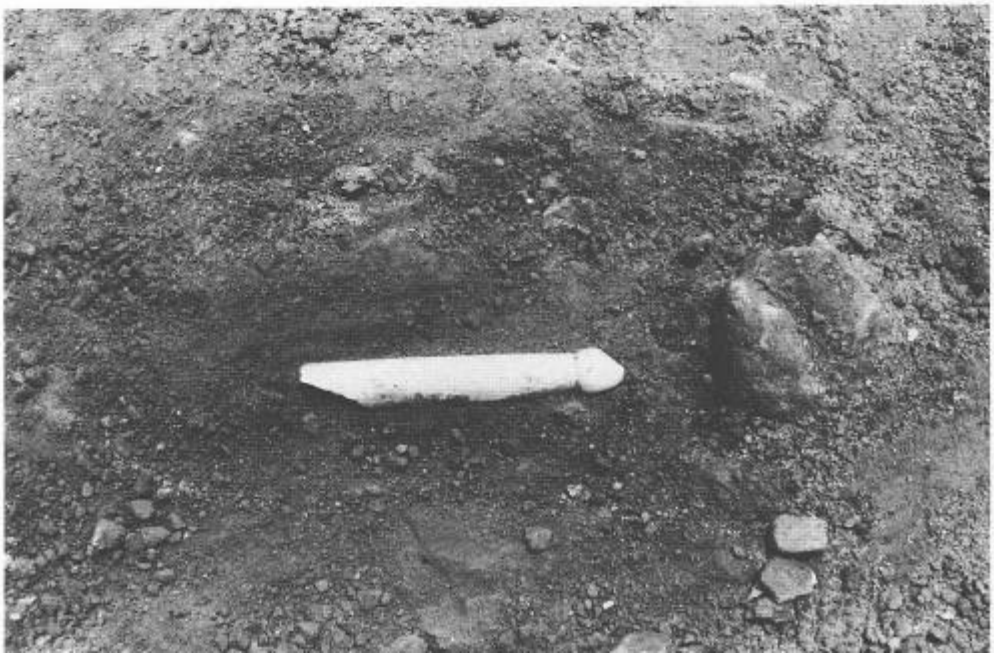
2　土器出土状態



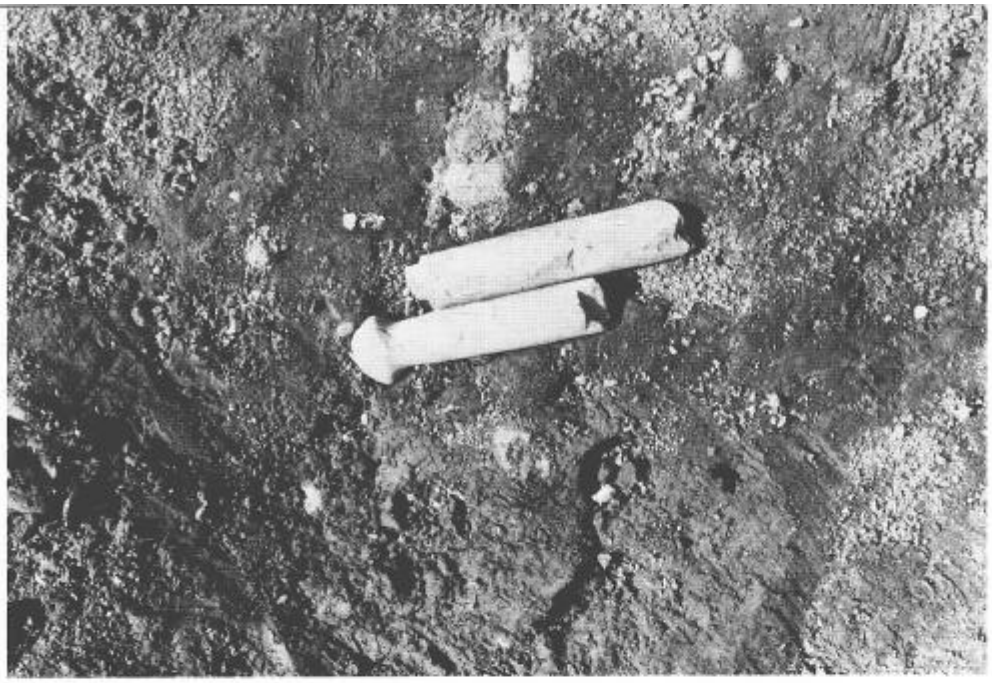
3　土器出土状態

1　土器出土状態

2　土器出土状態

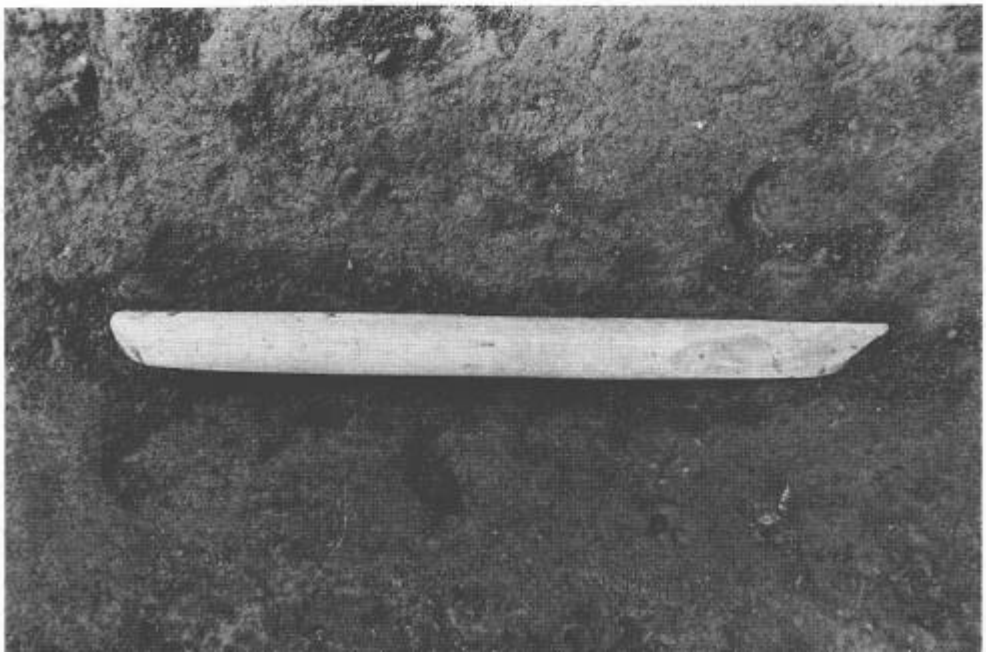


3　石器出土状態



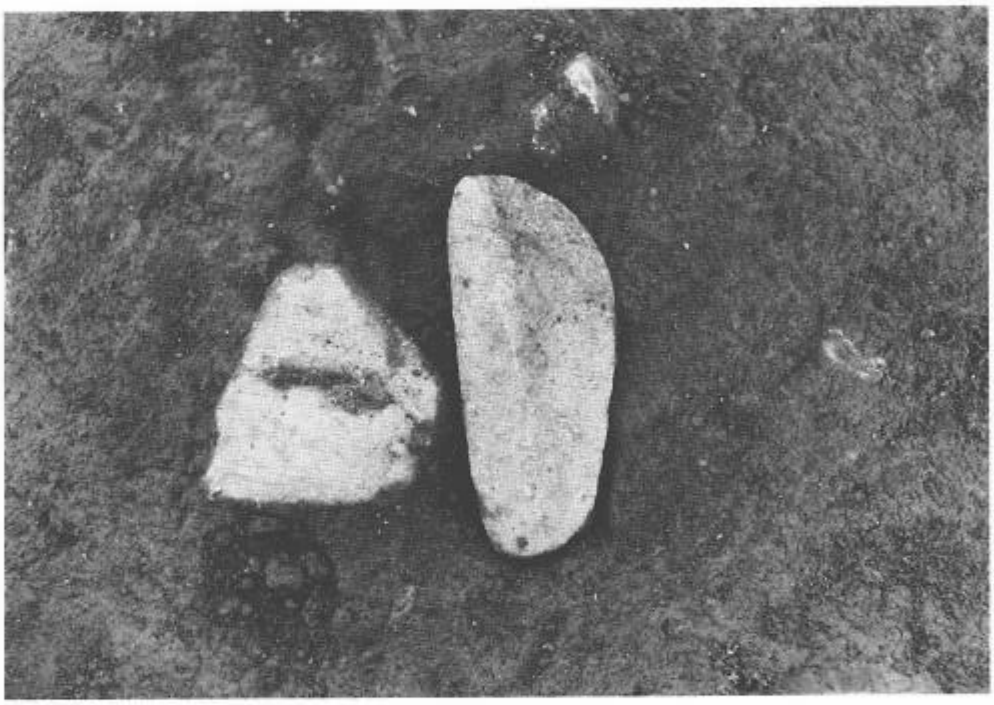
1　石器出土状態

2　石器出土状態



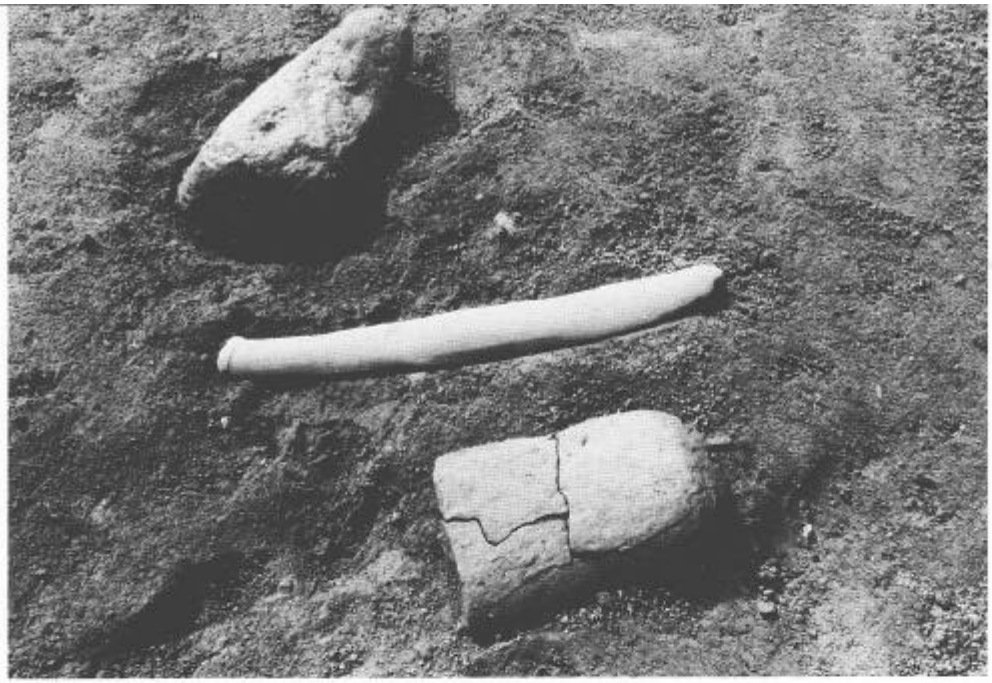
3　石器出土状態

1　石器出土状態

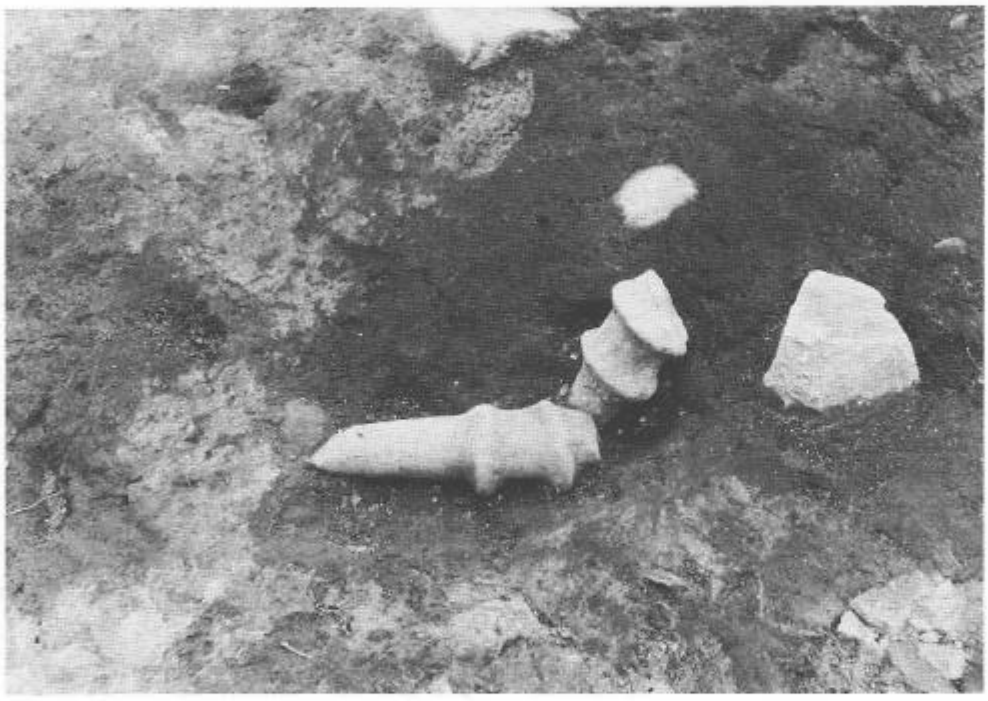


2　石器出土状態

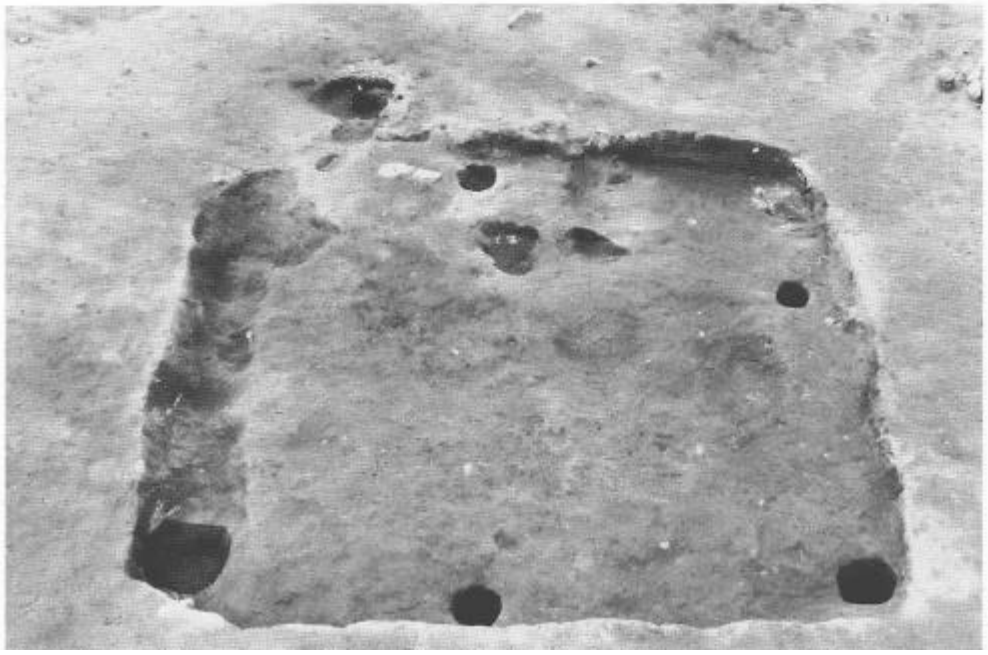
3　石器出土状態



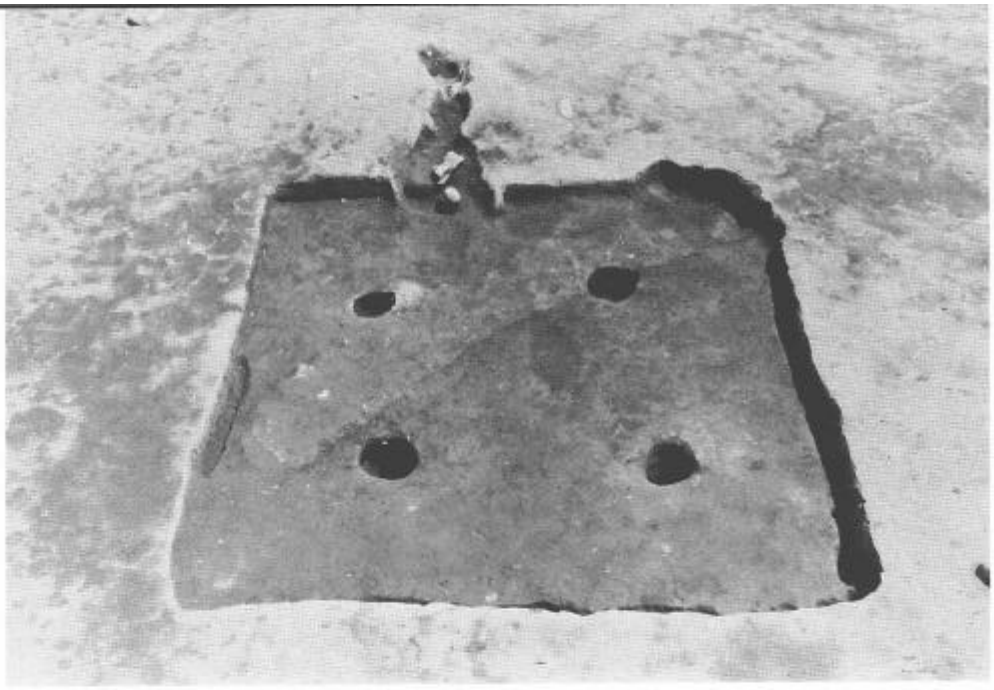
1　石器出土状態



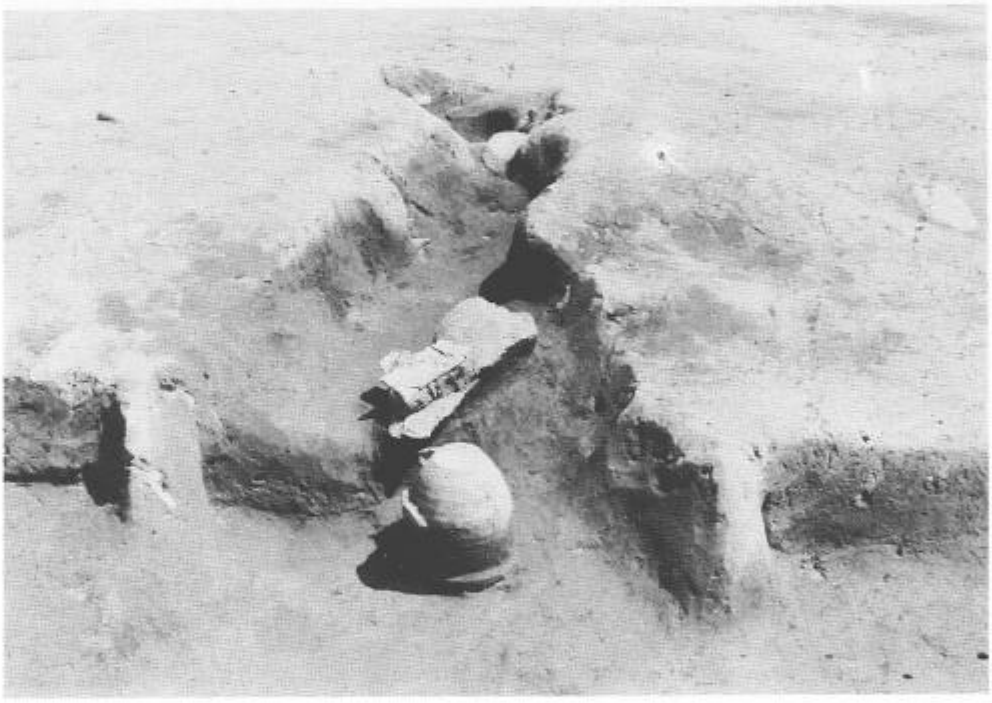
2　石器出土状態



3　ＳＩ001竪穴住居跡



1　ＳＩ002竪穴住居跡



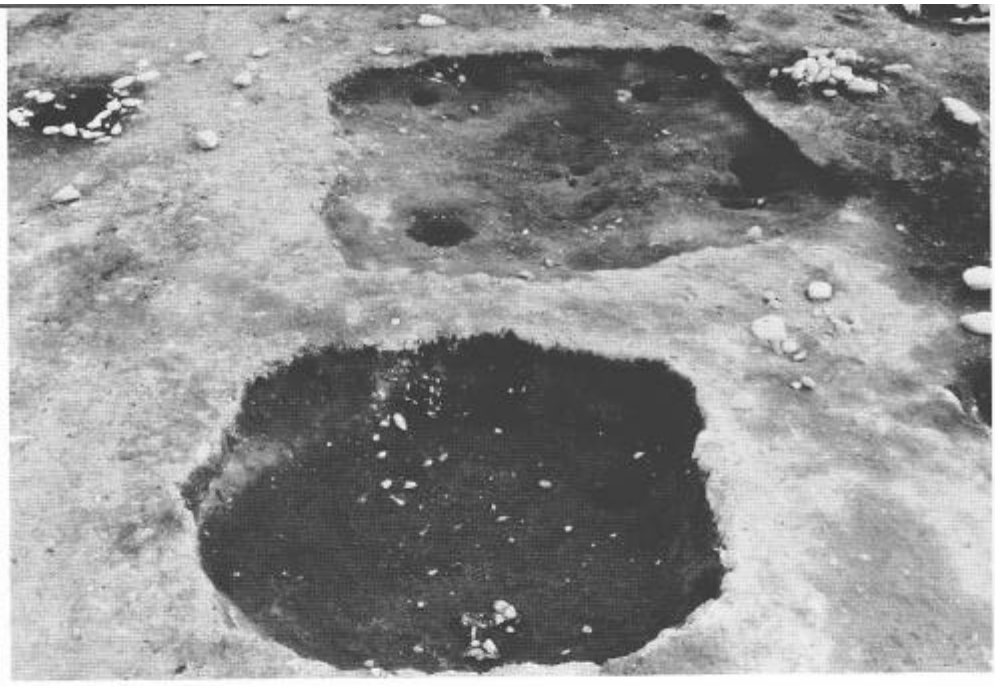
2　ＳＩ002竪穴住居跡
カマド

3　ＳＩ003竪穴住居跡

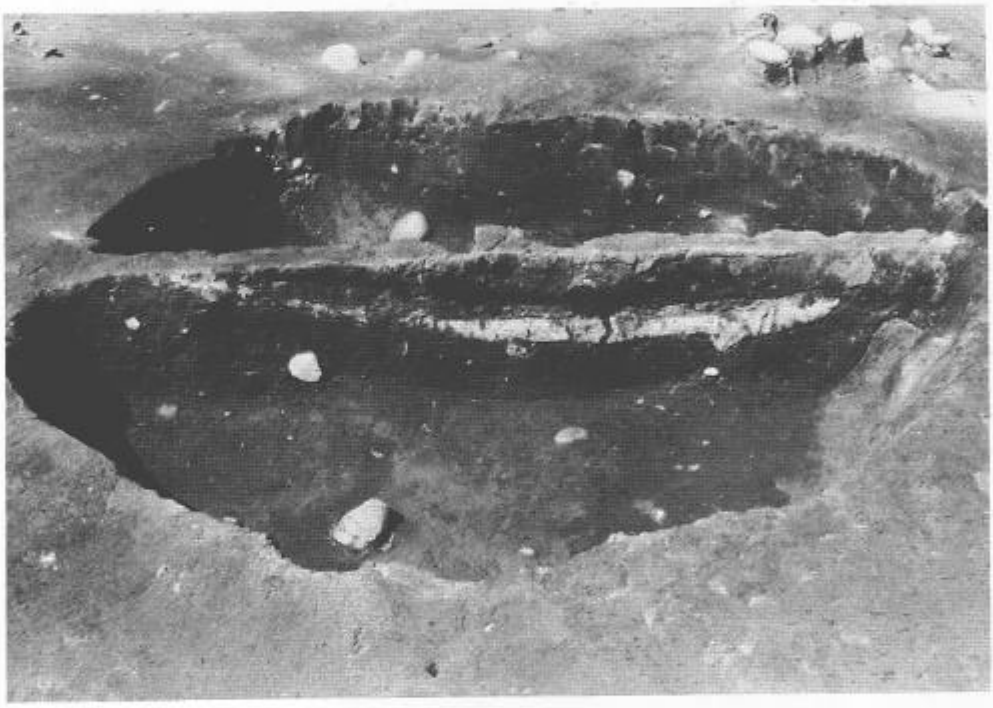
1　ＳＩ003竪穴住居跡

2　ＳＩ003竪穴住居跡

3　ＳＩ003竪穴住居跡



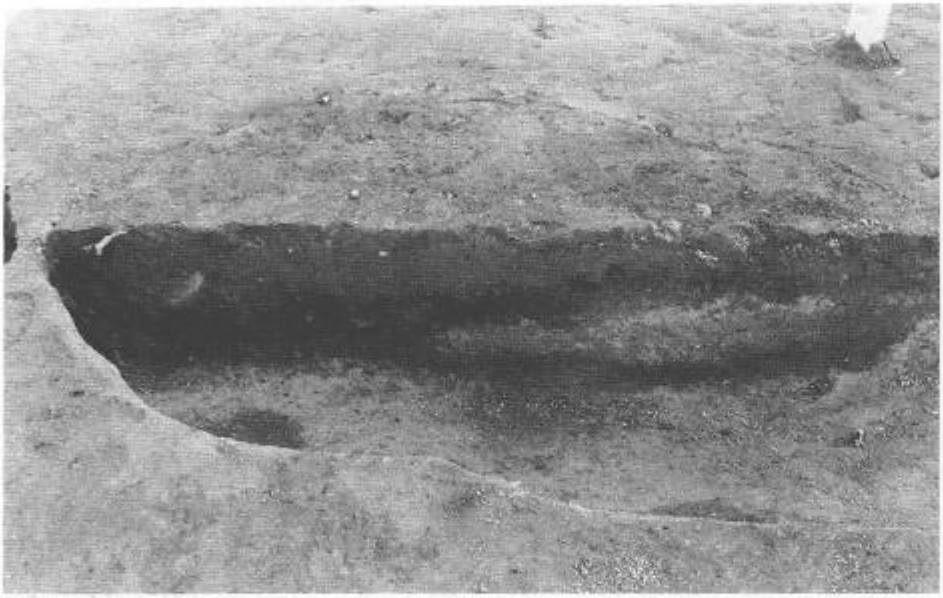
1　ＳＫ(Ｉ)001竪穴状遺構



2　ＳＫ(Ｉ)002竪穴状遺構

3　ＳＫ(Ｉ)003竪穴状遺構

1　ＳＩ003竪穴住居跡
ＳＫ(Ｉ)001～003
竪穴状遺構



2　ＳＮ001焼土遺構

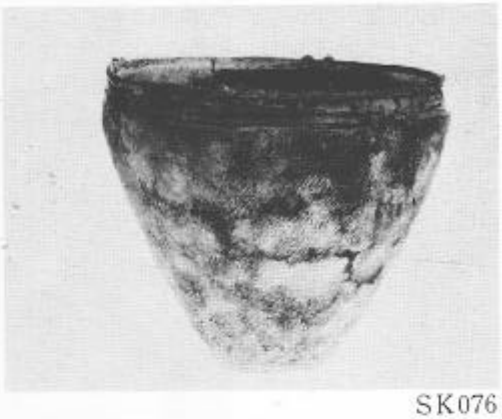
3　ＳＮ002焼土遺構

1　調査風景

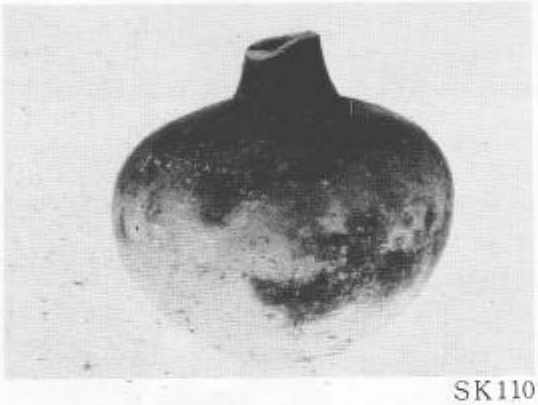
2　調査風景

3　調査風景

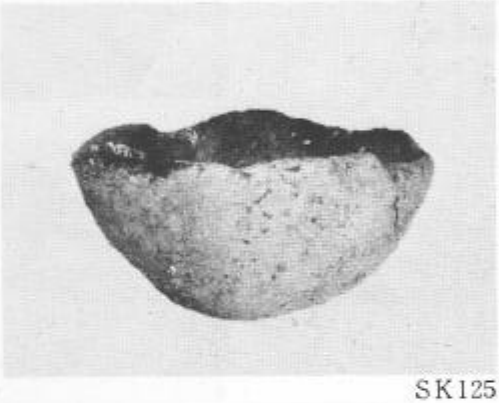
SK051



SK076



SK110

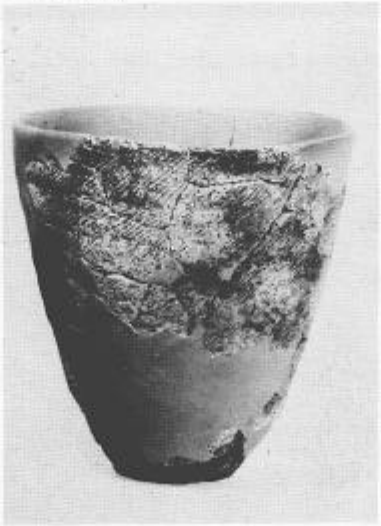


SK125

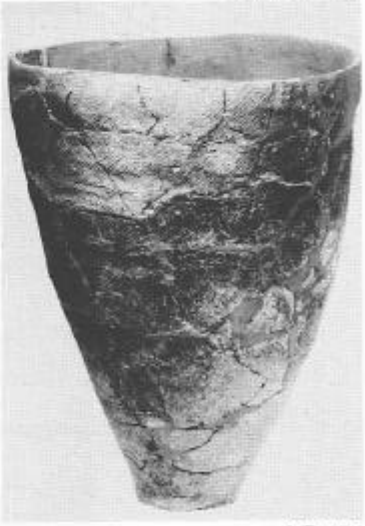
SK149

SR007内部

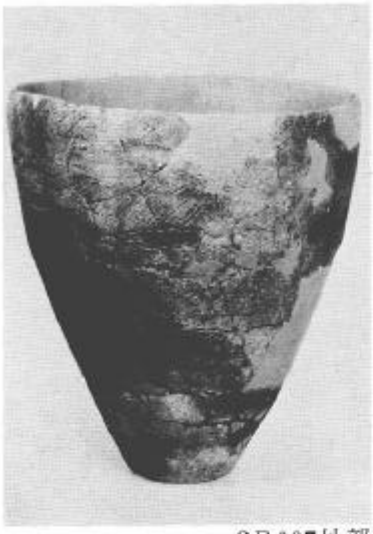
SR001



SR004



SR005



SR007外部

SR009

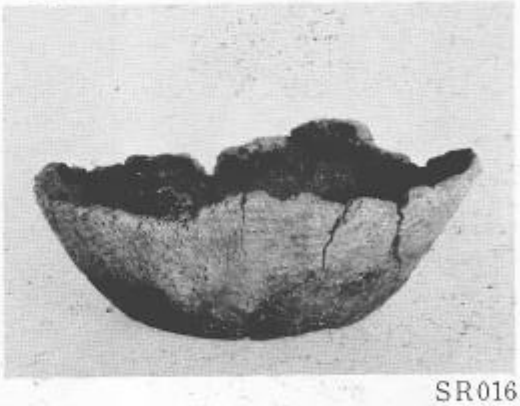
SR010内部

SR015

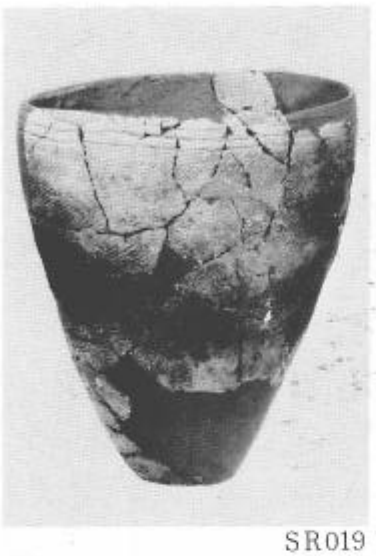
SR017

SR018

SR016

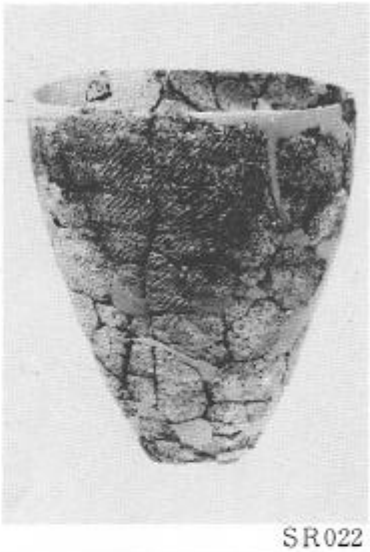


SR016



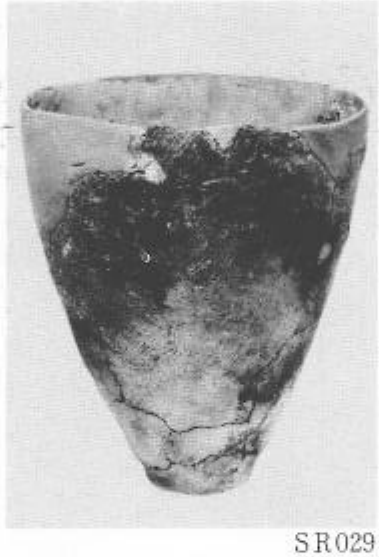
SR019

SR021

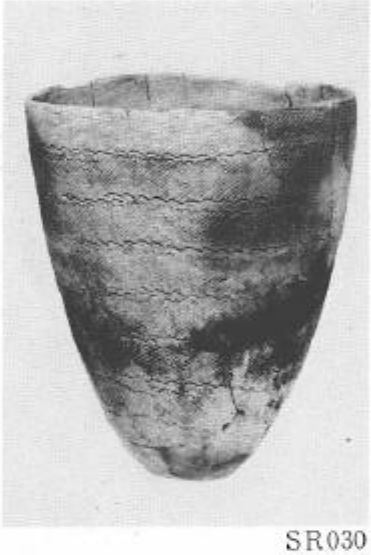


SR022

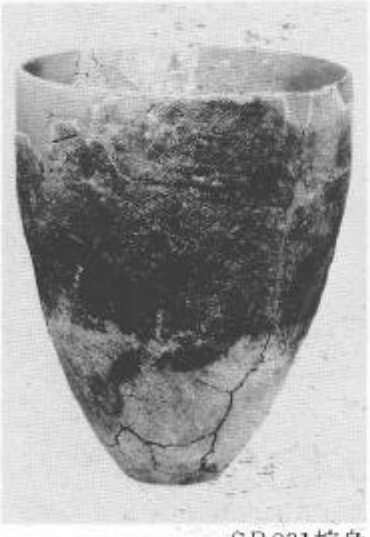
SR028



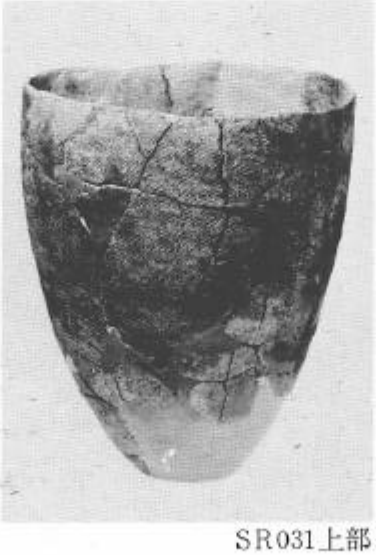
SR029



SR030



SR031棺身

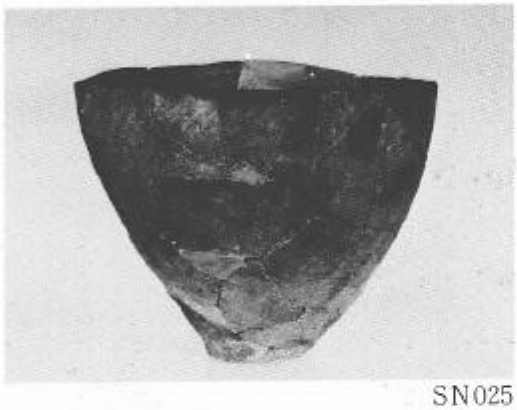


SR031上部

SR032

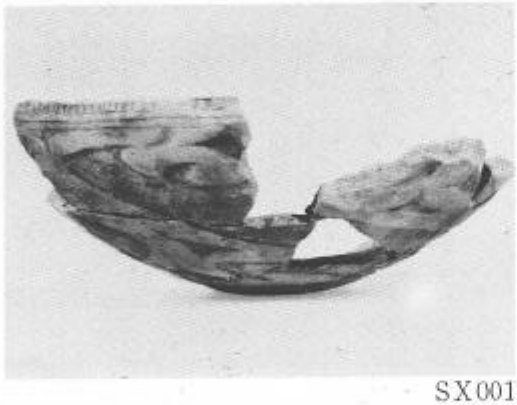
SR034

SN025



SN025

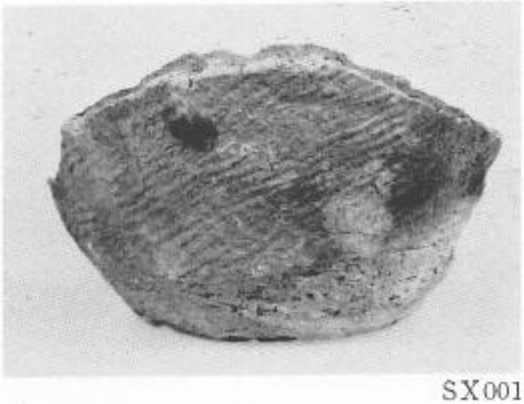
SN025



SX001

SX001

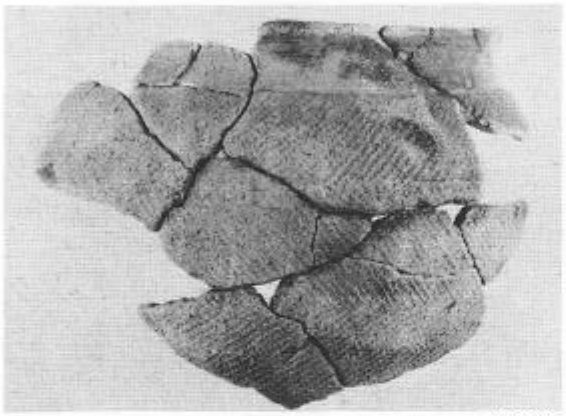
SX001

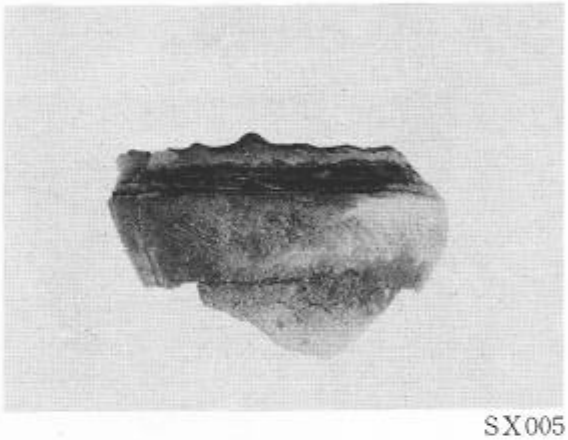


SX001

SX005

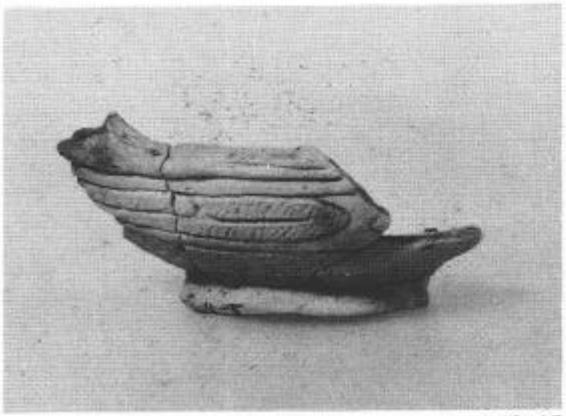
SX005

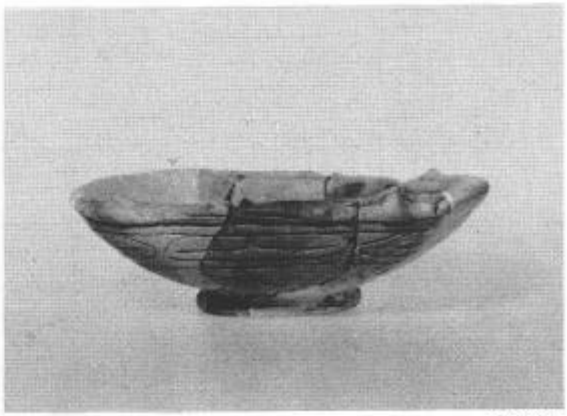

SX005


SX005

SX005

SX005


SX005

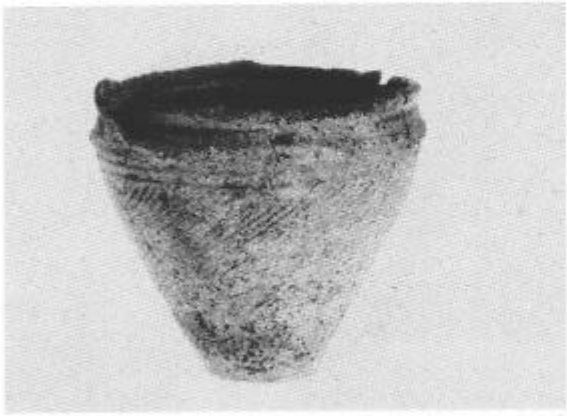

SX005

SX005

SX005

SX005

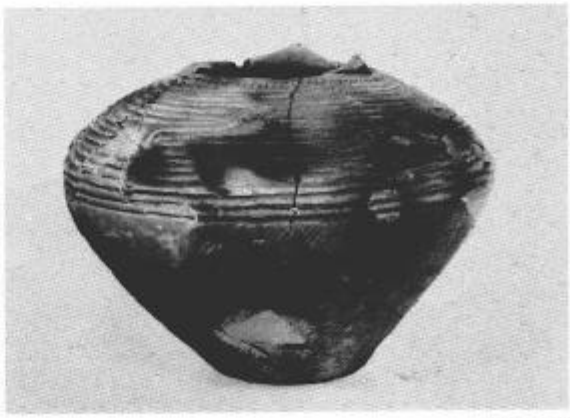
SX006



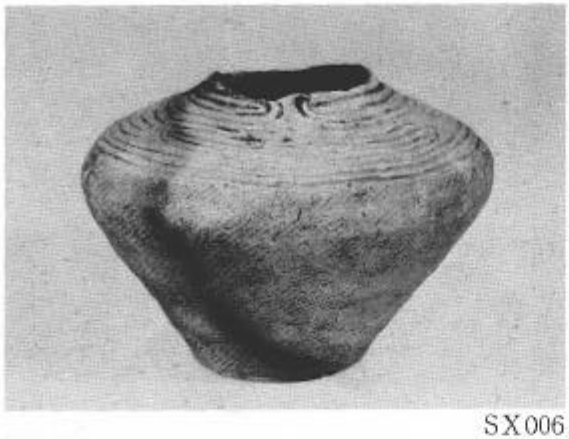
SX006

SX006

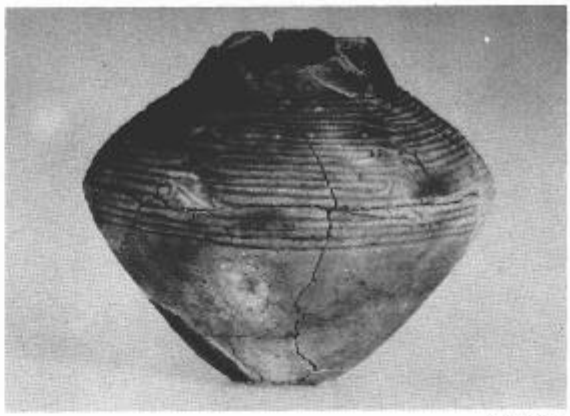
SX006



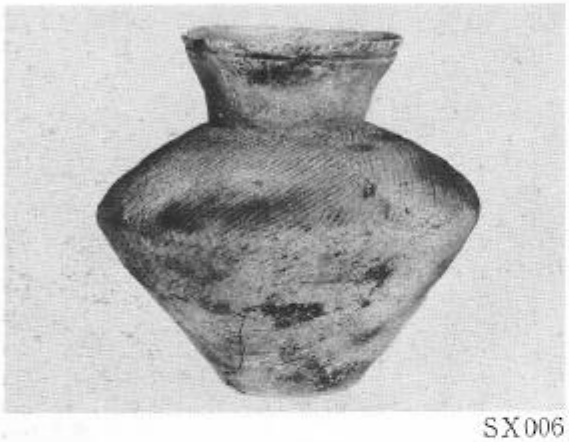
SX006



SX006



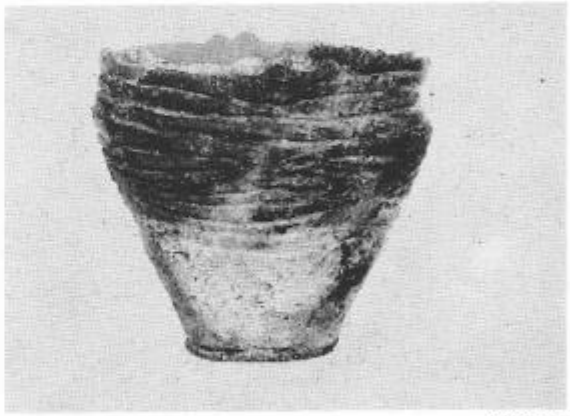
SX006



SX006

SX009

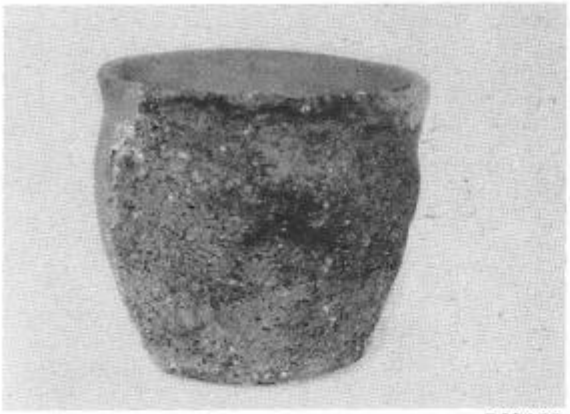
SX009



SX009

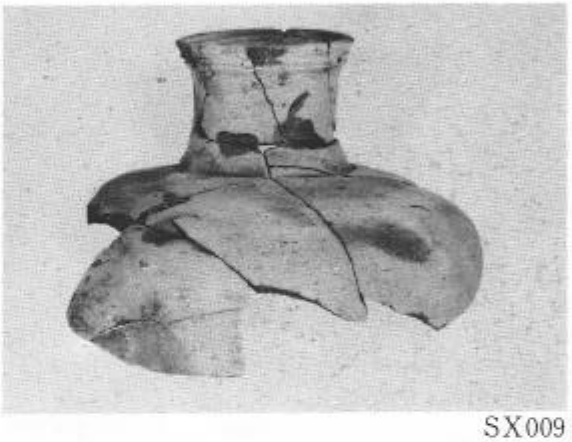
SX009

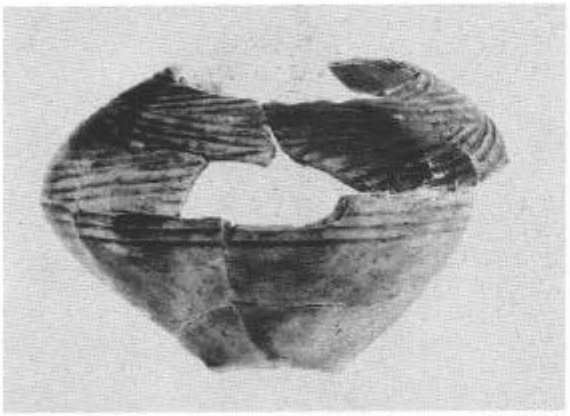
SX009


SX009

SX009

SX009


SX009

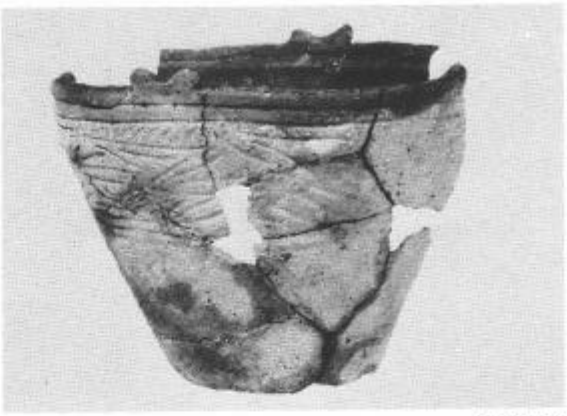

SX009

SX009

SX009

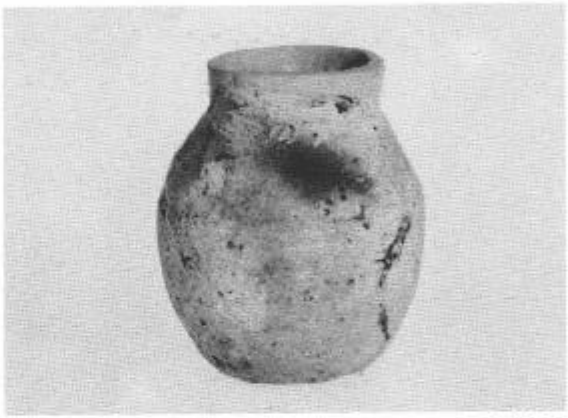
SX009

SX009

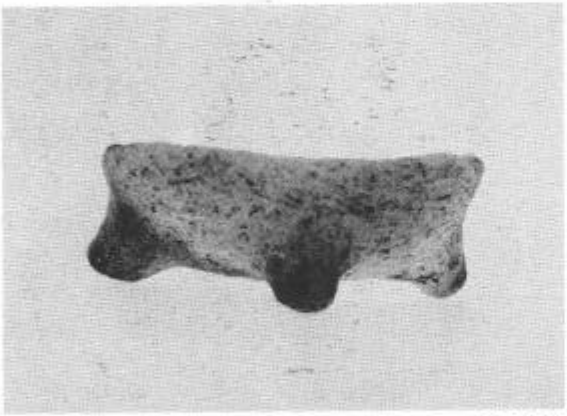


SX009

SX009



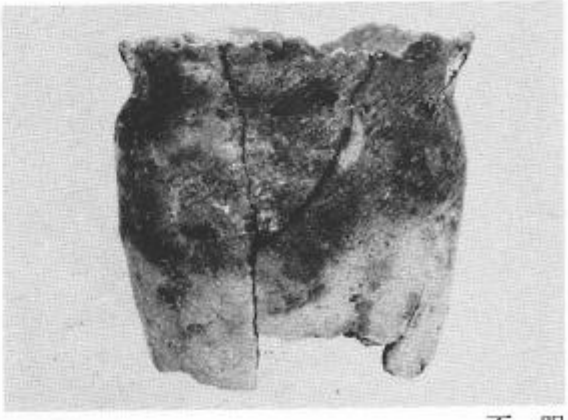
SX009



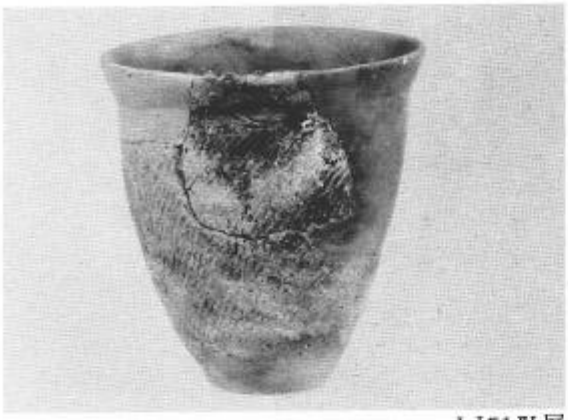
SX009

SX009

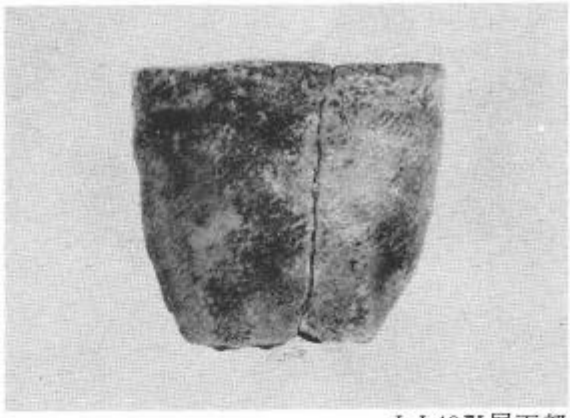
MA60III層



不　明

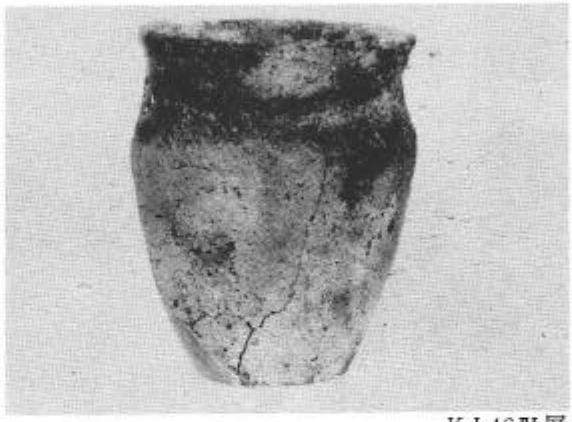


LI51Ⅳ層



LJ48Ⅳ層下部

MB50Ⅲ層下部

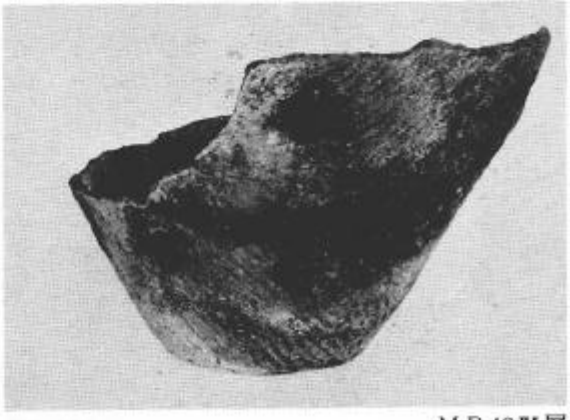


KJ46Ⅳ層

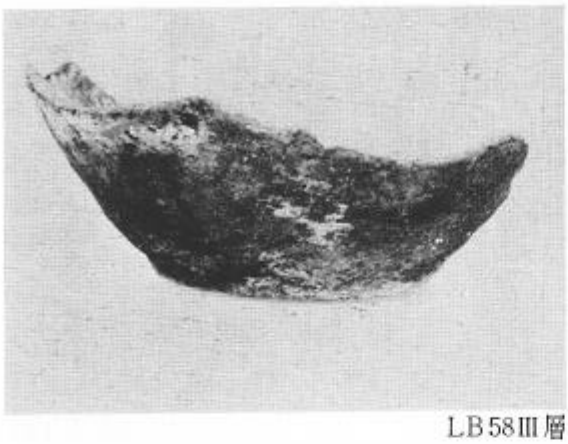
LF51Ⅳ層

不　明

LG50Ⅳ層



MB49Ⅳ層



LB58Ⅲ層

LI53Ⅳ層下部

LD53Ⅲ層

LA48Ⅳ層上部

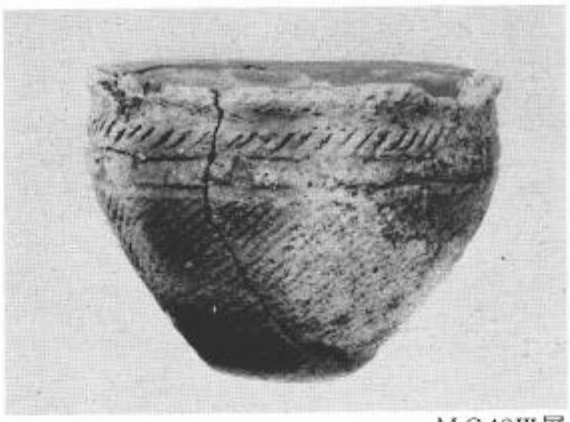
LI56Ⅳ層上部

LI57Ⅳ層上部

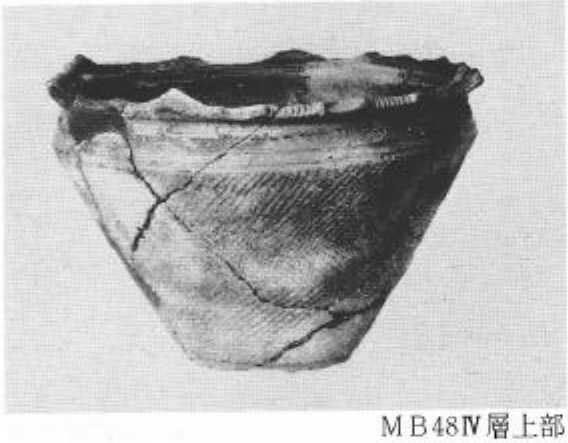
KI45Ⅳ層

KI45Ⅳ層

KH45Ⅳ層



MC48Ⅲ層

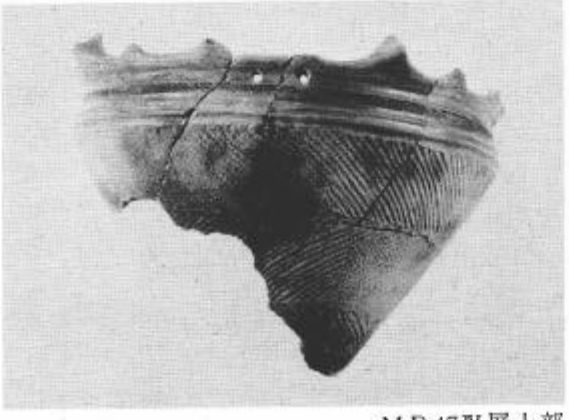


MB48Ⅳ層上部

LE48内落込

LH48Ⅲ層下部

LC48Ⅳ層上部

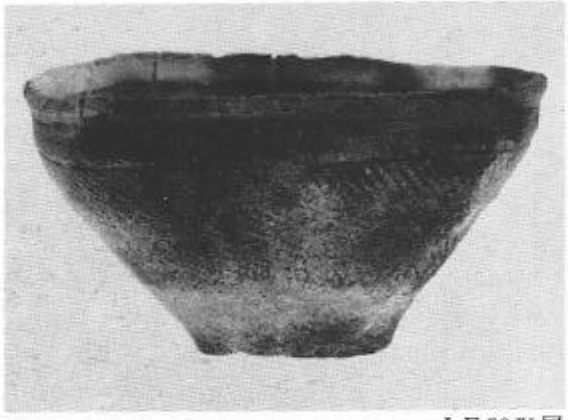


MB47Ⅳ層上部

LA47Ⅳ層

LA 45Ⅳ層下部

LF 47Ⅳ層



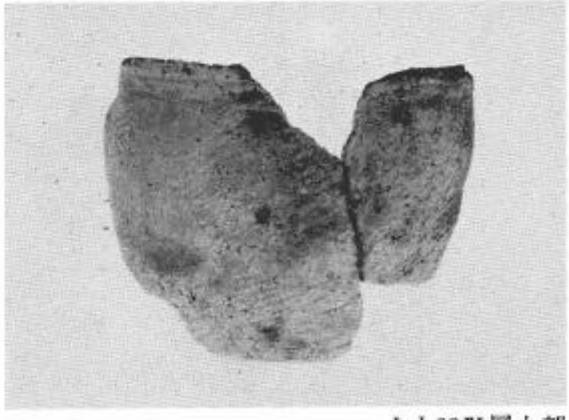
LE 53Ⅳ層

LG 52Ⅲ層上部

LG 51Ⅳ層

M B 49Ⅳ層上部

LC 58地山面

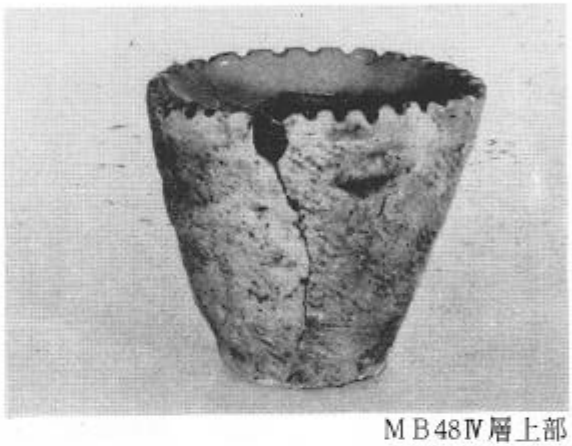


LJ 60Ⅳ層上部

KG46Ⅳ層上部

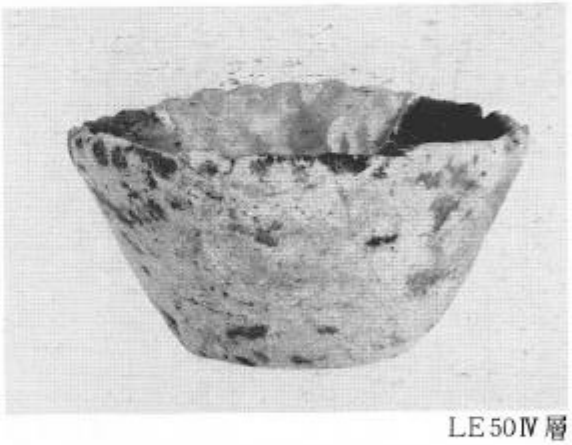
LE55Ⅳ層上部

LE58Ⅳ層上部



MB48Ⅳ層上部

LH53Ⅳ層層上部



LE50Ⅳ層

MA52Ⅳ層上部

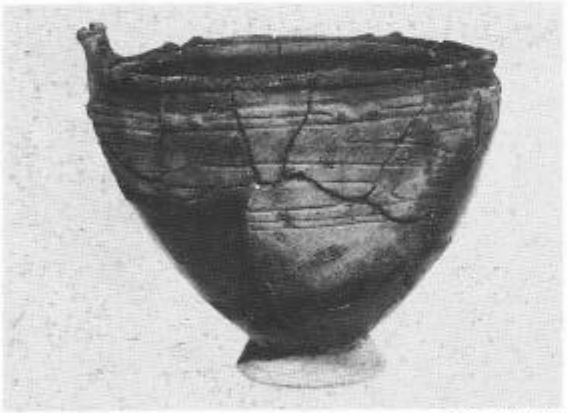
LJ54地山面

LB48Ⅳ層下部

不　明

LH48Ⅲ層下部

MB48Ⅳ層上部



LA45Ⅳ層

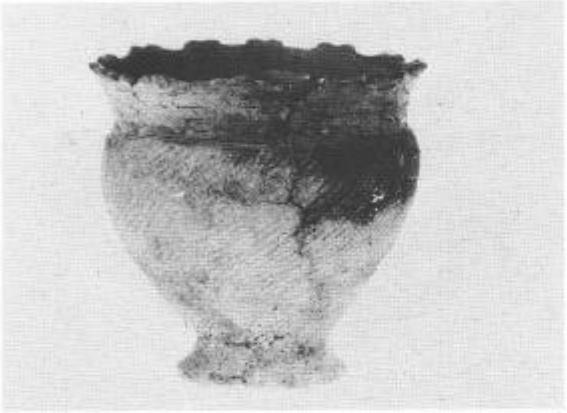
KI50地山面

LF48Ⅲ層下部

MF58Ⅳ層

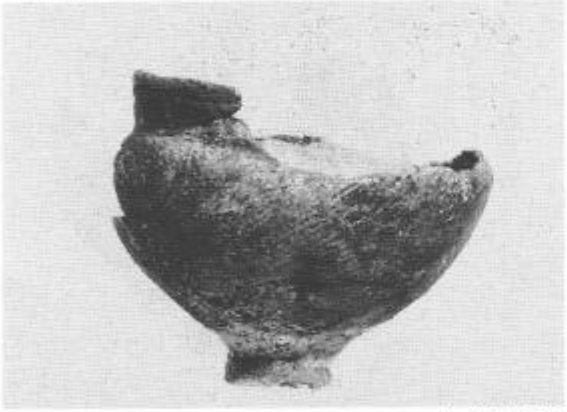
LE48Ⅲ層下部

LH48Ⅲ層下部

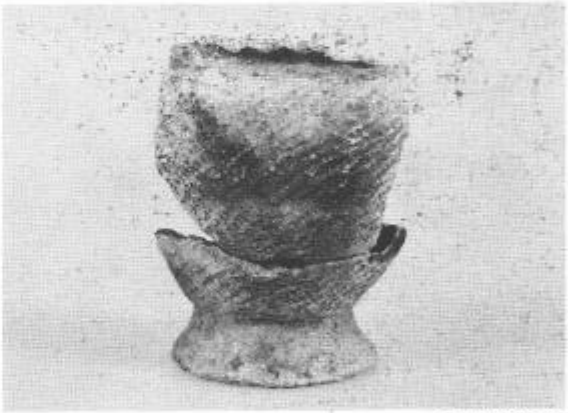


MD59Ⅳ層

LF51Ⅳ層



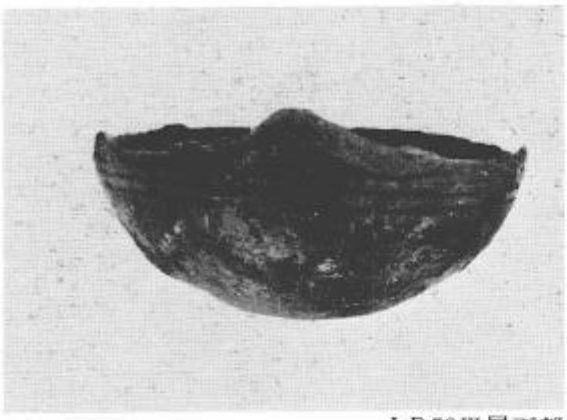
LG50Ⅳ層



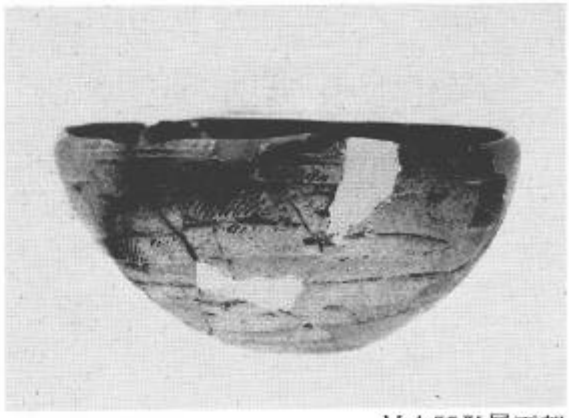
LJ50Ⅱ層

LD49倒木痕

LH55Ⅳ層

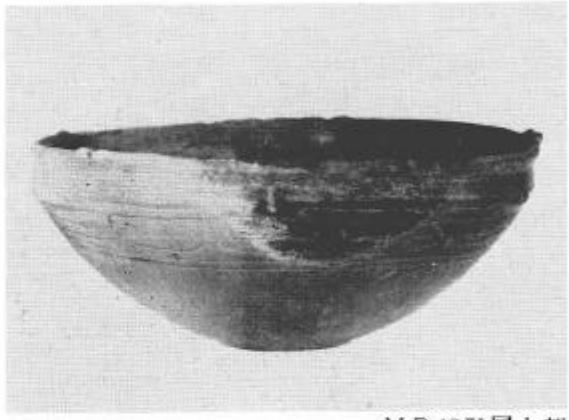


LB53Ⅲ層下部

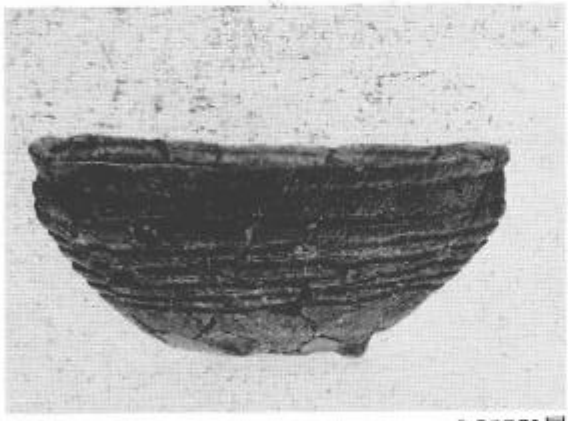


MA55Ⅳ層下部

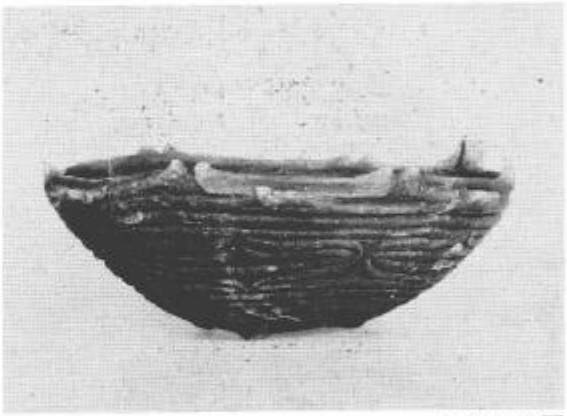
LE47Ⅲ層



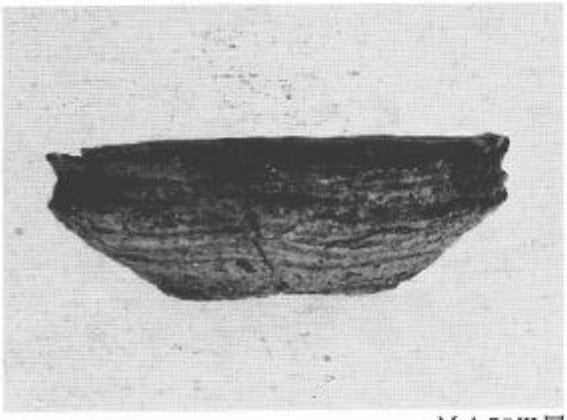
MB48Ⅳ層上部



LI57Ⅳ層

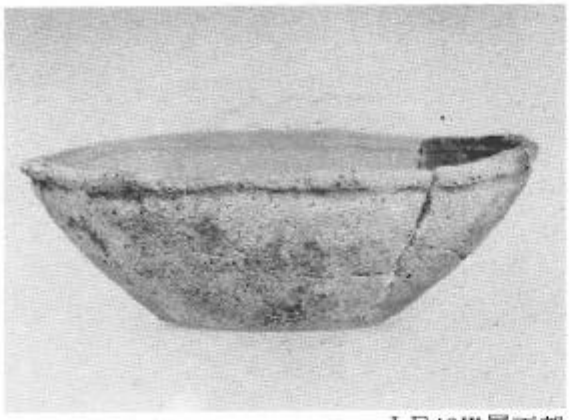


LH57Ⅲ層



MA50Ⅲ層

KC60Ⅳ層



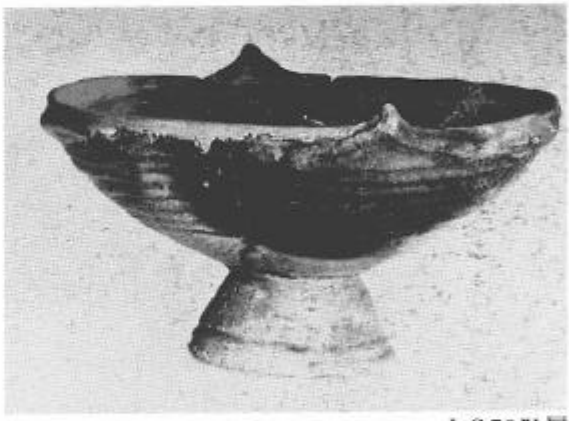
LF48III層下部

LD50Ⅳ層

KF46Ⅳ層

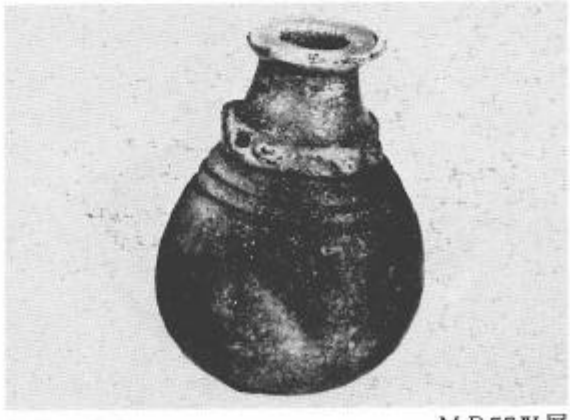
MB58Ⅳ層

LD53Ⅳ層



LC52Ⅳ層

LI51Ⅳ層

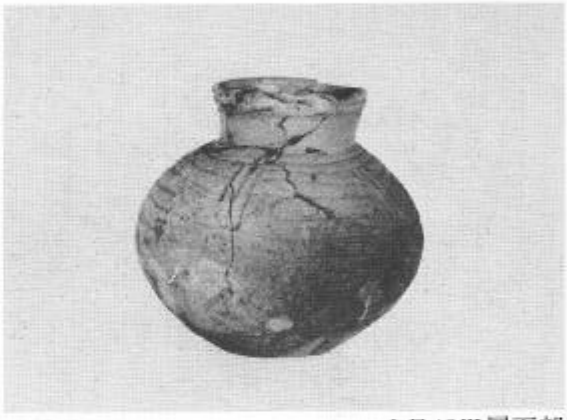


MD57Ⅳ層

MB50Ⅳ層

不　明

LA45Ⅳ層



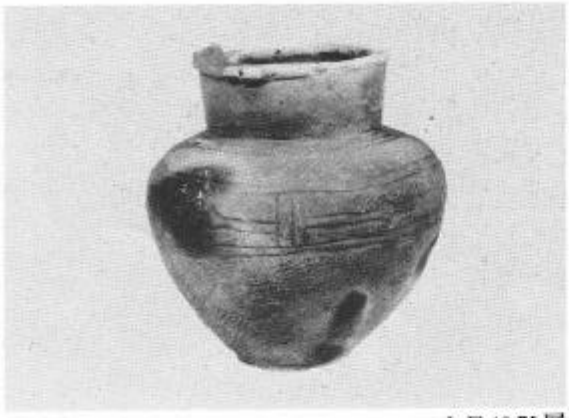
LE48Ⅲ層下部

LA45Ⅳ層

MB47Ⅳ層

LE49Ⅳ層

LF51Ⅳ層



LF 49Ⅳ層

MB 47Ⅳ層上部

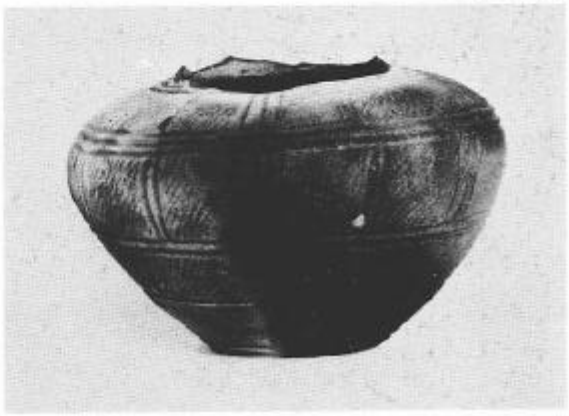
MB 57Ⅳ層下部

MA 47Ⅳ層

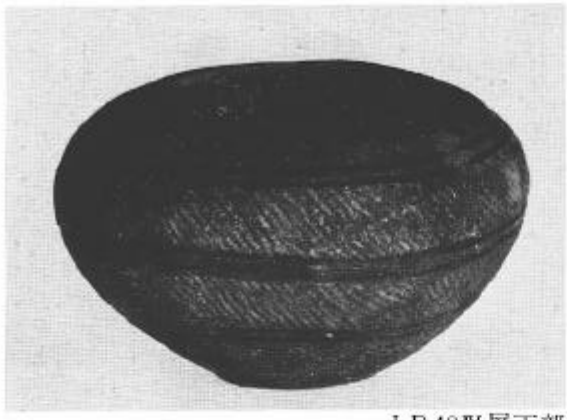
LD 53Ⅲ層

LG 56Ⅳ層

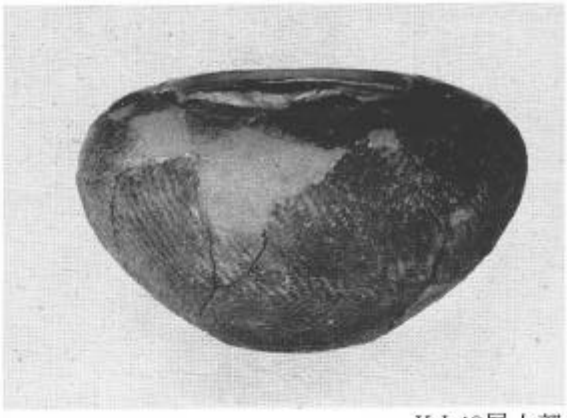
KI 47Ⅳ層上部



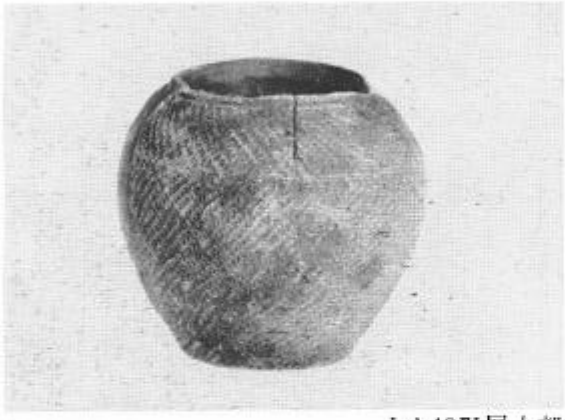
LE 49Ⅳ層上部



LB48Ⅳ層下部

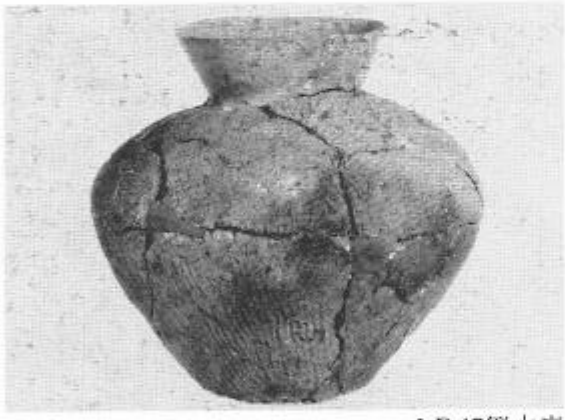


KJ48層上部

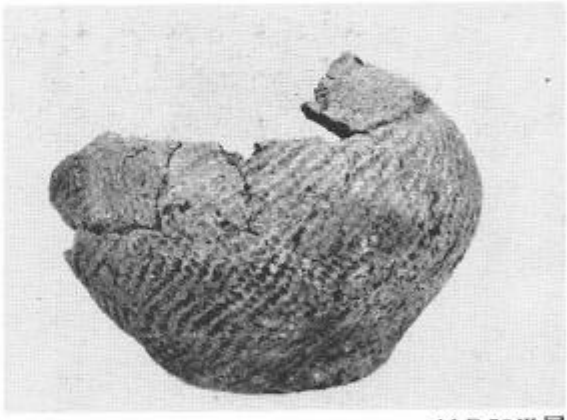


LA48Ⅳ層上部

LG51Ⅳ層上部

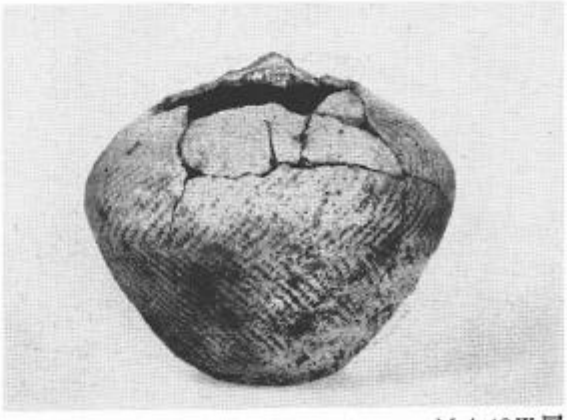


LB47倒木痕

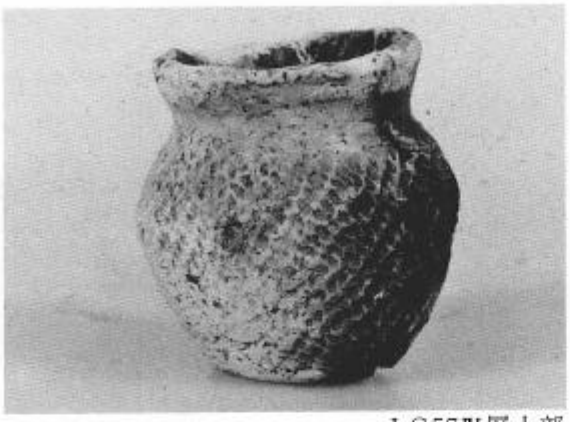


MB58Ⅲ層

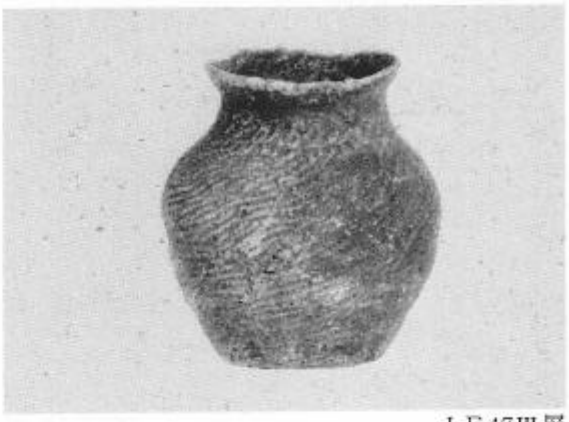
LI53Ⅳ層



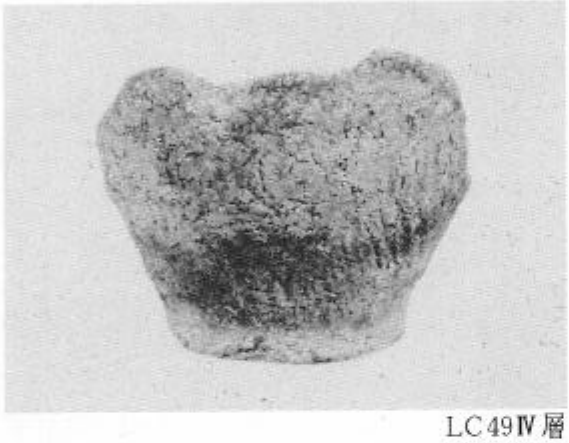
MA48Ⅲ層



LG57Ⅳ層上部

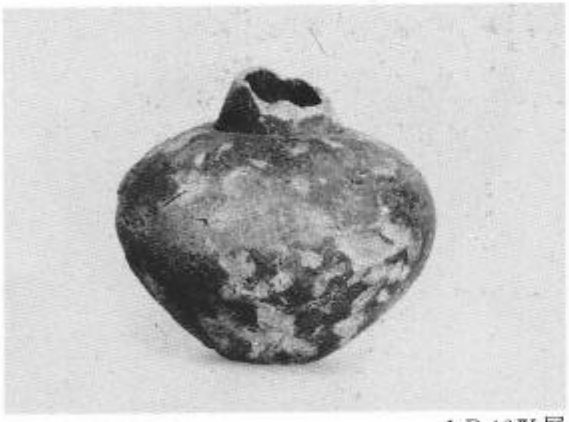


LE47Ⅲ層

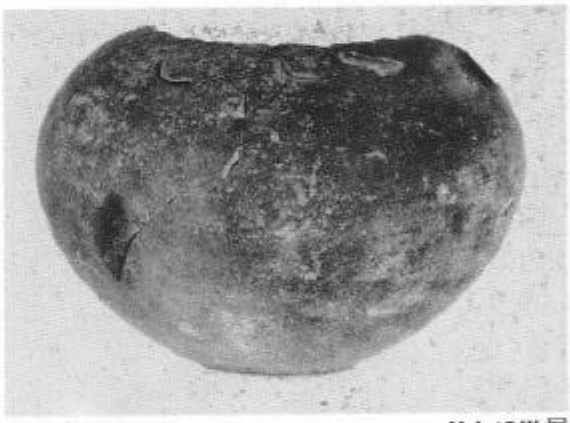


LC49Ⅳ層

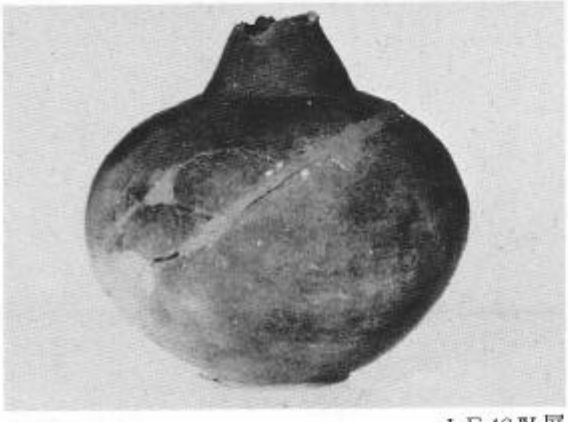
LE47Ⅲ層下部



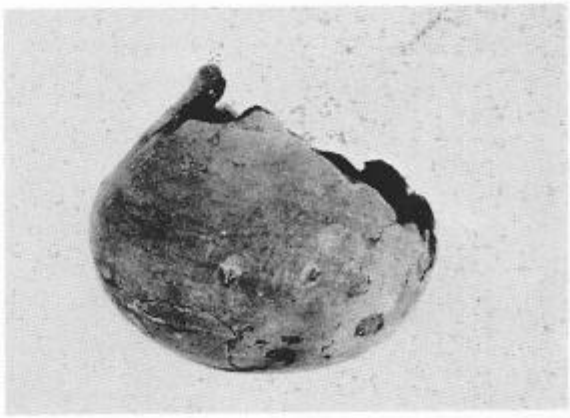
LD46Ⅳ層



KJ45Ⅲ層



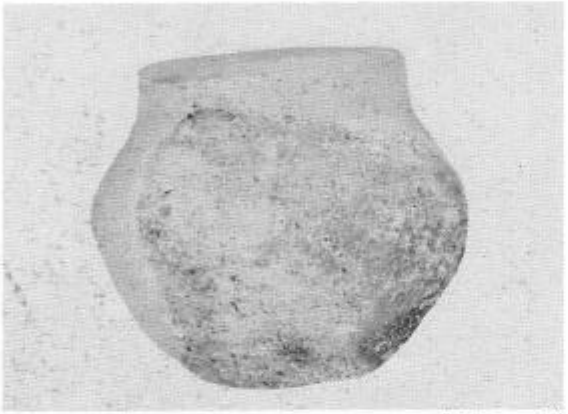
LE48Ⅳ層



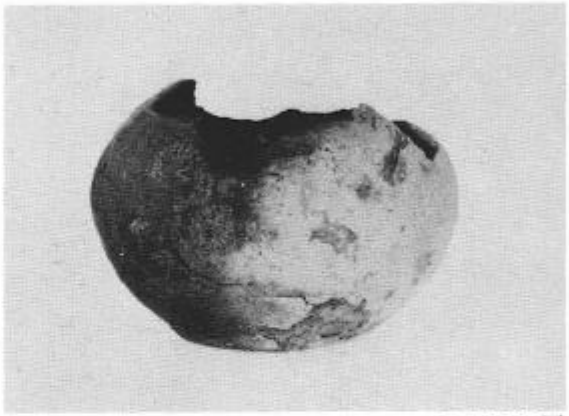
LH49Ⅲ層下部

MC59Ⅳ層

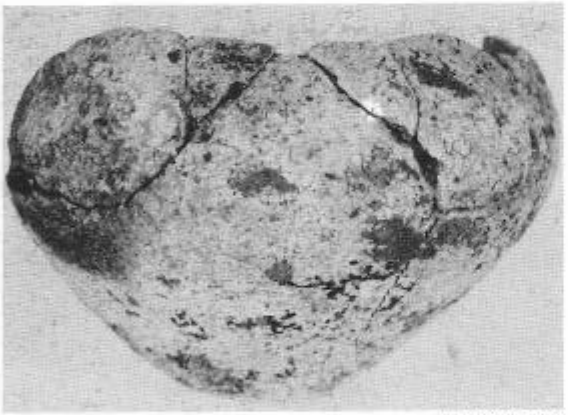
KJ49Ⅳ層上部



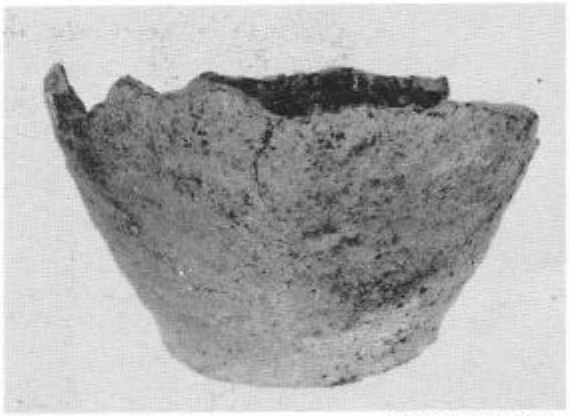
KH43Ⅲ層



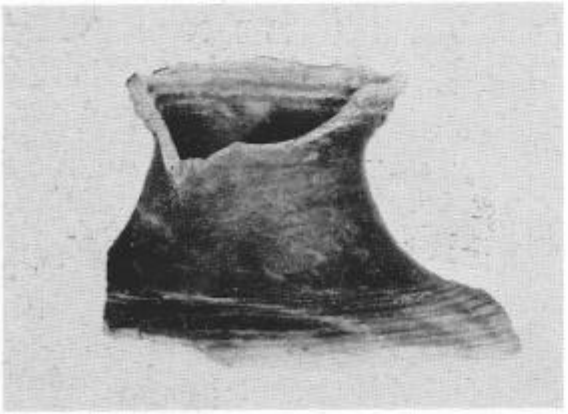
LC55Ⅱ層



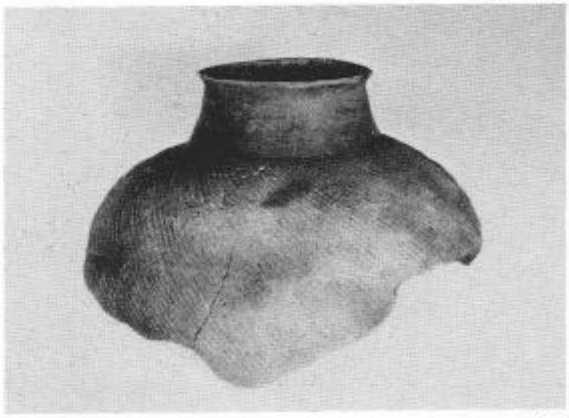
LB48Ⅳ層



LC48Ⅳ層上部



LI57Ⅲ層



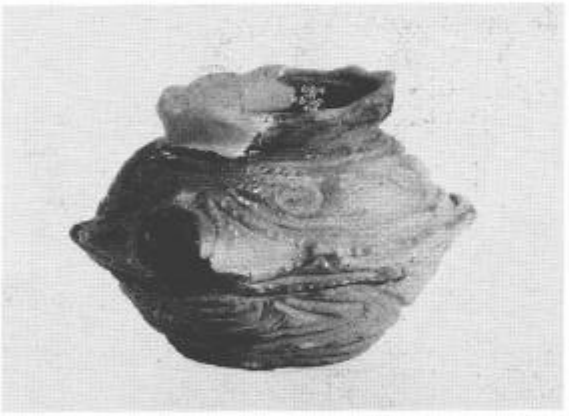
LF49Ⅳ層

ＭＧ65地山面

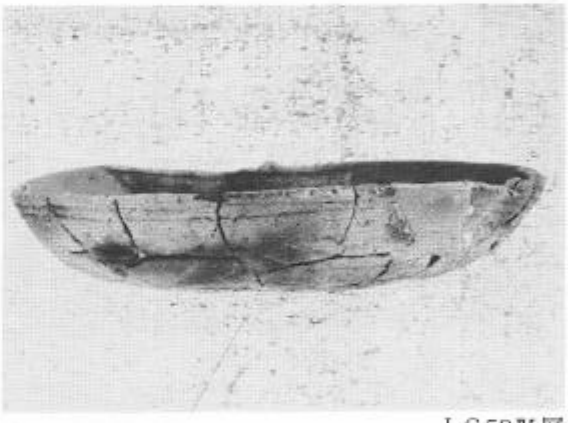
LI50Ⅳ層下部

LG53Ⅳ層

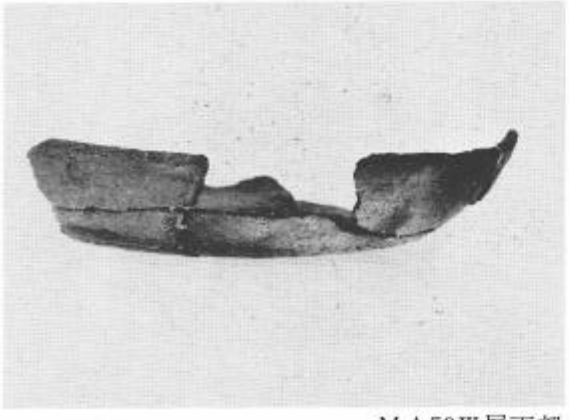
LC48Ⅳ層上部



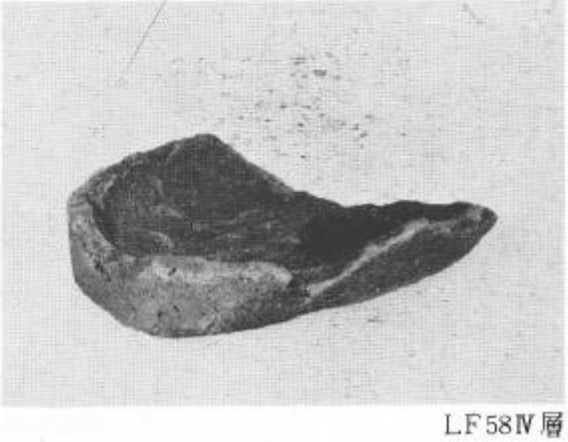
LB47倒木痕



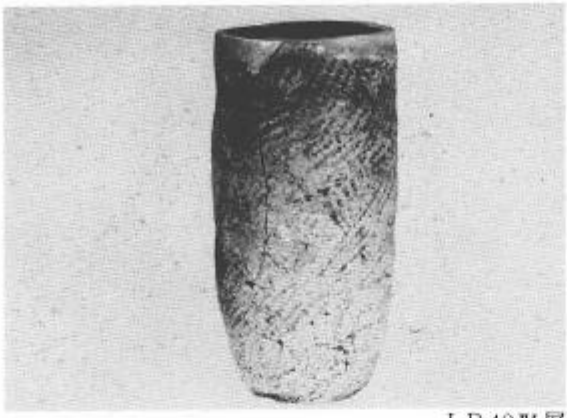
LG53Ⅳ層



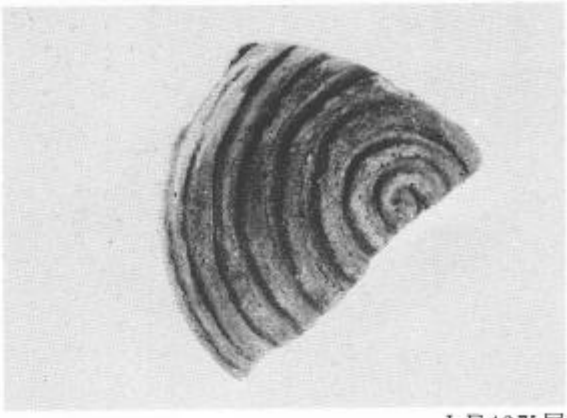
ＭＡ53Ⅲ層下部



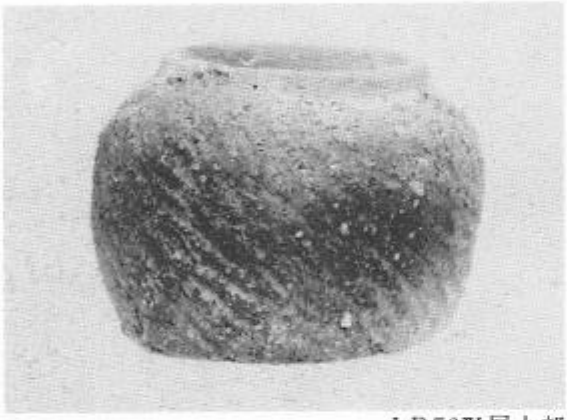
LF58Ⅳ層



LD48Ⅳ層



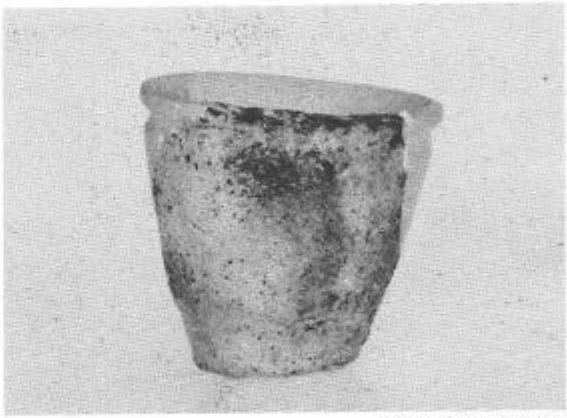
LF46Ⅳ層



LD56Ⅳ層上部

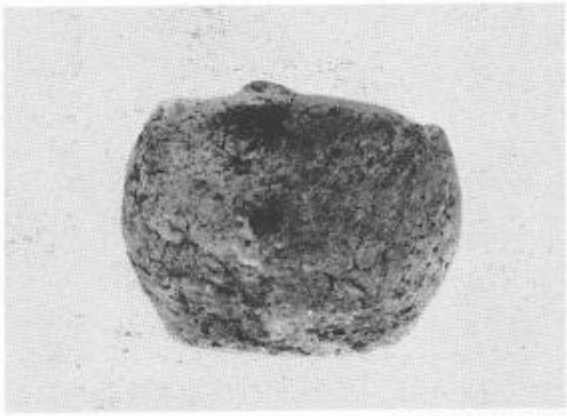
LE58Ⅳ層下部

ME56Ⅳ層下部

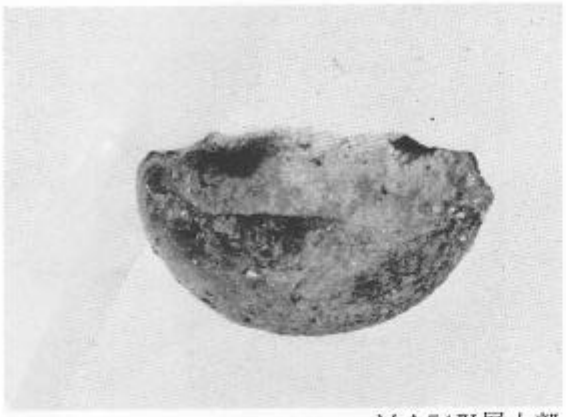


MA53Ⅳ層上部

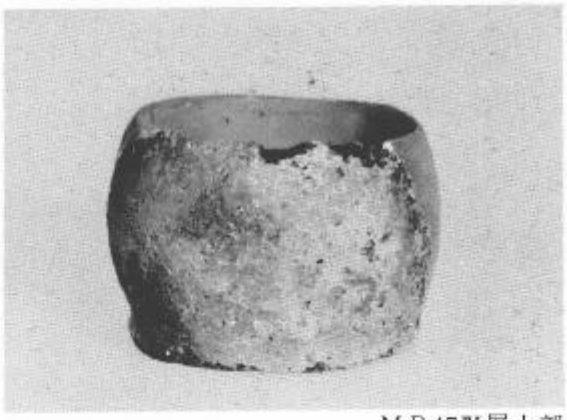
LG48地山面



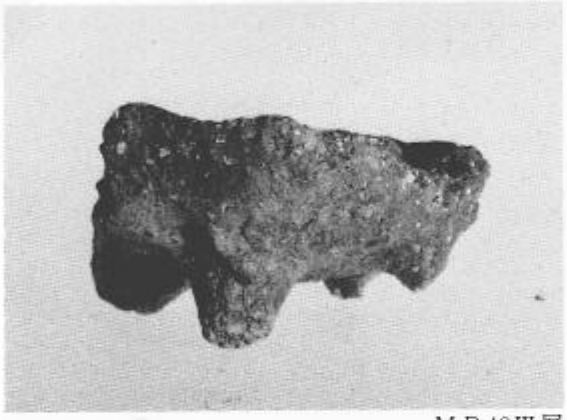
LJ51Ⅳ層下部



ＭＡ54Ⅳ層上部



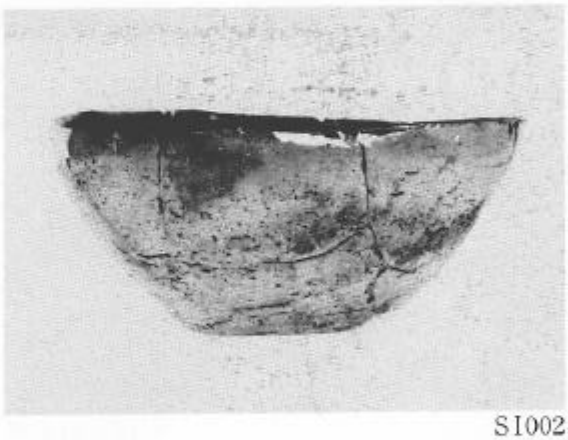
ＭＢ47Ⅳ層上部



ＭＢ48Ⅲ層

ＳＫ077

ＳＩ002

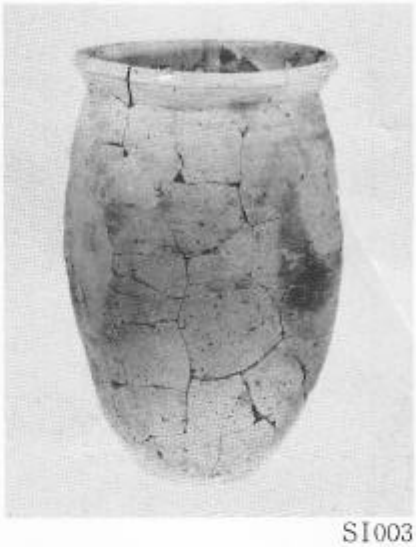


ＳＩ002

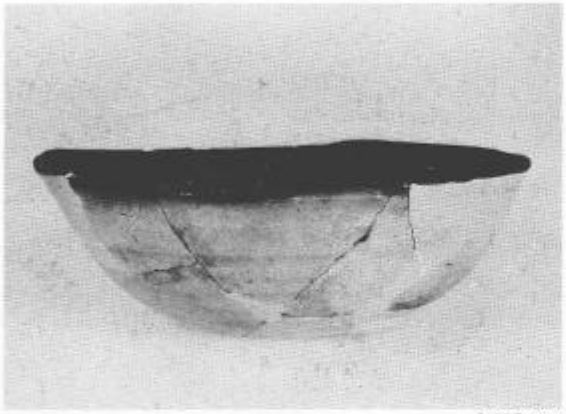
ＳＩ002カマド

ＳＩ003カマド

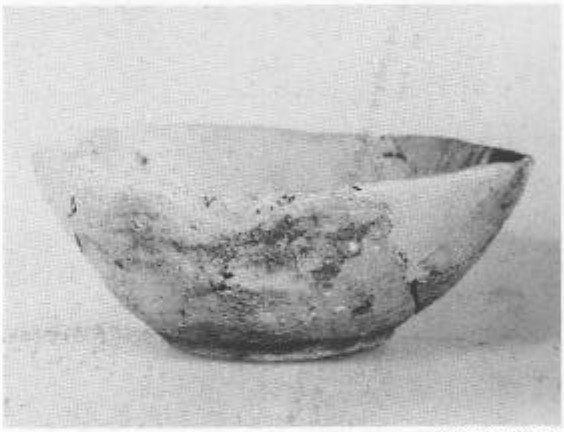
SI003



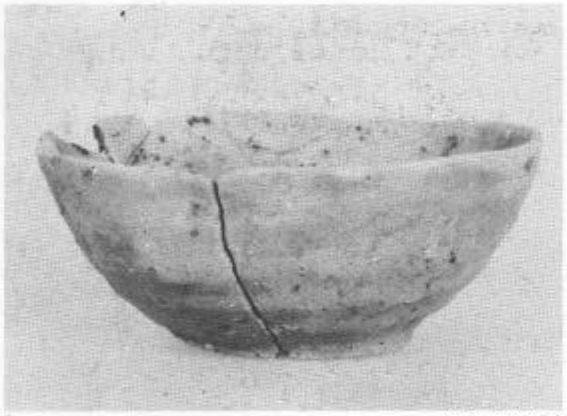
SI003



SKI001



KJ 62III層



KJ 62III層